

平成二十八年（二〇一六年）度  
国際仏教学大学院大学  
博士学位論文

# 『往生礼讃偈』の文献学的研究

—— 古写経本『集諸経礼懺儀』卷下を用いて ——

上杉  
智英

# 目次

## 凡例

## 序論

第一節	本研究の目的	1
第二節	善導とその著述	1
第三節	『往生礼讃偈』概説	3
第四節	先行研究の回顧と本研究の問題意識	5
第五節	本研究の視座	11
第六節	本研究の方法	22
第七節	本論の構成	24

## 本論

### 第一章 『集諸経礼懺儀』と『往生礼讃偈』

はじめに	33
第一節 先行研究の検証	34
第二節 『集諸経礼懺儀』卷上と『往生礼讃偈』の関係	37
第三節 『集諸経礼懺儀』撰集、入蔵の意図	40
第四節 『集諸経礼懺儀』入蔵の可否	43
おわりに	46



第二章 七寺蔵 七寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下攷——附開宝蔵本の復元——

はじめに・・・

第一節 書誌情報・・・

第二節 系譜・・

おわりに・・

七寺蔵 七寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下 影印・翻刻・・・・・・・・・・

附 開宝蔵本の復元・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

開宝蔵本『集諸経礼懺儀』卷下 復元本文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

51 52 53 62 67 117 134

第三章 檀王法林寺蔵 中尊寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下、並びに

金剛寺蔵 金剛寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下攷

はじめに・・

第一節 檀王本の書誌情報と来歴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第二節 金剛寺本の書誌情報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第三節 檀王本・金剛寺本の系譜・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第四節 細字双行表記の機能と意味・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

おわりに・・

檀王法林寺蔵 中尊寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下 影印・翻刻・・・・・・・・

171 172 176 177 181 214 223

——附 金剛寺蔵 金剛寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下 影印——

## 第四章 七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』攷

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第一節 書誌情報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第二節 本書の位置附け・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

一、先行研究の梗概・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

二、先行研究の検証・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

三、本書の特質・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

四、本書の位置附け・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』 影印・翻刻・・・・・・・・・・

## 第五章 『往生礼讃偈』変遷攷

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第一節 礼数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

一、初夜礼讃・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

二、晨朝礼讃・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

三、日中礼讃・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第二節 句数

一、中夜礼讃 第一礼・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

二、後夜礼讃 第一礼・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

## 第六章 『往生礼讃偈』 「如観経具説」 攷

はじめに・・・ 373

第一節 諸本確認・・・ 374

第二節 用例帰納・・ 377

第三節 構成確認・・ 384

第四節 先行解釈の検証・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 387

第五節 試解・・ 393

おわりに・・・ 400

結論・・・ 409

第一節 本研究の帰結・・・ 410

第二節 本研究の課題・・ 414

## 資料

諸本校異一覧・・ 418

再雕本・初雕本・金蔵本 三本対照・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 447

参考文献・・・ 485

## 謝 辞

## 凡 例

- 一、本文の表記は常用漢字、現代仮名遣いにて統一した。ただし引用文・固有名詞等はこの限りではない。
- 二、本文の暦年は原則として和漢暦にて表記し、西暦を（ ）内に記した。

〔例〕大業九年（六一三）

- 一、書名・経典名等は『』を附し、章篇名、学術雑誌所収論文等には「」を附した。

- 一、巻数・頁数・年号等の数字は、単位語なしの漢数字にて表記した。ただし法数として慣用化されたものはこの限りではない。

〔例〕卷二七 一〇頁 一九八〇年 四十八願

- 一、典拠の表示は左記の通り表記する。

〔例〕『大正藏』四七、四三八中 『大正新脩大藏經』第四七卷、四三八頁中段を意味する。

- 一、引用文における傍線・傍点は註記のない限り私に附したものである。

- 一、時代呼称は通説に従い左記の通り表記する。

奈良時代 七一〇―七九三年

平安初期 七九四―九〇〇年

平安中期 九〇一―一〇〇〇年

平安後期 一〇〇一―一〇八六年

院政期 一〇八七―一一九一年

鎌倉初期 一一九二―一二四〇年

鎌倉中期 一二四一―一二九〇年

鎌倉後期 一二九一―一三三五年

一、略称については左記の通り表記する。

『大正蔵』……『大正新脩大蔵経』

『卍続蔵』……『新纂大日本続蔵経』

斯……………イギリス大英図書館所蔵スタイン将来敦煌文献

伯……………フランス国立図書館所蔵ペリオ将来敦煌文献

俄……………ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルグ支所所蔵敦煌文献

北敦……………中国国家図書館蔵敦煌文献

一、七寺蔵 七寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下、檀王法林寺蔵 中尊寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下、金剛寺蔵 金剛寺一切経本

『集諸経礼懺儀』卷下、七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』の影印・翻刻は国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編

『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀 卷下』(二〇一〇)より転載した。

## 序論

### 第一節 本研究の目的

本稿は「『往生礼讃偈』の文献学的研究——古写経本『集諸経礼懺儀』巻下を用いて——」と題し、初唐の浄土教家、比丘善導（大業九年（六一三）—永隆二年（六八二））の著述である『往生礼讃偈』を対象とし、その伝本の整理・紹介と古態の復元を目的とするものである。本論に先立ちここでは善導とその著述、特に研究対象である『往生礼讃偈』について概説すると共に、先行研究を回顧し研究の現状と問題点を明らかにした上で、本研究の視座・方法を提示し、本論の構成を示す。

### 第二節 善導とその著述

善導の事績は、道宣（五九六—六七七）『統高僧伝』巻第二七「会通伝」を初め、文諲・少康（？—八〇五）『往生西方浄土瑞応刪伝』巻一一、道鏡・善道（生没不詳）『求生西方浄土念仏鏡』本、遵式（九六四—一〇三二）『往生西方略伝』、戒珠（九八七—一〇七七）『浄土往生伝』巻中、王古（生没不詳）『新修往生伝』巻中（元豊七年（一一八四）撰述）、王日休（一一〇五—一一七三）『龍舒浄土文』、宗曉（一一五一—一二二四）『樂邦文類』、志盤『仏祖統記』（咸淳五年（一二六九）撰述）等の僧伝、並びに「河洛上都龍門之陽大廬舍那像龕記」、<sup>(1)</sup>「大唐実際寺故寺主懷憚奉勅贈隆闡大師碑銘並序」<sup>(12)</sup>（天宝二年（七四三）建立）、<sup>(12)</sup>「大唐龍興寺大德香積寺主浄業法師靈塔銘並序」<sup>(13)</sup>等の金石文により伺える。

これらによると、隋の大業九年（六一三）、臨淄（山東省臨淄県）の生まれ。西河（山西省太原郊外）の道綽（五六二—六四五）に師事し念仏を行ず。その後、長安の光明寺、慈恩寺、実際寺、並びに襄陽（湖北省）で民衆の教化に努め、また咸亨三年（六七二）に着工された龍門大廬舍那仏の造営では検校を勤めたことが知られる。永隆二年（六八二）六九歳で入寂。『宋高僧伝』巻一〇「唐洪州開元寺道一伝」によれば、善導の葬儀は、普寂（六五一—七三九）・道一（七〇九—七八八）と並び「哀送之盛」（『大正蔵』五〇、七六六中）なるものとして数えられている。

善導の著述としては古来、

『觀無量壽經疏』四卷<sup>(14)</sup>（「序分義」一卷、「玄義分」一卷、「定善義」一卷、「散善義」一卷）

『觀念法門』一卷<sup>(15)</sup>（『觀念阿彌陀仏相海三昧功德法門』）

『往生礼讃偈』一卷<sup>(16)</sup>（『勸一切衆生願生西方極樂世界阿彌陀仏国六時礼讃偈』『六時礼讃』）

『法事讃』二卷<sup>(17)</sup>（『轉經行道願往生淨土法事讃』『安樂行道轉經願往生淨土法事讃』）

『般舟讃』一卷<sup>(18)</sup>（『依觀經等明般舟三昧行道往生讃』）

が知られており、所謂「五部九卷」と総称されている。『觀經疏』は『觀無量壽經』の講義を筆記したものと考えられ、その他四部は何れも浄土教の実践儀礼を定めた書である。これら五部九卷には何れも善導による跋文が附されておらず、撰述年次が記されていない為、前後関係は明らかでなく、未だ定説をみない<sup>(19)</sup>。

なお『觀無量壽經疏』「定善義」には、

或有一宝為一樹者、或二三四乃至百千万億不可説宝為一樹者。此義弥陀經義中已広論竟。

（『大正藏』三七、二六四中）

或いは一宝を一樹と為す者、或いは一・三・四、乃至百千万億不可説の宝を一樹と為す者有り。此の義、『弥陀經義』の中に已でに広く論じ竟りぬ。

此之八徳之義已在弥陀義中広説竟。

（『大正藏』三七、二六五上）

此の八徳の義、已に『弥陀義』の中に在りて広く説き竟りぬ。

と、『弥陀經義』『弥陀義』という著述の存在が窺えるが、本書は現存していない。

その他、仁寿三年（八五三）年に入唐、天安二年（八五八）に帰朝した円珍『智証大師請来目錄』には「大乘布薩法一本 善導」（『大正藏』五五、一一〇五中）の記載がみられるが、本書も現存が確認されておらず詳細は不明である。

### 第三節 『往生礼讃偈』概説

本稿の研究対象である『往生礼讃偈』は『往生礼讃』『六時礼讃』とも別称されるが、その冒頭によれば具名は、

『勸一切衆生願生西方極樂世界阿弥陀仏国六時礼讃偈』

（『大正藏』四七、四三八中）

『一切衆生を勧めて西方極樂世界の阿弥陀仏国に生ぜんと願ぜしむる六時礼讃の偈』

であり、続いて、

謹依大經及龍樹天親此土沙門等所造往生礼讃集在一处分作六時。

（『大正藏』四七、四三八中）

謹んで『大經』及び龍樹・天親、此土の沙門等の所造せらるる往生礼讃に依り一処に集在し分ちて六時を作す。

と述べられるように、一日を日没・初夜・中夜・後夜・晨朝・日中の六時に分け、康僧鎧訳『無量寿經』<sup>(20)</sup>、龍樹『十二礼』<sup>(21)</sup>、天親『往生論』<sup>(22)</sup>、彦琮『浄土詩（仮題）』<sup>(23)</sup>、晁良耶舍訳とされる『観無量寿經』<sup>(24)</sup>による讃文を配した六時礼法を中心に序文、懺悔発願、後文で構成される浄土教の儀礼テキストである。各讃文の出拠と礼数は以下の通り（諸本により礼数に差異が認められるが、ここでは『大正藏』四七所収『往生礼讃偈』により示す）。



日没…『無量寿経』による讃嘆	一九拝
初夜…『無量寿経』による讃嘆	二四拝
中夜…龍樹『十二礼』による讃嘆	一六拝
後夜…天親『往生論』による讃嘆	二〇拝
晨朝…彦琮「浄土詩（仮題）」による讃嘆	二一拝
日中…『観無量寿経』による讃嘆	二〇拝

本書の日本への将来年次が奈良時代であったことは正倉院文書によって確認されており、以後源信（九四二―一〇一七）撰『往生要集』<sup>(25)</sup>、源隆国（一〇〇四―一〇七七）編『安養集』<sup>(27)</sup>等に引用され、また法金剛院蔵『大小乗経律論疏記目錄』<sup>(28)</sup>、真福寺蔵『阿弥陀仏経論並章疏目錄』<sup>(29)</sup>、永超（一〇一四―一〇九五）撰『東域伝燈目錄』<sup>(30)</sup>に採録される等、平安時代にはその受容が確認されている。また鎌倉時代には『往生礼讃偈』を含む善導五部九巻が刊行されており、後世の復刻による原刊記等によれば、

建暦三年（一二一三）	明信開板本
貞永元年（一二三二）	入真開板本
嘉禎三年（一二三七）	証慧開板本
建長三年（一二五二）	入阿弥陀仏開板本
正安四年（一二〇二）	知真開板本
元亨二年（一二三二）	知真開板本

と数度の刊行が窺える。<sup>(31)</sup>これら鎌倉時代における本書の刊行・流布は、法然（一二三三―一二二二）浄土教の隆盛に起因するものと考えられる。

善導は中国における曇鸞（四七六―五四二）・道綽（五六二―六四五）系の浄土教の大成者とされ、日本においても法然が『選択本願念仏集』で「偏依善導一師」<sup>(32)</sup>を標榜し浄土宗を開創、浄土五祖（曇鸞・道綽・善導・懷感・少康）の一人として選定され、さらに浄土真宗の開祖、親鸞（一一七三―一二六二）が『顕浄土真実教行証文類』<sup>(34)</sup>、『浄土高僧和讃』<sup>(35)</sup>において所謂「七高僧」（龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・法然）の一人として敬礼されている。その為、浄土宗・浄土真宗における善導の地位は極めて高く評価されており、このような祖師信仰を背景としたテキストの刊行、並びに教義研究が鎌倉時代より近年に到るまで積層している。<sup>(36)</sup>

#### 第四節 先行研究の回顧と本研究の問題意識

上述の祖師信仰を背景として浄土宗、浄土真宗の多くの先学によってその教義・思想等が明らかにされてきた。一九八〇年には善導大師千三百年遠忌記念として仏教大学善導教学研究会より『善導教学の研究』（東洋文化出版）が出版され、そこには論文と共に「善導大師に関する研究論文目録」として昭和の初めより昭和五五年（一九八〇）三月までに刊行された研究誌を対象に「善導」と表記される論文約三〇〇を選出、分類したものが附録されている。

このように善導、並びにその著述に関連する研究は多岐にわたるが、二〇〇八年に上梓された柴田泰山『善導教学の研究』、序論「（一）善導教学の研究方法」では、この積層する善導研究を、

- ① 善導の伝記資料および伝記の解明
- ② 善導の著作内容の論述
- ③ 善導教学が日本浄土教に与えた影響の解明
- ④ 中国仏教思想史内における善導浄土教の位置付け

（『善導教学の研究』八・九頁）

と分類、概観された上で、

善導研究は二十世紀中期を中心として大きく展開した。しかしながら一九八〇年代以降の鎌田茂雄氏、木村清孝氏、吉津宜英氏、石井公成氏、西本照真氏などによって華嚴学や三階教をはじめとする中国仏教研究そのものが大きく展開していく中で、善導研究では特に大きな進歩を見ることがなく、そのまま今日に至っている。

（『同書』九・一〇頁）

と善導研究の現況を停滞とみなされ、その理由として、

- ①特に歴史的側面では諸先学によりすでに現存資料の研究が整理され、これ以上新たな見解を提示することが困難な状況にあること。
- ②思想的側面では善導自身の著述内容については一応の確認が行われていること。
- ③従来の善導研究の多くが法然浄土教研究の視座から進められてきたこと。

（『同書』一〇頁）

の三点をあげられている。このような現状に対し柴田泰山自身は、

従来の善導研究を総括的に捉えようと、善導研究は法然や親鸞あるいは日本における善導の著作に対する諸註釈を起点とし、そこから日本浄土教の思想的な根拠を善導教学内に求め、その結果、浄土教大成者としての善導像が先行し、中国仏教思想史上における善導という視点から研究が行われてきたとは言い難い。

（『同書』一〇頁）

と従来の研究における視座を批判し、

善導教学そのものを一度中国仏教史上に還元し、善導の説示内容が中国仏教史上どのような位置に存在しているかということを確認して、その上で善導教学の独自性や宗教性を追求する

（『同書』一〇頁）

という新たな視点を提示されている。

柴田泰山による研究動向の把握は的確であり、氏の指摘された停滞の理由は『往生礼讃偈』を研究対象とする本稿においても例外ではない。総論、概説的な善導研究としては藤田宏達『人類の知的遺産 18 善導』（講談社、一九八五）、牧田諦亮『浄土仏教の思想 善導』（講談社、二〇〇〇）があげられ、ここでは先行研究を踏まえ善導の生涯、思想、著述とその後世への影響が纏められている。また『往生礼讃偈』の総括的研究としては既に上杉文秀『善導大師及往生礼讃の研究』（法蔵館、一九三二）が存在する。本書は善導の生涯を始め、著述の真偽問題、本朝への渡来年次、刊行の歴史、後代の註釈書にまで言及された上で、『往生礼讃偈』全文をあげ詳細に解説を加えられている。本書は昭和五年（一九三〇）の浄土真宗本願寺派夏安居での講義を基とするものであり、宗学（教義学）的『往生礼讃偈』研究の白眉と言えるものである。

このような状況において如何なる研究を為すべきであろうか。ここでは『往生礼讃偈』に關説する近代仏教学以降の研究、特にテキスト研究に焦点を絞り回顧し、その成果と問題点を明確にした上で現時点において行うべき研究を模索したい。

一般に近代仏教学は、西欧の梵語研究を取り入れたものとして、明治以前・以後と一線を画すものとされる。<sup>(37)</sup>このような近代仏教学に対し、中国撰述の章疏であり、比較する原典を有さない善導のテキスト研究は、依然祖師信仰を背景に教義研究を中心とする江戸期の宗学と一連のものであり、テキストの批判的研究、文献学研究が行われるのは吐魯番、敦煌における古写本の発見、紹介を待たなければならなかった。

一九一三年、第二次・第三次大谷探検隊として中央アジア調査に参加した橘瑞超は『二樂叢書』を刊行。吐魯番出土礼讃断簡を紹介される。<sup>(38)</sup>一九二九年には京都大蔵会特別展観が開催され、矢吹慶輝将来の敦煌本写真が紹介された。そこには『往生礼讃偈』の敦煌写本として

斯二五五三が含まれており、一九三〇年刊『鳴沙餘韻』<sup>(39)</sup>、一九三三年刊『同解説』<sup>(40)</sup>にも収録されている。この矢吹慶輝による敦煌本の紹介を承け、松陰了諦は一九三一年に「燉煌出土善導礼讃偈に就いて」<sup>(41)</sup>、一九三三年に「晨朝礼讃における礼数に就いて」<sup>(42)</sup>を発表。一九三七年には『往生礼讃 本文校異並びに前序の研究』<sup>(43)</sup>（真宗学研究所出版部）を上梓している。その後、一九七七年に廣川堯敏が「敦煌出土善導『往生礼讃』古写本について」<sup>(43)</sup>を発表。新たに伯二七二二・伯三八四一・斯五二二七・斯二六五九・斯二五七九・北平本を紹介され、『浄土宗全書』所収本（底本は元禄七年刊本）と対校されている。近年では王娟『敦煌禮懺文研究』<sup>(45)</sup>、劉長東『晋唐弥陀浄土信仰研究』<sup>(46)</sup>、湛如『敦煌仏教律儀制度研究』<sup>(47)</sup>、林仁昱『敦煌佛教歌曲之研究』<sup>(48)</sup>、李小荣『敦煌佛教音樂文学研究』<sup>(49)</sup>等において、敦煌本による浄土教礼讃の研究が行われている。

一方、日本における『往生礼讃偈』テキストに関しては、正倉院文書によりその将来年次が検討されている。中井真孝「経疏目録類より見たる善導著述の流布状況」<sup>(50)</sup>によれば、

往生礼讃文一卷 廿九紙（「天平十四年七月二十四日付裝潢本経充帳」）<sup>(51)</sup>

往生礼讃文一卷 廿六（「天平勝宝五年五月七日類収奉写章疏集伝目録」）<sup>(52)</sup>

と『往生礼讃偈』の紙数として二六紙、二九紙が確認される。また「天平一九年十月九日付写疏所解」<sup>(53)</sup>にも「往生礼讃一卷目紙」とあるが、この疏論目録の端裏書に「自禅院寺奉請疏論□□□」、文末に「從禅院寺奉請疏論等、歴名如件」とあることより、禅院寺所蔵の『往生礼讃』が写経の為、貸し出されたことが窺える。禅院寺には道昭（六二九―七〇〇）将来の経論が納めており、その帰朝は天智天皇元年（六六二）と推測されるが、もし『往生礼讃偈』も道昭将来本であつたならば、それは善導（六一三―六八二）在世時のテキストということになる。ただ遺憾にも奈良写経本『往生礼讃偈』の現存は確認されていない。実際に現存する『往生礼讃偈』諸本の内、最古の部類は、

京都誓願寺藏鎌倉時代初期写本一帖（「建暦三年<sup>太歲癸酉</sup>十月初三日畢」の奥書あり）<sup>（55）</sup>

高田専修寺藏鎌倉時代初期版本一帖<sup>（56）</sup>

京都大学附属図書館蔵建長三年（一二五二）版本一帖<sup>（57）</sup>

と、何れも法然浄土教の隆盛した鎌倉初期から中期のものとなっている。

なお『往生礼讃偈』テキストの古態を検証する上で非常に有効な視点・方法として、齊藤隆信は韻律に着目され、諸本を一旦、

#### A. 中国伝存

①入蔵本『往生礼讃』（『集諸経礼懺儀』所収本）

②非入蔵本『往生礼讃』（各種敦煌写巻）

③『五会法事讃』・守屋本・敦煌石室別行本

#### B. 日本伝存

①正倉院『聖武天皇宸翰雜集』・七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』

②浄土宗・真宗相伝の諸写刊本（流布本系統）

と二分された上で、近体詩として評価し得る彦琮の晨朝礼讃、善導の日中礼讃、並びに善導により改作されたと考えられる無常偈における用字を校讎され、詩律学の観点から中国系統（韻律による用字取捨本、【A.①②③・B.①】）と日本浄土教各宗伝承の流布本系統（語義による用字取捨本、【B.②】）に分類し得ることを明らかにされている。<sup>（58）</sup>

つまり敦煌写本等の中国伝存のテキストに比し、日本伝存の法然浄土教の影響下にて書写・刊行されたテキストは韻律の観点の欠如により、語義のみによってテキストが改変されているということであるが、従来の『往生礼讃偈』研究の大半は、この日本において改変されたテキストによって行われてきた。現在の研究基盤となっている浄土宗・浄土真宗により出版された『往生礼讃偈』テキストの底本、校本は以下の通り。

『浄土宗全書』巻四（浄土宗全書刊行会、一九〇九年）

底本 元禄七年（一六九四）刊本

『真宗聖教全書一 三経七祖部』（真宗聖教全書編纂所、一九四一年）

底本 本山（西本願寺）蔵版『七祖聖教』所収本

校本 龍谷大学蔵（写字台文庫旧蔵）室町時代刊本

大谷派依用十行本

大正蔵本『集諸経礼懺儀』巻下

『浄土真宗聖典 七祖篇（原典版）』（浄土真宗聖典編纂委員会、一九九二年）

底本 高田派専修寺蔵鎌倉時代刊本

校本 大谷大学蔵鎌倉時代刊本

龍谷大学蔵（写字台文庫旧蔵）室町時代刊本

龍谷大学蔵元禄七年刊本（義山版）

本山（西本願寺）蔵版『七祖聖教』所収本

高麗版『集諸経礼懺儀』巻下

元禄七年刊本（『浄土宗全書』巻四）、本山（西本願寺）蔵版『七祖聖教』<sup>(59)</sup>所収本（『真宗聖教全書一 三経七祖部』）、高田派専修寺蔵鎌倉時代刊本（『浄土真宗聖典 七祖篇原典版』）、これら三本は何れも日本伝存の法然浄土教の影響下にて書写・刊行されたテキストを底本とするものである。<sup>(60)</sup>日本における『往生礼讃偈』の流布が法然浄土教の隆盛に起因し、それが現代まで継承されていること、法然浄土教以前の奈良写経本

『往生礼讃偈』の現存が確認されていないことを勘案する時、日本に現存する『往生礼讃偈』のテキストは何れも日本における校訂（改変）を経たものであり、善導集記の原典と乖離したものであるということとなる。

上述の敦煌写本によるテキスト研究もあるが、敦煌写本は何れも断簡零墨であり『往生礼讃偈』全体にわたる校勘は叶わない。一九九二年に編纂された『浄土真宗聖典 七祖篇（原典版）』が敦煌本の紹介・研究以降にも拘わらず、校本に採用しないのもその為であろうか。

また齊藤隆信による韻律による校勘は有効であるが、その対象は近体詩として評価し得る彦琮の晨朝礼讃、善導の日中礼讃、並びに善導により改作されたと考えられる無常偈に限定され、やはり『往生礼讃偈』全体にわたる校勘は叶わない。

上述の通り柴田泰山は善導研究の現況を停滞とみなされており、その理由の一つとして、

③従来の善導研究の多くが法然浄土教研究の視座から進められてきたこと。

（『善導教学の研究』一〇頁）

と研究者の視座を問題視された。しかし実際に問題はより根底的であり、視座以前にテキスト自体が既に善導の原典より乖離しており、その上に既存の研究は積み上げられてきたこととなる。

つまり近現代の『往生礼讃偈』研究は、法然浄土教の視座を離れ、中国仏教思想史上における善導という視座による研究を志向しつつも、その依拠するテキスト自体が既に法然浄土教の影響下にあるという自家撞着を内包するものと言える。本研究はこの日本に伝存する『往生礼讃偈』テキストに内在する改変という問題意識の下、より原典に近接するテキストを希求するものである。

## 第五節 本研究の視座

それでは上述の問題意識の下、如何様に原典に近接するテキストを博搜すればよいのであろうか。既存のテキスト、並びに従来の視座による『往生礼讃偈』研究は既に一定の水準に達し、確かに停滞の様を呈しているが、関連する研究領域では注目すべき進展がみられる。



そこで一旦視野を広げ、関連領域における成果・理論を踏まえ『往生礼讃偈』研究に適用することで、より原典に近接する方策を構築したい。本稿では『往生礼讃偈』の文献学的研究として具体的に①『集諸経礼懺儀』、②刊本漢訳大蔵経、③日本古写経、の三つの新たな視座を導入する。

### ①『集諸経礼懺儀』

『集諸経礼懺儀』は、『開元釈教録』（以下『開元録』と略称）の編者として著名な唐代の西崇福寺沙門智昇（一七三〇—）が、長安で流行していた礼仏懺悔を上下二巻に集録したものである。巻上には三階教に関する礼懺儀が収められるが、その巻下には善導集記『往生礼讃偈』のみが全文収録され一巻を成している。本書の成立年代は不明であるが、開元一八年（七三〇）に編纂された『開元録』には、

開元釈教録二十卷上帙總録下帙別録十八年庚午於西崇福寺東塔院撰

続大唐内典録一卷同前十八年撰

続古今訳経図紀一卷同前十八年撰

続集古今仏道論衡一卷同前

集諸経礼懺儀二卷同前

集諸経礼懺儀二卷

大唐西崇福寺沙門釈智昇撰新編入蔵

集諸経礼懺儀二卷 大唐沙門釈智昇撰

集諸経礼懺儀二卷五十紙 唐釈智昇撰

（卷九「総録」智昇の条。『大正蔵』五五、五七二上—五七二中）

（卷十三「別録」。『大正蔵』五五、六二五上）

（卷十七「別録」。『大正蔵』五五、六七一中）

（卷二十「入蔵録」下。『大正蔵』五五、六九七下）

と載録されることより開元一八年（七三〇）には成立していたことが伺える。

ここで注目すべきは、本書が卷二〇「入蔵録」下に名を列ねていることである。賛寧（九一九—一〇〇二）は『宋高僧伝』卷五「智昇伝」において『開元録』『続大唐内典録』『続古今訳経図紀』を評し、

経法之譜無出昇之右矣。

経法の譜、昇の右に出るもの無し。

（『大正蔵』五十、七三四上）

と記し、また南宋の周敦義（？—？）による「翻訳名義序」（紹興二十七年丁丑（一一五七））には、

然仏法入中国、経論日以加多。自晋道安法師至唐智昇、作為目錄図経蓋十余家。今大蔵諸経、猶以昇法師開元釈教録為準。後人但増

宗鑑録。

（『大正蔵』五四、一〇五五上）

然るに仏法中国に入り、経論日を以て加多なり。晋の道安法師より唐の智昇に至るまで目錄を作為し経を図ること、蓋し十余家。今、大蔵の諸経、なお昇法師の『開元釈教録』を以て準と為す。後人、ただ『宗鑑録』を増すのみ。

と述べられるように、『開元録』卷一九・二〇「入蔵録」の一〇七六部五〇四八卷は、以後大蔵経編纂の指針として踏襲された。その為、中国・朝鮮開版の版本漢訳大蔵経には何れも『集諸経礼懺儀』が入蔵され刊行されている。また『開元録』「入蔵録」を範とした唐西明寺沙門円照編『貞元新定釈教目錄』（貞元一六年（八〇〇）成立）卷二九・三〇「入蔵録」を台帳として書写された日本の平安・鎌倉時代の一切経にも結果として入蔵、書写されている。

つまり智昇による自著『集諸経礼懺儀』卷下への善導『往生礼讃偈』全文の収録、並びに『集諸経礼懺儀』の『開元録』「入蔵録」への採録により、『往生礼讃偈』の伝播経路として概念上は、

- a. 『往生礼讃偈』（単行本） 善導（六一三—六八二）『往生礼讃偈』集記以降。
- b. 『集諸経礼懺儀』卷下（単行本） 智昇『集諸経礼懺儀』編輯（七三〇年頃か）以降。
- c. 『集諸経礼懺儀』卷下（入蔵本） 智昇『集諸経礼懺儀』入蔵（七三〇年）以降。

の三つが想定され、特に c. 『集諸経礼懺儀』卷下（入蔵本）に着目することによって、a. 『往生礼讃偈』（単行本）のみを対象とするのに対し、次下に述べるよう大幅な伝本の増加が見込まれる。

## ②刊本漢訳大蔵経

智昇撰『集諸経礼懺儀』卷下を介した『往生礼讃偈』の入蔵に着目すること自体は何も新しい視点ではない。古くは宗曉（一一五一—一二二四）編『楽邦文類』卷一「大蔵専談浄土経論目錄」において、

集諸経礼懺儀二卷 群字函。

上卷唐沙門智昇集。上半卷通礼諸仏。下半卷別以偈頌礼讃西方。及懺悔発願等文。下卷比丘善導揀示専修西方要義。及集記諸祖六時礼讃浄土偈頌等。

（『大正蔵』四七、一五一中）

集諸経礼懺儀二卷 群字函。

上卷は唐沙門智昇集。上半卷は通して諸仏を礼す。下半卷は別して偈頌を以て西方を礼讃す。及び懺悔発願等文なり。下卷は比丘善導、専修西方要義を揀示し、及び諸祖の六時礼讃・浄土偈頌等を集記す。

と『集諸経礼懺儀』を大蔵経中、専ら浄土を談ずるものの一つであり、卷下が善導集記『往生礼讃偈』であるとする記述がみられる。また『楽邦文類』（一二〇〇年成立）を享受したと考えられる日本の鎌倉期浄土教では、親鸞（一一七三—一二六二）撰『顕浄土真実教行証文類』に、

智昇法師集諸經札懺儀下卷者善導和尚札懺也。

智昇法師の『集諸經札懺儀』下卷は善導和尚の『札懺』なり。

(『増補 親鸞聖人真蹟集成』一、八三頁)

との指摘がみえ、さらに良忠(一一九九―一二八七)撰『往生礼讃私記』にも、

智昇法師以此礼文抽入大藏英字函

智昇法師、この『礼文』を以て大藏の英字函に抽入せり。

(『浄土宗全書』四、三七七頁上段)

の記述がみられる。このような祖師の認識を継承してか、近代以降『往生礼讃偈』の校訂テキストとして『集諸經札懺儀』卷下が用いられている。<sup>(61)</sup>ただしそこで使用されたテキストは常に高麗大藏經再雕版本であった。

高麗の高宗三十八年(一二五二)に完成した高麗大藏經再雕版は、室町時代に将来され、江戸時代には獅谷法然院の忍澂(一六四五―一七二一)や越前浄勝寺の順芸(一七六七―一八四七)によって建仁寺所藏本と黄檗版大藏經との対校がなされ善本であるとの評価を得る。この評価により増上寺藏高麗再雕版は、明治一四年(一八八二)から同一八年(一八八五)に出版された『大日本校訂大藏經(縮刷大藏經)』の底本となる。なお同書は宣統三年(一九一三)から民国三年(一九一四)、棲霞山一三三宗仰印楞によって刊行された『頻伽精舎校刊大藏經』の底本となり、更に『頻伽精舎校刊大藏經』が『大正新脩大藏經』の原稿として使用された為、<sup>(63)</sup>現在に到るまで高麗大藏經再雕版の影響は大きい。

この様な評価、或いは出版の事情を背景としてか、『往生礼讃偈』の研究に依用された『集諸經札懺儀』卷下は常に高麗大藏經再雕版本であった。しかし入蔵本は何も高麗大藏經再雕版に限られるものではない。『昭和法宝総目録』(一九二九―一九三四)やその他の目録により、各藏經における經典の千字文、番号を対照した蔡運辰編『二十五種藏經目錄対照考』(新文豊出版公司、一九八三)によれば『集諸經札懺儀』は、以下の二〇項目が立項されている(括弧内は所収の番号、千字文函号を示す)。

開宝蔵（群）  
 崇寧蔵（群）  
 毘盧蔵（群）  
 磧砂蔵（乙）（群）  
 金蔵（英）  
 南蔵（功）  
 北蔵（桓）  
 嘉興蔵（桓）  
 龍蔵（寔）  
 麗蔵（英）  
 天海蔵（群）  
 縮刻蔵（調）  
 頻伽蔵（調）  
 卍字蔵（三十）  
 大蔵經綱目指要録（英）  
 大蔵聖教法寶標目（一〇七三）  
 至元法寶勘同総録（起）  
 大明釈教彙目義門（三六）  
 閲蔵知津（四二）  
 縁山三大蔵総目録（群）

（『二十五種蔵經目録対照考』二二六頁）

同書は元より現存經典の実見の上に編纂されたものではないが、諸目録も依用することにより『集諸経礼懺儀』が史上初の版本大蔵経である北宋開宝蔵の開版以降、南宋、元、明、清、中華民国と連綿と入蔵されてきた事実、及び金、高麗、日本と広く東アジアにわたり流布した事実を証するものである。この内、実際に現存するものとして下記の二一点が確認される（現存が確認できたものの冒頭に●を附して示す）。

【大陸刊本大藏經】

《宋 版》 北宋勅版

● 東禪寺版（醍醐寺藏本。總本山醍醐寺編『醍醐寺藏宋版一切經目錄』第四冊四四六頁。汲古書院、二〇一五）

● 開元寺版（金沢文庫藏本。神奈川県立金沢文庫編『神奈川県立金沢文庫保管 宋版一切經目錄』二七三・二七五頁。神奈川県立金沢文庫、一九九七）

● 思溪版（増上寺藏本。國際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀 卷下』、二〇一〇）

《元 版》 ● 磧砂版（易行編輯『影印宋元版 磧砂大藏經』一〇二冊。中国綫装書局、二〇〇五）

● 普寧藏（増上寺藏本。増上寺史料編纂所編『増上寺史料集別卷 増上寺三大藏経目錄』六五二頁。大本山増上寺、一九八二）

弘法寺藏

《明 版》 ● 洪武南藏（四川省佛教協會『洪武南藏』一七三冊。一九九九）

● 永樂北藏（『永樂北藏』整理委員會編『永樂北藏』一五二冊。綫装書局、二〇〇〇）

● 嘉興藏（横手裕ほか監修『東京大学総合図書館所蔵嘉興大藏経 目錄と研究』二八七頁。東京大学大学院人文社会系研究科、二〇一〇）

《清 版》 ● 龍 藏（『乾隆大藏経』新編縮本一二八、新文豊出版公司。一九九二）

《遼 版》 契丹藏

《金 版》 ● 金 藏（中国国家図書館藏本。中華大藏経編輯局整理『中華大藏経（漢文部分）』六三、中華書局、二〇〇五）

《高麗版》 ● 高麗藏初雕版（南禪寺藏本。『域外漢籍珍本文庫』編纂出版委員會編『高麗大藏経初刻本輯刊』七五冊。西南師範大学出版社、二〇一二）

● 高麗藏再雕版<sup>(64)</sup>（東国大学校『高麗大藏経』三三冊。東国大学校、一九七五）

【日本刊本大藏経】

● 天海版（松永知海編『東叡山寛永寺天海版一切經目錄』一五三頁。佛教大学松永研究室、一九九九）

● 黄檗版（佛教大学仏教文化研究所編『黄檗版大藏経並新統一統入蔵経目錄…獅谷法然院所蔵麗藏対校』五五四頁。佛教大学仏教文化研究所、一九八九）

このように『集諸經礼懺儀』の入蔵に着目し、刊本漢訳大蔵經を繙くことで『往生礼讃偈』の内容を有する刊本は大陸二点、日本二点と大きくその伝本を増やすこととなるが、特筆すべきは、

高麗蔵初雕版本（二〇二一—二〇二九開版）

東禪寺版（醍醐寺蔵本、崇寧三年（一一〇四）刊）

思溪版本（一一二六—一一三三開版、一二四一—一二五二補刻）

開元寺版（金沢文庫蔵本、紹興十八年刊（一一四八）刊）

金蔵本（一一四九—一一七三開版）

の五点が、上述の日本に現存する『往生礼讃偈』の最古の部類である、

京都誓願寺蔵鎌倉時代初期写本一帖

高田専修寺蔵鎌倉時代初期版本一帖

京都大学附属図書館蔵建長三年（一二五二）版本一帖

並びに、既存の研究において用いられてきた高麗蔵再雕版本（一二五二年開版）よりも時代的に先行することである。つまりこれら刊本漢訳大蔵經の刊行は、時処を法然浄土教の隆盛と異にするものであり、その影響下におけるテキスト改変を経ないものとして『往生礼讃偈』の原形を考察する上で注目すべきテキストと言える。

## ③日本古写経

刊本大蔵経の嚆矢は太平興国二年（九七七）に開版された北宋勅版開宝蔵であり、それ以前に刊本大蔵経は存在しない。当然、開宝蔵の底本は唐代以来の写本大蔵経と考えられ、開元一八年（七三〇）智昇の編輯した『集諸経礼懺儀』に理論上年代的に最も近接する刊本大蔵経テキストとして開宝蔵本が位置付けられる。しかし実際には近時の研究成果として宋版と唐代写本との断絶が報告されている。

漢籍においては、

宋版は、そもそも「唐鈔本」を直接の底本としてしていると推定されているにもかかわらず、旧鈔本『白氏文集』及び『文選集注』と宋版と比較校合したところ、意外な事実が浮かび上がってきたのである。すなわち、同一テキストであっても、その両者の本文を詳しく吟味するならば、旧鈔本の写本と刊本との間には、断絶ともいえるほどの本文の異同が存していたのである。

（神鷹徳治「序論―旧鈔本と唐鈔本」、神鷹徳治・静永健編『旧鈔本の世界 漢籍受容のタイムカプセル』九頁）

と、奈良・平安時代に遣唐使・留学僧によって将来された唐鈔本の転写本である旧鈔本と宋版本を比較され、両者の断絶が明らかにされている。更に注目すべき提言として、

しかも、刊本以前のテキストを書写した旧鈔本の方が、幾多の欠点はあるにせよ、原本文の形態と文字を留めているというわけである。特に、本邦伝来の旧鈔本は、我が国における中国文化への畏敬という意識も加わり、恣意的改変を免れ、その結果、唐鈔本の本文を忠実に伝えていると推測されている。このことは、逆に、テキストとしては完成されていたといわれる宋刊本に、予期以上に、写本から版本になる過程において、本文の誤刻・ないし改変が少なからず行われていたのではなからうかという推測が生まれている。（同上）

と、旧鈔本の欠点に留意しつつ、それが唐鈔本の本文を忠実に伝えている事、宋版本における誤刻・改変、の二点を指摘されている。



一方、仏典においても、

現存四、五〇〇巻余の金剛寺一切経は第二分冊の金剛寺一切経目録にも示したように平安時代後期から鎌倉時代中期にかけて書写された経典であるが、その大半は奈良写経の転写本である。この奈良写経は、当時の盛唐から伝来した良質の経巻を底本として書写されていたものであり、改変したり、編集改定を行ったりした形跡は皆無に近い。それに反して北宋勅版（開宝蔵）も高麗版も経典に見られる種々な疑問点を解決するため取捨選択し、あるいは文字を削り、あるいは文字を加えて編集し直したのであった。それらが当時では理由あることだったとはいえ、現代的観点からは排除されるべき作爲にほかならない。例えば羅什訳とされる『馬鳴菩薩伝』は隋唐で用いられたものと全く異なる、似て非なる同名書を北宋勅版（開宝蔵）も高麗版も採用しているのである。

（平成十六―十八年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』第一分冊、

落合俊典「はしがき」一一二頁）

と、従来宋版の転写本とみなされてきた平安・鎌倉期における写本一切経が、実際には唐代写経の系譜に連なる奈良写経の転写本である事例が報告されている。

これら漢籍・仏典の両書にわたり通底する「日本に現存する古写本が宋版以前の唐代テキストの内容を保持する」という事象は、日本における唐代文化受容の特徴と考えられ、唐代の『往生礼讃偈』テキストの復原を志向する上で日本に伝存する「古写経」に着目するという視座が有効である可能性を示唆するものである。

奈良から鎌倉時代にかけて数多の一切経書写が行われたと推測されるが、現在纏まった巻数を伝存するものとして以下の機関・寺院が知られる。<sup>(6)</sup>

【奈良時代】

五月一日經

正倉院聖語藏 七五〇卷（その他約二〇〇巻が各所に分蔵）

【平安時代】

石山寺一切經

石山寺 四六四四卷

中尊寺經（藤原清衡願經）

金剛峰寺 四二九六卷

觀心寺

觀心寺 一六六卷

中尊寺經（藤原秀衡願經）

大長寿院 二七三九卷

神護寺經

神護寺 二三一七卷

荒川經

金剛峰寺 三五七五卷

七寺一切經

七寺 三三九八卷。一五五六帖

松尾社一切經

妙蓮寺 三五四五卷

興聖寺一切經

興聖寺 五二六帖

法隆寺一切經

法隆寺 九二六帖

色定法師一筆一切經

興聖寺 四三三帖

西方寺一切經

西方寺 二六二九卷

名取新宮寺一切經

新宮寺 二五七五卷

金剛寺一切經

金剛寺 約四五〇〇卷

【平安―鎌倉時代】

『往生礼讃偈』『集諸経礼懺儀』『集諸経礼懺儀』が奈良時代に将来された事實は、正倉院の写経所文書により確認し得ることは上述したが、その奈良写経本『往生礼讃偈』『集諸経礼懺儀』自体は現存が確認されておらず、奈良写経による唐代『往生礼讃偈』の復元は叶わない。唐代写経に直結する奈良写経自体の現存が確認されない現在、その系譜に連なると推測される平安・鎌倉写経本は転写本と雖も二次資料として注目すべきものである。

特に『往生礼讃偈』（単行本）の日本における遺例の最古の部類は何れも鎌倉時代初期・中期の成立であるが、これは法然浄土教の隆盛と関連するものであり、そこには善本の希求、儀礼テキストとしての整備等を目的とした意図的な改訂の介在が指摘されている。それに対し、『集諸経礼懺儀』卷下（入蔵本）は入蔵に伴い大蔵経の一部として一字一句疎かにすることの許されない書写功德の対象という異なる属性を帯びることとなる。もちろん誤写は免れないが、意図的な改訂の介入は防止されることと推測される。これは開版に際し校訂が行われたと推測される刊本漢訳大蔵経本に比し、より唐代原典に近接する蓋然性が高いことを意味する。『集諸経礼懺儀』卷下（入蔵本）の古写経本に着目する利点は単なる伝本の増加に留まるものではなく、この点にこそ最大の意義があると言える。

## 第六節 本研究の方法

本研究は既存の善導『往生礼讃偈』研究が、法然浄土教の隆盛の影響下において編輯されたと推測されるテキストに基づいてなされていることを問題視し、より原典に近接する『往生礼讃偈』テキストの伝本整理・紹介と古態の復元を目的とするものである。本目的の遂行の爲、本研究は上述した①『集諸経礼懺儀』、②刊本漢訳大蔵経、③日本古写経、の視点、並びに理念を導入し、日本に現存する『集諸経礼懺儀』卷下の古写経本に着目するものであり、具体的に以下の方法を以て『往生礼讃偈』テキストの古態を検証する。

上述、奈良から鎌倉時代における書写一切経の内、『集諸経礼懺儀』卷下の伝本として以下の五点の現存、並びに内容の確認ができた。

### 【写本大蔵経本】

京都	檀王法林寺所蔵本	院政期写	中尊寺一切経本（清衡願経）
愛知	七 寺所蔵本	院政期写	七 寺一切経本
京都	妙蓮寺所蔵本	院政期写	松尾社一切経本
京都	興聖寺所蔵本	院政期写	興聖寺一切経本
大阪	金剛寺所蔵本	鎌倉初中期写	金剛寺一切経本

これら五点は本文の比較により檀王法林寺所蔵本・金剛寺所蔵本と七寺所蔵本・妙蓮寺所蔵本・興聖寺所蔵本の二系統に大別される。本稿ではこの内、檀王法林寺所蔵本、七寺所蔵本、金剛寺所蔵本を検討対象とし、現存する刊本漢訳大蔵經本であり、日本に現存する『往生礼讃偈』単行本とほぼ同時代に開版された高麗大蔵經再雕版本（二二五一開版）を下限とする六点的内、内容の確認できた以下の四点（冒頭に●を附して示す）との比較対照を行い、古写經本の底本、或いはその系譜を明らかにする。

# 【刊本大蔵經本】

- 高麗蔵初雕版本（二〇一一—二〇二九開版）
- 東禪寺版（醍醐寺蔵本、崇寧三年（一一〇四）刊）
- 思溪版本（一一二六—一一三二開版、一二四一—一二五二補刻）
- 開元寺版（金沢文庫蔵本、紹興十八年刊（一一四八）刊）
- 金蔵本（一一四九—一一七三開版）
- 高麗蔵再雕版本（二二五一開版）

なお注目すべき写本として、近年名古屋市中区大須、稲園山七寺（正覚院長福寺）所蔵一切經の調査によって発見された『阿弥陀往生礼仏文』一卷があげられる。本書は卷首を欠き、奥書・訓点も認められず、その来歴は明かでないが、『往生礼讃偈』の内容を有する古写本であることが廣川堯敏によって紹介されており、七寺一切經の書写年次（一二七五—一二七八）よりすれば、本書は鎌倉時代初期の遺例である誓願寺蔵本・専修寺蔵本に先行するものと考えられる。本書に対しても上述の写本大蔵經本同様の検討を加えることにより、未だ確たる位置付けをみない『阿弥陀往生礼仏文』の特色の把握と位置付けを試みる。

以上の比較対照によって古写經本『集諸經礼懺儀』卷下、並びに『阿弥陀往生礼仏文』の系譜、祖本を比定し、従来注目されていない『往生礼讃偈』の伝本として紹介すると共に、刊本漢訳大蔵經諸本、日本に現存する『往生礼讃偈』の最古の部類である京都誓願寺蔵鎌倉時代初期写本一帖、高田専修寺蔵鎌倉時代初期版本一帖、京都大学附属図書館蔵建長三年（一二五二）版本一帖との相違箇所に着目し、それを改変の痕跡と捉え、前後関係を検討し序列化することにより『往生礼讃偈』の変遷過程を可視化し、古態の一端を明らかにしたい。

## 第七節 本論の構成

本論は以下の六章によって構成する。

- 第一章 『往生礼讃偈』と『集諸経礼懺儀』卷下
- 第二章 七寺蔵 七寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下攷 —— 附 開宝蔵本の復元 ——
- 第三章 檀王法林寺蔵 中尊寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下、並びに金剛寺蔵 金剛寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下攷
- 第四章 七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』攷
- 第五章 『往生礼讃偈』変遷攷
- 第六章 『往生礼讃偈』「如観経具説」攷

「第一章 『往生礼讃偈』と『集諸経礼懺儀』卷下」では、研究対象である善導集記『往生礼讃偈』とそれを全文収録する智昇撰『集諸経礼懺儀』の関係を検討する。何故、智昇は自著に『往生礼讃偈』全文を収録するのか、その意図は何辺にあるのか、『集諸経礼懺儀』卷下に収録される『往生礼讃偈』に智昇の加筆、編纂が為されたのか等、『集諸経礼懺儀』の文献的性格を明らかにする。

これは『集諸経礼懺儀』卷下を『往生礼讃偈』の一伝本として扱うことの是非を問うものであり、次下の章に先立って検討すべきものである。

「第二章 七寺蔵 七寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下攷——附 開宝蔵本の復元——」では、院政期の写本である七寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下を対象に、諸刊本大蔵経本との比較対照を行い、七寺本の祖本を特定し、その意義を述べると共に影印・翻刻・校異を附し紹介する。また附章として七寺本を用い散逸し現存していない開宝蔵本『集諸経礼懺儀』卷下本文を推定復元する。

「第三章 檀王法林寺藏 中尊寺一切經本『集諸經礼懺儀』卷下、並びに金剛寺藏 金剛寺一切經本『集諸經礼懺儀』卷下攷」では、院政期の写本である京都檀王法林寺藏『集諸經礼懺儀』卷下、並びに鎌倉初期から中期の写本である金剛寺一切經本『集諸經礼懺儀』卷下を対象に、諸刊本大藏經本との比較対照を行い、両書の系譜を比定すると共に、その特色である細字双行表記の多用が有する意味を考察し、両書の資料的価値を明らかにした上で影印・翻刻・校異を附し紹介する。

「第四章 七寺藏『阿弥陀往生礼仏文』攷」では、院政期の写本である七寺藏『阿弥陀往生礼仏文』を対象とし、本書に言及する既存の研究を検証すると共に、『往生礼讃偈』『集諸經礼懺儀』卷下諸本と比較対照を行い、その位置付けと資料的価値を明らかにした上で影印・翻刻を附し紹介する。

「第五章 『往生礼讃偈』変遷攷」では、これまでの各章で比定してきた開宝藏本『集諸經礼懺儀』卷下・古写經本『集諸經礼懺儀』卷下・『阿弥陀往生礼仏文』・『往生礼讃偈』单行本（法然以後）を比較対照し配列することにより『往生礼讃偈』の変遷過程を推定し、その古態の一端を明らかにする。

「第六章 『往生礼讃偈』『如觀經具說』攷」では、『往生礼讃偈』序文にみられる「如觀經具說」を対象に検討を行う。この一句はほぼ読解がなされている『往生礼讃偈』の中において難読の箇所として知られ、従来複数の解釈がなされている。ここでは当該箇所に対する先哲の解釈を紹介・検証した上で、「如觀經具說」が疑誤（異文がなく、表面上誤りは認められないが、実際には誤りが存在するもの）であるとの仮説の下、生起した訛誤を推定することで、「如觀經具說」へと誤認される過程を明らかにすると共に、そこに込められた著者善導の述意を汲み取ろうという試論である。

以上、本論第六章に資料として「諸本校異一覧」「再雕本・初雕本・金藏本 三本対照」を附す。これらの検討を通じて『集諸經礼懺儀』の文献的性格、並びに『往生礼讃偈』との関係、その入藏理由を明らかにし、従来知られていない開宝藏本『集諸經礼懺儀』卷下本文、唐代入藏本系統『集諸經礼懺儀』卷下本文、法然浄土教の影響下における改変を経ていない『往生礼讃偈』单行本本文を紹介すると共に、『往生礼讃偈』の変遷過程と古態に迫りたい。

## 註

- 1 善導伝に関しては望月信亨『高祖善導大師』、塚本善隆『唐中期の浄土教』、小笠原宣秀『中国浄土教家の研究』、野上俊静『中国浄土三祖伝』、藤田宏達『善導』（講談社『人類の知的遺産』一八）、牧田諦亮『善導』（講談社『浄土仏教の思想』五）、藺田宗恵「善導大師伝記に関して」（『六条学報』一五七）、望月信亨「善導大師の事跡」（『浄土教之研究』）、松本文三郎「善導大師の伝記と其時代」（浄宗会編『善導大師の研究』）、常盤大定「唐の善導大師に関する問題」（『支那佛教の研究』第一）、岩井大慧「善導伝の一考察」（『日支佛教史論攷』）、上杉文秀「善導大師伝の研究」（『善導大師及往生礼讃の研究』）、塚本善隆「金石文字に現はれたる善導と道綽」（『仏教学』二一七）、同「唐慈恩寺善導大師塔碑考―附章敬寺法照和尚塔碑考」（『摩訶衍』九）、小笠原宣秀「善導大師伝に関する史料二三とその品隔」（『宗学院論輯』三二）、同「善導大師と襄陽」（『支那佛教史学』四一四）、滋野井恬「善導」（『伝灯の聖者』）、成瀬隆純「道綽・善導之一家」の背景」（『東洋の思想と宗教』四）、佐藤成順「善導伝研究の問題点」（『浄土教文化論』一）、金子寛哉「隆闡法師碑文」（『中国浄土教論集』）、同「浄業法師碑をめぐる」（『戸松啓真先生古稀記念論文集』）、諸戸立雄「善導伝の一考察」（『東北大学東洋史論集』五）、柴田泰山『続高僧伝』所収の善導伝（『善導教学の研究』）、同「善導伝と著作の再検討」（『善導教学の研究』参照）。
- 2 『大正蔵』五〇、六八四上。
- 3 『大正蔵』五一、一〇五中。
- 4 『大正蔵』四七、一二五下。
- 5 幸西『唐朝京師善導和尚類聚伝』（『金澤文庫資料全書』四）所収。
- 6 『大正蔵』五一、一一九上。
- 7 法然『類聚浄土五祖伝』（石井教道編『昭和新修法然上人全集』）所収。
- 8 『大正蔵』四七、二六六下。
- 9 『大正蔵』四七、一九二下。
- 10 『大正蔵』四九、二六三上。
- 11 『金石萃編』七三。

- 12 『金石萃編』八六。
- 13 『金石萃編』七五。
- 14 『大正蔵』三七所収（No. 一七五三）。底本…元禄七年（一六九四）義山刻大谷大学蔵本。校本…徳川時代刊龍谷大学蔵本、徳川時代刊宗教大学蔵本、正安四年（一二〇二）知真刊宗教大学蔵本。
- 15 『大正蔵』四七所収（No. 一九五九）。底本…徳川時代刊大谷大学蔵本。校本…徳川時代刊宗教大学蔵本。
- 16 『大正蔵』四七所収（No. 一九八〇）。底本…徳川時代刊宗教大学蔵本。校本…大日本続蔵経本。
- 17 『大正蔵』四七所収（No. 一九七九）。底本…徳川時代刊宗教大学蔵本。
- 18 『大正蔵』四七所収（No. 一九八一）。底本…元禄六年（一六九三）刊宗教大学蔵本。校本…元禄七年（一六九四）刊大谷大学蔵義山刻本。
- 19 上野成観「善導著述関係の一考察」（『真宗研究会紀要』三三）、柴田泰山『善導教学の研究』第二章第五節「五部九卷成立前後論における『観経疏』の位置」参照。
- 20 『大正蔵』一二所収（No. 三六〇）。
- 21 迦才『浄土論』所収『大正蔵』四七、No. 一九六三）。
- 22 『大正蔵』二六所収（No. 一五二四）。
- 23 正倉院御物の中より聖武天皇宸翰『雑集』が発見・紹介され、岩井大慧によってそこに収録される「隋大業主浄土詩」が晨朝礼讃の典拠である彦琮「浄土詩（仮題）」であることが明らかにされた。岩井大慧「聖武天皇宸翰雑集に見えたる隋大業主浄土詩について」（『東洋学報』一七二、一九二八）、同「広法事讃を通して再び聖武天皇宸翰浄土詩を論ず」（『東洋学報』二二二、一九三四）。後『日支仏教史論攷』（東洋文庫、一九五七。原書房、一九八〇）参照。なお聖武天皇宸翰『雑集』の発見・紹介は佐々木信綱編『南都秘笈』第壹集（一九二二）、内藤虎次郎「聖武天皇宸翰雑集」（『支那学』第二卷第三号、一九二二。後『研幾小録』、弘文堂、一九二六に収録）参照。また近年、合田時江編『聖武天皇『雑集』漢字総索引』（清文堂、一九九三）にて影印・翻刻がなされている。
- 24 『大正蔵』一二所収（No. 三六五）。
- 25 中井真孝「経疏目録類より見たる善導著述の流布状況」（藤堂恭俊編『善導大師研究』山喜房仏書林、一九八〇）。
- 26 福原隆善「叡山における善導教学の受容と展開」（『印度学仏教学研究』二六—二七）。同「叡山における善導教学の受容と展開」（藤堂恭俊編『善導大師研究』



山喜房仏書林、一九八〇）。伊藤真徹「わが国浄土教の弘布と善導教学の受容―特に往生要集―」（『小沢教授頌寿記念 善導大師の思想とその影響』。小林尚英『往生要集』における善導教学の受容と展開―特に『観経疏』・『往生礼讃』の引用を中心として―（『往生要集研究会編『往生要集研究』、一九八七）。

27 梯信暁『宇治大納言源隆国編 安養集 本文と研究』（百華苑、一九一三）。

28 梶浦晋は本目録を、平安時代前期（遅くとも中期）法相宗に関係のある人物によって編集された大寺院の蔵書目録と推定され（梶浦晋「法金剛院蔵『大小乗経律論疏記目録』について」、牧田諦亮監 落合俊典編『七寺古逸經典研究叢書六 中国・日本經典章疏目録』、大東出版社、一九八八）、落合俊典は興福寺の蔵書目録とする（落合俊典「興福寺と法金剛院蔵の章疏目録」、阿部泰郎編『日本における宗教テキストの諸位相と統辞法』「テキスト布置の解釈学的研究と教育」第四回国際研究集会報告書、名古屋大学大学院文学研究科、二〇〇八）。なお成立時期に関して落合は真言土砂加持の思想がみられる『遊心安樂道』が採録されていることから十世紀中葉以降と推定されている（落合俊典「平安時代における入蔵録と章疏目録について」、牧田諦亮監 落合俊典編『七寺古逸經典研究叢書六 中国・日本經典章疏目録』、大東出版社、一九八八）

29 落合俊典は本目録を一一世紀前半までに成立した天台浄土教の経論章疏目録であり、その撰者を寛印と推定されている（落合俊典『律宗章疏』・『開元録随要抄』（擬題）・『阿弥陀仏経論並章疏目録』解題」、国文学研究資料館編『真福寺善本叢刊（第二期第一巻）真福寺古目録集二』、臨川書店、二〇〇五）。

30 高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺資料叢書第十九冊 高山寺本東域伝燈目録』（東京大学出版会、一九九九）。

31 梶浦晋「京都大学附属図書館蔵 建長三年刊『往生礼讃偈』解題」（『国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀 卷下』、二〇一〇）。

32 『大正蔵』八三、一九上。

33 『大正蔵』八三、二下。

34 「正信念仏偈」（『大正蔵』八三、六〇〇上―下）。

35 『大正蔵』八三、六六〇上―六六四中。

36 浄土宗・浄土真宗における『往生礼讃偈』の主要な註釈書としては以下があげられる。

【西山】證空『観門要義鈔』十卷。鵜木行観『秘鈔（私記）』三卷。西山智圓『類聚鈔』三卷。永寛『私聚鈔』十一卷。智通『口筆鈔』三卷。深草亮恵『抄』三卷。

【鎮西】良忠『私記』二卷。了蒼聖罔『私記見聞』二卷。大澤良栄『私記見聞』二卷。永正加祐『私記拾遺鈔』二卷。選者不明『私記冠註』。號阿澄圓『発願文私鈔』。玄阿懷音『纂釋』五卷。

【本願寺派】僧樸『甄解』五卷。曇龍『引釈義』三卷。伊井智量『乙酉録』一卷。履善『記聞』四卷。利井鮮妙『偈記』一卷。智洞『甄解講林』一卷。立丈『講録』一卷。僧樸『昨夢録』三卷。是山恵覚『前序』一卷。玄雄『聴記』三卷。

【大谷派】光遠院恵空『具疏四部講説（叢林鈔）』。香嚴院恵然『具疏四部講説』。開轍院隨恵『聞記』一卷。圓乘院宣明『口義』三卷。皆往院鳳嶺『乙丑録』一卷。五乗院寶景『甲戌記』四卷。香樹院徳龍『講義』五卷。雲華院大含『信聴記』二卷。皆遵院宜成『丙午記』二卷。本法院義讓『聞記』三卷。賢珠院得住『講説』。香山院龍温『講述』四卷。香涼院行忠『己丑記』三卷。真成院千巖『講録』。静観院了因『講録』。

37 「日本の伝統的な仏教は、漢訳經典の仏教であった。しかるに明治以後、近代の日本には、西洋から新たにパーリ語や梵語、チベット語などの知識が導入された。（中略）近代仏教学は、まず何よりも、学問を確実な根拠にもとづいて立論することを必要条件とする。そのため第一資料を大切に、翻訳されたものよりは原典を重視する原典主義をとる。なるべくたくさん資料を編集して、異本があれば、これを比較し、まず原本を確定すれば、それを翻訳し、またこれに関連して研究をすすめる、原典の評価をする。梵語やパーリ語の原本の作製は、現地で多量の写本類を入手することのできた西洋の学者の業績には、学ぶべきものが多かったが、日本でも翻訳や研究—とくに文献学的研究において、多くのすぐれた成果をあげてきた。多種多量の原典が紹介せられるとともに、すでに知られていたテキスト、特に漢訳仏典との比較研究が盛んとなった。たとえば原始仏教の分野における、パーリ語のテキストと、漢訳の律・阿含との比較研究のごときは、その顕著な例である」（前田恵学「日本における近代仏教学」『禅研究所紀要』四・五、一九七五）。

38 『二楽叢書』第一号（一九一二）。

39 矢吹慶輝編『鳴沙余韻 燉煌出土未伝古逸仏典開宝』（岩波書店、一九三〇。後、臨川書店、一九八〇）。

40 矢吹慶輝編『鳴沙余韻 燉煌出土未伝古逸仏典開宝 解説』（岩波書店、一九三三。後、臨川書店、一九八〇）。

41 『龍谷論叢』二九七、一九三二。

42 『龍谷学報』三〇五、一九三三。

43 『小沢教授頌寿記念 善導大師の思想とその影響』、一九七七。

- 44 北八三五〇（北敦八二二八）。
- 45 中華佛學研究所論叢一八、法鼓文化事業股份有限公司、一九九八。
- 46 巴蜀書社、二〇〇〇。
- 47 中華書局、二〇〇三。
- 48 中国佛教学術論典八九、佛光山文教基金会、二〇〇三。
- 49 福建人民出版社、二〇〇七。
- 50 藤堂恭俊編『善導大師研究』（山喜房仏書林、一九八〇）。
- 51 『大日本古文書』八、一一四頁。
- 52 『大日本古文書』一二、五三八頁。
- 53 『大日本古文書』二、七〇七頁。
- 54 石村喜英『日本古代仏教文化史論考』（山喜房仏書林、一九八七）「第一章 古代僧伝の研究」二「僧道昭伝の基礎的考察」参照。
- 55 ただしこれは書写奥書ではなく先行する明信開版本（散逸）の本奥書と考えられ、実際の書写年次は『般舟讃』も同様の書式で書写されていることから建保五年（一二一七）、仁和寺における『般舟讃』発見以降と考えられる。赤尾栄慶は鎌倉時代初期の書写と判断され、本書を含む浄土三部経并善導五部九卷が納められている菊花散時絵経箱に『般舟讃』の一節が時絵されていることから『般舟讃』発見直後の書写であると推察されている（京都国立博物館編『古写経―聖なる文字の世界―』作品解説、三二八・三二九頁、二〇〇四）。
- 56 堤玄立、平松令三編『高田専修寺本 善導大師五部九卷』解説二（法蔵館、一九八六）、『定本 親鸞聖人全集』九、解説（法蔵館、一九六九）、高橋正隆「善導遺文の書誌研究」（藤堂恭俊編『善導大師研究』山喜房仏書林、一九八〇）参照。
- 57 『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』所収の解題（梶浦晋執筆）を参照。
- 58 「礼讃偈の韻律―詩の評価とテキスト校訂―」（『浄土宗学研究』二六、二〇〇〇）。後『中国浄土教儀礼の研究 善導と法照の讃偈の律動を中心として』（法蔵館、二〇一五）収録。

- 59 大阪の長円寺蔵版（寛政十一年（一七九九）五月、長円寺十一代崇興が各別に版行されていた七祖の聖教を集成し、整備刊行したもの）の版木を、文政九年（一八二六）、西本願寺が入手し刊行したもの。
- 60 なお『大正新脩大藏經』巻四七（大正新脩大藏經刊行会、一九六七）所収本の底本は、徳川時代刊宗教大学蔵本であり、やはり日本伝存の法然浄土教の影響下にて刊行されたテキストを底本とするものである。
- 61 『真宗聖教全書一三經七祖部』（真宗聖教全書編纂所、一九四一年）、『浄土真宗聖典 七祖篇（原典版）』（浄土真宗聖典編纂委員会、一九九二年）。
- 62 鉄眼道光（一六三〇—一六八二）によって延宝六年（一六七八）、明万暦版大藏經を主要底本として開版された日本初の市販刊本大藏經。
- 63 山崎精華「異字の選択に就いて」（『現代仏教』五五、大正新脩大藏經完成記念号、一〇四頁）。
- 64 高麗大藏經研究所のホームページ上にも画像が公開されている（[http://kb.sutra.re.kr/ritk\\_eng/searchExv/index.jsp?kcode=K1087&ksubCode=000&flag=D&fontFlag=B&fromMenu=N&kvolumeCode=001&page=P0740&dan=b&kwon=V33](http://kb.sutra.re.kr/ritk_eng/searchExv/index.jsp?kcode=K1087&ksubCode=000&flag=D&fontFlag=B&fromMenu=N&kvolumeCode=001&page=P0740&dan=b&kwon=V33) 一〇〇八年一〇月六日確認）。
- 65 梶浦晋「金剛寺一切經調査の経緯」（平成二二年度—平成一五年度科学研究費補助金基盤研究（A）・（1）研究成果報告書『金剛寺一切經の基礎的研究と新出仏典の研究』一一・一二頁）参照。
- 66 廣川堯敏「七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』について」（牧田諦亮監 落合俊典編『七寺古逸經典研究叢書五 中国日本撰述經典（其之五）・撰述書』、大東出版社、二〇〇〇）。

## 第一章 『集諸経礼懺儀』と『往生礼讃偈』

はじめに

『集諸経礼懺儀』二卷（卷上下）は『開元釈教録』（以下『開元録』と略称）の撰者として名高い大唐西崇福寺沙門智昇（一七三〇—）の撰集である。本書は『開元録』卷二〇「入蔵録」下の「賢聖集（此方撰集）」に分類、載録されており、その成立年次は『開元録』の成立時である開元一八年（七三〇）以前と考えられる。本書は諸経典にみられる礼懺文を集録したものであるが、両巻の首尾を一瞥すると、

### 【卷上冒頭】

集諸経礼懺儀卷上

大唐西崇福寺沙門智昇撰

一切恭敬 敬礼常住三宝

是諸衆等人各胡跪。嚴持香花如法供養。

（中略）

（『大正蔵』四七、四五六中）

### 【卷上末尾】

亦不求無思 意思如有思

是法如是持

集諸経礼懺儀卷上

（『大正蔵』四七、四六五下）

### 【卷下冒頭】<sup>①</sup>

集諸経礼懺儀卷下

大唐西崇福寺沙門智昇撰

往生礼讃偈一卷 比丘善導集記

勸一切衆生願生西方極樂世界阿弥陀仏

国六時礼讃偈謹依大乘経及龍樹天親此土（中略）

（『大正蔵』四七、四六六上）

### 【卷下末尾】

念経今既有此増上誓願可憑

諸仏子等何不励意去也

集諸経礼懺儀卷下

（『大正蔵』四七、四七四下）

と、その巻下は善導（六一三―六八二）の『往生礼讃偈』一卷（傍点部）に首題「集諸経礼懺儀巻下」、撰号「大唐西崇福寺沙門智昇撰」、尾題「集諸経礼懺儀巻下」（傍線部）を附したものであることが認められ、従来、実際に智昇の手による撰述は巻上のみと考えられている。またその巻上にも『往生礼讃偈』日中礼讃が収録されており、上下両巻の関係は量り難い。本書は何故このような特異な形態を有するのであるだろうか。本章ではこの問題に言及する先行研究を紹介、検討することで論点を明確にし、巻上と巻下の関係、並びに『集諸経礼懺儀』の文献的性格を踏まえた上で、改めて智昇による『往生礼讃偈』収録の意図を明らかにしていきたい。

## 第一節 先行研究の検証

善導は曇鸞（四七六―五四二）・道綽（五六二―六四五）系の浄土教の大成者とされ、日本においては浄土宗の開祖法然（一一三三―一二二二）が『選択本願念仏集』で「偏依善導一師」（『大正蔵』八三、一九上）を標榜し、さらに浄土真宗の開祖親鸞がいわゆる七高僧（龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・法然）の一人として敬礼したといった背景より、善導、並びに『往生礼讃偈』の研究は夥多みられるが、『集諸経礼懺儀』巻下を用いるものは些少であり、その中でも両書の関係について言及するものは、高瀬承厳による『国訳一切経』（和漢撰述部諸宗部七、大東出版社、一九三六）の「集諸経礼懺儀解題」のみである。高瀬承厳は『集諸経礼懺儀』巻上末にみられる、

於今徒衆亦常相續依行不絶。但以現無正文流传。恐欲学者无所依拠。是以故集此文流通於世。願後学者依文誦誦不增不减。

（『大正蔵』四七、四六五下）

今の徒衆、亦相續して絶へざるべし。但し惟みるに、現に正文の流传なく、学ばむと欲する者、依拠するところなきを恐る。是の故を以て此の文を集めて世に流通す。願わくは後の学者、文に依りて誦誦し、増さず減ぜざらむことを。

（高瀬承厳による国訳。『国訳一切経』和漢撰述部、諸宗部七、三五〇頁）

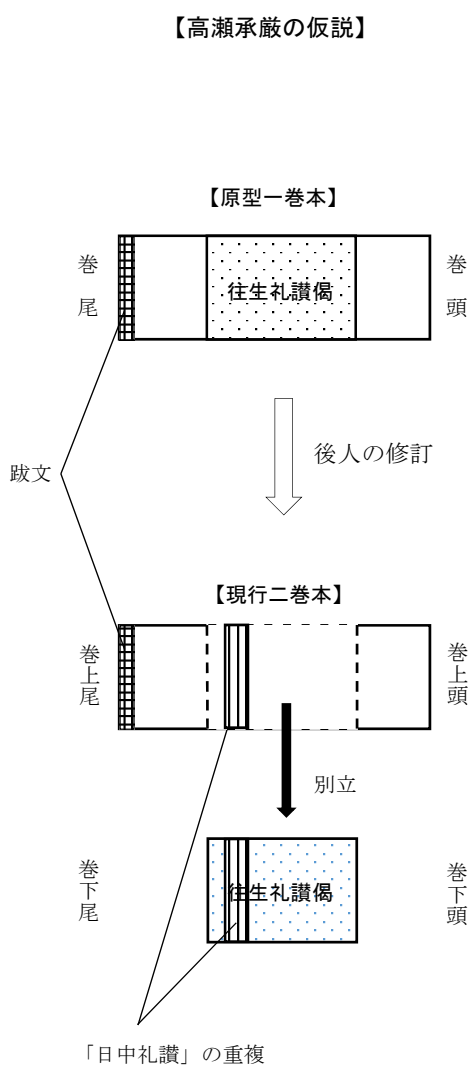
との記述を智昇の感懷として注目され、

この語は本書に対し非常に深い自信を持ち、又礼仏誦経に対する敬虔な念を有してゐたことを示す語で、（中略）上巻末に右の如き感懷を述べてゐるのを見ると、本書は上巻だけで完成してゐると見るべきであり、下巻の往生礼讃は附加物と見るべきである。殊に往生礼讃中の日中礼讃偈は若干の相違あるにしても既に上巻に収められてゐる。若し極端にいふならば同一類のものを二度まで、収むる必要奈辺に存する。この点から見ると、本書は或いは智昇撰録のまま伝えらるることなく、撰録後、時を経る中に原型を失つてしまつたのを、後人が濫りに現型のものとしてしまつたのかも知れぬ、即ち現在の下巻はやはり現在の上巻にあつたのを、後人修訂の折往生礼讃だけを下巻とし、日中礼讃だけは終ひそのままに忘れたか、或いは本書の原型と現型とは似もつかぬものであつたかも知れぬ。

（『同上』解説、三三二頁）

と両書の関係について述べられている。

つまり高瀬承厳は現行本巻上末に上述の跋文が認められることより、原型『集諸経礼懺儀』は一卷本であつたと推定された上で、現行本巻上、巻下の日中礼讃の重複に着目され、原型『集諸経礼懺儀』（一卷本）に収録されていた『往生礼讃偈』を後人が別立し巻下と成した為、現在の二巻本になったと推測されている。



高瀬承厳の仮説は、後人の修訂を想定することで本書の形態の奇異を会通するものであるが、その根拠の一つが日中礼讃の重複である。「同一類のものを二度まで、収むる必要奈辺に存する」として、そこに撰者智昇以外の介入を想定する点は首肯されるものの、後人が何故『往生礼讃偈』を別立するのか、更に日中礼讃のみが取り忘れられたとする点等には甚だ疑問が残る。

では実際に、この高瀬承厳の仮説は妥当であろうか。高瀬の後人修訂説に則るならば『集諸経礼懺儀』の原初形態は一卷本とされるが、現存の確認される版本大蔵経本の何れもが二巻本として本書を入蔵している。<sup>(2)</sup> また日本に現存する古写経に目を転じてみると、次章にて詳述する愛知県名古屋市稲菌山長福寺（七寺）蔵、安元三年（一二七七）写『集諸経礼懺儀』巻上には「大宋太平興二年<sup>丁丑</sup>歲／奉勅雕造太平興國／八年奉勅印」と北宋勅版（開宝蔵）の刊記の転写がみられ、現存の確認し得ない北宋勅版本においても一卷本ではなく複数巻本であったことが確認される。<sup>(3)</sup> なお第三章にて詳述するが京都府京都市朝陽山檀王法林寺蔵本（中尊寺一切経清衡経本、院政期写）、大阪府河内長野市天野山金剛寺蔵本（鎌倉初中期写）は何れの版本大蔵経本とも系統を異にする本文と特色を有しており、版本成立以前の形態を留めていることが推察されるが、この両巻の形態もやはり二巻本であり、現存する遺例からは一卷本の存在を端倪することは叶わない。

更に『開元録』<sup>(4)</sup>、『開元釈教録略出』<sup>(5)</sup>、円照（一八〇〇）『貞元新定釈教目録』<sup>(6)</sup>、安然（八四一）『諸阿闍梨真言密教部類総録』<sup>(7)</sup>、永超（二〇一四—一〇九五）『東域伝燈目錄』<sup>(8)</sup>、宗曉（一一五一—一二二四）『樂邦文類』<sup>(9)</sup>「大蔵專談浄土經論目錄」<sup>(9)</sup>等の経録・将来目錄、並びに可洪（一九三二—一九四〇）『新集蔵経音義随函録』<sup>(10)</sup>の記載等、何れもが本書の形態を二巻本とし、一卷本の存在は看取されなかった。取り分け『集諸経礼懺儀』の撰者である智昇自身の手になる『開元録』に「二巻」と記されることは動かし難く、この点からも高瀬の後人修訂説は妥当性を欠くものと言える。なお高瀬承厳は跋文の存在より巻上完結とされ、それが後人修訂説の前提となっているが、その跋文は智昇の手によるものではない。これについては次節で詳述する。

以上「『集諸経礼懺儀』巻下は何故『往生礼讃偈』なのか」という問いは、「智昇は何故『往生礼讃偈』を『集諸経礼懺儀』巻下に収録したのか」と換言されるべきものであり、両書の関係の考察においては、後人による改編の可能性を排除し、智昇の意図を問うていく方向で進められなければならない。



## 第二節 『集諸経礼懺儀』卷上と『往生礼讃偈』の関係

それでは何故、智昇は『往生礼讃偈』を全文卷下に収録したのであろうか。その意図は、まず自著とされる卷上の撰述意図を明らかにし、智昇の志向する所と『往生礼讃偈』の関係を問うことによつて推察が可能になると予想される。そこでまず卷上の撰述意図を考察していきたい。

高瀬承厳が智昇の述懐とされた跋文は、卷上撰述の意図に關説するものとして注目されるが、その直前には、

上來布置礼仏綱軌次第多少、悉是故信行禪師依經自行。此法於今徒衆亦常相續依行不絕。但以現無正文流傳。恐欲學者無所依拠。是以故集此文流通於世。願後學者依文誦誦不增不減。

（『大正藏』四七、四六五下）

上來布置する礼仏の綱軌・次第の多少、悉く是れ故信行禪師、經に依り自ずから行ずるものなり。此の法、今の徒衆も亦常に相續し行ずるに依りて絶えず。但だ現に正文の流傳無きを以て、学ばんと欲する者の依拠する所無きことを恐る。是を以ての故に此の文を集め世に流通す。願わくは後に学ばん者の文に依りて誦誦し増さず減ぜざることを。

と、卷上に収集された礼仏の綱軌・次第が三階教の祖、信行（五四〇―五九四）により執行されたものである旨が述べられている。この記述の通り卷上には、

南無東方須弥燈光明如来十方仏等一切諸仏（第一階仏）

南無毘婆尸如来過去七仏等一切諸仏（第二階仏）

南無普光如来五十三仏等一切諸仏（第三階仏）

南無東方善徳如来十方仏等一切諸仏（第四階仏）

南無拘那提如来賢劫千仏等一切諸仏（第五階仏）

南無釈迦牟尼如来三十五仏等一切諸仏（第六階仏）

南無東方阿閼如来十方無量仏等一切諸仏（第七階仏）

（『大正蔵』四七、四五六中下）

已上七階。依藥王藥上經文次第。

（『大正蔵』四七、四六四中）

初夜半夜後夜午時平明日没唱靜。六時礼拝仏法大綱。昼三夜三各嚴持香華、入塔觀像默供養行道礼仏。平明及與午時、並別唱五十三仏。

餘皆総唱。日暮初夜、並別唱三十五仏。餘皆総唱。半夜「後夜」<sup>(1)</sup>、並別唱二十五仏。餘皆総唱。觀此七階<sup>(1)</sup>、如在目前。

（『大正蔵』四七、四六五下）

等、礼懺の対象として七階仏が説かれており、また矢吹慶輝<sup>(12)</sup>や廣川堯敏<sup>(13)</sup>により復元された三階教徒の礼仏行儀である「七階礼懺（七階仏名）」と同様の内容・構成が伺え、本書が三階教に関する礼懺儀礼であることは明白である。

では「集諸経礼懺儀 卷上」「大唐西崇福寺沙門智昇撰」の首題・撰号は、徒衆に行ぜられることにより伝承された三階教の礼懺文を智昇が集成、成文化したことを意味するものであろうか。

周知の通り三階教は『開元録』撰述に先立つこと五年の開元一三年（七二五）、玄宗により禁圧されており<sup>(14)</sup>、智昇も信行の著述三五部四四卷を『開元録』卷一八「偽妄乱真録」に類別し、

信行所撰、雖引经文、皆黨其偏見妄生穿鑿。既乖反聖旨、復冒真宗。

（『大正蔵』五五、六七九上）

信行撰する所、经文を引くと雖も、皆それ偏見を党とし、妄りに穿鑿を生ず。既に聖旨に乖反し、復た真宗を冒す

と難じている。そこから伺える智昇の三階教観は、上述の跋文にみられる信行に対する信仰・崇拝とは明らかに乖離するものである。

西本照真は、信行没後から開元一三年の玄宗による禁庄までの期間（五九四―七二五）を、三階教の展開期として位置付けられており、この期間の特徴として没後の弟子による信行の神格化を挙げられている。<sup>13</sup> その具体的内容は、信行の説いた教えとしての『三階集録』の聖典化、信行の行っていた実践と同行為（無尽蔵院の活動、捨身供養、信行の墓所への遺骨の埋葬）の推奨であるが、上述の「上來布置する礼仏の綱軌次第の多少、悉く是れ故信行禪師、経に依り自ずから行ずるものなり（中略）此の文を集め世に流通す」との記述は、正に同行の推奨、並びに聖典化に他ならず、没後の弟子による信行の神格化という活動を如実に表象する一文として読解されるべきものである。

つまり、上述の跋文は智昇の手によるものではなく、三階教徒によって記されたものであり、そこからは信行没後（五九四―）、三階教の徒衆が集成、成文化した礼懺文（以下「七階礼懺儀」と仮称）を開元一八年（七三〇）までに智昇が巻上に収録したという本書成立の経緯が伺える。なお巻上には、

為天皇天后聖化無窮 敬礼常住三宝

（『大正蔵』四七、四五七下）

との表現がみられるが、皇帝・皇后の呼称が天皇・天后に改められたのは上元元年（六七四）、高宗、武則天の時であり、<sup>14</sup> この尊称から本書の成立年次を上元元年（六七四）以降、その下限は智昇による『開元録』への収録年次、開元一八年（七三〇）に限定することが可能である。

以上、跋文を読み解くことにより、巻上にみられる礼懺儀は、信行没後（五九四―）の三階教徒が集成、成文化した「七階礼懺儀」を、上元元年（六七四）以降、開元一八年（七三〇）までに智昇が収録したものと推定され、<sup>15</sup> 従来言われるように、巻上にみられる礼懺文の集成を智昇の手によるものとするのは、巻末「是以故集此文流通於世」の「集」の主体と撰号「大唐西崇福寺沙門智昇撰」の「撰」の主体を同列に捉え、同一人物の手によるとする誤認を犯すものと言える。巻下に収録される『往生礼讃偈』が「善導集記」であること同様、巻上に収録される「七階礼懺儀」は三階教徒某の集記と考えられ、これら二つの文献を『集諸経礼懺儀』という概念にて撰集したのが智昇であり、撰号「智昇撰」はこの意味において捉えられるべきである。

つまり『集諸経礼懺儀』とは、卷上・卷下、各個にその内容を論ずる時は、何れも智昇の自撰とは言えず、卷上は三階教の礼懺儀、卷下は浄土教の礼懺儀として捉えられるべきものであり、両書の関係は決して一方が他方の附加物として捉えられるものではなく、本来別個の文献として認識されるべきものである。なお、そうであるならば、当然卷上にも卷下の「往生礼讃偈 比丘善導集記」同様、本来の主題、撰号が附されるべきであるが、それがみられないのは三階教勅禁に対する智昇の配慮であると推測される。従来の誤認はこの配慮を汲まず、智昇の他の著述と対照することなく撰号「大唐西崇福寺沙門智昇撰」、並びに跋文を表層的に読解したことに由来するものと言えよう。

### 第三節 『集諸経礼懺儀』撰集、入蔵の意図

智昇の自撰と目されてきた『集諸経礼懺儀』卷上を、三階教徒による撰集を収録したものと捉え直すことにより、従来不明瞭であった卷上と卷下の関係が、内容上は独立した個別の文献として捉えられるべきものであることが明らかとなった。これにより「智昇は何故『往生礼讃偈』を『集諸経礼懺儀』卷下に収録したのか」という設問は、高瀬承厳に代表される従来の認識「智昇は自撰『集諸経礼懺儀』卷上に何故善導『往生礼讃偈』を卷下として附加したのか」と卷上を主、卷下を従として解されるものではなく、「智昇は何故「七階礼懺儀」と『往生礼讃偈』を『集諸経礼懺儀』の名の下に撰集したのか」と改めて問われるべきものである。

ただし『集諸経礼懺儀』には、智昇の手による序跋も附されず、その撰集の意図は直截的に語られてはいない。そうであるならば、先ず卷上・下に収録される両文献の共通項を検出し、両者に通底する思想を抽出することによって智昇撰述の意図を探るのが定石であろう。しかし両者は、三階教と浄土教という異なる思想・信仰集団における儀礼テキストであり、表層的には構成・表現等、同時代における儀礼の共通様式が伺えるが、そこから通底する教義・思想は見出し難い<sup>18)</sup>。むしろ、両者を包括する『集諸経礼懺儀』という題号より逆照射するならば、その眼目は教義・思想ではなく、正に「諸経の礼懺儀を集す」という形式にこそあり、その故、

【巻上】上來布置礼仏綱軌次第多少、悉是故信行禪師依経自行（中略）集此文流通於世。

（『大正藏』四七、四六五下）

上來布置する礼仏の綱軌次第の多少、悉く是れ故信行禪師、経に依り自ずから行するものなり（中略）此の文を集め世に流通す

【巻下】謹依大乘経、及龍樹天親此土沙門等、所造往生礼讃、集在一処分作六時。

（『大正藏』四七、四六六上）

謹んで大乘経、及び龍樹、天親、此土の沙門等所造の往生礼讃に依りて、一処に集在し、分ちて六時を作す。

と三階教・浄土教と教義は異なれど、共に礼懺儀を集成するものとして、両者を『集諸経礼懺儀』の名で収録したものと推測される。それでは何故、智昇は礼懺儀を集成したのであろうか。『開元録』巻九には智昇の著述として、

開元釈教録二十卷 上帙総録下帙別録 十八年庚午於西崇福寺東塔院撰

統、大唐内典録一卷 同前十八年撰

統、古今訳経図紀一卷 同前十八年撰

統、集古今仏道論衡一卷 同前

集諸経礼懺儀二卷 同前

（大正藏五五、五七二上中）

と本書の外に、『開元録』、『統大唐内典録』、『統古今訳経図紀』等の経録や仏・道の論争に関する記録である『統集古今仏道論衡』が載録される。これらは「統」と冠せられている通り、南山律師道宣（五九六―六七七）『大唐内典録』、『集古今仏道論衡』、靖邁（一六五〇―）『古今訳経図紀』を範とし、跡を継ぎ補ったものであることは言うまでもない。この「統」の字は歴史の記録という行為が先を温ね、それを筆削し、後世の事象を附加していくものであることを端的に物語ると共に、これらの著述が、仏教史書の系譜に位置付けられるものであることを表わしており、智昇が『開元録』、『統大唐内典録』、『統古今訳経図紀』の経録を何れも開元一八年撰とするのは、この年を一つの結

節点とみなそうとする史家としての視点の表出と考えられる。

このように智昇を仏教史家として規定した上で、改めて『集諸經礼懺儀』撰集の意図を問い直したい。本書は上述の通り、三階教・浄土教と、その思想基盤を異にする別個の礼懺儀を上下巻に収録したものであり、両者に通底する教義、信仰は見出し難い。このような本書の文献的性格と智昇の仏教史家としての側面を勘案するならば、その撰集意図は教学の構築、自身の思想、信仰の表明といった所にはなく、長安を中心に盛行していた六時の礼懺儀を収録する、という長安仏教の記録にあったと推測される<sup>(20)</sup>。

『続高僧伝』巻一六「信行伝」には、化度(真寂寺)・光明・慈門・慧日・弘善の所謂三階五寺を中心に六時礼旋、乞食等を行っていたことが記されており、<sup>(21)</sup> 教義的に修行の場を聚落とする三階教は信行没後も長安を中心に展開していくこととなる<sup>(22)</sup>。

一方『続高僧伝』「善導伝」にも、長安における善導の宣教の盛んな様子が伺え、<sup>(23)</sup> 『宋高僧伝』道一伝にはその葬儀の盛んな様が伝えられており、<sup>(24)</sup> また弟子の懷感(千福寺)、懷惲(實際寺)も長安で活動している。これらのことから両者の礼懺儀礼は共に長安を中心に盛行したものであることが推測される。

道宣が僧祐(四四五—五一八)撰の『出三藏記集』・『弘明集』・『釈迦譜』を承け、『大唐内典録』・『広弘明集』・『釈迦方志』を記したのと同様、智昇は道宣撰『大唐内典録』・『集古今仏道論衡』を承け、『続大唐内典録』・『開元録』・『続集古今仏道論衡』を記しているが、宋元照撰「南山律師撰集録」(『芝苑遺編』巻下)には、道宣の著述として「礼敬行儀部四件合六卷」を載録し、そこには、

六時礼仏懺悔儀 一卷 或云六時礼文 顯慶四年(六五九)製 見行

集仏經六時行道儀 一卷 見行

(『出三藏記集』二、一〇下)

と六時の礼仏に関する著述がみられる。これらは現存せず、実際に道宣の著述か否かを確認することは叶わないが、これらの著述の存在が『集諸經礼懺儀』撰述の直接の契機になった可能性を指摘しておきたい。

【僧祐・靖邁・道宣と智昇における著述の影響関係】

靖邁  
(一六五〇)

智昇  
(一七三〇—)

『古今訳経図紀』

『続古今訳経図紀』

僧祐  
(四四五—五一八)

道宣  
(五九六—六六七)

『出三藏記集』

『大唐內典錄』

『続大唐内典録』

『弘明集』

『弘明集』

『釈迦譜』

『釈迦方志』

『集古今仏道論衡』

『続集古今仏道論衡』

『六時礼仏懺悔儀』

『集仙經六時行道儀』

『集諸經礼懺儀』

▼『開元釈教録』

第四節 『集諸經礼懺儀』入蔵の可否

以上、智昇撰『集諸經礼懺儀』卷下に、善導集記『往生礼讃偈』が収録される理由を問い、従来、智昇の自撰とされてきた『集諸經礼懺儀』卷上の成立次第を考察することで、本書が卷上・下、何れも他者の著述を収録したものであることを明らかにした。その上で、智昇による他

の撰述の傾向と系譜を踏まえると共に、『開元録』『入藏録』における「賢聖集（此方撰集）」の載録基準が、事実の記録にあることを勘案すること、本書の撰集意図が、当時長安で盛行していた礼懺儀の記録にあり、その直接の契機として道宣の『六時礼懺懺悔儀』一卷、『集仏經六時行道儀』一卷の存在を指摘した。

記録が後世への伝達を前提とした行為であることを考慮するならば、智昇による本書の入蔵は当然の帰結と言えるが、自身が「偽妄乱真録」に類別し難じた三階教典籍を、自著に収録し入蔵することはあり得るのであるか。今一度『開元録』卷一八「偽妄乱真録」を伺うと、

（前略）

廣七階仏名一卷 觀藥王藥上菩薩經仏名一卷

略七階仏名一卷 已上三階法等。於中多題人集録字。其廣題目具如脚注

右三階法及雜集録。総三十五部四十四卷。隋真寂寺沙門信行撰

信行所撰雖引經文皆黨其偏見妄生穿鑿。既乖反聖旨復冒真宗。開皇二十年有勅禁斷不聽伝行。而其徒既衆蔓延弥廣。同習相黨朋援繁多。即以信行為教主別行異法似同天授立邪三宝。隋文雖斷流行不能杜其根本。我唐天后證聖之元有制令定偽經及雜符録。遣送祠部集内。前件教門既違背仏意別称異端。即是偽雜符録之限。又准天后聖曆二年勅。其有学三階者唯得乞食。長齋絶穀持戒坐禪。此外輒行皆是違法逮。我開元神武皇帝。聖德光被普洽黎元。聖日麗天無幽不燭。知彼反真構妄出制斷之。開元十三年乙丑歲六月三日。勅諸寺三階院並令除去隔障。使與大院相通衆僧錯居不得別住。所行集録悉禁斷除毀。若綱維縱其行化誘人。而不糺者勒還俗。幸承明旨使革往非。不敢妄編在於正録。並從刊削以示將來。<sup>②</sup>

其廣略七階但依經集出雖無異義即是信行集録之數明制除廢不敢輒存故載斯録。<sup>③</sup>

（『大正藏』五五、六七八下—六七九上）

と、確かに信行の著述三五部四四卷の末尾に、三階教徒の礼懺儀である『広七階仏名』一卷、『略七階仏名』一卷を偽妄乱真として載録して



いる。そこでは続いて信行の所撰に対し、

【傍線①】 信行所撰雖引经文皆黨其偏見妄生穿鑿。既乖反聖旨復冒真宗。

(『大正藏』五五、六七九上)

信行撰する所、经文を引くと雖も皆それ偏見を党とし妄りに穿鑿を生ず。既に聖旨に乖反し復た真宗を冒す。

と批判し、開皇二〇年(六〇〇)、証聖元年(六九五)、聖曆二年(六九九)、開元一三年(七二五)の勅禁に言及した後、

【傍線②】 幸承明旨使革往非。不敢妄編在於正録。並從刊削以示将来。

(『大正藏』五五、六七九上)

幸いにも明旨を承け、往非を革ましむ。敢えて妄りに正録に編在せず。並びに刊より削り、以て将来に示さん。

と結んでいる。この一文は『大周刊定衆経目録』卷一五「偽経目録」からの転載であるが、その直後には『大周刊定衆経目録』に認められない、智昇による註記が附されている。

【傍線③】 其廣略七階但依経集出。雖無異義即是信行集録之数。明制除廢。不敢輒存。故載斯録。

(『大正藏』五五、六七九上)

其れ『広・略七階』は但だ経に依り集出す。異義無きと雖も即ち是れ信行集録の数なり。明制、除廢す。敢へて輒わち存せず。故に斯の録に載す。

この註記によれば「『広七階仏名』、『略七階仏名』は经文の抄出であり異義は無いが、信行の著述は何れも勅禁されている為、「偽妄乱真録」に載せる」とされ、ここからは逆説的に三階教の礼懺儀『広七階仏名』『略七階仏名』はその内容より「偽妄乱真録」に類するものではないとする智昇の見解が伺え、三階教典籍入蔵の可能性が垣間見られる。なおこの記述より、智昇が『広七階仏名』、『略七階仏名』の内容を存知していたことが伺え、その内容上『集諸経礼懺儀』卷上と両書が何等かの関連を有することが推測される。

## おわりに

以上、『集諸経礼懺儀』の重層構造を解明し、智昇による撰述意図を汲むことにより『集諸経礼懺儀』巻下に収録された善導『往生礼讃偈』は智昇の恣意的編纂、附加等がなされたとは考え難く、開元一八年（七三〇）当時の長安において盛行した六時儀礼の記録として捉えられるものであり、巻下のみを独立した文献として読解することが不当でないことを明らかにした。

最後に智昇による本書入蔵の研究上の意義を述べ結びとしたい。時処所縁により行ぜられる礼懺文献は、教義書に比し流動的であり、それは敦煌出土の礼懺文献のヴァリエーションの豊富さが実証している。このような文献的性格から儀礼テキストの流伝、変遷を辿ることは困難であるが、本書は入蔵に伴い大蔵経の一部として書写功德の対象という別の属性を帯びることとなる。『往生礼讃偈』を例とすれば、儀礼テキストとして執行され、法照（七四六―八三八）『五会念仏法事讚』<sup>(25)</sup>において編集される等、多くの別行本を派生するという動的流伝を辿る一方で、大蔵経という一字一句疎かにすることの許されない書写テキストの一つとして静的な流伝を辿ることとなる。前者に比し後者はより本文の振れ幅が小さいことが予想される。

幸いにも日本には唐代仏教を反映する奈良朝写経、またその系譜に連なる平安・鎌倉写経が多く現存しており、まずこの静的流伝から唐代の礼懺テキストを遡求し、そこを基点として実際に執行されたものと想定される敦煌出土の礼懺文献と比較することで動的流伝の展開を探る。儀礼テキストの流伝、変遷を辿るのが至難な中で、智昇による本書の入蔵はこのような敦煌遺書と日本に伝存する古写経を関連させる方法論を可能にするものであり、長安を中心とする唐代仏教儀礼の東アジアにおける展開を考察する上で恰好の一事例を提供するものと言える。

註

- 1 大正蔵本『大正蔵』四七、四六六上)では、  
集諸經禮懺儀卷下

大唐西崇福寺沙門智昇撰

比丘善導集記

往生禮讚偈一卷勸一切衆生願生西方極樂

世界阿彌陀佛國 六時禮讚偈 謹依大乘

と、本来首題である「往生禮讚偈一卷」が本文中に組み込まれているが、ここでは高麗再雕版本『高麗大蔵經』三三、七五三頁中段)により訂正する。

- 2 それぞれ以下の資料により確認した。東禪寺版本…『醍醐寺蔵宋版一切經目錄』(汲古書院、二〇一五)。開元寺版本…『宋版一切經目錄』(神奈川県立金沢文庫編、一九九七)。思溪版本、普寧寺版本…増上寺史料編纂所編『増上寺三大蔵經目錄』(大本山増上寺、一九八二)。磧砂版本…延聖院大蔵經局編『宋版磧砂大蔵經』第三一冊(新文豊出版、一九八七)。金版本…中華大蔵經編輯局編『中華大蔵經(漢文部分)』六三(中華書局、一九八三)。洪武南蔵本…『洪武南蔵』一七三(四川省佛教協會、一九九九)。高麗初雕本…『域外漢籍珍本文庫』編纂出版委員會編『高麗大蔵經初刻本輯刊』七五(西南師範大学出版社、二〇一二)。高麗再雕版本…『高麗大蔵經』第三三(東国大学校、一九七五)。永樂北蔵本…『永樂北蔵』整理委員會編『永樂北蔵』一五二冊(永樂北蔵本は四卷とするが、これは卷上下をそれぞれ二卷に分卷したものである)。

- 3 開宝蔵によつたとされる惟白編『大蔵經綱目指要録』(崇寧三年(一一〇四)成立)卷八にも「禮懺儀」二卷 上 即一切恭敬等文。則今之天下比丘為作佛事儀也。  
下 往生禮讚偈。則六時佛事三業清淨進修淨土天宮之法門也」(『昭和法寶總目錄』卷一、七六八下)と記されており、開宝蔵本も二卷本であり卷下が『往生禮讚偈』であつたと推定される。

- 4 『大正蔵』五五、五七二中、六二五上、六七一中、六九七下。方廣鎬氏『開元録・入蔵録』復原擬目」も二卷とする(方廣鎬『中国写本大蔵經研究』、六四〇頁)。  
5 『大正蔵』五五、七四六中。  
6 『大正蔵』五五、八七九上、九五九上、一〇四六上。  
7 『大正蔵』五五、一一二九中。

- 8 『大正蔵』五五、一一五五下。
  - 9 『大正蔵』四七、一五一中。
  - 10 『高麗大蔵經』三五、七一九頁。
  - 11 大正蔵本では「後夜」を欠く。同文である斯二五七四（「昼夜六時懺悔發願法」）、伯二八四九（『制法』）により補う。
  - 12 『三階教之研究』、第二部、第四章、第四節「七階礼懺」参照。
  - 13 「敦煌出土七階仏名經について―三階教と浄土教との交渉―」参照。
  - 14 「開元十三年乙丑歲六月三日。勅諸寺三階院。並令除去隔障使與大院相通衆僧錯居不得別住。所行集録悉禁斷除毀。若綱維縱其行化誘人而不礼者勒還俗」
  - 15 （『開元録』卷一八。『大正蔵』五五、六七九上）
  - 16 『三階教の研究』、第二章、第二節「三階教の展開」参照。
  - 17 「上元元年八月壬辰、皇帝號天皇、皇后號天后」『新唐書』本紀第四「則天皇后」四三頁（中華書局、一九九七）。
  - 18 ただし巻上には信行（五四〇―五九四）が執行することの適わない善導（六一三―六八一）「日中礼讃」が収録されており、三階教徒により集成、成文化され没後八〇年以上を経て収録された礼懺文が既に信行自行のものから変遷していると考えられることは留意しておかねばならない。
  - 19 矢吹慶輝『三階教之研究』、五三二頁。廣川堯敏「敦煌出土七階仏名經について―三階教と浄土教との交渉―」（『宗教研究』五五―四、一九八二）。宮井里佳「善導浄土教の成立についての試論―『往生礼讃』をめぐる―」（『荒牧典俊編著『北朝隋唐中国仏教思想史』法蔵館、二〇〇〇）。柴田泰山「三階教文献と善導」（『東アジア仏教研究』六、二〇〇八。後『善導教学の研究』第二卷〈法蔵館、二〇一六〉収録）参照。
- 懺悔という点に着目するならば、両者は共に惡世界・惡時・惡衆生という情勢認識を有するものと言い得るが、西本照真は「二見すると劣機という点で共通しているように見える両者の機根認識も、実は教法の判別能力の欠如であるか、実践能力の欠如であるかという点で機根認識の質を異にしているといえる。そして、機根認識の相違が、実践すべき仏法としては、三階教の用語を借りれば普法と別法という形に分岐していったといえよう」（『三階教の研究』、一四〇頁）と指摘されている。

- 20 岡部和雄「経録における賢聖集伝の地位」『鈴木学術財団研究年報』一一、一九七四）では『開元録』『賢聖集伝（此方撰述）』所収の四〇部三六八巻を纂集類・目録類・音義類・史伝類・護教類・啓蒙類に分類され、「史伝、地誌、目録、音義などを含むいわば「事実の記録」が尊重されているといつてよい」（五二頁）とその性格を分析されている。なお落合俊典「智昇の『開元録』編纂と『集諸経礼懺儀』の入蔵」（国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀 卷下』、二〇一〇）では『集諸経礼懺儀』だけは「事実の記録」ではないし、むしろ諸宗部の典籍に近いものである。（中略）到底「事実の記録」を示した書ではない。もし存在理由があるとするならば、それは唯一智昇の撰述だからということではないだろうか。つまり公正な判断基準から言えば本書の入蔵は私的感情が入った偏向性がみられるということである」（三四七頁）と本書を事実の記録とみなされず、その入蔵理由を私的感情とされている。
- 21 『大正蔵』五〇、五六〇上。
- 22 西本照真『三階教の研究』一二九・一三〇、三〇九—三一一頁参照。
- 23 『大正蔵』五〇、六八四上。
- 24 『大正蔵』五〇、七六六中。
- 25 塚本善隆『唐中期の浄土教—法照の研究—』（東方文化研究所京都、一九三三。後に『中国浄土教史研究』塚本善隆著作集第四巻、大東出版社、一九七六）、齊藤隆信『中国浄土教儀礼の研究—善導と法照の讃偈の律動を中心として—』（法蔵館、二〇一五）参照。

## 第二章 七寺蔵 七寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下攷——附 開宝蔵本の復元——

はじめに

名古屋市中区大須、稲園山七寺（正覺院長福寺）に所蔵される一切経<sup>(1)</sup>（以下、七寺一切経）は、尾張国の在地官人、大中臣安長と女弟子民氏の発願によるもので、勸進僧栄芸と大法師栄俊を中心として、筆者六五名、校合者五六名の総計九〇名（筆者・校合を兼ねる者あり）の関与が経卷の奥書より確認される。書写年次は院政期の承安五年（一一七五）から治承二年（一一七八）であり、黒漆塗唐櫃三二合（後補一合）に納められ伝存している。その唐櫃外蓋裏に記される朱漆書の起請文には、<sup>(2)</sup>

勸請 鎮守十五所権現大明神御宝前

謹請 一切経安置間五箇条起請状

一、後々将来、寺家不集来者、独竊不可開唐櫃事

一、後々将来、雖強縁昵人、不可奉借出他圀他境事

一、後々将来、於圀中、雖為書写奉請、一度一合外、不可奉借出多合事

一、後々将来、寺中居住僧、炎天比一年一度、可奉干施事

一、後々将来、寺中僧、依他人語竊不可借出事

右事為躰、雖似邪見、夫以世間作法或為火難、或鼠敵或為盜失、其恐尤以切也（中略）

治承二年戊戌八月 願主惣大判官代散位大中臣安長女弟子民氏

勸進僧 栄 芸

大法師 栄 俊

と本一切経の扱いが誓われているが、そこからは借出しの際の散逸に対する危惧が色濃く伺える。このような護持の願いの為か、四九五四卷（卷子本三三九八卷。折本一五五六帖、補写本一九卷を含む）が現存しており、散逸は比較的少ない。

本一切経は、平安・鎌倉期の一切経書写に際し台帳とされた唐、西明寺沙門円照撰『貞元新定积教目錄』卷二九・三〇「入藏録」に基づく一切経の概念範疇から逸脱する経典<sup>(3)</sup>（疑経）を含むものであり、また北宋勅版（開宝藏）の刊記を転写している経典<sup>(4)</sup>（『阿難陀目佉尼呵離陀隣尼經』、『出三藏記集』卷一一・一二、『統集古今仏道論衡』、『集諸経礼懺儀』卷上、『仏説大乘聖無量寿王経』）もみられる等、質量共に注目されるものであり、本章の考察対象である『集諸経礼懺儀』卷下（以下、七寺本）もその一切経の一部として書写され、安元三年（一一七七）の書写奥書を有している。

本章では書誌情報を略述し、現存諸本と比較することで、本書の系譜を版本大藏経の嚆矢であり、北宋勅版である開宝藏本の転写本であると比定し、その本文を影印・翻刻により紹介する。その上で附章として、同じく開宝藏本の系譜に連なる高麗版初雕本<sup>(5)</sup>・再雕本<sup>(6)</sup>、金藏本と校合することにより、既に散逸した祖本である開宝藏本本文の復元を試み、従来不明であった開宝藏本系統に分類される諸藏本の異同を明らかにする。

## 第一節 書誌情報

名古屋市中区大須、稲園山七寺（正覚院長福寺）所蔵の写本。紙本墨書。

**装訂** 卷子本一卷

**軸** なし<sup>(8)</sup>

**料紙** 楮紙打紙（黄檗染）

**界線** 天地朱界縦墨界

完本全二九紙 一紙二六行 一行一七字前後（長行部）

**法量** 〈表紙〉 紙高二七・〇cm 紙幅二二・七cm

〈第二紙〉 紙高二七・〇cm 紙幅四九・六cm

界高二〇・六cm 界幅 二・〇cm

外題 「集諸経礼懺儀卷下」 (銀字打附書)

内題 「集諸経礼懺儀卷下」

尾題 「集諸経礼懺儀卷下」

奥書 「安元三年四月一日午時許書写畢 筆師持門房」  
(本文別筆) 「一交了 榮藝」

奥書により書写年次は安元三年(一一七七)。書写者の持門房については未詳であるが、安元二年(一一七六)九月に『摩訶般若波羅蜜多經』卷三三、同十月に同経卷三一、同十二月に『大方等大集菩薩念仏三昧經』卷一〇を書写していることが当該經典の奥書から判明する。本書名は一切経納入の唐櫃内蓋に記される経卷目録にも「□諸経礼懺儀」と確認される。

本書には訓点・博士等は附されておらず、その形態上より実際の行儀に用いられた形跡は見出せない。なお同経卷上(書写奥書「安元参年四月廿六日書写畢 如城房」(本文別筆)「一交了 榮藝」)尾題下には「大宋太平興二年マ歲マ／奉勅雕造太平興國／八年奉勅印」と北宋勅版(開宝蔵)の刊記が転写されている(後掲)。

## 第二節 系譜

本書以外に、日本に現存する『集諸経礼懺儀』卷下の古写本としては、

京都 檀王法林寺所蔵本	院政期写	中尊寺一切経 <small>(清衡経)</small> 本 <sup>9)</sup>
京都 妙蓮寺所蔵本	院政期写	松尾社一切経本 <sup>10)</sup>
京都 興聖寺所蔵本	院政期写	興聖寺一切経本 <sup>11)</sup>
大阪 金剛寺所蔵本	鎌倉初中期写	金剛寺一切経本 <sup>12)</sup>



が知られるが<sup>(13)</sup>、これら諸本の本文系統は檀王法林寺本・金剛寺本<sup>(14)</sup>と、七寺本・興聖寺本・妙蓮寺本<sup>(15)</sup>の二系統に大別される。それでは七寺本を含む後者は、如何なる系譜に連なるものであろうか。

後掲資料「諸本校異一覽」によれば、七寺本は高麗初雕本、金藏本との一致が目立つ。竺沙雅章による版本大藏經の三分類の提唱<sup>(16)</sup>により、版本諸藏の系譜的把握が可能となったが、その内、高麗初雕本・金藏本は第一類藏經（開宝藏系統）に類別されるものであり、七寺本も本系統に位置することが予想される。

#### 【竺沙雅章による版本大藏經の三分類】

##### 第一類（開宝藏、金藏、高麗藏（初雕版、再雕版））

版式 每版二三行、一行一四字詰。

經卷の形態 卷子。

千字文帙号 『開元釈教録略出』より一字繰り上げ。

##### 第二類（契丹藏、房山石經（遼金刻經））

版式 每版二七―二八行、一行一七字詰。

經卷の形態 卷子。

千字文帙号 『開元釈教録略出』より一字下がる。

##### 第三類（福州版、思溪版、磧砂版、普寧藏等）

版式 每版三〇行、一行一七字詰。

經卷の形態 折帖。

千字文帙号 『開元釈教録略出』と合致。

ただしこの分類は、版式・経卷の形態（卷子・折帖）・千字文番号といった形態によるものであり、類別された第一類・第二類・第三類内における各蔵経の関係・異同については、具体的に個別経典を取り上げ、本文比較による検証が必要である。

従来、第一類に類別される諸蔵経の内、高麗再雕版は『高麗大蔵経』（東国大学校、一九五七—一九七六）として、また金蔵は『中華大蔵経（漢文部分）』（中華書局、一九八四—一九九六）の主たる底本として公刊されているが、高麗初雕版に関しては、末松保和氏による南禅寺大蔵経の調査<sup>(17)</sup>や、『湖林博物館所蔵 初雕大蔵経調査報告』<sup>(18)</sup>等の調査報告のみであり、テキストとしての公刊はなされていなかった。のみならず、これらの祖本とされる開宝蔵本の現存点数は、極めて僅かな為、第一類蔵経内の具体的な本文異同、相関関係等は検討不能であった。唯一、再雕版の開版に際しては、守其等撰『高麗国新雕大蔵校正別録』（以下『校正別録』。『高麗大蔵経』第三八冊〈東国大学校〉所収）により、校正の実情が伺えるが、そこには六二部七四卷分を録するのみであり、全ての経典に対する校訂のあり方を知ることが叶わず、本章の考察対象である『集諸経礼懺儀』も残念ながら『校正別録』にその名は見られない。

このような第一類蔵経を巡るテキスト環境の中、近年（二〇一〇）の高麗大蔵経研究所による高麗初雕版の集成・公開<sup>(20)</sup>、及び影印の刊行<sup>(21)</sup>は、開宝蔵の流伝を考察する上で極めて有用な成果であり、従来不明瞭であった第一類内における各蔵経本の相関関係の具体的検討を可能にするものと言える。それでは実際に七寺本は第一類（開宝蔵・高麗蔵初雕版・高麗蔵再雕版・金蔵）の内、何れの転写本であろうか。本節では現存する高麗初雕本・高麗再雕本・金蔵本と七寺本を対照することにより、その系譜を比定したい。

上述の第一類の内、現存する高麗初雕本・高麗再雕本・金蔵本の影印を比較対照した後掲資料「再雕本・初雕本・金蔵本 三本対照」における注目すべき相違箇所として第一一張が指摘できる。

【第一張】

至心懺悔

南無歸懺十方佛 願滅一切諸罪根  
今將久近所修善 迴作自他安樂因  
恒願一切臨終時 勝緣勝境悉現前  
願觀彌陀大悲主 觀音勢至十方尊  
仰惟神光蒙授手 乘佛願力生彼國  
懺悔迴向發願已 至心歸命阿彌陀佛  
次作梵 說偈發願 出寶性論  
禮懺諸功德 布施諸有情 願臨命終時  
見无量壽佛 無邊功德身 我及餘信者  
既見彼佛已 願得離垢眼 往生安樂國  
成無上菩提

懺已一切恭敬

歸佛得菩提 道心恒不退 歸法薩婆若  
得大懺持門 歸僧息諍論 同入和合海  
迴願往生 无量壽國 願諸衆生  
三業清淨 奉持佛教 和南一切賢聖  
迴願往生 無量壽國 諸衆等聽說  
黃昏偈

人間忿忿營衆務 不覺年命日夜去  
如燈風中滅難期 忙忙六道无定趣  
未得解脫出苦海 云何安然不驚懼  
各聞強健有力時 自策自勵求常住  
說此偈已更當心口發願願弟子臨

集諸經札懺儀卷下 黃土強 黃

命懺悔

南無歸懺十方佛 願滅一切諸罪根  
今將久近所修善 迴作自他安樂因  
恒願一切臨終時 勝緣勝境悉現前  
願觀彌陀大悲主 觀音勢至十方尊  
仰惟神光蒙授手 乘佛願力生彼國  
懺悔迴向發願已 至心歸命阿彌陀佛  
次作梵 說偈發願 出寶性論  
禮懺諸功德 願臨命終時 見无量壽佛  
無邊功德身 我及餘信者 既見彼佛已  
願得離垢眼 往生安樂國 成無上菩提

禮懺已一切恭敬

歸佛得菩提 道心恒不退 歸法薩婆若  
得大懺持門 歸僧息諍論 同入和合海  
迴願往生 无量壽國 願諸衆生  
三業清淨 奉持佛教 和南一切賢聖  
迴願往生 無量壽國

人間忿忿營衆務 不覺年命日夜去  
如燈風中滅難期 忙忙六道无定趣  
未得解脫出苦海 云何安然不驚懼  
各聞強健有力時 自策自勵求常住  
說此偈已更當心口發願願弟子臨

命懺悔

南無歸懺十方佛 願滅一切諸罪根  
今將久近所修善 迴作自他安樂因  
恒願一切臨終時 勝緣勝境悉現前  
願觀彌陀大悲主 觀音勢至十方尊  
仰惟神光蒙授手 乘佛願力生彼國  
懺悔迴向發願已 至心歸命阿彌陀佛  
次作梵 說偈發願 出寶性論  
禮懺諸功德 布施諸有情 見无量壽佛  
無邊功德身 我及餘信者 既見彼佛已  
願得離垢眼 往生安樂國 成無上菩提

禮懺已一切恭敬

歸佛得菩提 道心恒不退 歸法薩婆若  
得大懺持門 歸僧息諍論 同入和合海  
迴願往生 无量壽國 願諸衆生  
三業清淨 奉持佛教 和南一切賢聖  
迴願往生 無量壽國 諸衆等聽說  
黃昏偈

人間忿忿營衆務 不覺年命日夜去  
如燈風中滅難期 忙忙六道无定趣  
未得解脫出苦海 云何安然不驚懼  
各聞強健有力時 自策自勵求常住  
說此偈已更當心口發願願弟子臨

対照の便宜上、七寺本（二〇八行、二二六行）の行取りを初雕本・再雕本・金蔵本の第一一張に対応させた（以下同。七寺本の行番号は後掲「七寺蔵 七寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下 影印・翻刻」による）。

【七寺本】

礼懺諸功德 願、臨、命、終、時、 見无量壽佛

【初雕本】

（中略）

迴願往生 無量壽國 「」

【金蔵本】

礼懺諸功德 布、施、諸、有、情、願、臨、命、終、時、 見无量壽佛

（中略）

迴願往生 無量壽國 諸、衆、等、聽、說、黃、昏、偈、

【再雕本】

礼懺諸功德 布、施、諸、有、情、願、臨、命、終、時、  
 見无量壽佛 无边功德身 我及余信者

（中略）

迴願往生 無量壽國 諸、衆、等、聽、說、  
 黃、昏、偈、

再雕本、金蔵本の当該箇所において、内容の異同は認められないが、金蔵本が「布施諸有情 願臨命終時」「諸衆等聴説黄昏偈」を細字双行で表記するのに対し、再雕本では通常表記と、その表記方法に相違が認められる。この相違により、再雕本第一一張の総行数は、本来、金蔵本に比し二分分増加した二五行となる筈であるが、金蔵本の一行目に相当する「命懺悔」を前張、第一〇張末尾に配している為、第一〇張二四行、第一一張二四行となっている（【初雕本・再雕本・金蔵本、每版行数一覧表】参照）。開宝蔵を祖本とする第一類蔵經の版式は、原則として每版二三行を踏襲しており、それを基準に考えるならば、上記箇所は再雕本よりも初雕本、金蔵本の方が祖形を留めていることが推測される。

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	張数
23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	22	初雕本
23	23	23	23	23	23	23	24	24	23	23	23	23	23	23	23	23	22	再雕本
23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	22	金蔵本

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	張数
22	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	初雕本
22	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	再雕本
22	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	金蔵本

【初雕本・再雕本・金蔵本、每版行数一覧表】

一方、共に二三行である初雕本、金蔵本の相違の内「布施諸有情」の有無に関して、その出拠（「出宝性論」）とされている『究竟一乗宝性論』には、

依此諸功德 願於命終時 見無量寿仏 無辺功德身  
 我及餘信者 既見彼仏已 願得離垢眼 成無上菩提

（『大正蔵』三二、八二〇下。八四八上）

と「布施諸有情」「往生安樂國」の句は認められない。この『宝性論』弥陀偈は、懺悔の後の發願として流布していたと考えられ、『法苑珠林』卷八六「洗懺部第六」十惡懺文（曇遷法師撰文）、

願於未來世 見無量寿仏 無辺功德身 我及餘信者  
 既見彼仏已 願得離垢眼 成無上菩提 普及於含識

（『大正蔵』五三、九一八下）

や長安弘法寺沙門釋玄奘纂『毘尼討要』卷下、

願於未來世 見無量寿仏 無辺功德身 我及餘信者  
 既見彼仏已 願得離垢眼 成無上菩提（此願出寶性論）

（『大正蔵』四四、三八一中）

にもみられるが、そこでも「布施諸有情」の一句は確認されない<sup>(2)</sup>。

金蔵本には「布施諸有情」の句が認められるが細字双行で表記されている。ただし「布施諸有情 願臨命終時」の二句は、内容から註記（割註）でないことは明らかであり、当該箇所が当初（祖本）から細字双行で表記されていたとは考え難い。初雕本に「布施諸有情」が認め

られないことを勘案するならば、本来「礼懺諸功德 願臨命終時 見無量寿仏」となっていた開宝蔵本の本文に、金蔵本が「布施諸有情」を補入した為、内容に関連しない不適切な細字双行表記が為されたものと推察される。

以上、上記箇所相違から判断するならば、「布施諸有情」の一句を含まない七寺本は、高麗初雕本、或いはその祖本である開宝蔵本の転写本と推察される。それでは七寺本は高麗初雕本、開宝蔵本の何れの転写本であろうか。開宝蔵の多くは既に散逸しており、七寺本を直接両者と対照し、その系譜を比定することは叶わない。ただし、七寺本と初雕本を対照した場合、以下の相違箇所は注目される。

第一二張（七寺本二二五行）

【初雕本】 【再雕本】 生阿弥陀仏国到彼国已得六神通廻 （二五字）

【七寺本】 【金蔵本】 生阿弥陀仏国到彼 已得六神通廻 （二四字）

第三三張（七寺本六九〇行）

【初雕本】 【再雕本】 時急走終是無益若不作者応知雖不 （二五字）

【七寺本】 【金蔵本】 時急走 是無益若不作者応知雖不 （二四字）

第三四張（七寺本七〇七行）

【初雕本】 【再雕本】 三聚戒十無盡戒乃至一切戒及一切 （二五字）

【七寺本】 【金蔵本】 三聚戒十無盡 乃至一切戒及一切 （二四字）

初雕本・再雕本では「国」「終」「戒」の字が認められるのに対し、七寺本・金蔵本では当該字は認められない。開宝蔵、並びにそれを踏襲する高麗蔵（初雕本・再雕本）・金蔵の第一類蔵経の版式は、一紙二三行、一行一四字詰を原則とするが、上記箇所の字数は【初雕本】

【再雕本】一五字、【金蔵本】一四字である。版式（二行一四字詰）より判断するならば【金蔵本】が祖型（開宝蔵本）を留めていると考えられ、開宝蔵本に認められない文字を【初雕本】が補刻し、【再雕本】がそれを踏襲したという変遷が推測される。

以上、上記の相違箇所より、七寺本の祖本は初雕本ではなく開宝蔵本であったことが判明する。開宝蔵は寛和二年（九八六）奄然により本朝に請来されており、七寺一切経の内『集諸経礼懺儀』卷上を含む五部六卷（上述、『阿難陀目佉尼呵離陀隣尼経』、『出三蔵記集』卷二・一二、『続集古今仏道論衡』、『集諸経礼懺儀』卷上、『仏説大乘聖無量寿王経』）には、尾題の下に開宝蔵本の刊記の転写が認められる。これら経巻の現存は、本書を開宝蔵本の転写本とみなすことの傍証となる。

【七寺一切経本『集諸経礼懺儀』 卷上末に認められる開宝蔵本刊記の転写】





## おわりに

以上、安元三年（一一七六）の書写奥書を有する七寺本を、諸本と比較することにより開宝蔵本の転写本と同定した。従来、開宝蔵本『集諸経礼懺儀』巻下の現存は確認されておらず、七寺本は転写本と雖も貴重な遺例と言える。開宝蔵本を祖本とする本書、並びに第一類（開宝蔵系統）へ類別される諸本の特性は以下の通り。

### 【七寺本】

**形式** 留めていない（二紙二六行、一行一七字詰前後。欠筆なし）。

**内容** 校勘は行われていないか。ただし誤写・脱文あり。

### 【再雕本】 【初雕本】 【金蔵本】

**形式** 留めている（一紙三行、一行一四字詰。欠筆あり）。

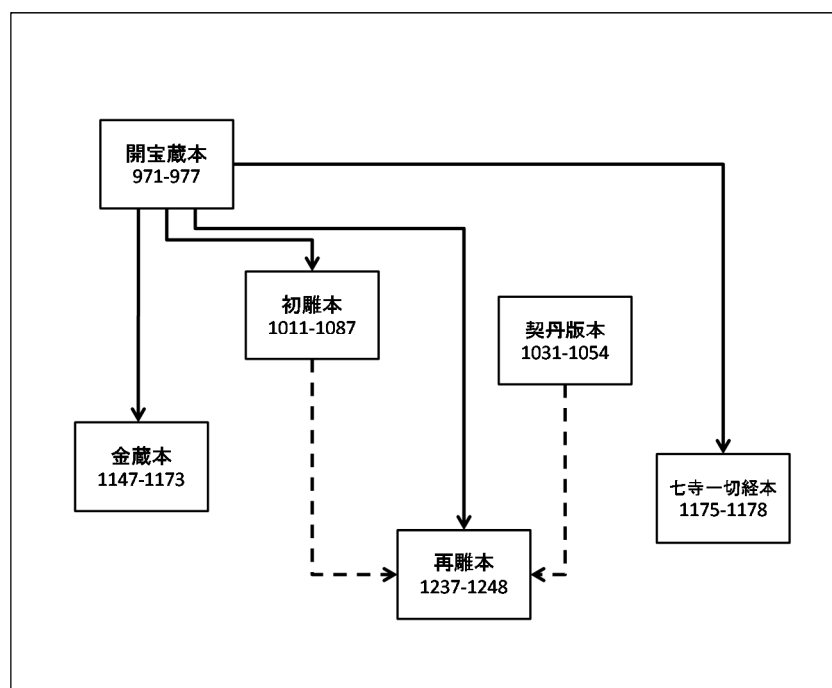
**内容** 開版に際し校勘が行われている（後補もあるか）。

これら諸本は、同一の祖本たる開宝蔵本より派生するものであるが、何れも書写、開版に際する誤写・校勘等により、開宝蔵本そのものの姿（形式・内容）を留めるものはない。しかし、これら写本・刊本の特性を踏まえ相互補完することは、開宝蔵本の推定復元を可能とするものであり、またそれは同時に高麗蔵本（初雕本・再雕本）、金蔵本における校訂箇所比定の意味するものでもある。七寺本は従来、開宝蔵の覆刻、若しくは開宝蔵系統と一括され、不明瞭であつた第一類内の変遷、関係の解明を可能とするものとして、貴重な意義を有する資料と言える。

なお、原典を希求する視座よりすれば、七寺本を以て直ちに善導撰述当時のテキストと見なすことはできないが、それは大宋太平興国二年

(九七七年。七寺本『集諸経礼懺儀』卷上の刊記の転写による) までの遡及を可能にするものであり、また北宋勅版の有する権威、並びに同一本文の量産が可能であることの影響力を鑑みれば、『集諸経礼懺儀』卷下の伝播を考察する上で決して等閑視されるものではない。

また従来、『集諸経礼懺儀』卷下は「親鸞の所覧本は何か」という問題意識から研究の俎上に上げられることが殆どであったが、そこでは親鸞在世時における『集諸経礼懺儀』卷下の将来・流布状況の整理といった基礎研究はなされていない<sup>(24)</sup>。このような現状の中で七寺本の系譜を特定し、開宝蔵本の本文を復元することは、平安末期における『往生礼讃偈』流布状況の一端を明らかにするものであり、親鸞所引本の研究においても資するものと考えられる。



【第一類蔵経本、並びに七寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下の関係図】

\*テキストの底本と想定されるものを実線矢印で、  
 校本と想定されるものを破線矢印にて示した。

## 註

- 1 七寺一切經の概要については、七寺一切經保存会編『尾張史料七寺一切經目録』（七寺一切經保存会、一九八六）、落合俊典「七寺一切經と古逸經典」（牧田諦亮監落合俊典編『中国日本撰述經典（其之一）』七寺古逸經典研究叢書一、大東出版社、一九九四）、赤尾栄慶「古写經史から見た七寺一切經―書誌学的アプローチを中心に―」（牧田諦亮監落合俊典編『中国日本撰述經典（其之五）・撰述書』七寺古逸經典研究叢書五、大東出版社、二〇〇〇）を参照。
- 2 七寺一切經保存会編、註1前掲書、一九二頁。
- 3 七寺に所蔵される疑經の内、主要なものは牧田諦亮監落合俊典編『七寺古逸經典研究叢書』全六卷（大東出版社、一九九四―二〇〇〇）として上梓されている。
- 4 落合俊典、註1論文、四六〇頁。
- 5 『域外漢籍珍本文庫』編纂出版委員会編『高麗大藏經初刻本輯刊』七五冊（西南師範大学出版社、二〇一二）所収。
- 6 東国大学校『高麗大藏經』三三冊（東国大学校、一九七五）所収。
- 7 中華大藏經編輯局整理『中華大藏經（漢文部分）』六三（中華書局、二〇〇五）所収。
- 8 七寺一切經の軸は大乗經、大乘論、小乗經、小乗律、小乗論・賢聖集、不入藏と、その内容分類により六種の意匠が確認されており（赤尾栄慶「七寺一切經にみる經軸の意匠の相違について」国際仏教学大学院大学学術フロンティア「奈良平安古写經研究拠点の形成」ニュースレター『いとくわ』第三号、二〇〇八）、その分類に則れば、元来、黒漆塗朱頂合軸が付されていたものと推測される。
- 9 中尊寺一切經については、『金剛峯寺藏中尊寺經を中心とした中尊寺經に関する総合的研究』（昭和六三年度・平成元年度科学研究費補助金総合研究（A）研究成果報告書、上山春平（研究代表者）一九九〇）、『中尊寺金銀字經に関する総合的研究』平成六―八年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書、藤澤令夫（研究代表者）、一九九七）、『中尊寺經を中心とした平安時代の裝飾經に関する総合的研究』（平成一三―一六年度科学研究費補助金基盤研究（A2）研究成果報告書、興膳宏（研究代表者）二〇〇五）を参照。
- 10 松尾社一切經については、中尾堯編『京都妙蓮寺藏『松尾社一切經』調査報告書』（大塚巧芸社、一九九七）を参照。
- 11 興聖寺一切經については、京都府教育委員会編『興聖寺一切經調査報告書』（京都府古文書調査報告書第三集、一九九八）を参照。
- 12 金剛寺一切經については、『天野行宮金剛寺古記』大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告書第六輯（大阪府、一九三五）、『金剛寺一切經の基礎的研究と新出仏典

- の研究』(平成二二—一五年度科学研究費補助金(基盤研究A) 研究成果報告書、落合俊典(研究代表者)、二〇〇四)、『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』(平成一五—一八年度科学研究費補助金(基盤研究A) 研究成果報告書、落合俊典(研究代表者)、二〇〇七)、『真言密教寺院に伝わる典籍の学際的調査・研究—金剛寺本を中心に—』(平成二〇年度科学研究費補助金(基盤研究B) 研究成果報告書、後藤昭雄(研究代表者)、二〇〇九)、三好鹿雄「金剛寺一切経全貌」(『宗教研究』一三—六、一九三六)、木村武雄「河内金剛寺所蔵の古典古写経類に就いて」(『大乘』一七—九、一九三八)、梶浦晋「金剛寺一切経と新出安世高訳仏典」(『仏教学セミナー』七三、二〇〇一)を参照。
- 13 『日本現存八種一切経対照目録』二九八頁(国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編、二〇〇六)。その他、石山寺一切経には明応九年(一五〇〇)の奥書を有する一本の現存が確認されている(石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究』一切経篇、法蔵館、一九七七)。
- 14 檀王法林寺本と金剛寺本については第三章を参照願いたい。
- 15 七寺本と妙蓮寺本の系譜については、拙稿「七寺蔵『集諸経礼懺儀』卷下の系譜」(『浄土学』第四四輯、二〇〇七)にて既に述べた。ただし二〇〇七年当時  
は高麗初雕版本が公開されておらず、その為、七寺本は開宝蔵本、もしくは高麗初雕本の転写本である、との結論に止まるものであった。
- 16 竺沙雅章『漢訳大蔵経の歴史—写経から刊経へ—』(大谷大学、一九九三)、同『宋元仏教文化史研究』(汲古書院、二〇〇〇)。
- 17 末松保和・稲葉岩吉「南禅寺大蔵経の瞥見」(末松保和『青丘史草』二、一九六六)。
- 18 湖林博物館編『湖林博物館所蔵 初雕大蔵経調査報告』(韓国 財團法人戊戌文化財團、一九八八)。
- 19 現存点数については諸説あるが、現在、以下の二点が公刊されている(方廣鋁・李際寧主編『開宝遺珍』文物出版社、二〇一〇)。  
①大般若波羅蜜多經卷二〇六(山西省博物院蔵)、②大般若波羅蜜多經卷五八一(中国仏教図書文物館蔵)、③大宝積經卷一一一(中国図書館蔵)、  
④大方等大集經卷四三(上海市図書館蔵)、⑤妙法蓮華經卷七(山西省高平県文博館蔵)、⑥阿惟越致遮經卷上(中国図書館蔵)、⑦大雲經請雨品卷六四  
(山西省高平県文博館蔵)、⑧雜阿含經卷三〇(中国図書館蔵)、⑨雜阿含經卷三九(中国図書館蔵)、⑩十誦尼律卷四六(日本東京書道博物館蔵)、  
⑪仏本行集經卷一九(日本京都南禅寺蔵)、⑫御制秘蔵詮卷一三(美国哈佛大学賽克勒博物館蔵)。
- 20 高麗大蔵経研究所のホームページ上(高麗大蔵経 Knowledgebase: [http://kb.sutrade.kr/rtk\\_eng/search/xmlSearch.do](http://kb.sutrade.kr/rtk_eng/search/xmlSearch.do)、二〇一一年八月二四日確認)にて公開されている  
(二〇一六年九月二五日現在公開停止)。

21 註5前掲書。

22 善導以前における『宝性論』弥陀偈の引用と、『往生礼讃偈』における引用との比較については、柴田泰山「善導『往生礼讃』所引の『宝性論』弥陀偈について」、『仏教文化学会紀要』九、二〇〇〇。後に『善導教学の研究』第二卷（山喜房仏書林、二〇一四）、第三部「第十一章 善導『往生礼讃』所引の『宝性論』弥陀偈について」を参照。

23 『小右記』永延元年二月二八日条。西岡虎之助「耆然の入宋について」（西岡虎之助著作集第三卷『文化史の研究』三二書房、一九八四）、木宮之彦『入宋僧耆然の研究』（鹿島出版会、一九八三）、上川通夫「耆然入宋の歴史的意義」（『日本中世仏教形成史論』校倉書房、二〇〇七）参照。なお耆然将来の開宝蔵は、耆然没後の寛仁二年（一一〇一）弟子により左大臣藤原道長へ献上され、棲霞寺から左京三条四坊の自邸一条殿西廊へ移された（『御堂関白記』寛仁二年一月一五日条）。その後、治安元年（一一二一）には、左京一条四坊の自邸上東門弟（土御門弟）より法成寺（無量寿院）経蔵へ安置された（『小右記』治安元年八月一日条）。その後の委細は不明であるが、法成寺は天喜六年（一一五八）に全焼しており、開宝蔵も焼失したか。

24 紅媒英顕『教行信証』における『往生礼讃』引用文について（『印度学仏教学研究』四七一、一九九九）。なお井上見淳「親鸞聖人と『集諸経礼懺儀』」（『龍谷教学』四一、二〇〇六）では、『教行信証』にみられる引文と『中華大蔵経（漢文部分）』所収の金蔵本との一致に着目され、それが開宝蔵系統によるものであると推測されている。七寺本を開宝蔵の転写本と推定する拙論は、氏の説を補強するものとなろう。なお能島寛「親鸞の用いた『往生礼讃』をめぐる」、『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編、二〇一〇）では、諸本の流传状況を踏まえて立論されている。

七寺蔵 七寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下 影印・翻刻

凡例

- 一、本稿は七寺蔵一切経本『集諸経礼懺儀』卷下を底本とし、上段に影印、下段に翻刻を配したものである。
- 一、漢字字体は原則として底本の字体に従った。
- 一、行取り、文字の大小は底本に従った。
- 一、転倒・補入・見せ消ち等の符号によって訂正されるべき箇所は、訂正後の本文を示すこととした。
- 一、難読の箇所については「■」を用い示した。
- 一、読解の便の為、行番号を附し、私意にて句読点を施した。
- 一、行番号の上に「日没」「初夜」「中夜」「後夜」「晨朝」「日中」、及び丸数字を附し、各時礼の始行と礼数を示した。
- 一、内容上誤写と推測される箇所も、私にこれを改めていない。
- 一、脱文があると推測される箇所（33—34行間、413—414行間、749—750行間）には＊を挿入し示した。
- 一、高麗大蔵経（初雕版・再雕版）本、金蔵大蔵経本『集諸経礼懺儀』卷下を参照し、異読がみられた場合、当該文字の右肩に＊を附し、翻刻末に「校異」（底本の行番号「当該文字」／校本「当該文字」として示した。ただし、文字の大小、同一の漢字の異字体、通用されていると考えられるもの（無・无、華・花、辨・弁、廻・迴、慧・恵など）は対象外とした。略号は以下の通り。

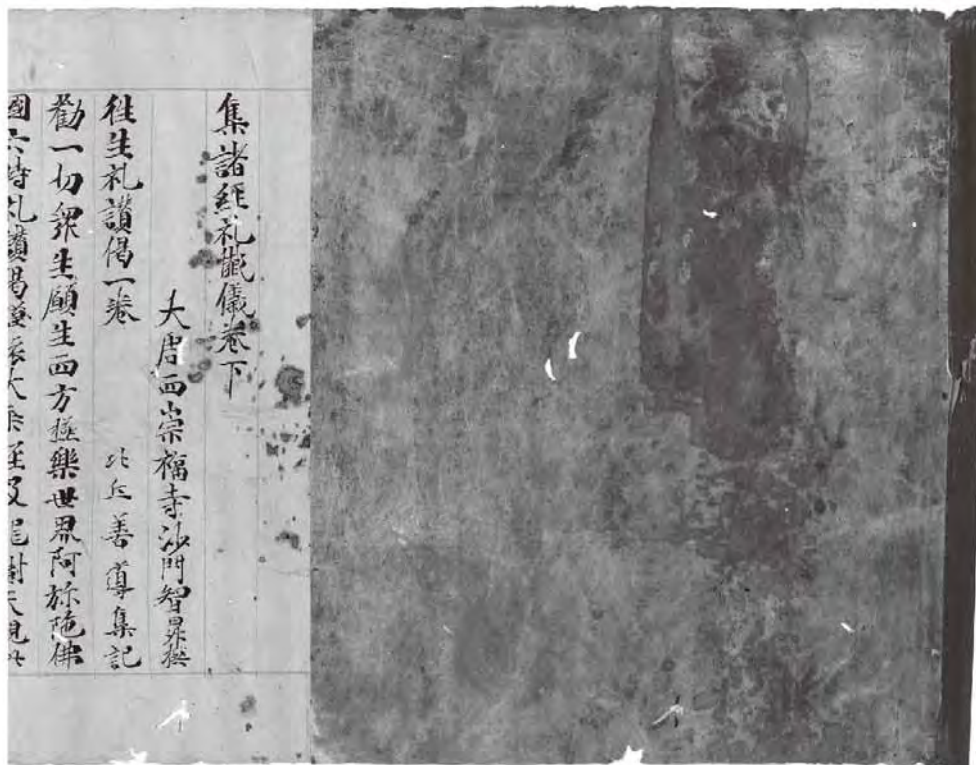
【初】 高麗大蔵経初雕本

【再】 高麗大蔵経再雕本

【廣】 金蔵大蔵経廣勝寺本



(表紙)



(見返し)

集諸經禮懺儀卷下  
 大唐西崇福寺沙門智昇撰  
 往生禮讚偈一卷  
 比丘善導集記  
 勸一切衆生願生西方極樂世界阿耨多羅三藐三菩提  
 國六時咒願偈一卷  
 大正十一年三月見







36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19

第六僧善導願往生禮讚偈依十六觀作二十拜當午時禮

問曰今欲勸人往生者未知若為安心起行  
作業定得往生彼國土也答曰必欲生彼國  
土者如觀經說先具三心必得往生何者為  
三一者至誠心二謂身業禮拜彼佛口業讚  
歎稱揚彼佛意業專念觀察彼佛凡起三  
業必須真實故名至誠心二者深心即是真  
信心信知自身是具足煩惱凡夫善根薄少  
流轉三界不出火宅今信知彌陀本弘誓願  
及願及稱名号下至十聲聞等定得往生乃  
至一念无有疑心故名深心三者迴向發願心  
所作一切善根悉皆迴願往生故名迴向發  
願心具此三心必得生也若少一心即不得  
生如觀經具說應知又如天親淨土論云若  
得往生何者為五一者身業禮拜門所謂一心  
專至恭敬合掌香華供養禮拜彼阿彌陀佛  
禮即專禮彼佛畢命為期不雜餘禮故名禮

19 第六僧善導願往生禮讚偈。依十六觀作二  
20 十拜。當午時禮。

21 問曰。今欲勸人往生者、未知若為安心、起行、  
22 作業、定得往生彼國土也。答曰。必欲生彼國  
23 土者、如觀經說。先具三心必得往生。何者為  
24 三。一者至誠心。所謂身業禮拜彼佛、口業讚  
25 歎稱揚彼佛、意業專念觀察彼佛。凡起三  
26 業、必須真實、故名至誠心。二者深心。即是真  
27 信心。信知自身是具足煩惱凡夫、善根薄少、  
28 流轉三界、不出火宅。今信知彌陀本弘誓願、  
29 及願及稱名号、下至十聲聞等、定得往生。乃  
30 至一念无有疑心、故名深心。三者迴向發願心。  
31 所作一切善根、悉皆迴願往生、故名迴向發  
32 願心。具此三心、必得生也。若少一心、即不得  
33 生。如觀經具說。應知。又如天親淨土論云。若  
34 \*得往生。何者為五。一者身業禮拜門。所謂一心  
35 專至、恭敬合掌、香華供養、禮拜彼阿彌陀佛。  
36 禮即專禮彼佛、畢命為期、不雜餘禮。故名禮

54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37  
 本因專礼彼佛畢命爲期不雜餘礼故名礼  
 拜門  
 二者口業讚歎門。所謂專憶讚歎彼佛身相  
 光明。一切聖衆身相光明。及彼國中一切寶  
 二者口業讚歎門。所謂專憶讚歎彼佛身  
 相光明。一切聖衆身相光明。及彼國中一切寶  
 莊嚴光明等。故名讚歎門。  
 三者意業憶念觀察門。所謂專念觀彼佛  
 及一切聖衆身相光明。國土莊嚴等。如觀經說。  
 唯除睡時。恒憶念恒想恒觀此事等。故名觀  
 察門。  
 四者唯願門。所謂專心。若晝若夜。一切時一  
 切處。三業四威儀。所作功德。不問初中後皆  
 須真實心中發願願生彼國。故名作願門。  
 五者廻向門。所謂專心自作善根。及一切三  
 乘五乘道。一一聖凡等所作善根。深坐隨喜。如  
 諸佛菩薩所作隨喜。我亦如是隨喜。以此隨喜  
 善根。及已所作善根。皆悉與衆生共之。廻向彼  
 國。故名廻向門。  
 又對彼國已得六神通。入生已受已衆生

54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37  
 拜門。  
 二者口業讚歎門。所謂專憶讚歎彼佛身相  
 光明、一切聖衆身相光明、及彼國中一切寶  
 二者口業讚歎門。所謂專憶讚歎彼佛身  
 相光明、一切聖衆身相光明、及彼國中一切寶  
 莊嚴光明等。故名讚歎門。  
 三者意業憶念觀察門。所謂專念觀彼佛、  
 及一切聖衆身相光明、國土莊嚴等。如觀經說。  
 唯除睡時、恒憶念恒想恒觀此事等。故名觀  
 察門。  
 四者唯願門。所謂專心、若晝若夜、一切時一  
 切處、三業四威儀所作功德、不問初中後、皆  
 須真實心中發願願生彼國。故名作願門。  
 五者廻向門。所謂專心、自作善根、及一切三  
 乘五乘道、一一聖凡等所作善根、深坐隨喜。如  
 諸佛菩薩所作隨喜、我亦如是隨喜。以此隨喜  
 善根、及已所作善根、皆悉與衆生共之、廻向彼  
 國。故名廻向門。

72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55

摩訶般若經卷第四

又到彼國已得六神通迴入生死教化衆生  
徹窮後際必无狀足乃至成佛亦名迴向門  
五門既具定得往生一一門與上三心合通起  
業行不問多少皆名真實業也應知  
又觀行四修法用策三心五念之行速得往  
生何者為四

一者恭敬修恭敬禮拜彼佛及彼一切聖衆  
等故名恭敬修畢命為期誓不中止即是長時  
修二者无餘修所謂專稱彼佛名專念專想  
專禮專讚彼佛及一切聖衆生等不雜業故名  
无餘修畢命為期誓不中止即是長時修  
三者无間修所謂相續恭敬禮拜稱名讚歎  
憶念觀察迴向發願心心相讚不以餘業來  
間故名无間修又以貪瞋煩惱來間隨犯  
隨懺不令隔念隔時隔日常使清淨亦  
名无間修畢命為期誓不中止即是長時  
修又菩薩已勉生死所作善法迴求佛果即  
是自利教化衆生盡未來際即是利他然今

壽樂土志願修業東方為要直上心等皆宜

72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55

又到彼國已得六神通迴入生死教化衆生  
徹窮後際必无狀足乃至成佛亦名迴向門  
五門既具定得往生一一門與上三心合通起  
業行不問多少皆名真實業也應知  
又觀行四修法用策三心五念之行速得往  
生何者為四

一者恭敬修。恭敬禮拜彼佛、及彼一切聖衆  
等。故名恭敬修。畢命為期、誓不中止、即是長時  
修。二者无餘修。所謂專稱彼佛名、專念專想  
專禮專讚彼佛、及一切聖衆生等、不雜業。故名  
无餘修。畢命為期、誓不中止、即是長時修。  
三者无間修。所謂相續恭敬禮拜、稱名讚歎、  
憶念觀察、迴向發願、心心相讚、不以餘業來  
間。故名无間修。又以貪瞋煩惱來間、隨犯  
隨懺、不令隔念隔時隔日、常使清淨。亦  
名无間修。畢命為期、誓不中止、即是長時  
修。又菩薩已勉生死、所作善法、迴求佛果、即  
是自利。教化衆生、盡未來際、即是利他。然今

90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73  
時衆生悉煩惱繫練未勉惡道生死等苦隨  
起行一切善根且速迴顛往生於他國到彼  
國已更无所畏如上四修自然任運自利利  
他不无具足應知  
殊波若云欲明一切昧唯勸獨處空閑捨  
諸亂意係心一佛不觀相貌專稱名字即於  
念中得見彼阿彌陀佛及一切佛等問何故  
不令作觀直遣專稱名字者有何意也  
答曰乃由衆生障重境細心廣識馳神飛觀  
難成就是以大聖悲憐直勸專稱名字云由  
稱名易故相續即生問曰既遣專稱一佛何  
故境現即多山豈非邪云相交一多雜現也  
答曰佛佛齊證形无二別縱使念一見多乖  
何大道現也  
又如觀經云  
行觀坐觀礼念等皆須面向西方者最勝如  
樹先傾倒必隨曲故必有事等不及向西方  
者但作向西想亦得問曰一切諸佛三身同證  
悲智果圓亦應无二隨方礼念課稱一佛亦  
應得生可文偏說西方勸專礼念等可文

90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73  
時衆生、悉煩惱繫練、未勉惡道生死等苦。隨  
起行、一切善根且速迴、願往生於他國。到彼  
國已、更无所畏。如上四修、自然任運。自利利  
他、不无具足。應知。  
殊波若云。欲明一切昧、唯勸獨處空閑、捨  
諸亂意、係心一佛、不觀相貌、專稱名字。即於  
念中、得見彼阿彌陀佛及一切佛等。問。何故  
不令作觀、直遣專稱名字者、有何意也。  
答曰。乃由衆生障重、境細心廣、識馳神飛、觀  
難成就。是以大聖悲憐、直勸專稱名字、正由  
稱名易故、相續即生。問曰。既遣專稱一佛、何  
故境現即多。此豈非邪正相交、一多雜現也。  
答曰。佛佛齊證、形无二別。縱使念一見多、乖  
何大道現也。  
又如觀經云。  
行觀坐觀礼念等、皆須面向西方者最勝。如  
樹先傾、倒必隨曲。故必有事等、不及向西方  
者、但作向西想亦得。問曰。一切諸佛、三身同證、  
悲智果圓、亦應无二。隨方礼念、課稱一佛、亦



108 107 106 105 100 103 102 101 100 99 98 97 96 95 94 93 92 91

應得生何故偏歎西方勸專禮念等有何義也

答曰諸佛所證平等是一若以願行來收非无因然。然彌陀尊本發深重誓願願以光明名号攝化十方但使信心求念上盡一形下至十聲一聲等以佛願力易得往生是故釋迦反以諸佛勸向西方為別異余亦非是稱念佛餘不能障滅罪也應知若能如上念念相續畢命為期十即十生百即百生何以故无外雜緣得正念故與佛本願得相應故不違教故隨順佛語故若故捨專修雜業者百時希得一二千時希得五三何以故乃由雜緣亂動失念故與佛大願不相應故與教相違故不順佛語故係念不相續故憶想間斷故迴願不殷重真實故貪瞋諸見煩惱來間斷故无有慚愧懺悔心故懺悔有三品一要二略三廣如下具說隨意用得

又不由實念求受此果故心不生受此果

108 107 106 105 100 103 102 101 100 99 98 97 96 95 94 93 92 91

應得生。何故偏歎西方、勸專禮念等、有何義也。

答曰。諸佛所證、平等是一。若以願行來收、非无因。然彌陀尊、本發深重誓願願、以光明名号、攝化十方、但使信心求念。上盡一形、下至十聲一聲等、以佛願力、易得往生。是故釋迦、及以諸佛、勸向西方、為別異余。亦非是稱念佛餘不能障滅罪也。應知。若能如上、念念相續、畢命為期、十即十生、百即百生。何以故。无外雜緣得正念故。與佛本願得相應故。不違教故。隨順佛語故。若故捨專修雜業者、百時希得一二、千時希得五三。何以故。乃由雜緣亂動失念故。與佛大願不相應故。與教相違故。不順佛語故。係念不相續故。憶想間斷故。迴願不殷重真實故。貪瞋諸見煩惱來間斷故。无有慚愧懺悔心故。懺悔有三品。一要二略三廣、如下具說、隨意用得。

日没  
 ①

126 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115 114 113 112 111 110 109

又不相續念報彼佛恩故。心生輕慢。雖作業  
 行。常與名利想應故。人我自覆。不親近同行  
 善知識故。樂近雜緣。自障障他。往生正行  
 故。何以故。余比自見聞。諸方道俗。解行不同。專  
 修有異。但使專意作者。十即十生。修雜不至  
 心者。千中无十。此二行得失。如前已弁。願一  
 切往生人等。善自思量。已能令身。願生彼國  
 者。行住坐臥。必須勵心。剋已。晝夜莫廢。畢命  
 為期。止在一形。如少苦。前念命終。後念即  
 生彼國。長時求劫。常受无為法樂。乃至成佛。  
 不遙生死。豈非快哉。應知。  
 第一佛勸禮讚阿彌陀佛十二光名。求願往生。  
 一十九拜。當日没時。禮取中下懺悔。亦得。南无釋  
 迦牟尼佛等一切三寶。我今稽首。禮迴願往生。  
 无量壽國。  
 此之佛。現是今時道俗等師。言三寶者。即是  
 福田无量。若能禮之一拜。即是念報師恩。以  
 成已行。以期一行。迴願往生。

126 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115 114 113 112 111 110 109

又不相續念報彼佛恩故。心生輕慢。雖作業  
 行。常與名利想應故。人我自覆。不親近同行  
 善知識故。樂近雜緣。自障障他。往生正行  
 故。何以故。余比自見聞。諸方道俗。解行不同。專  
 修有異。但使專意作者。十即十生。修雜不至  
 心者。千中无十。此二行得失。如前已弁。願一  
 切往生人等。善自思量。已能令身。願生彼國  
 者。行住坐臥。必須勵心。剋已。晝夜莫廢。畢命  
 為期。止在一形。如少苦。前念命終。後念即  
 生彼國。長時求劫。常受无為法樂。乃至成佛。  
 不遙生死。豈非快哉。應知。  
 第一佛勸禮讚阿彌陀佛十二光名。求願往生。  
 一十九拜。當日没時。禮取中下懺悔。亦得。南无釋  
 迦牟尼佛等一切三寶。我今稽首。禮迴願往生。  
 无量壽國。  
 此之佛。現是今時道俗等師。言三寶者。即是  
 福田无量。若能禮之一拜。即是念報師恩。以  
 成已行。以期一行。迴願往生。

③  
144 143 142 141 140 139 138 137 136 135 134 133 132 131 130 129 128 127

南无十方世盡虛空遍法界微塵刹土中一切  
三寶我今稽首礼迴願往生无量壽國。然十方  
方虛空无邊、三寶无盡、若礼一拜、即是福田  
无量、功德无窮。能至心礼之一拜、一一佛上、一  
一法上、一一菩薩聖僧上、一一舍利上、皆得身口  
意業解脫分善根、來資益行者、以成已業、以  
斯一行、迴願往生。

南无西方極樂世界阿彌陀佛願共衆生滅歸  
命故我頂礼生彼國。

問曰。何故号為阿彌陀。 答曰。阿彌陀  
經及觀經云。彼佛光明无量、照十方國、无所障  
碍。唯不見念佛衆生、攝取不捨、故名阿彌陀佛。  
彼佛壽命、及其人民、无量阿僧祇劫、故名阿  
彌陀。又釋迦佛、及十方佛、讚歎阿彌陀光明、有  
十二種名、普勸衆生、稱名礼拜、相續不斷、現世  
得无量功德、命終之後定得往生。如无量壽經  
說云。其有衆生、遇斯光者、三垢消滅、身意柔爽、  
歡喜踊躍、善心生焉。若在三塗、勤苦之處、見  
此光明、无復苦惱。壽終之後、皆蒙解脫、无量壽

144 143 142 141 140 139 138 137 136 135 134 133 132 131 130 129 128 127

南无十方世盡虛空遍法界微塵刹土中一切  
三寶我今稽首礼迴願往生无量壽國。然十方  
方虛空无邊、三寶无盡、若礼一拜、即是福田  
无量、功德无窮。能至心礼之一拜、一一佛上、一  
一法上、一一菩薩聖僧上、一一舍利上、皆得身口  
意業解脫分善根、來資益行者、以成已業。以  
斯一行、迴願往生。

南无西方極樂世界阿彌陀佛願共衆生滅歸  
命故我頂礼生彼國。

問曰。何故号為阿彌陀。 答曰。阿彌陀  
經及觀經云。彼佛光明无量、照十方國、无所障  
碍。唯不見念佛衆生、攝取不捨、故名阿彌陀佛。  
彼佛壽命、及其人民、无量阿僧祇劫、故名阿  
彌陀。又釋迦佛、及十方佛、讚歎阿彌陀光明、有  
十二種名、普勸衆生、稱名礼拜、相續不斷、現世  
得无量功德、命終之後定得往生。如无量壽經  
說云。其有衆生、遇斯光者、三垢消滅、身意柔爽、  
歡喜踊躍、善心生焉。若在三塗、勤苦之處、見

⑥ 162 ⑤ 161 ④ 160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150 149 148 147 146 145  
 此光明无復苦惱壽終之後皆蒙解脫无量壽  
 佛光明顯赫照耀十方諸佛國土莫不聞焉不  
 但我今稱其光明一切諸佛聲聞緣覺諸菩薩  
 衆咸苦歎譽亦復如是若有衆生聞其光明  
 威神功德日夜稱說至心斷者隨其所願得  
 生其國常為諸菩薩聲聞之衆共共歎譽  
 稱其功德佛言我說无量壽佛光明威神巍巍  
 殊妙晝夜一劫尚不能盡  
 白諸行者當知弥陀身相光明釋迦如來亦說  
 不能盡者如觀經云一一光明遍照十方世界  
 念佛衆生攝取不捨今既經觀有如此不思  
 議增上勝緣攝護行者何不相續稱觀礼念  
 願往生也應知  
 南无西方 極樂世界 无量光佛  
 願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
 南无西方 極樂世界 无邊光佛  
 願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
 南无西方 極樂世界 无礙光佛  
 願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國

162 161 160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150 149 148 147 146 145  
 此光明、无復苦惱。壽終之後、皆蒙解脫。无量壽  
 佛、光明顯赫、照耀十方、諸佛國土、莫不聞焉。不  
 但我今、稱其光明、一切諸佛聲聞緣覺諸菩薩  
 衆、盛苦歎譽、亦復如是。若有衆生、聞其光明、  
 威神功德、日夜稱說、至心斷者、隨其所願、得  
 生其國。常為諸菩薩聲聞之衆、所共歎譽、  
 稱其功德。佛言。我說无量壽佛、光明威神、巍巍  
 殊妙、晝夜一劫、尚不能盡。  
 白諸行者、當知弥陀身相光明、釋迦如來一劫說  
 不能盡者、如觀經云。一一光明、遍照十方世界、  
 念佛衆生、攝取不捨。今既經觀有如此不思  
 議增上勝緣、攝護行者、何不相續稱觀礼念  
 願往生也。應知。  
 南无西方 極樂世界 无量光佛  
 願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
 南无西方 極樂世界 无邊光佛  
 願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
 南无西方 極樂世界 无礙光佛



⑮ 180 ⑭ 179 ⑬ 178 ⑫ 177 ⑪ 176 ⑩ 175 ⑨ 174 ⑧ 173 ⑦ 172 ⑥ 171 ⑤ 170 ④ 169 ③ 168 ② 167 ① 166 165 164 163

願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 无對光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 光焰王佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 清淨光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 歡喜光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 智慧光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 不斷光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 難思光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 无稱光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 超日月光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國

180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 无對光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 光焰王佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 清淨光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 歡喜光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 智慧光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 不斷光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 難思光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 无稱光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 超日月光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國

198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181
南无西方 極樂世界 阿彌陀佛	哀愍覆護我令法種增長此世及後生願佛	常攝受願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國	南无西方極樂世界觀世音菩薩願共衆生	咸歸命故我頂礼生彼國	南无西方極樂世界大勢至菩薩願共衆生	咸歸命故我頂礼生彼國	此二菩薩一切衆生臨命終時共持華鬘授	與行者阿彌陀佛放大光明照行者身復與	無數化佛菩薩聲聞大衆等一時授手如彈	指頃即得往生為報恩故至心礼之一拜	南无西方 極樂世界 諸菩薩清	淨大海衆願共衆生咸歸命故我頂礼生彼	國	此等諸菩薩亦隨佛來迎接行者為報恩故	至心礼之一拜	普為師僧父母及善知識法界衆生斷除	衆三寶司昇生可亦也弗國歸命觀每

198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國	南无西方 極樂世界 阿彌陀佛	哀愍覆護我令法種增長此世及後生願佛	常攝受願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國	南无西方極樂世界觀世音菩薩願共衆生	咸歸命故我頂礼生彼國	南无西方極樂世界大勢至菩薩願共衆生	咸歸命故我頂礼生彼國	此二菩薩、一切衆生、臨命終時、共持花鬘、授	與行者。阿彌陀佛、放大光明、照行者身。復與	無數、化佛菩薩、聲聞大衆等、一時授手、如彈	指頃、即得往生。為報恩故、至心礼之一拜。	南无西方 極樂世界 諸菩薩清	淨大海衆願共衆生咸歸命故我頂礼生彼	國	此等諸菩薩、亦隨佛來迎接行者。為報恩故、	至心礼之一拜。	普為師僧父母、及善知識、法界衆生、斷除

216 215 214 213 212 211 210 209 208 207 206 205 204 203 202 201 200 199

普慈師信及善知識結界衆生劫除三障同得往生阿彌陀佛國歸命懺悔至心懺悔

南无歸懺十方佛 願滅一切諸罪根  
今持久近所修善 迴作自他安樂國  
恒願一切臨終時 勝緣勝境悉現前  
願觀彌陀大悲主 觀音勢至十方尊  
仰唯神光蒙授手 乘佛願力生彼國  
懺悔迴向發願已 至心歸命阿彌陀佛

次作梵 說偈發願 出寶性論

禮懺諸功德 願臨命終時 見无量壽佛  
无邊功德身 我及餘信者 既見彼佛已  
願得離垢眼 往生安樂國 成无上菩提

禮懺已一切恭敬

歸佛得菩提 道心恒不退 歸法薩婆若  
得大惣持門 歸僧息諍論 同入和合海  
迴願往生 无量壽國 願諸衆生  
三業清淨 奉持佛教 和南一切賢聖  
迴願往生 无量壽國

人間念營衆務 不覺年今日竟矣

216 215 214 213 212 211 210 209 208 207 206 205 204 203 202 201 200 199

除三障、同得往生阿彌陀佛國、歸命懺悔。至心懺悔

南无歸懺十方佛 願滅一切諸罪根  
今將久近所修善 迴作自他安樂國  
恒願一切臨終時 勝緣勝境悉現前  
願觀彌陀大悲主 觀音勢至十方尊  
仰唯神光蒙授手 乘佛願力生彼國  
懺悔迴向發願已 至心歸命阿彌陀佛

次作梵。 說偈發願。 出寶性論。

禮懺諸功德 願臨命終時 見无量壽佛  
无邊功德身 我及餘信者 既見彼佛已  
願得離垢眼 往生安樂國 成无上菩提

禮懺已一切恭敬。

歸佛得菩提 道心恒不退 歸法薩婆若  
得大惣持門 歸僧息諍論 同入和合海  
迴願往生 无量壽國 願諸衆生  
三業清淨 奉持佛教 和南一切賢聖  
迴願往生 无量壽國

234	233	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222	221	220	219	218	217
時光遷流轉 忽至五更初 无常念念至	後夜偈云	汝起勿抱具身卧 種種不淨假名人 如得重病箭入體 衆苦痛集安可眠	中夜偈云	勤修六度行 菩提道自然	云何樂睡眠 勇猛勤精進 攝心常在禪	煩惱深无底 生死海无邊 度苦船未立	是發願已至心歸命礼阿弥陀佛初夜偈云	救攝苦衆生 虚空法界盡 我願亦如	國到彼已得六神通 迴向入十方界	衆現前乘佛本願上品往生阿弥陀佛	无諸苦痛身心安穩快樂如入禪定聖	時心不顛倒心不錯乱心不共念身心	說此偈已更當心口發願願弟子臨命終	各聞強健有力時 自策自勵求常住	未得解脫出苦海 云何安然不驚懼	如燈風中滅難期 忙忙六道无定趣	人間念念營衆務 不覺年命日夜去

234	233	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222	221	220	219	218	217
後夜偈云。	如得重病箭入體 衆苦痛集安可眠	汝起勿抱具身卧 種種不淨假名人	中夜偈云。	勤修六度行 菩提道自然	云何樂睡眠 勇猛勤精進 攝心常在禪	煩惱深无底 生死海无邊 度苦船未立	是發願已至心歸命礼阿弥陀佛初夜偈云。	救攝苦衆生。虚空法界盡、我願亦如	國。到彼已、得六神通、迴向入十方界、	衆現前、乘佛本願、上品往生阿弥陀佛	无諸苦痛、身心安穩快樂、如入禪定、聖	時、心不顛倒、心不錯乱、心不失念、身心	說此偈已、更當心口發願。願弟子、臨命終	各聞強健有力時 自策自勵求常住	未得解脫出苦海 云何安然不驚懼	如燈風中滅難期 忙忙六道无定趣	人間念念營衆務 不覺年命日夜去

235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252

初夜

①

②

時光遷流轉 忽至五更初 无常念念至  
恒與死王居 勸諸行道者 勤修至无餘  
平旦偈云  
欲求寂滅樂 當學沙門法 衣食支身命  
精施隨眾等 諸眾等今日晨朝各記云念  
日中偈云  
人生不精進 喻若樹无根 採花置日裏  
能得幾時鮮 人命亦如是 无常須臾間  
勸諸行道眾 勤修乃至真  
第二比丘善道謹依大乘經採集要文以  
為讚偈二十三拜當初夜時禮懺悔同前  
後  
至心歸命禮 西方阿彌陀 弥陀知願海  
深廣无涯底 聞名欲往生 皆悉到彼國  
願共諸眾生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 於此世界中  
六十有七億 不退諸菩薩 比當得生彼  
願共諸眾生 往生安樂國

235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252

時光遷流轉 忽至五更初 无常念念至  
恒與死王居 勸諸行道者 勤修至无餘  
平旦偈云  
欲求寂滅樂 當學沙門法 衣食支身命  
精施隨眾等 諸眾等今日晨朝各記云念  
日中偈云  
人生不精進 喻若樹无根 採花置日裏  
能得幾時鮮 人命亦如是 无常須臾間  
勸諸行道眾 勤修乃至真  
第二比丘善道謹依大乘經、採集要文、以  
為讚偈。二十三拜。當初夜時禮。懺悔同前  
後。  
至心歸命禮 西方阿彌陀 弥陀知願海  
深廣无涯底 聞名欲往生 皆悉到彼國  
願共諸眾生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 於此世界中  
六十有七億 不退諸菩薩 比當得生彼  
願共諸眾生 往生安樂國

83



288 287 286 285 284 283 282 281 280 279 278 277 276 275 274 273 272 271

至心歸命禮	願共諸衆生	三匝從頂入	願共諸衆生	至心歸命禮	願共諸衆生	動容發欣笑	至心歸命禮	願共諸衆生	應時无量尊
西方阿彌陀佛	往生安樂國	一切天人衆	往生安樂國	西方阿彌陀佛	往生安樂國	口出無數光	西方阿彌陀佛	往生安樂國	遍照十方國
迴光圓遶身		踊躍皆歡喜		迴光圓遶身			迴光圓遶身		
梵聲如雷震				梵聲如雷震			梵聲如雷震		
吾悉知彼願				吾悉知彼願			吾悉知彼願		
至彼嚴淨土				至彼嚴淨土			至彼嚴淨土		
受記成等覺				受記成等覺			受記成等覺		
必於无量尊				必於无量尊			必於无量尊		
往生安樂國				往生安樂國			往生安樂國		
奉事億如來				奉事億如來			奉事億如來		
還到安養國				還到安養國			還到安養國		
恭敬歡喜去				恭敬歡喜去			恭敬歡喜去		
往生安樂國				往生安樂國			往生安樂國		
若人无善本				若人无善本			若人无善本		
難以信此法				難以信此法			難以信此法		
往生安樂國				往生安樂國			往生安樂國		
十方來正士				十方來正士			十方來正士		
吾悉知彼願				吾悉知彼願			吾悉知彼願		
至彼嚴淨土				至彼嚴淨土			至彼嚴淨土		
受記成等覺				受記成等覺			受記成等覺		
必於无量尊				必於无量尊			必於无量尊		
往生安樂國				往生安樂國			往生安樂國		
奉事億如來				奉事億如來			奉事億如來		
還到安養國				還到安養國			還到安養國		
恭敬歡喜去				恭敬歡喜去			恭敬歡喜去		
往生安樂國				往生安樂國			往生安樂國		
若人无善本				若人无善本			若人无善本		
難以信此法				難以信此法			難以信此法		
往生安樂國				往生安樂國			往生安樂國		

288 287 286 285 284 283 282 281 280 279 278 277 276 275 274 273 272 271

至心歸命禮	願共諸衆生	三匝從頂入	願共諸衆生	至心歸命禮	願共諸衆生	動容發欣笑	至心歸命禮	願共諸衆生	應時无量尊
西方阿彌陀佛	往生安樂國	一切天人衆	往生安樂國	西方阿彌陀佛	往生安樂國	口出無數光	西方阿彌陀佛	往生安樂國	遍照十方國
迴光圓遶身		踊躍皆歡喜		迴光圓遶身			迴光圓遶身		
梵聲如雷震				梵聲如雷震			梵聲如雷震		
吾悉知彼願				吾悉知彼願			吾悉知彼願		
至彼嚴淨土				至彼嚴淨土			至彼嚴淨土		
受記成等覺				受記成等覺			受記成等覺		
必於无量尊				必於无量尊			必於无量尊		
往生安樂國				往生安樂國			往生安樂國		
奉事億如來				奉事億如來			奉事億如來		
還到安養國				還到安養國			還到安養國		
恭敬歡喜去				恭敬歡喜去			恭敬歡喜去		
往生安樂國				往生安樂國			往生安樂國		
若人无善本				若人无善本			若人无善本		
難以信此法				難以信此法			難以信此法		
往生安樂國				往生安樂國			往生安樂國		
十方來正士				十方來正士			十方來正士		
吾悉知彼願				吾悉知彼願			吾悉知彼願		
至彼嚴淨土				至彼嚴淨土			至彼嚴淨土		
受記成等覺				受記成等覺			受記成等覺		
必於无量尊				必於无量尊			必於无量尊		
往生安樂國				往生安樂國			往生安樂國		
奉事億如來				奉事億如來			奉事億如來		
還到安養國				還到安養國			還到安養國		
恭敬歡喜去				恭敬歡喜去			恭敬歡喜去		
往生安樂國				往生安樂國			往生安樂國		
若人无善本				若人无善本			若人无善本		
難以信此法				難以信此法			難以信此法		
往生安樂國				往生安樂國			往生安樂國		

289	⑮	至心歸命礼 西方阿弥陀佛 宿世見諸佛	願共諸衆生 往生安樂國	則能信此事 謙敬聞奉行 踊躍大歡喜	290
291	⑯	至心歸命礼 西方阿弥陀佛 其有得聞彼	願共諸衆生 往生安樂國	彌陀佛名号歡喜至一心 皆當得生彼	292
293	⑰	至心歸命礼 西方阿弥陀佛 設滿大千大	願共諸衆生 往生安樂國	直過聞佛名聞名歡喜讚 皆當得生彼	294
295	⑱	至心歸命礼 西方阿弥陀佛 万年三寶滅	願共諸衆生 往生安樂國	此經住百年 余時間一念 皆當得生彼	296
297	⑲	願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命礼 西方阿弥陀佛 佛世甚難值	人有信惠難 遇聞希有法 此復最為難	298
299	⑳	自信教人信 難中轉更難 大悲弘普化	真成報佛恩 願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命礼 西方阿弥陀佛 哀愍覆護我	300
301		令法種增長 此世及後生 願佛常攝受	願共諸衆生 往生安樂國		302
303					304
305					306

289	至心歸命礼 西方阿弥陀佛 宿世見諸佛	願共諸衆生 往生安樂國	則能信此事 謙敬聞奉行 踊躍大歡喜	290
291	至心歸命礼 西方阿弥陀佛 其有得聞彼	願共諸衆生 往生安樂國	彌陀佛名号歡喜至一心 皆當得生彼	292
293	至心歸命礼 西方阿弥陀佛 設滿大千大	願共諸衆生 往生安樂國	直過聞佛名聞名歡喜讚 皆當得生彼	294
295	至心歸命礼 西方阿弥陀佛 万年三寶滅	願共諸衆生 往生安樂國	此經住百年 余時間一念 皆當得生彼	296
297	願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命礼 西方阿弥陀佛 佛世甚難值	人有信惠難 遇聞希有法 此復最為難	298
299	自信教人信 難中轉更難 大悲弘普化	真成報佛恩 願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命礼 西方阿弥陀佛 哀愍覆護我	300
301	令法種增長 此世及後生 願佛常攝受	願共諸衆生 往生安樂國		302
303				304
305				306





342	341	340	⑥ 339	338	337	336	⑤ 335	334	333	332	④ 331	330	329	328	③ 327	326	325
至心歸命礼	願共諸衆生	為諸衆生願力住	十方名聞菩薩衆	至心歸命礼	願共諸衆生	冥作利益得自在	无垢无垢廣清淨	至心歸命礼	願共諸衆生	能伏外道魔憍慢	觀音頂戴冠中住	至心歸命礼	願共諸衆生	聲如天鼓俱翅羅	面善圓淨如滿月	兩目淨若青蓮花	金色身淨如山王
西方阿彌陀佛	往生安樂國	故我頂礼阿彌陀佛	无量諸魔常讚歎	西方阿彌陀佛	往生安樂國	故我頂礼阿彌陀佛	衆德皎潔如虛空	西方阿彌陀佛	往生安樂國	故我頂礼阿彌陀佛	種種妙相寶莊嚴	西方阿彌陀佛	往生安樂國	故我頂礼阿彌陀佛	威光猶如百千日	故我頂礼阿彌陀佛	耆摩他花如勝步

342	341	340	339	338	337	336	335	334	333	332	331	330	329	328	327	326	325
願共諸衆生	為諸衆生願力住	十方名聞菩薩衆	至心歸命礼	願共諸衆生	所作利益得自在	无垢无垢廣清淨	至心歸命礼	願共諸衆生	能伏外道魔憍慢	觀音頂戴冠中住	至心歸命礼	願共諸衆生	聲如天鼓俱翅羅	面善圓淨如滿月	至心歸命礼	願共諸衆生	兩目淨若青蓮花
往生安樂國	故我頂礼阿彌陀佛	无量諸魔常讚歎	西方阿彌陀佛	往生安樂國	故我頂礼阿彌陀佛	衆德皎潔如虛空	西方阿彌陀佛	往生安樂國	故我頂礼阿彌陀佛	種種妙相寶莊嚴	西方阿彌陀佛	往生安樂國	故我頂礼阿彌陀佛	威光猶如百千日	西方阿彌陀佛	往生安樂國	故我頂礼阿彌陀佛

⑪	⑩	⑨	⑧	⑦
360	359	358	357	356
355	354	353	352	351
350	349	348	347	346
345	344	343		

至心歸命禮 西方阿彌陀佛  
 金底寶澗池生華 善根所成妙臺座  
 於彼座上如山王 故我頂禮彌陀佛  
 願共諸眾生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛  
 十方所來諸佛子 顯現神通至安樂  
 瞻仰尊顏常恭敬 故我頂禮彌陀佛  
 願共諸眾生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛  
 諸有无常无我等 亦如水月電影露  
 為衆說法无名字 故我頂禮彌陀佛  
 願共諸眾生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛  
 彼尊佛刹无惡名 亦无女人惡道怖  
 衆人至心敬彼尊 故我頂禮彌陀佛  
 願共諸眾生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛  
 彼尊无量方便境 无有諸趣惡知識  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛

360	359	358	357	356
355	354	353	352	351
350	349	348	347	346
345	344	343		

至心歸命禮 西方阿彌陀佛  
 金底寶澗池生華 善根所成妙臺座  
 於彼座上如山王 故我頂禮彌陀佛  
 願共諸眾生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛  
 十方所來諸佛子 顯現神通至安樂  
 瞻仰尊顏常恭敬 故我頂禮彌陀佛  
 願共諸眾生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛  
 諸有无常无我等 亦如水月電影露  
 為衆說法无名字 故我頂禮彌陀佛  
 願共諸眾生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛  
 彼尊佛刹无惡名 亦无女人惡道怖  
 衆人至心敬彼尊 故我頂禮彌陀佛  
 願共諸眾生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛  
 彼尊无量方便境 无有諸趣惡知識  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛

378	清淨大海衆 願共諸衆生
377	至心歸命礼 西方極世界 <sup>*</sup> 諸菩薩
376	往生安樂國
375	大勢至菩薩 願共諸衆生
374	至心歸命礼 西方極樂世界
373	往生安樂國
372	觀世音菩薩 願共諸衆生
371	至心歸命礼 西方極樂世界
370	願共諸衆生 往生安樂國
369	此世及後生 願佛常攝受
368	哀愍覆護我 令法種種長
367	至心歸命礼 西方阿彌陀佛
366	願共諸衆生 往生安樂國
365	所作善根清淨者 廻向衆生生彼土
364	我說彼尊功德事 衆善无邊如海水
363	至心歸命礼西方阿彌陀佛
362	願共諸衆生 往生安樂國
361	往生不退至菩提 故我頂礼阿彌陀佛

396 395 394 393 392 391 390 389 388 387 386 385 384 383 382 381 380 379

諸經大疏釋 願共諸眾生

往生安樂國

陀

普為師僧父母及善知識法界眾生斷  
除三障同得往生阿彌陀佛國歸命懺悔  
至心懺悔自從元始受身未恒以十惡  
加眾生不孝父母謗三寶造作五逆不  
善業以是眾罪因故妄想顛倒生纏縛  
應受无量生死苦頂禮懺悔願滅除願懺  
悔已至心歸命禮阿彌陀佛  
至心勸請諸佛大慈无上尊恒以空惠照  
三界眾生盲冥不覺知永沉生死大苦  
海為拔眾生離諸苦觀請常住轉法  
輪勸請已至心歸命禮阿彌陀佛至心  
隨喜願劫已來懷嫉妬我慢放逸由  
癡生恒以瞋恚毒害火焚燒智慧慈  
善根今日思惟始悟義大精進隨喜  
心隨喜已至心歸命禮阿彌陀佛至心迴  
向流浪三界內癡受入胎獄生已歸老  
死沈沒於苦海我今修此福迴生安  
樂國迴向已至心歸命禮阿彌陀佛

396 395 394 393 392 391 390 389 388 387 386 385 384 383 382 381 380 379

往生安樂國

普為師僧父母、及善知識、法界眾生、斷  
除三障、同得往生阿彌陀佛國、歸命懺悔。  
至心懺悔。自從无始受身來。恒以十惡  
加眾生。不孝父母謗三寶。造作五逆不  
善業。以是眾罪因故。妄想顛倒生纏縛。  
應受无量生死苦。頂禮懺悔願滅除。懺  
悔已。至心歸命禮阿彌陀佛。  
至心勸請。諸佛大慈无上尊。恒以空惠照  
三界。眾生盲冥不覺知。永沉生死大苦  
海。為拔眾生離諸苦。觀請常住轉法  
輪。勸請已。至心歸命禮阿彌陀佛。至心  
隨喜。歷劫已來懷嫉妬。我■放逸由  
癡生。恒以瞋恚毒害火。焚燒智慧慈  
善根。今日思惟始悟。發大精進隨喜  
心。隨喜已。至心歸命禮阿彌陀佛。至心迴  
向。流浪三界內。癡受入胎獄。生已歸老  
死。沈沒於苦海。我我今修此福。迴生安

91



432	431	430	429	428	427	426	425	424	423	422	421	420	419	418	417	416	415
二乘種不生	至心歸命礼	願共諸衆生	受樂常无間	至心歸命礼	願共諸衆生	正覺花化生	至心歸命礼	願共諸衆生	微妙聞十方	至心歸命礼	願共諸衆生	羅網遍虚空	至心歸命礼	願共諸衆生	觀十方无尋	至心歸命礼	交錯光乱轉
衆生所願樂	西方阿弥陀佛	往生安樂國	大乘善根界	西方阿弥陀佛	往生安樂國	愛樂佛法味	西方阿弥陀佛	往生安樂國	正覺阿弥陀	西方阿弥陀佛	往生安樂國	種種鈴發響	西方阿弥陀佛	往生安樂國	雜樹異光色	西方阿弥陀佛	願共諸衆生
一切能滿足	女人及根缺		等无譏嫌名	永離身心惱		禪三昧為食	如來淨華衆		法王善住持	梵音悟深遠		宣吐妙法音	无量寶交絡		寶欄遍圍繞	宮殿諸樓閣	往生安樂國

93



②	①	晨朝	②①	①⑨	①⑧
468	467	466	465	464	463
462	461	460	459	458	457
456	455	454	453	452	451

願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方極樂世界 觀世音菩薩  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方極樂世界 大勢至菩薩  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方極樂世界 諸菩薩  
 清淨大海衆 願共諸衆生 往生安樂國  
 普為師僧父母及善知識法界衆生斷  
 除三障同得往生阿彌陀佛國歸命懺  
 悔  
 第五依彥琮法師領往生禮讚偈二十二  
 拜當且起時禮 懺悔同前後  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛 法藏因彌遠  
 極樂果還深 果珍參佐地 衆寶間為林  
 華開希有色 波揚寶相音 何當蒙授手  
 一遂往生心 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛 濁世難還入  
 淨土願逾深 金■直界道 珠網縵乘林  
 見色皆真色 聞音悉法音 莫謂西方遠

468	467	466	465	464	463	462	461	460	459	458	457	456	455	454	453	452	451
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方極樂世界 觀世音菩薩  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方極樂世界 大勢至菩薩  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方極樂世界 諸菩薩  
 清淨大海衆 願共諸衆生 往生安樂國  
 普為師僧父母、及善知識、法界衆生、斷  
 除三障、同得往生阿彌陀佛國、歸命懺  
 悔  
 第五依彥琮法師領往生禮讚偈。二十二  
 拜。當且起時禮。懺悔同前後  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛 法藏因彌遠  
 極樂果還深 果珍參佐地 衆寶間為林  
 華開希有色 波揚寶相音 何當蒙授手  
 一遂往生心 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛 濁世難還入  
 淨土願逾深 金■直界道 珠網縵乘林

469	見色皆真色	聞音悉法音	莫謂西方遠
470	唯須十念心	願共諸衆生	往生安樂國
471	至心歸命禮	西方阿彌陀佛	已成窮理聖
472	真有遍宮威	在西時現小	俱是甞隨機
473	葉珠相映飾	沙水共澄■	欲得无生早
474	彼土必須依	願共諸衆生	往生安樂國
475	至心歸命禮	西方阿彌陀佛	五山毫獨朗
476	寶手印恒分	地水俱為鏡	香花同作雲
477	業深成易往	因淺實難聞	必望除疑惑
478	超然獨不群	願共諸衆生	往生安樂國
479	至心歸命禮	西方觀世音菩薩	
480	千輪明足下	五道現光中	悲引恒无絕
481	人歸亦未窮	口宣獨在定	心靜更飛道
482	聞名皆願往	日發幾花叢	願共諸衆生
483	往生安樂國		
484	至心歸命禮	西方大勢至菩薩	
485	慧力標无上	身光備有緣	動搖諸寶國
486	侍坐一金蓮	邊群非實鳥	天類豈有天

504 503 502 501 500 499 498 497 496 495 494 493 492 491 490 489 488 487

須知求妙樂會是忒香全 願共諸衆生  
往生安樂國  
至心歸命礼 西方何祇他佛 心帶直慈滿  
光合誅東國 天緣能攝物 有想定非難  
華隨本心變 宮移身自安 稀聞出世境  
須共入禪者 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方何祇他佛 迴向漸為切  
西方路稍通 寶幢來原地 天香入遠風  
開花重布水 覆納細分空 願生何意切  
正為樂无窮 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方何祇他佛 欲選當生處  
西方策可歸 間樹間重閣 滿道布鮮衣  
香飯隨心至 寶殿隨身飛 有緣皆得入  
品是去人希 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方何祇他佛 十劫道先成  
嚴界別群萌 金沙徹水照 玉蕊滿枝明  
鳥本珠中出 人唯華上生 教請西方聖  
早晚定相迎 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方何祇他佛 十方諸佛聖

504 503 502 501 500 499 498 497 496 495 494 493 492 491 490 489 488 487

須知求妙樂	會是戒香全	願共諸衆生
往生安樂國		
至心歸命禮	西方阿弥陀佛	心帶直慈滿
光合法界國	天緣能攝物	有想定非難
華隨本心變	宮移身自安	稀聞出世境
須共人禪看	願共諸衆生	往生安樂國
至心歸命禮	西方阿弥陀佛	廻向漸為功
西方路稍通	寶幢承原地	天香入遠風
開花重布水	覆納細分空	願生何意功
正為樂無窮	願共諸衆生	往生安樂國
至心歸命禮	西方阿弥陀佛	欲選當生處
西方最可浸	間樹問重閣	滿道布鮮衣
香飯隨心至	寶殿逐身飛	有緣皆得入
品是去人希	願共諸衆生	往生安樂國
至心歸命禮	西方阿弥陀佛	十劫道先成
巖界引群萌	金沙徹水照	玉葉滿枝明
鳥本珠中出	人唯華上生	敢請西方聖
早脫定相迎	願共諸衆生	往生安樂國

⑮	⑭	⑬	⑫	⑪
522	521	520	519	518
517	516	515	514	513
512	511	510	509	508
507	506	505		
至心歸命礼	西方阿弥陀佛	十方諸佛國	盡是法王家	偏求有緣地
八功如意水	七寶自然華	於彼心能係	當必往非願	願共諸衆生
至心歸命礼	西方阿弥陀佛	淨國无衰變	一立古今然	光臺千寶合
池多說法鳥	空滿散花天	得生不畏退	隨意晚開蓮	願共諸衆生
至心歸命礼	西方阿弥陀佛	坐華非一像	聖衆亦難量	蓮開人獨處
无災由處靜	不退為朋良	問彼前生輩	來斯幾却強	願共諸衆生
至心歸命礼	西方阿弥陀佛	光舒救毘舍	宮立引韋提	天來香蓋捧
六時聞鳥合	四寸踐華低	相看无不正	豈復有長迷	願共諸衆生
至心歸命礼	西方阿弥陀佛	普為弘三福	咸命滅五燒	發心功已至
係念罪便消				

522	521	520	519	518
517	516	515	514	513
512	511	510	509	508
507	506	505		
至心歸命礼	西方阿弥陀佛	十方諸佛國	盡是法王家	偏求有緣地
八功如意水	七寶自然華	於彼心能係	當必往非願	願共諸衆生
至心歸命礼	西方阿弥陀佛	淨國无衰變	一立古今然	光臺千寶合
池多說法鳥	空滿散花天	得生不畏退	隨意晚開蓮	願共諸衆生
至心歸命礼	西方阿弥陀佛	坐華非一像	聖衆亦難量	蓮開人獨處
无災由處靜	不退為朋良	問彼前生輩	來斯幾却強	願共諸衆生
至心歸命礼	西方阿弥陀佛	光舒救毘舍	宮立引韋提	天來香蓋捧
六時聞鳥合	四寸踐華低	相看无不正	豈復有長迷	願共諸衆生
至心歸命礼	西方阿弥陀佛	普為弘三福	咸命滅五燒	發心功已至
係念罪便消				

540 539 538 537 536 535 534 533 532 531 530 529 528 527 526 525 524 523

鳥化珠光轉 風好樂聲調 俱忻行道易  
 寧愁聖果遙 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛 珠色仍為水  
 金光即是臺 到時華自散 隨願葉還開  
 遊池更出沒 飛空牙往來 真心能向彼  
 有善併須迴 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛 洗心甘露水  
 悅自妙花雲 同生機易識 等壽量難分  
 樂多无廢道 聲遠不妨聞 如何貪五濁  
 安然火自焚 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛 臺裏天人現  
 光中侍者看 懸窓四寶閣 臨迴七重欄  
 疑多鳥地久 德少上生難 且莫論餘願  
 西望已心安 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛 六根常合道  
 三塗永絕名 念須遊方遍 還時得忍名  
 地平无極廣 風長是處清 寄言有心輩  
 共出一危城 願共諸衆生 往生安樂國

540 539 538 537 536 535 534 533 532 531 530 529 528 527 526 525 524 523

鳥化珠光轉 風好樂聲調 俱忻行道易  
 寧愁聖果遙 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛 珠色仍為水  
 金光即是臺 到時華自散 隨願葉還開  
 遊池更出沒 飛空牙往來 真心能向彼  
 有善併須迴 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛 洗心甘露水  
 悅自妙花雲 同生機易識 等壽量難分  
 樂多无廢道 聲遠不妨聞 如何貪五濁  
 安然火自焚 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛 臺裏天人現  
 光中侍者看 懸窓四寶閣 臨迴七重欄  
 疑多鳥地久 德少上生難 且莫論餘願  
 西望已心安 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命禮 西方阿彌陀佛 六根常合道  
 三塗永絕名 念須遊方遍 還時得忍名  
 地平无極廣 風長是處清 寄言有心輩  
 共出一危城 願共諸衆生 往生安樂國



558	557	556	555	① 554	553	日中 552	551	550	549	②③ 548	547	②② 546	545	②① 544	543	542	②① 541
普勸歸西同彼會	本國他方大海衆	四十八願莊嚴起	觀彼弥陀極樂界	至心歸命礼	二十拜當中時礼	第六比丘善導願往生礼讚偈依十六觀作	同得往生阿弥陀佛國歸命懺悔	普為師僧父母善知識法界衆生斷除三障	清淨大海衆	願共諸衆生	願共諸衆生	至心歸命礼	願共諸衆生	至心歸命礼	願共諸衆生	至心歸命礼	至心歸命礼
恒沙三昧自然成	窮劫算數不知名	超諸佛刹最為精	廣大寬平衆寶成	西方阿弥陀佛	懺悔同前後	依十六觀作	懺悔	斷除三障	往生安樂國	諸菩薩	往生安樂國	大勢至菩薩	觀世音菩薩	觀世音菩薩	觀世音菩薩	觀世音菩薩	觀世音菩薩

558	557	556	555	554	553	552	551	550	549	548	547	546	545	544	543	542	541
普勸歸西同彼會	本國他方大海衆	四十八願莊嚴起	觀彼弥陀極樂界	至心歸命礼 西方阿弥陁佛	二十拜。當 <sup>*</sup> 中時礼。 <small>懺悔同前後</small>	第六比丘善導願往生礼讚偈。依十六觀作	同得往生阿弥陁佛國、歸命懺悔。	普為師僧父母、善知識、法界衆生、断除三障、	清淨大海衆 願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命礼 西方極樂世界 諸 菩 薩	願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命礼 西方極樂世界 大勢至菩薩	願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命礼 西方極樂世界 觀世音菩薩	願共諸衆生 往生安樂國	令法種增長 此世及後生 願佛常攝受	至心歸命礼 西方阿弥陁佛 哀愍覆護我
恒沙三昧自然成	窮劫算數不知名	超諸佛刹最為精	廣大寬平衆寶成														

576 575 574 573 572 571 570 569 568 567 566 565 564 563 562 561 560 559

④  
 願共諸衆生  
 至心歸命禮  
 地下莊嚴七寶幢  
 八万八面百寶成  
 无生寶國永為常  
 行者頃心常對自  
 願共諸衆生  
 至心歸命禮  
 地上莊嚴轉无極  
 弥陀願智巧莊嚴  
 寶地寶色寶光嚴  
 臺中寶樓千万億  
 願共諸衆生  
 至心歸命禮  
 一一臺上虛空中  
 八種清風尋光出  
 機音正受稍為難  
 唯除睡時常憶念  
 恒妙三昧自然生  
 往生安樂國  
 西方阿弥陀佛  
 无量无边无億數  
 見彼无生自然悟  
 一切寶无數光  
 騰神踊躍入西方  
 往生安樂國  
 西方阿弥陀佛  
 金繩界道非工匠  
 菩薩人天散華上  
 一一光成无數臺  
 臺側百億寶幢圍  
 往生安樂國  
 西方阿弥陀佛  
 莊嚴寶樂亦无窮  
 隨時鼓樂應機音  
 行住坐臥攝心觀  
 三昧无為即涅槃

576 575 574 573 572 571 570 569 568 567 566 565 564 563 562 561 560 559

願共諸衆生  
 至心歸命禮  
 地下莊嚴七寶幢  
 八万八面百寶成  
 无生寶國永為常  
 行者頃心常對自  
 願共諸衆生  
 至心歸命禮  
 地上莊嚴轉无極  
 弥陀願智巧莊嚴  
 寶地寶色寶光嚴  
 臺中寶樓千万億  
 願共諸衆生  
 至心歸命禮  
 一一臺上虛空中  
 八種清風尋光出  
 機音正受稍為難  
 唯除睡時常憶念  
 往生安樂國  
 西方阿弥陀佛  
 无量无边无億數  
 見彼无生自然悟  
 一切寶无數光  
 騰神踊躍入西方  
 往生安樂國  
 西方阿弥陀佛  
 金繩界道非工匠  
 菩薩人天散華上  
 一一光成无數臺  
 臺側百億寶幢圍  
 往生安樂國  
 西方阿弥陀佛  
 莊嚴寶樂亦无窮  
 隨時鼓樂應機音  
 行住坐臥攝心觀  
 三昧无為即涅槃

594	593	592	591	590	589	588	587	586	585	584	583	582	581	580	579	578	577
願共諸衆生	寄語有緣同行者	德水分流尋寶樹	十二由旬皆正等	寶池寶岸寶金沙	至心歸命礼	願共諸衆生	果變光成衆寶蓋	行行寶葉色千般	化天童子皆充遍	七重羅網七重宮	至心歸命礼	等量齊高三十萬	行行相當葉相次	我以千寶分林異	寶國寶林諸寶樹	至心歸命礼	願共諸衆生
往生安樂國	努力翻迷還本家	聞波觀樂證恬怕	寶羅寶網寶欄遮	寶渠寶葉寶蓮花	西方阿弥陀佛	往生安樂國	塵沙佛刹現无邊	華敷等若旋金輪	瓔珞輝光超日月	綺牙迴光相映發	西方阿弥陀佛	枝條相觸說无因	色各不同光亦然	或有百寶共成行	寶華寶葉寶根茎	往生安樂國	三昧无爲自在樂

594	593	592	591	590	589	588	587	586	585	584	583	582	581	580	579	578	577
願共諸衆生	寄語有緣同行者	德水分流尋寶樹	十二由旬皆正等	寶池寶岸寶金沙	至心歸命礼	願共諸衆生	果變光成衆寶蓋	行行寶葉色千般	化天童子皆充遍	七重羅網七重宮	至心歸命礼	等量齊高三十萬	行行相當葉相次	我以千寶分林異	寶國寶林諸寶樹	至心歸命礼	願共諸衆生
往生安樂國	努力翻迷還本家	聞波觀樂證恬怕	寶羅寶網寶欄遮	寶渠寶葉寶蓮花	西方阿弥陀佛	往生安樂國	塵沙佛刹現无邊	華敷等若旋金輪	瓔珞輝光超日月	綺牙迴光相映發	西方阿弥陀佛	枝條相觸說无因	色各不同光亦然	或有百寶共成行	寶華寶葉寶根茎	往生安樂國	三昧无爲自在樂



612 611 610 609 608 607 606 605 604 603 602 601 600 599 598 597 596 595

願共諸衆生	往生安樂國	西方阿彌陀佛	寶樂寶樹千万億	如方菩薩如雲集	稽首彌陀恭敬足	歎說三尊无有極	往生安樂國	西方阿彌陀佛	一切衆寶以為成	彌陀獨坐頭真形	蒙光觸者心不退	終時快樂如三昧	往生安樂國	西方阿彌陀佛	影現衆生心想中	依心起想表真容	心開見彼國莊嚴	風鈴樂響與文同	寶樹三身華遍滿	願共諸衆生
至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼

612 611 610 609 608 607 606 605 604 603 602 601 600 599 598 597 596 595

願共諸衆生	往生安樂國	西方阿彌陀佛	寶樂寶樹千万億	如方菩薩如雲集	稽首彌陀恭敬足	歎說三尊无有極	往生安樂國	西方阿彌陀佛	一切衆寶以為成	彌陀獨坐頭真形	蒙光觸者心不退	終時快樂如三昧	往生安樂國	西方阿彌陀佛	影現衆生心想中	依心起想表真容	心開見彼國莊嚴	風鈴樂響與文同	寶樹三身華遍滿	願共諸衆生
至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼	至心歸命礼

⑬										⑫										⑪												
630	629	628	627	626	625	624	623	622	621	620	619	618	617	616	615	614	613															
願共諸衆生										至心歸命礼										願共諸衆生												
普勸有緣常憶念										觀世音菩薩大慈										至心歸命礼												
法界傾搖如轉蓬										一切五道内身中										願共諸衆生												
有緣衆生蒙光觸										應現身光紫金色										恒舒百億光王手												
勢至菩薩難思議										願共諸衆生										至心歸命礼												
往生安樂國										西方阿彌陀佛										威光普照无邊際												
增長智惠超三界										相好威儀轉无極										普接有緣歸本國												
化佛雲集滿虚空										往生安樂國										西方阿彌陀佛												
永絕胞胎證六通										已得菩提捨不證										六時觀察三輪應												
										十方如來舒舌證										唯有念佛蒙光攝												
										到彼華臺聞妙法										弥陀身色如金山												
										願共諸衆生										至心歸命礼												
										往生安樂國										西方阿彌陀佛												
										相好光明照十方										當知本願最為強												
										專稱名号至西方										十地願行自然彰												

630	629	628	627	626	625	624	623	622	621	620	619	618	617	616	615	614	613
普勸有緣常憶念	法界傾搖如轉蓬	有緣衆生蒙光觸	勢至菩薩難思議	至心歸命礼	願共諸衆生	恒舒百億光王手	應現身光紫金色	一切五道内身中	觀世音菩薩大慈	至心歸命礼	願共諸衆生	到彼華臺聞妙法	十方如來舒舌證	唯有念佛蒙光攝	弥陀身色如金山	至心歸命礼	願共諸衆生
永絕胞胎證六通	化佛雲集滿虚空	增長智惠超三界	威光普照无邊際	西方阿弥陀佛	往生安樂國	普接有緣歸本國	相好威儀轉无極	六時觀察三輪應	已得菩提捨不證	西方阿弥陀佛	往生安樂國	十地願行自然彰	專稱名号至西方	當知本願最為強	相好光明照十方	西方阿弥陀佛	往生安樂國

648 647 646 645 644 643 642 641 640 639 638 637 636 635 634 633 632 631

願共諸衆生	百寶華籠逕七日	佛與聲聞衆來取	孝養父母教迴向	中輩中行中根人	至心歸命礼	願共諸衆生	慶哉難逢今得遇	一日七日專精進	就行差別分三品	上輩上行上根人	至心歸命礼	願共諸衆生	丈六八尺隨機現	彌陀身量極无邊	觀見彌陀極樂界	正坐跏趺入三昧	願共諸衆生	往生安樂國	西方阿彌陀佛	想心垂念至西方	地上虛空七寶莊	重觀衆生觀小身	國光化佛等前真	往生安樂國	西方阿彌陀佛	求生淨土斷貪瞋	五門相續助三因	畢命垂臺出六塵	永證无為法性身	往生安樂國	西方阿彌陀佛	一日齋戒處金蓮	為說西方快樂國	真到彌陀花座邊	三品蓮開證小真
-------	---------	---------	---------	---------	-------	-------	---------	---------	---------	---------	-------	-------	---------	---------	---------	---------	-------	-------	--------	---------	---------	---------	---------	-------	--------	---------	---------	---------	---------	-------	--------	---------	---------	---------	---------

648 647 646 645 644 643 642 641 640 639 638 637 636 635 634 633 632 631

願共諸衆生	百寶華籠逕七日	佛與聲聞衆來取	孝養父母教迴向	中輩中行中根人	至心歸命礼	願共諸衆生	慶哉難逢今得遇	一日七日專精進	就行差別分三品	上輩上行上根人	至心歸命礼	願共諸衆生	丈六八尺隨機現	彌陀身量極无邊	觀見彌陀極樂界	正坐跏趺入三昧	願共諸衆生	往生安樂國	西方阿彌陀佛	想心垂念至西方	地上虛空七寶莊	重觀衆生觀小身	國光化佛等前真	往生安樂國	西方阿彌陀佛	求生淨土斷貪瞋	五門相續助三因	畢命垂臺出六塵	永證无為法性身	往生安樂國	西方阿彌陀佛	一日齋戒處金蓮	為說西方快樂國	真到彌陀花座邊	三品蓮開證小真
-------	---------	---------	---------	---------	-------	-------	---------	---------	---------	---------	-------	-------	---------	---------	---------	---------	-------	-------	--------	---------	---------	---------	---------	-------	--------	---------	---------	---------	---------	-------	--------	---------	---------	---------	---------

649	願共諸衆生	往生安樂國
650	至心歸命礼	西方阿彌陀佛
651	下輩下行下根人	十惡五逆等貪瞋
652	四重偷僧謗正法	未曾慚愧悔前愆
653	終時苦相皆雲集	地獄猛火罪人前
654	忽遇往生善知識	急勸專稱彼佛名
655	化佛菩薩尋聲到	一念傾心入寶蓮
656	三業障重開多劫	千時始發菩提因
657	願共諸衆生	往生安樂國
658	至心歸命礼	西方阿彌陀佛
659	樂何樂事難思議	无邊菩薩為同學
660	性海如來盡是師	渴聞波若施恩漿
661	念食无生即斷飢	一切莊嚴皆說法
662	无心領納自然知	七覺花池隨意入
663	八輩疑神會一枝	弥陀心水沐身頂
664	觀音大勢與衣枝	歎余騰空遊法界
665	須臾授記号无為	如此逍遙无極處
666	吾今不去待何時	願共諸衆生

684 683 682 681 680 679 678 677 676 675 674 673 672 671 670 669 668 667

吾今不待何時	往生安樂國	至心歸命礼	哀愍覆護我	此世及後生	願共諸衆生	至心歸命礼	觀音勢至諸菩薩	願共諸衆生	普為師僧父母反善知識法界衆生斷除	三障同得往生阿彌陀佛國歸命懺悔上	二品懺悔發願等同前須要中要初須	略中略取中須廣中廣取下其廣者就	實有心願生者而勸或對四衆或對十方	佛或對舍利尊尊大衆或對一人若獨自等	又向十方盡虛空三寶及盡衆生界等具向	發露懺悔懺悔有三品上中下上品懺悔者身	毛吼中衆流眼中血出者名上品懺悔中品	懺悔者遍身熱汗從毛吼出眼中血流者名	中品懺悔下品懺悔皆通身散亂思惟中要
難共諸衆生	西方阿彌陀佛	令法種增長	願佛常攝受	往生安樂國	西方阿彌陀佛	清淨大海衆	往生安樂國	普為師僧父母反善知識法界衆生斷除	三障同得往生阿彌陀佛國歸命懺悔上	二品懺悔發願等同前須要中要初須	略中略取中須廣中廣取下其廣者就	實有心願生者而勸或對四衆或對十方	佛或對舍利尊尊大衆或對一人若獨自等	又向十方盡虛空三寶及盡衆生界等具向	發露懺悔懺悔有三品上中下上品懺悔者身	毛吼中衆流眼中血出者名上品懺悔中品	懺悔者遍身熱汗從毛吼出眼中血流者名	中品懺悔下品懺悔皆通身散亂思惟中要	

684 683 682 681 680 679 678 677 676 675 674 673 672 671 670 669 668 667

往生安樂國	至心歸命礼	哀愍覆護我	此世及後生	願共諸衆生	至心歸命礼	觀音勢至諸菩薩	願共諸衆生	普為師僧父母、及善知識、法界衆生、斷除	三障、同得往生阿彌陀佛國、歸命懺悔。上	二品懺悔、發願等同前。須要中要初、須	略中略取中、須廣中廣取下。其廣者、就	實有心願生者而勸。或對四衆、或對十方	佛、或對舍利尊尊大衆、或對一人、若獨自等。	又向十方盡虛空三寶、及盡衆生界等、具向	發露懺悔。懺悔有三品、上中下。上品懺悔者、身	毛吼中衆流、眼中血出者、名上品懺悔。中品	懺悔者、遍身熱汗從毛吼出、眼中血流者、名	中品懺悔下品懺悔皆通身散亂思惟中要
往生安樂國	西方阿彌陀佛	令法種增長	願佛常攝受	往生安樂國	西方阿彌陀佛	清淨大海衆	往生安樂國	普為師僧父母、及善知識、法界衆生、斷除	三障、同得往生阿彌陀佛國、歸命懺悔。上	二品懺悔、發願等同前。須要中要初、須	略中略取中、須廣中廣取下。其廣者、就	實有心願生者而勸。或對四衆、或對十方	佛、或對舍利尊尊大衆、或對一人、若獨自等。	又向十方盡虛空三寶、及盡衆生界等、具向	發露懺悔。懺悔有三品、上中下。上品懺悔者、身	毛吼中衆流、眼中血出者、名上品懺悔。中品	懺悔者、遍身熱汗從毛吼出、眼中血流者、名	中品懺悔下品懺悔皆通身散亂思惟中要

702 701 700 699 698 697 696 695 694 693 692 691 690 689 688 687 686 685

懺悔者遍身契汗毛。可出眼中淚。有中品懺悔。下品懺悔者。遍身徹熱。眼中淚出者。名下品懺悔。此等三品。雖有差別。即是久種解脫分善根人。致使今生敬法重人。不惜身命。乃至小罪若懺。即能徹心。隨能如此懺者。不問久近。所有重障。頓皆滅盡。若不如此。縱使日夜十二時急走。无益不作者。應知。雖不能流淚流血等。但能真心徹到者。即與上同。敬白十方諸佛。十二部經。一切賢聖。及一切天龍八部。法界衆生。現前大眾等。證知我某甲。發露懺悔。從无始已來。乃至今身。殺害一切三寶師僧父母六親眷屬善知識。法界衆生。不可知數。偷盜一切三寶師僧父母六親眷屬善知識。法界衆生。不可知數。妄語欺誑。法界衆生。上起邪心。不可知數。惡口罵生。不可知數。綺語調弄。一切三寶師僧父母六親眷屬善知識。法界衆生。不可知數。惡口罵

702 701 700 699 698 697 696 695 694 693 692 691 690 689 688 687 686 685

中品懺悔。下品懺悔者。遍身徹熱。眼中淚出者。名下品懺悔。此等三品。雖有差別。即是久種解脫分善根人。致使今生敬法重人。不惜身命。乃至小罪若懺。即能徹心。隨能如此懺者。不問久近。所有重障。頓皆滅盡。若不如此。縱使日夜十二時急走。无益不作者。應知。雖不能流淚流血等。但能真心徹到者。即與上同。敬白十方諸佛。十二部經。一切賢聖。及一切天龍八部。法界衆生。現前大眾等。證知我某甲。發露懺悔。從无始已來。乃至今身。殺害一切三寶師僧父母六親眷屬善知識。法界衆生。不可知數。偷盜一切三寶師僧父母六親眷屬善知識。法界衆生。不可知數。妄語欺誑。法界衆生。上起邪心。不可知數。惡口罵生。不可知數。綺語調弄。一切三寶師僧父母六親眷屬善知識。法界衆生。不可知數。惡口罵



720 719 718 717 716 715 714 713 712 711 710 709 708 707 706 705 704 703

諸君屬善知識法界衆生不可知數。兩舌聞亂破壞一  
辱誹謗毀謗一切三寶師僧父母六親眷屬  
善知識法界衆生不可知數。兩舌聞亂破壞一  
切三寶師僧父母六親眷屬善知識法界衆  
生不可知數。或破五戒八戒十戒十善戒三百  
五十戒五百戒菩薩三聚戒十無盡乃至一  
切戒及一切威儀戒等自作教化見作隨喜  
不可知數。如是等罪罪之如十方大地無邊  
微塵無數。我等作罪亦復無邊。法界無邊亦如上法。  
邊我等作罪亦復無邊。法界無邊亦如上法。  
性無邊亦如上。佛無邊亦如上。如是等罪、上  
至諸菩薩下至聲聞緣覺天不能知。唯佛與  
佛乃能知我罪之多少。今於三寶前法界衆  
生前發露懺悔不敢覆藏。唯願十方三  
寶法界衆生受我懺悔憶我清淨始從  
今日願共法界衆生捨邪歸正發菩提心慈  
心相向佛眼相看作菩提眷屬真善知識同  
生阿彌陀佛國乃至成佛如是等罪永斷相續  
更不敢懺悔已至心歸命阿彌陀佛禮懺竟更  
觀及結語應發願者生善心一心念南無

720 719 718 717 716 715 714 713 712 711 710 709 708 707 706 705 704 703

辱誹謗毀謗一切三寶師僧父母六親眷屬  
善知識法界衆生不可知數。兩舌聞亂破壞一  
切三寶師僧父母六親眷屬善知識法界衆  
生不可知數。或破五戒八戒十戒十善戒二百  
五十戒五百戒菩薩三聚戒十無盡乃至一  
切戒及一切威儀戒等自作教化見作隨喜  
不可知數。如是等罪罪、亦如十方大地無邊、  
微塵無數、我等作罪亦無邊無數。虛空无  
邊、我等作罪亦復無邊。法界無邊亦如上法。  
性無邊亦如上。佛無邊亦如上。如是等罪、上  
至諸菩薩、下至聲聞緣覺、所不能知。唯佛與  
佛乃能知我罪之多少。今於三寶前、法界衆  
生前、發露懺悔、不敢覆藏。唯願十方三  
寶、法界衆生、受我懺悔、憶我清淨。始從  
今日、願共法界衆生、捨邪歸正、發菩提心、慈  
心相向、佛眼相看、作菩提眷屬、真善知識、同  
生阿彌陀佛國、乃至成佛、如是等罪、永斷相續、  
更不敢懺悔已。至心歸命阿彌陀佛。禮懺竟。若人

738 737 736 735 734 733 732 731 730 729 728 727 726 725 724 723 722 721  
 觀及睡時、應發此願、若坐若立、一心合掌、正面  
 向西、十聲阿彌陀佛觀音勢至諸菩薩清淨大  
 海衆竟、弟子現是生死凡夫、罪障深重、輪迴六  
 道、苦不可言。今遇善知識、得聞彌陀本願名号、  
 一心稱念、求願往生。願佛慈悲、不捨本弘誓願  
 攝受。弟子不識彌陀佛身相光明。願佛慈悲、示現  
 弟子身相觀音勢至諸菩薩等、及彼世界清淨  
 莊嚴光明等相。道此語已、一心正念、即隨意  
 入觀及睡。或有正發願時即得見之、或有睡時  
 得見。此願比來亦大有現驗。問曰。稱念礼觀阿  
 彌陀佛、現世有何功德利益。答曰。若稱阿彌陀佛  
 一聲、即能除滅八十億劫生死重罪。礼念已下亦  
 是。十往生經云。若有衆生、念阿彌陀佛、願往生  
 者、彼佛即遣二十五菩薩、權護行者。若行若坐  
 若住若臥、若晝若夜、一切時一切處、不令惡鬼  
 惡神得其便也。又如觀經云。若稱念阿彌陀佛  
 願往生彼國者、彼佛即遣無數化佛、無數化觀  
 音勢至菩薩、護念行者。復與前二十五菩薩等  
 百重千重圍遶行者、不同行住坐卧一切時處

738 737 736 735 734 733 732 731 730 729 728 727 726 725 724 723 722 721  
 觀及睡時、應發此願、若坐若立、一心合掌、正面  
 向西、十聲阿彌陀佛觀音勢至諸菩薩清淨大  
 海衆竟。弟子現是生死凡夫、罪障深重、輪迴六  
 道、苦不可言。今遇善知識、得聞彌陀本願名号、  
 一心稱念、求願往生。願佛慈悲、不捨本弘誓願  
 攝受。弟子不識彌陀佛身相光明。願佛慈悲、示現  
 弟子身相觀音勢至諸菩薩等、及彼世界清淨  
 莊嚴光明等相。道此語已、一心正念、即隨意  
 入觀及睡。或有正發願時即得見之、或有睡時  
 得見。此願比來亦大有現驗。問曰。稱念礼觀阿  
 彌陀佛、現世有何功德利益。答曰。若稱阿彌陀佛  
 一聲、即能除滅八十億劫生死重罪。礼念已下亦  
 是。十往生經云。若有衆生、念阿彌陀佛、願往生  
 者、彼佛即遣二十五菩薩、權護行者。若行若坐  
 若住若臥、若晝若夜、一切時一切處、不令惡鬼  
 惡神、得其便也。又如觀經云。若稱念阿彌陀佛、  
 願往生彼國者、彼佛即遣無數化佛、無數化觀  
 音勢至菩薩、護念行者。復與前二十五菩薩等、



756 755 754 753 752 751 750 749 748 747 746 745 744 743 742 741 740 739

百重千重圍遶行者、不問行住坐臥、一切時處、若晝若夜、不離行者、既有斯勝益、可憑願諸行者、各須至心求往。又如无量壽經云、若我成佛、十方衆生稱我名号、乃至十聲、若不生者、不取正覺。彼佛今現在、世成佛、當知本誓、重不虛、衆生稱念、必得往生。又如彌陀云、若有衆生、聞說阿彌陀佛、應執持名号、若一日、若二日、乃至七日、一心稱佛不亂。命欲終時、阿彌陀佛、與諸聖衆、現在其前。此人終時、心不顛倒、即得往生彼國。佛告舍利弗、我見是利、故說是言。若有衆生、聞是說者、應當發願、願生彼國。次下說云、東方如恒河沙等諸佛、各於本國、出其舌根、遍覆三千大千世界、說誠實言、汝等衆生、皆應信是一切諸佛所護念經。云名護。若有衆生稱念阿彌陀佛、若七日及七日及一日、下至一聲、乃至十聲、一念等、必得往生。誠成此事、故名證念經。次下又云、知稱佛往生者、常為六万恒沙等諸佛之所護念、故名護念經。今既有此增上

信、可弗謂乎。不可動念也。

756 755 754 753 752 751 750 749 748 747 746 745 744 743 742 741 740 739

百重千重圍遶行者、不問行住坐臥、一切時處、若晝若夜、不離行者。既有斯勝益。可憑。願諸行者、各須至心求往。又如无量壽經云。若我成佛、十方衆生、稱我名号、下至十聲、若不生者、不取正覺。彼佛今現、在世成佛、當知本誓、重不虛、衆生稱念、必得往生。又如彌陀云。若有衆生、聞說阿彌陀佛、忍應執持名号、若一日若二日、乃至七日、一心稱佛不亂。命欲終時、阿彌陀佛、與諸聖衆、現在其前。此人終時、心不顛倒、即得往生彼國。佛告舍利弗。我見是利、故說是言。若有衆生、聞是說者、應當發願、願生彼國。次下說云。東方如恒河沙等諸佛、各於本國、出其舌根、遍覆三千大千世界、說誠實言。汝等衆生、皆應信是一切諸佛所護念經。云名護。若有衆生稱念阿彌陀佛、若七日及七日及一日、下至一聲、乃至十聲、一念等、必得往生。誠成此事、故名證念經。次下又云。知稱佛往生者、常為六万恒沙等諸佛之所護念、故名護念經。今既有此增上

758

757



758

757

集諸經礼懺儀卷下

誓願。可憑。諸佛子等、何不勵意去也。

安元三年四月一日 午時許書寫畢

筆師持門房

一文了 榮藝

校異

7	保	／	初	再	廣	係
7	亦願	／	初	再	廣	ナシ。
8	速	／	初	再	廣	速
8	沾	／	再	霑		
10	觀	／	初	再	廣	勸
26	真	／	初	再	廣	真實
29	及願	／	初	再	廣	ナシ。
29	聞	／	再	ナシ		
30	澡	／	初	再	廣	深
32	生	／	再	往生		
33	34間	脫文カ。	初	再	廣	有願生彼國者勸修五念門五門若具定
43	念	／	初	再	廣	意念
45	念	／	初	再	廣	恒念
47	唯	／	初	再	廣	作
50	自	／	再	若目		
51	乘	／	初	再	廣	ナシ。
51	坐	／	初	再	廣	生
56	必	／	再	心		
61	恭敬	／	初	再	所謂恭敬	
64	生	／	初	再	廣	ナシ。
64	業	／	初	再	廣	餘業

67	讀	／	初	再	廣	續
68	以	／	初	再	廣	不以
71	勉	／	再	免		
73	煩惱	／	再	為煩惱		
73	練	／	初	再	廣	縛
73	勉	／	再	免		
73	隨	／	初	再	廣	隨緣
76	不无	／	初	再	廣	無不
77	切	／	初	再	廣	行三
79	問	／	初	再	廣	問曰
86	現	／	再	理		
88	等	／	初	再	廣	尋
94	因	／	初	再	廣	因緣
94	尊	／	初	再	廣	世尊
98	障	／	再	除障		
99	為期	／	再	為期者		
101	故	／	初	再	廣	欲
103	念	／	初	再	正念、廣	念正
103	大	／	初	再	廣	本
110	想	／	初	再	廣	相
113	修	／	初	再	雜	
114	十	／	再	一		
115	能	／	廣	得		

208 205 202 198 155 149 148 141 139 138 136 134 131 128 127 126 124 119 119 118 117 116  
 「礼」／「初」【再】「廣」【剋】。  
 「如」／「初」【再】「廣」【似如】。  
 「求」／「再」【永】。  
 「遙」／「初」【逕】、【再】「廣」【經】。  
 「裁」／「初」【再】「廣」【哉】。  
 「佛」／「初」【再】「廣」【一佛】。  
 「期」／「初」【再】「廣」【斯】。  
 「世」／「初」【再】「廣」【三世】。  
 「十方方」／「初」【再】「廣」【十方】。  
 「菩薩」／「再」【菩薩上】。  
 「滅」／「初」【再】「廣」【咸】。  
 「阿」／「初」【再】「廣」【ナシ】。  
 「不見」／「初」【再】「廣」【覓】。  
 「无」／「初」【再】「廣」【无邊】。  
 「不斷」／「初」【再】「廣」【不斷者】。  
 「盛苦」／「初」【再】「廣」【咸共】。  
 「斷」／「初」【再】「廣」【不斷】。  
 「經觀」／「再」【觀經】。  
 「斷除除」／「初」【再】「廣」【斷除】。  
 「國」／「初」【再】「廣」【因】。  
 「唯」／「再」【惟】。  
 「礼懺諸功德 願臨命終時」／「再」【廣】「礼懺諸功德 布施諸有情 願臨命終時」。

389 384 381 377 377 368 365 332 329 315 314 295 253 251 247 247 244 239 232 225 225 216 211  
 「礼」／「再」【ナシ】。  
 「无量壽國」／「再」【廣】「无量壽國 諸衆等聽說黃昏偈」。  
 「彼」／「初」【再】「彼國」。  
 「向」／「初」【再】「廣」【ナシ】。  
 「具」／「初」【再】「廣」【臭】。  
 「云」／「初」【再】「廣」【六】。  
 「道」／「初」【再】「廣」【導】。  
 「阿弥陀」／「初」【再】「廣」【阿弥陀佛】。  
 「知」／「初」【再】「廣」【智】。  
 「比」／「初」【再】「廣」【皆】。  
 「少」／「初」【再】「廣」【小】。  
 「大」／「初」【再】「廣」【火】。  
 「善知識」／「再」【及善知識】。  
 「阿羅」／「初」【再】「廣」【陀佛】。  
 「如」／「初」【再】「廣」【若】。  
 「載」／「初」【再】「廣」【戴】。  
 「向」／「初」【再】「廣」【施】。  
 「種」／「初」【再】「廣」【增】。  
 「極」／「初」【再】「廣」【極樂】。  
 「諸菩薩」／「初」【諸尊菩薩等】。  
 「除」／「初」【再】「廣」【陀】。【底本】頭注「陀」アリ。  
 「因」／「初」【再】「廣」【因緣】。  
 「郡」／「初」【再】「廣」【群】。

486 486 481 481 476 473 473 472 468 468 464 461 444 438 413 403 402 397 396 395 391 389  
 邊／〔初〕〔再〕〔廣〕〔鳥〕。 侍／〔再〕〔待〕。 道／〔初〕〔再〕〔廣〕〔通〕。 獨／〔初〕〔再〕〔廣〕〔猶〕。 恒／〔初〕〔再〕〔廣〕〔恒〕。 早／〔初〕〔再〕〔果〕。 〔■〕／〔初〕〔再〕〔廣〕〔輝〕。 宮／〔初〕〔再〕〔廣〕〔空〕。 乘／〔初〕〔再〕〔廣〕〔垂〕。 〔■〕／〔初〕〔再〕〔廣〕〔繩〕。 果／〔初〕〔再〕〔廣〕〔異〕。 領／〔初〕〔再〕〔廣〕〔願〕。 轉／〔初〕〔再〕〔廣〕〔輪〕。 邊／〔初〕〔再〕〔廣〕〔過〕。  
 414 間 脫文カ。／〔初〕〔再〕〔廣〕〔具足妙莊嚴 無垢光焰熾 明淨曜世間 願共諸衆生 往生安樂國 至心歸命礼 西方阿弥陀佛〕。  
 讀／〔再〕〔礼讀〕。 歸命／〔再〕〔歸命礼〕。 礼／〔初〕〔廣〕ナシ。 我我／〔初〕〔再〕〔廣〕〔我〕。 受／〔初〕〔再〕〔廣〕〔愛〕。 〔■〕／〔初〕〔再〕〔廣〕〔慢〕。 觀／〔初〕〔再〕〔廣〕〔勸〕。

538 535 534 530 527 522 516 514 508 504 500 500 498 498 495 495 494 490 490 490 489 486  
 須／〔再〕〔廣〕〔頃〕。 鳥／〔初〕〔再〕〔廣〕〔邊〕。 窓／〔初〕〔再〕〔廣〕〔空〕。 自／〔初〕〔再〕〔廣〕〔目〕。 牙／〔初〕〔再〕〔廣〕〔互〕。 命／〔初〕〔再〕〔廣〕〔令〕。 却／〔初〕〔再〕〔廣〕〔劫〕。 彼／〔初〕〔再〕〔廣〕〔波〕。 願／〔初〕〔再〕〔廣〕〔賒〕。 脫／〔初〕〔再〕〔廣〕〔晚〕。 去／〔再〕〔往〕。 品／〔初〕〔再〕〔廣〕〔只〕。 間／〔初〕〔再〕〔廣〕〔開〕。 浸／〔初〕〔再〕〔廣〕〔歸〕。 功／〔初〕〔再〕〔廣〕〔切〕。 納／〔初〕〔再〕〔廣〕〔網〕。 原／〔初〕〔再〕〔廣〕〔厚〕。 天／〔初〕〔再〕〔廣〕〔无〕。 國／〔初〕〔再〕〔廣〕〔圓〕。 合／〔初〕〔再〕〔廣〕〔含〕。 直／〔初〕〔再〕〔廣〕〔真〕。 有／〔初〕〔再〕〔廣〕〔真〕。

636 635 633 633 621 621 610 604 604 599 599 598 598 585 582 580 564 564 563 563 562 553 538

國／〔初〕〔再〕〔廣〕〔圓〕。  
 觀／〔初〕〔再〕〔廣〕〔勸〕。  
 垂／〔初〕〔再〕〔廣〕〔乘〕。  
 跏／〔初〕〔再〕〔廣〕〔加〕。  
 慈／〔初〕〔再〕〔廣〕〔慈悲〕。  
 世／〔初〕〔再〕〔廣〕ナシ。  
 想／〔再〕〔相〕。  
 頭／〔初〕〔再〕〔廣〕〔顯〕。  
 繩／〔初〕〔廣〕〔縵〕〔再〕〔幔〕。  
 足／〔初〕〔再〕〔廣〕〔立〕。  
 許／〔初〕〔再〕〔廣〕〔計〕。  
 如／〔初〕〔再〕〔廣〕〔他〕。  
 華香／〔初〕〔再〕〔廣〕〔香花〕。  
 牙／〔初〕〔再〕〔廣〕〔互〕。  
 无因／〔再〕〔因緣〕。  
 我／〔初〕〔再〕〔廣〕〔或〕。  
 自／〔初〕〔再〕〔廣〕〔目〕。  
 頃／〔初〕〔再〕〔廣〕〔傾〕。  
 寶／〔初〕〔再〕〔廣〕〔寶流〕。  
 切／〔再〕〔一〕。  
 万／〔初〕〔再〕〔廣〕〔方〕。  
 中／〔再〕〔日中〕。  
 名／〔再〕〔成〕。

708 707 704 690 690 690 688 684 683 683 677 664 663 662 660 659 656 648 647 646 645 641

化／〔初〕〔再〕〔廣〕〔他〕。  
 十无盡／〔初〕〔再〕〔十无盡戒〕。  
 聞／〔初〕〔再〕〔廣〕〔聞〕。  
 不／〔初〕〔再〕〔廣〕〔若不〕。  
 无益／〔初〕〔再〕〔終は無益〕〔廣〕〔是无益〕。  
 便／〔初〕〔再〕〔廣〕〔使〕。  
 髓／〔再〕〔徹髓〕。  
 吼／〔初〕〔再〕〔廣〕〔孔〕。  
 衆／〔初〕〔再〕〔廣〕〔血〕。  
 吼／〔初〕〔再〕〔廣〕〔孔〕。  
 初／〔初〕〔再〕〔廣〕〔取初〕。  
 枝／〔初〕〔再〕〔廣〕〔披〕。  
 疑／〔初〕〔再〕〔廣〕〔凝〕。  
 網／〔初〕〔再〕〔廣〕〔納〕。  
 陀／〔初〕〔再〕〔廣〕〔絶〕。  
 樂／〔再〕〔廣〕〔音樂〕。  
 千／〔初〕〔再〕〔廣〕〔于〕。  
 逕／〔再〕〔經〕。  
 真／〔初〕〔再〕〔廣〕〔直〕。  
 國／〔初〕〔再〕〔廣〕〔因〕。  
 行／〔廣〕〔一〕。  
 垂／〔初〕〔再〕〔廣〕〔乘〕。

755 754 753 753 752 752 750 749 748 744 744 743 740 740 736 734 726 722 720 720 709

罪／【初】【再】【廣】「衆」。  
敢／【初】【再】【廣】「敢作」。  
歸命／【再】「歸命礼」。  
阿弥陀佛／【初】【再】【廣】「稱阿弥陀佛」。  
意／【初】【再】【廣】「慈」。  
權／【初】【再】【廣】「擁」。  
稱念／【初】【再】【廣】「稱礼念」。  
不離／【再】「常不離」。  
既／【再】「今既」。  
重／【初】【再】【廣】「重願」。  
弥陀／【初】【再】【廣】「弥陀經」。  
忍／【初】【再】【廣】「即」。  
是說／【初】【再】【廣】「說是」。  
750 間 脫文カ。／【初】【再】【廣】「南西北方及上下一方如恒河沙等諸佛」。  
根／【初】【再】【廣】「相」。  
云／【初】【再】【廣】「云何」。  
護／【初】【再】【廣】「護念」。  
及七日／【初】【再】【廣】「ナシ」。  
下下／【再】「下」。  
證／【初】【再】【廣】「護」。  
知／【初】【再】【廣】「若」。

## 附 開宝蔵本の復元

従来、開宝蔵本『集諸経礼懺儀』卷下の現存は確認されておらず、七寺本は転写本と雖も貴重な遺例であることは言を俟たない。ただし本書は開宝蔵本の転写本ではあるが臨写本ではない。その書式は一紙二六行、一行一七字前後と、開宝蔵本の版式（一紙二三行、一行一四字詰）を留めておらず、欠筆も認められない等、その形態的特色は失われており、また内容上、誤写・脱文と推測される箇所がまみられる等、七寺本を直ちに開宝蔵本と見なすことはできない。

これに対し、同じく開宝蔵本の系統（第一類）に属する初雕本、再雕本、金蔵本は、何れも宋太祖の父の諱（趙弘殷）に当たる「弘」の欠筆が認められ（第二張三三行、第三四張七八一行）、版式も概ね毎版二三行（前掲【初雕本・再雕本・金蔵本、每版行数一覧表】参照）、長行部分はほぼ一行一四字詰と、開宝蔵本の版式を踏襲していると推測される。更に字体に關しても三者はほぼ一致しており、開宝蔵本のそれを踏襲しているものと考えられる。このように開宝蔵本の形態的特色をよく保持する三本であるが、前述の『宝性論』弥陀偈（第二張）のように、その本文が各別に異なる箇所も存在し、開版に際し校訂が行われたものと看取され、やはり三本も直ちに開宝蔵本の覆刻と見なすことはできない。ここでは、これら第一類に類別される写本・版本、それぞれの特色を認識した上で、まず高麗初雕本、再雕本、金蔵本を比較することで、従来曖昧であった第一類蔵経本における本文の異同箇所を特定し、一、欠筆箇所、二、文字の増減箇所、三、文字の異同箇所、と類別した上で、開宝蔵本の書式、及び七寺本の本文を判断基準として、その相違箇所に検討を加え、諸本における校訂の実態を端倪すると共に、散逸した祖本である開宝蔵本の本文を推定復元したい。

### 一、欠筆箇所

再雕本では「弘」三箇所（三三・五六三・七八一行）、金蔵本では「弘」四箇所（三三・三三六・五六三・七八一行）、「殷」一箇所（二二二行。宋太祖の父の諱）しか確認されなかった欠筆が、初雕本では「弘」三箇所（三三・三三六・七八一行）、「殷」一箇所（二二三行）、「敬」一六箇所（四一・六九・六九・七〇・七六・二四二・二九九・三一七・三三三・三五四・三八四・三九二・四八三・六四三・七三四・七四〇行。宋太祖の祖父の諱）、



「竟」三箇所（四四七・七七五・七七八行。宋太祖の祖父の兼避字）、「鏡」二箇所（四五〇・五一八行。宋太祖の祖父の兼避字）の計二五箇所と、より多く認められる（【欠筆箇所対照表】参照）。

現存する開宝蔵の遺例より帰納すれば、欠筆は「敬」「弘」「殷」「竟」「鏡」等の対象文字であれば必ず末画を欠く、といった画一的で厳密なものではなく、対象文字の内、欠筆を施す・施さないの基準は定かではない。開宝蔵本に端を発する欠筆という特殊な事象を、初雕本・再雕本・金蔵本の開版において、独自に判断・施行したとは考え難く、三本共通して欠筆する箇所（第二張三行「弘」、第三四張七八一行「弘」）が認められることよりすれば、初雕本・再雕本・金蔵本に認められる欠筆箇所は、底本である開宝蔵本の欠筆を踏襲するものと推測され、初雕本は再雕本・金蔵本に比し、開宝蔵本における欠筆の状況をより留めていると考えられる。ただ第二五張五六三行「弘」に関しては、初雕本が欠筆しないのに対し、再雕本・金蔵本は欠筆しており、開宝蔵本の当該箇所も欠筆するものと推定される。この事例より、初雕本においても欠筆の踏襲が完全でないことが看取される。本稿の復元本文には【欠筆箇所対照表】にみられる二六箇所を反映させたが、実際にはそれを上回る欠筆が施されていたものと推測される。

『校正別録』に採録されていない『集諸経礼懺儀』巻下について、初雕本公開以前においては、初雕本・再雕本、両者の関係は検証不能であるにも拘わらず、無根拠に「再雕本は初雕本の覆刻」とみなす向きもあった。そのような誤謬に対し、上述の第二五張五六三行「弘」の「初雕本が欠筆しないのに対し、再雕本が欠筆している」事例は、再雕本が初雕本の覆刻ではない証左に止まらず、その版下作成に開宝蔵本が用いられたことを示唆するものとして非常に重要な意味を有する注目すべき相違箇所と言える。

34			33	32	28	25	23	22	20		18	17	16	15		14		11	6	4				2		張數
781	778	775	740	734	643	563	518	483	450	447	392	384	354	336	323	317	299	242	122	76	70	69	69	41	32	行数
弘						弘																			弘	再雕本
弘						弘								弘					股						弘	金蔵本
弘	竟	竟	敬	敬	敬		鏡	敬	鏡	竟	敬	敬	敬	弘	敬	敬	敬	敬	股	敬	敬	敬	敬	敬	弘	初雕本

【欠筆箇所対照表】

36	35		34		33		26	20		19	18	16	12	11	7	6	5	4		3	2		張数
818	800	800	774	759	738	736	596	442	441	435	412	348	256	242	138	115	113	84	69	56	36	33	行数
	今	常	礼	戒	終	徹	日	礼	礼	禮		及	國		上	者	除	為	所謂	若	往		再雕本
13	15	15	15	15	15	15	12	14	10	14	14	14	15	6	15	15	15	15	14	15	15	13	
下				戒	終						尊・等		國	礼								聞	初雕本
14	14	14	14	15	15	14	11	14	9	14	16	14	15	7	14	14	14	14	14	14	14	14	
下													礼									聞	金蔵本
14	14	14	14	14	14	14	11	14	9	14	14	14	14	7	14	14	14	14	14	14	14	14	
下										禮				礼								聞	七寺本

【文字の増減箇所対照表】 \* 行数は後掲「復元本文」による。

36	35		34		33		18	12	7	6	5	4	3	2		張数
818	800	800	774	759	738	736	412	256	138	115	113	84	56	36	33	行数
	今	常	礼	戒	終	徹		國	上	者	除	為	若	往		再雕本
13	15	15	15	15	15	15	14	15	15	15	15	15	15	15	13	
下				戒	終		尊・等	國							聞	初雕本
14	14	14	14	15	15	14	16	15	14	14	14	14	14	14	14	
下															聞	金蔵本
14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	
下															聞	七寺本

【「判断不能」箇所を除いた文字の増減箇所対照表】

## 二、文字の増減箇所

前頁【文字の増減箇所対照表】は、再雕本・初雕本・金蔵本を比較し、文字の増減が認められた箇所を一覧し、七寺本の当該箇所を対照したものである。他本に認められる文字が該当箇所に認められない場合を「―」で記した。文字、もしくは「―」の下に数字は、当該行の文字数を示す（七寺本には附していない）。

これら二三箇所は、何れかが文字を増補、或いは削除した箇所であるが、開宝蔵本の版式である一行一四字詰を基準とするならば、一行一五字の箇所は増補、一三字の箇所は削減が行われたであろうことが推測される。この基準に依拠すれば、上記二三箇所の内訳は以下の通り。

### 再雕本における削減

二箇所（二張三三行「聞」、三六張八一八行「下」）。

### 再雕本における増補

一〇箇所（二張三六行「往」、三張五六行「若」、四張八四行「為」、五張一二三行「除」、六張一一五行「者」、七張一三八行「上」、三三張七三六行「徹」、三四張七七四行「札」、三五張八〇〇行「常」「今」）。

### 初雕本における増補

一箇所（一八張四一二行「尊・等」）。

### 初雕本・再雕本における増補

三箇所（二張二五六行「國」、三三張七三八行「終」、三四張七五九行「戒」）。

### 判断不能

七箇所（四張六九行「所為」、一一張二四二行「札」、一六張三四八行「及」、一九張四三五行「禮」、二〇張四四一行「札」・四四二行「札」、二六張五九六行「日」）。

これら内訳より、「判断不能」七箇所を除き、版式のみで増減の判断可能な一六箇所を一覧したものが、前頁【「判断不能」箇所を除いた文字の増減箇所対照表】である（三者の相違の内、二者が一致する箇所に網掛けを施した）。

これら一六箇所における再雕本・初雕本・金蔵本の異同は、三者間で各別に異なることなく、何れも一本が異なり、残りの二本は一致している。つまり、①再雕本が異なり、初雕本と金蔵本が一致、②初雕本が異なり、金蔵本と再雕本が一致、③金蔵本が異なり、初雕本と再雕本

が一致、の三通りに分類される。「判断不能」七箇所を除き、版式のみで増減の判断可能な一六箇所の内、各分類の数と内訳は以下の通り。

- ①再雕本が異なり、初雕本と金蔵本が一致 一二箇所（再雕本における増補一〇箇所、再雕本における削減二箇所）
- ②初雕本が異なり、金蔵本と再雕本が一致 一箇所（初雕本における増補一箇所）
- ③金蔵本が異なり、初雕本と再雕本が一致 三箇所（初雕本・再雕本における増補三箇所）

③の事例（金蔵本が祖形を留め、初雕本・再雕本が増補）より、三本の内、二本が一致している方が祖形を留めている、と単純に言い得ないことが判明する。その一方で、①の例より、初雕本と金蔵本が一致する場合は祖形を留めている蓋然性が高い、という指標が得られる。

問題となるのは「判断不能」の七箇所である。この内、一一張二四二行「礼」、二〇張四四一行「礼」、二六張五九六行「目」の三箇所は、

	一一張二四二行「礼」	二〇張四四一行「礼」	二六張五九六行「目」
【再雕本】	■懺已一切恭敬（6）	已至心歸命 <sup>礼</sup> 阿弥陁佛（10）	十六觀作二十拜當 <sup>目</sup> 中時礼（12）
【初雕本】	<sup>礼</sup> 懺已一切恭敬（7）	已至心歸命■阿弥陁佛（9）	十六觀作二十拜當■中時礼（11）
【金蔵本】	<sup>礼</sup> 懺已一切恭敬（7）	已至心歸命■阿弥陁佛（9）	十六觀作二十拜當■中時礼（11）
【七寺本】	<sup>礼</sup> 懺已一切恭敬	已至心歸命■阿弥陁佛	十六觀作二十拜當■中時礼

\*増減の対象となっている文字を□で囲み、その文字が認められない場合は当該箇所に■を記した。（ ）内は当該行の文字数を示す。

と当該行の文字数が一四字に満たない為、開宝蔵の版式より判断することができない。この三箇所は、初雕本・金蔵本に文字が認められ、再雕本にのみ認められない（一一張二四二行「礼」）、再雕本にのみ文字が認められ、初雕本・金蔵本には認められない（二〇張四四一行「礼」、二六張五九六行「目」と、増減の違いはあるが、何れも再雕本のみが異なり、初雕本と金蔵本は一致している。前述の「初雕本と金蔵本が一致する場合は祖形を留めている蓋然性が高い」という指標、並びに七寺本の当該箇所（二二行、四〇二行、五五三行）を勘案すれば、これらの三箇所は、再雕本における改訂（削減（一一張二四二行「礼」、増補（二〇張四四一行「礼」、二六張五九六行「目」）であることが推測される。

一方、第四張六九行「所謂」、第一六張三四八行「及」、第一九張四三五行「禮」、第二〇張四四二行「礼」の四箇所に関しては、文字の増減に拘わらず、三本何れもが一行一四字となっている。今、当該箇所に後続する行を併せ比較すると以下の通り（再雕本にのみ認められる文字を□で囲み示した）。

#### 第四張六九行「所謂」

#### 第一六張三四八行「及」

<p>【再雕本】 一者恭敬修所謂恭敬礼拜彼佛及（14） 彼一切聖衆等故名恭敬修畢命為（14） 期云不中止即是長時修（10、</p>	<p>【再雕本】 普為師僧父母及善知識法界衆生（14） 断除三障同得往生阿弥陀佛國歸（14） 命懺悔（3、</p>
<p>【初雕本】 一者恭敬修恭敬礼拜彼佛及彼一（14） 切聖衆等故名恭敬修畢命為期云（14）</p>	<p>【初雕本】 普為師僧父母善知識法界衆生断（14） 除三障同得往生阿弥陀佛國歸命（14）</p>
<p>【金蔵本】 不中止即是長時修（8、</p>	<p>【金蔵本】 懺悔（2、</p>

第一九張四三五行「禮」

【再雕本】 福迴生安樂土迴向已至心歸命禮 (14)

阿弥陀佛 (4、)

【初雕本】 福迴生安樂土迴向已至心歸命阿 (14)

【金蔵本】 弥陀佛 (3、)

第二〇張四四二行「礼」

【再雕本】 第四依天親菩薩願往生礼讃偈二 (14)

十拜當後夜時礼 懺悔同前後 (7、)

【初雕本】 第四依天親菩薩願往生讃偈二十 (14)

【金蔵本】 拜當後夜時礼 懺悔同前後 (6、)

これらの四箇所は、増補、或いは削減が行われた当該行自体は一四字詰であるが、それは次行、或いは次々行において字数を調整している為であることが看取される。つまり、

- ・再雕本が増補した字数分を、次行・次々行へ送ることで、一行一四字詰とする。
- ・初雕本・金蔵本が削除した字数分を、次行・次々行から繰ること、一行一四字詰とする。

という二つの可能性が想定され、何れの増補、或いは削減かを、開宝蔵の版式により判断することはできない。この四箇所の内、第四張六九行「所謂」、第一六張三四八行「及」、第二〇張四四二行「礼」の三箇所は、何れも再雕本にのみ文字（「所謂」「及」「礼」）が認められ、初雕本・金蔵本には認められず、七寺本（六一行、三二四行、四〇三行）にも当該文字は認められない。よってこれらの三箇所についても、「初雕本と金蔵本が一致する場合は祖形を留めている蓋然性が高い」という指標、並びに七寺本の当該箇所より、再雕本における増補であることが推測される。

第一九張四三五行「禮」に関しては、初雕本・金蔵本の当該箇所と同字は認められないが、七寺本当該箇所（三九七行）には字体は異なるが「礼」の文字が認められ、再雕本・七寺本の増補（衍字）、初雕本・金蔵本の削除（脱字）の両可能性が想定される。ただし、初雕本、再雕本、金蔵本における「礼」「禮」字体の使用状況は、

【初雕本】	【金蔵本】	「礼」一四六／「禮」〇（全一四六箇所中）
【再雕本】		「礼」一四八／「禮」一、（全一四九箇所中）

と、初雕本・金蔵本においては、一四六箇所全てが「礼」であり、また再雕本においても、当該箇所以外の一四八箇所は全て「礼」とする。この用字状況より判断するならば、当該箇所「禮」は明らかに異質であり、再雕本における増補（衍字）であることが推定される。

以上、開宝蔵の版式より「判断不能」な七箇所について、初雕本・金蔵本・七寺本と比較した結果、何れも再雕本における改訂（増補〈衍字〉六箇所、削減〈脱字〉一箇所）と推測された。これにより「文字の増減」二三箇所の内訳は以下の通りとなる。

【再雕本】	増補	一九箇所	／	削減	三箇所	*初雕本における増補三箇所と共通するものを含む。
【初雕本】	増補	四箇所	／	削減	〇箇所	*再雕本における増補三箇所と共通するものを含む。
【金蔵本】	増補	〇箇所	／	削減	〇箇所	

「文字の増減箇所」より、再雕本・初雕本の開版時において校訂が行われたことが伺え、その個数より判断すれば、金蔵本が最も開宝蔵本に近接し、以下、初雕本、再雕本の順であると言えるよう。

11		8		6							5	4		3	1	張数
250	236	183	168	137	136	133	132	131	130	119	100	85	82	63	9	行数
懼	惟	觀經	奘	經	永	能	辯	一	雜	正念	理	免	免	心	霜	再雕本
惟	唯	經觀	奘	逕	永	能	弁	十	雜	正念	現	勉	勉	必	沾	初雕本
懼	唯	經觀	奘	經	永	得	弁	十	修	念正	現	勉	勉	必	沾	金蔵本
懼	唯	經觀	奘	逕	求	能	弁	十	修	念	現	勉	勉	必	沾	七寺本

31		30	29		28	27	26		24	23				15	張数
703	692	689	654	648	626	607	580	576	542	528	527	517	515	335	行数
音樂	經	行	相	幔	因縁	一	成	欄	往	待	標	丘	果	慧	再雕本
樂事	逕	行	想	縵	无因	切	名	欄	去	侍	標	五	果	恵	初雕本
音樂	逕	一	想	縵	无因	切	名	欄	去	侍	標	五	早	恵	金蔵本
樂事	逕	行	想	繩	无因	切	名	欄	去	侍	標	五	早	恵	七寺本

【文字の異同箇所対照表】 \* 行数は後掲「復元本文」による。



### 三、文字の異同箇所

前頁【文字の異同箇所対照表】は、再雕本・初雕本・金蔵本を比較し、文字の異同が認められた箇所を一覧し、七寺本の当該箇所を対照したものである。これら異同三一箇所は、字体の相違、字形の近似による誤刻（或いは版木の欠損、印刷の不備）、単純な錯誤とは考え難い例、に分類される。

#### 字体の相違

六箇所（二張九行「霽」「沾」、六張一三二行「辯」「弁」、一三六行「永」「求」、一五張三三五行「慧」「恵」、一三張五二七行「標」「櫛」、二六張五七六行「欄」「攔」）。

#### 字形の近似による誤刻

一四箇所（三張六三行「心」「必」、四張八二・八五行「免」「勉」、五張一〇〇行「理」「現」、六張一三七行「經」「逕」、八張一六八行「栗」「爽」、一一張三三六行「惟」「唯」、二五〇行「懼」「惟」、二三張五一五行「果」「早」、五一七行「丘」「五」、五二八行「待」「侍」、二九張六四八行「幔」「縵」、六五四行「相」「想」、三二張六九二行「經」「逕」）。

#### 単純な錯誤とは考え難い例

一一箇所（六張一一九行「正念」「念正」、一三〇行「雜」「修」、一三二行「十」「十」、一三三行「𩚑」「𩚑」、一三三行「𩚑」「𩚑」、八張一八三行「觀經」「經觀」、二四張五四二行「徃」「去」、二六張五八〇行「成」「名」、二七張六〇七行「一」「切」、二八張六二六行「因縁」「无因」、三〇張六八〇行「行」「一」、三二張七〇三行「苴樂」「樂事」）。

再雕本・初雕本・金蔵本で使用される字体はほぼ一致しており、開宝蔵本を踏襲していること、つまり開宝蔵本を底本として版下を作成したことが推測される。そうであるならば字体の相違は開版時における改変を意味するものであり、「文字の異同」として採録した。

これら三一箇所における再雕本・初雕本・金蔵本の異同も、前述「文字の増減箇所」同様、三者間で各別に異なることなく、何れも一本が異なり、残りの二本は一致するもので、①再雕本が異なり、初雕本と金蔵本が一致、②初雕本が異なり、金蔵本と再雕本が一致、③金蔵

本が異なり、初雕本と再雕本が一致、の三通りに分類される。

- ①再雕本が異なり、初雕本と金蔵本が一致 二二箇所
- ②初雕本が異なり、金蔵本と再雕本が一致 五箇所
- ③金蔵本が異なり、初雕本と再雕本が一致 四箇所

これら文字の異同箇所に対し、文脈・文義より検討を加えることは可能であるが、それが再雕本・初雕本・金蔵本における誤刻・改訂であるのか、或いは開宝蔵本が元来そうであったのかを判断することはできない。つまりテキストとしての文義による正誤判断は可能であるが、それは何れが祖本（開宝蔵本）に近接するのかを意味するものではない。

そこで「開宝蔵本の復元」を目的とする本稿では、前述「文字の増減箇所」において帰納された、「初雕本と金蔵本が一致する場合は祖形を留めている蓋然性が高い」という指標に則り判断を行いたい。ただ、問題は②初雕本が異なり、金蔵本と再雕本が一致、③金蔵本が異なり、初雕本と再雕本が一致のケース、つまり初雕本と金蔵本が相違した場合である。この場合当然、前述の指標は適用できない。それでは②、③の計九箇所に対し、何れが開宝蔵本の文字を留めているのかを如何に判断すべきであろうか。この問題に対し、ここでは開宝蔵本の転写本であると推定される七寺本を判断基準として用いたい。

前掲、【「判断不能」箇所を除いた文字の増減箇所対照表】所載の、版式のみで増減の判断可能な一六箇所に対し、七寺本は本来開宝蔵本の形式を留めていると推定される一行一四字詰の用字と完全に一致している。

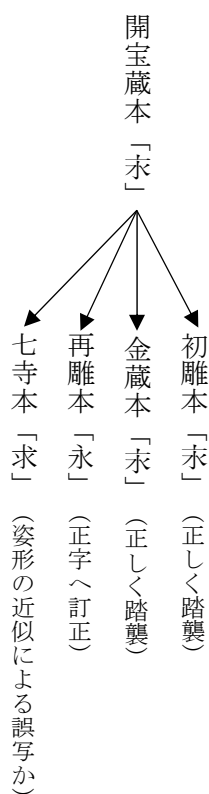
また、①再雕本が異なり、初雕本と金蔵本が一致する二二箇所（前掲【文字の異同箇所対照表】網掛け部分）に対し、七寺本を対照すると、一八箇所（一張九行「沾」、三張六三行「必」、四張八二・八五行「勉」、五張一〇〇行「現」、六張一三一行「十」、一三三行「弁」、八張一八三行「經觀」、一一張二三六行「唯」、一五張三三五行「惠」、二三張五一七行「五」、五二七行「櫛」、五二八行「侍」、二四張五四二行「去」、二六張五八〇行「名」、二七張六〇七行「切」、二九張六五四行「想」、三一張六九二行「逕」）が、再雕本ではなく、初雕本と金蔵本的一致と同字を用いている。

なお、①再雕本が異なり、初雕本と金蔵本が一致する二二箇所（前掲【文字の異同箇所対照表】網掛け部分）に対し、初雕本と金蔵本の一致と七寺本の用字が異なる四箇所は、以下の通り。

	【初雕本】	【金蔵本】	【七寺本】	【再雕本】
六張一三六行	求	求	求	永
二六張五七六行	欄	欄	欄	欄
二八張六二六行	无因	无因	无因	因縁
二九張六四八行	縵	縵	縵	幔

【初雕本】 【金蔵本】 「求」、 【七寺本】 「求」

初雕本・金蔵本の六張一三六行「求」は永の姿形書換字であるが、七寺本は「求」とする。七寺本「求」を姿形の近似による誤写と仮定した場合、その本来の文字は、再雕本「永」ではなく、「求」により近似する初雕本・金蔵本の「求」である蓋然性が高いと推測する。



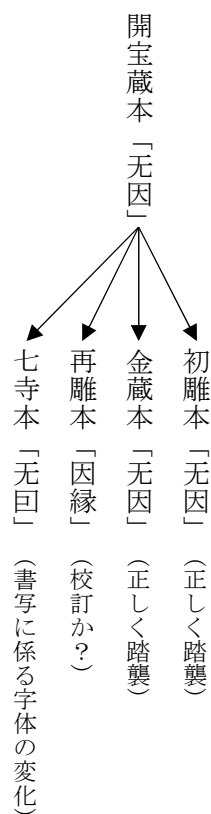
同様に、再雕本開版時における正字への訂正と推測される箇所として、六張一三二行「弁」(初雕本・金蔵本「弁」、再雕本「辯」)、一五張三三五行「恵」(初雕本・金蔵本「恵」、再雕本「慧」)が指摘できる。これらの箇所は再雕本開版時の用字規範、或いは校勘に用いられたテキスト(契丹版本か)の反映と捉えられるものであり、校正の実情が伺えるものとして注目される。

【初雕本】 【金蔵本】 「欄」、【七寺本】 「欄」

初雕本・金蔵本の二六張五七六行「欄」を、七寺本は「欄」とする。再雕本も「欄」であり、開宝蔵本が何れの形であつたか判断は難しいが、木偏と手偏の通用を考えれば、七寺本「欄」も初雕本・金蔵本同様「欄」を書写したものか。

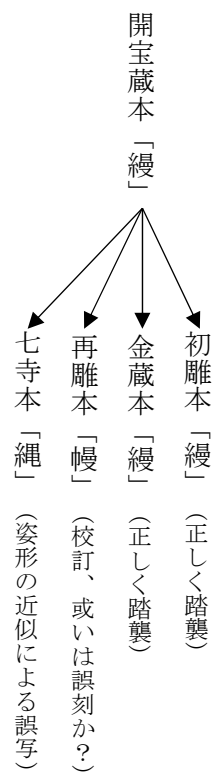
【初雕本】 【金蔵本】 「无因」、【七寺本】 「无回」

初雕本・金蔵本の二八張六二六行「无因」を、七寺本は「无回」とする。初雕本・金蔵本「因」(正字)、七寺本「回」(異体字)と、正字・異体字の相違は生じているが、開宝蔵本は「无因」であり、再雕本にみられる「因縁」ではないことが推測される。



【初雕本】 【金蔵本】 「縵」、【七寺本】 「繩」

初雕本・金蔵本の二九張六四八行「縵」を、七寺本は「繩」、再雕本は「幔」とする。何れが開宝蔵本の形を留めているのか判断は難しいが、七寺本「繩」(誤写か)から推測すれば、「縵」の蓋然性が高いか。



以上、初雕本と金蔵本の一致と七寺本の用字が異なる四箇所についても、少なくとも「末」「求」「无因」「无因」「縵」「縵」の三箇所は、七寺本における誤写、或いは字体の変化と推測される。写本の特性として誤写は避けられないものであるが、それら誤写は直ちに退けられるべきものではない。「末」と「求」、「縵」と「縵」といった字形の近似や、「因」と「因」といった字体の相違は、開宝蔵本の用字そのものではないが、その原形の一部を留めるものであり、誤写・字体の変化の可能性を認識し、留意することにより、間接的に開宝蔵本の用字を示唆するものとして判断基準になり得るものと考ええる。

以上、七寺本を判断基準として参照することの有用性を確認した上で、誤写の可能性に留意しつつ、②初雕本が異なり、金蔵本と再雕本が一致(五箇所)、③金蔵本が異なり、初雕本と再雕本が一致(四箇所)に対し、七寺本を指標として検討を加えたい。

②初雕本が異なり、金蔵本と再雕本が一致(五箇所)	【初雕本】	【金蔵本】	【七寺本】
六張一三七行 八張一六八行 一一張二五〇行 一二張五一五行 三三張七〇三行	逕、 夷、 惟、 果、 樂事、	經、 夷、 懼、 早、 啻樂	遙、 夷、 懼、 早、 樂事

\*七寺本と合致する方に傍点を附した。

七寺本を指標として参照することにより、八張一六八行は「栗」、一一張二五〇行は「懼」、二三張五一五行は「早」であり、金蔵本・再雕本が祖形を留め、初雕本が改訂を行ったと判断される。また三一張七〇三行は「樂事」であり、初雕本が祖形を留め、金蔵本・再雕本が改訂を行ったと判断される。

なお、六張一三七行、初雕本「逕」、金蔵本・再雕本「經」に対して、七寺本は「遙」とし何れにも合致しない。この場合、上述の通り七寺本における誤写の可能性を想定する必要がある。初雕本「逕」と金蔵本・再雕本「經」の旁「逕」は、両者共通するものであり、検討の必要はない。この「逕」を七寺本は「逕」と誤写したことが推測される。問題は偏であり、初雕本「逕」か、金蔵本・再雕本「糸」かであるが、これについては七寺本が「逕」を留めていることより、本来開宝蔵本は初雕本にみられる「逕」であつたと推測される。

### ③ 金蔵本が異なり、初雕本と再雕本が一致（四箇所）

\* 七寺本と合致する方に傍点を附した。

	【金蔵本】	【初雕本】	【再雕本】	【七寺本】
六張一一九行	念正			念
六張一三〇行	修	雜		修
六張一三三行	得	行、		行
三〇張六八九行	一			

七寺本を指標として参照することにより、六張一三〇行は「修」であり、金蔵本が祖形を留め、初雕本・再雕本が改訂を行ったと判断される。また六張一三三行は「𩇑」、三〇張六八九行は「行」であり、初雕本・再雕本が祖形を留め、金蔵本が改訂を行ったと判断される。

なお、六張一一九行、金藏本「念正」、初雕本・再雕本「正念」に対して、七寺本は「念」とし何れにも合致しない。この場合も七寺本における誤写（脱字）の可能性が想起される。ただし、各本の当該箇所を参照すると、

【初雕本】 【再雕本】 参何以故乃由雜縁乱動失正、念故與（一五字）

【金藏本】 参何以故乃由雜縁乱動失念、正故與（二五字）

【七寺本】 参何以故乃由雜縁乱動失念、故與（一四字）

\*七寺本の字詰は、初雕本・再雕本・金藏本に対応させ改めた。

と、当該行は何れも一行一五字詰であり、「念」とする七寺本が一行一四字詰である開宝藏本の祖形を留めるものと推測され、初雕本、再雕本、金藏本の何れもが「正」の字を増補したものと判断される。

以上、開宝藏本の形態的特色をよく保持しつつも、開版に際し校訂・改版が行われたと考えられる初雕本、再雕本、金藏本の三本を比較対照することで、従来曖昧であった第一類藏経本における本文の異同箇所を特定し、それを欠筆箇所、文字の増減箇所、文字の異同箇所に分類した上で、開宝藏本の書式、及び開宝藏本の転写本である七寺本を判断基準として、散逸し現存しない開宝藏本の本文を推定してきた。上述の校勘を通じ推定された開宝藏本復元本文を本稿末尾に附す。

註

1 欠筆については陳垣『史諱举例』（中華書局、二〇〇四）、尾崎康『正史宋元版の研究』序章、附節二「避諱欠筆に関して」（汲古書院、一九八九）参照。

2 三三―三四行間「有願生彼国者勸修五念門五門若具定」、四一三―四一四間「具足妙莊嚴 無垢光焰熾 明淨曜世間 願共諸衆生 往生安樂国 至心帰命礼 西方阿弥陀仏」、七四九―七五〇間「南西北方及上下二一方 如恒河沙等諸仏」の脱文が認められる。ただし「南西北……」の一文は妙蓮寺蔵本も同文を脱しており、両本に共通する祖本における脱文と考えられる。なお妙蓮寺蔵本との脱文の一致より、七寺本が直接開宝蔵本を藍本とするものではないことが推察される。

3 守其等撰『校正別録』によれば、再雕版開版時の校勘には開宝蔵、高麗初雕版、契丹版が用いられたことが伺える。前述第二五張五六三行「弘」の欠筆より、『集諸経礼懺儀』卷下の底本には開宝蔵本が使用されたことが推定されるが、開宝蔵本・初雕本と用字が異なる（正字を用いる）当該箇所は、契丹版本による校訂か。なお檀王法林寺蔵本（四六行）、金剛寺蔵本（四一行）も当該箇所は「未」とする。



## 開宝藏本『集諸經礼懺儀』卷下 復元本文

### 凡例

一、本稿は高麗大藏經初雕版本・再雕版本、金藏大藏經本、七寺一切經本『集諸經礼懺儀』卷下を対校し、開宝藏本を推定復元するものであり、上段に復元本文を示した。

一、高麗大藏經初雕版本・再雕版本、金藏大藏經本、七寺一切經本『集諸經礼懺儀』卷下を対校し、異読がみられた場合、復元本文の当該文字の右肩に＊を附し、下段に「校註」を示した。

略号は以下の通り。

【七】 七寺一切經本

【初】 高麗大藏經初雕本

【再】 高麗大藏經再雕本

【廣】 金藏大藏經廣勝寺本

一、行取り、漢字字体は原則として高麗大藏經初雕版本・再雕版本、金藏大藏經本により推定されるものに従った。

一、欠筆文字はゴチックにて示した。

一、読解の便の為、各張始行の右傍に張数を標し、各行頭に行番号を附した。

一、行番号の上に「日没」「初夜」「中夜」「後夜」「晨朝」「日中」、及び丸数字を附し、各時礼の始行と礼数を示した。

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
觀作二十拜當午時礼	第六僧善導願往生礼讃偈依十六	十二拜當辰朝時礼	第五依彦琮法師願往生礼讃偈二	十拜當後夜時礼	第四依天親菩薩願往生礼讃偈二	六拜當中夜時礼	第三依龍樹菩薩願往生礼讃偈十	讚偈二十三拜當初夜時礼	第二謹依大乘經採集要文以為礼	拜當日沒時礼	十二光名勸稱礼念定生彼國十九	第一依釋迦及十方諸佛讚歎弥陀	沾 <sup>*</sup> 遐代耳何者	續 <sup>*</sup> 係心助成往益亦願曉悟未聞遠 <sup>*</sup>	生礼讚集在一處分作六時唯欲相	經及龍樹天親此土沙門等所造往	弥陀佛國 六時礼讚偈謹依大乘	勸一切衆生願生西方極樂世界阿	往生礼讚偈一卷 比丘善導集記	大唐西崇福寺沙門智昇撰	集諸經礼懺儀卷下	英

【第一張】

8 【初】【再】【廣】「係」、「七」「保」。  
 【初】【再】【廣】に依る。  
 8 【初】【再】【廣】「亦願」、「七」「亦願亦願」。  
 【初】【再】【廣】に依る。  
 8 【初】【再】【廣】「速」、「七」「速」。  
 【初】【再】【廣】に依る。  
 9 【七】【初】【廣】「沾」、「再」「霑」。  
 【七】【初】【廣】に依る。  
 11 【初】【再】【廣】「勸」、「七」「觀」。  
 【七】【初】【廣】に依る。

23 問曰今欲勸人往生者未知若為安  
 24 心起行作業定得往生彼國土也答  
 25 曰必欲生彼國土者如觀經說先具  
 26 三心必得往生何者為三一者至誠  
 27 心所謂身業礼拜彼佛口業讚歎稱  
 28 揚彼佛意業專念觀察彼佛凡起三  
 29 業必湏真實故名至誠心二者深心  
 30 即是真實信心信知自身是具足煩  
 31 惱凡夫善根薄弱少流轉三界不出火  
 32 宅今信知弥陀本願<sup>\*</sup>及稱名号  
 33 下至十聲聞等定得往生乃至一念  
 34 无有疑心故名深心三者迴向發願  
 35 心所作一切善根悉皆迴願往生故  
 36 名迴向發願心具此三心必得生也  
 37 若少一心即不得生如觀經具說應知  
 38 又如天親淨土論云若有願生彼國  
 39 者勸修五念門五門若具定得往生  
 40 何者為五一者身業礼拜門所謂一  
 41 心專至恭敬合掌香華供養礼拜彼  
 42 阿弥随佛礼即專礼彼佛畢命為期  
 43 不雜餘礼故名礼拜門  
 44 二者口業讚歎門所謂專憶讚歎彼  
 45 佛身相光明一切聖衆身相光明及

30 【初】【再】【廣】「真實」、「七」「真」。 【初】【再】【廣】に依る。

32 【初】【再】【廣】「摺願」、「七」「摺願及願」。 【初】【再】【廣】に依る。

33 【七】【初】【廣】「十聲聞」、「再」「十聲」。 【七】【初】【廣】に依る。

34 【初】【再】【廣】「深」、「七」「澡」。 【初】【再】【廣】に依る。

36 【七】【初】【廣】「生」、「再」「往生」。 【七】【初】【廣】に依る。

38-40 【初】【再】【廣】「有願生彼國者勸修五念門五門若具定」、「七」なし。  
 【初】【再】【廣】に依る。

【第三張】

46 彼國中一切寶莊嚴光明等故名讚  
 47 歎門  
 48 三者意業憶念觀察門所謂專意念  
 49 觀彼佛及一切聖衆身相光明國土  
 50 莊嚴等如觀經說唯除睡時恒憶恒  
 51 念恒想恒觀此事等故名觀察門  
 52 四者作願門所謂專心若晝若夜一  
 53 切時一切處三業四威儀所作功德  
 54 不問初中後皆須真實心中發願願  
 55 生彼國故名作願門  
 56 五者迴向門所謂專心自作善根及  
 57 一切三乘五道一一聖凡等所作善  
 58 根深生隨喜如諸佛菩薩所作隨喜  
 59 我亦如是隨喜以此隨喜善根及已  
 60 所作善根皆悉與衆生共之迴向彼  
 61 國故名迴向門  
 62 又到彼國已得六神通迴入生死教  
 63 化衆生徹窮後際必无厭足乃至成  
 64 佛亦名迴向門五門既具定得往生  
 65 一一門與上三心合隨起業行不問  
 66 多少皆名真實業也應知  
 67 又觀行四修法用策三心五念之行  
 68 速得往生何者為四

48 【初】【再】【廣】「意念」、「七」「念」。 【初】【再】【廣】に依る。

50-51 【初】【再】【廣】「恒念」、「七」「念」。 【初】【再】【廣】に依る。

52 【初】【再】【廣】「作願」、「七」「唯願」。 【初】【再】【廣】に依る。

56 【七】【初】【廣】「自」、「再」「若自」。 【七】【初】【廣】に依る。

57 【初】【再】【廣】「五道」、「七」「五乘道」。 【初】【再】【廣】に依る。

58 【初】【再】【廣】「生」、「七」「坐」。 【初】【再】【廣】に依る。

63 【七】【初】【廣】「必」、「再」「心」。 【七】【初】【廣】に依る。

【第四張】

69 一者恭敬修恭敬<sup>\*</sup>礼拜彼佛及彼一  
70 切聖衆等故名恭敬修畢命為期誓  
71 不中止即是長時修  
72 二者無餘修所謂專稱彼佛名專念  
73 專想專礼專讚彼佛及一切聖衆等  
74 不雜餘業故名無餘修畢命為期誓  
75 不中止即是長時修  
76 三者無間修所謂相續恭敬礼拜稱  
77 名讚歎憶念觀察迴向發願心心相  
78 續不以餘業來間故名無間修又不  
79 以貪瞋煩惱來間隨犯隨懺不令隔  
80 念隔時隔日常使清淨亦名無間修  
81 畢命為期誓不中止即是長時修  
82 又菩薩已勉<sup>\*</sup>生死所作善法迴求佛  
83 果即是自利教化衆生盡未來際即  
84 是利他然今時衆生悲煩惱繫縛未<sup>\*</sup>  
85 勉惡道生死等苦隨緣起行一切善  
86 根且速迴願往生弥陀佛國到彼國  
87 已更無所畏如上四修自然任運自  
88 利利他無不具足應知 又如文  
89 殊波若云欲明一行三昧唯勸獨處  
90 空閑捨諸乱意係心一佛不觀相貌  
91 專稱名字即於念中得見彼阿弥陀

69 【七】【廣】「恭敬」、【初】【再】「所謂恭敬」。 【初】第69・70行は各15字詰め  
となっており、【再】は第71行が10字となっている（【廣】【初】は8字）。これは  
「所謂」2字の増補に起因すると考えられる。よって【七】【廣】に依る。

73 【初】【再】【廣】「聖衆」、【七】「聖衆生」。 【初】【再】【廣】に依る。  
74 【初】【再】【廣】「餘業」、【七】「業」。 【初】【再】【廣】に依る。

77-78 【初】【再】【廣】「相續」、【七】「相讚」。 【初】【再】【廣】に依る。  
78-79 【初】【再】【廣】「不以」、【七】「以」。 【初】【再】【廣】に依る。

82 【七】【初】【廣】「勉」、【再】「免」。 【七】【初】【廣】に依る。

84 【七】【初】【廣】「煩惱」、【再】「為煩惱」。 【七】【初】【廣】に依る。

84 【初】【再】【廣】「縛」、【七】「練」。 【初】【再】【廣】に依る。

85 【七】【初】【廣】「勉」、【再】「免」。 【七】【初】【廣】に依る。

85 【初】【再】【廣】「隨緣」、【七】「隨」。 【初】【再】【廣】に依る。

88 【初】【再】【廣】「無不」、【七】「不无」。 【初】【再】【廣】に依る。

89 【初】【再】【廣】「一行三昧」、【七】「一切味」。 【初】【再】【廣】に依る。

【第五張】

114 113 112 111 110 109 108 107 106 105 104 103 102 101 100 99 98 97 96 95 94 93 92  
 佛及一切佛等問曰何故不令作觀  
 直遣專稱名字者有何意也  
 答曰乃由衆生障重境細心鈍識  
 神飛觀難成就是以大聖悲憐直勸  
 專稱名字正由稱名易故相續即生  
 問曰既遣專稱一佛何故境現即多  
 此豈非邪正相交一多雜現也  
 答曰佛佛齊證形无二別縱使念一  
 見多乖何大道現也 又如觀經云  
 行觀坐觀礼念等皆湏面向西方者  
 取勝如樹先傾倒必隨曲故必有事  
 導不及向西方者但作向西想亦得  
 問曰一切諸佛三身同證悲智果圓  
 亦應无二隨方礼念課稱一佛亦應  
 得生何故偏歎西方勸專礼念等有  
 何義也 答曰諸佛所證平等是  
 一若以願行來収非無因緣然弥陀  
 世尊本發深重誓願願以光明名号  
 攝化十方但使信心求念上盡一形  
 下至十聲一聲等以佛願力易得往  
 生是故釋迦及以諸佛勸向西方為  
 別異尔亦非是稱念餘佛不誡障滅  
 罪也應知若能如上念念相續畢命為

114	113	109	108	103	100	92
【初】	【七】	【初】	【初】	【初】	【七】	【初】
【再】	【初】	【再】	【再】	【再】	【初】	【再】
【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】
何れも15字詰め。	「障」、「再」「除障」。	「世尊」、「七」「尊」。	「因縁」、「七」「因」。	「尋」、「七」「等」。	「道現」、「再」「道理」。	「問曰」、「七」「問」。
【七】	【七】	【初】	【初】	【初】	【七】	【初】
にも異文なし。当初から15字詰めか。	【初】	【再】	【再】	【再】	【初】	【再】
	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【初】	【廣】
	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。

137 136 135 134 133 132 131 130 129 128 127 126 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115  
 期十即十生百即百生何以故無外  
 雜緣得正念故與佛本願得相應故  
 不違教故隨順佛語故若欲捨專修  
 雜業者百時希得一二千時希得五  
 三何以故乃由雜緣亂動失念故與  
 佛本願不相應故與教相違故不順  
 佛語故係念不相續故憶想間斷故  
 迴願不殷重真實故貪瞋諸見煩惱  
 來間斷故无有慚愧懺悔心故懺悔  
 有三品一要二略三廣如下具說隨  
 意用皆得 又不相續念報彼佛恩  
 故心生輕慢雖作業行常與名利相  
 應故人我自覆不親近同行善知識  
 故樂近雜緣自障障他往生正行故  
 何以故余比自見聞諸方道俗解行  
 不同專修有異但使專意作者十即  
 十生修雜不至心者千中无十此二  
 行得失如前已弁仰願一切往生人  
 等善自思量已能令身願生彼國者  
 行住坐卧必須勵心剋己晝夜莫廢  
 畢命為期止在一形似如少苦前念  
 命終後念即生彼國長時永却常受  
 無為法樂乃至成佛不逕生死豈非

114  
115  
【七】【初】【廣】「為期」、【再】「為期者」。 【七】【初】【廣】に依る。

117  
【初】【再】【廣】「欲」、【七】「故」。 【初】【再】【廣】に依る。

119  
【七】「失念」、【初】【再】「正念」、【廣】「念正」。 【初】【再】【廣】何れも15字  
 詰め。改刻の証左として【初】は「念」の字体が他の箇所と異なる。【七】に依

る。  
120  
【初】【再】【廣】「本願」、【七】「大願」。 【初】【再】【廣】に依る。

126  
127  
【初】【再】【廣】「相應」、【七】「相應」。 【初】【再】【廣】に依る。

130  
【七】【廣】「專修」。【初】【再】「專雜」。 【七】【廣】に依る。

131  
【七】【初】【廣】「十」、【再】「一」。 【七】【初】【廣】に依る。

133  
【七】【初】【再】「能」、【廣】「得」。 【七】【初】【再】に依る。

134  
【初】【再】【廣】「剋」、【七】「剋」。 【初】【再】【廣】に依る。

135  
【初】【再】【廣】「似如」、【七】「如」。 【初】【再】【廣】に依る。

136  
【初】【廣】「求」、【再】「永」、【七】「求」。 【初】【廣】に依る。

137  
【初】「逕」、【七】「遙」、【再】【廣】「經」。 【初】に依る。

③	②	①	日没
160159158157156155154153152151150149148147146145144143142141140139138			
南無西方極樂世界阿弥陀佛願共 衆生咸歸命故我頂礼生彼國 問曰何故号為阿弥陀 答曰弥陀 經及觀經云彼佛光明无量照十方	迴願往生 南無十方三世盡虛空遍法界微塵 刹土中一切三寶我今稽首礼迴願 往生無量壽國然十方虛空無邊三 寶无盡若礼一拜即是福田无量功 德無窮能至心礼之一拜一一佛上 一一法上一一菩薩聖僧上一一舍 利上皆得身口意業解脱分善根来 資益行者以成己業以斯一行迴願 往生	量壽國 一切三寶我今稽首礼迴願往生无 中下懺悔亦得南無釋迦牟尼佛等 求願往生一十九拜當日没時礼取 第一佛勸礼讚阿弥陀佛十二光名 快哉應知	【第七張】 快哉應知

159	158	138	150	148	146	144	138
【初】	【初】	【七】	【初】	【初】	【初】	【初】	【初】
【再】	【再】	【初】	【再】	【再】	【再】	【再】	【再】
【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】
「弥陀」	「咸」、「七」	「菩薩」	「十方」、「七」	「三世」、「七」	「斯」、「七」	「一佛」、「七」	「哉」、「七」
「阿弥陀」	「滅」	「菩薩上」	「十方方」	「世」	「期」	「佛」	「裁」
【初】	【初】	【再】	【初】	【初】	【初】	【初】	【初】
【再】	【再】	【は当行15字詰め。よって七】	【再】	【再】	【再】	【再】	【再】
【廣】	【廣】		【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】
に依る。	に依る。		に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。



183 182 181 180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163 162 161

國无所障尋唯覓<sup>\*</sup>念佛衆生攝取不捨故名阿弥随佛彼佛壽命及其人民無量无邊阿僧祇劫故名阿弥随又釋迦佛及十方佛讚歎弥随光明有十二種名普勸衆生稱名礼拜相續不斷者現世得无量功德命終之後定得往生如无量壽經說云其有衆生遇斯光者三垢消滅身意柔<sup>\*</sup>熯歡喜踊躍善心生焉若在三塗勤苦之處見此光明无復苦惱壽終之後皆蒙解脫无量壽佛光明顯赫照耀十方諸佛國土莫不聞焉不但我今稱其光明一切諸佛聲聞緣覺諸菩薩衆咸共歎譽亦復如是若有衆生聞其光明威神功德日夜稱說至心不斷者隨其所願得生其國常為諸菩薩聲聞之衆所共歎譽稱其功德佛言我說无量壽佛光明威神巍巍殊妙晝夜一切尚不<sup>\*</sup>能盡白諸行者當知弥随身相光明釋迦如来一切說不能盡者如觀經云一光<sup>\*</sup>明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨今既經觀有如此不思議增上

183	176	174	168	166	163	161
【七】	【初】	【初】	【七】	【初】	【初】	【初】
【初】	【再】	【再】	【再】	【再】	【再】	【再】
【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】
「經觀、	「不斷、	「咸共、	「熯、	「不斷者、	「无邊、	「覓、
【再】	【七】	【七】	【初】	【七】	【七】	【七】
「觀經。」	「斷。」	「盛苦。」	「熯。」	「不斷。」	「无。」	「不見。」
【七】	【初】	【初】	【初】	【初】	【初】	【初】
【初】	【再】	【再】	【再】	【再】	【再】	【再】
【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】
に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。

【第九張】

⑮

16

⑪

⑮

19

願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 超日月光佛

南无西方 極樂世界 超日月光佛

願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國

南無西方 極樂世界 阿彌陀佛

哀愍覆護我令法種增長此世及後

生願佛常攝受願共衆生咸歸命故

我頂礼生彼國

南无西方極樂世界觀世音菩薩願

共衆生咸歸命故我頂礼生彼國

南無西方極樂世界大勢至菩薩願

共衆生咸歸命故我頂礼生彼國

此二菩薩一切衆生臨命終時共持

華臺授與行者阿彌陀佛放大光明

照行者身復與無數化佛菩薩聲聞

大衆等一時授手如彈指頃即得往

生烹韋恩故至心社之一拜

南無西方極樂世界諸菩薩

渭濱乃漁父願士衆生同歸命古

頂社在彼國  
七等者皆塞

此等諸菩薩乃隨佛又迦持行在慈

幸恩故三小補之一升

音悉。聞作父母乃喜。知諸法易。易生  
新。余三章司尋生。可亦施弗國。歸

國際三陸同歩名左三陸弓阿佐國島

【初】【再】【廣】「断除」、【七】「断除除」。

【初】 【再】 【廣】 に依る。

【第二張】

252251 250249248247 246245244243 242241 240239 238 237236 235234233 232231 230

命懺悔  
 至心懺悔  
 南無歸懺十方佛 願滅一切諸罪根  
 今將久近所修善 迴作自他安樂因  
 恒願一切臨終時 勝緣勝境悉現前  
 願觀弥陀大悲主 觀音勢至十方尊  
 仰唯神光蒙授手 乘佛願力生彼國  
 懺悔迴向發願已 至心歸命阿弥随佛  
 次作梵 說偈發願 出寶性論  
 礼懺諸功德 願臨命終時 見无量壽佛  
 无边功德身 我及餘信者 既見彼佛已  
 願得離垢眼 往生安樂國 成无上菩提  
 礼懺已一切恭敬  
 歸佛得菩提 道心恒不退 歸法薩婆若  
 得大惣持門 歸僧息諍論 同入和合海  
 迴願往生 无量壽國 願諸衆生  
 三業清淨 奉持佛教 和南一切賢聖  
 迴願往生 無量壽國  
 人間念念營衆務 不覺年命日夜去  
 如燈風中滅難期 忙忙六道无定趣  
 未得解脫出苦海 云何安然不驚懼  
 各聞強健有力時 自策自勵求常住  
 說此偈已更當心口發願願弟子臨

233 【初】【再】【廣】「因」、【七】「國」。 【初】【再】【廣】に依る。

236 【七】【初】【廣】「唯」、【再】「惟」。 【七】【初】【廣】に依る。

239 【七】【初】「願臨命終時」、【廣】「市經終時」、【再】「布施諸有情 願臨命終時」。【廣】にみられる不自然な割書より「布施諸有情」は増補されたものと推測される。この増補により【再】第一〇・一一紙は二四行詰めとなっている（通常は二三行）。よって【七】【初】に依る。

242 【七】【初】【廣】「礼懺」、【再】「懺」。 【七】【初】【廣】に依る。

247 【七】「无量壽國」、【初】「無量壽國」、【廣】「諸衆等聽說黃昏偈」、【再】「諸衆等聽說黃昏偈」。

【廣】にみられる不自然な割書より「諸衆等聽說黃昏偈」は増補されたものと推測される。この増補により【再】第一〇・一一紙は二四行詰めとなっている（通常は二三行）。よって【初】に依る。

250 【七】【再】【廣】「驚懼」、【初】「驚惟」。 【七】【再】【廣】に依る。

275 274 273 272 271 270 269 268 267 266 265 264 263 262 261 260 259 258 257 256 255 254 253

命終時心不顛倒心不錯乱心不失  
念身心无諸苦痛身心安隱快樂如  
入禪定聖衆現前乘佛本願上品往  
生阿彌陀佛國到彼已得六神通迴  
入十方界救攝苦衆生虚空法界盡  
我願亦如是發願已至心歸命礼阿  
彌陀佛初夜偈云  
煩惱深无底 生死海無邊 度苦船未立  
云何樂睡眠 勇猛勤精進 攝心常在禪  
勤修六度行 菩提道自然  
中夜偈云  
汝起勿抱臭身卧 種種不淨假名人  
如得重病箭入體 衆苦痛集安可眠  
後夜偈云  
時光遷流轉 忽至五更初 無常念念至  
恒與死王居 勸諸行道者 勤修至无餘  
平旦偈云  
欲求寂滅樂 當學沙門法 衣食支身命  
精麁隨衆等  
諸衆等今日晨朝各記六念  
日中偈云  
人生不精進 喻若樹無根 採華置日裏  
能得幾時鮮 人命亦如是 无常湏臾閒

256 【七】【廣】「到彼」、【初】【再】「到彼國」。 【初】【再】は本行を15字詰めとす

256  
257 【初】【再】【廣】「迴入」、【七】「迴向入」。 【初】【再】【廣】に依る。

264 【初】【再】【廣】「臭」、【七】「具」。 【初】【再】【廣】に依る。

272 【初】【再】【廣】「六念」、【七】「云念」。 【初】【再】【廣】に依る。

⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	初夜															
298	297	296	295	294	293	292	291	290	289	288	287	286	285	284	283	282	281	280	279	278	277	276
至心歸命礼 西方阿弥陁佛 慧日照世間	願共諸衆生 往生安樂國	暢發和雅音 歌歎取勝尊 供養弥陁佛	至心歸命礼 西方阿弥陁佛 威然奏天樂	願共諸衆生 往生安樂國	各費天妙華 寶香无價衣 供養弥陁佛	至心歸命礼 西方阿弥陁佛 一切諸菩薩	願共諸衆生 往生安樂國	菩薩比丘衆 窮劫不可計 皆當得往生	至心歸命礼 西方阿弥陁佛 十方佛刹中	願共諸衆生 往生安樂國	及修少福者 其數不可計 皆當得生彼	至心歸命礼 西方阿弥陁佛 小行諸菩薩	願共諸衆生 往生安樂國	六十有七億 不退諸菩薩 皆當得生彼	至心歸命礼 西方阿弥陁佛 於此世界中	願共諸衆生 往生安樂國	深廣无涯底 聞名欲往生 皆悉到彼國	至心歸命礼 西方阿弥陁佛 弥陁智願海	懺悔同前後	文以為讚偈二十三拜當初夜時礼	第二比丘善導 <small>*</small> 謹依大乘經採集要	勸諸行道衆 勤修乃至至真

【第一三張】

277	280	280	284	286
【初】	【初】	【初】	【初】	【初】
【再】	【再】	【再】	【再】	【再】
【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】
「善導」、「七」「善道」。	「阿弥陀佛」、「七」「阿弥陀」。	「智」、「七」「知」。	「皆」、「七」「比」。	「小」、「七」「少」。
【初】	【初】	【初】	【初】	【初】
【再】	【再】	【再】	【再】	【再】
【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】
に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。



(22)	(21)	(20)		(19)	(18)	(17)	(16)	(15)														
344	343	342	341	340	339	338	337	336	335	334	333	332	331	330	329	328	327	326	325	324	323	322
願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命禮 西方阿彌陀佛 大勢至菩薩	願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命禮 西方阿彌陀佛 觀世音菩薩	願共諸衆生 往生安樂國	令法種增長 此世及後生 願佛常攝受	至心歸命禮 西方阿彌陀佛 哀愍覆護我	真成報佛恩 願共諸衆生 往生安樂國	自信教人信 難中轉更難 大悲卬普化	人有信惠難 遇聞希有法 此復取為難	至心歸命禮 西方阿彌陀佛 佛世甚難值	願共諸衆生 往生安樂國	此經住百年 衆時聞一念 皆當得生彼	至心歸命禮 西方阿彌陀佛 萬年三寶滅	願共諸衆生 往生安樂國	直過聞佛名 聞名歡喜讚 皆當得生彼	至心歸命禮 西方阿彌陀佛 設滿大千火*	願共諸衆生 往生安樂國	彌陀佛名号 歡喜至一心 皆當得生彼	至心歸命禮 西方阿彌陀佛 其有得聞彼	願共諸衆生 往生安樂國	則能信此事 謙敬聞奉行 踊躍大歡喜	至心歸命禮 西方阿彌陀佛 宿世見諸佛

【第一五張】

328

【初】【再】【廣】「火」【七】「大」。

【初】  
【再】  
【廣】  
に依る。



②③

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 諸菩薩  
清淨大海衆 願共諸衆生往生  
安樂國

普為師僧父母善知識法界衆生斷  
除三障同得往生阿弥陀佛國歸命  
懺悔

中夜

第三依龍樹菩薩願生礼讚偈一十

六拜當中夜時礼懺悔同前後

①

至心歸命礼西方阿弥陀佛

稽首天人所恭敬 阿弥陀佛兩足尊  
在彼微妙安樂國 无量佛子衆圍遶  
故我頂礼弥陀佛 願共諸衆生往生  
安樂國

②

至心歸命礼西方阿弥陀佛

金色身淨如山王 奢摩他行如象步  
兩目淨若青蓮花 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國

③

至心歸命礼西方阿弥陀佛

面善圓淨如滿月 威光猶如百千日  
聲若天鼓俱翅羅 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國

④

至心歸命礼西方阿弥陀佛

觀音頂戴冠中住 種種妙相寶莊嚴

349 348

【初】【七】【初】【廣】「善知識」、「再」及善知識。 【七】【初】【廣】に依る。  
【初】【再】【廣】「阿弥陀佛國」、「七」阿弥阿羅國。 【初】【再】【廣】に依る。

364

【初】【再】【廣】「若」、「七」如。 【初】【再】【廣】に依る。

367

【初】【再】【廣】「頂戴」、「七」頂戴。 【初】【再】【廣】に依る。

⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	
390389388387386385384383382381380379378377376375374373372371370369368						
至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生往生安樂國 諸有無常无我等 亦如水月電影露 為衆說法無名字 故我頂礼弥陁佛	至心歸命礼西方阿弥陁佛 瞻仰尊顏常恭敬 故我頂礼弥陁佛 願共諸衆生往生安樂國	十方所來諸佛子 顯現神通至安樂 願共諸衆生往生安樂國 於彼座上如山王 故我頂礼弥陁佛 金底寶澗池生華 善根所成妙臺座	至心歸命礼西方阿弥陁佛 願共諸衆生往生安樂國 為諸衆生願力住 故我頂礼弥陁佛 十方名聞菩薩衆 无量諸魔常讚歎	至心歸命礼西方阿弥陁佛 願共諸衆生往生安樂國 無比无垢廣清淨 衆德皎潔如虛空 所作利益得自在 故我頂礼弥陁佛	【第七張】 能伏外道魔憍慢 故我頂礼弥陁佛 願共諸衆生往生安樂國 至心歸命礼西方阿弥陁佛

⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯
413	412	411	410	409	408	407
406	405	404	403	402	401	400
399	398	397	396	395	394	393
392	391					
彼尊佛刹无惡名 亦无女人惡道怖 衆人至心敬彼尊 故我頂礼弥陁佛 願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方阿弥陁佛	波尊无量方便境 無有諸趣惡知識 往生不退至菩提 故我頂礼弥陁佛 願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方阿弥陁佛 我說彼尊功德事 衆善无邊如海水 所作善根清淨者 迴施衆生彼土 願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼 西方阿弥陁佛 哀愍覆護我 令法種增長 此世及後生 願佛常攝受 願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命礼 西方極樂世界 觀世音菩薩 願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命礼 西方極樂世界 大勢至菩薩 願共諸衆生 往生安樂國
清淨大海衆	願共諸衆生					

412	412	403	400
【七】	【初】	【初】	【初】
【再】	【再】	【再】	【再】
【廣】	【廣】	【廣】	【廣】
「諸菩薩」、	「極樂」、	「增長」、	「迴施」、
【初】	【七】	【七】	【七】
「諸尊菩薩等」。	「極」。	「種長」。	「迴向」。
【七】	【初】	【初】	【初】
【再】	【再】	【再】	【再】
【廣】	【廣】	【廣】	【廣】
に依る。	に依る。	に依る。	に依る。

【第一九張】

436435 434433 432 431 430 429428 427426425 424 423422 421 420419 418417416 415414

往生安樂國  
 普為師僧父母及善知識法界衆生  
 斷除三障同得往生阿弥陀佛國歸  
 命懺悔至心懺悔自從無始受身來  
 恒以十惡加衆生不孝父母謗三寶  
 造作五逆不善業以是衆罪因緣故  
 妄想顛倒生纏縛應受无量生死苦  
 頂礼懺悔願滅除懺悔已至心歸命  
 礼阿弥陀佛  
 至心勸請諸佛大慈无上尊恒以空  
 慧照三界衆生盲冥不覺知永沉生  
 死大苦海為拔群生離諸苦勸請常  
 住轉法輪勸請已至心歸命礼阿弥  
 陀佛  
 至心隨喜歷劫已來懷嫉妬我慢放  
 逸由癡生恒以瞋恚毒害火焚燒智  
 慧慈善根今日思惟始慍悟發大精  
 進隨喜心隨喜已至心歸命礼阿弥  
 陀佛  
 至心迴向流浪三界內癡愛入胎獄  
 生已歸老死沉沒於苦海我今修此  
 福迴生安樂土迴向已至心歸命阿  
 弥陀佛

416 【初】【再】【廣】「阿弥陀」、「七」「阿弥除」(頭注「陀」あり) 【初】【再】【廣】  
 に依る。

419 【初】【再】【廣】「因縁」、「七」「因」。 【初】【再】【廣】に依る。

425 【初】【再】【廣】「群生」、「七」「郡生」。 【初】【再】【廣】に依る。  
 425 【初】【再】【廣】「勸請」、「七」「觀請」。 【初】【再】【廣】に依る。

428 【初】【再】【廣】「我慢」、「七」「我」(ナナシ) 【初】【再】【廣】に依る。

433 【初】【再】【廣】「癡愛」、「七」「癡受」。 【初】【再】【廣】に依る。

434 【初】【再】【廣】「我」、「七」「我我」。 【初】【再】【廣】に依る。

435 【初】【廣】「歸命」、「七」「歸命礼」、「再」「歸命禮」。 【再】当該箇所のみ「禮」  
 (他の箇所は「礼」) 【再】の増補か。 【初】【廣】に依る。

後夜

⑥	⑤	④	③	②	①	
459	458	457	456	455	454	453
452	451	450	449	448	447	446
445	444	443	442	441	440	439
438	437					

至心發願願捨胎藏形往生安樂國  
 速見弥陀佛无边功德身奉觀諸如  
 來賢聖亦復然獲六神通力救攝苦  
 衆生虚空法界盡我願亦如是發願  
 已至心歸命阿弥陀佛上法同  
 第四依天親菩薩願往生讚偈二十  
 拜當後夜時礼懺悔同前後  
 ① 至心歸命礼 西方阿弥陀佛 世尊我一心  
 歸命盡十方 無尋光如來 願生安樂國  
 ② 至心歸命礼 西方阿弥陀佛 觀彼世界相  
 勝過三界道 究竟如虚空 廣大无边際  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 ③ 至心歸命礼 西方阿弥陀佛 正道大慈悲  
 出世善根生 淨光明滿足 如鏡日月輪  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 ④ 至心歸命礼 西方阿弥陀佛 備諸珍寶性  
 具足妙莊嚴 無垢光焰熾 明淨曜世間  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 ⑤ 至心歸命礼 西方阿弥陀佛 寶華千万種  
 弥覆池流泉 微風動花葉 交錯光乱轉  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 ⑥ 至心歸命礼 西方阿弥陀佛 宮殿諸樓閣  
 觀十方無尋 雜樹異光色 寶欄遍圍繞

441 【七】【初】【廣】「歸命」、「再」【歸命礼】。  
 442 【七】【初】【廣】「讚偈」、「再」【礼讚偈】。  
 【七】【初】【廣】に依る。

453  
 455 【初】【再】【廣】「具足妙莊嚴 無垢光焰熾 明淨曜世間 願共諸衆生 往生  
 安樂國 至心歸命礼 西方阿弥陀佛」、「七」なし。【初】【再】【廣】に依る。

⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦															
482	481	480	479	478	477	476	475	474	473	472	471	470	469	468	467	466	465	464	463	462	461	460
至心歸命礼	願共諸衆生	清淨智海王	至心歸命礼	願共諸衆生	微妙淨花臺	至心歸命礼	願共諸衆生	二乘種不生	至心歸命礼	願共諸衆生	受樂常无間	至心歸命礼	願共諸衆生	正覺花化生	至心歸命礼	願共諸衆生	微妙聞十方	至心歸命礼	願共諸衆生	羅網遍虚空	至心歸命礼	願共諸衆生
西方阿弥陁佛	往生安樂國	如須弥山王	西方阿弥陁佛	往生安樂國	相好光一尋	西方阿弥陁佛	往生安樂國	衆生所願樂	西方阿弥陁佛	往生安樂國	大乘善根界	西方阿弥陁佛	往生安樂國	愛樂佛法味	西方阿弥陁佛	往生安樂國	正覺阿弥陁	西方阿弥陁佛	往生安樂國	種種鈴發響	西方阿弥陁佛	往生安樂國
天人丈夫衆		勝妙无過者	無量大寶王	色像超群生				一切能滿足	女人及根缺		永離身心惱			禪三昧為食	如來淨華衆		法王善住持	梵音悟深遠	宣吐妙法音	無量寶交絡		

【第二張】

480

【初】【再】【廣】「過者」、【七】「邊者」。

【初】【再】【廣】に依る。

懺悔同前後

【初】  
【再】  
【廣】  
に依る。

【初】  
【再】  
【廣】  
に依る。



⑥	⑤	④	③	②	
528 527 526 525 524 523 522 521 520 519 518 517 516 515 514 513 512 511 510 509 508 507 506					【第三張】
至心歸命礼 慧力標無上 侍坐一金蓮	至心歸命礼 身光備有緣 鳥群非實鳥	至心歸命礼 西方觀世音菩薩 五道現光中 悲引恒无絶 口宣猶在定 心靜更飛通 日發幾花葉 願共諸衆生	至心歸命礼 西方阿彌陀佛 已成窮理聖 真有遍空威 在面時現小 俱是暫隨機 葉珠相映飾 沙水共澄輝 欲得无生果 彼土必須依 願共諸衆生 往生安樂國 至心歸命礼 西方阿彌陀佛 五山毫獨朗 寶手印恒分 地水俱為鏡 香華同作雲 業深成易往 因淺實難聞 必望除疑惑 超然獨不群 願共諸衆生 往生安樂國 至心歸命礼 西方觀世音菩薩	淨土願逾深 金繩直界道 珠網縵垂林 見色皆莫色 聞音悉法音 莫謂西方遠 唯湏十念心 願共諸衆生 往生安樂國 至心歸命礼 西方阿彌陀佛 已成窮理聖 真有遍空威 在面時現小 俱是暫隨機 葉珠相映飾 沙水共澄輝 欲得无生果 彼土必須依 願共諸衆生 往生安樂國 至心歸命礼 西方阿彌陀佛 五山毫獨朗 寶手印恒分 地水俱為鏡 香華同作雲 業深成易往 因淺實難聞 必望除疑惑 超然獨不群 願共諸衆生 往生安樂國 至心歸命礼 西方觀世音菩薩	極樂果還深 異珍參作地 衆寶間為林 花開希有色 波揚實相音 何當蒙授手 一遂往生心 願共諸衆生 往生安樂國 至心歸命礼 西方阿彌陀佛 濁世難還入 淨土願逾深 金繩直界道 珠網縵垂林 見色皆莫色 聞音悉法音 莫謂西方遠 唯湏十念心 願共諸衆生 往生安樂國 至心歸命礼 西方阿彌陀佛 已成窮理聖 真有遍空威 在面時現小 俱是暫隨機 葉珠相映飾 沙水共澄輝 欲得无生果 彼土必須依 願共諸衆生 往生安樂國 至心歸命礼 西方阿彌陀佛 五山毫獨朗 寶手印恒分 地水俱為鏡 香華同作雲 業深成易往 因淺實難聞 必望除疑惑 超然獨不群 願共諸衆生 往生安樂國 至心歸命礼 西方觀世音菩薩

528	528	528	527	523	523	518	515	515	514	510	510	506
【初】	【初】	【七】	【七】	【初】	【初】	【初】	【初】	【初】	【初】	【初】	【初】	【初】
【再】	【再】	【初】	【初】	【再】	【再】	【再】	【再】	【再】	【再】	【再】	【再】	【再】
【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】
「莫天、」	「鳥、」	「待坐、」	「標、」	「通、」	「猶、」	「恒、」	「澄輝、」	「澄、」	「遍空、」	「垂、」	「金繩、」	「異珍、」
「有」天。	「邊。」	「再」待坐。	「再」標。	「七」道。	「七」獨。	「七」恒。	「七」澄	「早」。	「七」遍宮。	「七」乘。	「七」金	「七」果珍。
【初】	【初】	【七】	【七】	【初】	【初】	【初】	【初】	【初】	【初】	【初】	【初】	【初】
【再】	【再】	【初】	【初】	【再】	【再】	【再】	【再】	【再】	【再】	【再】	【再】	【再】
【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】
に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。



158

⑬                      ⑭                      ⑮                      ⑯                      ⑰

574573572 571570569 568567566565564 563562561 560559558 557556555554553552

一立古今然 光臺千寶合 音樂八風宣  
 池多說法鳥 空滿散花天 得生不畏退  
 隨意晚開蓮 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命礼 西方阿弥随佛 坐華非一像  
 聖衆亦難量 蓮開人獨處 波生法自揚  
 無灾由處靜 不退為朋良 問彼前生輩  
 来斯幾劫強 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命礼 西方阿弥随佛 光舒救毗舍  
 宮立引韋提 天来香盖捧 人去寶衣賁  
 六時聞鳥合 四寸踐華佢 相看无不正  
 豈復有長迷 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命礼 西方阿弥随佛 普為三福  
 咸令滅五燒 發心功已至 係念罪便消  
 鳥化珠光轉 風好樂聲調 俱忻行道易  
 寧愁聖果遥 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命礼 西方阿弥随佛 珠色仍為水  
 金光即是臺 到時華自散 隨願榮還開  
 遊池更出沒 飛空<sup>\*</sup>往來 真心能向彼  
 有善併須廻 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命礼 西方阿弥随佛 洗心甘露水  
 悅目妙花雲 同生機易識 等壽量難分  
 樂多无廢道 聲遠不妨聞 如何貪五濁  
 自然火自焚 願共諸衆生 往生安樂國

【第二五張】

572 【初】【再】【廣】「悅目」、「七」「悅目」。  
 【初】【再】【廣】に依る。

569 【初】【再】【廣】「牙」、「七」「牙」。  
 【初】【再】【廣】に依る。

564 【初】【再】【廣】「令」、「七」「命」。  
 【初】【再】【廣】に依る。

558 【初】【再】【廣】「却」、「七」「却」。  
 【初】【再】【廣】に依る。

556 【初】【再】【廣】「波」、「七」「彼」。  
 【初】【再】【廣】に依る。

日中	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝	㉞	㉟	㊱	㊲	㊳	㊴	㊵	㊶	㊷	㊸	㊹	㊺	㊻	㊼	㊽	㊾	㊿	【第二六張】																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
597	596	595	594	593	592	591	590	589	588	587	586	585	584	583	582	581	580	579	578	577	576	575	574	573	572	571	570	569	568	567	566	565	564	563	562	561	560	559	558	557	556	555	554	553	552	551	550	549	548	547	546	545	544	543	542	541	540	539	538	537	536	535	534	533	532	531	530	529	528	527	526	525	524	523	522	521	520	519	518	517	516	515	514	513	512	511	510	509	508	507	506	505	504	503	502	501	500	499	498	497	496	495	494	493	492	491	490	489	488	487	486	485	484	483	482	481	480	479	478	477	476	475	474	473	472	471	470	469	468	467	466	465	464	463	462	461	460	459	458	457	456	455	454	453	452	451	450	449	448	447	446	445	444	443	442	441	440	439	438	437	436	435	434	433	432	431	430	429	428	427	426	425	424	423	422	421	420	419	418	417	416	415	414	413	412	411	410	409	408	407	406	405	404	403	402	401	400	399	398	397	396	395	394	393	392	391	390	389	388	387	386	385	384	383	382	381	380	379	378	377	376	375	374	373	372	371	370	369	368	367	366	365	364	363	362	361	360	359	358	357	356	355	354	353	352	351	350	349	348	347	346	345	344	343	342	341	340	339	338	337	336	335	334	333	332	331	330	329	328	327	326	325	324	323	322	321	320	319	318	317	316	315	314	313	312	311	310	309	308	307	306	305	304	303	302	301	300	299	298	297	296	295	294	293	292	291	290	289	288	287	286	285	284	283	282	281	280	279	278	277	276	275	274	273	272	271	270	269	268	267	266	265	264	263	262	261	260	259	258	257	256	255	254	253	252	251	250	249	248	247	246	245	244	243	242	241	240	239	238	237	236	235	234	233	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222	221	220	219	218	217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	207	206	205	204	203	202	201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	-1	-2	-3	-4	-5	-6	-7	-8	-9	-10	-11	-12	-13	-14	-15	-16	-17	-18	-19	-20	-21	-22	-23	-24	-25	-26	-27	-28	-29	-30	-31	-32	-33	-34	-35	-36	-37	-38	-39	-40	-41	-42	-43	-44	-45	-46	-47	-48	-49	-50	-51	-52	-53	-54	-55	-56	-57	-58	-59	-60	-61	-62	-63	-64	-65	-66	-67	-68	-69	-70	-71	-72	-73	-74	-75	-76	-77	-78	-79	-80	-81	-82	-83	-84	-85	-86	-87	-88	-89	-90	-91	-92	-93	-94	-95	-96	-97	-98	-99	-100	-101	-102	-103	-104	-105	-106	-107	-108	-109	-110	-111	-112	-113	-114	-115	-116	-117	-118	-119	-120	-121	-122	-123	-124	-125	-126	-127	-128	-129	-130	-131	-132	-133	-134	-135	-136	-137	-138	-139	-140	-141	-142	-143	-144	-145	-146	-147	-148	-149	-150	-151	-152	-153	-154	-155	-156	-157	-158	-159	-160	-161	-162	-163	-164	-165	-166	-167	-168	-169	-170	-171	-172	-173	-174	-175	-176	-177	-178	-179	-180	-181	-182	-183	-184	-185	-186	-187	-188	-189	-190	-191	-192	-193	-194	-195	-196	-197	-198	-199	-200	-201	-202	-203	-204	-205	-206	-207	-208	-209	-210	-211	-212	-213	-214	-215	-216	-217	-218	-219	-220	-221	-222	-223	-224	-225	-226	-227	-228	-229	-230	-231	-232	-233	-234	-235	-236	-237	-238	-239	-240	-241	-242	-243	-244	-245	-246	-247	-248	-249	-250	-251	-252	-253	-254	-255	-256	-257	-258	-259	-260	-261	-262	-263	-264	-265	-266	-267	-268	-269	-270	-271	-272	-273	-274	-275	-276	-277	-278	-279	-280	-281	-282	-283	-284	-285	-286	-287	-288	-289	-290	-291	-292	-293	-294	-295	-296	-297	-298	-299	-300	-301	-302	-303	-304	-305	-306	-307	-308	-309	-310	-311	-312	-313	-314	-315	-316	-317	-318	-319	-320	-321	-322	-323	-324	-325	-326	-327	-328	-329	-330	-331	-332	-333	-334	-335	-336	-337	-338	-339	-340	-341	-342	-343	-344	-345	-346	-347	-348	-349	-350	-351	-352	-353	-354	-355	-356	-357	-358	-359	-360	-361	-362	-363	-364	-365	-366	-367	-368	-369	-370	-371	-372	-373	-374	-375	-376	-377	-378	-379	-380	-381	-382	-383	-384	-385	-386	-387	-388	-389	-390	-391	-392	-393	-394	-395	-396	-397	-398	-399	-400	-401	-402	-403	-404	-405	-406	-407	-408	-409	-410	-411	-412	-413	-414	-415	-416	-417	-418	-419	-420	-421	-422	-423	-424	-425	-426	-427	-428	-429	-430	-431	-432	-433	-434	-435	-436	-437	-438	-439	-440	-441	-442	-443	-444	-445	-446	-447	-448	-449	-450	-451	-452	-453	-454	-455	-456	-457	-458	-459	-460	-461	-462	-463	-464	-465	-466	-467	-468	-469	-470	-471	-472	-473	-474	-475	-476	-477	-478	-479	-480	-481	-482	-483	-484	-485	-486	-487	-488	-489	-490	-491	-492	-493	-494	-495	-496	-497	-498	-499	-500	-501	-502	-503	-504	-505	-506	-507	-508	-509	-510	-511	-512	-513	-514	-515	-516	-517	-518	-519	-520	-521	-522	-523	-524	-525	-526	-527	-528	-529	-530	-531	-532	-533	-534	-535	-536	-537	-538	-539	-540	-541	-542	-543	-544	-545	-546	-547	-548	-549	-550	-551	-552	-553	-554	-555	-556	-557	-558	-559	-560	-561	-562	-563	-564	-565	-566	-567	-568	-569	-570	-571	-572	-573	-574	-575	-576	-577	-578	-579	-580	-581	-582	-583	-584	-585	-586	-587	-588	-589	-590	-591	-592	-593	-594	-595	-596	-597	-598	-599	-600	-601	-602	-603	-604	-605	-606	-607	-608	-609	-610	-611	-612	-613	-614	-615	-616	-617	-618	-619	-620	-621	-622	-623	-624	-625	-626	-627	-628	-629	-630	-631	-632	-633	-634	-635	-636	-637	-638	-639	-640	-641	-642	-643	-644	-645	-646	-647	-648	-649	-650	-651	-652	-653	-654	-655	-656	-657	-658	-659	-660	-661	-662	-663	-664	-665	-666	-667	-668	-669	-670	-671	-672	-673	-674	-675	-676	-677	-678	-679	-680	-681	-682	-683	-684	-685	-686	-687	-688	-689	-690	-691	-692	-693	-694	-695	-696	-697	-698	-699	-700	-701	-702	-703	-704	-705	-706	-707	-708	-709	-710	-711	-712	-713	-714	-715	-716	-717	-718	-719	-720	-721	-722	-723	-724	-725	-726	-727	-728	-729	-730	-731	-732	-733	-734	-735	-736	-737	-738	-739	-740	-741	-742	-743	-744	-745	-746	-747	-748	-749	-750	-751	-752	-753	-754	-755	-756	-757	-758	-759	-760	-761	-762	-763	-764	-765	-766	-767	-768	-769	-770	-771	-772	-773	-774	-775	-776	-777	-778	-779	-780	-781	-782	-783	-784	-785	-786	-787	-788	-789	-790	-791	-792	-793	-794	-795	-796	-797	-798	-799	-800	-801	-802	-803	-804	-805	-806	-807	-808	-809	-810	-811	-812	-813	-814	-815	-816	-817	-818	-819	-820	-821	-822	-823	-824	-825	-826	-827	-828	-829	-830	-831	-832	-833	-834	-835	-836	-837	-838	-839	-840	-841	-842	-843	-844	-845	-846	-847	-848	-849	-850	-851	-852	-853	-854	-855	-856	-857	-858	-859	-860	-861	-862	-863	-864	-865	-866	-867	-868	-869	-870	-871	-872	-873	-874	-875	-876	-877	-878	-879	-880	-881	-882	-883	-884	-885	-886	-887	-888	-889	-890	-891	-892	-893	-894	-895	-896	-897	-898	-899	-900	-901	-902	-903	-904	-905	-906	-907	-908	-909	-910	-911	-912	-913	-914	-915	-916	-917	-918	-919	-920	-921	-922	-923	-924	-925	-926	-927	-928	-929	-930	-931	-932	-933	-934	-935	-936	-937	-938	-939	-9

④	③	②	①
620 619 618 617 616 615 614 613 612 611 610 609 608 607 606 605 604 603 602 601 600 599 598			
至心歸命礼 一一臺上虚空中 八種清風尋光出 機音正受稍為難 唯除睡時常憶念	至心歸命礼 地上注嚴轉无極 弥随願智巧注嚴 寶地寶色寶光嚴 臺中寶樓千万億 願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命礼 地下注嚴七寶幢 八方八面百寶成 無生寶國永為常 行者傾心常對目 願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命礼 觀彼弥随極樂界 四十八願注嚴起 本國他方大海衆 普勸歸西同彼會 願共諸衆生 往生安樂國
三昧无為即涅槃 隨時鼓樂應機音 行住坐卧攝心觀	西方阿弥随佛 金繩界道非工匠 菩薩人天散華上 一一光成无数臺 臺側百億寶幢圍	西方阿弥随佛 无量無邊无億數 見彼无生自然悟 一切寶流无数光 騰神踊躍入西方	西方阿弥随佛 廣大寬平衆寶成 超諸佛刹取為精 窮劫竿數不知名 恒沙三昧自然成

【第二七張】

608	608	607	607	606
【初】	【初】	【初】	【七】	【初】
【再】	【再】	【再】	【初】	【再】
【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】
「	「傾心」	「流無數光」	「一切」	「八方」
脉	「七」	「七」	「再」	「七」
」	「對目」	「無數光」	「二」	「八万」
【七】	【七】	【初】	【初】	【初】
【槃】	【對目】	【再】	【初】	【再】
【初】	【初】	【廣】	【廣】	【廣】
【再】	【再】	【初】	【再】	【再】
【廣】	【廣】	【初】	【廣】	【廣】
に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。

⑧	⑦	⑥	⑤
643 642 641 640 639 638 637 636 635 634 633 632 631 630 629 628 627 626 625 624 623 622 621			
願共諸衆生 至心歸命礼 一一金繩界道上 諸天童子散香花 無量无边無能計	願共諸衆生 至心歸命礼 十二由旬皆正等 德水分流尋寶樹 寄語有緣同行者 願共諸衆生	願共諸衆生 至心歸命礼 七重羅網七重宮 化天童子皆充滿 行行寶菜色千般 果變光成衆寶盖 願共諸衆生	願共諸衆生 至心歸命礼 寶國寶林諸寶樹 或以千寶分林異 行行相當菜相次 等量齊高三十万 願共諸衆生
往生安樂國 西方阿弥随佛 寶樂寶樹千万億 他方菩薩如雲集 稽首弥随恭敬立	往生安樂國 西方阿弥随佛 寶渠寶菜寶蓮華 寶羅寶網寶欄遮 聞波覩樂證恬怕 努力翻迷還本家 往生安樂國	往生安樂國 西方阿弥随佛 綺牙迴光相映發 瓔珞輝光超日月 華敷等若旋金輪 塵沙佛刹現無邊 往生安樂國	往生安樂國 西方阿弥随佛 寶華寶菜寶根莖 或有百寶共成行 色各不同光亦然 枝條相觸說无因 往生安樂國

643	642	642	629	626	624
【初】	【初】	【初】	【初】	【初】	【初】
【再】	【再】	【再】	【再】	【廣】	【再】
【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	「无因」、	【廣】
「立」、	「計」、	「他方」、	「牙」、	【七】	「或」、
【七】	【七】	【七】	【七】	「无因」、	【七】
【足】。	【許】。	【如方】。	【牙】。	【再】	「我」。
【初】	【初】	【初】	【初】	【因縁】。	【初】
【再】	【再】	【再】	【再】	【初】	【再】
【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】
に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。

【第二九張】

⑫	⑪	⑩	⑨
666665 664663 662661 660659 658657 656655 654653 652651 650649 648647 646645 644			
一切五道内身中 六時觀察三輪應	觀音菩薩大慈悲 已得菩提捨不證	至心歸命礼 西方阿弥随佛	願共諸衆生 往生安樂國
到彼華臺聞妙法 十地願行自然彰	願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命礼 西方阿弥随佛	彌陀身色如金山 相好光明照十方
唯有念佛蒙光攝 當知本願取為強	十方如來舒舌證 專稱名号至西方	寶樹三身華遍滿 風鈴樂響與文同	願共諸衆生 往生安樂國
是故勸汝常觀察 依心起想表真容	真容寶像臨華座 心開見彼國莊嚴	彌陀佛身遍法界 影現衆生心想中	至心歸命礼 西方阿弥随佛
晝夜六時專想念 終時快樂如三昧	願共諸衆生 往生安樂國	臺上四幢張寶纒 彌陀獨坐顯真形	真形光明遍法界 蒙光觸者心不退
風鈴樹響遍虚空 歎說三尊无有極	願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命礼 西方阿弥随佛	彌陀本願華王座 一切衆寶以為成

665 665  
 【初】【再】【廣】「觀音」、【七】「觀世音」。  
 【初】【再】【廣】「大慈悲」、【七】「大慈」。  
 【初】【再】【廣】に依る。

654  
 【七】【初】【廣】「起想」、【再】「起相」。  
 【初】【再】【廣】に依る。

648 648  
 【初】【廣】「寶纒」、【再】「寶幔」、【七】「寶繩」。  
 【初】【再】【廣】に依る。  
 【初】【再】【廣】に依る。

⑬ 應現身光紫金色 相好威儀轉無極  
 恒舒百億光王手 普接有緣歸本國  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命礼 西方阿弥随佛  
 勢至菩薩難思議 威光普照无边際  
 有緣衆生蒙光觸 增長智慧超三界  
 法界傾揺如轉蓬 化佛雲集滿虚空  
 普勸有緣常憶念 永絶胞胎證六通  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命礼 西方阿弥随佛  
 正坐加趺入三昧 想心乘念至西方  
 覩見阿随極樂界 地上虚空七寶粧  
 阿随身量極无边 重勸衆生觀小身  
 丈六八尺隨機現 圓光化佛等前真  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命礼 西方阿弥随佛  
 上輩上行上根人 求生淨土断貪瞋  
 就行差別分三品 五門相續助三因  
 一日七日專精進 畢命乘臺出六塵  
 慶哉難逢今得遇 永證无為法性身  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命礼 西方阿弥随佛  
 中輩中行中根人 一日齋戒慶金蓮

689 【七】【初】【再】【中行】、【廣】【二行】。 【七】【初】【再】に依る。  
 680 【初】【再】【廣】「圓光」、【七】「國光」。 【初】【再】【廣】に依る。  
 679 【初】【再】【廣】「勸」、【七】「觀」。 【初】【再】【廣】に依る。  
 677 【初】【再】【廣】「加趺」、【七】「跏趺」。 【初】【再】【廣】に依る。

⑬	⑭	⑰
712711710709708707706705704703702701700699698697696695694693692691690		
至心歸命礼 往生安樂國 吾今不去待何時 願共諸衆生	至心歸命礼 樂何樂事難思議 性海如來盡是師 念食無生即斷飢 無心領納自然知 八輩凝神會一枝 觀音大勢與衣披 湏臾授記号无為 如此逍遙无極處	【第三一張】 孝養父母教迴向 佛與聲聞衆來取 百寶華籠逕七日 願共諸衆生 至心歸命礼 下輩下行下根人 四重偷僧謗正法 終時苦相皆雲集 忽遇往生善知識 化佛菩薩尋聲到 三業障重開多劫 願共諸衆生 至心歸命礼 樂何樂事難思議 性海如來盡是師 念食無生即斷飢 無心領納自然知 八輩凝神會一枝 觀音大勢與衣披 湏臾授記号无為 如此逍遙无極處
西方阿弥随佛	西方阿弥随佛 無邊菩薩為同學 渴聞波若絶思漿 一切莊嚴皆說法 七覺花池隨意入 弥随心水沐身頂 歛尔騰空遊法界 願共諸衆生	為說西方快樂因 直到弥随華座邊 三品蓮開證小真 往生安樂國 西方阿弥随佛 十惡五逆等貪瞋 未曾慚愧悔前愆 地獄猛火罪人前 急勸專稱彼佛名 一念傾心入寶蓮 于時始發菩提因 往生安樂國 西方阿弥随佛 無邊菩薩為同學 渴聞波若絶思漿 一切莊嚴皆說法 七覺花池隨意入 弥随心水沐身頂 歛尔騰空遊法界 願共諸衆生

708	707	706	704	703	700	692	691	690
【初】	【初】	【初】	【初】	【七】	【初】	【七】	【初】	【初】
【再】	【再】	【再】	【再】	【初】	【再】	【初】	【再】	【再】
【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【樂事】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】
【披】	【凝神】	【領納】	【絶】	【再】	【于時】	【逕】	【直】	【因】
【七】	【七】	【七】	【七】	【廣】	【七】	【再】	【七】	【七】
【枝】	【疑神】	【領納】	【陀】	【雷樂】	【千時】	【經】	【真】	【國】
【初】	【初】	【初】	【初】	【七】	【初】	【初】	【初】	【初】
【再】	【再】	【再】	【再】	【初】	【再】	【再】	【再】	【再】
【廣】	【廣】	【廣】	【廣】	【初】	【廣】	【廣】	【廣】	【廣】
に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。	に依る。



【第三二張】

735734 733732731 730729 728727726725724723 722721 720719718717716715714713

哀愍覆護我 令法種增長  
此世及後生 願佛常攝受  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛  
觀音勢至諸菩薩 清淨大海衆  
願共諸衆生 往生安樂國  
普為師僧父母及善知識法界衆生  
斷除三障同得往生阿彌陀佛國歸  
命懺悔  
上二品懺悔發願等同前須要中要  
取初須略中略取中須廣中廣取下其  
廣者就實有心願生者而勸或對四  
衆或對十方佛或對舍利尊像大衆  
或對一人若獨自等又向十方盡虛  
空三寶及盡衆生界等具向發露懺  
悔懺悔有三品上中下上品懺悔者  
身毛孔中血流眼中血出者名上品  
懺悔中品懺悔者遍身熱汗從毛孔  
出眼中血流者名中品懺悔下品懺  
悔者遍身徹熱眼中淚出者名下品  
懺悔此等三品雖有差別即是久種  
解脫分善根人致使今生敬法重人  
不惜身命乃至小罪若懺即能徹心

708 【初】【再】【廣】「取初」、「七」「初」。  
【初】【再】【廣】に依る。

729 【初】【再】【廣】「毛孔」、「七」「毛孔」。  
【初】【再】【廣】に依る。  
729 【初】【再】【廣】「血流」、「七」「衆流」。  
【初】【再】【廣】に依る。  
730 【初】【再】【廣】「毛孔」、「七」「毛孔」。  
【初】【再】【廣】に依る。

735  
736 【七】【初】【廣】「徹心髓」、「再」【徹心徹髓」。  
【再】736行目は15字詰めと  
なっており、「徹」は増補と推定される。よって【七】【初】【廣】に依る。

【第三三張】

758 757 756 755 754 753 752 751 750 749 748 747 746 745 744 743 742 741 740 739 738 737 736

髓能如此懺者不問久近所有重障  
 頓皆滅盡若不如此縱使日夜十二  
 時急走是無益若不作者應知雖不  
 能流淚流血等但能真心徹到者即  
 與上同敬白十方諸佛十二部經一  
 切賢聖及一切天龍八部法界衆生  
 現前大衆等證知我某甲發露懺悔  
 從无始已來乃至今身煞害一切三  
 寶師僧父母六親眷屬善知識法界  
 衆生不可知數偷盜一切三寶師僧  
 父母六親眷屬善知識法界衆生物  
 不可知數於一切三寶師僧父母六  
 親眷屬善知識法界衆生上起邪心  
 不可知數妄語欺誑一切三寶師僧  
 父母六親眷屬善知識法界衆生不  
 可知數綺語調弄一切三寶師僧父  
 母六親眷屬善知識法界衆生不可  
 知數惡口罵辱誹謗毀訾一切三寶  
 師僧父母六親眷屬善知識法界衆  
 生不可知數兩舌鬪亂破壞一切三  
 寶師僧父母六親眷屬善知識法  
 界衆生不可知數或破五戒八戒十  
 戒十善戒二百五十戒五百戒菩薩

755

【初】【再】【廣】「鬪亂、【七】「鬪亂」。

【初】【再】【廣】に依る。

738

【初】【再】【廣】「若不作者」、【七】「不作者」。【初】【再】【廣】に依る。

738

【廣】「是無益」、【初】【再】「終は無益」、【七】「无益」。【初】【再】は本行が  
 15 字詰めとなっており、「終」は増補か。よって【廣】に依る。

737

【初】【再】【廣】「縱使」、【七】「縱更」。【初】【再】【廣】に依る。

781 780 779 778 777 776 775 774 773 772 771 770 769 768 767 766 765 764 763 762 761 760 759

三聚戒十无盡乃至一切戒及一切  
威儀戒等自作教他見作隨喜不可  
知數如是等衆罪亦如十方大地无  
邊微塵無數我等作罪亦無邊無數  
虚空无邊我等作罪亦復无邊法界  
無邊亦如上法性無邊亦如上佛无  
邊亦如上如是等罪上至諸菩薩下  
至聲聞緣覺所不誡知唯佛與佛乃  
能知我罪之多少今於三寶前法界  
衆生前發露懺悔不敢覆藏唯願十  
方三寶法界衆生受我懺悔憶我清  
淨始從今日願共法界衆生捨邪歸  
正發菩提心慈心相向佛眼相看作  
菩提眷屬真善知識同生阿彌陀佛  
國乃至成佛如是等罪永斷相續更  
不敢作懺悔已至心歸命阿彌陀佛  
札懺竟若入觀及睡時應發此願若  
坐若立一心合掌正面向西十聲稱  
阿彌陀佛觀音勢至諸菩薩清淨大  
海衆竟弟子現是生死凡夫罪障深  
重輪迴六道苦不可言今遇善知識  
得聞阿彌陀本願名号一心稱念求願  
往生願佛慈悲不捨本品誓願攝受

759 【七】【廣】「十无盡」、【初】【再】「十无盡戒」。【初】【再】は本行が15字詰め

となつており、「戒」は増補か。よつて【七】【廣】に依る。

760 【初】【再】【廣】「教他」、【七】「教化」。【初】【再】【廣】に依る。

761 【初】【再】【廣】「衆罪」、【七】「罪罪」。【初】【再】【廣】に依る。

774 【初】【再】【廣】「不敢作」、【七】「不敢」。【初】【再】【廣】に依る。

775 【七】【初】【廣】「歸命」、【再】「歸命札」。【初】【再】【廣】に依る。

776 777 【初】【再】【廣】「稱阿彌陀佛」、【七】「阿彌陀佛」。【初】【再】【廣】に依る。

781 【初】【再】【廣】「慈悲」、【七】「慈悲」。【初】【再】【廣】に依る。

【第三五張】

804 803 802 801 800 799 798 797 796 795 794 793 792 791 790 789 788 787 786 785 784 783 782

弟子不識弥陀佛身相光明願佛慈  
 悲示現弟子身相觀音勢至諸菩薩  
 等及彼世界清淨莊嚴光明等相道  
 此語已一心正念即隨意入觀及睡  
 或有正發願時即得見之或有睡時  
 得見此願比來亦大有現驗問曰稱  
 念礼觀阿弥陀佛現世有何功德利  
 益答曰若稱阿弥陀佛一聲即能除  
 滅八十億劫生死重罪礼念已下亦  
 是十往生經云若有衆生念阿弥陀  
 佛願往生者彼佛即遣二十五菩薩  
 擁護行者若行若坐若住若卧若晝  
 若夜一切時一切處不令惡鬼惡神  
 得其便也又如觀經云若稱礼念阿  
 弥陀佛願往生彼國者彼佛即遣无  
 數化佛无數化觀音勢至菩薩護念  
 行者復與前二十五菩薩等百重千  
 重圍遶行者不問行住坐卧一切時  
 處若晝若夜不離行者既有斯勝益  
 可憑願諸行者各須至心求往又如  
 無量壽經云若我成佛十方衆生稱  
 我名号下至十聲若不生者不取正  
 覺彼佛今現在世成佛當知本誓重

804  
 805 【初】【再】【廣】「重願」、「七」「重」。 【初】【再】【廣】に依る。  
 800 【七】【初】【廣】「若晝若夜」、「再」【再】「若晝若夜常」。 【再】は本行15字詰め。「常」  
 は増補か。よつて【七】【初】【廣】に依る。  
 800 【七】【初】【廣】「既」、「再」【今既】。 【再】は801行を15字詰めとする。「今」  
 は増補か。よつて【七】【初】【廣】に依る。

795 【初】【再】【廣】「稱礼念」、「七」「稱念」。 【初】【再】【廣】に依る。  
 793 【初】【再】【廣】「擁護」、「七」「擁護」。 【初】【再】【廣】に依る。

願不虛衆生稱念必得往生又如彌  
 陀經云若有衆生聞說阿彌陀佛即  
 應執持名号若一日若二日乃至七  
 日一心稱佛不亂命欲終時阿彌陀  
 佛與諸聖衆現在其前此人終時心  
 不顛倒即得往生彼國佛告舍利弗  
 我見是利故說是言若有衆生聞說  
 是者應當發願願生彼國次下說云  
 東方如恒河沙等諸佛南西北方及  
 上下一方如恒河沙等諸佛各於  
 本國出其舌相遍覆三千大千世界  
 說誠實言汝等衆生皆應信是一切  
 諸佛所護念經云何名護念若有衆  
 生稱念阿彌陀佛若七日及一日下  
 下至一聲乃至十聲一念等必得往  
 生證成此事故名護念經次下又云  
 若稱佛往生者常為六万恒沙等諸  
 佛之所護念故名護念經今既有此  
 增上誓願可憑諸佛子等何不勵意  
 去也

集諸經札懺儀卷下

827826825824823822821820819818817816815814813812811810809808807806805

805  
806  
【初】【再】【廣】「彌陀經」、【七】「彌陀」。 【初】【再】【廣】に依る。  
 806  
【初】【再】【廣】「即」、「七」忍。 【初】【再】【廣】に依る。

811  
812  
【初】【再】【廣】「聞說是者」、【七】「聞是說者」。 【初】【再】【廣】に依る。

813  
814  
【初】【再】【廣】「南西北方及上下一方如恒河沙等諸佛」、【七】なし。  
 【初】【再】【廣】に依る。

815  
【初】【再】【廣】「舌相」、【七】「舌根」。 【初】【再】【廣】に依る。

817  
817  
【初】【再】【廣】「云何」、【七】「云」。 【初】【再】【廣】に依る。

817  
【初】【再】【廣】「護念」、【七】「護」。 【初】【再】【廣】に依る。

818  
818  
【初】【再】【廣】「若七日」、【七】「若七日及七日」。 【初】【再】【廣】に依る。

818  
819  
【初】【再】【廣】「下下」、【再】「下」。 【再】818行を13字詰めとする。「下」  
 の削除と推定される。よつて【七】【初】【廣】に依る。

820  
【初】【再】【廣】「護念經」、【七】「證念經」。 【初】【再】【廣】に依る。

821  
【初】【再】【廣】「若」、「七」知。 【初】【再】【廣】に依る。

## 第三章 檀王法林寺蔵 中尊寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下、並びに

### 金剛寺蔵 金剛寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下攷

はじめに

京都市左京区の浄土宗寺院、朝陽山檀王法林寺<sup>1)</sup>（梅檀王院無上法林寺）は、一切経蒐集で知られる袋中良定<sup>2)</sup>（一五五二—一六三九）所縁の古刹である。同寺は重要文化財である『仏説七知経』（聖武天皇勅願一切経）や、『頻毘娑羅王詣仏供養経』（藤原夫人願経）等の奈良写経を所蔵することと殊に有名であるが、寺伝にて荒川経とされる『集諸経礼懺儀』卷下（以下、檀王本）も伝来している。本経には、細字双行表記が多用されており、これは従来知られている版本一切経本『集諸経礼懺儀』卷下には確認されない特色である。

一方、大阪府河内長野市にある真言宗御室派の古刹、天野山金剛寺に所蔵される金剛寺一切経中にみられる『集諸経礼懺儀』卷下（以下、金剛寺本）にも檀王本同様、細字双行表記の多用が確認され、両巻はその表記の特色より同一の系譜に位置することが予測される。また部分的ではあるが、日本において開版された『往生礼讃偈』にも同箇所細字双行表記が認められ、両者間には何らかの関連が想定される。

本章では、檀王本の書誌情報とその来歴、並びに金剛寺本の書誌情報を略述した上で、その本文を諸本と比較対照し、両巻の系譜を比定すると共に、両本の特色である細字双行表記に着目し、本文中におけるその機能、並びに両巻が細字双行表記を有する意味を明らかにしたい。



# 第一節 檀王本の書誌情報と来歴

## 一、書誌情報

京都市左京区、朝陽山檀王法林寺所蔵の写本。紺紙金銀交書。

装訂 卷子本一卷

軸 杉棒軸（軸端は金銅製撥型魚子地四弁華文様）

料紙 楮紙打紙（紺紙） 界線 銀界

表紙 宝相華唐草文様（金銀泥）

見返し絵 釈迦説法図（金銀泥）

完本全二三紙 一紙二七行 一行一九字前後（長行部）

法量 〈第二紙〉 紙高二六・一cm 紙幅四九・八cm

界高二〇・一cm 界幅 一・八cm

外題 「集諸経礼懺儀卷下」（金字、金泥複郭）

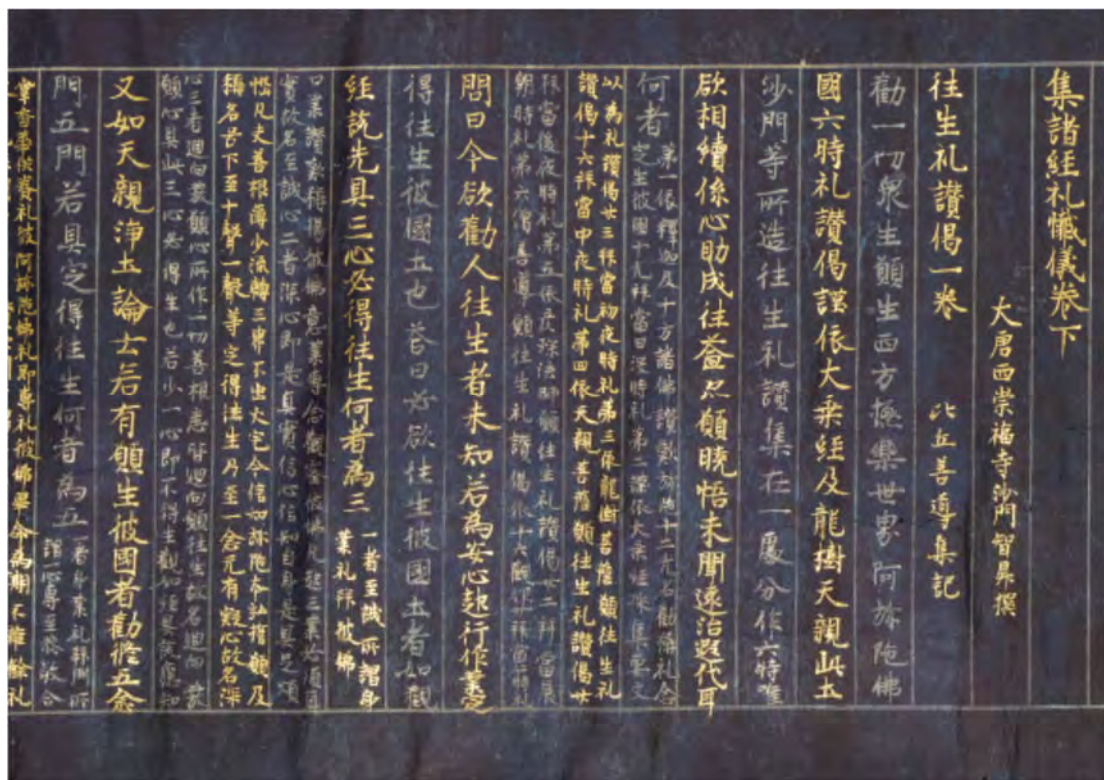
内題 「集諸経礼懺儀卷下」（金字）

尾題 「集諸経礼懺儀卷下」（金字）

奥書 なし。

書写年次は未詳（一一七一—一二二五） 書写者は不明

補入等は銀字行でも金字でなされる



【檀王本 巻首】

## 二、来歴

本経は第三回大蔵会（一九一七年二月四日、於高等家政女学校）に陳列されており、京都大蔵会編『大蔵会展観目録』（文華堂、一九一八）には、

集諸経礼懺儀（竹帙二枚添フ） 二卷 檀王法林寺蔵

紺紙金銀泥 簽題美福門院真蹟 古経題跋中ニ「與野山荒川経同其製。伝云龜山帝所頒賜也」ト見ユ

（五九頁）

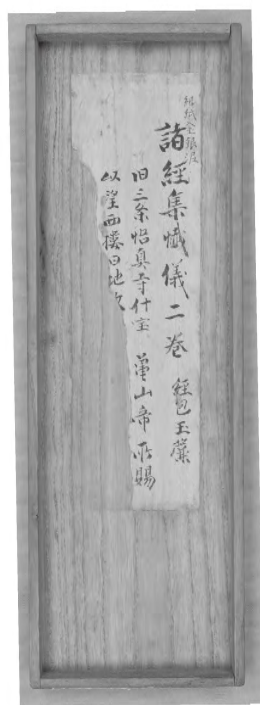
と記され、鵜飼徹定『古経題跋』（『解題叢書』二九五頁。国書刊行会、一九一六）にも確かに同文が確認される。これらの伝承が何時頃から伝わるものか確かめることは叶わないが、現在本巻を納めている函の蓋裏には、

紺紙金銀泥

諸経集懺儀二卷 経包玉簾<sup>③</sup>

旧三条悟真寺什宝 龜山帝所賜

以望西楼（以下欠損）



【檀王法林寺蔵『集諸経礼懺儀』

経函蓋裏貼紙】

と記された和紙が貼られており、側面にも同じく「集諸経礼懺儀二卷美福門院御筆」との貼紙がなされている。

檀王法林寺の前身は蓮華蔵寺という天台宗寺院であったが、浄土宗三条派派祖、望西楼了恵道光（一二四三—一三三〇）が文永九年（一二七二）に浄土宗に改め悟真寺と改称された<sup>④</sup>。上記の伝に信を置くなれば、本巻は美福門院得子（一一一七—一二六〇）発願の荒川経であり、龜山天皇（一二四九—一三〇五）から了恵に頒賜された代々伝持の什宝ということとなる<sup>⑤</sup>。今、本巻伝来の委細を詳らかにすることは叶わないが、上記の伝において留意すべき点は、本巻が荒川経ではないということである。



荒川経は平治元年（一一五九）、美福門院が鳥羽院の菩提を弔う為、高野山に六角経蔵を建立し、奉納した紺紙金、字一切経である。檀王法林寺所蔵の本巻は荒川経同様、紺紙経であるが、本文は金、銀、泥で交書されており、その様式から元来は中尊寺一切経（清衡発願一切経）であつたと考えられる。

中尊寺一切経<sup>⑦</sup>（清衡発願一切経。以下、中尊寺経）は奥州藤原氏初代、清衡（一〇五六―一二二八）が天治三年（一二二六）三月二四日に建立供養した関山中尊寺に奉納されたもので、その供養願文（「建立中尊寺願文」『本朝文集』五八所収）には、「右経巻者金銀字挟一行而交光。紺紙玉軸合衆宝而成卷」（『新訂増補国史大系』三〇、二四四頁）と、本巻の様式に合致する記述が認められる。中尊寺経の奥書の内、最初期のものとしては、『華嚴経（六〇卷）』巻一〇の、

始自永久五年<sup>西丁</sup>二月十五日至于同年四月十五日一帙

奉書之了 執筆金剛弟子僧永昭

本檀那散位 藤原清衡 女施主平氏

が知られ、また天治三年（一二二六）三月二五日条「中尊寺経蔵別当職補任状案」には、

右件於自在房蓮光者為金銀泥行交一切経奉行、自八箇年<sup>西</sup>内書写畢

（『平安遺文』五、一七八二頁）

と記されることより、本一切経は永久五年（一一一七）から天治二年（一二二五）にかけて書写されたものと考えられる。現在その大半（四二九六卷）は高野山金剛峯寺に所蔵されているが、醍醐寺座主三宝院義演（一五五八―一六二六）撰『義演准后日記』（『史料纂集』古記録編四八『義演准后日記一』続群書類従完成会、一九七六）の慶長三年（一五九八）六月八日条には、

奥州ヨリ先度被仰付一切経二部、伏見マテ参著云々。珍重、大慶々々。早々当寺へ可奉納之。今一部ハ高野山へ申請度上人内存也。

(『史料纂集』古記録編四八、二四九頁)

との記述がみられ、本一切経が中尊寺から移動されたのは慶長三年(一五九八)のことと考えられる。

檀王法林寺の前身である悟真寺は、応仁の乱や鴨川の洪水等によって荒廃しており、これを慶長一六年(一六一一)、檀王法林寺として復興したのが一切経蒐集で有名な袋中良定(一五五二―一六三九)である。<sup>9)</sup>現在、檀王法林寺には『仏説七知経』(聖武天皇勅願一切経)、『頻毘娑羅王詣仏供養経』(藤原夫人願経)等が所蔵されているが、この内後者は、

此頻毘娑羅詣仏経一卷者／光明皇后玉筆。委見末書。本南都西大寺／法塔院安之、紛失而入我手、令珍重而／奉納三條法林寺函中矣。可永守護備／寺齊寶者也。／團王老能住持正□／寛永三丙寅正月廿五日云尔。／山州相楽郡瓶原山居／弁蓮社

袋中良定(花押)

(信ヶ原雅文 石川登志雄『檀王法林寺 袋中上人 琉球と京都の架け橋』四四頁)

と、その奥書より、袋中が入手し寛永三年(一六二六)に檀王法林寺へ納めたことが伺える。

『集諸経礼懺儀』卷下には善導の『往生礼讃偈』が全文収録されており、本書が間接的にはあるが善導の著述中、唯一入蔵されたものであること、また善導は浄土宗の開祖、法然房源空(一二三三―一二二二)により「偏依善導一師」<sup>10)</sup>として尊崇されたことと、上述の中尊寺経の移動時期、並びに袋中の古写経蒐集を勘案するならば、『集諸経礼懺儀』卷上下の伝来も慶長一六年(一六一一)以降であり、そこには袋中の関与が推測されるが委細は不明である。

## 第二節 金剛寺本の書誌情報

大阪府河内長野市の天野山金剛寺<sup>12</sup>は真言宗御室派の古刹であり、寺伝によれば奈良時代、行基の開創とされる。院政期の承安二年（一二七八）には初代学頭阿観（一二三六―一二〇七）によって、御影堂の建立、御影供の始修、高野山鎮守天野社から丹生・高野両明神の勧請等がなされ、治承二年（一二七八）には伽藍が整備（金堂・多宝塔の建立）され、八条院暲子（一二三七―一二二二）の祈願所となった。

本寺は鎌倉時代には「顕密修学勝地<sup>13</sup>」と称されるが、それを偲ばせる一切経、並びに聖教・文書が多数所蔵されている。現存四五〇〇巻余りの一切経<sup>14</sup>には、平安時代後期から鎌倉時代中期にわたる書写奥書が散見するが、それらは元来、金剛寺一切経として一連に書写されたものではなく、その奥書、並びに様式（料紙の紙高）より快尋発願一切経、八田寺一切経、栄印発願天野宮一切経等、本来別個の一切経として他所で書写されたものを含むものである<sup>15</sup>。これら先行する一切経を集成し、不足分の經典を補完する形でなされた金剛寺での書写事業は、奥書より承元二年（一二〇八）から文永五年（一二六八）頃にかけてのものであり、嘉禎三年（一二三七）頃が最も活況であったようである<sup>16</sup>。金剛寺本は奥書を有さず、書写年次を明確にすることは叶わないが、その様式より金剛寺においてなされた補完分に相当すると推測されるものである。

河内長野市、天野山金剛寺所蔵の写本 紙本墨書

装訂 卷子本一巻 軸 なし

料紙 楮紙打紙（黄檗） 界線 淡墨界

表紙 紙高二五・七cm×紙幅二四・八cm 柿渋染

外題打附書 外題下に千字文函号「英函」あり

完本全一五紙 一紙三二行 一行一六字前後（長行部）

法量 〈第二紙〉 紙高二五・七cm 紙幅五四・一cm

界高一九・九cm 界幅 一・七cm

外題 「集諸経礼懺儀卷下」

内題 「集諸経礼懺儀卷下」

尾題 「集諸経礼懺儀卷下」

奥書 なし

書写年次は未詳（一二〇八―一二六八か） 書写者は不明

### 第三節 檀王本・金剛寺本の系譜

檀王本と金剛寺本の本文を、他の版本大蔵経諸本（思溪版本<sup>(18)</sup>、磧砂版本<sup>(19)</sup>、金藏廣勝寺本<sup>(20)</sup>、高麗大蔵経初雕本・再雕本<sup>(21)</sup>）と対照した所、顕著な差異として細字双行表記の多用があげられる。『往生礼讃偈』、『集諸経礼懺儀』卷下の諸本は何れも所謂、序文<sup>(23)</sup>・六時礼讃<sup>(24)</sup>（日没・初夜・中夜・後夜・晨朝・日中）・懺悔発願<sup>(25)</sup>・後文<sup>(26)</sup>で構成されており、内容上の大きな出入は認められない。それにも拘わらず諸本の紙数は、高麗版初雕本・再雕本、金藏本三六紙（毎紙二三行、一行一四字詰）、思溪版本、磧砂版本二七紙（毎紙三〇行、一行一七字詰）であるのに対し、檀王本二三紙、金剛寺本一五紙と、両巻と版本大蔵経諸本との間には明確な差異が認められる。これは版本大蔵経諸本が通常の本文として表記している箇所を細字双行とする檀王本・金剛寺本の表記方法に起因するものであり、それは序文・後文において顕著に認められる（当該箇所の詳細については次節にて述べる）。これらの細字双行表記は思溪版本、磧砂版本を始め金藏本や高麗版初雕本・再雕本では、何れも通常の本文として刻字されており、表記方法よりすれば、檀王本と金剛寺本が版本大蔵経諸本と異なる系譜に位置する経卷であることは瞭然である。それでは檀王本・金剛寺本と版本大蔵経諸本の差異は、表記の相違に留まる表層的なものであろうか。それとも本文内容までも異なるものであろうか。檀王本・金剛寺本と版本大蔵経諸本との対照を行った結果（後掲資料「諸本校異一覧」参照）、注目すべき本文の相違として以下の箇所があげられる。

便宜上（一）内に『集諸経礼懺儀』卷下（『大正蔵』四七所収）の当該頁、並びに檀王本、金剛寺本の当該行数（本章末「影印」による）を記した。  
略号は以下の通り。

【檀】檀王本、【金】金剛寺本、【思】思溪版本、【磧】磧砂版本、【廣】金藏廣勝寺本、【初】高麗初雕本、【再】高麗再雕本。

なお高麗初雕本・再雕本が同内容な場合は一括し【高】と記した。

序文（四六六中。【檀】一五行、【金】一四行）

【檀】【金】【磧】 下至十声、一声、等

【思】【磧】【初】 下至十声聞、等

【再】 下至十声 等

日没礼讚 無常偈（四六八中。【檀】一〇三行、【金】八七行）

【檀】【金】 往生無量寿国 諸衆等聽說日、沒、無、常、偈、 人間念念營衆務

【廣】【再】 往生無量寿国 諸衆等聽說 黃、昏、偈、 人間念念營衆務

【思】【磧】【初】 往生無量寿国 一 人間忽忽營衆務

中夜礼讚 第一偈（四六九下。【檀】二〇二行、【金】一五六行）

【檀】【金】 在彼微妙安樂国 無量仏子衆圍繞 一 願共諸衆生往生安樂国

【思】【磧】【廣】【高】 在彼微妙安樂国 無量仏子衆圍繞 故、我、頂、礼、弥、陀、仏、 願共諸衆生往生安樂国

後夜礼讚 第一偈（四七〇下。【檀】二八二・二八三行、【金】二〇二・二〇三行）

【檀】【金】 歸命尽十方 無礙光如来 願生安樂国 願共諸衆生、 往生、安、樂、国、（【檀】「往生安樂」とする）

【思】【磧】【廣】【高】 歸命尽十方 無礙光如来 願生安樂国 一 一

日中礼讚 第一八偈（四七三中。【檀】五三七行、【金】三四五行）

【檀】【金】 西、方、極、樂、 難思議 無辺菩薩為同学

【思】【磧】【廣】【高】 樂、何、啻、樂、事、難思議<sup>27</sup> 無辺菩薩為同学

また上記箇所他に顕著な相違として「南無」の有無があげられる。日没礼讃を除く初夜・中夜・後夜・晨朝・日中礼讃偈では、

至心帰命礼 西方阿弥陀仏 一 偈 文 一 願共諸衆生 往生安楽国

という定型表現が用いられるが、檀王本・金剛寺本には、

南無、至心帰命礼 西方阿弥陀仏 一 偈 文 一 願共諸衆生 往生安楽国

と版本大蔵経諸本にはみられない「南無」が冒頭に附加されている。

これらの相違箇所は、魯魚章草の誤りや一文字単位の誤脱と異なり、本書の系譜を探る判断材料になると考えられる。檀王本の書写年時と推定される永久五年から天治二年（一一七一―一二二五）には、既に開宝蔵（九七一―九七七）、高麗初雕版（二〇一一―二〇八七）、東禪寺版（二〇八〇―一一〇二）等の版本大蔵経が開版されているが、上記の相違箇所よりすれば、檀王本・金剛寺本が版本大蔵経本からの転写本とは考え難い。

従来、中尊寺経の本文系統としては、北宋勅版（開宝蔵）と唐代写経の二系統が報告されているが、檀王本は開宝蔵本の系譜に連なる金蔵本、高麗初雕本<sup>(29)</sup>とは一致せず（後掲資料「諸本校異一覧」参照）、また本論第二章において復元した開宝蔵本本文との不一致より、開宝蔵本系統の転写本でないことは明らかであり、その系譜は開宝蔵を嚆矢とする版本大蔵経本に先行する唐代写経本『集諸経礼懺儀』に連なる蓋然性が高いと推測される。同様の特色が認められる金剛寺本を含む金剛寺一切経に対する近年の調査・研究により、『仏説八陽経』<sup>(30)</sup>、『十二門経』・『安般守意経』<sup>(31)</sup>、『優婆塞五戒法』<sup>(32)</sup>、『一切経音義』<sup>(33)</sup>、『五王経』<sup>(34)</sup>、『七女経』<sup>(35)</sup>、『餓鬼報応経』<sup>(36)</sup>、『三法度論』<sup>(37)</sup>等、現行の流布本である『大正新脩大蔵経』に収録されていない經典、または異読を有する經典の存在が多数報告されていることも、その傍証の一つとなろう。

ただし注意すべき点は、檀王本と金剛寺本両者の関係は、日本に将来された同一の孤本より派生したものとは考え難いことである。本章末に附した両本の校異（「檀王法林寺蔵中尊寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下 影印・翻刻」校異参照）の殆どは一文字単位の異同であって、誤写・誤脱と

推測されるものも多く、両者の系譜の親近性が看取されるが、その中において以下の相違箇所は注目される。

略号は以下の通り。

【檀】檀王本、【金】金剛寺本、【七】七寺蔵本、【思】思溪版本、【磧】磧砂版本、【高】高麗蔵（初・再雕本）、  
【廣】金藏廣勝寺本、【阿】七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』<sup>(39)</sup>、【京】京都大学附属図書館蔵建長三年刊『往生礼讃偈』<sup>(40)</sup>。

初夜礼讃 第四偈（四六九上） 【檀】一三七行、【金】一一三行

【檀】	【礼】	【京】	十方佛刹中	菩薩比丘衆	窮劫不可計	皆當得往、生			
【金】	【七】	【廣】	【高】	【思】	【磧】	十方佛刹中	菩薩比丘衆	窮劫不可計	皆當得生、彼

中夜礼讃 第三偈（四六九下） 【檀】二〇九行、【金】一五九行

【檀】	【七】	【廣】	【高】	面善圓淨如滿月	威光猶如百、千、日、	
【金】	【思】	【磧】	【礼】	【京】	面善圓淨如滿月	威光猶如千、日、月、

当該箇所の相違は檀王本・金剛寺本の両者間のみならず、他の諸本間にも認められ、単純な誤写ではなく異読として捉えられるものである。また細字双行表記される箇所についても若干の相違が認められる等（後述）、両本が藍本を異にするものであったことが伺える。

なお、日本に伝存する『往生礼讃偈』鎌倉初中期の遺品である誓願寺本<sup>(41)</sup>、専修寺本<sup>(42)</sup>、京大本<sup>(43)</sup>（以下、三本を総称して単行本とする）では、序文・後文は通常表記されているが、日没礼讃中の細字双行表記箇所は概ね一致し（後述、第四節⑤⑥⑦⑨⑩）、また「南無」の附加も認められる等、檀王本・金剛寺本と同様の特色を有している。更に上述の対照箇所に関しても、

後夜礼讃 第一偈 (四七〇下。【檀】二八二・二八三行、【金】二〇二・二〇三行)

【單行本】 帰命尽十方 無礙光如来 与、仏、教、相、応、 願共諸衆生 往生安樂国

【檀】 【金】 帰命尽十方 無礙光如来 願、生、安、樂、国、 願共諸衆生 往生安樂国

【思】 【磧】 【廣】 【高】 帰命尽十方 無礙光如来 願、生、安、樂、国、 〔 〕

の一箇所が異なるのみで、その他は何れも檀王本・金剛寺本と一致しており、その本文系統は版本大蔵経諸本と比しより檀王本、金剛寺本へ近接するものと考えられる。

#### 第四節 細字双行表記の機能と意味

前節にて檀王本・金剛寺本の特色が、版本大蔵経諸本に認められない細字双行表記の多用、並びに初夜・中夜・後夜・晨朝・日中礼讃偈における「南無」の附加にあり、その本文系統が唐代写経本に連なるものであると比定したが、それでは何故、両巻の本文系統は、中国で開版された他の刊本大蔵経本『集諸経礼懺儀』卷下よりも、日本において開版された『往生礼讃偈』へと近接するのであろうか。

この疑問に対し本節では、檀王本・金剛寺本の特色である細字双行表記に着目し、本文中におけるその機能の分析を通じて、両巻のテクニクの性格を明らかにすると共に、日本において開版された『往生礼讃偈』との関係について言及したい。

両本により確認し得る細字双行表記箇所は以下の通り(細字双行表記箇所をゴシックにて示した)。

##### 【序文】

- ① 謹依大乘経及龍樹、天親、此土沙門等所造往生礼讃、集在一处、分作六時。唯欲相続係心、助成往益。亦願曉悟未聞、遠治遐代耳。何者。



第一依釈迦及十方諸佛讚歎弥陀十二光名、勸称礼念、定生彼国。十九拜。当日没時礼。第二謹依大乘經、採集要文、以為礼讚偈。廿三拜。当初夜時礼。第三依龍樹菩薩願往生礼讚偈。十六拜。当中夜時礼。第四依天親菩薩願往生礼讚偈。廿拜。当後夜時礼。第五依彦琮法師願往生礼讚偈。廿二拜。当辰朝時礼。第六僧善導願往生礼讚偈、依十六觀作廿拜。当午時礼。

謹んで大乘經、及び龍樹・天親、此土の沙門等の造りし所の往生礼讚に依りて、一处に集め、分ちて六時を作る。唯だ相續して心を係けて往益を助成せんことを欲す。亦た願はくは未聞を曉悟して、遠く退代を沾さんのみ。何者ぞ。

第一に釈迦及び十方の諸仏の、弥陀の十二光の名を讚歎し、称・礼・念せば定めて彼の国に生ず、と勧めたまうに依る。十九拜。日没の時に當りて礼す。第二に謹んで大乘經に依りて、要文を採集し、以て礼讚の偈と為す。二十四拜。初夜の時に當りて礼す。第三に謹んで龍樹菩薩の願往生礼讚の偈に依る。十六拜。中夜の時に當りて礼す。第四に謹んで天親菩薩の願往生礼讚の偈に依る。二十拜。後夜の時に當りて礼す。第五に謹んで彦琮法師の願往生礼讚の偈に依る。二十一拜。晨朝の時に當りて礼す。第六に僧善導の願往生礼讚の偈、謹んで十六觀に依りて廿拜を作る。午時に當りて礼す。

檀王本（八一〇行）・金剛寺本（八一〇行）が細字双行表記を取る。なお金剛寺本は後続の「問曰。今」までを細字双行表記とするが、文の切れ目としては不適切であり理解不能。檀王本により「当午時礼」までと判断した。造讚の意趣が述べられた後の、具体的な六時の配列・礼数が細字双行にて表記される。

② 問曰。今欲勸人往生者、未知、若為安心、起行、作業、定得往生彼国土也。

答曰。必欲往生彼国土者、如觀經說。先具三心必得往生。何者為三。

一者至誠。所謂身業礼拝彼佛、口業讚歎称揚彼佛、意業專念觀察彼佛。凡起三業、必須真實。故名至誠心。二者深心。即是真實信心。信知自身是具足煩惱凡夫、善根薄少、流轉三界、不出火宅。今信知弥陀本弘誓願、及称名号、下至十声一声等、定得往生。乃至一念无有疑心。故名深心。三者廻向發願心。所作一切善根、悉皆廻向願往生。故名廻向發願心。具此三心、必得生也。若少一心、即不得生。如觀經具說。応知。

問いて曰く。今、人を勧めて往生せしめんと欲はば、未だ知らず、若為が安心・起行・作業せば、定めて彼の国土に往生を得るや。

答えて曰く。必ず彼の国土に往生せんと欲はば、『觀經』に説きたまうが如きは、先きに三心を具せば必ず往生を得、と。何者をか三と為す。

一には至誠心。所謂身業に彼の仏を礼拝し、口業に彼の仏を讃歎稱揚し、意業に彼の仏を專念觀察す。凡そ三業を起すに、必ず須く眞実なるべし。故に至誠心と名づく。二には深心。即ち是れ眞実信心なり。自身は是れ煩惱具足の凡夫、善根薄少にして三界に流轉して火宅を出でざると信知す。今、弥陀の本弘誓願、及び名号を称すること十声・一声等に至るまで定めて往生を得と信知し、乃ち一念に至るまで疑心有ること無し。故に深心と名づく。三には回向發願心。作す所の一切の善根、悉く皆廻向して往生を願ず。故に回向發願心と名づく。此の三心を具さば、必ず生ずることを得る也。若し一心も少くなば、即ち生ずることを得ず。『觀經』に具さに説きたまうが如し。知るべし。

檀王本（一三一・一六行）・金剛寺本（一三一・一五行）が細字双行表記を取る。往生の要件としての安心・起行・作業が問われ、安心の答えとして『觀經』所説の三心が述べられるが、三心（至誠心・深心・廻向發願心）の具体的説示は細字双行にて表記される。

③ 又如天親淨土論云。若有願生彼国者、勸修五念門、五門若具、定得往生。何者為五。

一者身業礼拝門。所謂一心專至、恭敬合掌、香華供養、礼彼阿弥陁佛。礼即專礼彼佛、畢命為期、不雜餘礼。故名礼拝門。二者口業讚歎門。所謂專意、讚歎彼佛身相光明、一切聖衆身相光明、及彼国中一切宝莊嚴光明等。故名讚歎門。三者意業憶念觀察門。所謂專意、念觀彼佛、及一切聖衆身相光明、国土莊嚴等。如觀經説、唯除睡時、恒憶念恒想觀此事等。故名觀察門。四者作願門。所謂專心、若昼若夜、一切時一切處、三業四儀所作功德、不問初中後、皆須眞実心中發願生彼国。故名作願門。五者廻向門。所謂專心、若自作善根、及一切三乘五道、一一聖凡等所作善根、深生隨喜、如諸佛菩薩所作隨喜、我亦如是隨喜。以此隨喜善根、及已所作善根、皆悉與衆生共之、廻向彼国。故名廻向門。又到彼国已、得六神通、廻入生死、教化衆生、徹窮後際、心無厭足、乃至成佛、亦名廻向門。五門既具、定得往生。一一門与上三心合。隨起業行、不問多少。皆名眞実業也。応知。

又、天親の『浄土論』に云うが如し。「若し彼の国に生ぜんと願ずるもの有らば、勸めて五念門を修せしむ。五門若し具さば、定めて往生を得」と。何者をか五と為す。

一には身業礼拝門。所謂一心に専ら至りて、恭敬・合掌し、香華供養して、彼の阿弥陀仏を礼す。礼すとは即ち専ら彼の仏を礼し、畢命を期と為して余礼を雑えず。故に礼拝門と名づく。二には口業讃歎門。所謂専ら意に彼の仏の身相・光明、一切聖衆の身相・光明、及び彼の国中の一切宝莊嚴・光明等を讃歎す。故に讃歎門と名づく。三には意業憶念觀察門。所謂専ら意に、彼の仏及び一切聖衆の身相・光明、国土の莊嚴等を念観す。『観經』に説きたまうが如くは、「唯だ睡時を除きて、この事等を恒に憶念し恒に想観すべし」と。故に觀察門と名づく。四には作願門。所謂専ら心に、若しは昼、若しは夜、一切時、一切処に、三業・四儀の作す所の功德、初・中・後を問わず、皆須く真実心の中に発願して、彼の国に生ぜんと願すべし。故に作願門と名づく。五には廻向門。所謂専ら心に、若自ら作す善根、及び一切三乗・五道、一々の聖凡等の作す所の善根に、深く随喜を生ずること、諸仏・菩薩の作す所の随喜の如く、我も亦た是の如く随喜す。此の随喜の善根、及び己が作す所の善根を以て、皆悉く衆生と之を共にして、彼の国に廻向す。故に廻向門と名づく。又、彼の国に到り已り、六神通を得て、生死に廻入し、衆生を教化すること、後際を徹窮して心に厭足無く、乃ち成仏に至るも亦廻向門と名づく。五門既に具しぬれば、定めて往生を得べし。一々の門は上の三心と合し、随いて業行を起さば、多少を問わず。皆真実の業と名づく也。知るべし。

檀王本（一八一―二五行）・金剛寺本（一七一―三行）が細字双行表記を取る。②に引き続き、起行の答えとして天親『浄土論』所説の五念門（身業礼拝門・口業讃歎門・意業憶念觀察門・作願門・廻向門）が述べられるが、その具体的説示は細字双行にて表記される。

④ 又勸行四修法、用策三心五念之行、速得往生。何者為四。

一者恭敬修。所謂恭敬礼拝彼佛、及彼一切聖衆等。故名恭敬修。畢命為期、誓不中止、即是長時修。二者无餘修。所謂専称彼佛名、専念専想専礼専讃彼佛、及一切聖衆等、不雜餘業。故名无餘修。畢命為期、誓不中止、即是長時修。三者无間修。所謂相続恭敬礼拝、称名讃歎、憶念觀察、廻向発願、心心相続、不以餘業来間。故名无間修。又不以貪瞋煩惱来間、墮犯随懺、不令隔念隔時隔日、常使清淨、亦名無間修。畢命為期、誓不中止、即是長時修。又菩薩已免生死、所生善法、廻求佛果、即是自利。教化衆生、

尽未来際、即是利他。然今時衆生、悉為煩惱繫縛、未免惡道生死等苦。隨緣起行、一切善根具速廻、願往生弥陀佛國。到彼國已、更无所畏。如上四修、自然任運。自利利他、无不具足。応知。

又勸めて四修の法を行ぜしめ、用て三心・五念の行を策まし、速やかに往生を得しむ。何者をか四と為す。

一には恭敬修。所謂彼の仏、及び彼の一切聖衆等を恭敬礼拝す。故に恭敬修と名づく。畢命を期と為し、誓いて中止せざるは、即ち是れ長時修なり。二には无余修。所謂専ら彼の仏名を称し、彼の仏、及び一切聖衆等を専ら念じ、専ら想し専ら礼し、専ら讀じて、餘業を雑えず。故に无餘修と名づく。畢命を期と為し、誓いて中止せざるは、即ち是れ長時修なり。三には无間修。所謂相續して恭敬・礼拝・称名・讚歎・憶念・觀察・回向・発願し、心々相續して、餘業を以て来し間えず。故に无間修と名づく。又貪瞋煩惱を以て来し間えず、隨犯隨懺して、念を隔て時を隔て日を隔てしめず、常に清淨ならしむるも亦無間修と名づく。畢命を期と為し、誓いて中止せざるは、即ち是れ長時修なり。又菩薩の已に生死を免れて、生ずる所の善法を廻して仏果を求むるは、即ち是れ自利なり。衆生を教化して未来際を尽すは、即ち是れ利他なり。然るに今の時の衆生、悉く煩惱の為に繫縛せられて、未だ惡道・生死等の苦を免れず。縁に隨いて行を起し、一切の善根を具に速やかに廻して、阿弥陀仏國に往生せんと願ぜよ。彼の國に到り已らば、更に畏るる所無し。上の如く四修は自然に任運して、自利利他具足せざるは無し。知るべし。

檀王本（二七—三三行）・金剛寺本（二五—二九行）が細字双行表記を取る。②③に引き続き、作業の答えとして四修（恭敬修・無余修・無間修・長時修）が述べられるが、その具体的説示は細字双行にて表記される。

⑤ 又如文殊彼若云。欲明一行三昧、唯勸独処空閑、捨諸乱意、係心一佛、不觀相貌、專称名字。即於念中、得見彼阿弥陀佛及一切佛等。問曰。何故不令作觀、直遣專称名字者、有何意也。

答曰。乃由衆生障重、境細心麁、識颺神飛、觀難成就。是以大聖悲憐、直勸專称名字。正由称名易故、相續即生。

問曰。既遣專称一佛、何故境現即多。此豈非邪正相交、一多雜現也。

答曰。佛佛齊証、形无二別。縱使念一見多、乖何大道理也。

又如觀經云。佛觀坐觀禮念等、皆頂面向西方者最勝。如樹先傾、倒必隨曲故。必有事礙、不及向西方者、但作向西想亦得。

問曰。一切諸仏、三身同証、悲智果円具、亦応无二。随方礼念、課称一仏、亦応得生。何故偏歎西方、勸専礼念等、有何義也。

答曰。諸仏所証、平等是一。若以願行來収、非无因縁。然弥陀世尊、本発深重誓願、願以光明名号、撰化十方。但使信心求念。

上尽一形、下至十声一声等、以仏願力、易得往生。是故釈迦、及以諸仏、勸向西方、為別異也。亦非是称念餘仏、不能除障滅罪也。応知。

又『文殊般若』に云うが如し。「一行三昧を明かさんと欲わば、唯だ独り空閑に処し、諸の乱意を捨て、心を一仏に係けて相貌を觀ぜず、専ら名字を称することを勧む。即ち念中に於いて、彼の阿弥陀仏、及び一切仏等を見たてまつるを得」と。

問いて曰く。何故ぞ、觀を作さしめずして、直だ専ら名字を称せしむるは、何の意か有らん也。

答えて曰く。乃ち衆生障重くして、境は細に、心は麁なるに由りて、識颺り、神飛びて、觀成就し難し。是を以て大聖悲憐して、直だ専ら名字を称するを勧む。正しく称名は易きに由るが故に、相續して即ち生ず。

問いて曰く。既に専ら一仏を称せしむるに、何故ぞ、境現すること即ち多かるや。此れ豈に邪正相い交わり、一多雜現するに非ずや。

答えて曰く。仏と仏齊しく証して、形二の別無し。縦使い一を念じて多を見るも、何の大道理に乖かん也。

又『觀經』に云うが如し。「仏、坐觀・礼念等を勸めたまうに、皆頂面を西方に向かうは最勝なり。如し樹の先の傾けるは、倒るるに必ず曲るに隨うが故なり。必ず事の礙有りて、西方に向かうに及ばずんば、但だ西に向かう想を作すも亦得たり。

問いて曰く。一切諸仏、三身同じく証し、悲智の果円かに具すことも亦無二なるべし。方に隨いて一仏を礼念・課称するも亦生ずることを得べし。

何故ぞ、偏に西方を歎じ、専らに礼念等を勧むは、何の義か有る也。

答えて曰く。諸仏の証する所は平等にして是れ一なれども、願行を以て來し收むるが若きは、因縁无きに非ず。然るに弥陀世尊、本深重の誓願を發して、光明・名号を以て十方を撰化せんと願いたまう。但使信心に求念すれば、上一形を尽し、下十声・一声等に至るまで、仏願力を以て易く往生を得。是の故に釈迦、諸仏の勸めて西方に向かわしむるを以て別異と為すに及ぶ也。亦是れ餘仏を称念するに、障りを除き、罪を滅すること能わざるには非ず。知るべし。

⑥ 若能如上、念念相続、畢命為期者、十即十生、百即百生。何以故。無外雜緣得正念故。与仏本願得相応故。不違教故。随順仏語故。若欲持捨專修雜業者、百時希得一二、千時希得五三。何以故。乃由雜縁乱動、失正念故。与仏本願不相応故。与教相違故。不順仏語故。係念不相続故。憶想間断故。廻願不殷重真實故。貪瞋諸見煩惱来間断故。无有慚愧懺悔心故。懺悔有三品。一要二略三広。如下具説。随意皆得。又不相続念報彼仏恩故。心生輕慢、雖作業行、常与名利相応故。人我自覆、不親近同行善知識故。楽近雜縁、自障碍他往生正行故。何以故。余比自見聞、諸方道俗、解行不同、專修有異。但使專意作者、十即十生。修雜不至心者、千中无十。此二行得失、如前已弁。

仰願一切往生人等、善自思量。已能今身、願生彼国者、行住坐臥、必須励心尅己、昼夜莫廢。畢命為期、止在一形、似如少苦、前念命終、後念即生彼国。長時永劫、常受無為法楽、乃至成仏、不逕生死。豈非快哉。応知。

若し能く上の如く念念相続して、畢命を期と為さば、十は即ち十生じ、百は即ち百生ず。何を以ての故に。外の雜縁無くして正念を得るが故に。仏の本願と相応することを得るが故に。教に違せざるが故に。仏語に随順するが故に。若し專を捨てて雜業を修するを持せんと欲さば、百の時に希に一二を得、千の時に希に五三を得。何を以ての故に。乃ち雜縁乱動するに由りて正念を失するが故に。仏の本願と相応せざるが故に。教と相違するが故に。仏語に順ぜざるが故に。係念の相続せざるが故に。憶想の間断するが故に。廻願の殷重にして真實ならざるが故に。貪・瞋・諸見煩惱の来りて間断するが故に。慚愧・懺悔の心有ること无きが故に。懺悔に三品有り。一には要、二には略、三には広なり。下に具に説くが如し。意に随いて皆得たり。又相続して彼の仏恩を念報せざるが故に。心に輕慢を生じ、業行を作すと雖も、常に名利と相応するが故に。人我自ずから覆いて同行・善知識に親近せざるが故に。楽いて雜縁に近づきて、往生の正行を自障碍他するが故に。何を以ての故に。余、比る自ら諸方の道俗を見聞するに、解行不同にして、專修異なりあり。但使專ら意に作さば、十は即ち十生ず。雜を修して至心ならざれば、千が中に十も無し。此の二行の得失、前に已に弁ずるが如し。仰ぎ願わくは一切の往生人等、善く自ら思量せよ。已に能く今身に彼の国に生ぜんと願せば、行住坐臥に必ず須く心を励まし己を尅して、昼夜に廢すること莫れ。畢命を期と為し、一形に止まるは少苦に似如たれども、前念に命終し、後念に即ち彼の国に生ず。長時永劫、常に無為の法楽を受け、乃ち成仏に至るまで生死を逕ず。豈に快きに非ず哉。知るべし。

檀王本（三九—四七行）・金剛寺本（三六—四二行）が細字双行表記を取る。正業專修と雜業雜修の得失が述べられる。

【日没礼讃】

⑦南無釈迦牟尼仏等一切三宝我今稽首礼廻願往生无量寿国。

此之一仏、現是今時道俗等師。言三宝、即是福田無量。若能礼之一拝、即是念報師恩、以成已行。以斯一行、廻願往生。

此の一仏は、現に是れ今時の道俗等の師なり。三宝と言うは、即ち是れ福田無量なり。若し能く之の一拝を礼せば、即ち是れ師恩を念報し、以て己が行を成ずるなり。斯の一行を以て、廻して往生を願ず。

檀王本（五一―五二行）・金剛寺本（四五行）・誓願寺本（二〇丁裏）・専修寺本（二〇丁表裏）・京大本（二〇丁表）が細字双行表記を取る。

此土の三宝に対して一拝する理由が説かれる。

⑧南无十方三世尽虚空遍法界微塵刹土中一切三宝我今稽首礼廻願往生無量寿国。

然十方虚空无边、三宝无尽、若礼一拝、即是福田无量、功德无窮。能至心礼之一拝、一一仏上、一一法上、一一菩薩聖僧上、一一舍利上、皆得身口意業解脱分善根、来資益行者、以成已業。以斯一行、廻願往生。

然るに十方虚空无边にして三宝无尽なり。若し一拝礼さば、即ち是れ福田无量にして、功德无窮なり。能く至心にこの一拝を礼さば、一一の仏の上、

一一の法の上、一一の菩薩聖僧の上、一一の舍利の上に、皆身口意業の解脱分の善根を得、来りて行者を資益し、以て己が業を成ずるなり。斯の一行を以て、廻して往生を願ず。

檀王本（五四―五六行）・金剛寺本（四七―四八行）・誓願寺本（二〇丁裏）・専修寺本（二〇丁裏）・京大本（二〇丁裏）が細字双行表記を取る。  
十方三世の三宝に対して一拝する理由が説かれる。

⑨南无西方極樂世界阿弥陀仏願共諸衆生咸歸命故我頂礼生彼国。

問曰。何故号為阿弥陀。

答曰。弥陀経及觀経云。彼仏光明無量、照十方国、无所障礙。唯覓念仏衆生、攝取不捨、故名阿弥陀。彼仏寿命、及其人民、无量无边阿僧祇劫、故名阿弥陀。

又釈迦仏、及十方仏、讚歎弥陀光明、有十二種名、普勸衆生、称名礼拝、相続不断者、現世得无量功德、命終之後定得往生。如无量寿経説云。其有衆生、遇斯光者、三垢消滅、身意柔軟、歡喜踊躍、善心生焉。若在三塗、勤苦之处、見此光明、無復苦惱。寿終之後、皆蒙解脱。无量寿仏、光明顯赫、照耀十方、諸仏国土、莫不聞焉。不但我今、称其光明、一切諸仏声聞縁覚諸菩薩衆、咸共歎譽、亦復如是。若有衆生、聞其光明、威神功德、日夜称説、至心不断者、随其所願、得生其国。常為諸菩薩声聞之衆、所共歎譽、称其功德。仏言。我說无量寿仏、光明威神、巍巍殊妙、昼夜一劫、尚不能尽。

白諸行者、当知弥陀身相光明、釈迦如来一劫説不能尽者、如觀経云。一一光明、遍照十方世界、念仏衆生、攝取不捨。今既觀經有如此不思議増上勝縁、摂護行者、何不相続称觀礼念願往生也。応知。

問いて曰く。何故ぞ号して阿弥陀と為すや。

答えて曰く。『弥陀経』、及び『觀経』に云わく。「彼の仏の光明無量にして、十方国を照らすに、障礙せらる無し。唯だ念仏の衆生を覓め、攝取して捨てたまわず。故に阿弥陀と名づく。彼の仏の寿命、及び其の人民も、无量无边阿僧祇劫なり。故に阿弥陀と名づく」と。

又釈迦仏、及び十方仏の弥陀光明を讚歎するに、十二種の名有りて、普く衆生に勧めたり。称名・礼拝すること、相続して断えざれば、現世に无量の功德を得、命終の後に定んで往生を得るなり。『无量寿経』に説きて云うが如し。「其れ衆生有りて、斯の光に遇わば、三垢消滅して、身意柔軟、歡喜踊躍して、善心の生ぜんや。若し三塗・勤苦の処に在りて、此の光明を見らば、復た苦惱無し。寿終りて後、皆解脱を蒙らん。无量寿仏の光明顯赫にして、十方諸仏の国土を照耀すること、聞かざること莫し。但だ我のみならず。今、其の光明を称すること、一切諸仏・声聞・縁覚・諸菩薩衆、咸く共に歎譽せんこと、亦復た是くの如し。若し衆生有りて、其の光明の威神功德を聞き、日夜称説すること、心を至して断えざれば、其の所願に随い、其の国に生ずることを得て、常に諸菩薩・声聞の衆、共に歎譽し、其の功德を称せらる。仏言わく。我、无量寿仏の光明の威神、巍巍殊妙なるを説くに、昼夜一劫



せども、尚尽すこと能わず」と。

諸の行者に白さく。当に知るべし、弥陀の身相・光明は、釈迦如来一劫に説きたまうとも、尽すこと能わざるものなり。『観経』に云うが如し。「一々の光明、遍く十方世界を照らし、念仏の衆生を攝取して捨てたまわず」と。今既に『観経』に此の如き不思議増上の勝縁ありて、行者を摂護したまう。

何ぞ称・観・礼・念を相統して往生を願ぜざらん也。知るべし。

檀王本（五八―六六行）・金剛寺本（五〇―五六行）・誓願寺本（二二丁表―二二丁表）・専修寺本（二二丁表―二二丁表）・京大本（二二丁表―二二丁裏）が細字双行表記を取る。何故、阿弥陀と号するのか、との問いに対し、光明無量・寿命無量の二由を以て答えられる。ただしここでは後続の内容より、光明に主眼が置かれていることが伺え、「又釈迦仏、及十方仏、讃歎弥陀光明、有十二種名、普勧衆生、名礼拝、相続不斷者、現世得无量功德、命終之後定得往生」と日没礼讃において以下礼拝される十二光仏への礼拝理由が述べられる。

⑩南无西方極樂世界無量光佛 願共諸衆生咸歸命 故我頂礼生彼国

南无西方極樂世界無邊光佛 願共諸衆生咸歸命 故我頂礼生彼国（以下、略）

以下、日没礼讃中の「願共諸衆生咸歸命 故我頂礼生彼国」も同様。檀王本（六七―七八、八〇―八三、八六行）・金剛寺本（五七―六八、七〇―七二、七四行）が細字双行表記を取る。

日没礼讃の全十九拝は、正礼十五拝（1―15）、重礼四拝（16―19）にて構成される。正礼の礼拝対象は、三宝（1此土三宝、2十方三法）と阿弥陀仏（3）、並びにその別名十二光仏（4無量光仏、5無辺光仏、6無碍光仏、7無对光仏、8光炎王仏、9清浄光仏、10歓喜光仏、11智慧光仏、12不断光仏、13難思光仏、14無称光仏、15超日月光仏）であり、重礼は阿弥陀仏（16）と、その眷属である観音菩薩（17）、勢至菩薩（18）、諸菩薩清浄大海衆（19）とされる。これらの礼拝対象に対して、

1—2 南無 「我今稽首礼 迴願往生無量壽国」  
3—19 南無 西方極樂世界 「願共諸衆生咸歸命 故我頂礼生彼国」

と定型の礼拝が用いられる。(第一六拝は「阿弥陀佛」の後に「哀愍覆護我 令法種増長 此世及後生 願佛常攝受」の『勝鬘師子吼一乘大方便方廣経』(『大正蔵』二二、二二七中)を出典とする偈が加えられている)この内、四—一九拝の「願共諸衆生咸歸命 故我頂礼生彼国」(願はくは諸の衆生と共に咸く歸命せん。故に我れ頂礼して彼の国に生ぜむ)が細字双行にて表記されている。問題は第三拝(阿弥陀仏)において、該当箇所が通常表記を取っていることである。第三拝(阿弥陀仏)と以下の第四—一五拝(十二光名)は総名・別名の相違はあるが、共に阿弥陀仏に対する礼拝であり、両者の表記方法の相違に対し、教義的意味付けは見出し難い。第一・二拝の「我今稽首礼 迴願往生無量壽国」(我れ今稽首して礼す。迴して無量壽国に往生せむと願す)に関しては、礼拝の対象が此土と十方の三宝である為、自ずから以降の西方阿弥陀仏に対する礼拝とは異なるものであり、「迴して無量壽国に往生せむと願す」と、明確に廻向文自体も変えられるものである為、当該箇所を細字双行表記とせず、テキストの位相を異とすることには一往首肯できる。ただし後述⑭の一切恭敬においては、同じく礼拝対象を三宝とするが、その廻向文「願共諸衆生迴願往生無量壽国」は細字双行表記となっており一貫していない。

⑪南无西方極樂世界觀世音菩薩 願共諸衆生咸歸命故我頂礼生彼国

南无西方極樂世界大勢至菩薩 願共諸衆生咸歸命故我頂礼生彼国

此二菩薩、一切衆生、臨命終時、共持華台、授与行者。阿弥陀仏、放大光明、照行者身。復与无数、化仏菩薩、声聞大衆等、一時授手、如彈指頃、即得往生。為報恩故、至心礼之一拝。

此の二菩薩は、一切衆生の命終の時に臨みて、共に華台を持し、行者に授与したまう。阿弥陀仏は、大光明を放ちて、行者の身を照らしたまう。復た无数の化仏・菩薩・声聞・大衆等と一時に授手したまいて、彈指の如くの頃に、即ち往生を得。報恩の為の故に、心を至して之を礼すること一拝す。

檀王本（八四―八五行）・金剛寺本（七三行）・誓願寺本（二四丁裏）・專修寺本（二四丁裏）・京大本（二四丁表）が細字双行表記を取る。觀世音菩薩・勢至菩薩に対して、一拝する理由が説かれる。

⑫南无西方極樂世界諸菩薩清淨大海衆 願共諸衆生咸歸命故我頂礼生彼国

此等諸菩薩、亦随仏来迎接行者。為報恩故、至心礼之一拝。

此等の諸菩薩は、亦た仏に随い来たりて行者を迎接したまふ。報恩の爲の故に、心を至して之を礼すること一拝す。

金剛寺本（七五行）・誓願寺本（二五丁表）・專修寺本（二五丁表）・京大本（二四丁裏）が細字双行表記を取る。⑦、⑧、⑨、⑪より類推すれば、檀王本も本来細字双行表記であつたか。諸菩薩に対して、一拝する理由が説かれる。

⑬懺悔、廻向、発願已。至心帰命阿弥陀仏。

次作梵竟、説偈発願。出寶性論。

次いで作梵竟りて、偈を説きて発願せよ。『寶性論』に出でたり。

檀王本（九五行）・金剛寺本（八一行）・誓願寺本・專修寺本・京大本（何れも一五丁裏、「出寶性論」のみ細字）が細字双行表記を取る。儀礼の次第（「次作梵竟、説偈発願」）とその偈の出典（「出寶性論」）が細字双行によつて註記される。

⑭一切恭敬。

帰仏得菩提道心恒不退 願共諸衆生廻願往生無量寿国

帰法薩婆若得大惣持門 願共諸衆生廻願往生无量寿国

帰僧息諍論同入和合海 願共諸衆生廻願往生無量寿国

願諸衆生三業清淨奉持仏教和南一切賢聖 願共諸衆生廻願往生無量寿国

檀王本（九九―一〇二行）・金剛寺本（八四―八七行）が細字双行表記を取る。

一切恭敬として三宝へ帰依し、その廻向文である「願共諸衆生廻願往生無量寿国」が細字双行で表記される。続く和南も同様。先述⑧の、日没礼讃第一・二拝も三宝（此土・十方）を礼拝対象とするものであったが、その廻向文「我今稽首礼 廻願往生無量寿国」（我れ今稽首して礼す。廻して無量寿国に往生せむと願す）は通常表記であり、両者の表記方法の相違に教義的意味付けは為し難い。なお開宝蔵本系統（七寺本、高麗初雕本、再雕本、金蔵本）、並びに思溪版本、七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』では、「帰仏得菩提 道心恒不退」「帰法薩婆若 得大惣持門」の末尾に廻向文は附されず、「帰仏得菩提 道心恒不退 帰法薩婆若 得大惣持門 帰僧息諍論 同入和合海 廻願往生無量寿国」（「願共諸衆生」なし）と、仏・法・僧宝への帰依を説いた末尾に廻向文が通常表記にて附されている。誓願寺本（二六丁表裏）・専修寺本（一六丁表裏）・京大本（二六丁表裏）は檀王本・金剛寺本同様、仏・法・僧宝の末尾に「願共諸衆生廻願往生無量寿国」を附すが、それは通常表記にて記されている。

# ⑮ 諸衆等聴説日没無常偈

人間念忿營衆務 不覺年命日夜去  
如燈風中滅難期 忙忙六道無定趣  
未得解脫出苦海 云何安然不驚懼  
各聞強健有力時 自策自勵求常住  
説此偈已、更当心口発願。

此の偈を説き已りて、更に当に心口に発願すべし。

檀王本（一〇六行）・金剛寺本（八九行）が細字双行表記を取る。儀礼の次第（日没無常偈の後に発願すべきこと）が細字双行によって註記される。

【中夜礼讃】

①⑥南无至心帰命礼西方阿弥陀仏 哀愍覆護我 令法種増長 此世及後生 願佛常攝受 願共諸衆生往生安樂国  
南无至心帰命礼西方極樂世界觀世音菩薩 願共諸衆生往生安樂国  
南无至心帰命礼西方極樂世界大勢至菩薩 願共諸衆生往生安樂国  
南无至心帰命礼西方極樂世界諸菩薩清淨大海衆 願共諸衆生往生安樂国

金剛寺本（二八一―二八三行）のみが細字双行表記を取る。中夜礼讃全一六拝の内、重礼の第一四・一五・一六拝（観音・勢至・諸菩薩清淨大海衆に対する）の廻向文「願共諸衆生往生安樂国」が細字双行にて表記される。重礼の内、第一三拝（阿弥陀仏）は通常表記とする。

①⑦発願已。至心帰命阿弥随仏 餘悉同上法

発願已。至心帰命阿弥随仏 餘は悉く上の法に同じ。

檀王本（二七八行）・金剛寺本（二〇〇行）が細字双行表記を取る。五悔（至心懺悔・至心勸請・至心随喜・至心廻向・至心発願）以降の儀礼の次第が「上の法」（日没礼讃に説かれる作梵・発願・三宝帰敬・説無常偈）と同様であることが細字双行によって註記される。

【後夜礼讃】

①⑧南无至心帰命礼西方阿弥陀仏 哀愍覆護我 令法種増長 此世及後生 願佛常攝受 願共諸衆生往生安樂国  
南无至心帰命礼西方極樂世界觀世音菩薩 願共諸衆生往生安樂国  
南无至心帰命礼西方極樂世界大勢至菩薩 願共諸衆生往生安樂国  
南无至心帰命礼西方極樂世界諸菩薩清淨大海衆 願共諸衆生往生安樂国

金剛寺本（二三八行）が細字双行表記を取る。後夜礼讃全二〇拝の内、重礼の第一九拝（勢至）の廻向文「願共諸衆生往生安楽国」のみが細字双行にて表記される。重礼の内、第一七・一八・二〇拝（阿弥陀仏・観音・諸菩薩清浄大海衆）の廻向文は通常表記とする。勢至礼の廻向文のみを細字双行にて表記する教義上の理由は考え難い。

【晨朝礼讃】

①南无至心帰命礼西方阿弥陀仏

法蔵因弥遠 極楽果還深 異珍参作地 衆宝間為林

華開希有色 波揚実相音 何当蒙授手 一遂往生心

願共諸衆生往生安楽国

（以下、省略）

金剛寺本（二四四―二九〇行）のみが細字双行表記を取る。以下、晨朝礼讃中の正礼第一―一九拝、重礼第二〇拝の「南无至心帰命礼西方阿弥陀仏」「願共諸衆生往生安楽国」、並びに重礼第二一拝「南无至心帰命礼西方観世音菩薩」「願共諸衆生往生安楽国」、第二二拝「南无至心帰命礼西方大勢至菩薩」「願共諸衆生往生安楽国」も同様。

ただし重礼第二三拝（金剛寺本二九〇行）は「南无至心帰命礼西方極楽世界諸菩薩清浄大海衆」が通常表記であり、「願共諸衆生往生安楽国」のみが細字双行表記される。重礼の内、第二〇・二一・二二拝の「南无至心帰命礼西方阿弥陀仏」「南无至心帰命礼西方観世音菩薩」「南无至心帰命礼西方大勢至菩薩」が細字双行表記を取るのに対し、第二三拝の「南无至心帰命礼西方極楽世界諸菩薩清浄大海衆」のみが通常表記とする教義上の理由は考え難い。

【日中礼讃】

⑳南无至心帰命礼西方阿弥陀仏 観音勢至諸菩薩清浄大海衆 願共諸衆生往生安楽国

金剛寺本（三五二行）のみが細字双行表記を取る。日中礼讃全二〇拝の内、重礼の第二〇拝の廻向文のみを細字双行にて表記する教義上の理由は考え難い。

㉑ 普為師僧父母、及善知識、法界衆生、断除三障、同得往生阿弥陀仏国、帰命懺悔。

上二品懺悔、発願等同前。須要中要取初。須略中略取中。須広中広取下。

普く師僧・父母及び善知識・法界の衆生の三障を断除して、同じく阿弥陀仏国に往生することを得んが為に、帰命し懺悔したてまつる。上の二品の懺悔・発願等は前に同じ。要中の要を須わば初を取れ。略中の略を須わば中を取れ。廣中の廣を須わば下を取れ。

檀王本（五五四―五五八行）・金剛寺本（三五四―三五八行）が細字双行表記を取る。

懺悔の標文（普為師僧父母、及善知識、法界衆生、断除三障、同得往生阿弥陀仏国、帰命懺悔）に次いで、懺悔の次第に関する註記（要懺悔・略懺悔等を用いる場合の次第は、日没礼讃、中夜礼讃において前述した通りであること。要懺悔を用いるのであれば日没礼讃の懺悔を用いよ。略懺悔を用いるのであれば中夜礼讃の懺悔を用いよ。広懺悔を用いるのであれば日中時礼の懺悔を用いよ）が細字双行表記にて記される。

㉒ 其広者、就実有心願生者而勧。或対四衆、或対十方仏、或対舍利尊像大衆、或対一人、若独自等。又向十方尽虚空三宝、及尽衆生界等、

具向発露懺悔。

有三品、上中下。上品懺悔者、身毛孔中血流、眼中血出者、名上品懺悔。中品懺悔者、遍身熱汗從毛孔出、眼中血流出者、名中品懺悔。下品懺悔者、遍身徹熱、眼中淚出者、名下品懺悔。此等三品、雖有差別、即是久種解脱分善根人。

致使今生敬法重人、不惜身命、乃至小罪、若懺、即能徹心髓。能如此懺者、不問久近、所有重障、頓皆滅尽。若不如此、縱使日夜十二時急走、終是無益差不作者。応知。

雖不能流淚流血等、但能真心徹到者、即与上同。

其の広とは、実に心に生ぜんと願すること有る者に就きて勸むなり。或いは四衆に対し、或いは十方の仏に対し、或いは舍利・尊像・大衆に対し、或いは一人に対す。もしは独自等なり。又十方尽虚空の三宝、及び尽衆生界等に向かい、具に向かいて発露懺悔すべし。

懺悔に三品あり。上・中・下なり。上品の懺悔とは、身の毛孔の中より血流れ、眼の中より血出づる者を上品の懺悔と名づく。中品の懺悔とは、遍身に熱き汗の毛孔従り出だし、眼の中より血流るる者を中品の懺悔と名づく。下品の懺悔とは、遍身の徹りて熱く、眼の中より涙出づる者を下品の懺悔と名づく。これらの三品、差別有りと雖も、即ち是れ久しく解脱分の善根を種えたる人なり。

今生に法を敬い、人を重んじて身命を惜しまず、乃ち小罪に至るまで、若し懺すれば、即ち能く心髓に徹す。能く此の如く懺すれば、久近を問わず、所有の重障、頓に皆滅尽す。若し此の如くせざれば、たとい日夜十二時に急走すとも、終に是れ益無きこと、作さざる者のごとし。知るべし。

流涙・流血等に能わずと雖も、但だ能く真心徹到するは即ち上と同じ。

檀王本（五五四―五五八行）・金剛寺本（三五四―三五八行）が細字双行表記を取る。②懺悔の次第に関する註記に次いで、懺悔の教学的註記（広懺悔の説明。懺悔に上中下の三品のあること。懺悔をする上での心構え）が細字双行表記にて記される。

②懺悔已。至心帰命阿弥陀仏。礼懺竟。

懺悔已。至心帰命阿弥陀仏。礼懺竟んぬ。

金剛寺本（三八六行）のみが細字双行表記を取り、檀王本（五八九行）は通常表記とする。以上で六時の礼讃を終えることが細字双行表記にて記される。



【発願】

②④ 若入観及睡時、応発此願、若坐若立、一心合掌、正面向西、十声称阿弥陀仏観音勢至諸菩薩清淨大海衆竟。弟子某甲現是生死凡夫、罪障深重、輪廻六道、苦不可言。今日遇善知識、得聞弥陀本願名号、一心称念、求願往生。願仏慈悲不捨、本弘誓願摂受。弟子不識弥陀仏身相光明。願仏慈悲示現弟子、身相観音勢至諸菩薩等、及彼世界清淨莊嚴光明等相。

道此語已、一心正念、即随意入観及睡。或有正発願時即得見之。或有睡時得見。此願比来、亦大有現驗。

若し入観、及び睡眠する時は、応に此の願を發すべし。若しは坐し、若しは立して、一心に合掌し、正面を西に向け、十声、阿弥陀仏・観音・勢至・諸菩薩・清淨大海衆を称し竟りて、「弟子某甲現に是れ生死の凡夫、罪障深重にして六道に淪みて、苦言うべからず。今日善知識に遇いて、弥陀の本願名号を聞くを得、一心に称念して往生を求願す。願わくは仏、慈悲もて捨てたまわず、本弘誓願もて摂受したまえ。弟子、弥陀仏の身相・光明を識らず。願わくは仏、慈悲もて弟子に身相、観音・勢至・諸菩薩等、及び彼の世界の清淨莊嚴・光明等の相を示現したまえ」と。

此の語を道い已りて、一心に正念し、即ち意に随いて入観、及び睡れ。或いは正さに発願する時、即ち之を見ることを得る有り。或いは睡時に見ることを得る有り。此の願比来も亦た大いに現驗有り。

檀王本（五九〇―六〇五行）・金剛寺本（三八六―三九九行）が細字双行表記を取る。観法を修する際、また睡眠に際し（中夜の後か）、発願すべきこと、発願の方軌と発願文、その功驗が細字双行表記にて記される。直前の「礼懺竟」の記述より、以下は直接、六時礼讃の儀礼について述べたものではないと判断される。

【後文】

②⑤ 問曰。称念礼観阿弥陀仏、現世有何功德利益。

答曰。若称阿弥陀仏一声、即能除滅八十億劫生死重罪。礼念已下亦如是。

十往生経云。若有衆生、念阿弥陀仏、願往生者、彼仏即遣廿五菩薩、擁護行者。若行若坐若住若臥、若昼若夜、一切時一切处、不令

悪鬼悪神、得其便也。

又如観経云。若称礼念阿弥陀仏、願往生彼国者、彼仏即遣无数化仏、无数化観音勢至菩薩、護念行者。復与前廿五菩薩等、百重千重圍繞行者、不問行住坐臥、一切時处、若昼若夜、常不離行者。

今既有斯勝益。可憑。願諸行者、各須至心求往。

問いて曰く。阿弥陀仏を称念・礼観するに、現世に何の功德利益か有らん。

答えて曰く。若し阿弥陀仏を称すること一声せば、即ち能く八十億劫の生死の重罪を除滅せり。礼念已下も亦た是の如し。

『十往生経』に云わく。「若し衆生有りて、阿弥陀仏を念じ、往生せんと願すれば、彼の仏即ち廿五菩薩を遣わして、行者を擁護せしめたまう。若しは行、若しは坐、若しは住、若しは臥、若しは昼、若しは夜、一切時・一切处に、悪鬼・悪神をしてその便を得しめざる也」と。

又『観経』に云うが如し。「若し阿弥陀仏を称礼念して、彼の国に往生せんと願すれば、彼の仏即ち无数の化仏・无数の化観音・勢至菩薩を遣わして、行者を護念せしめたまう」と。復た前の廿五菩薩等と、百重千重に行者を圍繞して、行住坐臥、一切の時处を問わず、若しは昼、若しは夜、常に行者を離れざる。

今既に斯の勝益有り。憑むべし。願わくは諸の行者、各の須く心を至して往くことを求むべし。

檀王本（五九〇―六〇五行目）・金剛寺本（三八六―三九九行目）が細字双行表記を取る。阿弥陀仏を称念・礼観すること得られる現世利益（滅罪・護念）が述べられ、諸々の行者に勧められる。

②⑥ 又如无量寿経云。若我成仏、十方衆生、称我名号、下至十声、若不生者、不取正觉。彼仏今現、在世成仏。当知、本誓重願不虛。衆生称念、必得往生。

又如弥陀経云。若有衆生、聞説阿弥陀仏、即应執持名号、若一日若二日、乃至七日、一心称仏不乱、命欲終時、阿弥陀仏、与諸聖衆、現在其前。此人終時、心不顛倒、即得往生彼国。仏告舍利弗。我見是利、故説是言。若有衆生、聞説是者、应当発願、願生彼国。

次下説云。東方如恒河沙等諸仏、南西北方及上下、一一方如恒河沙等諸仏、各於本国、出其舌相、遍覆三千大千世界、説誠実言。

汝等衆生、皆応信是一切諸仏所護念經。云何名護念。若有衆生称念阿弥陀仏、若七日及一日、下至十声、乃至一声一念等、必得往生。証成此事、故名護念經。

次下文云。若称仏往生者、常為六方恒河沙等諸仏之所護念、故名称念經。

今既有此増上誓願。可憑。諸仏子等、何不勵意去也。

又『无量寿經』に云うが如し。「若し我れ成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称すること、下は十声に至るまで、若し生ぜずば、正覺を取らじ」と。彼の仏今現に世に在して成仏したまへり。当に知るべし、本誓重願虚しからず。衆生称念せば、必ず往生を得るなり。

又『弥陀經』に云うが如し。「若し衆生有りて、阿弥陀仏を説くを聞きて、即ち応じて名号を執持すること、若しは一日、若しは二日、乃至七日、一心に仏を称して乱れざれば、命終らんと欲す時、阿弥陀仏、諸の聖衆と現に其の前に在す。此の人終る時、心顛倒せずして、即ち彼の国に往生することを得。仏、舍利弗に告げたまう。我れ是の利を見るが故に是の言を説く。若し衆生有りて是の説を聞かば、応に彼の国に生ぜんと願するを發願すべし」と。

次下に説きて云わく。「東方の恒河沙等の如き諸仏、南西北方、及び上下一一の方の恒河沙等の如き諸仏、各の本国に於いて其の舌相を出し、遍く三千大千世界を覆いて、誠実の言を説きたまう。汝等衆生、皆應に是の一切諸仏に護念せらるる經を信ずべし、と。云何が護念と名づく。若し衆生有りて阿弥陀仏を称念すること、若しは七日及び一日、下は十声、乃至一声一念等に至るまで、必ず往生を得。この事を証誠したまうが故に護念經と名づく」と。次下の文に云わく。「若し仏を称じて往生せば、常に六方恒河沙等の諸仏の護念する所と為る。故に護念經と名づく」と。

今既に此の増上の誓願有り。憑むべし。諸の仏子等、何ぞ意を勵まして去らざらん也。

檀王本（五九〇―六〇五行）・金剛寺本（三八六―三九九行）が細字双行表記を取る。増上縁（撰生・見仏・証生）が述べられ、諸々の仏弟子に勧められる。

以上が、檀王本・金剛寺本により確認し得た細字双行表記箇所であるが、これらを『集諸經礼懺儀』卷下の構成（序文・六時礼讃・發願・後文）に順い分類すれば以下の通り。なお金剛寺本、檀王本、単行本（誓願寺本・専修寺本・京大本）における細字双行表記の有無の対照表（【細字双行表記 対照表】）を後掲した。

序 文	六時礼讃						発 願	後 文
	日没	初夜	中夜	後夜	晨朝	日中		
①	⑦		⑬	⑮	⑮	⑮	⑮	⑮
②	⑧		⑭	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯
③	⑨		⑮	⑰	⑰	⑰	⑰	⑰
④	⑩		⑯	⑱	⑱	⑱	⑱	⑱
⑤	⑪		⑰	⑲	⑲	⑲	⑲	⑲
⑥	⑫		⑱	⑳	⑳	⑳	⑳	⑳
	⑬		⑲	㉑	㉑	㉑	㉑	㉑
	⑭		㉑	㉒	㉒	㉒	㉒	㉒
	⑮		㉒	㉓	㉓	㉓	㉓	㉓

六時礼讃・発願と序文・後文は、実際に儀礼の次第を記すもの（六時礼讃・発願）と、それ以外（序文・後文）と、自ずからテキストの性格を異にするものと言える。そこで、これら細字双行表記をその配置箇所である六時礼讃・序文・発願・後文に分類し、それが各パートにおいて如何に機能しているのかを考察することで、細字双行表記の有する意味を明らかにしたい。

#### 一、六時礼讃における細字双行表記

実際の儀礼に使用される六時礼讃において、細字双行表記はその配置箇所より、以下の二つに大別し得る。

- A. 実際に儀礼において口誦されないと考えられる箇所（註記）  
⑦ ⑧ ⑨ ⑪ ⑫ ⑬ ⑮（日没）・⑯（中夜）・⑲（後夜）・⑳（晨朝）
- B. 実際に儀礼において口誦されると考えられる箇所（儀礼本文）  
⑩ ⑭（日没）・⑯（中夜）・⑰（後夜）・⑱（晨朝）

「A. 實際に儀礼において口誦されないと考えられる箇所」とは、實際に儀礼において口誦される礼仏文・懺悔文・發願文等の儀礼本文以外であり、そこでの細字双行表記は所謂、割註として機能していることが看取される。この割註はその内容上、

- A1. 教義に関する註記                      ⑦ ⑧ ⑨ ⑪ ⑫ (日没) ・ ⑫ (日中)
- A2. 儀礼の執行に関する註記              ⑬ ⑮ (日没) ・ ⑰ (中夜) ・ ⑲ ⑳ (日中)

と、更に二分類される。

【A1. 教義に関する註記】

⑦ 此之一仏、現是今時道俗等師。言三宝、即是福田無量。若能礼之一拝、即是念報師恩、以成已行。以斯一行、廻願往生。

⑧ 然十方虚空无边、三宝无尽、若礼一拝、即是福田无量、功德无穷。能至心礼之一拝、一一仏上、一一法、一一菩薩聖僧上、一一舍利上、皆得身口意業解脱分善根、来資益行者、以成已業。以斯一行、廻願往生。

⑨ 問曰。何故号为阿弥陀。答曰。弥陀經及觀經云。(中略)今既觀經有如此不思議増上勝縁、撰護行者、何不相統称觀礼念願往生也。応知。

⑪ 此二菩薩、一切衆生、臨命終時、共持華台、授与行者。阿弥陀仏、放大光明、照行者身。復与无数、化仏菩薩、声聞大衆等、一時授手、如彈指頃、即得往生。為報恩故、至心礼之一拝。

⑫ 此等諸菩薩、亦随仏来迎接行者。為報恩故、至心礼之一拝。

⑫ 其広者、就実有心願生者而勸。或対四衆、或対十方仏、或対舍利尊像大衆、或対一人、若独自等。又向十方尽虚空三宝、及尽衆生界等、具向発露懺悔。

懺悔有三品、上中下。上品懺悔者、身毛孔中血流、眼中血出者、名上品懺悔。中品懺悔者、遍身熱汗從毛孔出、眼中血流者、名中品懺悔。下品懺悔者、遍身微熱、眼中涙出者、名下品懺悔。此等三品、雖有差別、即是久種解脱分善根人、

致使今生敬法重人、不惜身命、乃至小罪、若懺、即能徹心髓。能如此懺者、不問久近、所有重障、頓皆滅尽。若不如是、縱使日夜十二時急走、終是無益差不作者。忒知。

雖不能流淚流血等。但能真心徹到者。即與上同。

【A2. 儀礼の執行に関する註記】

⑬ 次作梵竟、説偈發願。出寶性論。

⑮ 説此偈已、更当心口發願。

⑰ 餘悉同上法。

⑲ 上二品懺悔、發願等同前。須要中要取初。須略中略取中。須広中広取下。

⑳ 礼懺竟。

このように内容上、「A. 実際に儀礼において口誦されないと考えられる箇所」における細字双行表記が儀礼本文ではなく、註記（割註）を表していることは明白である。つまり、通常表記とA.における細字双行表記は、儀礼本文と割註というテキストの差位を視覚化しているものと考えられ、細字双行表記が儀礼の執行を主眼とする意識と関連するものであることが推察される。なお、これら「A2. 儀礼の執行に関する註記」の用例より帰納される「儀礼の作法、執行の次第に関する表記は細字双行表記にて註記する」が、原則であるとするならば、以下の傍線部は、檀王本・金剛寺本にて通常表記されているが、本来細字双行表記であつた可能性も指摘できる（本来細字双行表記であつたと推定される箇所に傍線を附した。引用本文には『大正蔵』本を用いた）。

【各時礼標題下の懺悔に関する註記】

第一仏勸礼讃阿弥随仏十二光名、求願往生。一十九拜。当日没時礼。取中下懺悔亦得。

第一仏勸礼讃阿弥随仏十二光名、求願往生。一十九拜。当日没時礼。中・下の懺悔を取るも亦た得たり。

第二比丘善導謹依大乘經。採集要文以為讃偈二十三拜。当初夜時礼。懺悔同前後。

第二比丘善導謹依大乘經。採集要文以為讃偈二十三拜。当初夜時礼。懺悔は前後に同じ。

第三依龍樹菩薩願生礼讃偈一十六拜。当中夜時礼。懺悔同前後。

第三依龍樹菩薩願生礼讃偈一十六拜。当中夜時礼。懺悔は前後に同じ。

第四依天親菩薩願生礼讃偈二十拜。当後夜時礼。懺悔同前後。

第四依天親菩薩願生礼讃偈二十拜。当後夜時礼。懺悔は前後に同じ。

第五依彦琮法師願生礼讃偈二十二拜。当旦起時礼。懺悔同前後。

第五依彦琮法師願生礼讃偈二十二拜。当旦起時礼。懺悔は前後に同じ。

第六比丘善導願往生礼讃偈依十六觀作二十拜。当日中時礼。懺悔同前後。

第六比丘善導願往生礼讃偈依十六觀作二十拜。当日中時礼。懺悔は前後に同じ。

日没・初夜・中夜・後夜・晨朝・日中の各総標に続き、懺悔は各時礼に通じることが述べられる。なお後夜・晨朝・日中礼讃の当該箇所を、高麗初雕本・再雕本、金藏本、<sup>(4,4)</sup> 磧砂本、<sup>(4,5)</sup> 七寺藏『阿弥陀往生礼仏文』<sup>(4,6)</sup> は細字にて表記としていることも、本来割註であった証左の一つとなるか。<sup>(4,7)</sup>

【日没礼讃における作法】

至心懺悔

南無帰懺十方仏 願滅一切諸罪根 今將久近所修善 迴作自他安樂因 恒願一切臨終時  
勝縁勝境悉現前 願觀弥陀大悲主 觀音勢至十方尊 仰惟神光蒙授手 乘仏願力生彼国  
懺悔迴向発願已 至心帰命阿弥陀仏

次作梵 説偈発願 出宝性論。

礼懺諸功德 布施諸有情 願臨命終時 見無量寿仏 無辺功德身  
我及餘信者 既見彼仏已 願得離垢眼 往生安樂国 成無上菩提

懺已

一切恭敬。

帰仏得菩提 道心恒不退 帰法薩婆若 得大總持門 帰僧息諍論 同入和合海

迴願往生 無量寿国

願諸衆生 三業清淨 奉持仏教

諸衆等聴説黄昏偈。

人間忽忽營衆務 不覺年命日夜去 如燈風中滅難期 忙忙六道無定趣  
未得解脱出苦海 云何安然不驚懼 各聞強健有力時 自策自励求常住

説此偈已、更当心口発願

願弟子臨命終時。心不顛倒。心不錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心安隱快樂。如入禪定。聖衆現前乘仏本願。上品往生阿弥陀仏国。  
到彼国已得六神通。迴入十方界。救摂苦衆生。虚空法界尽。我願亦如是。

発願已。至心帰命礼阿弥陀仏。

初夜偈云（偈は省略）・中夜偈云（偈は省略）・後夜偈云（偈は省略）・平旦偈（偈は省略）・日中偈云（偈は省略）



【中夜時礼における略懺悔の作法】

至心懺悔。

自從無始受身來。恒以十惡加衆生。不孝父母謗三宝。造作五逆不善業。以是衆罪因緣故。妄想顛倒生纏縛。応受無量生死苦。頂礼懺悔願滅除。

懺悔已。至心帰命礼阿弥陀仏。

至心勸請。

諸仏大慈無上尊。恒以空慧照三界。衆生盲冥不覺知。永沈生死大苦海。為拔群生離諸苦。勸請常住轉法輪。

勸請已。至心帰命礼阿弥陀仏。

至心隨喜。

歷劫已來懷嫉妬。我慢放逸由癡生。恒以瞋恚毒害火。焚燒智慧慈善根。今日思惟始惺悟。発大精進隨喜心。

隨喜已。至心帰命礼阿弥陀仏。

至心迴向。

流浪三界内。癡愛入胎獄。生已帰老死。沈沒於苦海。我今修此福。迴生安樂土。

迴向已。至心帰命礼阿弥陀仏。

至心発願。

願捨胎藏形。往生安樂国。速見弥陀仏。無辺功德身。奉觀諸如来。賢聖亦復然。獲六神通力。救摂苦衆生。虚空法界尽。我願亦如是。

発願已。至心帰命礼阿弥陀仏。餘悉同上法。

【日中礼讃における廣懺悔の作法】

敬白十方諸仏十二部経一切賢聖。及一切天龍八部法界衆生現前大衆等。證知我某甲發露懺悔。（中略）始從今日願共法界衆生。捨邪帰正發菩提心。慈心相向仏眼相看。作菩提眷属眞善知識。同生阿弥陀仏国。乃至成仏。如是等罪永斷。相續更不敢作。

懺悔已。至心帰命礼阿弥陀仏。礼懺竟。

それでは、A.における細字双行表記の機能を割註と捉え、儀礼本文と割註というテキストの差位を視覚化しているものと規定するならば、「B.実際に儀礼において口誦されると考えられる箇所（儀礼本文）」が細字双行表記されていることは如何に捉えられるものであろうか（金剛寺本のみに細字双行表記がみられる場合には、丸数字の上に＊を附した）。

【B.実際に儀礼において口誦されると考えられる箇所（儀礼本文）】

⑩南无西方極樂世界無量光仏 願共諸衆生咸帰命 故我頂礼生彼国

⑭一切恭敬。

帰仏得菩提道心恒不退	願共諸衆生廻願往生無量寿国
帰法薩婆若得大惣持門	願共諸衆生廻願往生无量寿国
帰僧息諍論同入和合海	願共諸衆生廻願往生無量寿国
願諸衆生三業清浄奉持仏教和南一切賢聖	願共諸衆生廻願往生無量寿国

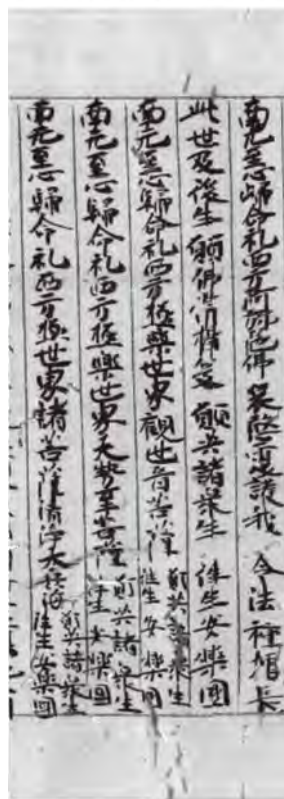
\*⑬南无至心帰命礼西方阿弥陀仏 哀愍覆護我 令法種增長 此世及後生 願仏常摂受 願共諸衆生往生安樂国

南无至心帰命礼西方極樂世界觀世音菩薩 願共諸衆生往生安樂国

南无至心帰命礼西方極樂世界大勢至菩薩 願共諸衆生往生安樂国

南无至心帰命礼西方極樂世界諸菩薩清浄大海衆 願共諸衆生往生安樂国

183 182 181 180 179



【⑬金剛寺本 当該箇所】

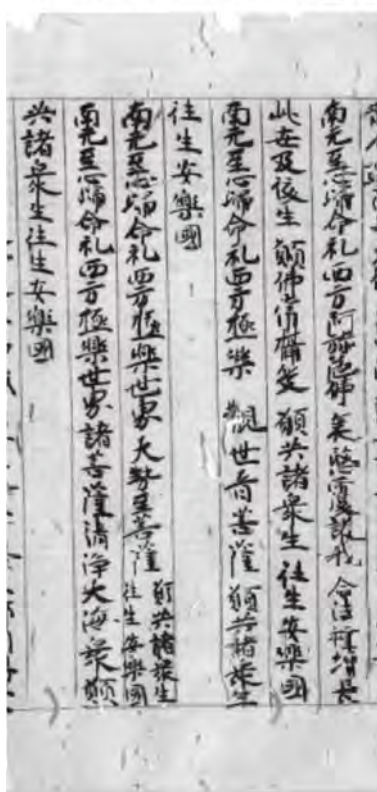
\*⑭南无至心帰命礼西方阿弥陀仏 哀愍覆護我 令法種增長 此世及後生 願仏常摂受 願共諸衆生往生安樂国

南无至心帰命礼西方極樂世界觀世音菩薩 願共諸衆生往生安樂国

南无至心帰命礼西方極樂世界大勢至菩薩 願共諸衆生往生安樂国

南无至心帰命礼西方極樂世界諸菩薩清浄大海衆 願共諸衆生往生安樂国

240 239 238 237 236 235 234 2



【⑭金剛寺本 当該箇所】

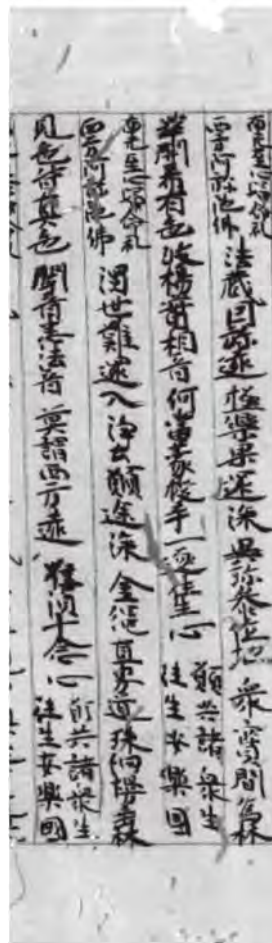
\* ①⑨南无至心帰命礼西方阿弥陁仏

法蔵因弥遠 極樂果還深 異珍参作地 衆宝間為林

華開希有色 波揚実相音 何当蒙授手 一遂往生心

願共諸衆生往生安樂国

247 246 245 244



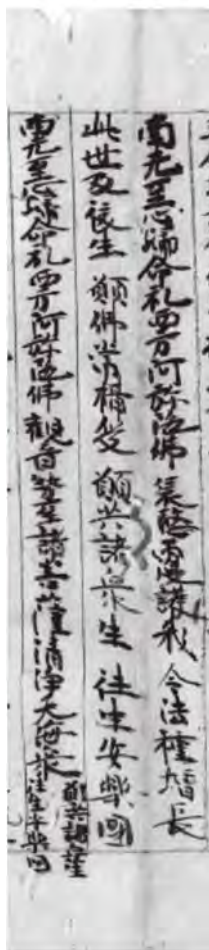
【①⑨金剛寺本 当該箇所】

\* ②⑩南无至心帰命礼西方阿弥陁仏

観音勢至諸菩薩清浄大海衆

願共諸衆生往生安樂国

352 351 350 3



【②⑩金剛寺本 当該箇所】

後文		発願	日 中				晨朝	後夜	中夜		日 没										序 文						行 細 字 記 双  金 剛 寺 本 檀 王 本 單 行 本		
②⑤	②⑤	②④	②③	②②	②①	②①	①⑨	①⑧	①⑦	①⑥	①⑤	①④	①③	①②	①①	①①	①①	①①	①①	①①	①①	①①	①①	①①	①①	①①		①①	①①
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○

【細字双行表記 対照表】

金剛寺本、檀王本、単行本の細字双行表記の有無を対照した。

「単行本」は誓願寺本、専修寺本、京大本の三本の総称とする。

細字双行表記が認められれば「○」、認められなければ「|」にて示した。

一部が細字双行表記を取る場合は「△」にて示した。

後文	発願	日 中				日 没					序 文						
②⑤	②⑤	②④	②③	②②	①②	①①	①①	①①	①①	①①	①①	①①	①①	①①	①①	①①	行細 表字 記双
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	金剛 寺本
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	檀王 本
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	単行 本

【A1. 教義に関する註記 対照表】

日中	晨朝	後夜	中夜	日 没		
②①	①⑨	①⑧	①⑥	①④	①①	行細 表字 記双
○	○	○	○	○	○	金剛 寺本
○	○	○	○	○	○	檀王 本
○	○	○	○	○	○	単行 本

【B. 実際に儀礼において口誦

されると考えられる箇所 対照表】

日 中	中夜	日 没	
②③	①⑦	①⑤	行細 表字 記双
○	○	○	金剛 寺本
○	○	○	檀王 本
○	○	○	単行 本

【A2. 儀礼の執行に関する註記 対照表】

これらの箇所については、既に述べた通り、当該箇所を細字双行表記としつつも、同内容の他方を通常表記とする等、一貫して細字双行表記とする理由、整合性は見出し難く、その意図は解し難い。つまり当該箇所は、テキストの内容（善導の撰述意図）に基づき細字双行表記を取るものとは考え難く、撰者の意図とは無関係に、書写の段階において細字双行表記が取られたものと推測される。先述の「A. 実際に儀礼において口誦されないと考えられる箇所（註記）」、十一箇所の内、⑫、⑬の二箇所を除いて檀王本・金剛寺本が共に細字双行表記とするのに対し（前掲【A1. 教義に関する註記 対照表】【A2. 儀礼の執行に関する註記 対照表】参照）、これらの箇所は⑩、⑭以外は、金剛寺本のみが細字双行表記を取るものであり（前掲【B. 実際に儀礼において口誦されると考えられる箇所 対照表】参照）、それは各写本単位にて細字双行表記が行われたと推測する。当該箇所における細字双行表記の機能は図りがたいが、書写者によるものであり、その対象が主に定型句（願共諸衆生往生安樂国）であつて文末に位置することからすれば、字詰め等、書写の都合に由来するものであろうか。

## 二、発願・後文における細字双行表記

発願・後文である⑭、⑮、⑯は、すべて細字双行にて表記されている。後文⑮では阿弥陀仏を称念・礼観することを得られる現世利益（滅罪・護念）を述べ、後文⑯では阿弥陀仏の誓願が虚言でなく、増上の誓願（撰生・見仏・証生）であることが述べられ、何れも全ての行者、仏弟子に勧められる。先述「一、六時礼讃における細字双行表記」では、実際に儀礼において口誦されないと考えられる箇所を細字双行で表記したことが看取されたが、後文⑮、⑯も儀礼本文ではなく、行者への勧進であり、細字双行にて表記されるのもその為と考えられる。

問題となるのは発願⑭である。⑭は発願文を含むものであり、そこには「弟子某甲」「道此語已（此の語を道い已りて）」等、明確に口誦すべき内容であることが看取される。ただ、当該箇所は六時礼讃における発願文ではなく（直前に「礼懺竟」と六時礼讃の儀軌が終わったことが明示されている）、「若入観及睡時、応発此願（若し入観、及び睡眠する時は、応に此の願を發すべし）」と断られるように、入観・睡眠時という附帯事項であり、その為、口誦すべきものでありながらも細字双行で表記され、六時礼讃の儀礼本文と弁別されているものと考えられる。

### 三、序文における細字双行表記

序文も後文と同様に、六時礼讃の儀礼本文ではない為、全て細字双行で表記されるものと考えられるが、実際には、通常表記される箇所がみられる。序文より細字双行表記を除けば以下の通り（便宜上、行頭に算用数字を附した）。

1. 往生礼讃偈一卷
2. 勸一切衆生願生西方極樂世界阿弥陀仏国六時礼讃偈。
3. 謹依大乘経及龍樹、天親、此土沙門等所造往生礼讃、集在一処、分作六時。唯欲相統係心、助成往益。亦願曉悟未聞、遠治遐代耳。  
何者、（以下、細字双行表記①）
4. 問曰。今欲勸人往生者、未知若為安心、起行、作業、定得往生彼国土也。
5. 答曰。必欲往生彼国土者、如觀經説。先具三心必得往生。何者、為三、（以下、細字双行表記②）  
又如天親浄土論云。若有願生彼国者、勸修五念門、五門若具、定得往生。何者、為五、（以下、細字双行表記③）  
又勸行四修法、用策三心五念之行、速得往生。何者、為四、（以下、細字双行表記④、⑤、⑥）

通常の序文が二〇一七字を数えるのに対し、細字双行表記を除けば二二七字と、その分量は凡そ十分の一となる。内容は、1. 題号（往生礼讃偈一卷）、2. 題号の具名（勸一切衆生願生西方極樂世界阿弥陀仏国六時礼讃偈）、3. 撰述の理由（謹依大乘経及〔中略〕何者）、4. 往生する為に如何に安心・起行・作業すべきかの問い（問曰〔中略〕定得往生彼国土也）、5. その答え（答曰〔中略〕速得往生。何者為四）、となり（傍点部「何者」<sup>48</sup>「何者為三」「何者為五」「何者為四」の問い掛けに違和感を覚えるが）、一連のものとして捉えることも可能か。

序文における細字双行箇所は、先に「一、六時礼讃における細字双行表記」の「B. 実際に儀礼において口誦されると考えられる箇所（儀礼本文）」にみられた、書写段階における細字双行表記と考えるには、分量も膨大であり、また檀王本・金剛寺本の両者が一致することより（前掲

【A1. 教義に関する註記 対照表】、何らかの意図、規範に基づくものと考えられる。仮に、この序文に対しても、「一、六時礼讃における細字双行表記」でみられた、通常表記（儀礼本文）、細字双行表記（割註A1. 教義に関する註記）という意識でなされたものであるならば、これら通常表記箇所は、儀礼本文として実際に六時礼讃において口誦された可能性を有し、従来、序文として六時礼讃の儀礼には関与しないものと考えられてきた当該箇所の位置附けに再考を促すものとなる。

以上、六時礼讃、発願・後文、序文における細字双行表記を列举し、分類することで、その機能を考察してきた。まとめると以下の通り。

A. 実際に儀礼において口誦されないと考えられる箇所（註記）

A1. 教義に関する註記

①②③④⑤⑥（序文）、⑦⑧⑨⑪⑫（日没）、⑫（日中）、⑭（発願）、⑮⑯（後文）

A2. 儀礼の執行に関する註記

⑬⑭（日没）、⑮（中夜）、⑯⑰（日中）

B. 実際に儀礼において口誦されると考えられる箇所（儀礼本文）

⑩⑪（日没）、⑫（中夜）、⑬（後夜）、⑭⑮（晨朝）

この内、B.に関しては、明確な意図・基準が測り難く、檀王本・金剛寺本の両者が一致しない事例も多いことより（前掲【B. 実際に儀礼において口誦されると考えられる箇所 対照表】）、書写者の判断により、書写段階において細字双行表記がなされたものと推測した。それではA.は何れの段階において細字双行表記なされたものであろうか。A.は「A1. 教義に関する註記」、「A2. 儀礼の執行に関する註記」と、テキストの内容に関連する明確な意図が伺える。ただしその意図が撰者善導のものなのか、書写者のものなのか判断することは難しい<sup>19)</sup>。ただ注目すべきは、刊本大蔵経本『集諸経礼懺儀』卷下に認められず、日本開版の『往生礼讃偈』に一部認められる細字双行表記が、檀王本・金剛寺本に多量に認められるという事象の意味である。

通常、一切経書写という営為において、書写者の判断にて通常表記箇所を細字双行として書写することは考え難い。つまり、B.に認められる書写者の判断による細字双行表記は、一切経としての入蔵本『集諸経礼懺儀』卷下書写時になされたとは考え難く、A.より伺える儀礼の執行



との関連を勘案するならば、それは入蔵以前である『往生礼讃偈』の段階においてなされたものと推測される。本書が一切経本（入蔵本）という書写テキストでありながら、なお儀礼テキストとしての性格を保持しているのは、実際に儀礼テキストとして使用されていた『往生礼讃偈』が、開元一八年（七三〇）頃、智昇の『集諸経礼懺儀』の編纂によって入蔵された為、以降、書写功德の対象となる書写テキストへと、内容はそのままに、そのテキストの性格を変容した為と考えられる。

一切経（コレクション）の一部としての書写テキストとなれば、以降は（意識として）厳密な書写がなされたものと考えられ、そうであるならば檀王本・金剛寺本は長安における『往生礼讃偈』の執行を淵源とし、それを保持するテキストと位置附けられる。両本が『集諸経礼懺儀』巻下でありながら、日本において開版された『往生礼讃偈』に、その内容・形態（細字双行表記）が近似するのはその為であり、またそれが開宝蔵を嚆矢とする他の刊本大蔵経本『集諸経礼懺儀』巻下と乖離するのは、開宝蔵開版（九七一―九七七）までにテキストの変遷が進んだのか、或いは諸刊本大蔵経本開版時における校訂の為と推測される。

## おわりに

以上、檀王本と金剛寺本の書誌情報を紹介し、その本文を諸本と比較対照することにより、その系譜が唐代写経に連なるものと比定した。その上で両巻の特色である細字双行表記に着目し、その本文中の機能を検討することにより、両巻が実際の儀礼の執行を意識したテキスト整備を反映するテキストであり、それは日本において開版された単行本『往生礼讃偈』同様、長安にて流行していた『往生礼讃偈』に端を発するものであると推定した。

従来、礼仏文の冒頭における「南無」の有無に関しては、敦煌本・刊本大蔵経諸本に認められず、日本に伝存する『往生礼讃偈』にのみ確認された為、日本における附加と考えられ、<sup>(51)</sup>「南無」の附加されていない刊本大蔵経諸本がより『往生礼讃偈』の祖本に近い形態と捉えられてきた。

本朝における儀礼としての「往生礼讃」（六時礼讃）の始行は、所謂「法然伝」の諸本によれば建久三年（一一九二）とされ、また『往生礼讃偈』単行本開版の嚆矢は建暦三年（一二二三）の明信開版である等、本書の流布は「偏依善導一師」（『大正蔵』八三、一九頁上段）を標榜する法然浄土教の隆盛に相関するものであると推測され、それに伴う善本の希求、儀礼テキストとしての整備を目的とした意図的な改訂等も、当然、法然門下による所行と考えられてきた。しかし法然（一二三三―一二二二）誕生以前に書写された中尊寺経（清衡経、一一一七―一二二五成立）の一部である檀王本に、既に「南無」の附加が確認されることは、上記の見解に再考を促すものであり、また日本に伝存する『往生礼讃偈』の資料価値に対しても再検討を迫るものである。

従来、中尊寺経は装飾経として美術的観点から注目されることが殆どであったが、本稿がその文献学的価値に対する再認識を喚起するものとなれば幸いである。

## 註

- 1 檀王法林寺については信ヶ原良文『檀王法林寺史』（浄土宗檀王法林寺発行、一九八〇）、信ヶ原雅文・石川登志雄『檀王法林寺 袋中上人 琉球と京都の架け橋』（淡交社、二〇一一）、三宅徹誠「寺院紹介 檀王法林寺」（国際仏教学大学院大学学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」ニュースレター『いとくろ』三、二〇〇八）参照。
- 2 三宅徹誠「袋中上人の一切経蒐集について」（『仏教論叢』四九、二〇〇五）、同「袋中蒐集一切経の来歴と現況」（『国際仏教学大学院大学研究紀要』一一、二〇〇八）、同「中国国家図書館所蔵袋中蒐集文献について」（『佛教論叢』五一、二〇〇七）参照。
- 3 本経と共に経帙（元来、神護寺経のものか）が伝存している。
- 4 信ヶ原良文、註1前掲書参照。
- 5 了恵と龜山天皇の関わりを示すものとして、檀王法林寺には了恵が花山院通雅（一二三三—一二七六）を使いとして龜山天皇の下問に答えるという形で浄土宗義を説く『尊問愚答記』草稿が伝わっている。
- 6 紺紙金銀字交書経の先例としては、「正倉院文書」天平一〇年に「神符経一卷（縹紙 紫表 綺緒 朱軸 金銀交字）」（『大日本古文書』七、二二一頁）の記述がみられ、転法輪山大乗律院莊嚴浄土寺、五島美術館、比叡山延暦寺には金銀字法華経（何れも重要文化財）が伝存している。一切経に関しては慈覚大師円仁（七九四—八六四）の『入唐求法巡礼行記』開成五年（八四〇）七月二日条に五台山経藏閣所蔵の一切経について「大藏経六千余卷、惣是碧紙金銀字白檀玉牙軸」との記録がみられるが、現在確認されている遺例は、中尊寺経のみである。
- 7 中尊寺一切経については、『金剛峯寺蔵中尊寺経を中心とした中尊寺経に関する総合的研究』（昭和六三年度・平成元年度科学研究費補助金総合研究（A）研究成果報告書、上山春平（研究代表者）一九九〇）、『中尊寺金銀字経に関する総合的研究』（平成六—八年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書、藤澤令夫（研究代表者）、一九九七）、『中尊寺経を中心とした平安時代の装飾経に関する総合的研究』（平成一三—一六年度科学研究費補助金基盤研究（A）（2）研究成果報告書、興膳宏（研究代表者）二〇〇五）を参照。
- 8 その他、大阪観心寺に一六六卷、中尊寺に一五卷、東京国立博物館に一二卷の所蔵が確認されている。
- 9 信ヶ原雅文、註1前掲書参照。

- 10 『往生礼讃偈』と『集諸經礼懺儀』卷下の関係については、本論第一章を参照願いたい。
- 11 『大正蔵』八三、一九上。
- 12 金剛寺については『大日本古文書』家分け第七 金剛寺文書（東京帝大史料編纂掛、一九五二）、『天野行宮金剛寺古記』大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告書第六輯（大阪府、一九三五）、『河内長野市史』（河内長野市役所、一九七二—二〇〇六）、河合康「河内国金剛寺の寺辺領形成とその政治的諸關係」『ヒストリア』一二六、一九九〇）参照。
- 13 「六波羅下知状」『河内長野市史』五、史料編二、五九頁（河内長野市役所、一九七五）。
- 14 金剛寺一切經については、『天野行宮金剛寺古記』大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告書第六輯（大阪府、一九三五）、『金剛寺一切經の基礎的研究と新出仏典の研究』（平成二二—一五年度科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書、落合俊典（研究代表者）、二〇〇四）、『金剛寺一切經の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』（平成一五—一八年度科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書、落合俊典（研究代表者）、二〇〇七）、『真言密教寺院に伝わる典籍の学際的調査・研究—金剛寺本を中心に—』（平成二〇年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書、後藤昭雄（研究代表者）、二〇〇九）、三好鹿雄「金剛寺一切經全貌」『宗教研究』一三一六、一九三六）、木村武雄「河内金剛寺所蔵の古典古写経類に就いて」『大乘』一七一九、一九三八）、梶浦晋「金剛寺一切經と新出安世高訳仏典」『仏教学セミナー』七三、二〇〇二）を参照。
- 15 大塚紀弘「金剛寺一切經の来歴について」（国際仏教学大学院大学学術フロンティア第三回公開研究会口頭発表、二〇〇八年一月）。
- 16 『施焰口餓鬼陀羅尼經』奥書「承元二年六月七日於河内国金剛寺書写已畢僧覚全」。『阿毘達磨俱舍論本頌』卷上奥書「文永五年歲次戊辰六月廿四日終書写功了」。
- 17 後藤昭雄「金剛寺一切經奥書一覽 奥書年表・索引 覚書」（註14前掲『金剛寺一切經の基礎的研究と新出仏典の研究』所収）参照。
- 18 「増上寺蔵 思溪版『集諸經礼懺儀』卷下 解題・影印」（『国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸經礼懺儀 卷下』、国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会、二〇一〇）による。詳細は能島覚氏の解題を参照願いたい。
- 19 延聖院大蔵經局編『磧砂大蔵經』第三二冊（新文豊、一九八七）所収による。
- 20 中華大蔵經編輯局整理『中華大蔵經（漢文部分）』六三（中華書局、二〇〇五）所収による。

- 21 『域外漢籍珍本文庫』編纂出版委員会編『高麗大藏經初刻本輯刊』七五冊（西南師範大学出版社、二〇一二）による。
- 22 『高麗大藏經』第三三（東国大学校、一九七五）所収による。なお高麗大藏經研究所のホームページ上にも画像が公開されている（[http://kb.sutra.re.kr/rick\\_eng/search/xt/index.jsp?kcode=K1087&ksubCode=000&flag=D&fontFlag=B&fromMenu=N&kvolumeCode=001&page=P0740&dan=b&kwon=V33](http://kb.sutra.re.kr/rick_eng/search/xt/index.jsp?kcode=K1087&ksubCode=000&flag=D&fontFlag=B&fromMenu=N&kvolumeCode=001&page=P0740&dan=b&kwon=V33) 二〇〇八年一〇月六日確認）。
- 23 『大正蔵』四七、四六六上、六行―四六七中、四行。『集諸経礼懺儀』卷下の該当箇所を記した。註25、26も同様。
- 24 『大正蔵』四七、四六七中、五行―四七四中、二行。
- 25 『大正蔵』四七、四七四中、二行―四七四中、一三行。
- 26 『大正蔵』四七、四七四中、一三行―四七四下、一四行。
- 27 ただし【初】は「啻」なし。【磧】は「樂何諦事難思議」とする。
- 28 井筒信隆「華嚴經変文について」（『金剛峯寺蔵中尊寺経を中心とした中尊寺経に関する総合的研究』昭和六三年度・平成元年度科学研究費補助金総合研究（A）研究成果報告書、一九九〇）、泉武夫「中尊寺経を中心とした平安時代の装飾経に関する総合的研究 研究概要」（『中尊寺経を中心とした平安時代の装飾経に関する総合的研究』平成一三―一六年度科学研究費補助金基盤研究（A）（2）研究成果報告書、二〇〇五）参照。
- 29 開宝蔵本と金蔵本・高麗初雕本との関係、異同については、本論第二章を参照願いたい。
- 30 落合俊典「金剛寺蔵『仏説八陽経』について」（註14前掲『金剛寺一切経の基礎的研究と新出仏典の研究』所収）。
- 31 註14前掲梶浦論文。梶浦晋・デレアヌフロリン・Stefano Zacchetti・赤尾栄慶・辛嶋静志・本庄良文・衣川賢次・落合俊典『安般守意経』『十二門経』影印・翻刻」（註14前掲『金剛寺一切経の基礎的研究と新出仏典の研究』所収）。
- 32 落合俊典「新出仏典『優婆塞五戒法』」（註14前掲『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』所収）、同「日本の古写経と中国仏教文献―天野山金剛寺蔵平安後期写「録外―5」の成立と流传を巡って」（京都大学人文科学研究所編『中国宗教文献研究』臨川書店、二〇〇七）。
- 33 箕浦尚美「金剛寺蔵玄心撰『一切経音義』について」（註14前掲『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』所収）、国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編『日本古写経善本叢刊第一輯 玄心撰一切経音義二十五卷』（国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会、二〇〇六）。

- 34 林寺正俊「金剛寺蔵『五王経』について」(註14前掲『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』所収)。
- 35 佐藤もな「金剛寺蔵『仏説七女経』について」(註14前掲『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』所収)。
- 36 池麗梅「金剛寺蔵『餓鬼報応経』解題」(註14前掲『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』所収)。
- 37 林寺正俊「日本古写経中の新出資料『三法度論』とその問題点」(『仏教学』四九、二〇〇七)、同『三法度論』における教理の展開」(『日本仏教学会年報』七九、二〇一五)、同「日本古写経本『三法度論』の成立・三法度経本」の編集とその動機」(『東アジア仏教研究』一三、二〇一五)
- 38 七寺本については本論第二章を参照願いたい。
- 39 七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』については本論第四章を参照願いたい。
- 40 「京都大学附属図書館蔵 建長三年刊『往生礼讃偈』解題・影印・訓読」(註18前掲書所収)による。詳細は梶浦晋氏の解題を参照願いたい。なお本帖は京都大学附属図書館のホームページ上にて画像が公開されている。京都大学電子図書館貴重資料画像 <http://edb.kuif.kyoto-u.ac.jp/exhibit/kichosarch/src/ian303.html> (二〇一一年八月二四日確認)。
- 41 「建暦三年太歳癸酉十月初三日畢」の奥書を有する。ただしこれは書写奥書ではなく、先行する明信開版本(散逸)の本奥書と考えられ、実際の書写年時は『般舟讃』も同様の書式で書写されていることから健保五年(一二一七)、仁和寺における『般舟讃』発見以降と考えられる。赤尾栄慶氏は鎌倉時代初期の書写と判断され、本書を含む浄土三部経并善導五部九巻が納められている菊花散時絵経箱に『般舟讃』の一節が時絵されていることから、『般舟讃』発見直後の書写であると推測されている(京都国立博物館編『古写経―聖なる文字の世界―』作品解説、三二八・三二九頁、二〇〇四)。
- 42 専修寺本については堤玄立・平松令三編『高田専修寺本 善導大師五部九巻』(法蔵館、一九八六)による。書誌情報については『同』解説二、『定本 親鸞聖人全集』九、解説(法蔵館、一九六九)、高橋正隆「善導遺文の書誌研究」(藤堂恭俊編『善導大師研究』、山喜房仏書林、一九八〇)を参照願いたい。
- 43 註40前掲「京都大学附属図書館蔵 建長三年刊『往生礼讃偈』解題・影印・訓読」による。
- 44 高麗初雕版本・再雕版本、金蔵本、二〇張、一二張、二六張。
- 45 註19前掲書、五六六下、五六七中、五六八下。
- 46 本論第四章末掲載の翻刻文、三三二行、三七五行、四四二行。

47 ただし「懺悔同前後」という註記が、撰述当初からの註記（善導が附したものであるのかは疑問である。善導は「懺悔有三品。一要、二略、三廣。如下具説。

随意用皆得」（四六七上）と、懺悔に要・略・廣の三種類を設けており、日没時礼において要懺悔を、中夜時礼において略懺悔を、日没時礼において廣懺悔を説いている。今、各時に説かれる懺悔と、上述の懺悔に関する註記を対照させると以下の通り。

日没時礼	要懺悔（上）	取中下懺悔亦得	中（略）・下（廣）の懺悔を取るも亦得。
初夜時礼	なし	懺悔同前後	懺悔は前（上）後（中・下）に同じ。
中夜時礼	略懺悔（中）	懺悔同前後	
後夜時礼	なし	懺悔同前後	懺悔は前（上・中）後（下）に同じ。
晨朝時礼	なし	懺悔同前後	懺悔は前（上・中）後（下）に同じ。
日中時礼	廣懺悔（下）	懺悔同前後	

日没時礼においては要懺悔が記されるが、「随意用皆得」と述べられるように、それは決定的なものではなく、その為、「取中（略）・下（廣）懺悔、亦得」と、略懺悔（中）、廣懺悔（下）を用いても良いことが註記されている。初夜時礼・後夜時礼・晨朝時礼においては懺悔が省略されている。その為、初夜時礼では「懺悔同前後」と、前に日没時礼にて説いた要懺悔（上）、後の中夜時礼にて説かれる略懺悔（中）、日中時礼にて説かれる廣懺悔（下）と同様であることが註記される。後夜時礼・晨朝時礼では「前」が日没時礼の要懺悔（上）、中夜時礼の略懺悔（中）を表し、「後」が日中時礼の廣懺悔（下）を表すが、省略に対する註記であることには変わりない。問題となるのは、中夜時礼と日中時礼である。両者においては、略懺悔（中）、廣懺悔（下）が説かれており、「懺悔同前後」という省略に対する註記は内容上相応しくない。日没時礼の註記を踏まえるならば、中夜時礼には「取上（要）・下（廣）懺悔、亦得」、日中時礼には「取上（要・略）懺悔、亦得」とあるべきである。実際に日中時礼では礼仏が終わり、「普為師僧父母及善知識法界衆生。斷除三障。同得往生阿彌陀佛國。歸命懺悔」（四七三下）と懺悔が記される直前には「上二品懺悔、發願等同前」（四七三下）と、上の二品の懺悔・發願を用いる場合についての註記がなされている。ただし傍点部「何者」、「何者為三」、「何者為五」、「何者為四」の問い掛けで終わることには違和感を覚える。5. は「如觀經説」（『觀經』に説きたまうが如くは）と、『觀經』を出典とするものであり、『觀經』に該当文を求めると、

仏告阿難及韋提希「凡生西方有九品人。上品上生者、若有衆生願生彼國者、發三種心、即便往生。何等為三。一者至誠心。二者深心。三者迴向發願心。

具三心者必生彼国（『大正蔵』一二、三四四下）

と、引文「先具三心必得往生」とは若干相違するものの（相違箇所を太字にて示す）、典拠と推定される文（直線部）が認められるが、そこには（順序は異なるが）問題となる「何等為三」も認められる。当該文は『往生礼讃偈』の文脈で読むと、

『観経』に説きたまうが如くは「先具三心必得往生」（以上引文）と。

何をか三と為す。（以下、割註）。

と読めるが、或いは『観経』の引用は後続の「何等為三」「一者至誠心」「二者深心」「三者迴向發願心」までであり、

『観経』に説きたまうが如くは「先具三心必得往生。何等為三。一者至誠心。二者深心。三者迴向發願心」（以上引文）と。

と読むべきか。もしそうであるならば、「何等為三」が通常表記されるのは問題とならない。寧ろ問題は、後続の「一者至誠心」「二者深心」「三者迴向發願心」が細字双行にて表記されることである。それらは『観経』の引用として通常表記されるべきであり、それに対する三心個別の具体相「所謂身業礼拝彼仏、口業讚歎称揚彼仏、意業專心觀察彼仏、凡起三業、必須真実。故名至誠心」。「即是真信心。信知自身是具足煩惱凡夫、善根薄少、流転三界、不出火宅。今信知弥陀本弘誓願、及称名号、下至十声一声等、定得往生、乃至一念無有疑心。故名深心」。「所作一切善根悉皆回願往生。故名迴向發願心」は善導による註釈であり、割註にて表記されるのも首肯できる。後続の五念門、四修もこれに倣うものか。この点については稿を改めて検討したい。

49  
ただし、A1. 教義に関する註記の内、⑦、⑧、⑨、⑪、⑫の内容は、それぞれ⑦此土の三宝、⑧十方三世の三宝、⑨十二光仏、⑪観音・勢至菩薩、⑫諸菩薩への礼拝理由を説示するものであり、これは当時流行していた礼懺の形式を換骨奪胎し、阿弥陀一仏への専念専礼を説く善導浄土教の礼讃偈を作成する上において不可避の問題であり、逆説的に阿弥陀仏への専念専礼を説く善導だからこそ註を附けざるを得ない箇所と言える。これら⑦、⑧、⑨、⑪、⑫は檀王本、金剛寺本、单行本（誓願寺本・専修寺本・京大本）の何れも細字双行表記をとっている（前掲【A1. 教義に関する註記 対照表】）ことから、少なくともこれらの箇所は善導撰述当初からの割註であった蓋然性が高いと推測する。

50  
本朝における『往生礼讃偈』開版の嚆矢は、建暦三年（一二二三）の明信開版本であるが、正倉院文書（写経所文書）によれば、斉明七年（六六一）には入唐留学僧道昭により将来されていたことが伺える。藤原猶雪「善導大師本具両疏弘伝考」（『史学雑誌』三四卷一〇・一一号、のち同『日本仏教史研究』松本書店、一九七四）、高橋正隆「善導遺文の書誌研究」、中井真孝「経疏目録より見たる善導著述の流布状況」（共に藤堂恭俊編『善導大師研究』、山喜房仏書林、



一九八〇）。

51 宮井里佳 「善導浄土教の成立についての試論——『往生礼讃』をめぐる——」（荒牧典俊編『北朝隋唐中国仏教思想史』法蔵館、二〇〇〇）。

52 『本朝祖師伝記絵詞』（四卷伝）卷二。『知恩伝』上。『法然上人伝』（弘願本）卷四。『法然上人伝絵詞』（琳阿本）卷四。『拾遺古徳伝絵』卷五。『法然上人伝記』（九卷伝）卷二下。『法然上人行状絵図』（四十八卷伝）卷一〇。『法然上人伝』（十卷伝）卷四。

檀王法林寺蔵 中尊寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下 影印・翻刻

―附 金剛寺蔵 金剛寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下 影印―

凡例

- 一、本稿は檀王法林寺蔵 中尊寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下を底本とし、上段に影印、下段に翻刻を配したものである。
  - 一、漢字字体は原則として底本の字体に従った。
  - 一、行取り、文字の大小、双行割り書きは底本に従った。
  - 一、転倒・補入・見せ消ち等の符号によって訂正されるべき箇所は、訂正後の本文を示すこととした。
  - 一、難読の箇所については「■」を用い示した。
  - 一、読解の便の為、行番号を附し、私意にて句読点を施した。
  - 一、行番号の上に「日没」「初夜」「中夜」「後夜」「晨朝」「日中」、及び丸数字を附し、各時礼の始行と礼数を示した。
  - 一、内容上誤写と推測される箇所も、私にこれを改めていない。
  - 一、脱文があると推測される箇所（316―317行間）には「＊」を挿入示した。
  - 一、金剛寺蔵 金剛寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下を参照し、異読がみられた場合、当該文字の右肩に＊を附し、翻刻末に「校異」（底本の行番号「当該文字」／金剛寺蔵本の行番号「当該文字」として示した。
- ただし、文字の大小、同一の漢字の異字体、通用されていると考えられるもの（無・无など）、並びに金剛寺本の破損箇所は対象外とした。
- 一、金剛寺蔵 金剛寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下の影印を末尾に収録した。



(表紙)



(見返し)

集諸經禮懺儀卷下

大唐西崇福寺沙門智昇撰

往生禮讚偈一卷

比丘善導集記

勸一切衆生願生西方極樂世界阿彌陀佛

國六時禮讚偈謹依大乘經及龍樹天親此五

沙門等所造往生禮讚集在一處分作六時唯

欣相續係心助成往益凡願曉悟未聞速治還代耳

可也 第一依釋迦及十方諸佛讚歎歸依十二光名觀佛禮念

大唐西崇福寺沙門智昇撰

比丘善導集記

勸一切衆生顛生西方極樂世界阿耨陀佛

國六時禮讚偈謹依大乘經及龍樹天親此土

沙門等所造往生禮讚集在一處分作六特喻

啟相續係心助成往益不顛曉悟未聞遠治遐代耳

何者唐一傳判選及十方諸佛讚莫方卷十二片名龜保初  
定生拔國十九拜當日漫時礼第二謹依大乘經陳集要文

讚偈十六拜當中夜時禮第四依天親菩薩願往生禮讚偈其

朝時乳第六僧喜導頭住生礼讚他依十六觀集拜當病利

問曰今欲勸人往生者未知若為安心起行作業

得往生彼國也。答曰。若欲往生彼國土者。如願

經說先具三心必得往生何者為三  
一者至誠心二者深心三者發願心

實故名至誠心二者深心即是真實信心信知自身是真是煩

稱名苦下至十聲一聲等定得往生乃至一念元有觀心故名淨

願心具此三心者得生也若少一心即不得生觀如經云夜應

又如天親淨土論云若有願生彼國者當修五念

肥五所若具安得往生何者燕五  
謂心專至恭敬合

贊州下

大唐西崇福寺沙門智昇撰

比丘善導集記

勸一切衆生願生西方極樂世界阿彌陀佛

國六時禮讚偈。謹依大乘經及龍樹、天親、此上

沙門等所造往生禮讚、集在一處、分作六時。唯

欲相續係心、助成往益。亦願曉悟未聞、遠治遐代耳。

何者。第一依禪迦及十方諸佛讚歎彌陀十二光名。勸稱札念。定生彼國。十九拜。當日沒時札。第二謹依大乘經。採集要文。

以為禮讚偈。廿三拜。當初夜時。禮。第二依龍樹菩薩願往生。禮讚偈。十六拜。當中夜時。禮。第四依天親菩薩願往生。禮讚偈。廿

拜當後夜時禮第五依彥琮法師願往生禮讚偈廿二拜  
朝時禮第六僧善導願往生禮讚偈依十六觀作廿拜  
當平時禮

問曰。今欲勸人往生者、未知若為安心、起行、作業、定

得往生彼國土也。答曰。必欲往生彼國土者、如觀

經說。先具三心必得往生。何者為三。一者至誠。所謂身業禮拜。彼佛。

實、故名至誠心。二者深心，即是真實信心。信知自身是具足

稱名号。下至十聲一聲等。定得往生。乃至一念无有疑心。故名。

願心。具此三心，必得生也。若少一心，即不得生。觀如經具說。

又如天親淨土論云。若有願生彼國者。勸修五念。

門、五門若具，定得往生。  
何者為五謂一心專至，恭敬合



音

月立  
 尊者善供養於彼何等施佛及耶所專授彼佛果今為期不離餘口  
 故名此拜門二者口業讚歎門所謂專意讚歎彼佛身相光明  
 莊嚴身相光明及彼國中一切寶莊嚴光明等故名讚歎門云云  
 意業應念觀察門所謂專念觀彼佛及一切莊嚴身相光明  
 上至嚴事如觀經所說臨時恒應念恒應觀此等事等故名觀  
 察門若等作觀門所謂專心若善念老一門時一切應三業四條  
 所作功德不間於中後持淨心實心中一發願生彼國及若  
 願門五者總而門所謂專心若自作善報及一切三業五者  
 二願凡等所喜報深出隨喜諸如佛喜隨所依隨喜我  
 共之連同歡喜故名隨喜門及彼國已得六神通四入生九變  
 化眾生依宿後樂心無厭足乃至到彼佛名身總而門多少皆  
 具足得法生一門典上三心合隨起業行不問多少皆  
 名真實業也應知

又勸行四推法用策三心五念之行速得

終

往生何者為四

時於三者。佛所說尊稱彼名者。命令思想專礼奉謝故也。此四字是心相續不斷。

我觀心心相續不斷依義解脫故名无懼能及有要理必不間斷化隨懽不令隔會隨時歸日常使清淨之名無間雜果命為期指不中心即是長持惟又善言已他生死不生善法速求勝果即從自利教化眾生益未除即止則然今特來生苦海難轉夫應急道主死者古語雖流行一切吾探喜地趣蓮生深悅佛國到彼岸已更元如一上四進自然往還目前利他不具足想知又如文殊般若云欲明一行三昧當勸諸眾空寂阿陀那佛一心一佛不親細報等極名字即代念中得見彼阿陀那佛又一二乃寺問曰何故不令作觀直遣尋詳名字有何竟已答曰由衆生淺薄現細心思識識神非龍離沈宛是以大起悲憫且動專攝名字云中梅名易飲樹即莊周所謂尊身佛如彼境即以此虛聲邪云相契五種難別也答曰佛性靈覺不能假借見多矣何大道理也又如觀經去行觀生觀礼念等皆項面向西作者最勝如樹先順樹左繞曲故右有事礙不及而西方者但作向西禮三拜得聞曰一口誦佛三字同證慈悲智果圓具相應之應凡應受

掌、香華供養。禮彼阿彌陀佛。名名禮拜門。二口口果讚歌門。所謂專志讚歌彼佛身相光明、一切聖衆身相光明、及彼國中一切莊嚴光明等。故名讚歌門。三者意業憶念觀衆門。所謂專意念觀彼佛、及一切聖衆身相光明、國土莊嚴等。如觀經說、唯除靜時、恒憶念恒想觀此一事等。故名觀衆門。四者作衆門。所謂專心、若晝若夜、一切時、一切處、三業四儀所作功德、不間初中後、皆須專心發願往生彼國。故名作衆門。五者趨向門。所謂專心、若自作善根、皆悉願衆生。此一如聖凡等所作善根、深生隨喜。如諸佛菩薩所作隨喜。我亦如是隨喜。以此隨喜善根、及已所作善根、皆悉願衆生。共之。趣向彼國。故名趨向門。又到彼國已、得六神通、遍入生死、救衆生、徹窮後際、心無厭足、乃至成佛。亦名趨向門。五門既具、定得往生。一門頭上三心合、隨起業行、不門多少。皆名真實業也。應知。

又勸行四修法、用策三心五念之行、速得

往生。何者為四。

一者恭敬修。所謂恭敬禮拜彼佛。及彼一切聖衆等。故名恭敬修。畢命為期。誓不中止。即是長

時修二者。餘修。所謂專稱彼佛。專命專思。專行專止。即是長時修。三者。無間修。所謂相續恭敬礼拜。稱名讚歎。憶念觀察。廻向發願。心心相續。不以餘業來間。故名無間修。亦名無貪。須臾相問。雖犯心相。不令隔念。隨時隨日。常使清淨。亦名無間修。畢命爲期。誓不中止。即是長時修。又善滿已過生死。所生善法。迴求佛果。即是自利。教化衆生。盡未來際。即是利他。然今時衆生。悉爲煩惱繫縛。未過惡道生死等苦。隨緣起行。一切障根具速斷。願往生彌陀佛國。到彼國已。更无所苦。如上四修。自然任運。自利利他。係心一佛。不觀相貌。專稱名字。欲明一行三昧。得見彼阿彌陀佛。捨諸亂意。保心一佛。不觀相貌。專稱名字。即於念中。唯見彼阿彌陀佛。捨諸亂意。佛等。問曰。何故不合作觀。直遣專稱名字者。有何意也。答曰。乃由衆生障重。境細心難。識緣神飛。觀難成就。是以以大聖悲憫。直勸專稱名字。正由稱名易故。多種即生。問曰。既遣專稱一佛。何故縱使念觀。此豈非邪正相交。一多雜現也。答曰。佛佛齊證。形不同。二相。縱使念見多。垂何大道理也。又如觀經云。行觀坐觀心等。皆背面向西方者最勝。如樹先傾。倒必隨曲。故必有事。不及向西方者。但作

日没		①	②														
54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37
<p>者最勝如樹先傾側必隨曲故若有事礙不及西方者但作 向西方禮得聞日一切諸佛三身同證悲智果圓具足應元應 社會深解一佛之應得生何故偏歎西方勸專禮念等有何義也答 日諸佛四證平等是一若以觀行未收非元月每於此世專奉 深重禮願以光明名号攝化十方但使信心求念上盡一祇下至十 般一觀等以佛願力易得往生是故釋迦及以諸佛勸向西 方為別與余亦非是極念餘佛不能除障罪也應知若諸 如上念舍相續畢命為期者十即十生百即百生何以故 無外難得正念故與佛本願得相應故不違教故隨順 佛語故若欲持專修難業者百時希得一二千時希得五三 何以故乃由難緣動失正念故與佛本願不相應故與教相 違故不順佛語故係念不相續故憶想間斷故迴顧不殷重裏 實故貪願諸見煩惱未間斷故若有懶惰悔心故 悔有三品一要二略三廣如下具說隨意皆得又不相續念 報被佛恩故心生輕慢雖作善行常與名利想應故人我自置 不親近同行善知識故樂近難緣自障障他往生正行故何以故 余比自見聞諸方道俗解行不同專修有異但使專意作者十 即十生修雖不至心者千中无十此二行得失如前已辨仰願一 切往生人等善自思量已能令身願生彼國者行住坐臥必 須勵心已盡夜莫懈畢命為期止在一形似如少苦前念命終 後念即生彼國長時永劫常受無為法樂乃至成佛不遲元元 豈非快哉應知</p>																	
<p>第一佛勸禮讚阿彌陀佛十二光名求願往生一 十九拜當日沒時礼取中下懺悔亦得</p>																	
<p>南無釋迦牟尼佛等一切三寶我今稽首礼廻顧 往生无量壽國<small>此之一佛現是今時道俗等師言三寶即是我 田無量若禮之一拜即是念報師恩以</small></p>																	
<p>成已行以斯一 行廻顧往生</p>																	
<p>南无十方三世盡虛空遍法界微塵刹土中一切三寶我 今稽首礼廻顧往生無量壽國<small>然十方虛空无边三寶无 盡若禮一拜即是福田元</small></p>																	
<p>量功德元窮能至心礼之一拜一佛上一法二菩薩聖僧上二</p>																	

54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37
<p>向西思亦得聞日一切諸佛三身同證悲智果圓具足應元應 禮念觀稱一佛亦應得生何故偏歎西方勸專禮念等有何義也答 日諸佛所證平等是一若以觀行未收非元因緣然亦隨世尊本發 深重誓願願以光明名号攝化十方但使信心求念上盡一形下至十 聲一聲等以佛願力易得往生是故釋迦及以諸佛勸向西方 為別與余亦非是極念餘佛不能除障罪也應知若能 如上念舍相續畢命為期者十即十生百即百生何以故 無外難得正念故與佛本願得相應故不違教故隨順 佛語故若欲持專修難業者百時希得一二千時希得五三 何以故乃由難緣動失正念故與佛本願不相應故與教相 違故不順佛語故係念不相續故憶想間斷故迴顧不殷重裏 實故貪願諸見煩惱未間斷故若有懶惰悔心故 悔有三品一要二略三廣如下具說隨意皆得又不相續念 報被佛恩故心生輕慢雖作善行常與名利想應故人我自置 不親近同行善知識故樂近難緣自障障他往生正行故何以故 余比自見聞諸方道俗解行不同專修有異但使專意作者十 即十生修雖不至心者千中无十此二行得失如前已辨仰願一 切往生人等善自思量已能令身願生彼國者行住坐臥必 須勵心已盡夜莫懈畢命為期止在一形似如少苦前念命終 後念即生彼國長時永劫常受無為法樂乃至成佛不遲元元 豈非快哉應知</p>																	
<p>第一佛勸禮讚阿彌陀佛十二光名求願往生一 十九拜當日沒時礼取中下懺悔亦得</p>																	
<p>南無釋迦牟尼佛等一切三寶我今稽首礼廻顧 往生无量壽國<small>此之一佛現是今時道俗等師言三寶即是我 田無量若禮之一拜即是念報師恩以</small></p>																	
<p>成已行以斯一 行廻顧往生</p>																	
<p>南无十方三世盡虛空遍法界微塵刹土中一切三寶我 今稽首礼廻顧往生無量壽國<small>然十方虛空无边三寶无 盡若禮一拜即是福田元</small></p>																	
<p>量功德元窮能至心礼之一拜一佛上一法二菩薩聖僧上二</p>																	



季龍

量功德無窮。能至心札之一拜。一一佛上。一一法。一一菩薩聖僧上。一一舍利上。皆得身口意業解脫分善根。來資益行善。以成己業。以斯一行。迴願往生。

南无西方極樂世界阿彌陀佛願共諸衆生

咸歸命故我頂礼生彼國問曰何故号為阿弥陀答曰彌陀經及觀經云彼佛光明無量照十方

國、無所障礙。唯覺念佛衆生、攝取不捨、故名阿彌陀。彼佛壽命、及其人民、無量無邊阿僧祇劫、故名阿彌阿。又釋迦佛、及十

方佛、讚歎彌陀光明、有十二種名。普勸衆生、名禮拜、相續不斷者、現世得無量功德、命終之後、定得往生、如無量壽經說云、其有衆

生遇斯光者  
三垢消滅  
身意柔軟  
歡喜踊躍  
善心生焉  
若在三  
塗勤苦之處  
見此光明  
無復苦惱  
壽終之後  
皆蒙解脫  
无量

若有衆生。聞其光月。或神力應。二友同說。至心不所者。道其  
禮佛。光陽顯赫。照曜十方。詳候国土。莫不聞焉。不佞我今  
其光明。一切諸佛。雲間緣覺。諸菩薩衆。咸共歡譽。亦復如是。

德。佛言：我說无量壽佛，光明威神，巍巍殊妙，晝夜一劫，尚不能

者。如觀經云。一一光明。遍照十方世界。念佛衆生。攝取不盡。白諸行者。當知彌陀身相光明。釋迦如來一劫說不能盡。

相續稱觀禮念  
願往生也。應知  
挖。今即置釋。有如此不是。說埋土。願續  
拔。謬行。者。何不

南无西方極樂世界無量佛

南無西方極樂世界無邊光佛  
願共諸衆生成歸命  
故我頂禮生彼國

南无西方極樂世界無礙光佛  
願共諸衆生咸歸命  
故我頂礼生彼国

南無西方極樂世界無對光佛  
願我頂禮生彼國

南无西方極樂世界光炎王佛

南無西方極樂世界清淨光佛  
願共諸衆生咸歸命  
故我頂礼生彼國

90 89 88 87 86 <sup>19</sup>85 84 <sup>18</sup>83 <sup>17</sup>82 81 80 <sup>16</sup>79 <sup>15</sup>78 <sup>14</sup>77 <sup>13</sup>76 <sup>12</sup>75 <sup>11</sup>74 <sup>10</sup>73

南无西方極樂世界歡喜光佛	願共諸衆生咸歸命 故我頂礼生彼國
南无西方極樂世界智慧光佛	願共諸衆生咸歸命 故我頂礼生彼國
南无西方極樂世界不坏光佛	願共諸衆生咸歸命 故我頂礼生彼國
南无西方極樂世界無量壽佛	願共諸衆生咸歸命 故我頂礼生彼國
南无西方極樂世界超日月光佛	願共諸衆生咸歸命 故我頂礼生彼國
南无西方極樂世界阿彌陀佛哀愍覆護我	願共諸衆生咸歸命 故我頂礼生彼國
念法種增長此世及後生願佛常攝受	願共諸衆生咸歸命 故我頂礼生彼國
歸命故我頂礼生彼國	
南无西方極樂世界觀世音菩薩	願共諸衆生咸歸命 故我頂礼生彼國
南无西方極樂世界大勢至菩薩	願共諸衆生咸歸命 故我頂礼生彼國
此二菩薩一切衆生臨命終時持菩薩聖像與行者阿彌陀佛 故大光明照行者身復与無數佛菩薩歡聞大眾等一時極 手如揮指項即得往生 為報恩故至心礼之一拜	南无西方極樂世界諸菩薩 清淨大海衆 願共諸衆生咸歸命 故我頂礼生彼國
佛乘速接行者為報恩故至心礼之一拜	此等諸菩薩凡隨 普為師僧父母及善知識法界衆生新除三 障同得往生阿彌陀佛國歸命懺悔至心懺 悔南無歸幟十方佛願賦一切諸罪根令將 及近可修善因下自也安果回巨願一刀端

90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73

南无西方極樂世界歡喜光佛  
南无西方極樂世界智慧光佛  
南无西方極樂世界不斷光佛  
南无西方極樂世界難思光佛  
南无西方極樂世界無稱光佛  
南无西方極樂世界超日月光佛  
南无西方極樂世界阿彌陀佛哀愍矜護我  
令法種增長此世及後生願佛常攝受  
願我頂禮生彼國  
南无西方極樂世界觀世音菩薩  
願我頂禮生彼國  
南无西方極樂世界大勢至菩薩  
願我頂禮生彼國  
此二菩薩、一切衆生、臨命終時、持菩薩名、投與行者、阿彌陀佛、放大光明、照行身者、復與無數、佛菩薩、聖聞大眾等、一時接  
手、如彈指頃、即得往生  
為報恩故、至心禮之一拜  
南无西方極樂世界諸菩薩  
清淨大海衆  
願我頂禮生彼國  
此等諸菩薩、亦隨  
佛來迎接行者、為報恩故、至心禮之一拜  
普為師僧父母、及善知識、法界衆生、斷除三  
障、同得往生阿彌陀佛國、歸命懺悔、至心懺  
悔、南無歸懺十方佛願滅一切諸罪根令將



108 107 106 105 104 103 102 101 100 99 98 97 96 95 94 93 92 91

久近所修善迴作自他安樂因恒願一切臨  
終時勝緣勝境悉現前願都弥陀大悲主觀  
音勢至十方尊仰唯神光蒙授手乘佛願  
力生彼國懺悔迴向發願已至心歸命阿  
弥陀佛次作梵 竟義偈 發願出 實性論  
禮懺諸功德願臨命終時見无量壽佛无邊功德身  
我及餘信者既見彼佛已願得離垢眼往生安樂國  
成無上菩提禮懺已一切  
恭敬歸佛得菩提道心恒不退願共諸衆生迴願 往生无量壽國  
歸法薩婆若得大惣持門願共諸衆生迴願 往生无量壽國  
歸僧息諍論同入和合海願共諸衆生迴願 往生无量壽國  
願諸衆生三業清淨奉持佛教和南一切賢聖願共諸衆生迴願 往生无量壽國  
諸衆等聽說日沒無常偈人間忿忿營衆務  
不覺年命日夜去如燈風中滅難期忙忙六  
道無定趣未得解脫出苦海云何安然不驚  
懼各聞強健有力時自策勵求常住說此偈已更 當心發願  
願弟子等臨命終時心不顛倒心不錯亂心  
不失念身心無諸苦痛身心安隱快樂如入  
禪定聖眾現前乘佛本願上品生主可也

108 107 106 105 104 103 102 101 100 99 98 97 96 95 94 93 92 91

久近所修善迴作自他安樂因恒願一切臨  
終時勝緣勝境悉現前願都弥陀大悲主觀  
音勢至十方尊仰唯神光蒙授手乘佛願  
力生彼國懺悔迴向發願已至心歸命阿  
弥陀佛次作梵 竟義偈 發願出 實性論  
禮懺諸功德願臨命終時見无量壽佛无邊功德身  
我及餘信者既見彼佛已願得離垢眼往生安樂國  
成無上菩提禮懺已一切  
恭敬歸佛得菩提道心恒不退願共諸衆生迴願 往生无量壽國  
歸法薩婆若得大惣持門願共諸衆生迴願 往生无量壽國  
歸僧息諍論同入和合海願共諸衆生迴願 往生无量壽國  
願諸衆生三業清淨奉持佛教和南一切賢聖願共諸衆生迴願 往生无量壽國  
諸衆等聽說日沒無常偈人間忿忿營衆務  
不覺年命日夜去如燈風中滅難期忙忙六  
道無定趣未得解脫出苦海云何安然不驚  
懼各聞強健有力時自策勵求常住說此偈已更 當心發願  
願弟子等、臨命終時、心不顛倒、心不錯亂、心  
不失念、身心無諸苦痛、身心安隱快樂、如入

初夜

126 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115 114 113 112 111 110 109

禪定、聖衆現前、乘佛本願、上品往生阿彌陀  
佛國。到彼國已、六神通、廻入十方界、救攝苦衆  
生。虛空法界盡、我願亦如是。發願已。至心歸命  
阿彌陀佛。 初夜偈云。  
煩惱深無底、生死海無邊、渡苦船未立、云何  
樂睡眠、勇猛勤精進、攝心常在禪、勤修六  
度行、菩提道自然。 中夜偈云。  
汝起勿抱臭身、臥種種不淨、假名人如得重  
病、箭入體、衆苦痛集、安可眠。 後夜偈云。  
時光遷流、轉忽至五更、初無常念、念至恒  
與死王居、勸諸行道者、勤修至無餘。 平旦偈云。  
欲求寂滅樂、當學沙門法、衣食支身、命精進  
隨衆等諸衆等、今日晨朝、各說六念。 日中偈云。  
人生不精進、喻若樹無根、採花置日裏、能得  
幾時鮮、人命亦如無常、須臾間、勸諸行道衆  
勤修乃至真。 第二比丘善導、謹依大乘經、  
採集要文、以為讚偈、廿三拜。當初夜礼懺悔  
同前後。

126 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115 114 113 112 111 110 109

禪定、聖衆現前、乘佛本願、上品往生阿彌陀  
佛國。到彼國已、六神通、廻入十方界、救攝苦衆  
生。虛空法界盡、我願亦如是。發願已。至心歸命  
阿彌陀佛。 初夜偈云。  
煩惱深無底、生死海無邊、渡苦船未立、云何  
樂睡眠、勇猛勤精進、攝心常在禪、勤修六  
度行、菩提道自然。 中夜偈云。  
汝起勿抱臭身、臥種種不淨、假名人如得重  
病、箭入體、衆苦痛集、安可眠。 後夜偈云。  
時光遷流、轉忽至五更、初無常念、念至恒  
與死王居、勸諸行道者、勤修至無餘。 平旦偈云。  
欲求寂滅樂、當學沙門法、衣食支身、命精進  
隨衆等諸衆等、今日晨朝、各說六念。 日中偈云。  
人生不精進、喻若樹無根、採花置日裏、能得  
幾時鮮、人命亦如無常、須臾間、勸諸行道衆  
勤修乃至真。 第二比丘善導、謹依大乘經、  
採集要文、以為讚偈。廿三拜。當初夜礼懺悔  
同前後。



144	143	⑥ 142	141	140	⑤ 139	138	137	④ 136	135	134	③ 133	132	131	② 130	129	128	① 127	
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛	願共諸衆生往生安樂國	咸然奏天樂 暢發和雅音 歌歎最勝尊 供養阿彌佛	南無至心歸命禮西方阿彌陀佛	願共諸衆生往生安樂國	一切諸菩薩 各齋天妙華 寶香无價衣 供養阿彌佛	南無至心歸命禮西方阿彌陀佛	願共諸衆生往生安樂國	十方佛剎中 菩薩比丘衆 窮劫不可計 皆當得生彼	南無至心歸命禮西方阿彌陀佛	願共諸衆生往生安樂國	小行諸菩薩 及修少福者 其數不可計 皆當得生彼	南無至心歸命禮西方阿彌陀佛	願共諸衆生往生安樂國	於此世界中 六十有七億 不退諸菩薩 皆當得生彼	南無至心歸命禮西方阿彌陀佛	願共諸衆生往生安樂國	彌陀智願海 深廣無涯底 聞名欲往生 皆悉到彼國	南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

144	143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127
願共諸衆生往生安樂國	咸然奏天樂 暢發和雅音 歌歎最勝尊 供養阿彌佛	南無至心歸命禮西方阿彌陀佛	願共諸衆生往生安樂國	一切諸菩薩 各齋天妙華 寶香无價衣 供養阿彌佛	南無至心歸命禮西方阿彌陀佛	願共諸衆生往生安樂國	十方佛剎中 菩薩比丘衆 窮劫不可計 皆當得生彼	南無至心歸命禮西方阿彌陀佛	願共諸衆生往生安樂國	小行諸菩薩 及修少福者 其數不可計 皆當得生彼	南無至心歸命禮西方阿彌陀佛	願共諸衆生往生安樂國	於此世界中 六十有七億 不退諸菩薩 皆當得生彼	南無至心歸命禮西方阿彌陀佛	願共諸衆生往生安樂國	彌陀智願海 深廣無涯底 聞名欲往生 皆悉到彼國	南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

162	161	⑫	159	158	⑪	157	156	155	⑩	154	153	152	⑨	151	150	149	⑧	148	147	146	⑦	145	
南無至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	至彼嚴淨土 便速得神通 必於无量尊 受記成等覺	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	梵聲如電震 八音暢妙響 十方來正士 吾悉知彼願	南無至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	迴光圍繞身 三匝從頂入 一切天人衆 踊躍皆歡喜	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	應時無量尊 動容發欣咲 口出無數光 遍照十方國	南無至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	見彼嚴淨土 微妙難思議 因發無上心 願我國亦然	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	慧日照世間 消除生死雲 恭敬繞三匝 稽首阿弥陀佛	南無至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	南無至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	南無至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國

162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145
願共諸衆生往生安樂國	至彼嚴淨土 便速得神通 必於无量尊 受記成等覺	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	梵聲如電震 八音暢妙響 十方來正士 吾悉知彼願	南無至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	迴光圍繞身 三匝從頂入 一切天人衆 踊躍皆歡喜	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	應時無量尊 動容發欣咲 口出無數光 遍照十方國	南無至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	見彼嚴淨土 微妙難思議 因發無上心 願我國亦然	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	慧日照世間 消除生死雲 恭敬繞三匝 稽首弥陀佛	南無至心歸命礼西方阿弥陀佛



180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163

願共諸衆生往生安樂國  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛  
奉事億如來飛行遍諸刹恭敬歡喜去還到安養國  
願共諸衆生往生安樂國  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛  
若人無善本不得聞佛名憍慢弊懈怠難以信此法  
願共諸衆生往生安樂國  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛  
恒覺諸佛則能信此事謙敬聞奉行踊躍大歡喜  
願共諸衆生往生安樂國  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛  
其有得聞彼施陀佛名者歡喜至心皆當得生彼  
願共諸衆生往生安樂國  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛  
設滿大千大直過聞佛名聞名歡喜讚皆當得生彼  
願共諸衆生往生安樂國  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛  
萬年三寶滅此經住百年余時聞一念皆當得生彼  
願共諸衆生往生安樂國  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛  
奉事億如來飛行遍諸刹恭敬歡喜去還到安養國  
願共諸衆生往生安樂國  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛  
若人無善本不得聞佛名憍慢弊懈怠難以信此法  
願共諸衆生往生安樂國  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛  
宿世見諸佛則能信此事謙敬聞奉行踊躍大歡喜  
願共諸衆生往生安樂國  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛  
其有得聞彼彌陀佛名者歡喜至一心皆當得生彼  
願共諸衆生往生安樂國  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛  
設滿大千火直過聞佛名聞名歡喜讚皆當得生彼  
願共諸衆生往生安樂國  
南無至心歸命禮西方阿彌陀佛  
萬年三寶滅此經住百年余時聞一念皆當得生彼  
願共諸衆生往生安樂國

中夜	④	③	②	①	②	①	②	①	②	①							
198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181
<p>南無至心歸命礼西方阿弥陀佛 佛世甚難值 人有信慧難 遇聞希有法 此復最為難 願共諸衆生往生安樂國 南无至心歸命礼西方阿弥陀佛 自信教人信 難中轉更難 大悲弘普化 真成報佛恩 願共諸衆生往生安樂國 南无至心歸命礼西方阿弥陀佛 哀愍覆護我 令法種增長 此世及後生 願佛常攝受 願共諸衆生往生安樂國 南无至心歸命礼西方極樂世界觀世音菩薩 願共諸衆生往生安樂國 南无至心歸命礼西方極樂世界大勢至菩薩 願共諸衆生往生安樂國 南无至心歸命礼西方極樂世界諸菩薩清淨大 海衆願共諸衆生往生安樂國 普為師僧父母及善知識法界衆生斷三障同 得往生阿弥陀佛國歸命懺悔 第三依龍菩薩願生礼讚偈一十六拜當申</p>																	

198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181
第三依龍菩薩願生礼讚偈。一十六拜。當中	得往生阿弥陀佛國、歸命懺悔。	普為師僧父母、及善知識、法界衆生、斷三障、同	海衆願共諸衆生往生安樂國	南无至心歸命礼西方極樂世界諸菩薩清淨大	願共諸衆生往生安樂國	南无至心歸命礼西方極樂世界大勢至菩薩	願共諸衆生往生安樂國	南无至心歸命礼西方極樂世界觀世音菩薩	願共諸衆生往生安樂國	哀愍覆護我 令法種增長 此世及後生 願佛常攝受	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	自信教人信 難中轉更難 大悲弘普化 真成報佛恩	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	佛世甚難值 人有信慧難 遇聞希有法 此復最為難	南無至心歸命礼西方阿弥陀佛



⑤	216	215	214	213	④	212	211	210	209	③	208	207	206	205	②	204	203	202	201	①	200	199
無量壽如量清淨	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	能伏外道魔憍慢	觀音頂戴冠中住	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	聲若天鼓俱翅羅	面善圓淨如滿月	威光猶如百千日	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	兩目淨若青蓮華	金色身淨如山王	奢摩他行如象步	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	在彼微妙安樂國	瞽盲天人所恭敬	阿弥陀仙兩足尊	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	夜時礼懺悔同前後	
衆德統衆如量空			故我頂礼弥陀佛	種種妙相寶莊嚴			故我頂礼弥陀佛					故我頂礼弥陀佛					無量佛子衆圍繞					

216	215	214	213	212	211	210	209	208	207	206	205	204	203	202	201	200	199
南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生往生安樂國	能伏外道魔憍慢	觀音頂戴冠中住	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生往生安樂國	聲若天鼓俱翅羅	面善圓淨如滿月	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生往生安樂國	兩目淨若青蓮華	金色身淨如山王	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生往生安樂國	在彼微妙安樂國	稽首天人所恭敬	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	夜時礼。懺悔同前後。
		故我頂礼弥陁佛	種種妙相寶莊嚴			故我頂礼弥陁佛	威光猶如百千日			故我頂礼弥陁佛	奢摩他行如象步			無量佛子衆圍繞	阿弥陁仙兩足尊		

234	233	⑨ 232	231	230	229	⑧ 228	227	226	225	⑦ 224	223	222	221	⑥ 220	219	218	217	
願共諸衆生往生安樂國	為衆說法無名字	諸有無常無我等	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	瞻仰尊顏常恭敬	十方所來諸佛子	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	於彼座上如山王	金底寶澗池生華	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	為諸衆生願力住	十方名聞菩薩衆	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	所作利益得自在	無比無垢廣清淨
	故我頂礼弥陀佛	亦如水月電影露			故我頂礼弥陀佛	顯現神通至安樂			故我頂礼弥陀佛	善根所成妙臺座			故我頂礼弥陀佛	無量諸魔常讚歎			故我頂礼弥陀佛	衆德皎潔如虛空

234	233	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222	221	220	219	218	217
為衆說法無名字	諸有無常無我等	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	瞻仰尊顏常恭敬	十方所來諸佛子	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	於彼座上如山王	金底寶澗池生華	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	為諸衆生願力住	十方名聞菩薩衆	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	所作利益得自在	無比無垢廣清淨
故我頂礼弥陀佛	亦如水月電影露			故我頂礼弥陀佛	顯現神通至安樂			故我頂礼弥陀佛	善根所成妙臺座			故我頂礼弥陀佛	無量諸魔常讚歎			故我頂礼弥陀佛	衆德皎潔如虛空



252 251 250 249 248 247 246 245 244 243 242 241 240 239 238 237 236 235

願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
彼尊佛刹無惡名 亦無女人惡道怖  
衆人至心敬彼尊 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
彼尊無量方便境 無有諸趣惡知識  
往生不退至菩提 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
我說彼尊功德事 衆善無邊如海水  
所作善根清淨者 迴施衆生生彼土  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
哀愍覆護我 令法種長 此世及後生 願佛常攝受  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方極樂世界觀世音菩薩  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方極樂世界勢至菩薩

252 251 250 249 248 247 246 245 244 243 242 241 240 239 238 237 236 235

願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
彼尊佛刹無惡名 亦無女人惡道怖  
衆人至心敬彼尊 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
彼尊無量方便境 無有諸趣惡知識  
往生不退至菩提 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
我說彼尊功德事 衆善無邊如海水  
所作善根清淨者 迴施衆生生彼土  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
哀愍覆護我 令法種長 此世及後生 願佛常攝受  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方極樂世界觀世音菩薩  
願共諸衆生往生安樂國

270	269	268	267	266	265	264	263	262	261	260	259	258	257	256	255	254	253
隨喜已至心歸命可弥陀佛	慈善根今日思惟始醒悟發大精進隨喜心	生恒以瞋恚毒害火焚燒智慧	至心隨喜歷劫已來懷嫉妬我慢放逸由癡	輪勸請已至心歸命阿弥陀佛	大苦海為拔群生離諸苦勸請常住轉法	三界眾生盲冥不覺知永沉生死	至心勸請諸佛大慈無上尊恒以空慧照	阿弥陀佛	生死苦頂礼懺悔願滅除懺悔已至心歸命	眾罪因緣故妄想顛倒生纏縛應受無量	生不孝父母謗三寶造作五逆不善業以是	至心懺悔自從無始受身來恒以十惡加眾	郭同得往生阿弥陀佛國歸命懺悔	普為師僧父母及善知識法界眾生斷除三	眾願共諸眾生往生安樂國	南无至心歸命礼西方極樂世界諸菩薩清淨大海	願共諸眾生往生安樂國

270	269	268	267	266	265	264	263	262	261	260	259	258	257	256	255	254	253
慈善根。今日思惟始醒悟。發大精進隨喜心。	生。恒以瞋恚毒害火。焚燒智慧	至心隨喜。歷劫已來懷嫉妬。我慢放逸由癡	輪。勸請已。至心歸命阿彌陀佛。	大苦海。為拔群生離諸苦。勸請常住轉法	三界。衆生盲冥不覺知。永沉生死	至心勸請。諸佛大慈無上尊。恒以空慧照	阿彌陀佛。	生死苦。頂禮懺悔願滅除。懺悔已。至心歸命	衆罪因緣故。妄想顛倒生纏縛。應受無量	生。不孝父母謗三寶。造作五逆不善業。以是	至心懺悔。自從無始受身來。恒以十惡加衆	障、同得往生阿彌陀佛國、歸命懺悔。	普為師僧父母、及善知識、法界衆生、斷除三	衆願共諸衆生往生安樂國	南无至心歸命禮西方極樂世界諸菩薩清淨大海	願共諸衆生往生安樂國	南无至心歸命禮西方極樂世界大勢至菩薩



288 287 286 285 284 283 282 281 280 279 278 277 276 275 274 273 272 271

隨喜已。至心歸命阿彌陀佛。  
至心迴向。流浪三界內。癡愛入胎獄。生已歸老。  
死。沉沒於苦海。我今修此智。迴生安樂土。迴  
向已。至心歸命阿彌陀佛。  
至心發願。願捨胎藏形。往生安樂國。速見彌  
陀佛。無邊功德身。奉觀諸如來。賢聖亦復  
然。獲六神通力。救攝苦衆生。虛空法界盡。  
我願亦如是。發願已。至心歸命阿彌陀佛。餘卷同  
上法  
第四依天親菩薩願往生禮讚偈。廿拜。當後  
夜時。禮懺悔同前後。  
南无至心歸命禮西方阿彌陀佛。  
世尊我一心。歸命盡十方。無礙光如來。願生安樂國。  
願共諸衆生。往生安樂。  
南无至心歸命禮西方阿彌陀佛。  
觀彼世界相。勝過三界道。究竟如虛空。廣大无邊際。  
願共諸衆生。往生安樂國。  
南无至心歸命禮西方阿彌陀佛。  
正道大慈悲。出世善根生。淨光明滿足。如鏡日月輪。  
願共諸衆生。往生安樂國。

288 287 286 285 284 283 282 281 280 279 278 277 276 275 274 273 272 271

隨喜已。至心歸命阿彌陀佛。  
至心迴向。流浪三界內。癡愛入胎獄。生已歸老  
死。沉沒於苦海。我今修此智。迴生安樂土。迴  
向已。至心歸命阿彌陀佛。  
至心發願。願捨胎藏形。往生安樂國。速見彌  
陀佛。無邊功德身。奉觀諸如來。賢聖亦復  
然。獲六神通力。救攝苦衆生。虛空法界盡。  
我願亦如是。發願已。至心歸命阿彌陀佛。餘卷同  
上法  
第四依天親菩薩願往生禮讚偈。廿拜。當後  
夜時。禮懺悔同前後。  
南无至心歸命禮西方阿彌陀佛。  
世尊我一心。歸命盡十方。無礙光如來。願生安樂國。  
願共諸衆生。往生安樂。  
南无至心歸命禮西方阿彌陀佛。  
觀彼世界相。勝過三界道。究竟如虛空。廣大无邊際。  
願共諸衆生。往生安樂國。  
南无至心歸命禮西方阿彌陀佛。  
正道大慈悲。出世善根生。淨光明滿足。如鏡日月輪。

⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	
306	305	304	303	302	301	300
299	298	297	296	295	294	293
292	291	290	289			
<p>正道大慈悲 出世善報生 淨光明清淨 如銀日月輪</p> <p>願共諸衆生 往生安樂國</p> <p>南无至心歸命礼西方阿弥陀佛</p> <p>備諸珍寶性 具足妙莊嚴 無垢光焰熾 明淨曜世間</p> <p>願共諸衆生 往生安樂國</p> <p>南无至心歸命礼西方阿弥陀佛</p> <p>寶華千万種 弥覆池流泉 微風動花葉 交錯光乱轉</p> <p>願共諸衆生 往生安樂國</p> <p>南无至心歸命礼西方阿弥陀佛</p> <p>宮殿諸樓閣 觀十方無礙 雜樹異光色 寶欄遍圍繞</p> <p>願共諸衆生 往生安樂國</p> <p>南无至心歸命礼西方阿弥陀佛</p> <p>無量寶交絡 羅網遍虛空 種種鈴發響 宣吐妙法音</p> <p>願共諸衆生 往生安樂國</p> <p>南无至心歸命礼西方阿弥陀佛</p> <p>梵音悟深遠 微妙聞十方 正覺阿弥陀 法王善住持</p> <p>願共諸衆生 往生安樂國</p> <p>南无至心歸命礼西方阿弥陀佛</p> <p>如來淨華衆 正覺花化生 受樂佛法味 禪三昧為食</p>						

306	305	304	303	302	301	300
299	298	297	296	295	294	293
292	291	290	289			
<p>願共諸衆生 往生安樂國</p> <p>南无至心歸命礼西方阿弥陀佛</p> <p>備諸珍寶性 具足妙莊嚴 無垢光焰熾 明淨曜世間</p> <p>願共諸衆生 往生安樂國</p> <p>南无至心歸命礼西方阿弥陀佛</p> <p>寶華千万種 弥覆池流泉 微風動花葉 交錯光乱轉</p> <p>願共諸衆生 往生安樂國</p> <p>南无至心歸命礼西方阿弥陀佛</p> <p>宮殿諸樓閣 觀十方無礙 雜樹異光色 寶欄遍圍繞</p> <p>願共諸衆生 往生安樂國</p> <p>南无至心歸命礼西方阿弥陀佛</p> <p>無量寶交絡 羅網遍虛空 種種鈴發響 宣吐妙法音</p> <p>願共諸衆生 往生安樂國</p> <p>南无至心歸命礼西方阿弥陀佛</p> <p>梵音悟深遠 微妙聞十方 正覺阿弥陀 法王善住持</p> <p>願共諸衆生 往生安樂國</p> <p>南无至心歸命礼西方阿弥陀佛</p> <p>如來淨華衆 正覺花化生 受樂佛法味 禪三昧為食</p>						



願共諸衆生往生安樂國  
南元至心歸命礼西方阿弥陀佛  
永離患惱受樂常無間大乘喜根界等元讚嘆名  
願共諸衆生往生安樂國  
南元至心歸命礼西方阿弥陀佛  
女人及根叢二乘種不生衆生所願樂一切能滿足  
願共諸衆生往生安樂國  
南元至心歸命礼西方阿弥陀佛  
無量寶王微妙清華臺相好光一尋色像起群生  
願共諸衆生往生安樂國  
南元至心歸命礼西方阿弥陀佛  
天人大衆恭敬瞻瞻仰雨天樂華衣妙香等供養  
願共諸衆生往生安樂國  
南元至心歸命礼西方阿弥陀佛  
安樂國清淨常轉無垢輪一念及一時利益諸群生  
願共諸衆生往生安樂國  
南元至心歸命礼西方阿弥陀佛  
讚佛諸功德元有分別心能令速滿足功德大寶海  
願共諸衆生往生安樂國

324	323	322	321	320	319	318	317	316	315	314	313	312	311	310	309	308	307
讚佛諸功德	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生往生安樂國	安樂國清淨	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生往生安樂國	天人丈夫衆	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生往生安樂國	無量大寶王	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生往生安樂國	女人及根缺	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生往生安樂國	永離身心惱	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生往生安樂國
无有分別心	能令速滿足	功德大寶海	常轉無垢輪	一念及一時	利益諸群生	恭敬繞瞻仰	雨天樂華衣	妙香等供養	相好光一尋	色像超群生	衆生所願樂	一切能滿足	大乘善根界	等无譏嫌名	受樂常無間	大無量阿僧祇劫	願共諸衆生往生安樂國

[illegible]

325	願共諸衆生往生安樂國	326	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	327	哀愍覆護我 令法種增長 此世及後生 願佛常攝受	328	願共諸衆生往生安樂國	329	南无至心歸命礼西方極樂世界觀世音菩薩	330	願共諸衆生往生安樂國	331	南无至心歸命礼西方極樂世界大勢至菩薩	332	願共諸衆生往生安樂國	333	南无至心歸命礼西方極樂世界諸菩薩清淨大海衆	334	願共諸衆生往生安樂國	335	普為師僧父母、及善知識、法界衆生、斷除三部、	336	同得往生阿弥陁佛國、歸命懺悔。	337	第五依彦踪法師願往生礼讚偈。廿二拜。當旦起	338	時礼。懺悔同前後	339	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	340	法藏因弥遠 極樂果還深 異跡參作地 衆寶間為林	341	華開希有色 波揚實相音 何當蒙授手 一遂往生心	342	願共諸衆生往生安樂國
-----	------------	-----	---------------	-----	-------------------------	-----	------------	-----	--------------------	-----	------------	-----	--------------------	-----	------------	-----	-----------------------	-----	------------	-----	------------------------	-----	-----------------	-----	-----------------------	-----	----------	-----	---------------	-----	-------------------------	-----	-------------------------	-----	------------



⑥ 360 359 358 357 356 355 354 353 352 351 350 349 348 ③ 347 346 345 344 ② 343

南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
濁世難還入淨土願途深金繩直界道珠網慢垂林  
見色皆真色聞音悉法音莫謂西方遠唯須十念心  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
已成窮理聖真有遍空威在西時現小俱是暫隨機  
葉珠相映飾沙水共澄輝欲得无生早彼土必須依  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命西方阿弥陀佛  
五山豪獨朗寶手印恒分地水俱為鏡香華同作雲  
業深成易往因淺實難聞必望除疑惑超然獨不群  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方觀世音菩薩  
千輪明足下五道現光中悲引恒无絕人歸亦未窮  
口宣猶在定心靜更飛通聞名皆願往日發幾花叢  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方大勢至菩薩  
惠力樹无上身光備有緣動搖諸寶國侍坐一金蓮  
鳥群非實鳥天類豈真天須知衆妙樂會是妙音金

360 359 358 357 356 355 354 353 352 351 350 349 348 347 346 345 344 343

南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
濁世難還入淨土願途深金繩直界道珠網慢垂林  
見色皆真色聞音悉法音莫謂西方遠唯須十念心  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
已成窮理聖真有遍空威在西時現小俱是暫隨機  
葉珠相映飾沙水共澄輝欲得无生早彼土必須依  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命西方阿弥陀佛  
五山豪獨朗寶手印恒分地水俱為鏡香華同作雲  
業深成易往因淺實難聞必望除疑惑超然獨不群  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方觀世音菩薩  
千輪明足下五道現光中悲引恒无絕人歸亦未窮  
口宣猶在定心靜更飛通聞名皆願往日發幾花叢  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方大勢至菩薩  
惠力樹无上身光備有緣動搖諸寶國侍坐一金蓮

378	377	376	375	374	373	372	371	370	369	368	367	366	365	364	363	362	361
願共諸衆生往生安樂國	鳥本珠中出 人唯花上生 敢請西方聖 早晚定相迎	十劫道先成 嚴界引群萌 金沙徹水照 玉葉滿枝明	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	香飯随心至 寶殿逐身飛 有緣皆得入 只是去人希	欲選當生處 西方最可歸 間樹開重閣 滿道布鮮衣	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	開華重布水 覆細細分空 願生何意切 正為樂无窮	迴向漸為功 西方路稍通 寶幢承厚地 天香入遠風	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	華隨本心變 宮移身自安 憐問出世境 須共入禪看	心帶真慈滿 光含法界圓 无緣能攝物 有想定非難	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	鳥群非實鳥 天類豈真天 須知求妙樂 會是成香全

378	377	376	375	374	373	372	371	370	369	368	367	366	365	364	363	362	361
願共諸衆生往生安樂國	鳥本珠中出 人唯花上生 敢請西方聖 早晚定相迎	十劫道先成 嚴界引群萌 金沙徹水照 玉葉滿枝明	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	香飯随心至 寶殿逐身飛 有緣皆得入 只是去人希	欲選當生處 西方最可歸 間樹開重閣 滿道布鮮衣	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	開華重布水 覆細細分空 願生何意切 正為樂无窮	迴向漸為功 西方路稍通 寶幢承厚地 天香入遠風	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	華隨本心變 宮移身自安 憐問出世境 須共入禪看	心帶真慈滿 光含法界圓 无緣能攝物 有想定非難	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	鳥群非實鳥 天類豈真天 須知求妙樂 會是成香全



396 395 394 393 392 391 390 389 388 387 386 385 384 383 382 381 380 379

南元至心歸命礼西方阿弥陀佛  
十方諸佛國盡是法王家徧求有緣地冀得早无邪  
八功如意水七寶自然華於彼心能係當必往非賒  
願共諸衆生往生安樂國  
南元至心歸命礼西方阿弥陀佛  
淨國无衰變一立古今然光臺千寶合音樂八風宣  
池多說法鳥空滿散花天得生不畏退隨意晚開蓮  
願共諸衆生往生安樂國  
南元至心歸命礼西方阿弥陀佛  
坐華非一像聖衆亦難量蓮開人獨處波生法自揚  
无交由處靜不退為明良問彼前生輩來斯幾劫強  
願共諸衆生往生安樂國  
南元至心歸命礼西方阿弥陀佛  
光舒救毗舍空立引韋提天來香蓋捧人去寶衣齋  
六時聞鳥合四寸踐花位相看无不正豈復有長迷  
願共諸衆生往生安樂國  
南元至心歸命礼西方阿弥陀佛  
普為弘三福咸令滅五燒發心功已至係念罪便消

396 395 394 393 392 391 390 389 388 387 386 385 384 383 382 381 380 379

南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
十方諸佛國盡是法王家徧求有緣地冀得早无邪  
八功如意水七寶自然華於彼心能係當必往非賒  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
淨國无衰變一立古今然光臺千寶合音樂八風宣  
池多說法鳥空滿散花天得生不畏退隨意晚開蓮  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
坐華非一像聖衆亦難量蓮開人獨處波生法自揚  
无交由處靜不退為明良問彼前生輩來斯幾劫強  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
光舒救毗舍空立引韋提天來香蓋捧人去寶衣齋  
六時聞鳥合四寸踐花位相看无不正豈復有長迷  
願共諸衆生往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
普為弘三福咸令滅五燒發心功已至係念罪便消

414	413	412	⑬	411	410	409	408	⑭	407	406	405	404	⑮	403	402	401	400	⑯	399	398	397																						
鳥化珠光轉	風好樂聲調	俱忻行道易	寧愁聖果遙	願共諸衆生	往生安樂國	南无至心歸命礼	西方阿弥陀佛	珠色仍為水	金光即是臺	到時華自散	隨願葉還開	遊池更出沒	飛空牙往來	真心能向彼	有善併須迴	願共諸衆生	往生安樂國	南无至心歸命礼	西方阿弥陀佛	臺裏天人現	光中侍者看	懸空四寶閣	臨迴七重欄	疑多邊地久	得少上生難	且莫論餘願	西望已心安	願共諸衆生	往生安樂國	南无至心歸命礼	西方阿弥陀佛	六根常合道	三塗永絕名	念頃遊方遍	還時得忍名	地平無極廣	風長是處清	寄言有心輩	共出一危城	願共諸衆生	往生安樂國	南无至心歸命礼	西方阿弥陀佛

414	413	412	411	410	409	408	407	406	405	404	403	402	401	400	399	398	397
願共諸衆生往生安樂國	地平無極廣 風長是處清 寄言有心輩 共出一危城	六根常合道 三塗永絕名 念頃遊方遍 還時得忍名	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	疑多邊地久 得少上生難 且莫論餘願 西望已心安	臺裏天人現 光中侍者看 懸空四寶閣 臨迴七重欄	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	樂多无癡道 聲遠不妨聞 如何貪五濁 安然大自焚	洗心甘露水 悅目妙花雲 同生機易識 等壽量難分	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	遊池更出沒 飛空牙往來 真心能向彼 有善併須廻	珠色仍為水 金光即是臺 到時華自散 隨願葉還開	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	鳥化珠光轉 風好樂聲調 俱忻行道易 寧愁聖果遙



① 432 431 430 429 428 427 ②③ 426 425 424 423 ②② 422 421 420 419 ②① 418 417 ②① 416 415

南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
 哀愍覆護我 令法種增長 此世及後生 願佛常攝受  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至心歸命礼西方觀世音菩薩  
 千輪明足下 五道現光中 悲引恒無絕 人歸亦未窮  
 口宣猶在定 心靜更飛通 聞名皆願往 日發幾華叢  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至心歸命礼西方大勢至菩薩  
 慧力標無上 身光備有緣 動搖諸寶國 待座一金蓮  
 鳥群非實鳥 天類豈真天 須知求妙樂 會是戒香全  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至心歸命礼西方極樂世界諸菩薩清淨大海衆  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 普為師僧父母及善知識法界衆生 斷除三障  
 同得往生阿弥陀佛國 歸命懺悔  
 第六比丘善道願往生礼讚偈依十六觀作廿拜 當  
 日中時礼懺悔同前後  
 南无至心歸命礼西方阿弥陀佛

432 431 430 429 428 427 426 425 424 423 422 421 420 419 418 417 416 415

南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
 哀愍覆護我 令法種增長 此世及後生 願佛常攝受  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至心歸命礼西方觀世音菩薩  
 千輪明足下 五道現光中 悲引恒無絕 人歸亦未窮  
 口宣猶在定 心靜更飛通 聞名皆願往 日發幾華叢  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至心歸命礼西方大勢至菩薩  
 慧力標無上 身光備有緣 動搖諸寶國 待座一金蓮  
 鳥群非實鳥 天類豈真天 須知求妙樂 會是戒香全  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至心歸命礼西方極樂世界諸菩薩清淨大海衆  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 普為師僧父母、及善知識、法界衆生、斷除三障、  
 同得往生阿弥陀佛國、歸命懺悔。  
 第六比丘善道願往生礼讚偈。依十六觀作廿拜。當  
 日中時礼。懺悔同前後  
 南无至心歸命礼西方阿弥陀佛

④	450	449	448	447	446	445	③	444	443	442	441	440	439	②	438	437	436	435	434	433						
一臺上聖空中	南元至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	臺中寶樓千万億	寶地寶色寶光嚴	地上莊嚴轉無極	金繩界道非工匠	南元至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	行者傾心常對目	騰神踊躍入西方	无生寶國永為常	一切寶流無數光	見彼无生自然悟	八方八面百寶成	無量无边無億數	地下莊嚴七寶幢	南元至心歸命礼西方阿弥陀佛	願共諸衆生往生安樂國	普勸歸西同彼會	恒沙三昧自然成	窮劫算數不知名	本國他方大海水	超諸佛刹最為精	四十八願莊嚴起	廣大寬平衆寶成	觀彼弥陀極樂界

450	449	448	447	446	445	444	443	442	441	440	439	438	437	436	435	434	433
南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生往生安樂国	臺中寶樓千万億	寶地寶色寶光嚴	彌陁願智巧莊嚴	地上莊嚴轉無極	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生往生安樂國	行者傾心常對目	无生寶國永為常	八方八面百寶成	地下莊嚴七寶幢	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生往生安樂國	普勸歸西同彼會	本國他方大海水	四十八願莊嚴起	觀彼弥陁極樂界
		臺側百億寶幢圍	一一先成無數臺	菩薩人天散華上	金繩界道非工匠			騰神踊躍入西方	一切寶流無數光	見彼无生自然悟	無量无边無億數			恒沙三昧自然成	窮劫算數不知名	超諸佛刹最為精	廣大寬平衆寶成



⑦ 468 467 466 465 464 463 ⑥ 462 461 460 459 458 457 ⑤ 456 455 454 453 452 451

一一臺上虛空中	莊嚴寶樂亦元窮	八種清風尋光山	隨時鼓樂應機音	機音正受稍為難	行住坐臥攝心觀	唯除睡時常憶念	三昧元為即涅槃	願共諸衆生往生安樂國	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	寶國寶林諸寶樹	寶華寶葉寶根莖	或以千寶分林異	或有百寶共成行	行行相當葉相次	色各不同光點然	等量齊高三十方	枝條相觸說无因	願共諸衆生往生安樂國	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	七重羅網七重宮	綺牙迴光相映發	化天童子皆充滿	纓絡輝光超日月	行行寶葉色千般	華敷等若旋金輪	菓變光成衆寶蓋	塵沙佛刹現无邊	願共諸衆生往生安樂國	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛
---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	------------	---------------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	------------	---------------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	------------	---------------

468 467 466 465 464 463 462 461 460 459 458 457 456 455 454 453 452 451

一一臺上虛空中	莊嚴寶樂亦无窮	八種清風尋光山	隨時鼓樂應機音	機音正受稍為難	行住坐臥攝心觀	唯除睡時常憶念	三昧无為即涅槃	願共諸衆生往生安樂國	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	寶國寶林諸寶樹	寶華寶葉寶根莖	或以千寶分林異	或有百寶共成行	行行相當葉相次	色各不同光亦然	等量齊高三十方	枝條相觸說无因	願共諸衆生往生安樂國	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	七重羅網七重宮	綺牙迴光相映發	化天童子皆充滿	纓絡輝光超日月	行行寶葉色千般	華敷等若旋金輪	菓變光成衆寶蓋	塵沙佛刹現无邊	願共諸衆生往生安樂國	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛
---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	------------	---------------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	------------	---------------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	------------	---------------

(10)	(9)	(8)
486	480	474
485	479	473
484	478	472
483	477	471
482	476	470
481	475	469
480	474	
479	473	
478	472	
477	471	
476	470	
475	469	
474		
473		
472		
471		
470		
469		

486	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	485	願共諸衆生往生安樂國	484	晝夜六時專想念 終時快樂如三昧	483	真形光明遍法界 蒙光觸者心不退	482	臺上四幢張寶纓 弥陁獨坐顯真形	481	弥陁本願華王座 一切衆寶以為成	480	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	479	願共諸衆生往生安樂國	478	風鈴樹響遍虛空 歎說三尊无有極	477	无量无边无能計 稽首弥陁恭敬立	476	諸天童子散香華 他方菩薩如雲集	475	一金繩界道上 寶樂寶樓千万億	474	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	473	願共諸衆生往生安樂國	472	寄語有緣同行者 努力飄迷還本家	471	德水分流尋香樹 聞波都樂證悽怕	470	十二由旬皆正等 寶羅寶網寶欄遮	469	寶池寶岸寶金沙 寶渠寶葉寶蓮花
-----	---------------	-----	------------	-----	--------------------	-----	--------------------	-----	--------------------	-----	--------------------	-----	---------------	-----	------------	-----	--------------------	-----	--------------------	-----	--------------------	-----	-------------------	-----	---------------	-----	------------	-----	--------------------	-----	--------------------	-----	--------------------	-----	--------------------



跡隨佛身遍法界  
 是故勸汝常觀察  
 真容寶像臨華座  
 寶樹三身華遍滿  
 願興諸衆生往生安樂國  
 南元至心歸命礼西方阿彌陀佛  
 跡隨身色如金山  
 唯有念佛蒙光攝  
 十方如來舒舌證  
 到彼華臺聞妙法  
 願興諸衆生往生安樂國  
 南元至心歸命礼西方阿彌陀佛  
 觀音菩薩大慈悲  
 一切五道內身中  
 應現身光紫金色  
 恒舒百億光王手  
 願興諸衆生往生安樂國  
 南元至心歸命礼西方阿彌陀佛  
 歎現衆生心想中  
 依心起相表真容  
 心聞見彼國莊嚴  
 風鈴樂響興文同  
 相好光明照十方  
 當知本願最為強  
 專稱名号至西方  
 十地顛行自然歎  
 已得菩提捨不證  
 六時觀察三輪應  
 相好威儀轉無礙  
 普接有緣歸本國  
 六時觀察三輪應

252

505	506	507	508	509	⑭	510	511	512	513	514	515	⑮	516	517	518	519	520	521	⑯	
勢至菩薩難思議	咸先普照无邊際	增長智慧超三覺	化佛雲集滿虚空	永施胞胎證六通	願興諸衆生往生安樂國	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	心想念至西方	地上虚空七寶莊	重勸衆生觀小身	丈六八尺隨機現	圓光化侍等前真	願興諸衆生往生安樂國	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛	求生淨土斯會真	五門相續助三回	異命乘臺出六塵	永證无為法性身	慶哉難逢今得遇	願興諸衆生往生安樂國	南无至心歸命礼西方阿弥陀佛

522	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	521	願共諸衆生往生安樂國	520	慶哉難逢今得遇	519	一日七日專精進	518	就行差別分三品	517	上輩上行上根人	516	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	515	願共諸衆生往生安樂國	514	丈六八尺隨機現	513	彌陁身量極无邊	512	觀見弥陁極樂界	511	正坐跏趺入三昧	510	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛	509	願共諸衆生往生安樂國	508	普勸有緣常憶念	507	法界傾搖如轉蓬	506	有緣衆生蒙光觸	505	勢至菩薩難思議
					永證无為法性身	畢命乘臺出六塵		五門相續助三因		求生淨土斷貪瞋					圓光化侍等前真	重勸衆生觀小身	地上虛空七寶莊	想心乘念至西方			永絕胞胎證六通		化佛雲集滿虛空		增長智慧超三界	威光普照无邊際									



540 539 538 537 536 535 534 533 532 531 530 529 528 527 526 525 524 523

南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
 中輩中行中根人 一日齊戒處金蓮  
 孝養父母教廻向 為說西方快樂因  
 佛與聲聞眾來取 直到弥陀華座邊  
 百寶華籠逕七日 三品蓮開證小真  
 願共諸眾往生安樂國  
 南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
 下輩下行下根人 十惡五逆等貪瞋  
 四重偷僧謗正法 未曾慚愧悔前愆  
 終時苦相如雲集 地獄猛火罪人前  
 忽遇往生善知識 急觀專稱彼佛名  
 化佛菩薩尋嚴到 一念傾心入寶蓮  
 三業障重開多劫 于時始發菩提因  
 願共諸眾往生安樂國  
 南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
 西方極樂難思議 无邊菩薩為同學  
 性海如來盡是師 偈聞波若絕思漿  
 念食無生即斷飢 一切莊嚴皆說法  
 无心領納自然知 七覺華池隨意入

540 539 538 537 536 535 534 533 532 531 530 529 528 527 526 525 524 523

南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
 中輩中行中根人 一日齊戒處金蓮  
 孝養父母教廻向 為說西方快樂因  
 佛與聲聞眾來取 直到弥陀華座邊  
 百寶華籠逕七日 三品蓮開證小真  
 願共諸眾往生安樂國  
 南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
 下輩下行下根人 十惡五逆等貪瞋  
 四重偷僧謗正法 未曾慚愧悔前愆  
 終時苦相如雲集 地獄猛火罪人前  
 忽遇往生善知識 急觀專稱彼佛名  
 化佛菩薩尋嚴到 一念傾心入寶蓮  
 三業障重開多劫 于時始發菩提因  
 願共諸眾往生安樂國  
 南无至心歸命礼西方阿弥陀佛  
 西方極樂難思議 无邊菩薩為同學  
 性海如來盡是師 偈聞波若絕思漿  
 念食無生即斷飢 一切莊嚴皆說法  
 无心領納自然知 七覺華池隨意入

[illegible]

557	556	555	554	553	552	551	550	549	548	547	546	545	544	543	542	541
如此，縱使日夜十二時急走，終是無益，差不作者。應知。 雖不能流淚流血等，但能真心徹到者，即與上同。	別儀，即是久種解脫分善根人，被使今生教法重人，不惜身命，乃至小罪若犯，即能微心制。能如此儀者，不問久近，所有重障，頓皆滅盡。若不 <small>取下二品懺悔，發願等同前。須要中要取初、須略中略取中、須廣中廣取其廣者，就實有心願生者而勸。或對四眾，或對十方佛，或對十方尊像大衆，或對一人，若獨自等。又向十方盡虛空三寶，及盡衆生界等，具向發露懺悔。有三品：上中下。上品懺悔者，身毛孔中血流；眼中血出者，名上品懺悔；中品懺悔者，遍身熱汗從毛孔出；眼中血流出者，名中品懺悔；下品懺悔者，遍身微熱，眼中淚滴出者，名下品懺悔。此等三品，雖有差別，即是久種解脫分善根人，被使今生教法重人，不惜身命，乃至小罪若犯，即能微心制。能如此儀者，不問久近，所有重障，頓皆滅盡。若不</small>	吾今不去待何時？ 須臾授記号无為。 如失道遙無巨處。	觀音大勢與衣披。 欽𢆉騰空遊法界。	八背凝神會一枝。 弥陀心水沐身頂。	普為師僧父母、及善知識、法界衆生、斷除三障、	願共諸衆生往生安樂國。	觀音勢至諸菩薩清淨大海衆。	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛。	願共諸衆生往生安樂國。	哀感覆護我。令法種增長。此世及後世。願佛常攝受。	南无至心歸命礼西方阿弥陁佛。	願共諸衆生往生安樂國。	吾今不去待何時？ 須臾授記号无為。 如失道遙無巨處。	觀音大勢與衣披。 欽𢆉騰空遊法界。	八背凝神會一枝。 弥陀心水沐身頂。	



576 575 574 573 572 571 570 569 568 567 566 565 564 563 562 561 560 559

雖不能遠渡海等但能真心懺到者即與上同  
敬白十方諸佛十二部經諸大菩薩一切賢聖  
及一切天龍八部法界衆生現前大衆等證  
知我某甲發露懺悔從無始已來乃至今身  
殺害一切三寶師僧父母六親眷屬善知  
識法界衆生不可知數偷盜一切三寶師  
僧父母六親眷屬善知識法界衆生物不  
可知數於一切三寶師僧父母六親眷屬  
知識法界衆生上起邪心不可知數妄語  
欺誑一切三寶師僧父母六親眷屬善知  
識法界衆生不可知數綺語調昧一切三  
寶師僧父母六親眷屬善知識法界衆生  
不可知數惡口罵辱誹謗毀譽一切三寶  
師僧父母六親眷屬善知識法界衆生不  
可知數兩舌鬪亂破壞一切三寶師僧父  
母六親眷屬善知識法界衆生不可知數  
或破五戒八戒十戒十善戒二百五十戒五  
百戒菩薩三聚戒十無盡戒乃至一切戒  
及一切威儀戒等自作教他見作隨喜不  
可知數如是等眾罪之如十方大地也

576 575 574 573 572 571 570 569 568 567 566 565 564 563 562 561 560 559

敬白十方諸佛、十二部經、諸大菩薩、一切賢聖、  
及一切天龍八部、法界衆生、現前大衆等。證  
知我某甲、發露懺悔、從無始已來、乃至今身、  
殺害一切三寶師僧父母六親眷屬善知  
識法界衆生、不可知數。偷盜一切三寶師  
僧父母六親眷屬善知識法界衆生物、不  
可知數。於一切三寶師僧父母六親眷屬  
知識法界衆生上起邪心、不可知數。妄語  
欺誑一切三寶師僧父母六親眷屬善知  
識法界衆生、不可知數。綺語調昧一切三  
寶師僧父母六親眷屬善知識法界衆生、  
不可知數。惡口罵辱誹謗毀譽一切三寶  
師僧父母六親眷屬善知識法界衆生、不  
可知數。兩舌鬪亂破壞一切三寶師僧父  
母六親眷屬善知識法界衆生、不可知數。  
或破五戒八戒十戒十善戒二百五十戒五  
百戒菩薩三聚戒十無盡戒、乃至一切戒、  
及一切威儀戒等、自作教他、見作隨喜、不

594 593 592 591 590 589 588 587 586 585 584 583 582 581 580 579 578 577

可知數如是等衆罪。如十方大地无邊、  
微塵无數。我等作罪亦无邊无數。虚空无  
邊。我等作罪亦復无邊。法界无邊。亦如上。  
法性无邊。亦如上。地无邊。亦如上。如是等罪、  
上至諸菩薩、下至聲聞緣覺、所不能知。  
唯佛與佛乃能知我罪之多少。今於三寶前、  
法界衆生前、發露懺悔、不敢覆藏。唯願十  
十方三寶、法界衆生、受我懺悔、憶我清淨。始  
從今日、願共法界衆生、捨耶歸正、發菩提心、  
慈心相向、佛眼相看、作菩提眷屬、作真善  
知識、同生阿彌陀佛國、乃至成佛、如是等罪、  
永斷相續、更不敢作。懺悔已。至心歸命阿彌  
陀佛。禮懺竟。

若入觀及睡時、應發此願。若坐若立、一心合掌、正面向西、十聲稱  
阿彌陀佛。觀音勢至諸菩薩清淨大海衆。弟子某甲現  
聞此願。本願名、一心稱念、求願往生。願佛慈悲、不捨本弘  
誓願攝受。弟子不識、阿彌陀佛身相光明。願佛慈悲、示現弟  
子身相。觀音勢至諸菩薩等、及彼世界清淨莊嚴光明等相。  
得見之。或有睡時得見。此願比來亦大有現驗。問曰。稱念礼  
觀阿彌陀佛、現世有何功德利益。答曰。若稱阿彌陀佛一聲、  
即能除滅八十億劫生死重罪。礼念已下。亦如是。十往生經。

594 593 592 591 590 589 588 587 586 585 584 583 582 581 580 579 578 577

可知數。如是等衆罪、亦如十方大地无邊、  
微塵无數、我等作罪亦无邊无數。虚空无  
邊、我等作罪亦復无邊。法界无邊、亦如上。  
法性无邊、亦如上。地无邊、亦如上。如是等罪、  
上至諸菩薩、下至聲聞緣覺、所不能知。  
唯佛與佛乃能知我罪之多少。今於三寶前、  
法界衆生前、發露懺悔、不敢覆藏。唯願十  
十方三寶、法界衆生、受我懺悔、憶我清淨。始  
從今日、願共法界衆生、捨耶歸正、發菩提心、  
慈心相向、佛眼相看、作菩提眷屬、作真善  
知識、同生阿彌陀佛國、乃至成佛、如是等罪、  
永斷相續、更不敢作。懺悔已。至心歸命阿彌  
陀佛。禮懺竟。

若入觀及睡時、應發此願。若坐若立、一心合掌、正面向西、十聲稱  
阿彌陀佛。觀音勢至諸菩薩清淨大海衆。弟子某甲現  
聞此願。本願名、一心稱念、求願往生。願佛慈悲、不捨本弘  
誓願攝受。弟子不識、阿彌陀佛身相光明。願佛慈悲、示現弟  
子身相。觀音勢至諸菩薩等、及彼世界清淨莊嚴光明等相。  
得見之。或有睡時得見。此願比來亦大有現驗。問曰。稱念礼  
觀阿彌陀佛、現世有何功德利益。答曰。若稱阿彌陀佛一聲、



得

爾阿彌陀佛現世有何功德利益答曰若誦阿彌陀佛一萬  
即能除滅八十億劫生死重罪。禮念已下亦如是。十往生經  
云若有衆生念阿彌陀佛願往生者彼佛即遣廿五菩薩  
護行者。若行若坐若住若臥。若晝若夜。一切時一切處。不令  
惡鬼惡神。得其便也。又如觀經云。若稱禮念阿彌陀佛。願往生  
彼國者。彼佛即遣無數化佛。無數化觀音。無數化菩薩。護念行  
者。復與前廿五菩薩等。百重千重圍繞行者。不問行住坐臥。一  
切時處。若晝若夜。常不離行者。今既有斯勝益。可憑願諸  
行者。各須至心求往。又如無量壽經云。若我成佛。十方衆生  
稱我名號。下至十聲。若不生者。不取正覺。彼佛今現。在世成  
佛。當知本誓。重願不虛。衆生稱念。必得往生。又如彌陀經云。  
若有衆生。聞說阿彌陀佛。即應執持名號。若一日。若二日。乃至  
七日。一心稱佛不亂。命欲終時。阿彌陀佛。與諸聖衆。現在  
其前。此人終時。心不顛倒。即得往生彼國。佛舍利弗。我見是  
利。故說是言。若有衆生。聞說是者。應當發願。願生彼國。次  
下說云。東方如恒河沙等諸佛。南西北方及上下。十方如恒  
河沙等諸佛。各於本國。出其舌相。遍覆三千大千世界。  
說誠實言。汝等衆生。皆應信受。一切諸佛所護念經。云  
何名護念。若有衆生。稱念阿彌陀佛。若七日。及一日。下至十聲。  
乃至一聲。一念等。必得往生。證成此事。故名護念經。次下文  
云。若稱佛往生者。當為六方恒河沙等諸佛之所護念。故名稱  
念經。今既有此增上誓願。可憑。  
諸佛子等。何不勵意去也。

## 集諸經禮懺儀卷下

即能除滅八十億劫生死重罪。禮念已下亦如是。十往生經  
云。若有衆生。念阿彌陀佛。願往生者。彼佛即遣廿五菩薩  
護行者。若行若坐若住若臥。若晝若夜。一切時一切處。不令  
惡鬼惡神。得其便也。又如觀經云。若稱禮念阿彌陀佛。願往生  
彼國者。彼佛即遣無數化佛。無數化觀音。無數化菩薩。護念行  
者。復與前廿五菩薩等。百重千重圍繞行者。不問行住坐臥。一  
切時處。若晝若夜。常不離行者。今既有斯勝益。可憑願諸  
行者。各須至心求往。又如無量壽經云。若我成佛。十方衆生  
稱我名號。下至十聲。若不生者。不取正覺。彼佛今現。在世成  
佛。當知本誓。重願不虛。衆生稱念。必得往生。又如彌陀經云。  
若有衆生。聞說阿彌陀佛。即應執持名號。若一日。若二日。乃至  
七日。一心稱佛不亂。命欲終時。阿彌陀佛。與諸聖衆。現在  
其前。此人終時。心不顛倒。即得往生彼國。佛舍利弗。我見是  
利。故說是言。若有衆生。聞說是者。應當發願。願生彼國。次  
下說云。東方如恒河沙等諸佛。南西北方及上下。十方如恒  
河沙等諸佛。各於本國。出其舌相。遍覆三千大千世界。  
說誠實言。汝等衆生。皆應信受。一切諸佛所護念經。云  
何名護念。若有衆生。稱念阿彌陀佛。若七日。及一日。下至十聲。  
乃至一聲。一念等。必得往生。證成此事。故名護念經。次下文  
云。若稱佛往生者。當為六方恒河沙等諸佛之所護念。故名稱  
念經。今既有此增上誓願。可憑。  
諸佛子等。何不勵意去也。

## 集諸經禮懺儀卷下

第三章 檀王法林寺蔵 中尊寺一切經本『集諸經礼懺儀』卷下、  
並びに金剛寺蔵 金剛寺一切經本『集諸經礼懺儀』卷下攷

36	36	36	36	35	34	33	30	25	25	22	21	21	19	16	16	14	13	13	9	7	校異	
〔曲〕 ／ 33 〔回〕。	〔先〕 ／ 33 〔光〕。	〔項〕 ／ 33 〔頂〕。	〔行〕 ／ 32 〔佛〕。	〔名〕 ／ 32 〔多〕。	〔直〕 ／ 31 〔真〕。	〔行〕 ／ 30 〔彼〕。	〔墮〕 ／ 27 〔隨〕。	〔門〕 ／ 23 〔問〕。	〔一〕 ／ 23 〔二〕。	〔發願生〕 ／ 21 〔發願願生〕。	〔四儀〕 ／ 20 〔四威儀〕。	〔念〕 ／ 20 〔恒念〕。	〔礼〕 ／ 18 〔礼拜〕。	〔觀如經〕 ／ 15 〔如觀經〕。	〔不〕 ／ 15 ナシ。	〔知自身〕 ／ 13 〔智身〕。	〔至誠〕 ／ 13 〔至誠心〕。	〔先〕 ／ 12 〔光〕。	〔三〕 ／ 8 〔二〕。	〔治〕 ／ 7 〔沾〕。		
110	103	92	92	67	63	62	62	60	59	58	55	55	51	46	46	44	43	42	41	41	39	39
〔六神通〕 ／ 92 〔得六神通〕。	〔忿忿〕 ／ 87 〔忿忿〕。	〔都〕 ／ 79 〔觀〕。	〔終〕 ／ 78 ナシ。	〔無量佛〕 ／ 57 〔无量光佛〕。	〔其〕 ／ 54 ナシ。	〔稱〕 ／ 53 〔稱其〕。	〔佛〕 ／ 53 ナシ。	〔名〕 ／ 51 〔稱名〕。	〔阿〕 ／ 51 〔陀〕。	〔十〕 ／ 50 ナシ。	〔皆〕 ／ 48 ナシ。	〔法〕 ／ 48 〔法上〕。	〔三寶〕 ／ 45 〔三寶者〕。	〔无〕 ／ 42 〔生〕。	〔畢〕 ／ 41 〔異〕。	〔有〕 ／ 40 ナシ。	〔隨意〕 ／ 38 〔隨意用〕。	〔无〕 ／ 38 〔故无〕。	〔矢〕 ／ 37 〔失〕。	〔持〕 ／ 37 ナシ。	〔佛〕 ／ 36 〔佛佛〕。	〔亦〕 ／ 35 〔旦〕。

335 329 316 309 300 283 255 249 209 201 198 196 164 143 137 125 123 121 121 120 112 111  
 「部」／241「障」。  
 「世界」／236ナシ。  
 清淨智海衆 如須弥山王 勝妙无過者 願共諸衆生 往生安樂國」。  
 317 脫文カ。／226・227「南无至心歸命礼西方阿弥陀佛 天人不動衆  
 間」／220「聞」。  
 吐」／215「生」。  
 「安樂」／203「安樂國」。  
 「大海衆」／183「大衆海」。  
 種」／179「増」。  
 「百千日」／159「千日月」。  
 仙」／155「山」。  
 龍」／154「龍樹」。  
 断」／152「断除」。  
 行」／130「化」。  
 雅」／116「邪」。  
 生彼」／113「往生」。  
 文」／104ナシ。  
 如」／103「如是」。  
 說」／101「記」。  
 今」／101「命」。  
 身」／100ナシ。  
 「阿弥陀佛」／93「礼阿弥陀佛」。  
 虚」／92「靈」。

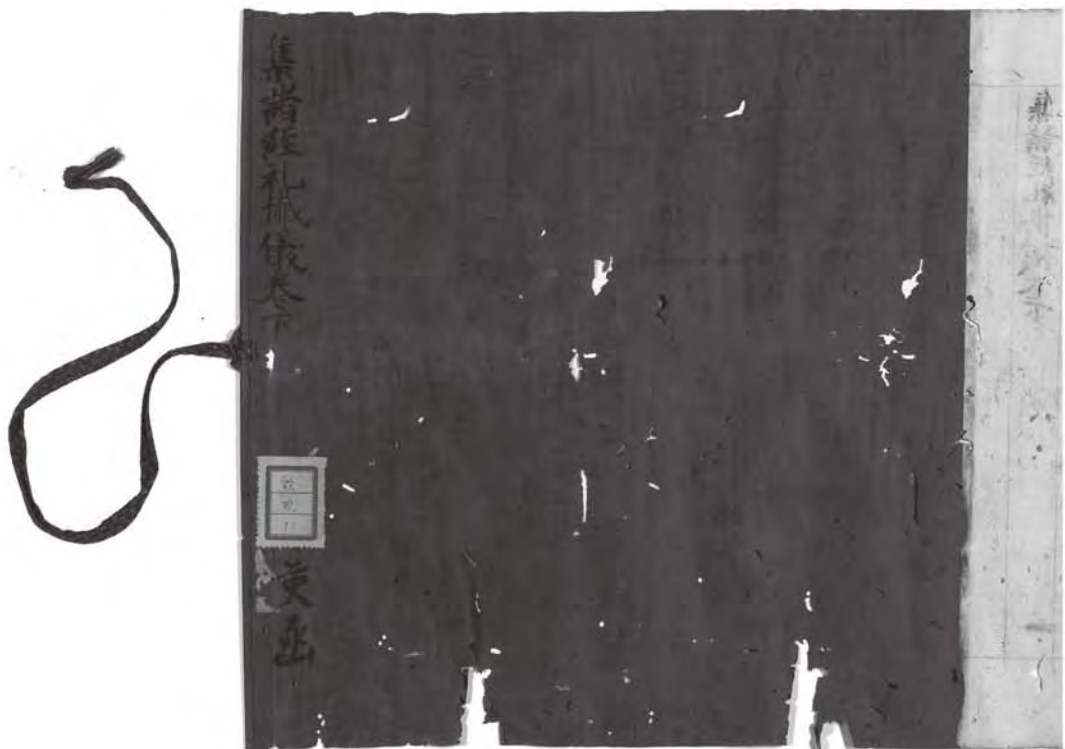
447 445 435 430 424 423 413 408 405 405 401 389 385 380 373 369 365 365 360 356 353 351 349  
 「寶」轉「水」道「實」待「危」迴「大」癩「牙」交「畏」徧「只」細「看」間「力」亦「實」「西方」澄  
 300 299 294 292 289 288 283 280 279 279 277 271 269 266 263 261 259 259 255 253 251 250 249  
 ナシ。ナシ。衆」導。寶。待。施。廻。火。廢。互。災。思。徧。亦。網。首。聞。刀。永。寶。250「礼西方」。證。



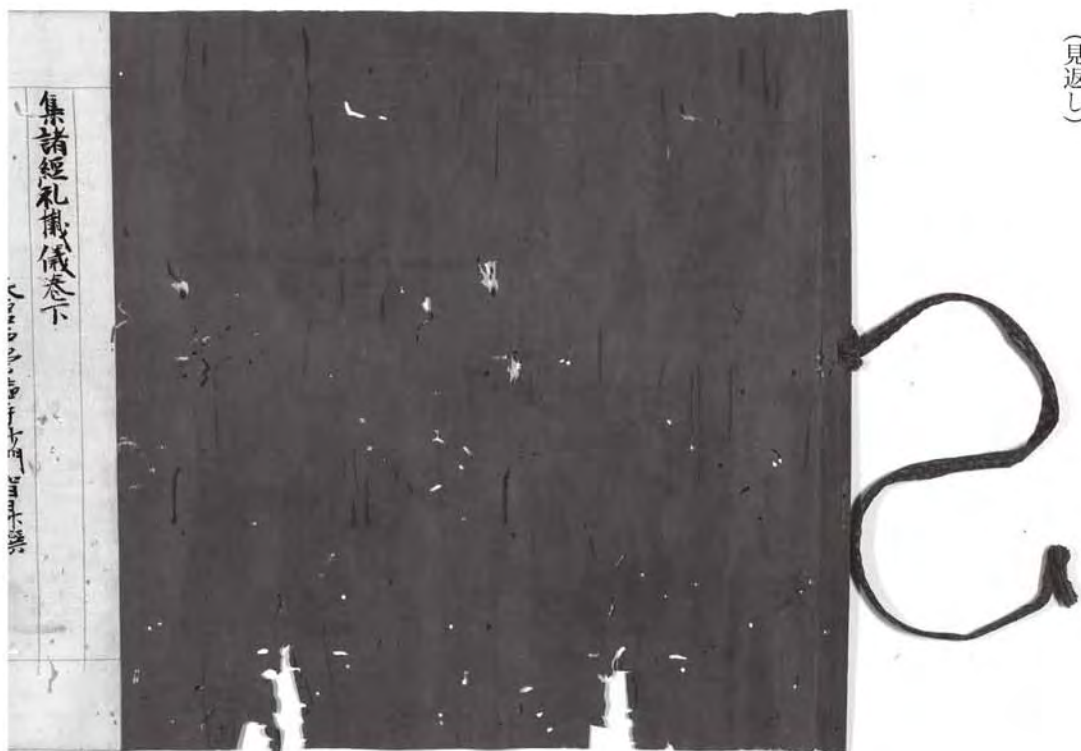
第三章 檀王法林寺藏 中尊寺一切經本『集諸經礼懺儀』卷下、  
並びに金剛寺藏 金剛寺一切經本『集諸經礼懺儀』卷下攷

586	583	580	566	557	556	555	554	547	544	543	542	542	540	538	534	533	532	508	471	471	463	447
相	十	性	知識	解	熱	有三品	略	世	吾	旦	余	勢	意	漿	多	到	觀	勸	都	香	牙	先
／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
384	381	378	365	356	356	355	354	351	349	348	348	347	347	346	344	343	343	331	312	312	308	300
ナシ。	十。	ナシ。	善知識。	■。	勢。	懺悔有三品。	ナシ。	生。	五。	極。	示。	至。	竟。	將水。	名。	倒。	勸。	觀。	觀。	寶。	年。	光。

605	604	603	601	600	598		596	594	593	592	591
勸	稱	護	佛	命	今	／	阿弥陀佛、願往生彼國者、 彼佛即遣無數化佛、 無數化觀音勢至菩薩	一聲	光明	聞	不可
／	／	／	／	／	／	ナシ。		／	／	／	／
399	399	397	395	395	393	ナシ。 脱文カ。		390	389	388	388
動。	護。	ナシ。	佛告。	今。	令。			ナシ。	間。	間。	不可言。



(表紙)



(見返し)

18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

集諸經禮儀卷下

大居士崇禪寺西門智昇撰

往生禮讚偈一卷

比丘善導集託

勸一切衆生願生西方極樂世界阿彌陀佛國  
六時禮讚偈讚依大乘經及龍樹天親等所闡等  
所造往生禮讚集在處分作去時宜歡相續係心  
助成往登之願曉悟未聞蓮莊選代可何者  
蓋衆難遇及方諸佛讚歎於此十二名勝緣以念至生彼國十凡  
時當口說行札為三護佛法生往緣殊非尋常文以爲得福因緣  
時衆主信能解云此護佛法生往緣十六并心中持持而修定觀念性  
願往禮讚偈十并心中持持而修定觀念性願往禮讚偈十并心中持  
願往禮讚偈十并心中持持而修定觀念性願往禮讚偈十并心中持  
十六觀作身者午時刻間今欲勸人往生者衆矣  
若寫安心起行作業急得往生彼國土也答曰必欲往  
生彼國土者如觀世音光具三心發願往生何有爲三  
一者至誠二則誓願業報散外日當讚歎稱揚皈依是事等令觀念不  
休凡此三業皆須具足又公至誠二者深意是真實信心體悟生是  
見三願彼此互益飛騰少壯轉之勇利先大也今復知悉應有相續願生  
力大至十發工發急之得往生乃至三正有發三心發三心者迴向時就  
願之所信一如善根往後迴向願往生故若回向散亂心與之三  
失淨生也若十一月得生如觀世音光具三心發願往生何有爲三  
又如天親淨土論云若有願生彼國者勤修五念  
門五門者具念得生一何者念五二年至來發念華香  
華供養禮拜阿彌陀佛身者即皈依身念若不離餘禮次名礼  
門二者日課數門即謂身至願敬取供身相印前叩聖像身相見  
相契彼國生印清莊嚴分明等或發願數門三者念業修念散

36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19

[illegible]







90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73

南无西方有佛世界不若生苦  
此云禮一切衆生願命終時心不顛倒入淨定願衆現前衆佛不顛倒入淨  
定與衆佛共入淨定願衆佛共入淨定願衆佛共入淨定願衆佛共入淨定願衆佛共入淨定  
南无西方有佛世界不若生苦  
衆生新除三障同得淨生何能佛國歸命佛安  
至心懺悔南无歸敬十方佛願滅一切諸罪根令淨  
近而修善迴作自他安樂目恒願一切臨終時身不顛倒  
現前願觀衆佛天悲悲觀音勢至十方尊佛之功德  
發誓手衆佛願力生彼國南无迴向衆願已至心歸命  
何能佛  
此云禮一切衆生願命終時心不顛倒入淨定願衆現前衆佛不顛倒入淨  
定與衆佛共入淨定願衆佛共入淨定願衆佛共入淨定願衆佛共入淨定  
衆生新除三障同得淨生何能佛國歸命佛安  
至心懺悔南无歸敬十方佛願滅一切諸罪根令淨  
近而修善迴作自他安樂目恒願一切臨終時身不顛倒  
現前願觀衆佛天悲悲觀音勢至十方尊佛之功德  
發誓手衆佛願力生彼國南无迴向衆願已至心歸命  
何能佛  
此云禮一切衆生願命終時心不顛倒入淨定願衆現前衆佛不顛倒入淨  
定與衆佛共入淨定願衆佛共入淨定願衆佛共入淨定願衆佛共入淨定

108 107 106 105 104 103 102 101 100 99 98 97 96 95 94 93 92 91

願衆手衆佛願力生彼國南无迴向衆願已至心歸命  
何能佛  
此云禮一切衆生願命終時心不顛倒入淨定願衆現前衆佛不顛倒入淨  
定與衆佛共入淨定願衆佛共入淨定願衆佛共入淨定願衆佛共入淨定  
衆生新除三障同得淨生何能佛國歸命佛安  
至心懺悔南无歸敬十方佛願滅一切諸罪根令淨  
近而修善迴作自他安樂目恒願一切臨終時身不顛倒  
現前願觀衆佛天悲悲觀音勢至十方尊佛之功德  
發誓手衆佛願力生彼國南无迴向衆願已至心歸命  
何能佛  
此云禮一切衆生願命終時心不顛倒入淨定願衆現前衆佛不顛倒入淨  
定與衆佛共入淨定願衆佛共入淨定願衆佛共入淨定願衆佛共入淨定  
衆生新除三障同得淨生何能佛國歸命佛安  
至心懺悔南无歸敬十方佛願滅一切諸罪根令淨  
近而修善迴作自他安樂目恒願一切臨終時身不顛倒  
現前願觀衆佛天悲悲觀音勢至十方尊佛之功德  
發誓手衆佛願力生彼國南无迴向衆願已至心歸命  
何能佛  
此云禮一切衆生願命終時心不顛倒入淨定願衆現前衆佛不顛倒入淨  
定與衆佛共入淨定願衆佛共入淨定願衆佛共入淨定願衆佛共入淨定  
衆生新除三障同得淨生何能佛國歸命佛安  
至心懺悔南无歸敬十方佛願滅一切諸罪根令淨  
近而修善迴作自他安樂目恒願一切臨終時身不顛倒  
現前願觀衆佛天悲悲觀音勢至十方尊佛之功德  
發誓手衆佛願力生彼國南无迴向衆願已至心歸命  
何能佛  
此云禮一切衆生願命終時心不顛倒入淨定願衆現前衆佛不顛倒入淨  
定與衆佛共入淨定願衆佛共入淨定願衆佛共入淨定願衆佛共入淨定



南无至心歸命禮西方阿彌陀佛 願共諸衆生 往生安樂國  
不退諸菩薩 皆當得生彼 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命禮西方阿彌陀佛 小行諸菩薩 及修少福者  
其數不可計 皆當得生彼 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命禮西方阿彌陀佛 十方佛剎中 若生七紅紫  
雲如赤計 皆當得生 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命禮西方阿彌陀佛 一切諸菩薩 名莫能舉  
寶香无價天 供養阿彌陀佛 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命禮西方阿彌陀佛 周然奉天樂 妙鼓新音  
歌歡最嚴身 供養阿彌陀佛 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命禮西方阿彌陀佛 慧目照世間 消除无雲  
翳故三逆 暫見阿彌陀佛 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命禮西方阿彌陀佛 見彼嚴淨莊嚴妙莊嚴  
目設无上心 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命禮西方阿彌陀佛 應時无量尊 勳若發深嘆  
已勇教光 遍照十方國 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命禮西方阿彌陀佛 迴光圍繞身 三而旋頂  
一切天人衆 踊躍皆歡喜 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命禮西方阿彌陀佛 梵聲如雷震 八百四千萬

十方來至 善惡無別 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿彌陀佛 至彼嚴淨方便速得相遇  
於无量尊 受託威尊 貴願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿彌陀佛 奉事德衆 飛化遍諸刹  
恭敬歡喜云 還到安養國 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿彌陀佛 若人无善本 不得聞佛名  
悔悔華嚴處 難以信此法 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿彌陀佛 宿世見諸佛 則談信此事  
證教聞奉行 踊躍大歡喜 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿彌陀佛 其有得聞彼 弥陀佛名号  
歡喜至心 皆當得生彼 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿彌陀佛 謬謬大千大 遍過閻佛名  
聞名歡喜讚 皆當得生彼 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿彌陀佛 万有三寶藏 此法住世尊  
介特開一念 皆當得生彼 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿彌陀佛 佛甚甚難值 人有信慕難  
過聞者有法 此復最爲難 願共諸衆生 往生安樂國  
南无至心歸命礼西方阿彌陀佛 自信獲人信 難轉轉更難  
此法難信 有信難得 願共諸衆生 往生安樂國



162 161 160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150 149 148 147 146 145

南无三尊佛令礼西方阿耨他佛自修教人信受中更  
大悲救苦化真成弥勒月 願共諸衆生 往生安樂國  
南无三尊佛令礼西方阿耨他佛長壽廣嚴刹 今法幢增長  
此世及後生 願佛弟僧受 願共諸衆生 往生安樂國  
南无三尊佛令礼西方無量壽觀音菩薩 願共諸衆生 往生安樂國  
南无三尊佛令礼西方無量壽大勢至菩薩 願共諸衆生 往生安樂國  
南无三尊佛令礼西方無量壽世界諸菩薩清淨大海衆  
願共諸衆生 往生安樂國  
普為所信之父母智識遠近眾新降誕同濟生可憐作國師  
令懺悔  
第三依龍樹并願生禮讚偈于六拜當中即將懺悔回向後  
南无三尊佛令礼西方阿耨他佛誓度天人的恭敬阿耨他佛  
存敬盡善美滿无量佛法榮圍繞 願共諸衆生 往生安樂國  
南无三尊佛令礼西方阿耨他佛金色身法如少王壽康他行如意妙  
內目持若青蓮華 故我頂禮於佛 願共諸衆生 往生安樂國  
南无三尊佛令礼西方阿耨他佛面舌圓淨妙相 願共諸衆生 往生安樂國  
淨若天鼓雙輪耀放教頂禮於佛 願共諸衆生 往生安樂國  
南无三尊佛令礼西方阿耨他佛觀音頂戴冠上住種種妙相演說  
莊嚴大道應攝拔我頂禮於佛 願共諸衆生 往生安樂國  
南无三尊佛令礼西方阿耨他佛元生在在處處 願共諸衆生 往生安樂國

180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163

[illegible]



此世及後生。願得常存。受前生善報。生於善處。生  
南无慈歸命。禮西方極樂世界觀世音菩薩。前共諸衆生。生於樂國。  
南无慈歸命。禮西方極樂世界大衆聖菩薩。前共諸衆生。生於樂國。  
南无慈歸命。禮十方無量世界諸菩薩。清淨大智海。前共諸衆生。生於樂國。  
普為師。修女等。至善知識。法身衆。新降三劫。同得生於佛淨國。  
歸命佛。悔  
至心悔。悔自從无始。受身來。恒以十惡加衆生。不孝父母。謗言毀  
造。住五逆。不善業。以是來。罪同緣故。蒙想願倒。生縛縛。應受无  
量生。先苦。廣禮懺悔。願咸除滅。悔。至心歸命。阿彌陀佛。  
至心勸請。請佛大慈。无量壽。恒以名。慧悲。哀衆生。有莫不  
如。見。求。往生。无  
大慈海王。救群生。離諸苦。勸請市住。轉法輪。勸請。至心歸命。阿  
彌陀佛。至心隨喜。應。即已。更懷嫉妬。我。憐。及。遂。由。生。後。以。懷。甚  
毒。言。大。梵。燒。智。慧。  
慈。善。根。今日。思。惟。始。離。悟。發。大。精。進。隨。喜。已。至。心。歸。命。  
阿。彌。陀。佛。  
至心。迴。向。流。浪。子。界。內。疲。乏。入。胎。獄。生。已。歸。老。死。沉。沒。於。苦  
海。我。今。終。此。智。迴。生。安。樂。國。迴。向。已。至。心。歸。命。阿。彌。陀。佛。  
至心。發。願。願。捨。胎。藏。邪。住。生。安。樂。國。迴。向。請。佛。无。量。壽。佛。  
此。本。國。諸。如。來。法。身。已。見。諸。衆。生。由。此。已。清。台。衆。生。

身奉觀諸如是賢聖三復聖德神通力故情苦衆生  
 宣法如是我願之如是發願已至心歸命向諸佛  
 萬德依天親菩薩願往生禮讚得甘露後夜時禮懺周旋  
 南无至心歸命禮西方阿彌陀佛世尊我心 歸命生盡十方  
 无礙光如來願生安樂國願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至心歸命禮東方阿彌陀佛 觀彼世世相 勝過三身道  
 光寬如唐二廣大无邊際 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至心歸命禮南方阿彌陀佛 行道大慈悲 出世善作生  
 淨光明滿三如鏡日月輪 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至心歸命禮西方阿彌陀佛 俗諸惡寶生 具三妙莊嚴  
 元始光焰熾明治暗世間 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至心歸命禮西方阿彌陀佛 寶華千万種 妙處隨流泉  
 微風動花若交臂光光轉 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至心歸命禮北方阿彌陀佛 宮殿諸樓閣 觀十方无礙  
 難樹異光色 寶樹遍圍繞 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至心歸命禮西方阿彌陀佛 元量寶衣塔 羅網遍虛空  
 檀栴玲藏寶宣生妙法音 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至心歸命禮西方阿彌陀佛 梵音悟深達 疾好聞十方  
 宣法如是我願之如是發願已至心歸命向諸佛  
 願共諸衆生 往生安樂國



234 233 232 231 230 229 228 227 226 225 224 223 222 221 220 219 218 217

正覺何影施法王善住持 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至意歸命礼西方阿彌陀佛 如來淨華最 正覺花化生  
 受樂佛法味 稱三昧為食 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至意歸命礼西方阿彌陀佛 永離身苦惱 受樂清光勝  
 大衆喜報象 等元說像名 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至意歸命礼西方阿彌陀佛 女人及根缺 二衆種不生  
 衆生所願樂 一切能滿足 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至意歸命礼西方阿彌陀佛 元量天宮主 彼妙淨華重  
 相好光一尋 色像起群生 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至意歸命礼西方阿彌陀佛 天人不動衆 清淨智海生  
 如須弥山王 勝妙光過者 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至意歸命礼西方阿彌陀佛 天人丈夫衆 恭敬繞瞻仰  
 雨天樂華衣 妙香等供養 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至意歸命礼西方阿彌陀佛 安樂國清淨 常轉无旋輪  
 一念及一時 刹登諸生 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至意歸命礼西方阿彌陀佛 願共諸衆生 往生安樂國  
 能令速滿三 功德大寶祿 願共諸衆生 往生安樂國  
 南无至意歸命礼西方阿彌陀佛 義慈愛護我 令法種增長  
 此是度生主 願共諸衆生 往生安樂國

252 251 250 249 248 247 246 245 244 243 242 241 240 239 238 237 236 235

[illegible]



[illegible]

無事處靜不退為明定。問成前生華來斯初發。新共諸衆生  
法生女樂回

由光至三昧合礼  
光輝較映念宜可尋性天未香蓮悟人志欲急安  
新共諸衆生  
法生女樂回

六時聞告令守慈花位相有元不立言清有甚迷。新共諸衆生  
法生女樂回

普為惡福感令滅五院毀切已至佛念非使消。新共諸衆生  
法生女樂回

為此變轉風好樂岸願俱行通易寧結聖果。新共諸衆生  
法生女樂回

珠色仍為水金光即是量到將華自散隨須美滿。新共諸衆生  
法生女樂回

能思更在後飛空卓健來真心能回復有善伴同遊。新共諸衆生  
法生女樂回

流字與求悅目妙花雲因生機微識普喜聖親公。新共諸衆生  
法生女樂回

樂充充廢道廣達不歸關如何貪玉濁安按大自焚。新共諸衆生  
法生女樂回

由光至三昧合礼  
查重天人願亦中侍有有難忘四面寶樹毗盧七寶樹。新共諸衆生  
法生女樂回

經步遙地久得少去羣難早覺輪轉願西望心女。新共諸衆生  
法生女樂回

地才老極度風長是康清字言有心華空坐一祿城。新共諸衆生  
法生女樂回

由光至三昧合礼  
氣陰靈攝礼今法種增長此世及後生願伸南惜登。新共諸衆生  
法生女樂回

由光至三昧合礼  
小給明定下五道現光中悲引憶危人師牛本彩。新共諸衆生  
法生女樂回

口宣猶在定心靜更飛通酬名符額注日發榮分華取。新共諸衆生  
法生女樂回

身花標元上身分餘有像動搖諸寶國侍連一金蓮。新共諸衆生  
法生女樂回

由光至三昧合礼  
願共諸衆生  
法生女樂回



306 305 304 303 302 301 300 299 298 297 296 295 294 293 292 291 290 289

南无至勝師命礼南方極樂世界諸菩薩摩訶薩清淨大海衆  
南无至勝師命礼西方無量壽佛如來世尊諸菩薩摩訶薩  
南无至勝師命礼北方阿彌陀佛觀自在菩薩摩訶薩廣長平衆寶成  
眾大願莊嚴起三諸佛剎最爲殊勝國陀方大海衆寶勸解救苦等  
南无至勝師命礼南方阿彌陀佛地下莊嚴七寶幢无量无边光飾數  
百八面百寶成月優美光明無量無生寶國天王太子一切寶流注花  
行者傾心讚歎瞻禮種種入西方願共諸衆生往生安樂國  
南无至勝師命礼南方阿彌陀佛地土莊嚴无極金銀赤青非正遊  
許區願智巧莊嚴普度人救垂上寶地寶毫散一二光成妙寶臺  
臺中寶樹十方能臺側百億寶寶樹圓願共諸衆生往生安樂國  
南无至勝師命礼西方阿彌陀佛一一臺上宝主千莊嚴寶華蓮毛彩  
八種清風于高山隨時鼓樂應機有樓首三千諸寶羅行徑那樓觀  
唯除勝覺而憶念三昧无為尸位祿願共諸衆生往生安樂國  
南无至勝師命礼西方阿彌陀佛寶圓寶林諸寶樹寶華寶葉寶雲  
或於十寶衣袂或有百萬寶芬散流行行相續寶相以色香不同无二如

南无至勝師命礼南方阿彌陀佛觀自在菩薩摩訶薩廣長平衆寶成  
眾大願莊嚴起三諸佛剎最爲殊勝國陀方大海衆寶勸解救苦等  
南无至勝師命礼南方阿彌陀佛地下莊嚴七寶幢无量无边光飾數  
百八面百寶成月優美光明無量無生寶國天王太子一切寶流注花  
行者傾心讚歎瞻禮種種入西方願共諸衆生往生安樂國  
南无至勝師命礼南方阿彌陀佛地土莊嚴无極金銀赤青非正遊  
許區願智巧莊嚴普度人救垂上寶地寶毫散一二光成妙寶臺  
臺中寶樹十方能臺側百億寶寶樹圓願共諸衆生往生安樂國  
南无至勝師命礼西方阿彌陀佛一一臺上宝主千莊嚴寶華蓮毛彩  
八種清風于高山隨時鼓樂應機有樓首三千諸寶羅行徑那樓觀  
唯除勝覺而憶念三昧无為尸位祿願共諸衆生往生安樂國  
南无至勝師命礼西方阿彌陀佛寶圓寶林諸寶樹寶華寶葉寶雲  
或於十寶衣袂或有百萬寶芬散流行行相續寶相以色香不同无二如

324 323 322 321 320 319 318 317 316 315 314 313 312 311 310 309 308 307

等量廣慈十方枝條相觸莫元願共諸衆生往生安樂國  
南无至勝分礼西方阿彌陀佛七重瓊網七宝宮綺竿迴光相映發  
化天童子皆各迎繆然離光臨日月行行寶華色千般華散香芬雲輪  
葉曼光成蒙育玉度淨得剎現光遍願諸衆生往生安樂國  
南无至勝分礼西方阿彌陀佛身如蓮花寶蓋寶鬘金沙流華寶寶蓮花  
士由寶王等寶莊嚴寶樹寶樹連福水池寶寶樹開散觀樂護持拍  
寄慈有緣同行者努力翻迷還在家願共諸衆生往生安樂國  
南无至勝分礼西方阿彌陀佛一金總髮道上寶樂寶樓十方便  
諸天太子散香華他方菩薩如喜來元光遍照打鼓普救眾生  
風樹樹皆迎聖云歡讚三尊元有悲願共諸衆生往生安樂國  
南无至勝分礼西方阿彌陀佛故施令願華主座一切衆寶以為成  
量上品雜寶璽寶蓮寶頸真珠最光明通達妙法無不遍  
表在吉祥想念終時伎樂如三昧願共諸衆生往生安樂國  
南无至勝分礼西方阿彌陀佛通法界啟現衆生心相中  
是故勸世常親奉依心起相本真空真俗寶像應華座一解具微國極  
寶樹三身華遍滿風鈴樂所共共高願共諸衆生往生安樂國  
南无至勝分礼西方阿彌陀佛能化身象金山相對光明堅十方  
唯有合供亦尤備當知每願敬為設十方如是時諸牛耕名爲意方  
則彼善善聞妙法十地願行月六數願共諸衆生往生安樂國



[illegible]

勿謂此言無益也。各都安稱散名佛化。佛子。凡有尊位人。念願心不廣達。  
 三業。郭守周勤于時。能登善。願於諸衆生。往生安樂國。  
 若老惡。願令礼由。可好。得受。獲。寶。通。願。一。遍。并。為。同。集。集。得。金。滿。  
 得。聞。道。者。總。應。求。念。念。是。主。示。對。以。口。直。數。會。說。法。元。願。約。自。然。知。  
 七。賢。聖。道。意。非。徒。和。會。校。許。慈。心。休。此。質。觀。音。是。至。興。表。被。  
 級。亦。應。宣。述。法。家。酒。更。校。記。号。元。為。如此。道。毫。不。慳。愛。  
 五。今。不。去。待。何。特。願。於。諸。衆。生。往。生。安。樂。國。  
 南。无。惡。願。令。礼。要。方。向。修。得。果。隨。而。受。敬。令。法。種。殖。長。  
 此。世。及。後。生。願。件。清。梅。發。願。共。諸。衆。生。往。生。安。樂。國。  
 南。无。惡。願。令。礼。要。方。向。修。得。親。音。菩。薩。普。薩。清。淨。大。海。波。  
 普。為。傳。教。及。善。如。觀。法。界。衆。新。除。邪。同。律。生。可。許。隨。佛。因。緣。歡。喜。  
 上。品。懺。悔。數。即。等。同。則。須。求。十。字。眼。神。明。中。取。生。便。護。下。其。廣。者。就  
 有。四。上。主。身。功。德。或。對。十。字。佛。成。對。金。利。華。之。金。財。入。之。福。壽。  
 事。又。十。上。主。身。之。二。項。金。主。衆。生。主。身。外。向。欲。求。懺。悔。每。有。三。品。上。下。  
 上。品。懺。悔。者。身。亡。北。上。區。區。眠。坐。而。有。名。上。品。懺。悔。中。品。懺。悔。者。近。身。  
 舉。行。使。走。礼。狀。服。中。區。區。有。名。中。品。懺。悔。下。品。懺。悔。者。雖。覺。水。火。燒。者。  
 動。衣。下。品。懺。悔。多。三。類。有。老。少。男。女。小。兒。婦。女。分。別。不。同。過。今。生。家。族。  
 安。全。皆。令。乃。呈。前。若。所。厚。敬。微。心。能。解。脫。計。斷。有。不。問。久。近。可。有。王。  
 新。授。官。則。正。左。不。知。此。從。健。可。交。十二。將。軍。主。持。足。元。靈。毫。不。作。有。能。知。  
 難。不。請。流。淚。泣。血。等。位。  
 相。莫。心。徹。到。者。可。信。回。



天龍八部法界衆生復前大衆華嚴經云下卷  
雲憫悔從元始已來乃至今身受害一切三寶師信  
父母六親眷屬善知識法界衆生不可知教偷盜  
一切三寶師信父母六親眷屬善知識法界  
衆生物不可知教於一切三寶師信父母六親眷  
屬善知識法界衆生上起邪心不可知教妄語  
欺誑一切三寶師信父母六親眷屬善知識法  
界衆生不可知教綺語調弄一切三寶師信  
父母六親眷屬善知識法界衆生不可知教惡  
口罵辱誹謗毀譽一切三寶師信父母六親  
眷屬善知識法界衆生不可知教兩舌鬬  
亂破壞一切三寶師信父母六親眷屬善知  
識法界衆生不可知教成破五戒八戒十戒  
十善戒二百五十戒五百戒菩薩三聚戒十  
元盡戒乃至一切戒及一切威儀戒等自作教  
他見作隨善不可知教如是等衆罪之如十方  
大地元邊微塵元數我等作罪之元造元數虛  
空元邊我等作罪之復元造法界元邊之  
如上法元邊之如上地元邊之如上如是等

396 395 394 393 392 391 390 389 388 387 386 385 384 383 382 381 380 379

如土法元道之世上大元道世上女上女上  
罪上至諸菩薩下至聲聞緣覺前不能知  
住佛與佛乃能知我罪之多少今於三寶前  
法界衆生前發露懺悔不敢覆藏往願十方  
三寶法界衆生受我懺悔惟我清淨始從今日  
皈依佛法界衆生信邪歸正發菩提心慈心相  
向佛祖有作善提者屬作士其善知識同生阿  
弥陀佛國乃至成佛如是等罪永新相續更  
不教作懺悔已至此端命爾懺悔悔處發願云  
若五三合字三面向西十掌誦咒懺悔觀音聖王諸菩薩請  
持大悲咒及念六字明經是主凡夫欲祈禱重輪迴二道者不可  
令今日遇金剛懺悔時祇念此經為第一兩念此經過七遍即  
慈悲不殺不盜不淫不妄不瞋不癡不憍不慢不嫉不怨不害  
悲相道此語云示願者本身相親可共修善法多修善法多清淨心  
嚴密利道此語云示願者本人親友近親骨肉父母兄弟姊妹  
致有嗔怒得見其體以來五次有頭發即時稱念禮懺悔咒  
此佛願如有何功德則盡奉白施佈以此功德與一切眾生  
公平無私主受重承利合之下五加是十條生行之有衆生念仍并  
此律願生者欲即身還世五加是十條權發行若居行世者若居  
卧坐若居夜一四香下三堂要緊神佛受之文如親行之云  
凡念金剛行者復此三句五加是十條重言千遍隨後行者不得  
行住坐臥一向持家若志意疲倦常不離行法令所有斯勝金剛懺  
悔行者應隨至一心性又云重言千遍威我佛十萬那由他諸  
苦下至十惡業不生者不取年位敬我佛三句百次生佛當心心  
願不退衆生福金如母注生又云如母注生三百次生佛當心心  
懺悔者應數持名号云一日三次乃至七日一禮拜不計今故於時  
可於造佛諸聖眾現在其前此人懺悔不墮罪障得往生彼國得  
普舍利非我竟足利哉如是若有報生明於是若虛空而欲領生  
彼國以下諸果亦如此行持等諸佛面前而求及上下一切功德  
可沙等諸佛皆共平回出十二月初四日二十七年十二月廿八





## 第四章 七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』攷

## はじめに

善導（六一三―六八二）集記『往生礼讃偈』の本朝将来年次が奈良朝まで遡ることは正倉院文書によって確認されており、以後源信（九四二―一〇一七）撰『往生要集』、源隆国（一〇〇四―一〇七七）編『安養集』等に引用がみられ、法金剛院蔵『大小乗経律論疏記目錄』<sup>(2)</sup>、真福寺蔵『阿弥陀仏経論並章疏目錄』<sup>(3)</sup>、永超（一〇一四―一〇九五）撰『東域伝燈目錄』<sup>(4)</sup>に採録される等、平安時代には本書の受容が確認されているが、実際に現存する最古の部類は「建暦三年太歳癸酉十月初三日畢」の奥書を有する京都誓願寺所蔵の写本一帖<sup>(5)</sup>（以下、誓願寺本）、高田専修寺所蔵の版本一帖<sup>(6)</sup>（以下、専修寺本）、京都大学附属図書館所蔵の建長三年版本一帖<sup>(7)</sup>（以下、京大本）等、何れも鎌倉時代初中期の遺品である。これは本書の流布が法然（一一三三―一二二二）浄土教の隆盛に起因することを示唆するものと考えられる。

このようなテキストの現存状況の中、近年名古屋市中区大須、稲園山七寺（正覚院長福寺）所蔵の一切経調査によって発見された『阿弥陀往生礼仏文』一卷の存在は注目すべきものである。本書は巻首を欠き、奥書・訓点も認められず、その来歴は明かでないが、『往生礼讃偈』の内容を有する古写本であることが廣川堯敏によって紹介されており（後述）、七寺一切経の書写年次よりすれば、本書は誓願寺蔵本等の鎌倉時代初中期の遺例に先行するものと考えられる。

ただし留意すべき点は『往生礼讃偈』の内容を有する本書の系譜を、直ちに『往生礼讃偈』とは認知できない事である。善導集記『往生礼讃偈』は唐代に盛行したと考えられ、諸經典にみられる礼懺儀を上下二巻に集録した智昇（一七三〇）撰『集諸経礼懺儀』の巻下には、その全文が収録されている。その為『集諸経礼懺儀』成立（七三〇年以前）以降、『往生礼讃偈』の本文を有するテキストとして『往生礼讃偈』と『集諸経礼懺儀』巻下の二つが併存することとなる<sup>(9)</sup>。なお智昇は後者を自身編の『開元釈教録』巻一九・二〇「入蔵録」に採録しており、以降本目録が大蔵経編纂の指針として踏襲された為、中国・朝鮮開版の版本大蔵経や、『開元釈教録』を範とした唐、西明寺沙門円照編『貞元新定釈教目錄』巻二九・三〇「入蔵録」を台帳として書写された、日本の平安鎌倉期の一切経においても五点の現存が確認されている<sup>(10)</sup>。

このように『往生礼讃偈』の伝播経路としては概念上『往生礼讃偈』単行本、『集諸経礼懺儀』卷下（単行本）、『集諸経礼懺儀』卷下（入蔵本）の三つが想定されるが、<sup>〔1〕</sup>それに加えて『集諸経礼懺儀』卷上や敦煌写経からは『往生礼讃偈』が六時の各礼讃毎に別行し流布していたことも窺え、<sup>〔2〕</sup>複数の伝播経路の存在や儀礼テキストとして実践に供されるといった事情から、『往生礼讃偈』の系譜や変遷を探るのは困難であり、本書『阿弥陀往生礼仏文』も未だ確たる位置付けをみていない。そのような困難を認識しつつも、本章では従来確認されている『往生礼讃偈』諸本と対照することにより、相対的に本書の位置付けを試みたい。

以下、原本調査に基づく書誌情報を略述し、次に先行研究を踏まえた上で、現存する『往生礼讃偈』諸本との対照を行い、本書の特質を明確にする。その特質から諸本間における本書の位置を同定し、最後にその資料価値に言及したい。

## 第一節 書誌情報

本書の書誌事項は、既に第八十一回大蔵会展観目録『浄土教と平安写経・七寺の世界』解題（五四頁、一九九七）において略述されているが、ここでは筆者の実見（二〇〇五年八月二四日の七寺一切経調査）による書誌情報を記す。

名古屋市中区大須、稲園山七寺（正覚院長福寺）所蔵の写本。紙本墨書。

**装訂** 卷子本一卷      **軸** なし<sup>〔3〕</sup>

**料紙** 楮紙打紙（黄檗）

**界線** 第一紙—第一七紙 天地朱界縦墨界

第一八紙—第二四紙 天地縦朱界

卷首欠 現存二四紙 一紙二七行 一行一七字前後

法量〈第二紙〉 紙高二六・一 cm 紙幅五三・四 cm

界高二〇・五 cm 界幅 二・〇 cm

外題・内題 卷首を欠く為、確認不能

後補（卷首欠損以降）裏打紙の端裏に「阿弥陀往生礼佛文」（白墨）、「甲第二」（墨）と打書あり

尾題 「阿弥陀往生礼佛文一卷」

奥書 なし

書写年次は未詳。第一八紙以降に『大般若経』用の料紙（天地縦朱界）が用いられていることから、本書書写は『大般若経』書写終了（承安五年七月）以降であり、『大般若経』以外の一切経・聖教と同様の安元二年—治承四年（一一七六—一一八〇）の間と推測される<sup>(14)</sup>。

書写者は不明。前掲『浄土教と平安写経・七寺の世界』の解題（五四頁）には、『往生浄土伝』卷上中下と同筆である旨が指摘されている。

なお『往生浄土伝』卷中（九—一〇紙）、卷下（一一—九紙）も、本書と同様に『大般若経』用の料紙を用い書写されている<sup>(15)</sup>。

本書は『往生礼讃偈』序文、身業礼拝門を説く中の「恭敬合掌香花……」（『大正蔵』四七、四六六中、九行）以降が現存しており、首欠部は四七七字であることが知られる<sup>(16)</sup>。これを本書の書式（二行一七字詰）に換算すると二八行に相当するが、現存一紙目が二〇行残存していることを勘案すれば、首欠部は一紙と七行分であることが推定される。

本書名（尾題「阿弥陀往生礼佛文」）は七寺一切経書写の指針となつたと考えられる所謂古本『貞元録』<sup>(17)</sup>「入蔵録」中に認められず、また本書とは別に、七寺一切経中には『集諸経礼懺儀』卷下が現存している<sup>(18)</sup>。これらのことから、本書は狭義の七寺一切経とは別個の概念である聖教（章疏）として書写されたものと考えられるが、本書料紙の仕様が七寺一切経の様式（『大般若経』…天地縦朱界、その他の經典…天地朱縦墨界<sup>(19)</sup>）から逸脱していることは、これを支持するものである。

本書には訓点・博士等は附されておらず、その形態上から、実際の行儀に用いられた形跡は見出せない。

なお本書には誤写と思しき箇所がままみられるが、単純に魯魚章草の誤りとは考え難いものとして「随」を「理」とする（五例）、「攝」を

「折」とする(二一例)、「聲」を「者」とする(四例)といった傾向がみられる。<sup>(20)</sup>これらの誤写が本書書写の段階で発生したのか、或いは、既に藍本がそうであったのかは定かでないが、このような誤写の傾向からすれば、本書の藍本は版本ではなく写本であった蓋然性が高いと考えられる。

## 第二節 本書の位置付け

### 一、先行研究の梗概

『往生礼讃偈』諸本中における本書の位置付けを考察するに先立ち、本書に關説する先行研究を概観したい。

先ず本書を紹介された廣川堯敏「七寺藏『阿弥陀往生礼仏文』について」(『七寺叢書』五)は、『往生礼讃偈』に関する写本として本書以下、ペリオ将来本(伯二七三、伯三八四、伯二九六三、伯二〇六六)、スタイン将来本(斯五三二七、斯二六五九、斯二五五三、斯二五七九)、北京本<sup>(21)</sup>、大谷探検隊将来本の二種をあげ、それらを各六時礼讃毎に分類された上で、『集諸經礼懺儀』卷上・下(『大正藏』四七所収本)、『浄土宗全書』所収本(底本は元禄七年刊本。以下、浄全本)と対校され問題点について論じ、

より善導の撰述時点に近い『往生礼讃』の原形が少しずつ明らかになったのではなからうか。(中略)これまでの調査研究の成果をもとに、  
現行流布本『往生礼讃』の完全・詳細な校訂本の完成が可能となったといえよう。  
(『七寺叢書』五、七三二頁)

と結論されているように、『阿弥陀往生礼仏文』と浄全本を対比され、その相違に關して敦煌写本を参照することで、浄全本の改訂箇所を比定し、より善導の撰述時点に近い『往生礼讃偈』の原形を遡求するものである。この点において廣川の論攷は大きな成果を上げているが、『阿弥陀往生礼仏文』自体の書誌情報や系譜に關しては言及されておらず、その為、浄全本との相違箇所の有する意味は不明瞭と言える。本書の位置付けを明確にすることは、廣川の論考を補完するものとなる。

廣川堯敏による紹介以降、本書を『往生礼讃偈』のテキストとして検討の対象とした研究は僅少であるが、<sup>(2)(2)</sup> 其中で齊藤隆信『中国浄土教儀礼の研究——善導と法照の讃偈の律動を中心として——』<sup>(2)(3)</sup> は、本書の系譜に言及するものとして注目される。

齊藤隆信は『往生礼讃偈』の諸本を一旦、

A. 中国伝存 ①入蔵本『往生礼讃偈』（『集諸経礼懺儀』所収本）

②非入蔵本『往生礼讃偈』（各種敦煌写卷）

③『五会法事讃』・守屋本・敦煌石室別行本

B. 日本伝存 ①正倉院『聖武天皇宸翰雜集』・七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』

②浄土宗・真宗相伝の諸写刊本（流布本系統）

（齊藤『前掲書』二一九頁）

と二分された上で、<sup>(2)(5)</sup> 近体詩として評価し得る彦琮・善導の偈（晨朝礼讃・日中礼讃、並びに善導により改作されたと考えられる無常偈）における用字を校讎され、詩律学の観点から中国系統（韻律による用字取捨本、【A. ①②③・B. ①】）と、日本浄土教各宗伝承の流布本系統（語義による用字取捨本、【B. ②】）に分類し得ることを明らかにされており、本書に関して、

七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』は、入蔵された『礼懺儀』の系統に属す写卷であることから、日本伝存であつても中国伝存系統に含められるようである

（齊藤『前掲書』二二〇頁）

と指摘されている。

齊藤隆信の指摘通り『阿弥陀往生礼仏文』における韻字の配置は概ね正しい。<sup>(2)(6)</sup> 彦琮、晨朝礼讃から一例をあげれば、以下の通り（（ ）内に『廣韻』による韻目（○平字、●仄字、◎韻字）を示す）。



【第一三偈、第五句】

『集諸経礼懺儀』卷下 鳥化、珠光転 (●●○○●●)

『往生礼讃偈』 鳥華、珠光転 (●○○○●●)

【第一六偈、第八句】

『集諸経礼懺儀』卷下 西望、已心安 (○●●○○○)

『往生礼讃偈』 西方、已心安 (○○●○○○)

【第一七偈、第八句】

『集諸経礼懺儀』卷下 共出一危、城 (●●●○○○)

『往生礼讃偈』 共出一苦、城 (●●●●○○)

これらの箇所において、『集諸経礼懺儀』卷下（増上寺藏思溪版本・高麗初雕本・高麗再雕本・金藏本・七寺本・檀王本・金剛寺本。後掲資料「諸本校異一覧」参照）では、化―光（●―○）、望―心（●―○）、出―危（●―○）と、規格に順じ平仄が配置されているのに対し、鎌倉初中期の『往生礼讃偈』単行本である京大本・専修寺本<sup>(27)</sup>・誓願寺本は、華―光（○―○）、方―心（○―○）、出―苦（●―●）と、二四不同を犯している。これは日本に将来された『往生礼讃偈』単行本が格律（詩律）を考慮せず、文義・語義を基準として校訂がなされた証左であり、日本伝存の『往生礼讃偈』単行本と入蔵本である『集諸経礼懺儀』卷下の、明確な文献的性格の差異を表すものである。

『阿弥陀往生礼仏文』の当該箇所は、「化」「望」「危」と『集諸経礼懺儀』卷下と一致しており、韻律という観点からすれば、『阿弥陀往生礼仏文』は確かに『集諸経礼懺儀』卷下の系統に分類され得るものと言える。

ただし、齊藤隆信の考察は、詩律学の観点からなされたものであり、当然その検討対象は近体詩として評価し得る彦琮・善導の偈（晨朝礼讃・日中礼讃、並びに善導により改作されたと考えられる無常偈）に限定されるものである。

## 二、先行研究の検証

ここでは一旦、詩律の視点を離れ、齊藤隆信の検討対象外である、日没礼讃・初夜礼讃・中夜礼讃・後夜礼讃を対象として、『阿弥陀往生礼仏文』を諸本と比較することにより（後掲資料「諸本校異一覧」参照）、本書を『集諸経礼懺儀』系統に位置付ける齊藤説を改めて検証していきたい。対照に際し使用した略号は以下の通り。

### 『阿弥陀往生礼仏文』 【阿】

『集諸経礼懺儀』卷下 【初】高麗版初雕本、【再】高麗版再雕本、【廣】金版廣勝寺本、【七】七寺藏本、

【思】増上寺藏思溪版本、【檀】檀王法林寺藏本、【金】金剛寺藏本。

### 『往生礼讃偈』

【往】京大本、専修寺本、誓願寺本。

なお【七】【廣】【初】【再】の所謂第一類藏経本が一致する場合は【一】と記した。

便宜上（ ）内に『集諸経礼懺儀』卷下（『大正藏』四七所収本）の当該頁を記した。

### ①日没礼讃、第一七・一八偈（四六八頁、上段）

【阿】	南無西方極樂世界觀世音菩薩	摩訶薩	願共衆生咸歸命	故	「
	南無西方極樂世界大勢至菩薩	摩訶薩	願共衆生咸歸命	故	「
【一】	南無西方極樂世界觀世音菩薩	「	願共衆生咸歸命	故	我頂礼生彼国
【思】	南無西方極樂世界大勢至菩薩	「	願共衆生咸歸命	故	我頂礼生彼国
【往 <sup>30</sup> 】	南無西方極樂世界觀世音菩薩	「	願共衆生咸歸命	故	我頂礼生彼国
【檀】	南無西方極樂世界大勢至菩薩	「	願共衆生咸歸命	故	我頂礼生彼国
【金】	南無西方極樂世界觀世音菩薩	「	願共衆生咸歸命	故	我頂礼生彼国
	南無西方極樂世界大勢至菩薩	「	願共衆生咸歸命	故	我頂礼生彼国

②日没礼讃、説黄昏偈（四六八頁、中段）

【阿】<sup>(3)</sup>【往】<sup>(1)</sup>【檀】<sup>(3)</sup>【金】<sup>(1)</sup> 諸衆等聴説日没無常偈、

【廣】<sup>(3)</sup>【再】<sup>(1)</sup> 諸衆等聴説黄昏偈、

【七】<sup>(3)</sup>【初】<sup>(1)</sup>【思】<sup>(1)</sup> 「該当文なし」

③初夜礼讃、第二・二三偈（四六九頁、中下段）

【阿】<sup>(3)</sup>【往】<sup>(2)</sup>【檀】<sup>(3)</sup>【金】<sup>(2)</sup> 至心帰命礼 西方極樂世界 大勢至菩薩 願共諸衆生 往生安樂国

至心帰命礼 西方極樂世界 諸菩薩清浄大海衆 願共諸衆生 往生安樂国

【一】<sup>(3)</sup>【思】<sup>(1)</sup> 至心帰命礼 西方阿彌陀仏 大勢至菩薩 願共諸衆生 往生安樂国

至心帰命礼 西方阿彌陀仏 諸菩薩清浄大海衆 願共諸衆生 往生安樂国

④中夜礼讃、第一偈（四六九頁、下段）

【阿】<sup>(3)</sup>【往】<sup>(3)</sup>【檀】<sup>(3)</sup>【金】<sup>(3)</sup> 稽首天人所恭敬 阿彌陀仙両足尊 在彼微妙安樂国 無量仏子衆圍遶

「 願共諸衆生 往生安樂国」

【一】<sup>(3)</sup>【思】<sup>(1)</sup> 稽首天人所恭敬 阿彌陀仏両足尊 在彼微妙安樂国 無量仏子衆圍遶

故我頂礼弥陀仏 願共諸衆生 往生安樂国

⑤後夜礼讃、第一八・一九・二〇偈（四七一頁、上中段）

【阿】

至心帰命礼	西方阿、弥、陀、仏、	観世音菩薩	願共諸衆生	往生安樂国
至心帰命礼	西方阿、弥、陀、仏、	大勢至菩薩	願共諸衆生	往生安樂国
至心帰命礼	西方阿、弥、陀、仏、	諸菩薩清浄大海衆	願共諸衆生	往生安樂国

【一】【思】【往<sup>(3)</sup>】【檀<sup>(4)</sup>】【金】

至心帰命礼	西方極、樂、世、界、	観世音菩薩	願共諸衆生	往生安樂国
至心帰命礼	西方極、樂、世、界、	大勢至菩薩	願共諸衆生	往生安樂国
至心帰命礼	西方極、樂、世、界、	諸菩薩清浄大海衆	願共諸衆生	往生安樂国

これらの相違箇所は一文字単位の誤脱と異なり、本書の系譜を探る上での端緒になると考えられる。これらの相違よりすれば、本書が七寺本（開宝蔵本の転写本）、金蔵、高麗蔵（初雕本・再雕本）、宋版（思溪版）等、版本大蔵経所収の『集諸経礼懺儀』卷下からの転写本とは考え難い<sup>(3)(5)</sup>。また、②、③、④に関しては、『往生礼讃偈』单行本（京大本・専修寺本・誓願寺本）、並びに『集諸経礼懺儀』卷下（檀王本・金剛寺本）との一致がみられ、ここからは上述の齊藤説とは異なり、版本大蔵経本『集諸経礼懺儀』卷下よりも、日本伝存の『往生礼讃偈』单行本に近接するという仮説が導き出され注目される。

### 三、本書の特質

本書と『往生礼讃偈』（浄全本）との対照は、既に廣川堯敏によって行われているが、廣川の着眼点は敦煌本、並びに『阿弥陀往生礼仏文』と浄全本との相違箇所であり、『阿弥陀往生礼仏文』と浄全本との一致箇所、並びに両者の親近性については何ら言及されていない。そこで、廣川氏とは異なる視点、即ち『阿弥陀往生礼仏文』は版本大蔵経本『集諸経礼懺儀』卷下より、日本伝存の『往生礼讃偈』单行本に近接する、との仮説に基づき、本書と日本伝存の『往生礼讃偈』单行本において共通する校異に注目したい。

以下、齊藤隆信の検討範囲外である初夜・中夜礼讃において、『阿弥陀往生礼仏文』と『往生礼讃偈』単行本（京大本・専修寺本・誓願寺本）の校異が一致する中で、注目すべき箇所を取りあげる。なお初夜礼讃に関しては伯三八四一<sup>(36)</sup>を、中夜礼讃に関しては伯三八四一、斯五二二七<sup>(37)</sup>、北敦一八九七（北〇一七八・秋九七）、北敦五四八八<sup>(38)</sup>（北八五〇三・菓八八）との異同も併せて示す（略号、頁表記は前述同様）。

初夜礼讃 冒頭（四六八頁、下段）

【阿】 【往<sup>(40)</sup>】 【伯三八四一】

第二比丘善導謹依大乘經。採集要文以為礼讃偈。二十三拝。

【一】 【思】 【檀】 【金】

第二比丘善導謹依大乘經。採集要文以為讃偈。二十三拝。

第四偈（四六九頁、上段）

【阿】 【往<sup>(41)</sup>】 【檀】 【伯三八四一】

十方仏刹中 菩薩比丘衆 窮劫不可計 皆当得生彼 願共諸衆生

往生安楽国

【一】 【思】 【金】

十方仏刹中 菩薩比丘衆 窮劫不可計 皆当得往生 願共諸衆生

往生安楽国

第一〇偈（四六九頁、中段）

【阿】 【往<sup>(42)</sup>】 【伯三八四一】

至彼嚴浄国 便速得神通 必於無量尊 受記成等覺 願共諸衆生

往生安楽国

【一】 【思】 【檀】 【金】

至彼嚴浄土 便速得神通 必於無量尊 受記成等覺 願共諸衆生

往生安楽国

第一九偈（四六九頁、中段）

【阿】<sup>(43)</sup>【往】<sup>(43)</sup>【伯三八四一】<sup>(43)</sup>【思】

自信教人信 難中轉更難 大悲<sup>レ</sup>伝<sup>レ</sup>普<sup>レ</sup>化<sup>レ</sup> 真成報仏恩 願共諸衆生

【一】<sup>(43)</sup>【檀】<sup>(43)</sup>【金】

往生安樂国 難中轉更難 大悲<sup>レ</sup>弘<sup>レ</sup>普<sup>レ</sup>化<sup>レ</sup> 真成報仏恩 願共諸衆生

中夜礼讃 冒頭（四六九頁、下段）

【阿】<sup>(44)</sup>【往】<sup>(44)</sup>【伯三八四一】<sup>(44)</sup>

【一】<sup>(44)</sup>【思】<sup>(44)</sup>【檀】<sup>(44)</sup>【金】

第三依龍樹菩薩願、往、生、礼讃偈一十六拜。  
第三依龍樹菩薩願、生、礼讃偈一十六拜。

初偈（四六九頁、下段）

【阿】<sup>(45)</sup>【往】<sup>(45)</sup>【檀】<sup>(45)</sup>【金】<sup>(45)</sup>【伯三八四一】<sup>(45)</sup>  
【斯五二二七】<sup>(45)</sup>【北敦一八七九】<sup>(45)</sup>

【一】<sup>(45)</sup>【思】<sup>(45)</sup>

【北敦五四八八】

阿、弥、陀、仙、兩足尊 在彼微妙安樂国 無量仏子衆圍遶 「  
阿、弥、陀、仏、兩足尊 在彼微妙安樂国 無量仏子衆圍遶 故、我、頂、礼、弥、陀、仏、」  
当該箇所欠損。

第三偈（四六九頁、下段）

【阿】<sup>(46)</sup>【往】<sup>(46)</sup>【檀】<sup>(46)</sup>【金】<sup>(46)</sup>【伯三八四一】<sup>(46)</sup>  
【斯五二二七】<sup>(46)</sup>【北敦一八七九】<sup>(46)</sup>

【一】<sup>(46)</sup>【檀】<sup>(46)</sup>

【伯三八四一】

【北敦五四八八】

面善円浄如満月 威光猶如千、日、月、 声若天鼓俱翹羅 故我頂礼弥陀仏  
面善円浄如満月 威光猶如百、千、日、 声若天鼓俱翹羅 故我頂礼弥陀仏  
面善円浄如満月 威光□如千、日、照、 声若天鼓俱翹羅 故我頂礼弥陀仏  
〔当該箇所欠損〕



これらの箇所においても前述同様『阿弥陀往生礼仏文』と『往生礼讃偈』単行本（京大本・専修寺本・誓願寺本）に共通する校異の殆どが、版本大蔵経本とは異なった表現となっており、本書の本文系統が版本大蔵経本『集諸経礼懺儀』卷下より、日本伝存の『往生礼讃偈』単行本に近接することを示唆している。

なお、本書と京大本・専修寺本・誓願寺本との間にみられた校異の一致の理由を、中国伝存（版本大蔵経本『集諸経礼懺儀』）と日本伝存（『阿弥陀往生礼仏文』、京大本・専修寺本・誓願寺本）という観点より、日本における改訂を求める向きもあろうが、これに関しては当該箇所と敦煌本との対照結果から、『阿弥陀往生礼仏文』と日本伝存の『往生礼讃偈』単行本に共通する校異の淵源が、中国にあることが判明しており、一概にその要因を日本における改訂に求めることは不当と言えよう。

以上、先行研究を踏まえ、『阿弥陀往生礼仏文』を諸本と比較対照することにより、中国系統の『集諸経礼懺儀』卷下と同様に韻律を保持しつつ、版本大蔵経本『集諸経礼懺儀』卷下よりも日本伝存の『往生礼讃偈』単行本に近接する本文系統を有する、という本書の特質が明らかとなった。

#### 四、本書の位置付け

しかし、齊藤隆信による彦琮・善導の偈（晨朝・日中礼讃）の詩律による検討によって、中国系統であることが確認された本書が何故、同じく中国系統に位置する版本大蔵経本『集諸経礼懺儀』卷下より、日本において改訂された『往生礼讃偈』単行本に近接するのであろうか。このような一見奇異に感じられる本書の性質は、現存する『往生礼讃偈』諸本にはみられず、本書が従来確認されている『往生礼讃偈』諸本とは異なる位置を占めることが予想される。それでは本書は現存『往生礼讃偈』諸本の中で那辺に位置付けられるものであろうか。この点を上記の特質から推察していきたい。

本書は何故、日本伝存でありながら中国系統と同様に韻律を保持しているのであろうか。これに関しては本書の書写年次が重要な意味を持つと推察される。

所謂「法然伝」の諸本によれば、『往生礼讃偈』単行本による礼讃の始行は建久三年（一一九二）とされ、また本朝における『往生礼讃偈』

単行本開版の嚆矢は、建暦三年（一二二三）の明信開版である等、本書の流布は善導を弥陀の化身と崇拜し、<sup>49</sup>「偏依善導一師」（『大正蔵』八三、一九上）を標榜する法然浄土教成立以降であると考えられ、善本の希求、儀礼テキストとしての整備等を目的とした意図的なテキストの改訂も、<sup>50</sup>これに連関するものと考えられる。それに対し本書の書写年次は、本章第一節書誌情報で言及したように安元二年から治承四年（一一七六―一一八〇）の間と推測されるが、これは法然浄土教の影響下におけるテキスト改訂に先立つものであり、その為本書は法然浄土教影響下における本文の改訂を受けることなく、本来の韻律を保持するものと考えられる。これは本書の系譜を考察する上で、韻律の保持という事象が『往生礼讃偈』単行本（日本における改訂以前）と『集諸経礼懺儀』巻下との判断材料とはなり得ないことを意味するものである。

本書における韻律保持の要因を入蔵に求め、本書を『集諸経礼懺儀』巻下の系譜に連なるものと認識するならば、「何故『阿弥陀往生礼仏文』（『集諸経礼懺儀』巻下）が版本大蔵経本『集諸経礼懺儀』巻下よりも日本伝存の『往生礼讃偈』（京大本・専修寺本・誓願寺本）に近似するか」という疑問が生じるが、書写年次により本書の改訂を否定するならば、このような疑問を生じることはない。

既に検証した通り、本書は版本大蔵経本『集諸経礼懺儀』巻下の系統とは考え難く、日本伝存の『往生礼讃偈』との間でみられた共通する校異よりすれば、『往生礼讃偈』単行本の系統に比定されるものであり、尾題に認められる「阿弥陀往生礼仏文一巻」という巻数表記も、本書が『集諸経礼懺儀』巻下としてではなく、一巻の単行本として認識されていたことを示唆するものと言えよう。

なおこのような日本における改訂の否定は、本書が韻律以外においても将来以前の本文を伝えていることを意味するものであり、前に述べた本書と京大本・専修寺本・誓願寺本に共通してみられる校異が、概ね敦煌写本と一致することはこの証左と考えられよう。

## おわりに

以上、先行研究を踏まえ、現存する『往生礼讃偈』諸本との対照により明らかにし得た特質から、本書を法然浄土教の影響下におけるテキスト改訂以前の『往生礼讃偈』単行本系統に属するものと位置附けた。その為、本書と以降の日本浄土教各宗伝承の流布本系統との相異箇所就いて敦煌写本を参照する、という廣川堯敏の用いられた手法が、法然門下における改訂箇所の推定、並びに原形への遡求となり

得るのである。ただし改訂箇所<sup>1</sup>の推定に関しては、差異の全てを直ちに法然門下の所行に帰することはできない。

本書と日本浄土教各宗伝承の流布本系統である京大本・専修寺本・誓願寺本との関係は、他の版本大蔵経本『集諸経礼懺儀』卷下と比し明らかに近いものである。ただし『阿弥陀往生礼仏文』を原形として京大本・専修寺本・誓願寺本へ改訂したと考えるには（勿論『阿弥陀往生礼仏文』の誤写や法然門下による改訂等は想定すべきであるが）相違箇所もまみられる。『往生礼讃偈』諸本中において両者は共に『往生礼讃偈』単行本系統と捉えられるが、その関係は原本と改訂本といった同一線上で捉えられるものではなく、異本として捉えられるものであり、京大本・専修寺本・誓願寺本の原形としては、より近似する親本の存在を別個に想定すべきであろう。

はじめに述べたが、日本における『往生礼讃偈』単行本の遺例は、何れも鎌倉初中期以降のものであるのに対し、本書は院政期（一一七六―一一八〇）の古写本であり、国内における現存最古の『往生礼讃偈』単行本という貴重な文化財であるが、日本仏教研究上におけるその学術的価値は、法然浄土教の影響下における改訂以前の形を保持している唯一の『往生礼讃偈』単行本という点にある。更に本書は、将来以前の本文を留めていると考えられることから、日本伝存でありながら中国仏教研究のテキストとしても注目されるものである。この点に関しては、本書の来歴（本書系統の将来年次）が未詳<sup>2</sup>の為、資料としての扱いに注意を要するが、従来『往生礼讃偈』の本文を有する敦煌写本が何れも別行（抄出）・破損等により、部分的にしか確認し得なかったのに対し、巻首を欠くとは言え、本書がその大半を保有している意義は大きい。本書は日本仏教、中国仏教に亘って学術的価値を有する貴重な遺例と言えよう。

本章では『往生礼讃偈』現存諸本との対照において、何れの系統とも一致をみなかった為、その特質から本書を相対的に位置附けたが、その検証の為に『往生礼讃偈』古写本の索求は今後の課題と言える。従来『往生礼讃偈』の伝播とテキスト改訂の問題に関しては敦煌本を中心に行われてきたが、このような現状において、拙論は日本伝存『往生礼讃偈』古写本の資料価値に対する再認識を喚起するものである。

# 註

- 1 藤原猶雪「善導大師本具両疏弘伝考」『史学雑誌』三四卷一〇・一一号、のち同『日本仏教史研究』、松本書店、一九七四）、高橋正隆「善導遺文の書誌研究」、中井真孝「経疏目録より見たる善導著述の流布状況」（共に藤堂恭俊編『善導大師研究』、山喜房仏書林、一九八〇）。
- 2 梶浦晋氏は本目録を、平安時代前期（遅くとも中期）法相宗に係のある人物によつて編集された大寺院の蔵書目録と推定されている（梶浦晋「法金剛院蔵『大小乗経律論疏記目録』について」、牧田諦亮監落合俊典編『七寺古逸經典研究叢書六』中国・日本經典章疏目録、大東出版社、一九八八、以下『七寺叢書』六）。なお成立時期に関して落合俊典氏は真言土砂加持の思想がみられる『遊心安樂道』が採録されていることから十世紀中葉以降の成立と推定されている。（落合俊典「平安時代における入蔵録と章疏目録について」、『七寺叢書』六）。
- 3 落合俊典氏は本目録を一一世紀前半までに成立した天台淨土教の經論章疏目録であり、その撰者を寛印と推定されている（『律宗章疏』・『開元録随要抄』（擬題）・『阿弥陀仏經論並章疏目録』解題、国文学研究資料館編『真福寺古目録集 二』真福寺善本叢刊第二期第一卷、臨川書店、二〇〇五）。
- 4 高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺本東域伝灯目録』高山寺資料叢書第十九冊（東京大学出版会、一九九九）。
- 5 ただしこれは書写奥書ではなく先行する明信開版本（散逸）の本奥書と考えられ、実際の書写年次は『般舟讃』も同様の書式で書写されていることから建保五年（一二一七）、仁和寺における『般舟讃』発見以降と考えられる。赤尾栄慶氏は鎌倉時代初期の書写と判断され、本書を含む淨土三部經并善導五部九卷が納められている菊花散蒔絵経箱に『般舟讃』の一節が蒔絵されていることから『般舟讃』発見直後の書写であると推察されている（京都国立博物館編『古写経―聖なる文字の世界―』作品解説、三二八・三二九頁、二〇〇四）。
- 6 専修寺本については堤玄立、平松令三編『高田専修寺本 善導大師五部九卷』解説二（法蔵館、一九八六）、『定本親鸞聖人全集』九、解説（法蔵館、一九六九）、高橋正隆、前掲註1論文参照。
- 7 京大本については国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀 卷下』（二〇一〇）所収の解題（梶浦晋執筆）を参照。
- 8 その成果は『七寺古逸經典研究叢書』全六巻として上梓されている。七寺一切經の概要については七寺一切經保存会編『尾張史料七寺一切經目録』（七寺一切經保存会、一九八六）、落合俊典「七寺一切經と古逸經典」（牧田諦亮監落合俊典編『七寺古逸經典研究叢書一』中国日本撰述經典（其之一）』、一九九四）、赤尾

栄慶「古写経史から見た七寺一切経―書誌学的アプローチを中心に―」(牧田諦亮監落合俊典編七寺古逸經典研究叢書五『中国日本撰述經典(其之五)・撰述書』、大東出版社、二〇〇〇、以下『七寺叢書』五)を参照。

- 9 以下本章における『往生礼讃偈』諸本」とはこの『集諸経礼懺儀』巻下も含む概念と規定し、『往生礼讃偈』単体についてはこれを『往生礼讃偈』単行本」と表記して区別する。

- 10 本論序章第六節二三頁。

- 11 これらは厭くまで概念上の区分であり、本来本文上に如何ほどの相違があるのかは明らかでない。

- 12 廣川堯敏「敦煌出土善導『往生礼讃』古写本について」(小沢教授頌寿記念『善導大師の思想とその影響』、大東出版社、一九七七)参照。

- 13 七寺一切経の様式よりすれば、本来、黒漆塗朱蓮弁散文様合軸が附されていたと推測される。

- 14 『大般若経』並びにそれ以外は一切経・聖教の書写年次については註8前掲『尾張史料七寺一切経目録』解説「七寺一切経について」参照。

- 15 湯谷祐三「七寺本『往生浄土伝』とその周辺」(『七寺叢書』五)参照。

- 16 『集諸経礼懺儀』巻下(『大正蔵』四七所収本)により算出。

- 17 註8前掲『尾張史料七寺一切経目録』解説五「七寺一切経の編成」、宮林昭彦翻刻「貞元新定釈教目録卷第二十九・卷第三十」(『七寺叢書』六)参照。

- 18 七寺一切経本『集諸経礼懺儀』巻下は「安元三年四月一日午時許書写畢筆師持門房 一交了 榮藝」の奥書を有しており、その体裁からも元禄九―十二年(一六九六―一六九九)における補写補充でないことは明白である。詳細は第二章第一節「書誌情報」を参照願いたい。

- 19 七寺一切経の様式については註8前掲、赤尾論文参照。

- 20 これら以外に「攝」を「投」としたもの、「青」「麦」とするものが各一例ずつみられる。

- 21 塚本善隆『唐中期の浄土教』(図版第五 燉煌出善導往生礼讃 北平図書館蔵)に対し廣川堯敏は「現在中国国家図書館に所蔵されているか否か筆者は確認していない」(同論文)註12)とされる。本書は中国国家図書館蔵北敦八二三八(北八三五〇・服二八)であり(二〇〇六年三月九日、中国国家図書館にて確認)、中国国家図書館編『中国国家図書館蔵敦煌遺書』第一〇一冊所収(北京図書館出版社、二〇〇八、二七五―二七八頁)、『同』(中国国家図書館蔵敦煌遺書・條記目録)二四頁によれば「七〇八世紀。唐写本」とされる。

なお『塚本善隆著作集第四巻 中国浄土教史研究』（大東出版社、一九七六）口絵には「敦煌出土 善導往生礼讃 北京図書館蔵」として『唐中期の浄土教』（東方文化学院京都研究所、一九三三。新訂版、法蔵館、一九七五）図版第五とは異なる大英図書館所蔵斯二五五三（北敦八二二八と本来同一の写巻であり「北敦八二二八+斯二五五三」と間断なく接続が可能）を掲載しており注意が必要である。

22 管見によれば本章で取りあげた齊藤隆信の論攷以外に宮井里佳「善導浄土教の成立についての試論——『往生礼讃』をめぐる——」（荒牧典俊編『北朝隋唐中国仏教思想史』所収、法蔵館、二〇〇〇）があげられる。

23 齊藤隆信『中国浄土教儀礼の研究——善導と法照の讃偈の律動を中心として——』（法蔵館、二〇一五）第三章「善導『往生礼讃偈』における讃偈の律動」（初出は「礼讃偈の韻律——詩の評価とテキスト校訂——『浄土宗学研究』二六、二〇〇〇）

24 彦琮晨朝礼讃に関しては現行流布本、誓願寺本、七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』、『集諸経礼懺儀』、『略本法事讃』、『聖武天皇宸翰雜集』、敦煌本『広本法事讃』（伯二〇六六）、北敦八二二八（北八三五〇・服二八）を、善導日中礼讃に関しては現行流布本、誓願寺本、七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』刊本『集諸経礼懺儀』巻上下、斯二五五三、斯二五七九、斯二六五九、伯二七三二、伯二〇六六、伯二九六三、北敦八二二八（北八三五〇・服二八）を、京都国立博物館蔵守屋孝蔵旧蔵『広本法事讃』巻下を以て検討されている。

25 現存する敦煌写本は何れも断簡である為、本文上から①入蔵本『往生礼讃』（『集諸経礼懺儀』所収本）、②非入蔵本『往生礼讃』（各種敦煌写巻）を分類することは困難である。判断基準としては書写年次（七三〇年以前か）、書体と紙質が考えられるが十全とはいえない。齊藤隆信は「比較的粗悪な料紙で書写され、行取りや字体の乱雑ぶりからして、日常的に用いるために書写された資料であるように感じられる。したがってここでは敦煌写本を一応、非入蔵本としておく」（齊藤『前掲書』第三章、二二八頁。註（49））と書体・紙質により各種敦煌写巻を非入蔵本として位置附けられている。

26 齊藤隆信の検討の中、『阿弥陀往生礼仏文』が規格からはずれている箇所（彦琮晨朝礼讃第十六偈四句「迴」、第七偈二句「園」、第十五偈四句「俠」）は正しい用字「迴」「園」「便」の誤写であろうか。

27 【第一三偈、第五句】四二丁裏（『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二六一頁）。【第一六偈、第八句】四二丁裏（『同上』二六二頁）。

【第一七偈、第七句】四三丁表（『同上』二六二頁）。

28 【第一三偈、第五句】四二丁表（『高田専修寺本 善導大師五部九巻』八八九頁）。【第一六偈、第八句】【第一七偈、第七句】四三丁表（『同上』八九一頁）。



- 29 【第一三偈、第五句】四二丁表、【第一六偈、第八句】四三丁表、【第一七偈、第八句】四三丁表。何れも佛教大学所蔵マイクロフィルム紙焼きによる（以下同様）。
- 30 京大本一四丁表（『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二三三頁）。専修寺本一四丁表裏（『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八三三・八三四頁）。誓願寺本一四丁表裏。
- 31 京大本一六丁裏（『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二三六頁）。専修寺本一六丁裏（『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八三八頁）。誓願寺本一六丁裏。
- 32 京大本二四丁裏（『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二四四頁）。専修寺本二四丁裏・二五丁表（『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八五四・八五五頁）。誓願寺本二四丁裏・二五丁表。
- 33 京大本二五丁表（『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二四四頁）。専修寺本二五丁裏（『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八五六頁）。誓願寺蔵本二五丁裏。
- 34 京大本三六丁裏・三七丁表（『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二五六頁）。専修寺本三七丁表裏（『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八七九・八八〇頁）。誓願寺本三七丁表裏。
- 35 勿論、本書の書写年次（一一七六―一一八〇）と諸版本大蔵経本の開版年次からすれば高麗蔵（再雕本）を藍本とすることは不可能である。
- 36 伯三八四一は法国国家図書館編『法国国家図書館蔵敦煌西域文献』二八、三二四―三二九頁（上海古籍出版社、二〇〇四）による。
- 37 斯五二二七は黄永武主編『敦煌宝蔵』四一、六八―七〇頁（新文豊出版公司、一九八二）による。
- 本断簡についてジヤイルズは「礼阿弥陀仏文 Li a mi to fo wen. Prayer to Amitabha Buddha, by Nagarjuna. Title at end: [阿]弥陀经[A] mi to ching. 2 consecutive frags. End mtd. Good MS. of 8th cent. (?)」(『Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhuang in British Museum』 by Lionel Giles) と八世紀の写本であると推定されている。
- 38 北敦一八九七（北〇一七八・秋九七）は中国国家図書館編『中国国家図書館蔵敦煌遺書』一六、二一〇―二二三頁（江苏古籍出版社、二〇〇六）に、北敦五四八八（北八五〇三・菓八八）は『同書』七四、六二―六三頁（二〇〇七）による。

- 39 『往生礼讃偈』(『大正蔵』所収本)と斯五二二七、北敦一八九七(北〇一七八・秋九七)、北敦五四八八(北八五〇三・菓八八)の校勘については既に盛会蓮『礼阿弥陀仏文』校勘記(『敦煌研究』二〇〇五、第二期)によってなされている。
- 40 京大本一八丁裏(『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二三八頁)。専修寺本一九丁表(『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八四三頁)。誓願寺本一九丁表。
- 41 京大本一九丁裏(『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二三九頁)。専修寺本二〇丁表(『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八四五頁)。誓願寺本二〇丁表。
- 42 京大本二二丁裏(『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二四一頁)。専修寺本二二丁表(『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八四九頁)。誓願寺本二二丁表。
- 43 京大本二三丁裏(『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二四三頁)。専修寺本二四丁表(『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八五三頁)。誓願寺本二四丁表。
- 44 京大本二五丁表(『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二四四頁)。専修寺本二五丁表(『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八五五頁)。誓願寺本二五丁表。
- 45 京大本二五丁表(『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二四四頁)。専修寺本二五丁裏(『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八五六頁)。誓願寺本二五丁裏。
- 46 京大本二五丁裏・二六丁表(『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二四五頁)。専修寺本二六丁表(『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八五七頁)。誓願寺蔵本二六丁表。
- 47 本来同一の写卷である北敦八二二八(北八三五〇)と斯二五五三を接続することで善導日中礼讃の全文に亘る対照が可能となり、そこからは本書と同様の性質が見受けられたが、対照範囲が日中礼讃のみである為判断は保留したい。
- 48 『本朝祖師伝記絵詞』(四卷伝) 卷二。『知恩伝』上。『法然上人伝』(弘願本) 卷四。『法然上人伝絵詞』(琳阿本) 卷四。『拾遺古徳伝絵』卷五。『法然上人伝記』(九卷伝) 卷二下。『法然上人行状絵図』(四十八卷伝) 卷一〇。『法然上人伝』(十卷伝) 卷四。

49

『選択本願念仏集』で「善導是弥陀化身也。爾者可謂、又此文是弥陀直説也」(『大正藏』八三、一九下)と述べられるように、法然浄土教において善導は弥陀の化身とされ浄土五祖の中でも別格である。法然が「浄土三部経」並びに善導の所説を中核に選択本願念仏説を展開しようと意図していたことは、その引用回数からも明確に窺える。

【『選択本願念仏集』における引用回数】(引用回数の内訳を(正引段／私引段)で示した)。

「浄土三部経」	四二(二六／二六)
善導	四一(二二／二〇)
曇鸞	三(〇／三)
道綽	六(一／五)
懷感	五(〇／五)
少康	一(〇／一)

50

『選択本願念仏集』における善導弥陀化身説ほどではないが、文治六年(一一九〇)の東大寺講説『無量寿経釈』『観無量寿経釈』『阿弥陀経釈』には三昧発特の人師である善導を正依とする態度が窺え、また所謂法然の有力門弟・信者の入浄次第は建久元年(一一九〇)以降相次いでいる(『昭和新修法然上人全集』序、八・九頁参照)ことから、このような活動は建久元年(一一九〇)以降盛んになって行くことが推測される。

51

管見によれば木本好信編『奈良朝典籍所載仏書解説索引』(国書索引叢刊三(国書刊行会、一九八九))や諸目録において本書名(『阿弥陀往生礼仏文』、もしくはそれと類推される書名)は見出せなかった。

## 七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』 影印・翻刻

### 凡 例

- 一、本稿は七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』を底本とし、上段に影印、下段に翻刻を配したものである。
- 一、漢字字体は原則として底本の字体に従った。
- 一、抄物書きは旧字体に改め、括弧（「」）で括り示した。
- 一、行取り、文字の大小は底本に従った。
- 一、転倒・補入・見せ消ち等の符号によって訂正されるべき箇所は、訂正後の本文を示すこととした。
- 一、難読の箇所については「■」を用い示した。
- 一、虫損による判読不能箇所は「□」を用い、その字数分を示した。
- 一、読解の便の為、行番号を附し、私意にて句読点を施した。
- 一、行番号の上に「日没」「初夜」「中夜」「後夜」「晨朝」「日中」、及び丸数字を附し、各時礼の始行と礼数を示した。
- 一、内容上誤写と推測される箇所も、私にこれを改めていない。
- 一、脱文があると推測される箇所（421―422行間）には「＊」を挿入し示した。
- 一、542行、546行、585行にみられる、何らかの字の存在（もしくは空格）を示す符号は「、」を用い示した。
- 一、翻刻本文に示しきれない翻刻上の処理や底本の状態等については、「翻刻註」として翻刻末に示した。

(表紙(後補裏打ち紙))



(見返し)



18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

恭敬合掌、香花供養、禮拜彼阿弥陀佛。礼即  
專礼彼佛、畢命為期、不雜餘礼。故名禮拜門。二  
者口業讚歎門。所謂專憶讚歎彼佛身相光  
明、一切聖衆身相光明、及彼國中一切寶莊  
嚴光明等。故名讚歎門。三者意業憶念觀察  
門。所謂專意念觀彼佛、及□□□身相光  
明、国土莊嚴等。如觀經說。唯除眠時、恒憶恒  
念想觀此事等。故名觀察門。  
四者作願門。所謂專心、若書若夜、一切時一切  
處、三業四威儀所作功德、不問初中後、皆須  
真實心中發願願生彼國。故名作願門。五者迴  
向門。所謂專心、若自作善根、及一切三乘五道、一  
九聖等所作善根、深生隨喜。知諸佛菩薩所作  
隨喜、我亦如是隨喜。以此隨喜善根、及已所  
作善根、皆悉與衆生共之、迴向彼國。故名迴向  
門。又到彼國已、得六神通、迴入生死、教化衆生、  
徹窮後際、心无厭足、乃至成佛。亦名迴向門。五  
門既具、定得往生。一一門已上三心亦食、隨起業

(首缺)

- 1 恭敬合掌、香花供養、禮拜彼阿弥陀佛。礼即
- 2 專礼彼佛、畢命為期、不雜餘礼。故名禮拜門。二
- 3 者口業讚歎門。所謂專憶讚歎彼佛身相光
- 4 明、一切聖衆身相光明、及彼國中一切寶莊
- 5 嚴光明等。故名讚歎門。三者意業憶念觀察
- 6 門。所謂專意念觀彼佛、及□□□身相光
- 7 明、国土莊嚴等。如觀經說。唯除眠時、恒憶恒
- 8 念想觀此事等。故名觀察門。
- 9 四者作願門。所謂專心、若書若夜、一切時一切
- 10 處、三業四威儀所作功德、不問初中後、皆須
- 11 真實心中發願願生彼國。故名作願門。五者迴
- 12 向門。所謂專心、若自作善根、及一切三乘五道、一
- 13 凡聖等所作善根、深生隨喜。知諸佛菩薩所作
- 14 隨喜、我亦如是隨喜。以此隨喜善根、及已所
- 15 作善根、皆悉與衆生共之、迴向彼國。故名迴向
- 16 門。又到彼國已、得六神通、迴入生死、教化衆生、
- 17 徹窮後際、心无厭足、乃至成佛。亦名迴向門。五
- 18 門既具、定得往生。一一門已上三心亦食、隨起業



36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19

行不問多少皆名真實業也。應知又勸行四  
脩法用榮三心五念之行速得往生何者為  
四一者恭敬脩所謂恭敬禮拜彼佛及彼切  
聖眾等故名恭敬脩畢命為改悔不中  
止即是七時脩二者無係脩所謂專稱彼  
佛名專念專想專禮專讚彼佛及一切聖  
眾等不雜餘業故名無俱脩畢命為改悔  
不中止即是七時脩三者無間脩所謂相續  
恭敬禮拜稱名讚歎憶念觀察迴向發  
願心心相續不以間業來間故名無間脩又  
不以貪瞋煩惱來間理犯深懺不令隔念  
隔時隔日常使清淨亦名無間脩畢命  
為改悔不中止即是七時脩又菩薩已免  
生死所作善法迴求佛里即是自利教化眾  
生相未來深即是利他然命時眾生悉為  
煩惱繫縛未免惡道生死等苦。理緣起行一  
切善根且速迴願往生彌陀佛國到彼國已更  
无所畏如上四脩自然任達自利利他不具

19 行、不問多少、皆名真實業也。應知。又觀行四  
20 脩法、用榮三心五念之行、速得往生。何者為  
21 四。一者恭敬脩。所謂恭敬禮拜彼佛、及彼一切  
22 聖眾等。故名恭敬脩。畢命為期、誓不中  
23 止、即是長時脩。二者無深脩。所謂專稱彼  
24 佛名、專念專想專禮專讚彼佛、及一切聖眾  
25 等、不雜餘業。故名無俱脩。畢命為期、誓  
26 不中止、即是長時脩。三者無間脩。所謂相續  
27 恭敬禮拜、稱名讚歎、憶念觀察、迴向發  
28 願、心心相續、不以間業來間。故名無間脩。又  
29 不以貪瞋煩惱來間、理犯深懺、不令隔念  
30 隔時隔日、常使清淨。亦名無間脩。畢命  
31 為期、誓不中止、即是長時脩。又菩薩已免  
32 生死、所作善法、迴求佛里、即是自利。教化眾  
33 生、相未來深、即是利他。然命時眾生、悉為  
34 煩惱繫縛、未免惡道生死等苦。理緣起行、一  
35 切善根且速迴、願往生彌陀佛國。到彼國已、更  
36 无所畏。如上四脩、自然任達。自利利他、无不具

54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37

足應知。又如文殊般若云。時一行三昧。唯勸獨處空閑。捨諸亂意。係心一佛。不觀相泉。專稱名字。即於念中。得見彼阿彌陀佛。及一切佛等。問云。何故不令作觀。直遣專稱名字者。有何意也。答曰。乃由衆生障重。境細心麁。識神飛觀難成就。是以大聖悲憐。直勸專稱名字。正由稱名易故。相續即生。問曰。既遣專稱一佛。何相故境現即多。此豈非邪正相交。一多雜現也。答曰。佛齊證。形无二別。縱使念一見多。乖何大道現也。又如觀經云。佛勸坐觀。礼念等。皆須面向西方者。取勝如樹先傾。倒必隨曲。故必有事礙。不及向西者。俱作向西想。立得問。一切諸佛。三身同證。悲智果固。亦應无二。隨方礼念。課稱一佛。亦應得生。何故偏歎西方。勸專礼念等。有何義也。答曰。諸佛所證。平等是一。若以願行來狀。非无因緣。然彌陀世尊。本發深重誓願。願以光明名号。攝化十方。但使信心求念。上盡一

54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37

足。應知。又如文殊般若云。時一行三昧。唯勸獨處空閑。捨諸亂意。係心一佛。不觀相泉。專稱名字。即於念中。得見彼阿彌陀佛。及一切佛等。問云。何故不令作觀。直遣專稱名字者。有何意也。答曰。乃由衆生障重。境細心麁。識神飛。觀難成就。是以大聖悲憐。直勸專稱名字。正由稱名易故。相續即生。問曰。既遣專稱一佛。何相故境現即多。此豈非邪正相交。一多雜現也。答曰。佛齊證。形无二別。縱使念一見多。乖何大道現也。又如觀經云。佛勸坐觀。礼念等。皆須面向西方者。取勝如樹先傾。倒必隨曲。故必有事礙。不及向西者。但作向西想亦得。問。一切諸佛。三身同證。悲智果固。亦應无二。隨方礼念。課稱一佛。亦應得生。何故偏歎西方。勸專礼念等。有何義也。答曰。諸佛所證。平等是一。若以願行來狀。非无因緣。然彌陀世尊。本發深重誓願。願以光明名号。攝化十方。但使信心求念。上盡一

72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55

形、下至十者一聲等、以佛願力、易得往生。是故釋迦、及以諸佛、勸向西方、為別畢耳。亦非是稱念餘佛不能除障滅罪也。應知。若能如上、念念相續、畢命為歸者、十即十生、百即百生。何以故。无外難緣得正念故。與佛本願相應。故不違教故。隨順佛語故。若欲捨專脩雜業者、百時希得一二、千時希得五三。何以故。乃由雜緣札動失正念故。與佛本願不相應故。與教相違故。不隨順佛語故。係念不相續故。憶想間斷故。迴願不懇重真實故。貪瞋諸見煩惱。來間斷故。无有慚愧懺悔心故。懺悔有三。一要二略三廣。如下具說。理意問皆得。又不相續念報彼佛恩故。心生輕慢、雖作業行、常與名利相應故。人我自覆、不親近同行善知識故。樂近雜緣、自障障他往生正行故。何以故。余比自見聞諸方道俗、解行不同、專雜有異、但使專意作者、十即十生。脩雜不至心者、千中无一。此二行得失、如前已訴。仰願一切往生人等、善自思量。已

55 形、下至十者一聲等、以佛願力、易得往生。是故釋  
56 迦、及以諸佛、勸向西方、為別畢耳。亦非是稱念  
57 餘佛不能除障滅罪也。應知。若能如上、念  
58 念相續、畢命為歸者、十即十生、百即百生。  
59 何以故。无外難緣得正念故。與佛本願相應  
60 故。不違教故。隨順佛語故。若欲捨專脩雜業  
61 者、百時希得一二、千時希得五三。何以故。乃由  
62 雜緣札動失正念故。與佛本願不相應故。與教  
63 相違故。不隨順佛語故。係念不相續故。憶想  
64 間斷故。迴願不懇重真實故。貪瞋諸見煩惱  
65 來間斷故。无有慚愧懺悔心故。懺悔有三。亦一  
66 要二略三廣、如下具說、理意問皆得。又不相  
67 續念報彼佛恩故。心生輕慢、雖作業行、常與  
68 名利相應故。人我自覆、不親近同行善知識故。樂  
69 近雜緣、自障障他往生正行故。何以故。余比自  
70 見聞。諸方道俗、解行不同、專雜有異。但使專意  
71 作者、十即十生。脩雜不至心者、千中无一。此二行  
72 得失、如前已訴。仰願一切往生人等、善自思量。已

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73
						②					①		日没				
<p>能令身願生彼国者行住坐臥、必須勵心剋己、晝夜莫廢、畢命為期。止在一形、似如少苦。前念命終、後念即生彼国。七時永劫常受无為法樂、乃至成佛、不經生死、豈非快哉。應知。</p> <p>第一佛勸礼讚阿弥陀佛十二光名、求願往生。一十九拜。當日沒時礼、取中下懺悔亦得。</p> <p>南无釋迦牟尼佛等一切三寶我今稽首礼迴願往生无量壽国。此之一佛、現是今時道俗等師。言三寶者、即是福田无量。若能礼之一拜、即是念報師恩、以成已行。以斯一行、迴願往生。</p> <p>南无十方三世相虚空邊法界微塵刹土中一切三寶我今稽首礼迴願往生无量壽国。然十方虚空无邊、三寶无盡、若礼一拜、即是福田无量、功德无窮。能至心礼之一拜、一一佛上、一一法上、一一菩薩聖僧上、一一舍利上、皆得身口意業解脫分善根、來資益行者、以成已業。以斯一行、迴願往生。</p>																	

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73
己業。以斯一行、迴願往生。	得身口意業解脫分善根、來資益行者、以成	佛上、一一法上、一一菩薩聖僧上、一一舍利上、皆	是福田无量、功德无窮。能至心礼之一拜、一一	然十方虚空无邊、三寶无盡、若礼一拜、即	中一切三寶我今稽首礼迴願往生无量壽国	南无十方三世相虚空邊法界微塵刹土	往生。	拜、即是念報師恩、以成已行。以斯一行、迴願	等師。言三寶者、即是福田无量。若能礼之一	願往生无量壽国。此之一佛、現是今時道俗	南无釋迦牟尼佛等一切三寶我今稽首礼迴	一十九拜。當日沒時礼。取中下懺悔亦得。	第一佛勸礼讚阿弥陀佛十二光名、求願往生。	乃至成佛、不經生死、豈非快哉。應知。	終、後念即生彼国。長時永劫、常受无為法樂、	夜莫廢、畢命為期。止在一形、似如少苦。前念命	能令身、願生彼国者、行住坐臥、必須勵心剋己、晝



已業此其一利通願得生

南无西方極樂世界阿彌陀佛願共衆生咸  
歸命故我頂礼生彼國。問云何故若為阿彌  
陀答曰弥陀經及觀經云彼佛光明无量  
照十方国无有障碍唯觀念佛衆生折  
取不捨故名阿彌陀。彼佛壽命及其人民无  
量无边阿僧祇劫故名阿彌陀。又釋迦  
佛及十方佛讚歎弥陀光明有十二種名普  
勸衆生稱名礼拜相續不斷者現世得无量  
功德命終之後定得往生如无量壽經說云  
其少衆生遇斯光者三垢消滅身意柔軟  
歡喜踊躍善心生焉若在三塗勤苦之處見  
此光明无復苦惱壽終之後皆蒙群脱无  
量壽佛光明顯赫照唯十方諸佛国土莫  
不聞見不但我今稱其光明一切諸佛者聞  
緣覺諸菩薩衆咸共歎譽之復如此若有  
衆生聞其光明威神功德日夜稱說至心不  
斷者隨其所願得生其國常為諸菩薩者聞  
之衆所共歎譽稱其功德佛言我說无量壽

佛名號阿彌陀

91 南无西方極樂世界阿彌陀佛願共衆生咸  
92 歸命故我頂礼生彼國。問云。何故若為阿彌  
93 陀。答曰。弥陀經及觀經云。彼佛光明无量、  
94 照十方国、无所障碍。唯觀念佛衆生、折  
95 取不捨、故名阿彌陀。彼佛壽命、及其人民、无  
96 量无边阿僧祇劫、故名阿彌陀。又釋迦  
97 佛、及十方佛、讚歎弥陀光明、有十二種名、普  
98 勸衆生、稱名礼拜、相續不斷者、現世得无量  
99 功德、命終之後定得往生。如无量壽經說云。  
100 其少衆生、遇斯光者、三垢消滅、身意柔軟、  
101 歡喜踊躍、善心生焉。若在三塗、勤苦之處、見  
102 此光明、无復苦惱。壽終之後、皆蒙解脫。无  
103 量壽佛、光明顯赫、照唯十方、諸佛国土、莫  
104 不聞見。不但我今、稱其光明、一切諸佛者聞  
105 緣覺諸菩薩衆、咸共歎譽、亦復如此。若有  
106 衆生、聞其光明、威神功德、日夜稱說、至心不  
107 斷者、隨其所願、得生其國。常為諸菩薩者聞  
108 之衆、所共歎譽、稱其功德。佛言。我說无量壽

126	⑨	125	⑧	124	123	122	⑦	121	⑥	120	119	118	⑤	117	116	④	115	114	113	112	111	110	109
<p>佛光明威神魏魏殊妙晝夜一切尚不能盡  諸行者當知彌陀身相光明釋迦如來一切說  能想者如觀經云一一光明遍照十方世界念  佛衆生折取不捨今既觀經有如此不思議增  上勝緣攝諸行者何不相續稱觀礼念願往  生也應知</p> <p>南无西方極樂世界无量光佛願共衆生咸  歸命故我頂礼生彼国</p> <p>南无西方極樂世界无邊光佛願共衆生咸  歸命故我頂礼生彼国</p> <p>南无西方極樂世界无礙光佛願共衆生咸  歸命故我頂礼生彼国</p> <p>南无西方極樂世界无對光佛願共衆生咸  歸命故我頂礼生彼国</p> <p>南无西方極樂世界光炎王佛願共衆生咸  歸命故我頂礼生彼国</p> <p>南无西方極樂世界清淨光佛願共衆生咸  歸命故我頂礼生彼国</p> <p>南无西方極樂世界觀歡喜光佛願共衆生咸</p>																							

126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109
歸命故我頂礼生彼国	南无西方極樂世界清淨光佛願共衆生咸	南无西方極樂世界光炎王佛願共衆生咸	南无西方極樂世界无對光佛願共衆生咸	南无西方極樂世界无礙光佛願共衆生咸	南无西方極樂世界无邊光佛願共衆生咸	歸命故我頂礼生彼国	南无西方極樂世界无量光佛願共衆生咸	歸命故我頂礼生彼国	南无西方極樂世界无量光佛願共衆生咸	佛、光明威神、魏魏殊妙、晝夜一劫、尚不能盡。	白諸行者、當知彌陀身相光明、釋迦如來一劫說不	能想者、如觀經云。一一光明、遍照十方世界、念	佛衆生、折取不捨。今既觀經有如此不思議增	上勝緣、攝諸行者、何不相續稱觀礼念願往	生也。應知。		



⑩ 127 ⑪ 128 ⑫ 129 ⑬ 130 ⑭ 131 ⑮ 132 ⑯ 133 ⑰ 134 ⑱ 135 ⑲ 136 ⑳ 137 ㉑ 138 ㉒ 139 ㉓ 140 ㉔ 141 ㉕ 142 ㉖ 143 ㉗ 144

南無西方極樂世界觀歡喜光佛願共衆生咸  
歸命故我頂礼生彼國  
南無西方極樂世界智慧光佛願共衆生咸  
歸命故我頂礼生彼國  
南無西方極樂世界不斷光佛願共衆生咸歸  
命故我頂礼生彼國  
南無西方極樂世界難思光佛願共衆生咸  
歸命故我頂礼生彼國  
南無西方極樂世界無稱光佛願共衆生咸  
歸命故我頂礼生彼國  
南無西方極樂世界超日月光佛願共衆生  
咸歸命故我頂礼生彼國  
南無西方極樂世界阿彌陀佛  
哀愍覆我令法種增長此生及後世願佛  
常折受願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南無西方極樂世界觀世音菩薩摩訶薩願共  
衆生咸歸命故  
南無西方極樂世界大勢至菩薩摩訶薩願

127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144

南無西方極樂世界歡喜光佛願共衆生咸  
歸命故我頂礼生彼國  
南無西方極樂世界智慧光佛願共衆生咸  
歸命故我頂礼生彼國  
南無西方極樂世界不斷光佛願共衆生咸歸  
命故我頂礼生彼國  
南無西方極樂世界難思光佛願共衆生咸  
歸命故我頂礼生彼國  
南無西方極樂世界無稱光佛願共衆生咸  
歸命故我頂礼生彼國  
南無西方極樂世界超日月光佛願共衆生  
咸歸命故我頂礼生彼國  
南無西方極樂世界阿彌陀佛  
哀愍覆我令法種增長此生及後世願佛  
常折受願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南無西方極樂世界觀世音菩薩摩訶薩願共  
衆生咸歸命故  
南無西方極樂世界大勢至菩薩摩訶薩願

⑬

162 161 160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150 149 148 147 146 145

南无西方極樂世界諸菩薩清淨大汝衆願  
共衆生咸歸命故  
此二菩薩一切衆生臨命終時共村花教  
授与行者阿弥陀佛放大光明照行者身後与  
無數化佛菩薩者聞大衆等一時授手如彈指  
頃即得往生為報恩故至心礼之一拜  
南无西方極樂世界諸菩薩清淨大汝衆願  
共衆生咸歸命故我頂礼生彼国  
此等諸菩薩亦理佛來迎接行者為報恩  
故至心礼之一拜  
普為師僧父母善知識法界衆生斷除三障  
同得往生阿弥陀佛国歸命懺悔  
至心懺悔  
南无歸懺十方佛  
願滅一切諸罪根  
今將久近所脩善  
迴作自他安樂因  
恒願一切臨終時  
勝緣勝境悉現前  
願觀弥陀大悲主  
觀音勢至十方尊  
仰唯神光蒙授手  
乘佛願力生彼国  
懺悔迴向發願已  
至心歸命阿弥陀佛

162 161 160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150 149 148 147 146 145

共衆生咸歸命故  
此二菩薩、一切衆生、臨命終時、共村花教、  
授与行者。阿弥陀佛、放大光明、照行者身。後与  
無數、化佛菩薩、者聞大衆等、一時授手、如彈指  
頃、即得往生。為報恩故、至心礼之一拜。  
南无西方極樂世界諸菩薩清淨大汝衆願  
共衆生咸歸命故我頂礼生彼国  
此等諸菩薩、亦理佛來迎接行者。為報恩  
故、至心礼之一拜。  
普為師僧父母、善知識、法界衆生、斷除三障、  
同得往生阿弥陀佛国、歸命懺悔。  
至心懺悔  
南无歸懺十方佛  
願滅一切諸罪根  
今將久近所脩善  
迴作自他安樂因  
恒願一切臨終時  
勝緣勝境悉現前  
願觀弥陀大悲主  
觀音勢至十方尊  
仰唯神光蒙授手  
乘佛願力生彼国  
懺悔迴向發願已  
至心歸命阿弥陀佛

180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163

歸佛得菩提道心恒不退歸法薩婆若得大樂  
持門  
歸僧息諍論同入和合海迴願往生无量壽國  
願諸衆生三業清淨奉持佛教和南一切賢聖  
迴願往生无量壽國  
諸衆等聽說日沒无常偈  
人間念念營衆務 不覺年命日夜去  
如燈風中滅難期 忙忙六道无定趣  
未得解脫出苦海 云何安然不驚懼  
各聞強健有力時 自榮自勵求常住  
說此偈已更當心口發願願弟子臨命終時  
不顛倒心不錯禮心不失念身心无諸苦痛身  
心快樂如入禪定聖衆現前乘佛願本上品往  
生阿彌陀佛國到彼國已得六神通入十方界救

180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163

次作梵音。說偈發願。出寶性論。  
禮懺諸功德願臨命終時見无量壽佛无边功  
德身我及餘信者既見彼佛已願得離垢眼往生  
安樂國成无上菩提 禮懺已一切恭敬。  
歸佛得菩提道心恒不退歸法薩婆若得大樂  
持門  
歸僧息諍論同入和合海迴願往生无量壽國  
願諸衆生三業清淨奉持佛教和南一切賢聖  
迴願往生无量壽國  
諸衆等聽說日沒无常偈  
人間念念營衆務 不覺年命日夜去  
如燈風中滅難期 忙忙六道无定趣  
未得解脫出苦海 云何安然不驚懼  
各聞強健有力時 自榮自勵求常住  
說此偈已、更當心口發願。願弟子、臨命終時、心  
不顛倒、心不錯禮、心不失念、身心无諸苦痛、身  
心快樂、如入禪定、聖衆現前、乘佛願本、上品往  
生阿彌陀佛國。到彼國已、得六神通、入十方界、救

初夜

198 197 196 195 194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182 181

懺悔衆生塵空法界盡我願之如是美願已  
 至心歸命阿彌陀佛 初夜偈云  
 煩惱漂无底生死海无邊度苦胎未盡何樂睡  
 勇猛勤精進攝心常在禪勤攝六度行善操道目  
 然中夜偈云  
 汝起勿犯鬼魅卧 種種不淨假名人  
 如得重病前入斃 衆苦痛集安可眠  
 後夜偈云  
 時光遷流轉忽至五更初无常念念至恒興  
 死王居勸諸行道衆勤攝至无餘  
 平旦偈云  
 欲求寒滅樂當學沙門法衣食交身令精潔  
 隨衆善諸衆等今日晨朝各說六念  
 日中偈云  
 人生不精進喻若樹无根株在豈日裏能得  
 幾時鮮人命之如是无間常須臾間勸諸行  
 道衆勸攝乃至真  
 第三比丘善導謚依大衆採集要文以為札  
 續焉中三昧前初夜時已藏每司司後

198 197 196 195 194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182 181

攝苦衆生。虛空法界盡、我願亦如是。發願已  
至心歸命阿彌陀佛。  
初夜偈云。  
煩惱深无底生死海无邊度苦船未立何樂睡眠  
勇猛勤精進攝心常在禪勤脩六度行菩提道自  
然中夜偈云。  
汝起勿抱臭屍臥  
種種不淨假名人  
如得重病箭入牀  
衆苦痛集安可眠  
後夜偈云。  
時光遷流轉忽至五更初无常念念至恒與  
死王居勸諸行道衆勤脩至无餘  
平旦偈云。  
欲求寂滅樂當學沙門法衣食支身命精麁  
隨衆等諸衆等今日晨朝各說六念  
日中偈云。  
人生不精進喻若樹无根採花置日裏能得  
幾時鮮人命亦如是无間常須臾間勸諸行  
道衆勸脩乃至真  
第二比丘善導謹依大乘、採集要文、以為礼



⑨ 216 ⑧ 215 ⑦ 214 ⑥ 213 ⑤ 212 ④ 211 ③ 210 ② 209 ① 208 207 206 205 204 203 202 201 200 199

第二比丘書集卷第六樂舞集要文以義和  
讚偈廿三拜當初夜時禮懺悔同前後  
至心歸命禮西方阿彌陀佛願智願海深廣无  
涯底聞名欲往生皆悉到彼國願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛於此世界中六十有七億  
不退諸菩薩皆當得生彼願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛小行諸菩薩及脩少福者  
其數不可計皆當得生彼願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛十方佛剎中菩薩比丘衆  
窮劫不可計皆當得生彼願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛一切諸菩薩各齎天妙花  
寶香无價衣供養阿彌陀佛願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛咸然奏天樂暢發和雅音  
歌歎取勝尊供養阿彌陀佛願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛惠日照世間消除生死雲  
恭敬遶三匝稽首阿彌陀佛願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛見彼嚴淨土微妙難思議  
因發无上心願我國亦然願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛應時无量尊動容發欣咲

216 215 214 213 212 211 210 209 208 207 206 205 204 203 202 201 200 199

讚偈。廿三拜。當初夜時禮。懺悔同前後。  
至心歸命禮西方阿彌陀佛願智願海深廣无  
涯底聞名欲往生皆悉到彼國願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛於此世界中六十有七億  
不退諸菩薩皆當得生彼願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛小行諸菩薩及脩少福者  
其數不可計皆當得生彼願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛十方佛剎中菩薩比丘衆  
窮劫不可計皆當得生彼願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛一切諸菩薩各齎天妙花  
寶香无價衣供養阿彌陀佛願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛咸然奏天樂暢發和雅音  
歌歎取勝尊供養阿彌陀佛願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛惠日照世間消除生死雲  
恭敬遶三匝稽首阿彌陀佛願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛見彼嚴淨土微妙難思議  
因發无上心願我國亦然願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛應時无量尊動容發欣咲

⑬ 234 ⑭ 233 ⑮ 232 ⑯ 231 ⑰ 230 ⑱ 229 ⑲ 228 ⑳ 227 ㉑ 226 ㉒ 225 ㉓ 224 ㉔ 223 ㉕ 222 ㉖ 221 ㉗ 220 ㉘ 219 ㉙ 218 ㉚ 217  
 口出無數光遍照十方國願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛迴光圍遶身三匝從頂入  
 一切天人踊躍皆歡喜願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛梵者如雷電八音暢如響  
 十方來正士吾悉知彼願願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛至彼嚴淨國使速得神通  
 必於无量尊受記成等覺願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛奉事億如來飛化遍諸刹  
 恭敬歡喜去還到安養國願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛若人無善本不得聞佛名  
 憍慢弊解怠難以信此法願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛宿世見諸佛則能信此事  
 濁敬聞奉行踊躍大歡喜願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛其得聞彼阿弥陀佛名號  
 歡喜至一心皆當得生彼願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛設歸大千大直道聞佛名  
 聞名歡喜讚皆當得生彼願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛万年三寶滅此經住百年  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛万年三寶滅此經住百年

234 233 232 231 230 229 228 227 226 225 224 223 222 221 220 219 218 217  
 口出無數光遍照十方國願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛迴光圍遶身三匝從頂入  
 一切天人踊躍皆歡喜願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛梵者如雷電八音暢如響  
 十方來正士吾悉知彼願願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛至彼嚴淨國使速得神通  
 必於无量尊受記成等覺願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛奉事億如來飛化遍諸刹  
 恭敬歡喜去還到安養國願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛若人無善本不得聞佛名  
 憍慢弊解怠難以信此法願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛宿世見諸佛則能信此事  
 濁敬聞奉行踊躍大歡喜願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛其得聞彼阿弥陀佛名號  
 歡喜至一心皆當得生彼願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛設歸大千大直道聞佛名  
 聞名歡喜讚皆當得生彼願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛万年三寶滅此經住百年



252 251 250 ① 249 248 中夜 247 246 245 244 ②③ 243 ②② 242 ②① 241 240 ②① 239 238 237 ①⑨ 236 235

至心歸命今西方阿彌陀佛。乃年三歲。發心。願生西方。爾時。一會時。當得生彼願去。諸眾生。往安樂國。至心歸命。西方阿彌陀佛。世其難信。人有信惑。立難過關。有法。此後。靈難自信。教久信難中轉。更難太悲。傳華化。真誠。難佛思願去。諸眾生。往安樂國。至心歸命。西方阿彌陀佛。是時。靈難。終。念。法。種種。安此世。及後世。願佛。常。折。度。願生。諸眾生。往安樂國。至心歸命。西方阿彌陀佛。觀世音。善。善。願去。諸眾生。往安樂國。至心歸命。西方極樂世界。願去。諸眾生。往安樂國。至心歸命。西方極樂世界。諸善。清淨。大海。眾願去。諸眾生。往安樂國。普為師。僧。父母。善。知。議。活。果。眾。生。斷。除。三。障。得。同。往生。阿彌陀。國。歸命。懺悔。

第三。依。龍。樹。菩薩。願。往生。禮。讚。偈。一十六。拜。當。中。夜。時。禮。懺。悔。同。前。後。至心歸命。西方阿彌陀佛。

稽首。天人。天。眷。敬。阿彌陀。佛。兩。足。尊。在。彼。妙。安樂國。無量。佛。子。眾。圍。遶。願去。諸眾生。往生安樂國。

235 尔時聞一念皆當得生彼願共諸衆生往生安樂國  
236 至心歸命礼西方阿弥陀佛世其難值人有信恵亦  
237 難遇聞希有法此復最為難自信教人信難中轉更難  
238 大悲傳普化真誠報佛恩願共諸衆生往生安樂國  
239 至心歸命礼西方阿弥陀佛哀愍覆護我令法種增長  
240 此世及後世願佛常折受願生諸衆生往生安樂國  
241 至心歸命礼西方阿弥陀佛觀世音菩薩願共諸衆生  
242 往生安樂國至心歸命礼西方極樂世界大勢至菩薩  
243 願共諸衆生往生安樂國至心歸命礼西方極樂世界  
244 諸菩薩 清淨大海衆願共諸衆生往生安樂國  
245 普為師僧父母、善知識、法界衆生、斷除三障、得同  
246 往生阿弥陀佛國、歸命懺悔。  
247 第三依龍樹菩薩願往生礼讚偈。一十六拜。  
248 當中夜時礼。懺悔同前後。  
249 至心歸命礼西方阿弥陀佛  
250 稽首天人所恭敬 阿弥陀仙兩足尊  
251 在彼微妙安樂國 无量佛子衆圍遶  
252 願共諸衆生 往生安樂國

270	⑥	269	268	267	266	⑤	265	264	263	262	④	261	260	259	258	③	257	256	255	254	②	253					
至心歸命禮西方阿彌陀佛	至心歸命禮西方阿彌陀佛	金色身淨如山王	奢摩陀行如象步	兩目淨若青蓮花	故我頂禮阿彌陀佛	願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命禮西方阿彌陀佛	面善圓淨如滿月	威光猶如千日月	青若天鼓俱翅羅	故我頂禮阿彌陀佛	願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命禮西方阿彌陀佛	觀音頂戴冠中住	種種妙相寶莊嚴	能伏外道魔憍慢	故我頂禮阿彌陀佛	願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命禮西方阿彌陀佛	無比无垢廣清淨	衆德叅聖如虛空	所作利益得自在	故我頂禮阿彌陀佛	願共諸衆生 往生安樂國	至心歸命禮西方阿彌陀佛	十方名聞菩薩衆	无量諸魔常讚嘆

270	269	268	267	266	265	264	263	262	261	260	259	258	257	256	255	254	253
十方名聞菩薩衆	至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生 往生安樂国	所作利益得自在	无比无垢廣清淨	至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生往生安樂国	能伏外道魔憍慢	觀音頂戴冠中住	至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生 往生安樂国	青若天鼓俱翅羅	面善圓淨如滿月	至心歸命礼西方阿弥陁佛	願共諸衆生 往生安樂国	兩目淨若青蓮花	金色身淨如山王	至心歸命礼西方阿弥陁佛
无量諸魔常讚嘆			故我頂礼弥陁佛	衆德叡潔如虛空			故我頂礼弥陁佛	種種妙相寶莊嚴			故我頂礼弥陁佛	威光猶如千日月			故我頂礼弥陁佛	奢摩陁行如象步	

288 287 286 285 284 283 282 281 280 279 278 277 276 275 274 273 272 271

十方名聞善音聲 無量諸廣廣諸  
為諸衆生願力住 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
金底寶間池生花 善根所成妙臺座  
於彼坐上如山王 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
十方所來諸佛子 顯現神通至安樂  
瞻仰尊顏常恭敬 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
諸有无常无我等 亦如小月電影露  
為衆說法无名字 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
彼尊佛刹无惡名 亦无女人惡道怖  
衆人至心依彼尊 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國

288 287 286 285 284 283 282 281 280 279 278 277 276 275 274 273 272 271

為諸衆生願力住 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
金底寶間池生花 善根所成妙臺座  
於彼坐上如山王 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
十方所來諸佛子 顯現神通至安樂  
瞻仰尊顏常恭敬 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
諸有无常无我等 亦如小月電影露  
為衆說法无名字 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
彼尊佛刹无惡名 亦无女人惡道怖  
衆人至心依彼尊 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國



306	305	304	303	302	301	300	299	298	297	296	295	294	293	292	291	290	289
		①⑥		①⑤		①④			①③				①②			①①	
普為師僧父母及善知識法界衆生斷除三障同得生可所施佛剎歸命載安	衆衆願共諸衆生往生安樂國	衆衆願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方阿弥陀佛諸菩薩清淨大願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方極樂世界大勢至菩薩願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方極樂世界觀世音菩薩願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方極樂世界觀世音菩薩願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方極樂世界觀世音菩薩願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方極樂世界觀世音菩薩願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方阿弥陀佛願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方阿弥陀佛願共諸衆生往生安樂國	所作善根清淨者 迴施衆生生彼土	我說彼尊功德事 衆善无邊如海水	至心歸命礼西方阿弥陀佛願共諸衆生往生安樂國	往生不退至菩提 故我頂礼弥陀佛	往生不退至菩提 故我頂礼弥陀佛	彼尊无量方便境 无有諸趣惡知識	至心歸命礼西方阿弥陀佛願共諸衆生往生安樂國

306	305	304	303	302	301	300	299	298	297	296	295	294	293	292	291	290	289
普為師僧父母、及善知識、法界衆生、斷除三障同得生可所施佛剎歸命載安	海衆願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方阿弥陀佛諸菩薩清淨大願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方極樂世界大勢至菩薩願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方極樂世界觀世音菩薩願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方極樂世界觀世音菩薩願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方極樂世界觀世音菩薩願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方極樂世界觀世音菩薩願共諸衆生往生安樂國	哀愍覆■我令法種種長此世及後生願佛常投受願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方阿弥陀佛願共諸衆生往生安樂國	願共諸衆生 往生安樂國	所作善根清淨者 迴施衆生生彼土	我說彼尊功德事 衆善无邊如海水	至心歸命礼西方阿弥陀佛願共諸衆生往生安樂國	願共諸衆生 往生安樂國	往生不退至菩提 故我頂礼弥陀佛	彼尊无量方便境 无有諸趣惡知識	至心歸命礼西方阿弥陀佛願共諸衆生往生安樂國

324 323 322 321 320 319 318 317 316 315 314 313 312 311 310 309 308 307

障、同得往生阿彌陀佛國、歸命懺悔。  
至心懺悔。自從无始受身來。恒以十惡加衆  
生。不孝父母謗三寶。造作五逆不善業。以是  
衆罪因緣故。妄想顛倒生纏縛。夜受无量生  
死苦。頂礼懺悔願滅除。懺悔已。  
至心歸命阿彌陀佛。  
至心勸請諸佛大慈无上尊。恒以空惠照  
三界。衆生盲冥不覺知。永沉生死大苦海。  
為拔群生離諸苦。勸諸常住轉法輪。勸請已。  
至心歸命阿彌陀佛。  
至心隨喜。歷劫已來懷疾妬。我慢放邊由  
癡生。恒以瞋恚毒害火。焚燒智慧慈善根。  
今日思惟始醒悟。發大精進皆隨壽。隨喜  
已。至心歸命阿彌陀佛。  
至心歸命迴向。流浪三界內。癡愛入胎獄。  
生已歸老死。沈沒於苦海。我今脩此福。迴生  
安樂土。迴向已。  
至心歸命礼阿彌陀佛。

324 323 322 321 320 319 318 317 316 315 314 313 312 311 310 309 308 307

障、同得往生阿彌陀佛國、歸命懺悔。  
至心懺悔。自從无始受身來。恒以十惡加衆  
生。不孝父母謗三寶。造作五逆不善業。以是  
衆罪因緣故。妄想顛倒生纏縛。夜受无量生  
死苦。頂礼懺悔願滅除。懺悔已。  
至心歸命阿彌陀佛。  
至心勸請。諸佛大慈无上尊。恒以空惠照  
三界。衆生盲冥不覺知。永沉生死大苦海。  
為拔群生離諸苦。勸諸常住轉法輪。勸請已。  
至心歸命阿彌陀佛。  
至心隨喜。歷劫已來懷疾妬。我慢放邊由  
癡生。恒以瞋恚毒害火。焚燒智慧慈善根。  
今日思惟始醒悟。發大精進皆隨壽。隨喜  
已。至心歸命阿彌陀佛。  
至心歸命迴向。流浪三界內。癡愛入胎獄。  
生已歸老死。沈沒於苦海。我今脩此福。迴生  
安樂土。迴向已。  
至心歸命礼阿彌陀佛。

⑥ ⑤ ④ ③ ② ① 後夜  
342 341 340 339 338 337 336 335 334 333 332 331 330 329 328 327 326 325

至心發願願捨胎藏改往生安樂國連見稱  
隨佛无違切德身奉親諸如來賢聖文復  
思權六神通力救折苦衆生虛空法界盡我  
願之如是發願已  
至心歸命阿彌陀佛 餘同上法  
第四依天親菩薩願往生禮讚偈廿拜當  
後夜時禮 敬海同前後  
至心歸命礼西方阿彌陀佛世尊我一心歸命  
盡十方无尋光如來願生安樂國  
至心歸命礼西方阿彌陀佛觀彼世衆相勝過三  
界道究竟虛空廣大无邊際願諸衆生往安樂國  
至心歸命礼西方阿彌陀佛正道大慈悲世善根生  
淨光明滿足如鏡日月輪願諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿彌陀佛徇諸稱贊性具妙在  
嚴光垢光相熾明淨曜世間願諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿彌陀佛寶花千方種種寶池流  
泉激風動花葉交偈光轉願諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿彌陀佛宮殿輪轉閻觀主无碍  
至心歸命礼西方阿彌陀佛宮殿輪轉閻觀主无碍

325	至心發願。願捨胎藏形。往生安樂國。速見彌
326	陀佛。無邊功德身。奉觀諸如來。賢聖亦復
327	然。權六神通力。救折苦衆生。虛空法界盡。我
328	願亦如是。發願已。
329	至心歸命阿彌陀佛。 <small>餘悉同上法</small>
330	第四依天親菩薩願往生禮讚偈。廿拜。當
331	後夜時禮。 <small>懺悔同前後</small>
332	至心歸命禮西方阿彌陀佛世尊我一心歸命
333	盡十方无尋光如來願生安樂國
334	至心歸命禮西方阿彌陀佛觀彼世界相勝過三
335	界道究竟虛空廣大无邊際願共諸衆生往生安樂國
336	至心歸命禮西方阿彌陀佛正道大慈悲出世善根生
337	淨光明滿足如鏡日月輪願共諸衆生往生安樂國
338	至心歸命禮西方阿彌陀佛備諸珍寶性具足妙莊
339	嚴无垢光焰熾明淨曜世間願共諸衆生往生安樂國
340	至心歸命禮西方阿彌陀佛寶花千萬種弥覆池流
341	泉微風動花葉交借光乱轉願共諸衆生往生安樂國
342	至心歸命禮西方阿彌陀佛宮殿諸樓閣觀十方无尋



⑮ 360 ⑭ 359 ⑬ 358 357 ⑫ 356 355 ⑪ 354 353 ⑩ 352 351 350 349 ⑨ 348 347 ⑧ 346 345 ⑦ 344 343

至心歸命礼西方阿弥陀佛無量壽佛無量壽佛  
 雜樹異光色寶欄遍圍遶願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛無量壽佛交絡羅網遍虛  
 空種種鈴鈴發響宣吐妙法音願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛梵音悟甚遠微妙聞十  
 方覺阿弥陀法王善住持願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛如來淨花王正覺花化生  
 愛樂佛法味禪三昧為食願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛永離身心惱受樂常無間  
 大乘善根界等無譏嫌名願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛女人及根缺二乘種不生  
 衆生所願樂一切能滿足願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛無量大法王微妙淨花  
 臺相妙光一尋色像超群生願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛天人不動衆清淨智海生  
 如須彌山王勝妙無過者願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛天丈夫衆恭敬遶瞻仰  
 兩天樂花衣妙香等供養願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛安樂國清淨光轉无垢輪

360 359 358 357 356 355 354 353 352 351 350 349 348 347 346 345 344 343

雜樹異光色寶欄遍圍遶願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛無量寶交絡羅網遍虛  
 空種種鈴鈴發響宣吐妙法音願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛梵音悟甚遠微妙聞十  
 方覺阿弥陀法王善住持願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛如來淨花王正覺花化生  
 愛樂佛法味禪三昧為食願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛永離身心惱受樂常無間  
 大乘善根界等無譏嫌名願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛女人及根缺二乘種不生  
 衆生所願樂一切能滿足願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛無量大法王微妙淨花  
 臺相妙光一尋色像超群生願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛天人不動衆清淨智海生  
 如須彌山王勝妙無過者願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛天丈夫衆恭敬遶瞻仰  
 兩天樂花衣妙香等供養願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛安樂國清淨光轉无垢輪

① 晨朝  
378 377 376 375 374 373 372 371 370 369 368 367 366 365 364 363 362 361

一念及一時利益諸群生願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛諸佛諸功德无有分別心  
能令速滿足功德大寶海願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛哀愍覆護我令法種增  
長此世及後生願佛常折受願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛觀世音菩薩願共諸衆生  
往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛大勢至菩薩願共諸衆生  
往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛諸菩薩清淨大海衆願共  
諸衆生往生安樂國  
普為師僧父母善知識法界衆生斷除三部同  
歸往生阿弥陀佛國歸命懺悔  
第五依彦琮法師願往生礼讚偈廿二拜當旦起  
時礼。懺悔日先後  
至心歸命礼西方阿弥陀佛法藏因緣遠極樂里還深  
異珍參作地衆寶間為林花開希有色波揚寶相  
音何當蒙授手一遂往生心願共諸衆生往生安樂國

378 377 376 375 374 373 372 371 370 369 368 367 366 365 364 363 362 361

一念及一時利益諸群生願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛諸功德无有分別心  
能令速滿足功德大寶海願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛哀愍覆護我令法種增  
長此世及後生願佛常折受願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛觀世音菩薩願共諸衆生  
往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛大勢至菩薩願共諸衆生  
往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛諸菩薩清淨大海衆願共  
諸衆生往生安樂國  
普為師僧父母、善知識、法界衆生、斷除三部、同  
歸往生阿弥陀佛國、歸命懺悔。  
第五依彦琮法師願往生礼讚偈。廿二拜。當旦起  
時礼。懺悔日先後  
至心歸命礼西方阿弥陀佛法藏因緣遠極樂里還深  
異珍參作地衆寶間為林花開希有色波揚寶相  
音何當蒙授手一遂往生心願共諸衆生往生安樂國

⑦ 396 395 394 393 392 391 390 389 388 387 386 385 384 383 382 381 380 ② 379

至心歸命禮西方阿彌陀佛濁世難還入淨土願途深  
金繩土界道殊網漫垂林見色皆真色聞音悉法  
音莫謂西方遠唯須十念心願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛已成窮理聖真有遍空威  
在西時現小俱是暫隨機葉珠相映飭沙水共澄耀  
欲得无生早彼土必須依願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛五山毫獨朗寶手下恒  
分地水俱為鏡香花同作雲業深成易往因淺實難  
聞必望除疑或超然獨不群願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方觀世音菩薩十輪明足下五道現  
光中悲引恒无絕人歸亦未寶口宣猶在定心靜  
更飛通聞名皆往願日發幾花叢願共諸衆生  
往生安樂國  
至心歸命禮西方大勢至菩薩惠力標无上身光備  
有緣動遙諸寶國侍坐一金蓮鳥群非實鳥天類豈真天  
須知求妙樂會是戒香全願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛心帶真滿光令法界園  
无緣能折物有想定非難花隨本心變宮移身日

396 395 394 393 392 391 390 389 388 387 386 385 384 383 382 381 380 379

至心歸命禮西方阿彌陀佛濁世難還入淨土願途深  
金繩土界道殊網漫垂林見色皆真色聞音悉法  
音莫謂西方遠唯須十念心願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛已成窮理聖真有遍空威  
在西時現小俱是暫隨機葉珠相映飭沙水共澄耀  
欲得无生早彼土必須依願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛五山毫獨朗寶手下恒  
分地水俱為鏡香花同作雲業深成易往因淺實難  
聞必望除疑或超然獨不群願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方觀世音菩薩十輪明足下五道現  
光中悲引恒无絕人歸亦未寶口宣猶在定心靜  
更飛通聞名皆往願日發幾花叢願共諸衆生  
往生安樂國  
至心歸命禮西方大勢至菩薩惠力標无上身光備  
有緣動遙諸寶國侍坐一金蓮鳥群非實鳥天類豈真天  
須知求妙樂會是戒香全願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛心帶真滿光令法界園  
无緣能折物有想定非難花隨本心變宮移身日



414 413 412 411 410 409 408 407 406 405 404 403 402 401 400 399 398 397  
 安禰開出世境須共入禪者願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛迴向漸為功西方路稍通  
 寶悟擎厚地天香入遠風開花重布水覆網細分空  
 願生何切正為樂无窮願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛欲選當生處西方取可歸  
 間樹開重閣滿道布鮮衣香飯隨心至寶殿逐身飛  
 有緣皆得入只是往人希願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛十劫道先成嚴界引群萌  
 金沙徹水照王葉滿枝明鳥本珠中出人唯花上生  
 敢請西方聖早晚定相迎願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛十方諸佛國盡是法王家  
 偏水有緣地冀得早无耶八功如意水七寶自然花  
 於彼心能係當必往非除願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛淨國无衰變一立等今然  
 光臺千寶合音樂八風宣池多說法鳥宣滿散花天  
 得生不畏退隨意晚開蓮願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛坐花非一像聖衆亦難量  
 蓮開人獨處波生法自揚无災由處靜不退為朋良

414 413 412 411 410 409 408 407 406 405 404 403 402 401 400 399 398 397  
 安禰開出世境須共入禪者願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛迴向漸為功西方路稍通  
 寶悟擎厚地天香入遠風開花重布水覆網細分空  
 願生何切正為樂无窮願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛欲選當生處西方取可歸  
 間樹開重閣滿道布鮮衣香飯隨心至寶殿逐身飛  
 有緣皆得入只是往人希願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛十劫道先成嚴界引群萌  
 金沙徹水照王葉滿枝明鳥本珠中出人唯花上生  
 敢請西方聖早晚定相迎願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛十方諸佛國盡是法王家  
 偏水有緣地冀得早无耶八功如意水七寶自然花  
 於彼心能係當必往非除願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛淨國无衰變一立等今然  
 光臺千寶合音樂八風宣池多說法鳥宣滿散花天  
 得生不畏退隨意晚開蓮願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿弥陀佛坐花非一像聖衆亦難量  
 蓮開人獨處波生法自揚无災由處靜不退為朋良

432 431 430 429 428 427 426 425 424 423 422 421 420 419 418 417 416 415

問彼前生來輩斯幾劫強願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛光舒救毘舍空立引韋提  
天來香蓋捧人去寶衣寶六時聞鳥合四寸踐花低  
相看无不正豈復有長遠願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛普為弘三福威令滅五燒  
發心功已至係念罪使消鳥化珠光轉風好樂聲調  
俱忻行道易寧愁聖果遙願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛洗心甘呂水燒目妙花雲  
同生機易識等壽量難分樂多无癯道聲遠不妙聞  
如何貪五濁安然火自焚願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛臺哀天人現光中侍者看  
懸空四寶閣臨迴七重蘭疑多邊地人得少上生難  
且莫論餘願西望已心安願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛六根常合道三途永絕名  
念須遊方遍還時忍成地平无極廣風長是更清  
寄言有心輩共出一危城願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛哀愍覆凍我令法種增長  
此世及後生願佛常折受願共諸衆生往生安樂國

432 431 430 429 428 427 426 425 424 423 422 421 420 419 418 417 416 415

問彼前生來輩斯幾劫強願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛光舒救毘舍空立引韋提  
天來香蓋捧人去寶衣寶六時聞鳥合四寸踐花低  
相看无不正豈復有長遠願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛普為弘三福威令滅五燒  
發心功已至係念罪使消鳥化珠光轉風好樂聲調  
俱忻行道易寧愁聖果遙願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛洗心甘呂水燒目妙花雲  
同生機易識等壽量難分樂多无癯道聲遠不妙聞  
如何貪五濁安然火自焚願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛臺哀天人現光中侍者看  
懸空四寶閣臨迴七重蘭疑多邊地人得少上生難  
且莫論餘願西望已心安願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛六根常合道三途永絕名  
念須遊方遍還時忍成地平无極廣風長是更清  
寄言有心輩共出一危城願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛哀愍覆凍我令法種增長  
此世及後生願佛常折受願共諸衆生往生安樂國

②	①	日中	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②
---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

450	449	448	447	446	445	444	443	442	441	440	439	438	437	436	435	434	433
見彼无生自然悟	无量无边无億數	至心歸命礼西方阿弥陀佛	恒沙三昧自然成	窮劫算數不知名	超諸佛刹寂為精	廣大寬平眾寶成	至心歸命礼西方阿弥陀佛	拜當中時礼	第六比丘善導願往生礼讚偈	往生阿弥陀佛國、歸命懺悔	普為師僧父母、善知識、法界眾、斷除三障、自得	願共諸眾往生安樂國	至心歸命礼西方極樂世界諸菩薩清淨大海眾	往生安樂國	至心歸命礼西方極樂世界大勢至菩薩願共諸眾	往生安樂國	至心歸命礼西方極樂世界觀世音菩薩願共諸眾
无生寶國永為常	八方八面百寶成	地下莊嚴七寶幢	願共諸眾往生安樂國	普觀歸西同彼會	本國他方大海眾	四十八願莊嚴起	觀彼阿弥極樂界	懺悔同前後	依十六觀作廿	懺悔	斷除三障、自得	往生安樂國	至心歸命礼西方極樂世界諸菩薩清淨大海眾	往生安樂國	至心歸命礼西方極樂世界大勢至菩薩願共諸眾	往生安樂國	至心歸命礼西方極樂世界觀世音菩薩願共諸眾



468 467 466 465 464 463 462 461 460 459 458 457 456 455 454 453 452 451

長生寶國永為常  
 一一寶流無數光  
 勝神踊躍入西方  
 至心歸命禮西方阿彌陀佛  
 金繩東道非工近  
 菩薩人天散花上  
 一一光成無數臺  
 臺側百億寶幢圍  
 至心歸命禮西方阿彌陀佛  
 莊嚴寶樂亦無寶  
 隨時鼓樂應機音  
 行住坐臥折心視  
 三昧無為即沒條  
 樂國  
 至心歸命禮西方阿彌陀佛  
 寶花寶葉寶根莖  
 或有萬寶共成行  
 色各不同光亦然  
 枝條相觸說無因  
 願共諸衆生往生安樂國  
 行者願心常對目  
 願共諸衆生往生安樂國  
 地上莊嚴轉無極  
 彌陀願皆巧莊嚴  
 寶地寶色寶光飛  
 臺中寶樓千萬億  
 願共諸衆生往生安樂國  
 一一臺上虛空中  
 八種清風尋光出  
 機音正受稍為難  
 唯除睡時常憶念  
 願共諸衆生往生安

468 467 466 465 464 463 462 461 460 459 458 457 456 455 454 453 452 451

一一寶流無數光  
 勝神踊躍入西方  
 至心歸命禮西方阿彌陀佛  
 金繩東道非工近  
 菩薩人天散花上  
 一一光成無數臺  
 臺側百億寶幢圍  
 至心歸命禮西方阿彌陀佛  
 莊嚴寶樂亦無寶  
 隨時鼓樂應機音  
 行住坐臥折心視  
 三昧無為即沒條  
 樂國  
 至心歸命禮西方阿彌陀佛  
 寶花寶葉寶根莖  
 或有萬寶共成行  
 色各不同光亦然  
 枝條相觸說無因  
 願共諸衆生往生安樂國  
 行者願心常對目  
 願共諸衆生往生安樂國  
 地上莊嚴轉無極  
 彌陀願皆巧莊嚴  
 寶地寶色寶光飛  
 臺中寶樓千萬億  
 願共諸衆生往生安樂國  
 一一臺上虛空中  
 八種清風尋光出  
 機音正受稍為難  
 唯除睡時常憶念  
 願共諸衆生往生安

[illegible]

469	至心歸命礼西方阿弥陁佛	七重門網七不宮
470	綺念迴光相映發	化天童子皆无邊
471	瓔珞耀光超日月	行行寶葉色千般
472	花敷等若旋金輪	菓變光成衆寶蓋
473	塵沙佛刹現无邊	願共諸衆生往生安樂國
474	至心歸命礼西方阿弥陁佛	寶池寶峰寶金沙
475	寶渠寶葉寶蓮花	十二由旬皆正等
476	寶門寶網寶蘭遮	德水分流尋寶折
477	間波覩樂證恬怕	寄語有緣同行者
478	努力飄迷還本家	願共諸衆生往生安樂國
479	至心歸命礼西方阿弥陁佛	一一金繩界道上
480	寶樂寶樓千万億	諸天童子散香花
481	他方菩薩如雲集	无量无邊无能計
482	稽首弥陁恭敬立	風鈴樹響遍虛空
483	歎說三尋无有極	願共諸衆生往生安樂國
484	至心歸命礼西方阿弥陁佛	弥陁本願花王座
485	一切衆寶以為成	臺上四種張寶綬
486	弥陁獨坐顯真形	真形光明遍法界

⑬ 504 503 502 501 500 ⑫ 499 498 497 496 495 ⑪ 494 493 492 491 490 ⑩ 489 488 487

蒙光觸者心不退 晝夜六時專想念  
終時快樂如三昧 願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛 彌陀身心遍法界  
顯現衆生心想中 是故勸汝常觀察  
依心起相表真容 真容寶像臨花座  
心開見彼國莊嚴 寶樹三身花遍滿  
風鈴樂響與久同 願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛 彌陀身色如金山  
相好光明照十方 唯有念佛蒙光攝  
當知本願取為強 十方如來舒舌證  
專稱名号至西方 到彼花開聞妙法  
十地願行自然彰 願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛 觀音菩薩大慈悲  
已得菩提捨不證 一切五道內身中  
六時觀察三輪應 應現身光紫金色  
相好威儀轉无極 恒舒百億光王手  
普接有緣歸本國 願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛 勢至菩薩難思議

504 503 502 501 500 499 498 497 496 495 494 493 492 491 490 489 488 487

蒙光觸者心不退 晝夜六時專想念  
終時快樂如三昧 願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛 彌陀身心遍法界  
顯現衆生心想中 是故勸汝常觀察  
依心起相表真容 真容寶像臨花座  
心開見彼國莊嚴 寶樹三身花遍滿  
風鈴樂響與久同 願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛 彌陀身色如金山  
相好光明照十方 唯有念佛蒙光攝  
當知本願取為強 十方如來舒舌證  
專稱名号至西方 到彼花開聞妙法  
十地願行自然彰 願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛 觀音菩薩大慈悲  
已得菩提捨不證 一切五道內身中  
六時觀察三輪應 應現身光紫金色  
相好威儀轉无極 恒舒百億光王手  
普接有緣歸本國 願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命禮西方阿彌陀佛 勢至菩薩難思議

522	521	520	⑬	519	518	517	516	515	⑭	514	513	512	511	510	⑮	509	508	507	506	505
三品蓮開發小真	直到弥陀花坐邊	為說西方快樂因	一日齊戒處金蓮	至心歸命礼西方阿弥陀佛	永證无為法性身	畢竟乘臺出六塵	五門相續助三因	求生淨土斷貪瞋	至心歸命礼西方阿弥陀佛	圓光化侍等前真	重觀衆生觀小身	地上虛空七寶莊	想心乘念至西方	至心歸命礼西方阿弥陀佛	永絕胞胎證六道	化佛雲集滿虛空	增長智惠超三界	威光普照无邊際	有緣衆生蒙光觸	法界傾搖如轉蓬
願共諸衆生往生安樂國	百寶花籠逕七日	佛已聲聞衆來取	孝養父母教迴向	中輩中行中相人	願共諸衆生往生安樂國	慶哉難逢令得遇	一日七日專精進	就行差別分三品	上輩上行上根人	願共諸衆生往生安樂國	丈六八尺隨機現	弥陀身量極无邊	觀見弥陀極樂界	正坐跏趺入三昧	願共諸衆生往生安樂國	普勸有緣常憶念	普勸有緣常憶念	普勸有緣常憶念	普勸有緣常憶念	普勸有緣常憶念

522	521	520	519	518	517	516	515	514	513	512	511	510	509	508	507	506	505
直到弥陀花坐邊	為說西方快樂因	一日齊戒處金蓮	至心歸命礼西方阿弥陀佛	永證无為法性身	畢竟乘臺出六塵	五門相續助三因	求生淨土斷貪瞋	至心歸命礼西方阿弥陀佛	圓光化侍等前真	重觀衆生觀小身	地上虛空七寶莊	想心乘念至西方	至心歸命礼西方阿弥陀佛	永絕胞胎證六道	化佛雲集滿虛空	增長智惠超三界	威光普照无邊際
百寶花籠逕七日	佛已聲聞衆來取	孝養父母教迴向	中輩中行中相人	願共諸衆生往生安樂國	慶哉難逢令得遇	一日七日專精進	就行差別分三品	上輩上行上根人	願共諸衆生往生安樂國	丈六八尺隨機現	弥陀身量極无邊	觀見弥陀極樂界	正坐跏趺入三昧	願共諸衆生往生安樂國	普勸有緣常憶念	法界傾搖如轉蓬	有緣衆生蒙光觸



⑬ 540 539 538 537 536 535 534 533 532 531 530 529 528 527 526 525 524 523

三品連開證小真	願共諸衆生往生安樂國	下輩品行下根人	四重偷僧謗五法	終時苦相皆雲集	忽遇往生善知識	化佛菩薩尋麥到	三花障重開多劫	願共諸衆生往生安樂國	樂何常樂事難思議	性海如來盡是師	念服无生即斷飢	无心願網自然知	八背凝神會一枝	觀音大勢與衣披	須臾授記号无為	吾今不去待何時	願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方阿弥陀佛哀愍覆護我令法種增長
至心歸命礼西方阿弥陀佛	十惡五逆等貪瞋	未曾悲愧悔前愆	地獄猛火罪人前	忽勸專稱彼佛名	一念願心入寶蓮	于時始發菩提目	至心歸命礼西方阿弥陀佛	无邊菩薩為同學	渴聞波若絕思漿	一切莊嚴皆說法	七覺花池隨意入	称隨心水沐身頂	炊余騰空遊法界	如此逍遙无極處	願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方阿弥陀佛哀愍覆護我令法種增長		

540 539 538 537 536 535 534 533 532 531 530 529 528 527 526 525 524 523

三品連開證小真	願共諸衆生往生安樂國	下輩品行下根人	四重偷僧謗五法	終時苦相皆雲集	忽遇往生善知識	化佛菩薩尋麥到	三花障重開多劫	願共諸衆生往生安樂國	樂何常樂事難思議	性海如來盡是師	念服无生即斷飢	无心願網自然知	八背凝神會一枝	觀音大勢與衣披	須臾授記号无為	吾今不去待何時	願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方阿弥陀佛哀愍覆護我令法種增長
至心歸命礼西方阿弥陀佛	十惡五逆等貪瞋	未曾悲愧悔前愆	地獄猛火罪人前	忽勸專稱彼佛名	一念願心入寶蓮	于時始發菩提因	至心歸命礼西方阿弥陀佛	无邊菩薩為同學	渴聞波若絕思漿	一切莊嚴皆說法	七覺花池隨意入	称隨心水沐身頂	炊余騰空遊法界	如此逍遙无極處	願共諸衆生往生安樂國	至心歸命礼西方阿弥陀佛哀愍覆護我令法種增長		

558 557 556 555 554 553 552 551 550 549 548 547 546 545 544 543 542 541

此女及後世願佛常折受願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方極樂、觀音菩薩摩訶薩  
 願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿彌陀佛 大勢至菩薩摩訶薩  
 願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方極樂、諸菩薩摩訶薩清淨、  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 普為師僧父母善知識法界衆生斷除三部同得  
 往生阿彌陀佛國歸命懺悔  
 上二品懺悔發願等同前須要中要取初須  
 略中略取中須廣中廣取下其廣者就實有  
 心願生者而勸或對四衆或對十方佛或  
 對舍利尊像大衆或對一人若獨自等又向  
 十方盡虛空三寶及盡衆生界等具向發露  
 懺悔懺悔有三品上中下上品懺悔者身毛孔  
 中血流眼中血出者名上品懺悔中品懺悔者  
 遍身熱汗從毛孔出眼中血流者名中品懺  
 悔下品懺悔者遍身微熱眼中淚出者名  
 下品懺悔此等三品懺悔者長阿含經卷之五

558 557 556 555 554 553 552 551 550 549 548 547 546 545 544 543 542 541

此女及後世願佛常折受願共諸衆生往生安樂國  
 至心歸命礼西方極樂、觀音菩薩摩訶薩  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命礼西方阿彌陀佛 大勢至菩薩摩訶薩  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 至心歸命礼西方極樂、諸菩薩摩訶薩清淨、  
 願共諸衆生 往生安樂國  
 普為師僧父母、善知識、法界衆生、斷除三部、同得  
 往生阿彌陀佛國、歸命懺悔。  
 上二品懺悔、發願等同前。須要中要取初、須  
 略中略取中、須廣中廣取下。其廣者、就實有  
 心願生者而勸。或對四衆、或對十方佛、或  
 對舍利尊像大衆、或對一人、若獨自等。又向  
 十方盡虛空三寶、及盡衆生界等、具向發露  
 懺悔。懺悔有三品、上中下。上品懺悔者、身毛孔  
 中血流、眼中血出者、名上品懺悔。中品懺悔者、  
 遍身熱汗從毛孔出、眼中血流者、名中品懺  
 悔。下品懺悔者、遍身微熱、眼中淚出者、名



576 575 574 573 572 571 570 569 568 567 566 565 564 563 562 561 560 559

中丁巳年... 下品懺悔此等三品雖有差別即是久種解脫  
分善根人致使今生敬深重人不惜身命  
乃至小罪若懺即能徹心徹髓能如此懺者  
不問久近所有重障頓皆滅盡若不如此縱使  
日夜十二時急走衆是無益者不作者應知難  
不能流使流血等但能真心徹到者即凡上同  
設白十方諸佛十二部經一切賢聖及一切天龍八  
部法界衆生現前大衆等證知我命發露懺悔  
從无始已來乃至今身殺害一切三寶師僧父母  
六親眷屬善知識法界衆生不可知數偷盜一切三  
寶師僧父母六親眷屬善知識法界衆生物不可知  
數於一切三寶師僧父母六親眷屬善知識法界  
寶生上起邪心不可知數忘語欺誑一切三寶師  
僧父母六親眷屬善知識法界衆生不可知數誑  
語調呌一切三寶師僧父母六親眷屬善知識法  
界衆生不可知數惡口罵辱誹謗毀此言一  
切三寶師僧父母六親眷屬善知識法界衆  
生不可知數兩舌鬪亂破壞一切三寶師僧父母六  
親眷屬善知識法界衆生不可知數

576 575 574 573 572 571 570 569 568 567 566 565 564 563 562 561 560 559

下品懺悔。此等三品、雖有差別、即是久種解脫  
分善根人、致使今生敬深重人、不惜身命、  
乃至小罪若懺、即能徹心徹髓。能如此懺者、  
不問久近、所有重障、頓皆滅盡。若不如此、縱使  
日夜十二時急走、衆是無益着不作者。應知。雖  
不能流使流血等、但能真心徹到者、即乞上同。  
設白十方諸佛、十二部經、一切賢聖、及一切天龍八  
部、法界衆生、現前大衆等。證知我命、發露懺悔、  
從无始已來、乃至今身、殺害一切三寶師僧父母  
六親眷屬善知識法界衆生、不可知數。偷盜一切三  
寶師僧父母六親眷屬善知識法界衆生物、不可知  
數。於一切三寶師僧父母六親眷屬善知識法界  
寶生上起邪心、不可知數。忘語欺誑一切三寶師  
僧父母六親眷屬善知識法界衆生、不可知數。誑  
語調呌一切三寶師僧父母六親眷屬善知識法  
界衆生、不可知數。惡口罵辱誹謗毀此言一  
切三寶師僧父母六親眷屬善知識法界衆  
生、不可知數。兩舌鬪亂破壞一切三寶師僧父母六親

577 眷屬善知識法界衆生、不可知數。或破五戒八  
578 戒十戒十善戒二百五十戒五百戒菩薩三聚戒十  
579 無盡戒、乃至一切戒、及一切威儀戒等、自作教他、作見  
580 作隨喜、不可知數。如是等衆罪、亦如十方大地無邊、微  
581 塵無數、我等作罪亦無邊無數。虛空無邊、我等作  
582 罪亦復無邊。法界無邊、亦如上法。性無邊、亦如上。方  
583 使無邊、亦如上。如是等罪、上至諸菩薩、下至聲  
584 聞緣覺、所不能知。唯佛與佛乃能知我罪之  
585 多少。今於三寶前、法界衆生前、發露懺悔、  
586 不敢覆藏。唯願十方三寶、法界衆生、受我懺  
587 悔、憶我清淨。始從今日、願共法界衆生、捨耶  
588 歸正、發「菩提」心、慈心相向、佛眼相者、菩提眷屬、作  
589 真善知識、同生阿彌陀佛國、乃至成佛、如是等罪、  
590 永斷相續、更不敢作。懺悔已。至心歸令阿彌  
591 陀佛。

592 廣懺悔。

593 若入觀及睡時、應發此願、若坐若立、一心合掌、  
594 正面向西、十聲稱阿彌陀佛觀音勢至諸菩薩

612 611 610 609 608 607 606 605 604 603 602 601 600 599 598 597 596 595

清淨大海衆竟。弟子現是生死凡夫。罪障深重。輪迴六道。苦不可言。今日遇善知識。得聞彌陀本願名号。一心稱念。求願往生。願佛慈悲。不捨本弘誓願。折受弟子。不儀彌陀佛身相。光明願佛慈悲。身現弟子身相。觀音勢至諸菩薩等。及彼世界清淨莊嚴光明等相。道此語已。一心正念。即隨意入觀及睡。或有正發願時。即得見之。或有睡時得見。此願比來亦大有現驗。問曰。稱念禮觀阿彌陀佛。現世有何功德利益。答曰。若稱阿彌陀佛一聲。即能除滅八十億起生死重罪。誑念已下亦如是。十往生經云。若有衆生。念阿彌陀佛。願往生者。彼佛即遣廿五菩薩。擁護行者。若行若坐。若住若臥。若晝若夜。一切時一切處。不令惡鬼惡神得其便也。又如觀經云。若稱化念阿彌陀佛。願往生彼國者。彼佛即遣無數化佛。無數化觀音勢至菩薩。擁護行者。復與前廿五菩薩等。百重千重圍遶行者。不問行住坐臥。一切時處。皆常守護。不令惡鬼惡神得其便也。

612 611 610 609 608 607 606 605 604 603 602 601 600 599 598 597 596 595

清淨大海衆竟。弟子現是生死凡夫。罪障深重。輪迴六道。苦不可言。今日遇善知識。得聞彌陀本願名号。一心稱念。求願往生。願佛慈悲。不捨本弘誓願。折受弟子。不儀彌陀佛身相。光明。願佛慈悲。身現弟子身相。觀音勢至諸菩薩等。及彼世界清淨莊嚴光明等相。道此語已。一心正念。即隨意入觀及睡。或有正發願時。即得見之。或有睡時得見。此願比來亦大有現驗。問曰。稱念禮觀阿彌陀佛。現世有何功德利益。答曰。若稱阿彌陀佛一聲。即能除滅八十億起生死重罪。誑念已下亦如是。十往生經云。若有衆生。念阿彌陀佛。願往生者。彼佛即遣廿五菩薩。擁護行者。若行若坐。若住若臥。若晝若夜。一切時一切處。不令惡鬼惡神得其便也。又如觀經云。若稱化念阿彌陀佛。願往生彼國者。彼佛即遣無數化佛。無數化觀音勢至菩薩。擁護行者。復與前廿五菩薩等。百重千重圍遶行者。不問行住坐臥。一切時處。皆常守護。不令惡鬼惡神得其便也。



630 629 628 627 626 625 624 623 622 621 620 619 618 617 616 615 614 613

時處若書若夜常不離行者今既有斯勝  
益可歸願諸行者答須至心狀往  
又如无量壽經云若我成佛十方衆生稱我名  
号下至十聲若不生者不取正覺彼佛今現  
在世成佛當知本誓重願不虛衆生稱念  
必得往生 又如弥陀經云若有衆生聞說阿彌  
陀佛即應執持名号若一日若二乃至七日一  
心稱佛不亂今欲終時阿彌陀與諸聖衆現在其  
前此人終時心不顛倒即得往生彼國佛告舍利  
弗我見是利故說是言若有衆生聞說是  
者應當發願願生彼國次下說云東方如恒  
河沙等諸佛南西北方及上下二方如恒河沙等  
諸佛各於本國出其舌相遍覆三千大千世界  
說誠實言汝等衆生皆應信是一切諸佛所陳  
念經云何名誼全若有衆生稱念阿彌陀佛若  
七日及一日下至十聲乃至一聲一金等必得往  
生證成此事故名陳念經次下久之若稱佛  
往生者常為十方恒河沙等諸佛之所陳念  
故云陳念願今既有此會上願望可歸者

630 629 628 627 626 625 624 623 622 621 620 619 618 617 616 615 614 613

時處、若書若夜、常不離行者。今既有斯勝  
益。可憑。願諸行者、答須至心狀往。  
又如无量壽經云。若我成佛、十方衆生、稱我名  
号、下至十聲、若不生者、不取正覺。彼佛今現、  
在世成佛、當知本誓、重願不虛、衆生稱念、  
必得往生。 又如弥陀經云。若有衆生、聞說阿彌  
陀佛、即應執持名号、若一日若二日、乃至七日、一  
心稱佛不亂。今欲終時、阿彌陀與諸聖衆、現在其  
前。此人終時、心不顛倒、即得往生彼國。佛告舍利  
弗。我見是利、故說是言。若有衆生、聞說是  
者、應當發願、願生彼國。次下說云。東方如恒  
河沙等諸佛、南西北方及上下、一一方如恒河沙等  
諸佛、各於本國、出其舌相、遍覆三千大千世界、  
說誠實言。汝等衆生、皆應信是一切諸佛所陳  
念經。云何名誼全。若有衆生稱念阿彌陀佛、若  
七日及一日、下至十聲、乃至一聲一金等、必得往  
生。證成此事、故名陳念經。次下久之。若稱佛  
往生者、常為十方恒河沙等諸佛佛之所陳念、

633

632 631



往者常存十方恒沙等諸佛之願陳念  
故名陳念經今既有此增上願誓可賜諸佛  
子等何不勵意去也

阿彌陀往生禮佛文一卷

633

632 631

故名陳念經。今既有此增上願誓。可憑。諸佛  
子等、何不勵意去也。

阿彌陀往生禮佛文一卷

翻刻註

- 18 「三心」 轉倒記號あり。
- 22 「業」 見せ消ち記號あり。
- 25 「聖」 轉倒記號あり。
- 43 「既」 見せ消ち記號あり。
- 44 「相」 右傍に點あり。見せ消ちか。
- 53 「深」 文字（判讀不能）の上からなぞり書き。右傍に「シム」とあり。
- 127 「觀」 見せ消ち記號あり。
- 258 「青」 見せ消ち記號あり。
- 267 「故」 轉倒記號あり。
- 397 「往」 「得」の上からなぞり書き。
- 403 「願」 右傍に「往」あり。
- 421 422 間 第一六偈脱文カ。
- 512 「裏」 右傍に「重」あり。
- 568 「■」 墨消し（判讀不能）の右傍に「属」あり。
- 584 「身」 見せ消ち記號あり。
- 621 「舍」 轉倒記號あり。



## 第五章 『往生礼讃偈』変遷攷

はじめに

ここまで『往生礼讃偈』の伝本として日本に現存する古写経本『集諸経礼懺儀』卷下、並びに『阿弥陀往生礼仏文』の系譜を考察することにより、七寺蔵『集諸経礼懺儀』卷下（以下、七寺本）を開宝蔵本『集諸経礼懺儀』卷下（以下、開宝蔵本）の転写本<sup>(1)</sup>、檀王法林寺蔵『集諸経礼懺儀』卷下（以下、檀王本）・金剛寺蔵『集諸経礼懺儀』卷下（以下、金剛寺本）を刊本大蔵経開版以前の唐代写本大蔵経本の転写本<sup>(2)</sup>、七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』が法然浄土教の影響下におけるテキストの校訂を経ていない『往生礼讃偈』単行本の転写本<sup>(3)</sup>であることを論述し、また七寺本を用いて現存していない開宝蔵本本文の推定復元を行った<sup>(4)</sup>。

これら七寺本・檀王本・『阿弥陀往生礼仏文』の書写年代（院政期）は、従来『往生礼讃偈』研究のテキストとして依用されてきた『大正蔵』四七所収『往生礼讃偈』（底本…徳川時代刊宗教大学蔵本）や『大正蔵』四七所収『集諸経礼懺儀』卷下（底本…高麗再雕版本。以下、大正蔵本）の開版に先行するものであり、またその系譜的にもより『往生礼讃偈』の古態を留めている可能性を有するものである。

ただし開宝蔵本・檀王本・『阿弥陀往生礼仏文』の三本間にあっても本文に異同が認められ（後掲「諸本校異一覽」参照）、何れがより原形を留めているのかを判断することは難しい。単純にその系譜より判断するならば、太平興国二年（九七七）に開版されたと考えられる開宝蔵本<sup>(5)</sup>より、開宝蔵開版以前の唐代写本大蔵経本を祖本にすると推定される檀王本・金剛寺本の方が祖本の成立年代的に、より原形を留めていると推察される。しかし実際には開宝蔵本もその藍本は先行する写本大蔵経本の筈であり、如何なるテキストを底本・校本として開版されたのが不明である為、単純にその系譜のみによって判断するという方法が適当とは言えない。

また相違箇所について文義・語義より何れが適切であるのかを判断することは可能であるが、それが必ずしも『往生礼讃偈』原形を意味するとは限らない。齊藤隆信は日中礼讃第二偈第二句「無量無辺無數億」について、

第二句目「無量無辺無數億」に用字の異同がある。すなわち「無數億」系統本と「……無億数」系統本である。(中略)「量・辺・数」とする前者流布本系は「めかた・ひろさ・数」のことであるから意味上の均衡がとれ、「量・辺・億」とする中国刊本写卷伝承系よりも落ち着きがよさそうである。しかし結論から言うと、後者でなければならぬ。(中略)この第二句は「……無億数」でなければ韻がそろわない道理なのである。

『中国浄土教儀礼の研究 善導と法照の讃偈の律動を中心として』一九四頁)

と、文義・語義よりも詩律が重視された事例を指摘されている。

それでは如何にすれば現存諸本より『往生礼讃偈』の原形を探ることが可能であろうか。本章では現存諸本間の語彙の相違ではなく、構成の相違に着目し、それを改変の痕跡と捉え、相互の前後関係を検討し序列化することにより、『往生礼讃偈』構成の変遷過程を可視化しようとする試みであり、変遷過程を探る端緒として各時礼を構成する礼数(偈頌の総数)と偈頌を構成する句数に着目するものである。

## 第一節 礼数

『往生礼讃偈』(大正蔵本)の所謂「序文(前序)」「大正蔵」四七、四六六上―四六七下)には、六時時礼の依拠と礼数が総標される。

### 【総標】

謹依大経及龍樹天親。此土沙門等所造往生礼讃。集在一処分作六時。唯欲相統係心助成往益。亦願曉悟未聞。遠沾遐代耳。何者。

第一謹依大経釈迦及十方諸仏讃歎弥陀十二光名。勸称礼念定生彼国。十九<sub>、</sub>拜<sub>、</sub>当日没時礼。

第二謹依大経採集要文。以為礼讃偈。二十四<sub>、</sub>拜<sub>、</sub>当初夜時礼。

第三謹依龍樹菩薩願往生礼讃偈。十六<sub>、</sub>拜<sub>、</sub>当中夜時礼。

第四謹依天親菩薩願往生礼讃偈。二十<sub>、</sub>拜<sub>、</sub>当後夜時礼。

第五謹依彥琮法師願往生礼讚偈。二十一、拜、当晨朝時礼。

第六沙門善導願往生礼讚偈。謹依十六觀作。二十拜当午時礼。

『大正蔵』四七、四三八中)

また各時札の冒頭には、それぞれの礼数が標章されている。

【各時礼の標章】

第一謹依大經釈迦仏勸礼讃阿弥陀仏十二光名。求願往生。一十九拜、当日没時礼。

『大正蔵』四七、四三九下)

第二沙門善導謹依大經採集要文。以為札讚偈二十四拜。当初夜時禮。

『大正蔵』四七、四四一上)

第三謹依龍樹菩薩願往生礼讚偈。一十六拜当中夜時礼。

『大正藏』四七、四四二上)

第四謹依天親菩薩願往生礼讚偈。二十拜、當後夜時礼。

『大正藏』四七、四四三上)

第五謹依彥琮法師願往生禮讚偈。二十一、**一、**拜、**二、**當旦起時禮。

『大正藏』四七、四四四上)

第六沙門善導願往生礼讃偈。謹依十六觀作。二十拜。当日中時礼。

『大正藏』四七、四四五中)

この総標・各時礼の標章に記される礼数は諸本間において異なっており、また各本においても総標・各時礼の標章に記される礼数と実際に収録されている礼数に相違が認められる等、『往生礼讃偈』の構成が伝播の過程において何らかの改変を経たものであることが看取される。

諸本『往生礼讃偈』単行本<sup>(6)</sup>、『阿弥陀往生礼仏文』開宝蔵本、檀王本における総標の礼数、各時礼冒頭における標章の礼数、実際に収録される礼数（以下、実数）は以下の通り『往生礼讃偈』を基準とし異なる箇所を網掛にて示した。『阿弥陀往生礼仏文』は総標該当箇所を欠く。

日中	晨朝	後夜	中夜	初夜	日没		
20	21	20	16	24	19	総標	往生礼讃偈
20	21	20	16	24	19	標章	
20	21	20	16	24	19	実数	
						総標	阿弥陀往生礼仏文
20	22	20	16	23	19	標章	
22	22	20	16	23	19	実数	
20	22	20	16	23	19	総標	開宝蔵本
20	22	20	16	23	19	標章	
20	23	20	16	23	19	実数	
20	22	20	16	23	19	総標	檀王本
20	22	20	16	23	19	標章	
20	23	20	16	24	19	実数	

【諸本礼数一覧】

これらの諸本間、及び当該本内における礼数の相違に着目することで、『往生礼讃偈』構成の変遷、並びにその原形を明らかにしたい。

# 一、初夜礼讃

初夜礼讃の礼数を『往生礼讃偈』が総標・標章・実数共に二四礼とするのに対し、『阿弥陀往生礼仏文』開宝蔵本は二三礼、檀王本は総標・標章を二三礼、実数を二四礼とする。この礼数の相違に関して広川堯敏は「敦煌出土善導『往生礼讃』古写本について」『浄土学』三〇―三五、

一九七七）において、『浄土宗全書』四所収『往生礼讃偈』（以下、浄全本）、大正蔵本、伯三八四<sup>7</sup>を比較され、浄全本の第一九礼・二〇礼（『浄土宗全書』四、三六二下）が大正蔵本（『大正蔵』四七、四六九中）・伯三八四<sup>7</sup>では一礼になっていることを指摘し、

浄全本は、後世、智昇下巻本第一九偈を二礼に開いて、第一九偈と第二〇偈とし、総礼数を二四礼に改変したものと推定される（二一五頁）

と本来二三礼であったものが①九礼（以下、各時礼における礼数の次第を丸数字にて示す）を分割し二礼とした為、全二四礼となったものと推測されている。諸本の①九礼は以下の通り（諸本対照の便宜上、字体は通行の字体へ改めた。以下同様）。

【開宝蔵本】三三四—三三七行		【檀王本】一八一—一八六行	
【阿弥陀往生礼仏文】二三六—二三八行		【往生礼讃偈】 <sup>(8)</sup>	
①九 至心帰命礼	西方阿弥陀仏	①九 南無至心帰命礼	西方阿弥陀仏
仏世甚難値	人有信恵難	仏世甚難値	人有信恵難
遇聞希有法	此復最為難	遇聞希有法	此復最為難
自信教人信	難中転更難	願共諸衆生	往生安楽国
大悲弘普化	真成報仏恩		
願共諸衆生	往生安楽国		
		②〇 南無至心帰命礼	西方阿弥陀仏
		自信教人信	難中転更難
		大悲弘普化	真成報仏恩
		願共諸衆生	往生安楽国
		②〇 南無至心帰命礼	西方阿弥陀仏
		自信教人信	難中転更難
		大悲弘普化	真成報仏恩
		願共諸衆生	往生安楽国

初夜礼讃は正礼一九礼（或いは二〇礼）と重礼四礼（弥陀・観音・勢至・諸菩薩礼）からなるが、その正礼①—⑱礼は、

至心帰命礼 西方阿弥陀仏

〔五言四句の偈文〕

願共諸衆生 往生安樂国

の形式をとっている。檀王本・『往生礼讃偈』⑱礼は先行する①—⑱礼同様、四句の形式をとっているが、開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』の⑱礼のみが八句としており、広川堯敏の指摘通り、その差異によつて全二三礼／全二四礼と礼拝の総数に異なりが生じている。

それでは⑱礼は開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』にみられる八句の讃偈と、檀王本・『往生礼讃偈』にみられる四句の讃偈、何れが本来の形式なのであろうか。

一見、①—⑱礼の形式（四句）と一致する檀王本・『往生礼讃偈』が原形かと考えられるが、同じく善導の手による日中礼讃の正礼①—⑱礼では、

①—⑱ 至心帰命礼西方阿弥陀仏 〔八句〕

願共諸衆生往生安樂国

〔大正蔵〕四七、四七二中—四七三中

⑱ 至心帰命礼西方阿弥陀仏 〔一二句〕

願共諸衆生往生安樂国

〔大正蔵〕四七、四七三中

⑱ 至心帰命礼西方阿弥陀仏 〔一五句〕

願共諸衆生往生安樂国

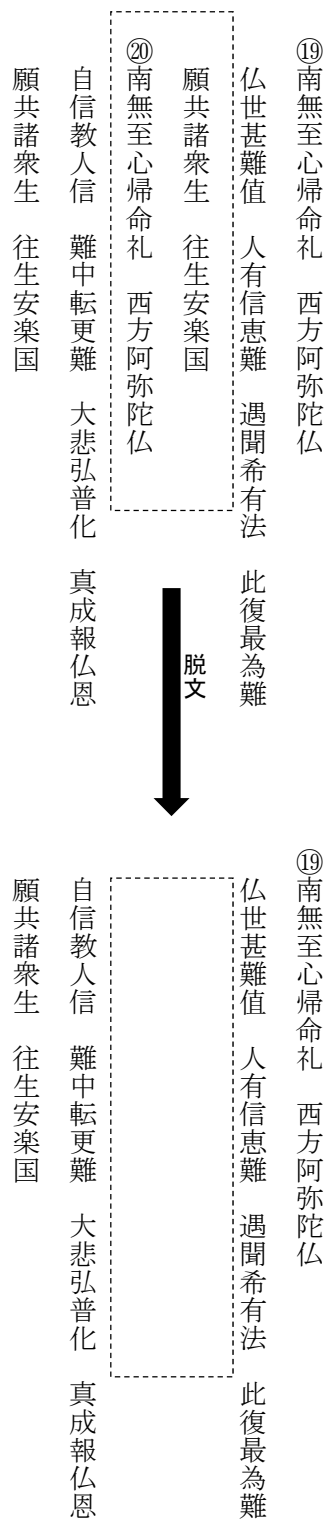
〔大正蔵〕四七、四七三中

と正礼を通じて讃偈の句数は一律でなく終盤には増加しており、一概に句数の一致により檀王本・『往生礼讃偈』を原形とみなすことはできない。

檀王本に注目すると、実数は二四礼であるが、序文の総標、初夜礼讃冒頭の標章には二三礼と記されている。両者の齟齬は当該箇所における変遷の痕跡であると推測されるが、それでは二四礼が二三礼へと変遷するのか、或いは二三礼が二四礼へと変遷するのであろうか。この問題を檀王本における礼数の齟齬を端緒として検討したい。

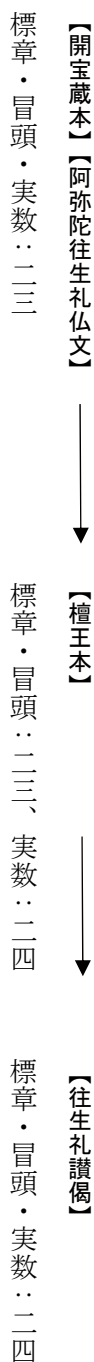


本来、二四礼であったものを二三礼に改変したと仮定するならば、総標、並びに初夜時礼冒頭の標章を二三礼へと変更したにも拘わらず、⑬・⑭礼の偈文がそのままである理由は考え難い。また何故⑬礼と⑭礼を統合するのか積極的理由は考え難い。仮に、



と、点線部の二行（檀王本第一八三・一八四行）を書写過程において脱文したとするならば実数は二三礼となるが、その場合総標、並びに初夜時礼冒頭の標章は原形の二四礼のままとなる筈であり、檀王本にみられる総標・標章二三礼、実数二四礼という事象の説明はできない。

一方、本来二三礼であったものを二四礼に改変したと仮定するならば、その理由は先行する①—⑭礼にみられる一礼四句と同様に、その形式を統一することであり、この為、一礼は増加するが、総標、初夜時礼冒頭の標章はそのままであった為、二三礼という原形の痕跡が残ったものと推測される。このように檀王本の総標、初夜時礼冒頭の標章と実数の齟齬を改変の痕跡とするならば、初夜礼讃の礼数の原形は開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』にみられる二三礼であり、⑬礼（八句）を先行する①—⑭礼にみられる四句の形式に改めた為、一礼増加し『往生礼讃偈』にみられる二四礼になったという変遷過程が推測される。



## 二、晨朝礼讃

晨朝礼讃では『往生礼讃偈』が総標・標章・実数を二一礼とするのに対し、開宝蔵本・檀王本は総標・標章を二三礼、実数を二三礼としており、諸本間のみならず、当該本においても総標・標章と実数における礼数の相違が認められる。この礼数の相違に関して松陰了諦は「晨朝礼讃に於ける礼数に就いて」(『龍谷学報』三〇五、一九三三)において、『七祖聖教』所収『往生礼讃偈』(以下、七祖聖教本)と大正蔵本を比較され、

晨朝礼讃に於ける礼数は「懺儀本」(大正蔵本)に於いて見るが如き二十三拝がその原形であつて、「礼讃本」(七祖聖教本)の二十一拝は観・勢二大士に関する讃文を正礼中より削除して、これを重礼中に転用せるものであらうと推定さるゝ  
(九一頁。丸括弧内は筆者補足)

とその原因を正礼と重礼における観音・勢至讃の重複にあると指摘されている。松陰の指摘通り正礼の観音・勢至の讃文と重礼の観音・勢至の讃文において諸本間で顕著な相違が認められる。開宝蔵本、『阿弥陀往生礼仏文』、檀王本、『往生礼讃偈』の当該箇所は次頁の通り。

開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』では正礼⑤礼に観音の讃文、⑥礼に勢至の讃文があり、重礼⑭礼に観音礼(讃文なし)、⑮礼に勢至礼(讃文なし)とするのに対し、『往生礼讃偈』では正礼中に観音・勢至二菩薩の礼拝は見られず、重礼⑭礼に観音の讃文、⑮礼に勢至の讃文が附されている。なお檀王本には正礼⑤礼に観音の讃文、⑥礼に勢至の讃文があり、更に重礼⑭礼に観音の讃文、⑮礼に勢至の讃文が附されており、正礼と重礼で観音・勢至の讃文が重複している。

この檀王本に認められる観音・勢至に対する讃文の重複は明らかに不自然であり、当該箇所において何らかの改変が行われた痕跡を明確に留めるものと言える。それでは礼数を二一礼とする『往生礼讃偈』と二三礼(標章・冒頭は二三礼)とする開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』の何れが原形なのであろうか。

【開宝藏本】 五二一―五三〇行  
五八六―五八九行  
【阿弥陀往生礼仏文】 三八八―三九四行  
四三三―四三六行

⑤ 至心帰命礼 西方觀世音菩薩

千輪明足下 五道現光中

悲引恒無絶 人帰亦未窮

口宣猶在定 心静更飛通

聞名皆願往 日発幾花叢

願共諸衆生 往生安樂国

⑥ 至心帰命礼 西方大勢至菩薩

慧力標無上 身光備有縁

動揺諸宝国 侍坐一金蓮

鳥群非実鳥 天類豈真天

須知求妙楽 会是戒香全

願共諸衆生 往生安樂国

(中略)

②① 至心帰命礼 西方極樂世界觀世音菩薩

「重礼中に該当讃偈なし」

願共諸衆生 往生安樂国

②② 至心帰命礼 西方極樂世界大勢至菩薩

「重礼中に該当讃偈なし」

願共諸衆生 往生安樂国

【檀王本】 三五二―三六二行  
四一八―四二五行

⑤ 至心帰命礼 西方觀世音菩薩

千輪明足下 五道現光中

悲引恒無絶 人帰亦未窮

口宣猶在定 心静更飛通

聞名皆願往 日発幾花叢

願共諸衆生 往生安樂国

⑥ 至心帰命礼 西方大勢至菩薩

慧力標無上 身光備有縁

動揺諸宝国 侍坐一金蓮

鳥群非実鳥 天類豈真天

須知求妙楽 会是戒香全

願共諸衆生 往生安樂国

(中略)

②① 南無至心帰命礼 西方觀世音菩薩

千輪明足下 五道現光中

悲引恒無絶 人帰亦未窮

口宣猶在定 心静更飛通

聞名皆願往 日発幾花叢

願共諸衆生 往生安樂国

②② 南無至心帰命礼 西方大勢至菩薩

慧力標無上 身光備有縁

動揺諸宝国 侍坐一金蓮

鳥群非実鳥 天類豈真天

須知求妙楽 会是戒香全

願共諸衆生 往生安樂国

【往生礼讃偈】<sup>(10)</sup>

「正礼中に該当讃偈なし」

「正礼中に該当讃偈なし」

(中略)

①⑨ 南無至心帰命礼 西方極樂世界觀世音菩薩

千輪明足下 五道現光中

悲引恒無絶 人帰亦未窮

口宣猶在定 心静更飛通

聞名皆願往 日発幾花叢

願共諸衆生 往生安樂国

②⑩ 南無至心帰命礼 西方極樂世界大勢至菩薩

慧力標無上 身光備有縁

動揺諸宝国 侍坐一金蓮

鳥群非実鳥 天類豈真天

須知求妙楽 会是戒香全

願共諸衆生 往生安樂国

この問題について松陰了諦は前掲論文において、

二菩薩の標示（正礼における「至心帰命礼西方觀世音菩薩」「至心帰命礼西方大勢至菩薩」）が、後の重礼の二菩薩礼と前後重複する点よりして、またそれが正礼中に介在することの不自然なる点よりして、その二菩薩の礼文を正礼中より削除し、而もその讃偈をばこれを重礼中の二菩薩下に転用し、かくて二十三拝より二十一拝への変改を施されたものが、即ち「礼讃本」『往生礼讃偈』であり、従つてこの晨朝礼讃の二菩薩礼に局つて、讃文を安置せらるゝの結果をも見るに至つたものであろうかと考へられる。

（八四・八五頁。丸括弧内は筆者補足）

と、正礼中に観音・勢至礼が介在することの違和感から重礼の観音・勢至礼へ移動し、正礼より削除されたと、開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』にみられる二三礼から『往生礼讃偈』にみられる二礼への改変を想定されている。

同じく広川堯敏は前掲「敦煌出土善導『往生礼讃』古写本について」において、浄全本と大正蔵本の礼数の相違について、日没・初夜・中夜・後夜・晨朝・日中の構成に着目し、重礼四礼が、

- ① 弥陀礼（「哀愍覆護我 令法種増長 此世及後生 願仏常摂受」の四句）  
② 観音礼・③ 大勢至礼・④ 諸菩薩礼（何れも讃文なし）

という形式をとることより、重礼の観音礼・勢至礼に讃文のある浄全本ではなく、開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』と同様の形式・礼数である大正蔵本を原形とみなされている。

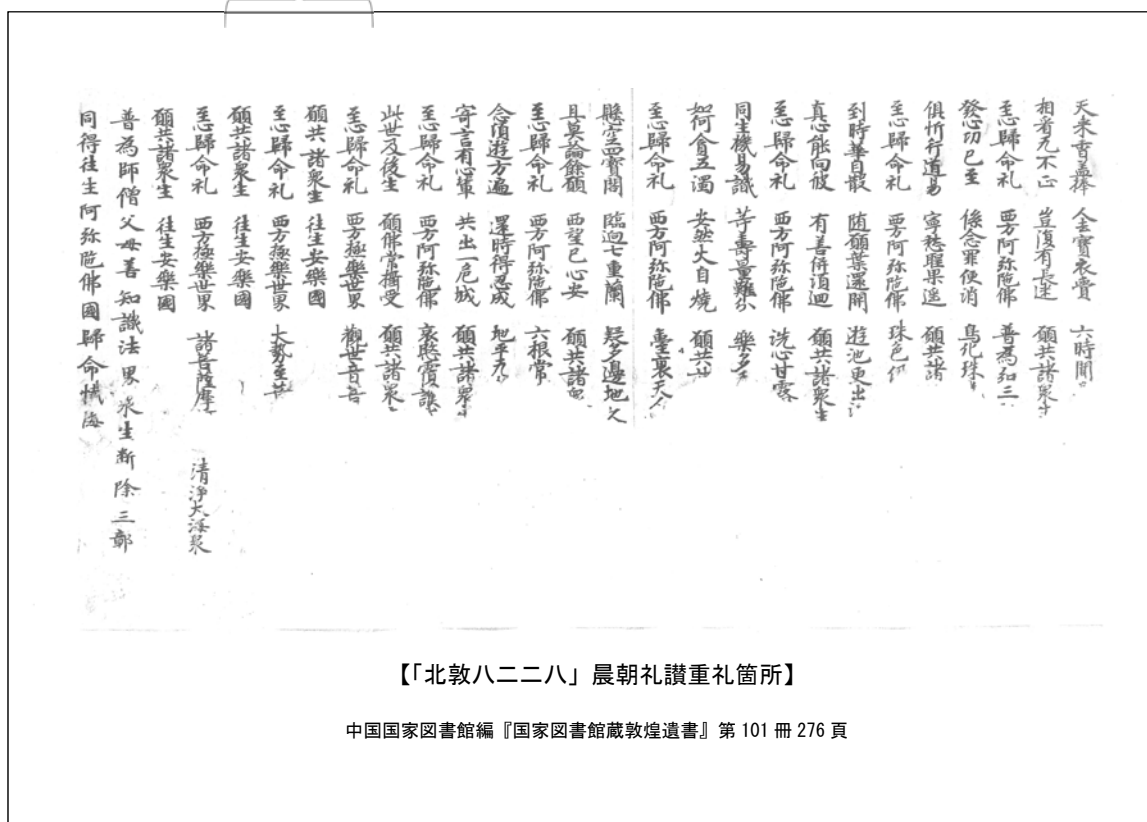
また広川は塚本善隆『唐中期の浄土教』（東方文化学院京都研究所 一九三三）図版五の敦煌本（北敦八二三八、七・八世紀写）により、重礼の観音礼・勢至礼に讃文がないことを確認されている。北敦八二三八は首尾を欠く断簡であり、その現存部分は大正蔵本で言えば晨朝礼讃の⑨礼「至心帰命礼西方阿弥陀仏 欲選当」（『大正蔵』四七、四七二下一行）より日中礼讃の⑩礼「至心帰命礼 西方阿弥陀仏」（『大正蔵』四七、四三七上六行）に該当する。

その為、晨朝礼讃の当該箇所⑤⑥に観音・勢至の讃文の有無を確認することは叶わないが、重礼箇所には、

至心歸命礼 西方極樂世界 觀世音菩薩「下部欠損」  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 大勢至菩薩「下部欠損」  
願共諸衆生 往生安樂國

と、観音・勢至の讃文がみられないことより（下段画像参照）、それが散逸した⑤⑥の当該箇所にあつたものと推測されている。

なお内蒙古自治区黒水城（カラ・ホト Khara-Khoto）より発見された黒水城文献、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵、俄 B 二は晨朝礼讃の別行本であり冒頭に「唐彦琮 法師 集」と記され、晨朝礼讃の⑨礼「止是往人稀」（『大正藏』四七一下、一四行）までが書写されている。書写年代は Lev N. Menshikov（孟列夫）『黒城出土漢文遺書叙録』（王克孝訳 寧夏人民出版社、一九九四、二〇五・二〇六頁）によれば一四世紀中期とされるが、本写本には、



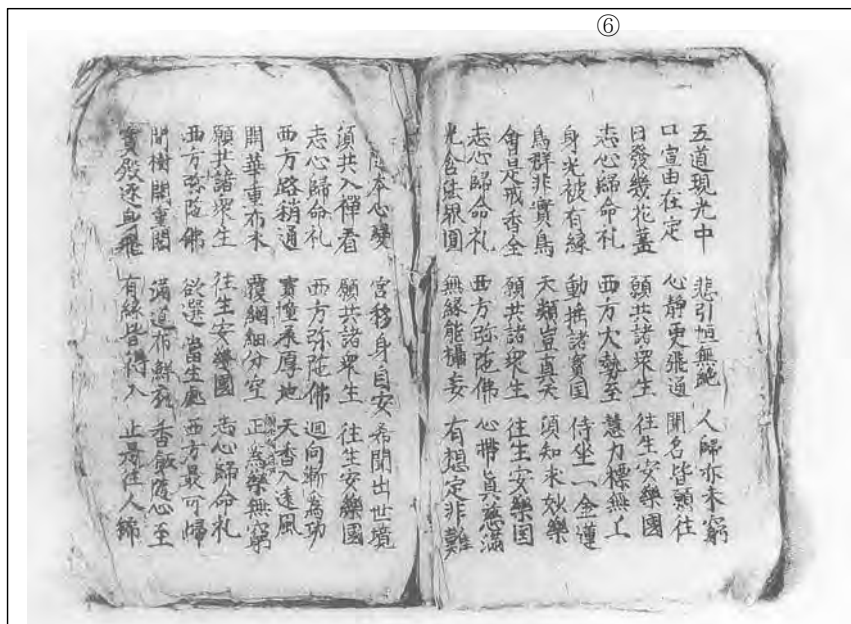
【「北敦八二二八」晨朝礼讃重礼箇所】

中国国家図書館編『国家図書館蔵敦煌遺書』第101冊276頁

⑤志心歸命札 西方觀世音 千輪明足下  
 五道現光中 悲引恒無絕 人歸亦未窮  
 口宣由在定 心靜更飛通 聞名皆願往  
 日發幾花蓋 願共諸衆生 往生安樂國



⑥志心歸命札 西方大勢至 慧力標無上  
 身光被有緣 動搖諸寶國 侍坐一金蓮  
 鳥群非實鳥 天類豈真天 須知求妙樂  
 會是戒香全 願共諸衆生 往生安樂國



【俄 B2 晨朝札讚偈】

『俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡所藏黑水城文獻』⑥、1-2 頁



と、開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』同様、⑤礼・⑥礼に観音・勢至の讃文がみられる。

七―八世紀書写と推定される敦煌本北敦八二三八の重礼に観音・勢至の讃文がみられないこと、一四世紀中期書写と推定される黒水城文献俄B二の正礼⑤・⑥礼に観音・勢至の讃文がみられることに対し、重礼に観音・勢至の讃文が記されるのは何れも日本の鎌倉時代書写・開版の『往生礼讃偈』であり、現存例よりすれば、

【開宝蔵本】【阿弥陀往生礼仏文】【北敦八二三八】【俄B二】

正礼⑤・⑥に観音・勢至の讃文あり（全三礼）——正礼⑤・⑥より重礼へ移動——▼重礼⑯・⑳に観音・勢至の讃文あり（全二礼）

という変遷過程が想定される。

それでは上記の如く全二三礼より全二一礼へと改変が行われたとするならば、檀王本にみられる形態はその過程の那邊に位置付けられるものであるか。檀王本に認められる観音・勢至に対する讃文の重複は明らかに不自然であり、当該箇所についてテキストの改変が行われた痕跡を明確に留めるものであるが、それでは如何なる改変が行われたのであろうか。

まず留意すべき点は檀王本に認められる正礼⑤観音礼・⑥勢至礼と重礼⑪観音礼・⑫勢至礼の重複が、檀王本書写時における改変という檀王本に限定される問題ではない点である。正礼⑤・⑥の讃文を重礼⑪・⑫へと複写し補入、或いは逆に重礼⑪・⑫にある讃文を正礼⑤・⑥へと複写し補入したものでないことは、檀王本の正礼・重礼における讃文の相違より明らかである（相違箇所傍点を附し太字とした）。

【檀王本 正礼】三五五―三六二行

⑤至心歸命礼西方觀世音菩薩

千輪明足下 五道現光中 悲引恒~~无~~、絶 人歸亦未窮  
口宣猶在定 心静更飛通 聞名皆願往 日發幾~~花~~、~~葉~~  
願共諸衆生往生安樂國

【檀王本 重礼】四一八―四二五行

⑪~~南~~、无至心歸命礼西方觀世音菩薩

千輪明足下 五道現光中 悲引恒~~無~~、絶 人歸亦未窮  
口宣猶在定 心静更飛通 聞名皆願往 日發幾~~華~~、~~叢~~  
願共諸衆生往生安樂國

⑥至心歸命礼西方大勢至菩薩

惠力樹无上 身光備有縁 動搖諸寶國 侍坐一金蓮

鳥群非實鳥 天類豈真天 須知求妙樂 會是戒香全

願共諸衆生往生安樂國

②②南无至心歸命礼西方大勢至菩薩

慧力標無上 身光備有縁 動搖諸寶國 待座一金蓮

鳥群非實鳥 天類豈真天 須知求妙樂 會是戒香全

願共諸衆生往生安樂國

この両者の相違は、檀王本内における本校（その書の内部で前後の内容を対照し、異同を見つけ出して訛誤を知る）により讃文が移動されたのではなく、他校（他本との校合）を経て補入されたものであることを示唆している。なおその校合が檀王本書写の際になされたものでないことは、檀王本と直接の書写関係にない金剛寺本にも同様に正礼（二五二―二五七行）と重礼（二八六―二八九行）における観音礼・勢至礼の重複が認められることより判明する。

それでは檀王本にみられる特異な重複は如何なる校訂を経て形成されたものであろうか。注目すべき相違として両者における「南无」の有無が指摘できる。上記の正礼・重礼における観音・勢至讃の重複箇所対照で明らかになように、正礼⑤・⑥の「至心歸命礼」には「南无」が附されず、重礼には②①「南无至心歸命礼西方觀世音菩薩」、②②「南无至心歸命礼西方大勢至菩薩」と「南无」が附加されている。「南无」は敬意、尊敬、崇敬をあらわすナモ（*namo*）の音写で「帰命」「敬礼」と意訳されるものであり、通常、仏名・菩薩名・経名等に冠せられる。「南无至心歸命礼西方觀世音菩薩」では「南无」「歸命」が重複しており、本来「南无」の附加されていない形が文義上、正しいと考えられる。

ただし檀王本・金剛寺本は初夜・中夜・後夜・晨朝・日中時礼の何れもが「南无至心歸命礼」となっており、「南无」が附加されている形が常態と化している。この「南无」が附加されたものが常態であるという観点よりすれば、檀王本・金剛寺本にみられる正礼⑤・⑥に「南无」が附されず、重礼②①・②②に「南无」が附されているという事象は、檀王本・金剛寺本において重礼②①・②②が常態として当初よりあったことを示すものであり、正礼⑤・⑥には観音礼・勢至礼は無く、そこに正礼⑤・⑥に観音礼・勢至礼の讃文を有するテキスト（開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』にみられる形態）と校合された結果、正礼⑤・⑥の位置に「南无」の附加されていない礼讃文が補入されたものと考えられる。

【校本】	⑤ 至心帰命礼 千輪明足下 悲引恒無絶 口宣猶在定 聞名皆願往 願共諸衆生	⑥ 至心帰命礼 慧力標無上 動揺諸宝国 鳥群非実鳥 須知求妙楽 願共諸衆生	⑥ 至心帰命礼 慧力標無上 動揺諸宝国 鳥群非実鳥 須知求妙楽 願共諸衆生	(中略)	②① 至心帰命礼 「重礼中に該当讃偈なし」	願共諸衆生 往生安楽国	②② 至心帰命礼 「重礼中に該当讃偈なし」	願共諸衆生 往生安楽国
【檀王本祖本】(校訂前)	⑤ 「正礼中に該当讃偈なし」	⑥ 「正礼中に該当讃偈なし」	補入	(中略)	②① 南無至心帰命礼 千輪明足下 悲引恒無絶 口宣猶在定 聞名皆願往 願共諸衆生	願共諸衆生 往生安楽国	②② 南無至心帰命礼 慧力標無上 動揺諸宝国 鳥群非実鳥 須知求妙楽 願共諸衆生	願共諸衆生 往生安楽国
【檀王本祖本】(校訂後)	⑤ 至心帰命礼 千輪明足下 悲引恒無絶 口宣猶在定 聞名皆願往 願共諸衆生	⑥ 至心帰命礼 慧力標無上 動揺諸宝国 鳥群非実鳥 須知求妙楽 願共諸衆生	⑥ 至心帰命礼 慧力標無上 動揺諸宝国 鳥群非実鳥 須知求妙楽 願共諸衆生	(中略)	①⑨ 南無至心帰命礼 千輪明足下 悲引恒無絶 口宣猶在定 聞名皆願往 願共諸衆生	願共諸衆生 往生安楽国	②⑩ 南無至心帰命礼 慧力標無上 動揺諸宝国 鳥群非実鳥 須知求妙楽 願共諸衆生	願共諸衆生 往生安楽国

【檀王本祖本における観音・勢至讃の重複形成過程】

このように檀王本・金剛寺本にみられる観音礼・勢至礼の重複より推測される当該箇所の変遷過程は、先に現存例より想定した、

【開宝蔵本】【阿弥陀往生礼仏文】【北敦八三八】【俄B二】

正礼⑤・⑥に観音・勢至の讃文あり（全二三礼）——正礼⑤・⑥より重礼へ移動——▼重礼⑱・⑳に観音・勢至の讃文あり（全二二礼）

という変遷過程と逆行するものと言える。ただし、檀王本・金剛寺本の重礼をみると、

【晨朝礼讃 重礼】

⑳南無至心帰命礼 西方阿弥陀仏

哀愍覆護我 令法種増長 此世及後生 願仏常摂受  
願共諸衆生 往生安楽国

㉑南無至心帰命礼 西方觀世音菩薩

千輪明足下 五道現光中 悲引恒無絶 人帰亦未窮  
口宣猶在定 心静更飛通 聞名皆願往 日發幾華叢  
願共諸衆生 往生安楽国

㉒南無至心帰命礼 西方大勢至菩薩

慧力標無上 身光備有縁 動揺諸宝国 待座一金蓮  
鳥群非実鳥 天類豈真天 須知求妙楽 会是戒香全  
願共諸衆生 往生安楽国

㉓南無至心帰命礼 西方極楽世界諸菩薩清浄大海衆  
願共諸衆生 往生安楽国

【往生礼讃偈】

【初夜・中夜・後夜礼讃 重礼】

南無至心帰命礼 西方阿弥陀仏

哀愍覆護我 令法種増長 此世及後生 願仏常摂受  
願共諸衆生 往生安楽国

南無至心帰命礼 西方極楽世界觀世音菩薩

「讃偈なし」

願共諸衆生 往生安楽国

南無至心帰命礼 西方極楽世界大勢至菩薩

「讃偈なし」

願共諸衆生 往生安楽国

南無至心帰命礼 西方極楽世界諸菩薩清浄大海衆  
願共諸衆生 往生安楽国

と、通常、初夜礼讃重礼（檀王本一八七—一九五行。金剛寺本一四六—一五一）・中夜礼讃重礼（檀王本二四八—二五六行。金剛寺本一七九—一八三行）・後夜礼讃重礼（檀王本三二六—三三四行。金剛寺本二三四—二四〇行）では、

南無至心帰命礼 西方阿弥陀仏（以下略）

南無至心帰命礼 西方極樂世界觀世音菩薩（以下略）

南無至心帰命礼 西方極樂世界大勢至菩薩（以下略）

南無至心帰命礼 西方極樂世界諸菩薩清浄大海衆（以下略）

と阿弥陀仏には「西方」、観音菩薩・勢至菩薩・諸菩薩清浄大海衆には「西方極樂世界」と冠されている。

晨朝礼讃重礼（檀王本四一八—四二五行。金剛寺本二八四—二九〇行）においても②⑩阿弥陀仏礼と②③諸菩薩礼はこの形式に準じているが、②①観音礼・②②勢至礼は、

②⑩南無至心帰命礼 西方阿弥陀仏（以下略）

（檀王本四一五行、金剛寺本二八四行）

②①南無至心帰命礼 西方觀世音菩薩（以下略）

（檀王本四一八行、金剛寺本二八六行）

②②南無至心帰命礼 西方大勢至菩薩（以下略）

（檀王本四二二行、金剛寺本二八八行）

②③南無至心帰命礼 西方極樂世界諸菩薩清浄大海衆（以下略）

（檀王本四二六行、金剛寺本二九〇行）

と「西方」とだけ附されており通常の重礼にみられる「極樂世界」が冠されていない。これは当該②①・②②の二礼が本来重礼ではなく正礼に位置していた痕跡と考えられ、この二礼が正礼より重礼へと移動されたことを示唆するものと捉えられる。つまり檀王本・金剛寺本における観音礼・勢至礼の重複は、

1. 正礼⑤・⑥に観音・勢至菩薩の讃文あり。重礼②①・②②は讃文なし（全二三礼。開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』にみられる形態）

2. 正礼⑤・⑥を重礼②①・②②へと移動し統合。正礼⑤・⑥は削除（全二二礼。『往生礼讃偈』にみられる形態）

3. 他本と校合し正礼⑤・⑥へ観音・勢至菩薩の礼讃文を補入。正礼⑤・⑥と重礼②①・②②で観音・勢至菩薩の讃文が重複（全二三礼）

という二段階の改変を経て現在の形態となったことが推察される。1.の形態を留めているテキストが開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』であり、2.の形態を留めているのが『往生礼讃偈』と言えよう。この様な変遷がどの時点で起こったのかは判然としないが、日本の平安・鎌倉時代における一切経の書写が、過誤でさえも忠実に書写するという藍本の複写を志向する傾向が顕著なことよりすれば、ここまでの移動・補入が日本で行われたとは考え難く、中国での所行と推測される。

以上、檀王本・金剛寺本に認められる観音・勢至菩薩に対する讃文の重複をテキスト改変の痕跡として、その変遷を想定することにより当該箇所原形は開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』にみられる形式であり全二三礼であることが推定される。それが正礼における通常の阿弥陀仏に対する礼讃文（「至心歸命礼 西方阿弥陀佛」）以外の礼讃文（「至心歸命礼 西方觀世音菩薩」「至心歸命礼 西方大勢至菩薩」）が混在しているとの問題意識より、重礼の観音・勢至礼へと移動され、『往生礼讃偈』に認められる全二二礼へと改変されたという変遷過程が想定される。

なお、現存諸本より晨朝礼讃の礼数は二三礼と推定されるが、注意すべきは開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』・檀王本・金剛寺本の何れもが標章・冒頭においてその礼数を二二礼としていることである。<sup>(13)</sup>従来、この二二礼について松陰了諦、広川堯敏は単なる過誤であろうとして一顧だにされていないが、系統の異なる開宝蔵本と『阿弥陀往生礼仏文』と檀王本・金剛寺本の何れもが二二礼とすることは、仮にそれが過誤としてもそれは個々の写本レベルで生じたものとは考え難い。或いは現行の実数二三礼は改変後の姿であり、原形は二二礼であったのかもしれないが、それを実証することは叶わない。なお『阿弥陀往生礼仏文』は他本の⑩礼に相当する礼讃偈を欠いており、その実数は全二三礼となっているが、本書以外に⑩礼を欠くテキストは確認されておらず、それが原形であるのか、或いは単なる『阿弥陀往生礼仏文』の脱文であるのかは判断不能である。



### 三、日中礼讃

日中礼讃では開宝蔵本、檀王本、『往生礼讃偈』が総標・標章・実数を二〇礼とするのに対し、『阿弥陀往生礼仏文』は標章を二〇礼、実数を二二礼とする。この相違は重礼における観音・勢至・諸菩薩礼の相違に起因する。

【阿弥陀往生礼仏文】五四二―五四七行

②〇至心帰命礼西方極楽、観音菩薩摩訶薩

願共諸衆生 往生安樂国

②①至心帰命礼西方阿弥陀仏 大勢至菩薩摩訶薩

願共諸衆生 往生安樂国

②②至心帰命礼西方極楽、諸菩薩摩訶薩清浄、

願共諸衆生 往生安樂国

【開宝蔵本】七二六―七二八行

【檀王本】五四九―五五一〇行

【往生礼讃偈】<sup>(15)</sup>

②〇至心帰命礼西方阿弥陀仏

観音勢至諸菩薩清浄大海衆

願共諸衆生 往生安樂国

\*檀王本・『往生礼讃偈』は「南無至心……」とする。

この相違について広川堯敏は「七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』について」において、

「日中礼讃」の礼数について、流布本、智昇下巻本は二〇拝、七寺本『阿弥陀往生礼仏文』、P二七二R2、S二六五九、智昇上巻本（大正蔵本『集諸経礼懺儀』卷上）は二二拝である。ところが、後者の二二拝の偈文は善導の礼讃形式である重礼四拝に準拠しているため、二十二拝がもともとの原形と推定することができる。（牧田諦亮監 落合俊典編『七寺古逸経典研究叢書第五巻 中国日本撰述経典（其之五）・撰述書』二〇〇〇。七三〇頁）

と敦煌本を参照した上で、通常の重礼四拝の形式より『阿弥陀往生礼仏文』にみられる二二礼が原形であると推定されている。広川堯敏の指摘通り諸本にみられる通常の重礼の形式、

至心帰命礼	西方阿弥陀仏	哀愍覆護我	令法種増長	此世及後生	願仏常摂受	願共諸衆生	往生安樂国
至心帰命礼	西方極樂世界觀世音菩薩		願共諸衆生	往生安樂国			
至心帰命礼	西方極樂世界大勢至菩薩		願共諸衆生	往生安樂国			
至心帰命礼	西方極樂世界諸菩薩清浄大海衆		願共諸衆生	往生安樂国			

よりすれば、日中礼讃の重礼のみ観音・勢至・諸菩薩を一礼に纏めることは不規則であると言える。では『阿弥陀往生礼仏文』の重礼が諸本にみられる通常の重礼と同様かと言えば必ずしもそうではなく、そこには、⑳礼「観音菩薩摩訶薩」、㉑礼「大勢至菩薩摩訶薩」、㉒礼「諸菩薩摩訶薩清浄」と「摩訶薩」が附されている。この「摩訶薩」の附加は『阿弥陀往生礼仏文』においても初夜（二三九―二四四行）・中夜（二九七―三〇五行）・後夜（三六四―三七一行）・晨朝（四三二―四三八行）礼讃の重礼にはみられず、日没礼讃の重礼（二四二―二五三行）にのみ確認される（㉓「諸菩薩」には附されていない）。

⑰南无西方極樂世界觀世音菩薩摩訶薩願共衆生咸歸命故

⑱南无西方極樂世界大勢至菩薩摩訶薩願共衆生咸歸命故

此二菩薩一切衆生臨命終時共村花教  
授与行者阿弥陀佛放大光明照行者身後与  
無數化佛菩薩者聞大衆等一時授手如彈指  
頃即得往生為報恩故至心礼之一拜

⑲南无西方極樂世界諸菩薩清浄大汝衆願

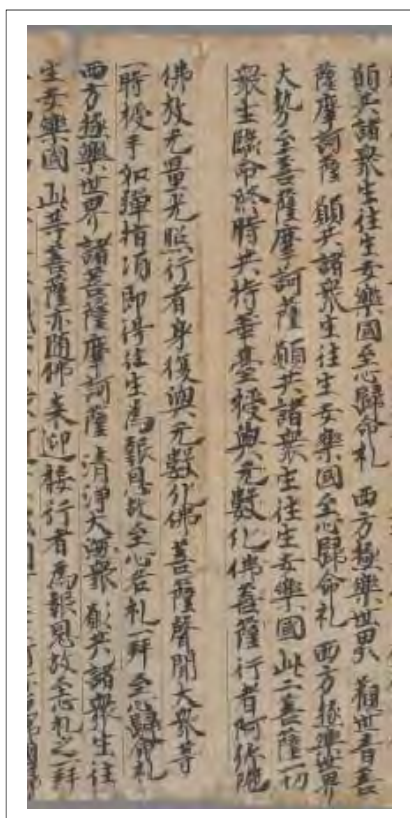
共衆生咸歸命故我頂礼生彼国

此等諸菩薩亦理佛来迎接行者為報恩

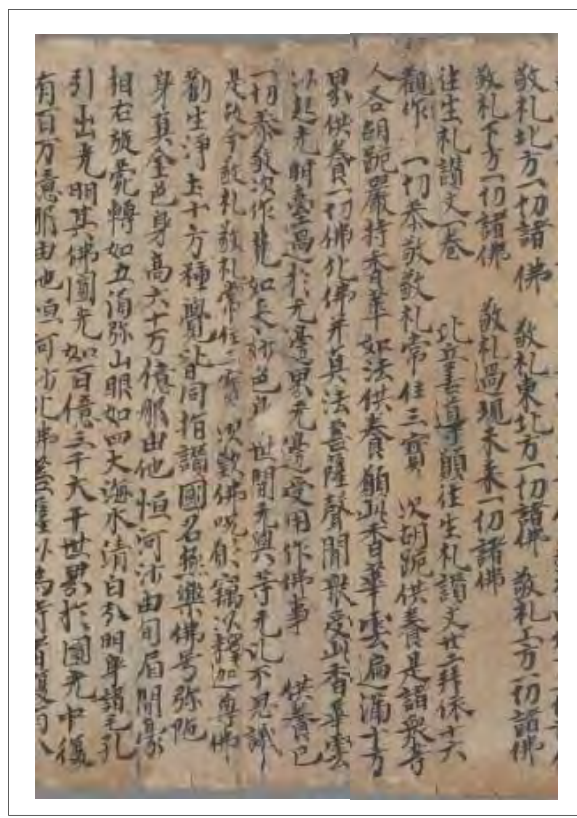
故至心礼之一拜

この重礼における「摩訶薩」の附加は敦煌本<sup>(16)</sup>（伯三八四一〈日没・初夜・中夜〉、北敦八二二八〈晨朝〉、斯二五五三・斯二六五九・伯二七二二〈日中〉）にも認めれるが、この内、日中礼讃偈の別行本伯二七二二には礼讃文だけでなく実際の日中礼讃における次第が記されており注目すべきテキストである（斯二六五九も同様）。首題には「往生礼讃文一卷 比丘善導願往生礼讃文廿二拜依十六観作」と礼数が記されており、重礼の⑩観音・⑪勢至・⑫諸菩薩礼も、

・・・・・⑩至心歸命礼 西方極樂世界 觀世音菩薩、  
薩摩訶薩 願共諸衆生往生安樂國⑫至心歸命礼 西方極樂世界  
大勢至菩薩摩訶薩 願共諸衆生往生安樂國 此二菩薩一切  
衆生臨命終時共持華臺授與無數化佛菩薩行者阿弥陀<sup>(ミセケテ符号あり)</sup>  
佛放无量光照行者身復與無數化佛菩薩聲聞大衆等  
一時授手如彈指頃即得往生為報恩故至心各礼一拜 ⑫至心歸命礼  
西方極樂世界 諸菩薩摩訶薩 清淨大海衆 願共諸衆生往  
生安樂國 此等菩薩亦随佛来迎接行者為報恩故至心礼之一拜



【同右】重礼 観音・勢至・諸菩薩礼  
『同』一七、三六六頁



【伯二七二二】日中礼讃別行本

法国国家図書館編『法国国家図書館蔵敦煌西域文獻』一七、三六五頁

と「摩訶薩」が附され各一札となっており、実際の日中札讃偈の執行においては『阿弥陀往生礼仏文』にみられるように、重札の観音・勢至・諸菩薩札も一纏めではなかったことが看取される。

このように敦煌本伯二七二からは実際に執行された日中札讃の形式が伺えるが、それでは伯二七二にみられる二二札が本来の形式なのであろうか。本来、二二札であったものを二〇札へ改変したと仮定するならば、『阿弥陀往生礼仏文』の標章を二〇札へと改変したにも拘わらず、重札の当該箇所をそのままにする理由は考え難い。開宝蔵本・檀王本・『往生礼讃偈』の何れもが総標・標章・実数を二〇札とし、また『阿弥陀往生礼仏文』も標章を二〇札とすることよりすれば、むしろ原形は二〇札であり、実際の執行に際し重札の形式を日没・初夜・中夜・後夜・晨朝に倣った為、実数は二二札となるが、標章は原形二〇札を留め、別行本において標章も実数に倣い改められる、という変遷過程が想定される。ただし、何故、善導が日中札讃のみ観音・勢至・諸菩薩を一札としたのか、その理由は不明である。

【開寶蔵】【檀王本】【往生礼讃偈】	↓	【阿弥陀往生礼仏文】	↓	【伯二七二】
総標…二〇札		総標…首欠部に該当		総標…なし
標章…二〇札		標章…二〇札		標章…二二札
実数…二〇札		実数…二二札		実数…二二札
⑳ 至心帰命礼西方阿弥陀仏		⑳ 至心帰命礼西方極樂、		⑳ 至心帰命礼西方極樂世界 観世音菩薩摩訶薩
観音勢至諸菩薩清浄大海衆		願共諸衆生 往生安樂国		願共諸衆生往生安樂国
願共諸衆生 往生安樂国		⑳ 至心帰命礼西方阿弥陀仏		⑳ 至心帰命礼西方極樂世界 大勢至菩薩摩訶薩
		願共諸衆生 往生安樂国		願共諸衆生往生安樂国 (中略)
		㉒ 至心帰命礼西方極樂、		㉒ 至心帰命礼西方極樂世界 諸菩薩摩訶薩
		願共諸衆生 往生安樂国		清浄大海衆 願共諸衆生往生安樂国 (省略)

## 第二節 句数

### 一、中夜礼讃 第一礼

中夜礼讃の正礼は龍樹 (नगार्जुन Nagārjuna) 撰、闍那崛多 (शतगुप्त Jānagupṭa) 三蔵訳とされる七言四句の十二偈からなる讃文『十二礼』に「至心帰命礼西方阿弥陀仏」「願共諸衆生往生安樂国」を附す礼讃である。その①礼は諸本により句数の相違が認められる。

【開宝蔵本】三三三—三五七行

①至心帰命礼西方阿弥陀仏

稽首天人所恭敬 阿弥陀仏両足尊

在彼微妙安樂国 無量仏子衆围绕

故我頂礼弥陀仏

願共諸衆生 往生安樂国

【阿弥陀往生礼仏文】二四九—二五二行

①至心帰命礼西方阿弥陀仏

稽首天人所恭敬 阿弥陀仙両足尊

在彼微妙安樂国 無量仏子衆围绕

願共諸衆生 往生安樂国

【檀王本】二〇〇—二〇三行

【往生礼讃偈】<sup>(17)</sup>

\*檀王本・『往生礼讃偈』は「南無至心……」とする。

開宝蔵本には五句目に「故我頂礼弥陀仏」が認められるのに対し、『阿弥陀往生礼仏文』、檀王本、『往生礼讃偈』には当該句が認められず四句で構成されている。どちらが原形であろうか。

中夜礼讃正礼の讃文は七言四句で構成されるが、当該①礼と末尾の⑫礼を除く②—⑪礼の讃文は、何れも七言四句の内、前三句は阿弥陀仏への讃歎であり、四句目には「故我頂礼弥陀仏」と定型句が配されている。

②—⑪至心帰命礼西方阿弥陀仏

○○○○○○○○ ○○○○○○○

○○○○○○○○ 故我頂礼弥陀仏

願共諸衆生 往生安樂国

『大正藏』四七、四六九下—四七〇上

例外の⑫礼は、

⑫至心帰命礼西方阿弥陀仏

我說彼尊功德事 衆善無邊如海水

所作善根清浄者 廻施衆生生彼土

願共諸衆生 往生安樂国

我說けり、彼の尊の功德の事、 衆善無辺にして海水の如し。

作す所の善根清浄なれば、 衆生に廻施して彼土に生ぜん。

『大正藏』四七、四七〇上

と最後の偈である為、四句目が廻向を表する句となっている。

後続②—⑪礼の形式よりすれば「故我頂礼弥陀仏」とする開宝藏本の方が原形のように考えられるが、松陰了諦は『往生礼讃本文校異並びに前序の研究』（真宗学研究所出版部、一九三七）において大正藏本と七祖聖教本を対校され、

「懺儀本」には「故我頂禮彌陀佛」の一句が加へられてある。これは次偈以下の第四句目と一致する句ではあるけれども、ただこの一首のみを五句とすることは、偈頌の形式上よりして不可であるから、この一句は削除すべきである。  
(二〇八頁)

と讃偈を構成する句数により、①礼に認められる「故我頂礼弥陀仏」を削除すべきであるとされる。



善導『往生礼讃偈』以外に『十二礼』を引用するものとして初唐の迦才『浄土論』が知られる。『浄土論』巻中第五「引聖教為證」には、

經引十二部。一無量壽經。二觀經。三小弥陀經。四鼓音声王經。五称揚諸仏功德經。六發覺浄心經。七大集經。八十方往生經。九藥師經。十般舟經。十一大阿弥陀經。十二無量清浄覺經。論引七部。一往生論。二起信論。三十住毘婆娑論。四一切經中弥陀偈。五宝性論。六龍樹十二礼。七摂大乘論也。

（『大正蔵』四七、九一下）

と、浄土へ生ずる道理の文証として一二經七論を挙げるが、その中には『十二礼』もみられ、全文が収録されている。そこにも、

①稽首天人所恭敬 阿弥陀仙両足尊

在彼微妙安樂国 無量仏子衆圍繞

願共諸衆生 往生安樂国

②金色身浄如山王 奢摩他行如象歩

両目浄若青蓮華 故我頂礼弥陀仏

願共諸衆生 往生安樂国

（『大正蔵』四七、九六中）

と①礼に「故我頂礼弥陀仏」の句は認められない。同じく迦才『浄土論』巻上第三「定往生因」においても、

可誦取龍樹菩薩十二礼。謂稽首天人所恭敬 阿弥陀仙両足尊 在彼微妙安樂国 無量仏子衆圍繞等。此是禪那三藏別訳出也。（『大正蔵』四七、八九中）  
龍樹菩薩『十二礼』を誦取すべし。謂わく「稽首天人所恭敬 阿弥陀仙両足尊 在彼微妙安樂国 無量仏子衆圍繞」等、此は禪那三藏の別訳出なり。

と①礼は四句を以て引用されており、やはり「故我頂礼弥陀仏」の句は認められない。<sup>(18)</sup>

また中夜礼讃の別行本と考えられる北敦一八九七（七—八世紀写）<sup>(19)</sup>でも①礼の該当箇所「故我頂礼弥陀仏」の一句は附されていない（下段影印参照）。

また文義上においても、

②金色身淨如山王 奢摩他行如象歩 両目淨若青蓮花 故我頂礼弥陀仏

金色の身淨くして山王の如し。奢摩他の行は象の歩むが如し。両目の淨きこと

青蓮花の若し。故に我弥陀仏を頂礼したてまつる。

と、②礼から①礼は前三句の阿弥陀仏に対する讃歎が、第四句の礼拝「故我頂礼弥陀仏」（故に我弥陀仏を頂礼したてまつる）の理由となっているのに対し、①礼では、

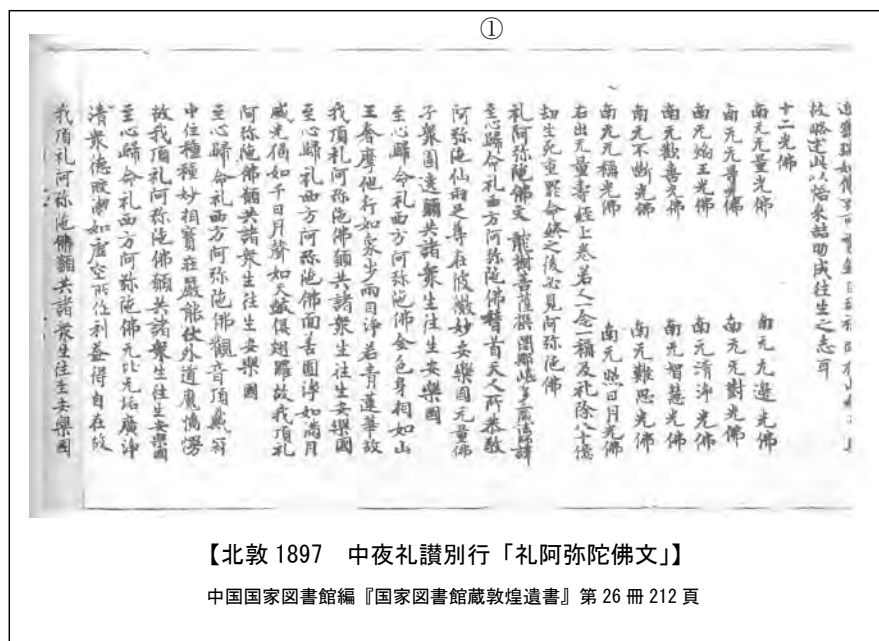
①稽首、天人所恭敬 阿弥陀仙両足尊 在彼微妙安樂国 無量仏子衆圍遶

天人に恭敬せらるる阿弥陀仙両足尊を稽首したてまつる。彼の微妙の安樂国に在しまして

無量の佛子衆に圍遶せられたまえり。

と第一句において既に「稽首」と礼することが表明されており、そこに礼拝「故我頂礼弥陀仏」（故に我弥陀仏を頂礼したてまつる）が附されるのは不審と言える。

以上、中夜礼讃①礼は「故我頂礼弥陀仏」の附されない『阿弥陀往生礼仏文』、檀王本、『往生礼讃偈』にみられる四句の形式が原形と考えられ、開宝藏本における「故我頂礼弥陀仏」の附加は、後続②—④礼にみられる形式との本校により統一されたものと推測される。



【北敦 1897 中夜礼讃別行「礼阿弥陀佛文」】

中国国家図書館編『国家図書館蔵敦煌遺書』第 26 冊 212 頁

## 二、後夜礼讃 第一礼

後夜礼讃正礼は天親（世親、*Āśaṅga* Vasubandhu）撰、菩提流（留）支（*Bodhiśuci* Bodhiruci）訳とされる『無量寿経優婆提舍願生偈』（『無量寿経論』『往生論』『浄土論』）の願生偈（五言四句の二四偈）より一六偈を取り讃文として「至心帰命礼西方阿弥陀仏」「願共諸衆生往生安楽国」を附す礼讃である。その①礼は諸本により以下の相違が認められる。

【開宝藏本】 四四四一 四四五五	【阿弥陀往生礼仏文】 三三三三 三三三三	①至心帰命礼 西方阿弥陀仏 世尊我一心 帰命尽十方 無礙光如来 願生安楽国
【檀王本】 二八一 二八三	①南無至心帰命礼 西方阿弥陀仏 世尊我一心 帰命尽十方 無礙光如来 願生安楽国 願共諸衆生 往生安楽	①南無至心帰命礼 西方阿弥陀仏 世尊我一心 帰命尽十方 無礙光如来 願生安楽国 願共諸衆生 往生安楽
【往生礼讃偈】 二六〇	①南無至心帰命礼 西方阿弥陀仏 世尊我一心 帰命尽十方 無礙光如来 與仏教相応 願共諸衆生 往生安楽国	①南無至心帰命礼 西方阿弥陀仏 世尊我一心 帰命尽十方 無礙光如来 與仏教相応 願共諸衆生 往生安楽国

開宝藏本・『阿弥陀往生礼仏文』では通常末尾に附される「願共諸衆生 往生安楽国」がみられないのに対し、檀王本、『往生礼讃偈』には末尾の「願共諸衆生 往生安楽国」（檀王本は「国」を欠く）が認められる。なお『往生礼讃偈』のみ第四句を「願生安楽国」ではなく「與仏教相応」と全く別の句とする。

当該箇所相違について松陰了諦『往生礼讃本文校異並びに前序の研究』は、

「懺儀本」（大正藏本）に於ては天親の『浄土論』と同じく「願生安楽国」に作り、次の「願共諸衆生往生安楽国」の廻向文が略されてあるが、いまは「礼讃本」（七祖聖教本）の形を以て適正と考ふ。（中略）今は一心願生の安心を明かすのが主題ではなくて、礼讃の行を

明かすを以て主題となすが故に、特に第四句目に「與仏教相応」の句を安し、以て信行の如実なる所以を顕彰せんとされたものである。詳言すれば一心帰命の安心は、釈尊の教勅弥陀の誓願に契当せる信順無疑の信相を表せるものであり、この一心の安心より現れ出づるものが即ち礼讃の行法であつて、是の如き仏教と相応せる信行こそ、実にこれ如実修行の相たるの趣を詮示されたものと窺はれる。

(一一一—一一五頁。丸括弧内は筆者補足)

と、一心帰命の安心より現れ出るものが礼讃であり、この「與仏教相応」の信行が如実修行の相であることを表していると解釈され、「與仏教相応」が相応しいとされている。善導『観無量寿経疏』『玄義分』には、

言南無者即是帰命、亦是発願廻向之義。言阿弥陀仏者即是其行。

『大正蔵』三七、二五〇上

「南無」と言うは即ち是れ帰命なり、亦た是れ発願廻向の義なり。「阿弥陀仏」と言うは即ち是れ其の行なり。

との記述がみられるので、「一心帰命」 Ⅱ 至心発願廻向(信)、「尽十方無礙光如来」 Ⅱ 行、と捉え、善導において信行が「與仏教相応」するものであると解釈できなくもないが、松陰了諦が①礼の主題を「一心願生の安心を明かすのが主題ではなくて、礼讃の行を明かすを以て主題となす」とするのは、「與仏教相応」の句を前提とする解釈であり、「與仏教相応」を前提として「與仏教相応」を適切とする論点先取を犯している。後夜礼讃讃文の典拠である『無量寿経優婆提舍願生偈』において「與仏教相応」は、

①世尊我一心 帰命尽十方 無礙光如来 願生安樂国。

②我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 與仏教相応。

『大正蔵』二六、一三〇下

①世尊、我一心に尽十方無礙光如来に帰命したてまつりて安樂国に生ぜんと願ず。

②我修多羅の真実功德相によりて願偈を説きて総持し、仏教と相応せん。

と、②偈の第四句目に該当し、その原義は天親による願生偈が『無量寿経』と相応する「優婆提舍」（論議）であることを述べたものであることは、願生偈を説き終わった直後に、

無量壽修多羅章句、我以偈總説竟。

（『大正藏』二六、一三二中）

『無量寿修多羅』の章句、我偈を以て総説し竟んぬ。

と述べられていることから明白である。所謂「帰敬偈」と言われる①偈の第四句目「願生安楽国」を「與仏教相応」とすることは『無量寿経優婆提舍願生偈』の原義よりすれば考え難く、諸本においても確認されていない。<sup>(21)</sup>

以上、『往生礼讃偈』にみられる「世尊我一心 帰命尽十方 無礙光如来 與仏教相応」では文義が通り難く、本来は開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』、檀王本にみられる「世尊我一心 帰命尽十方 無礙光如来 願生安楽国」であつたと推測される。

それでは「願生安楽国」に続いて「願共諸衆生往生安楽国」が附される檀王本と、附されない開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』の何れが原形なのであろうか。後夜礼讃は、

至心帰命礼西方阿弥陀仏

「五言四句」

願共諸衆生往生安楽国

を常態としており、その形式よりすれば「願共諸衆生往生安楽国」を附す檀王本が原形を留めていると考えられる。ただし檀王本を原形とするならば、

①南無至心帰命礼 西方阿弥陀仏

南無し至心に帰命して西方の阿弥陀仏を礼したてまつる。

世尊我一心 帰命尽十方 無礙光如来 **願生安楽国**

世尊、我一心に尽十方無礙光如来に帰命したてまつりて、**安楽国に生ぜんと願する**。

願共諸衆生 往生安楽

願はくは諸の衆生と共に安楽に往生せん。

と傍線部「願生安楽国」「願共諸衆生 往生安楽」と願生の文義が重複している。その為、開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』は「願共諸衆生 往生安楽国」を削除し、一方『往生礼讃偈』は第四句目「願生安楽国」を「與仏教相応」へと改変することで重複を回避したものと推測される。

【檀王本】 \* 「願生安楽国」「願共諸衆生 往生安楽国」が重複。

①南無至心帰命礼 西方阿弥陀仏

①南無至心帰命礼 西方阿弥陀仏

世尊我一心 帰命尽十方

世尊我一心 帰命尽十方

無礙光如来 **願生安楽国**

無礙光如来 **與仏教相応**

\* 「願生安楽国」を「與仏教相応」へ改変。

願共諸衆生 往生安楽

願共諸衆生 往生安楽国

【開宝蔵本】 【阿弥陀往生礼仏文】

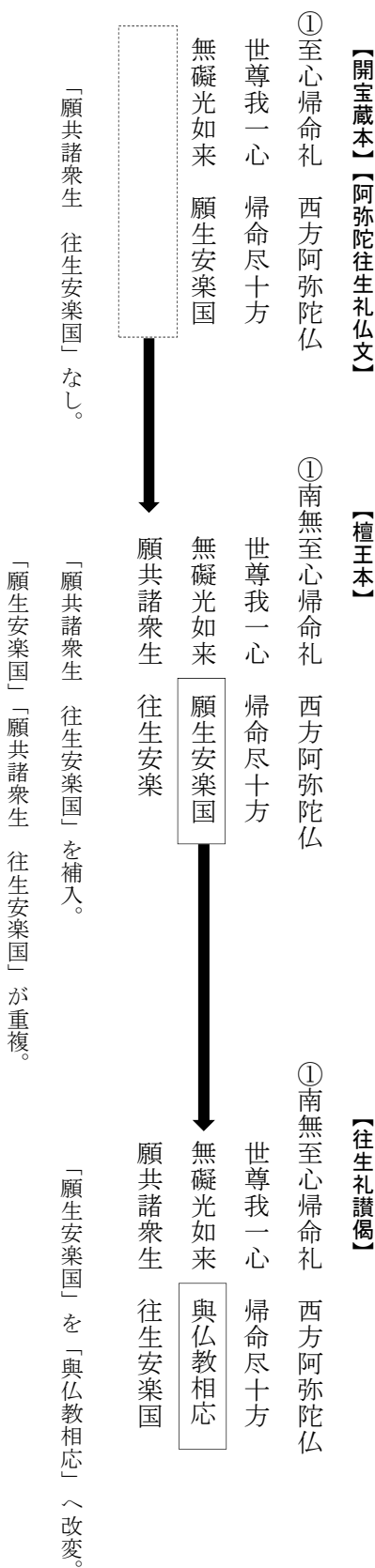
①至心帰命礼 西方阿弥陀仏

世尊我一心 帰命尽十方  
無礙光如来 願生安楽国

\* 「願共諸衆生 往生安楽国」を削除。



或いは開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』が原形であり、第四句目に「願生安楽国」とある為、①礼には「願共諸衆生 往生安楽国」が当初より附されなかったとも推測される。これに対し、後続の②―②⑩礼と形式の統一を図る為、「願共諸衆生 往生安楽国」が補入され、「願生安楽国」「願共諸衆生 往生安楽国」の重複が発生する(檀王本にみられる形態)。この「願生安楽国」「願共諸衆生 往生安楽国」の重複を解消する為、第四句「願生安楽国」が「與仏教相應」と改変されたか(『往生礼讃偈』にみられる形態)。



儀礼形式として統一のとれた檀王本が原形であるか、願生の重複のない開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』が原形であるか判断は難しい。ただ『往生礼讃偈』にみられる「願生安楽国」を「與仏教相應」へと改変する原因は、檀王本にみられる「願生安楽国」「願共諸衆生 往生安楽国」の重複にあると考えられ、檀王本の形態から『往生礼讃偈』へという改変の過程を想定することができる。

おわりに

以上、開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』・檀王本・『往生礼讃偈』（京大本・専修寺本・誓願寺本）における礼数・句数の相違に着目し、それを改変の痕跡と捉え序列化することにより、『往生礼讃偈』構成の変遷過程を可視化してきた。結果は以下の通り。

- ・初夜礼讃の礼数 二三礼 → 二四礼（『阿弥陀往生礼仏文』・開宝蔵本 → 檀王本 → 『往生礼讃偈』）
- ・晨朝礼讃の礼数 二三礼 → 二一礼（本来二三礼か。『阿弥陀往生礼仏文』・開宝蔵本 → 『往生礼讃偈』 → 檀王本）
- ・日中礼讃の礼数 二〇礼 → 二二礼（開宝蔵本・檀王本・『往生礼讃偈』 → 『阿弥陀往生礼仏文』 → 伯二七二二）
- ・中夜礼讃①礼の句数 四句 → 五句（『阿弥陀往生礼仏文』・檀王本・『往生礼讃偈』 → 開宝蔵本）
- ・後夜礼讃①礼の相違 「願共諸衆生 往生安楽国」なし → 「願共諸衆生 往生安楽国」附加 → 「願生安楽国」を「與仏教相應」へ改変

（『阿弥陀往生礼仏文』・開宝蔵本 → 檀王本 → 『往生礼讃偈』）

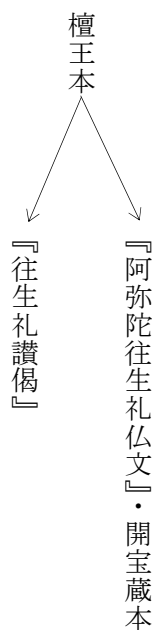
或いは、

「願共諸衆生 往生安楽国」あり  
↓  
「願共諸衆生 往生安楽国」削除（『阿弥陀往生礼仏文』・開宝蔵本）  
↓  
「願生安楽国」を「與仏教相應」へ改変（『往生礼讃偈』）  
（檀王本）

これら推定される構成の変遷に対し、現存諸本を配当した序列が、

『阿弥陀往生礼仏文』・開宝蔵本 → 檀王本 → 『往生礼讃偈』  
『阿弥陀往生礼仏文』・開宝蔵本 → 『往生礼讃偈』 → 檀王本  
開宝蔵本・檀王本・『往生礼讃偈』 → 『阿弥陀往生礼仏文』 → 伯二七二二  
『阿弥陀往生礼仏文』・檀王本・『往生礼讃偈』 → 開宝蔵本

『阿弥陀往生礼仏文』・開宝蔵本↓檀王本↓『往生礼讃偈』。或いは、



と一律でないことは、諸本が「原本 ↓ 甲本 ↓ 乙本 ↓ 丙本 ↓ 丁本」と同一系譜上の前後関係として単純に配置されるものではなく、異なる系譜上に位置するものであり、またその系譜が校訂を経ることによって複雑に交差していることを示唆している。つまり開宝蔵本・『阿弥陀往生礼仏文』・檀王本・『往生礼讃偈』の諸本の関係は、甲本に依るべきであると一概に断ぜられるものではない。

ただし、本章の検討結果より言えば、『阿弥陀往生礼仏文』、開宝蔵本は比較的原形を留めていることが看取される。檀王本は整合が取れていない不規則な点がみられるが、それは系統の異なるテキストとの校訂によるものであり、唐代写本大蔵経時代における多様なテキストの痕跡を留めるものと捉えられる。『往生礼讃偈』（専修寺本・誓願寺本）は総標・標章・実数が全て一致しており最も整合の取れたテキストとなっているが、それは原形を保っていることを意味するものではなく、実数の改変に則し総標・標章も改変した為であると考えられる。

あくまでもこの見解は、本章にて検討対象とした札数・句数の相違箇所より帰納したものであり、当該箇所以外における語彙単位原形判断には文義・語義、並びに詩律等も加味して検討する必要があることは言うまでもないが、本検討を通じて看取しえた諸本における改変の傾向は異文を分析判断する上で参考になるものと言えよう<sup>(22)</sup>。また、そのような校勘作業による原本復元を行うには底本を選定する必要がある。前述第二章から第四章において検討した諸本の位置付けより現存諸本は、

『往生礼讃偈』単行本系統

『集諸経礼懺儀』卷下唐代写本大蔵経本系統

『阿弥陀往生礼仏文』・京大本・専修寺本・誓願寺本  
檀王本・金剛寺本

『集諸経礼懺儀』卷下開宝蔵本系統

七寺本・高麗初雕本・高麗再雕本・金蔵本

と二系統に大別分類される。校訂本文を作成するにはまず『往生礼讃偈』単行本系統と『集諸経礼懺儀』卷下唐代写本大藏经本系統において校勘作業をすべきであるが、本章において検討した変遷過程を考慮するならば、その際の底本として『阿弥陀往生礼仏文』が適切であると言えよう。

# 註

- 1 本論第二章を参照願いたい。
- 2 本論第三章を参照願いたい。
- 3 本論第四章を参照願いたい。
- 4 本論第二章附論を参照願いたい。
- 5 七寺蔵『集諸経礼懺儀』卷上尾題下に転写される「大宋太平興二年丁丑歳／奉勅雕造太平興國／八年奉勅印」による。
- 6 『往生礼讃偈』は以下の三本による。  
京都誓願寺蔵鎌倉初期写本（以下、誓願寺本。佛敎大学蔵マイクロフィルム紙焼きによる）、  
三重専修寺蔵鎌倉期刊本（以下、専修寺本。堤玄立・平松令三編『高田専修寺本 善導大師五部九卷』（法蔵館、一九八六）による）、  
京都大学附属図書館蔵谷村文庫本（以下、京大本。国際仏敎教学大学院大学學術フロンティア実行委員会編『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀 卷下』（国際仏敎教学大学院大学學術フロンティア実行委員会、二〇一〇）による）。
- 7 法国国家図書館編『法国国家図書館蔵敦煌西域文獻』二八、三二四—三二九頁（上海古籍出版社、二〇〇四）。なおGallica（フランス国立図書館デジタルライブラリ）にて画像が公開されている（<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8302639c/f10.item.r=3841> 二〇一六年一〇月二四日確認）
- 8 誓願寺本二三丁裏・二四丁表（佛敎大学蔵マイクロフィルム紙焼きによる）。専修寺本二三丁裏・二四丁表（『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八五二・八五三頁）。京大本二三丁裏（『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀 卷下』二四三頁）。
- 9 大阪の長円寺蔵版（寛政十一年（一七九九）五月、長円寺十一代崇興が各別に版行されていた七祖の聖敎を集成し、整備刊行したもの）の版本を、文政九年（一八二六）、西本願寺が入手し刊行したもの。
- 10 誓願寺本三九丁表・裏、四三丁裏・四四丁表（佛敎大学蔵マイクロフィルム紙焼きによる）。専修寺本三九丁表・裏、四三丁裏・四四丁表（『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八八三・八八四、八九二・八九三頁）。京大本三九丁表、四三丁裏・四四丁表（『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀 卷下』二五八、二六三頁）。

- 11 塚本善隆『唐中期の浄土教』「図版第五 燉煌出善導往生礼讃 北平図書館蔵」に対し廣川堯敏は「現在中国国家図書館に所蔵されているか否か筆者は確認していない」（同論文）註12）とされる。本書は中国国家図書館蔵北敦八二八（北八三五〇・服二八）であり、中国国家図書館編『国家図書館蔵敦煌遺書』第一〇一冊所収（北京図書館出版社、二〇〇八。二七五―二七八頁）。『同』「国家図書館蔵敦煌遺書・條記目録」（二四頁）によれば「七〇八世紀。唐写本」とされる。なお『塚本善隆著作集第四巻 中国浄土教史研究』（大東出版社、一九七六）口絵には「敦煌出土 善導往生礼讃 北京図書館蔵」として『唐中期の浄土教』（東方文化学院京都研究所、一九三三。新訂版、法蔵館、一九七五）図版第五とは異なる大英図書館所蔵斯二五五三（北敦八二八と本来同一の写巻であり「北敦八二八・斯二五五三」と間断なく接続が可能）を掲載しており注意が必要である。
- 12 檀王本と金剛寺本の関係は本論第三章を参照願いたい。
- 13 『往生礼讃偈』においても京大本は標章を「二二拝」とする（三七丁表。『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二五六頁）。
- 14 松陰了諦「懺儀本」の総標にはその礼数を指定して二十二拝とあるけれども、その内容を検すれば以上の如き二十三拝より成れるが故に、総標に於ける二十二拝の数は、正しく二十三拝の写誤であることが知られる（『往生礼讃本文校異並に前序の研究』一一六・一一七頁）。広川堯敏「晨朝礼讃」の礼数について、浄全本では二二拝であるのに対し、智昇下巻本では二三拝である。智昇下巻本の最初に「二二拝」とあるのは単純な誤写によるミスである（「敦煌出土善導『往生礼讃』古写本について」一一二頁）。
- 15 誓願寺本五四丁裏・五五丁表（佛敎大学図書館蔵マイクロフィルム紙焼きによる）。専修寺本五四丁裏（『高田専修寺本 善導大師五部九卷』九一四頁）。京大本五四丁裏（『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二七四頁）。
- 16 伯三八四一は註7参照。伯二七二二は法国国家図書館編『法国国家図書館蔵敦煌西域文献』一七、三六五―三六七頁（上海古籍出版社、二〇〇一）。北敦八二八は註11参照。斯二五五三・斯二六五九は中国社会科学院歴史研究所中国敦煌吐魯番学会敦煌古文献編輯委員会英国国家図書館 倫敦大学亞非学院合編『英蔵敦煌文献』四、九二―九四・一七〇―一七四頁（四川人民出版社、一九九一）参照。
- 17 誓願寺本二五丁裏（佛敎大学図書館蔵マイクロフィルム紙焼きによる）。専修寺本二五丁裏（『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八五六頁）。京大本二五丁表（『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二四四頁）。



- 18 古写経本として七寺藏院政期古写経本、常楽寺藏元永二年（一一一九）写本、大念仏寺藏良忍手沢本が知られるが、何れにも第一偈に「故我頂礼弥陀仏」の句は確認されなかった。曾和義宏「常楽寺所藏迦才『浄土論』について―上巻の翻刻と解説―」（『浄土宗学研究』二八、二〇〇二）、同「翻刻・常楽寺所藏迦才『浄土論』卷中」（『浄土宗学研究』二九、二〇〇三）、同「翻刻・常楽寺所藏迦才『浄土論』卷下」（『浄土宗学研究』三一、二〇〇五）、同「大念仏寺所藏、迦才『浄土論』について」（『浄土宗学研究』三三、二〇〇七）参照。
- 19 中国国家図書館編『国家図書館藏敦煌遺書』第二六冊、国家図書館藏敦煌遺書・條記目録（二一頁）参照。
- 20 誓願寺本三三丁裏（佛教大学図書館藏マイクロフィルム紙焼きによる）。専修寺本三三丁裏（『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八七〇頁）。京大本三三丁裏・裏（『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二五一・二五二頁）。
- 21 佛教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班編『無量寿経論校異』参照。本書では宋版（東禅寺版・開元寺版・思溪版・磧砂版）、元版（杭州版）、高麗再雕版、石刻（房山雷音洞、房山雲居寺南塔地下）、正倉院聖語藏所藏、稲菌山長福寺「七寺一切経」、鎌倉光明寺所藏寂恵書写本、常楽寺所藏存覚書写本を以て校異をとられているが、第一偈四句目を「與仏教相応」とするものはない。なお本校異に反映されていない古写本として金剛寺藏鎌倉初中期写本、上海図書館所藏北宋写金粟山大藏経本（金粟寺史料之二『金粟山大藏経及藏経紙』三四頁。上海古籍出版社、二〇〇八）があるが、当該写経にも「願生安樂国」を「與仏教相応」とする例は確認されない。
- 22 倪其心著 橋本秀美・鈴木かおり訳『校勘学講義―中国古典文献の読み方』（アルヒーフ、二〇〇三）では「古籍の基本構成と流传状況を知ることとは、具体的な校勘を始める前の主要な準備作業です。その直接的な目的は、底本を適切に選定し、参校本を決めることですが、同時に、それぞれの版本の特徴や信頼性を把握しておくことは、具体的な校勘の過程で、異文の分析判断を適切に行うための重要な前提条件であるとも言えます」（二四四頁）と述べられる。

## 第六章 『往生礼讃偈』『如観経具説』攷

はじめに

初唐の浄土教家、善導（六一三―六八二）集記『往生礼讃偈』の、儀礼において読誦される六時礼法に先立つ散文部分、所謂「序文（前序）」には往生の要件として安心（三心）・起行（五念門）・作業（四修）が説示されている。当該箇所（の安心（三心））に関する説示は、鎌倉時代の浄土教家である法然（一一三三―一二二二）『選択本願念仏集』<sup>1</sup>、親鸞（一一七三―一二六二）『顕浄土真実教行証文類』<sup>2</sup>にも引用されており、その影響下において註釈書も多数撰述される等<sup>3</sup>、後代の浄土教に多大な影響を与えるものである。本章では、この安心（三心）に関する説示の末尾にみられる、

具此三心必得生也。若少一心即不得生。如観経具説。応知。

（『大正蔵』四七、四三八頁下）

此の三心を具すれば、必ず生ずることを得るなり。若し一心も少くぬれば、即ち生ずることを得ず。『観経』に具に説くが如し。知るべし。

の傍線部「如観経具説」を考察の対象とする。当該箇所は「『観経』に具に説くが如し」と、経証として『観経』（観無量寿経）が明示されているにも拘わらず、現行の量良耶舎訳『観無量寿経』（『大正蔵』一二所収。No.三六五）には該当すると考えられる箇所を見出すことはできない。その為、この一文は『往生礼讃偈』研究の白眉とされる上杉文秀『善導大師及往生礼讃の研究』（法蔵館、一九三二）においても「この文解し難し、多義あり」（二〇九・二一〇頁）と述べられるよう、古来複数の解釈がなされてきた箇所である。

本章はこの難読箇所に対し、著者善導の述意を汲み取ることを目的とするものであり、以下の手順によって考察を進めたい。

## 第一節 諸本確認

『往生礼讃偈』『集諸経礼懺儀』巻下の古写本・版本により、当該箇所<sup>(1)</sup>の異文の有無を確認する。

## 第二節 用例帰納

善導の著述より考察対象、並びに類似表現を挙例し、その用例を帰納する。

## 第三節 構成確認

考察対象を含む一段を読解し、構成上「如観経具説」が如何に機能しているのかを確認する。

## 第四節 先行解釈の検証

当該箇所に対する先行解釈を整理し、検証を加える。

## 第五節 試解

前節までの考察を踏まえ、新たに合理的解釈を試みる。

前四節における確認、検証を通じて「如観経具説」が疑誤（異文がなく、表面上誤りは認められないが、実際には誤りが存在するもの）であることを推定した上で、第五節においてその解釈を試みたい。

## 第一節 諸本確認

『往生礼讃偈』は唐代の長安において盛行したことが推測され、『開元釈教録』の編者である智昇（一七三〇—）は『集諸経礼懺儀』と題し、巻上に三階教の礼懺儀を、巻下に善導『往生礼讃偈』を収録している。<sup>(4)</sup>つまり『集諸経礼懺儀』成立（七三〇年頃）以降、『往生礼讃偈』の本文を有するテキストは二種併存することとなる。「『集諸経礼懺儀』巻下は善導『往生礼讃偈』である」との認識は、宗曉（一一五一—一二二四）編『楽邦文類』<sup>(5)</sup>を始め、本書を享受したと考えられる日本の鎌倉期浄土教家、親鸞<sup>(6)</sup>や良忠<sup>(7)</sup>（一一九一—一二八七）にも伺え、『往生礼讃偈』伝播の考察には、『集諸経礼懺儀』巻下をも含めた視座が必要となる。

また智昇は『集諸経礼懺儀』を自身編『開元釈教録』巻二〇「入蔵録」下に採録しており、以降本目録が大蔵経編纂の指針として踏襲された為、中国・朝鮮・日本開版の版本大蔵経<sup>(9)</sup>や、『開元釈教録』を範とした唐西明寺沙門円照編『貞元新定釈教目録』<sup>(10)</sup>を書写台帳とする、日本の平安鎌倉期の一切経において数本の現存が確認されている<sup>(10)</sup>。

なお『往生礼讃偈』の伝本として『集諸経礼懺儀』巻下を認識することは、単なる伝本数の増加に留まらず、『往生礼讃偈』単行本の現存

諸本が鎌倉期以降であるの<sup>(11)</sup>に対し、時間軸上、より始原である善導に近接することを理論上可能とするものである<sup>(12)</sup>。

ここでは『往生礼讃偈』の本文を有するテキストとして、『往生礼讃偈』単行本、『集諸経礼懺儀』卷下に分類した上で諸本を列挙し、考察対象を含む「具此三心必得生也。若少一心即不得生。如観経具説。応知」における異文の有無を確認したい。検討した諸本は以下の通り。

# 『往生礼讃偈』単行本

【写本】鎌倉初期写 京都誓願寺蔵本<sup>(13)</sup>（以下、誓願寺本）

【版本】鎌倉初期刊 三重専修寺蔵本<sup>(14)</sup>（以下、専修寺本）

建長三年刊 京都大学附属図書館蔵谷村文庫本<sup>(15)</sup>（以下、京大本）

# 『集諸経礼懺儀』卷下

【写本】中尊寺一切経本<sup>(16)</sup> 京都檀王法林寺蔵（以下、檀王本）

金剛寺一切経本<sup>(17)</sup> 大阪金剛寺蔵（以下、金剛寺本）

七寺一切経本<sup>(18)</sup> 名古屋七寺蔵（以下、七寺本）

【版本】思溪版本<sup>(19)</sup> 東京増上寺蔵

磧砂蔵本<sup>(20)</sup>

洪武南蔵本<sup>(21)</sup>

永楽北蔵本<sup>(22)</sup>

金蔵本<sup>(23)</sup>

北京中国国家図書館蔵

高麗初雕版本<sup>(24)</sup>

京都南禅寺蔵

高麗再雕版本<sup>(25)</sup>

以上、『往生礼讃偈』三点（写本一点、刊本二点）、『集諸経礼懺儀』一〇点（写経三点、刊経七点）の当該箇所を確認した。異文として確認できたのは以下の三箇所である（現行流布本として大正蔵本（底本は徳川時代刊宗教大学蔵本）の当該箇所をあげ、異同が確認された箇所の右傍に実線・丸数字を附し、校異を記した）。

具此三心必得生也。<sup>①</sup> 若少一心即不得生。<sup>②</sup> 如觀<sup>③</sup>經具說。 応知。

（『大正蔵』四七、四三八下）

【校異】 ① 生 — 往生（専修寺本・京大本・高麗再雕版本）

② 不 — ナシ（金剛寺本）

③ 如觀 — 觀如（檀王本）

これら三箇所について、以下、依拠すべき異文か否か検証を加える。

①に関しては、「生」「往生」、共に阿弥陀仏の浄土へ生ずることを述べるものである。当段では他にも「定得往生彼国土」「必欲生彼国土」「必得往生」「定得往生」「即不得生」等、「往生」「生」と両者の表現が認められ、何れも同義で使用されていると考えられる。その為、「生」「往生」何れが原形か判断は難しいが、意味上の違いは生じないと考ええる。ここでは一往、大正蔵本「生」に従う。

②に関しては、金剛寺本「若少一心即」「得生」（影印一五行目）では、

此の三心を具すれば、必ず生ずることを得るなり。若し一心も少けぬれば、即ち生ずることを得。

（此の三心を具足したならば、必ず生ずることができる。もし一心でも欠けたならば生ずることはできない。）。

と文意が通じない。金剛寺本の脱字と判断し、大正蔵本「若少一心即不得生」による。

③に関しては、檀王本「観如経具説」（影印一六行目）は、

「観」は『経』に具さに説きたまふが如し（「観察」については『経』に詳しく説かれる通りである）。

と読むものか。当該文に先立って記される至誠心の下には、

一者至誠心。所謂身業礼拝彼仏、口業讃歎称揚彼仏、意業專念**觀察**彼仏、凡起三業、必須真実。故名至誠心。（『大正蔵』四七、四三八下）

と、「観察」の語が認められるが、当該の最後に観察のみを取り上げ註釈を加えるのは文脈上、不自然と感じられる。後述「構成確認」にて確認するが、当該の主題はあくまでも安心（三心）であり、実際、観察については次段の起行（五念門）中「意業憶念觀察門」にて言及される<sup>26</sup>。檀王本の倒字と判断し、大正蔵本「如観経具説」による。

以上、『往生礼讃偈』単行本、『集諸経礼懺儀』卷下の現存諸本により考察対象の異文を確認し検証を加えた。結果、特にすべき異文は認められず、以降一往、本文を「具此三心必得生也。若少一心即不得生。如観経具説。応知」として考察を進める。

## 第二節 用例帰納

本節では、考察対象である「如観経具説」にみられる句形「如『○○』具説」、並びに類似表現である「具如『○○』説」、「如『○○』説」……」を、善導の著述『観経疏』（「観経玄義分」「序分義」「定善義」「散善義」）、『往生礼讃偈』、『般舟讃』（依観経等明般舟三昧行道往生讃）、『法事讃』（転経行道願往生浄土法事讃）、『観念法門』（観念阿弥陀仏相海三昧功德法門）より採集し、その用例を帰納したい（丸括弧内に文献名と『大正蔵』四七の当該頁・段を示した）。



A. 【如『○○』具説】 二例 『○○』に具に説くが如し（『○○』に詳しく説く通りである）

①懺悔有三品。一要、二略、三廣。如下具説。

（『往生礼讃偈』四三九中）

懺悔に三品有り。一に要、二に略、三に廣。下に具に説くが如し。

②如是比校、乃有衆多。不可具引。如『賢愚經』具説。

（『觀經疏』二五五中）

是の如きの比校、乃ち衆多有り。具に引くべからず。『賢愚經』に具に説きたまうが如し。

何れも「（懺悔については）下に詳しく述べる通りである」「（この様な比校は）『賢愚經』に詳説される通りである」と、「『○○』に詳しく説く通りである」として、上述の内容の具体的説示を省略するものである。

ただ①は同著述内（もしくは自著）の、他の箇所において詳述することを指示するものである。同様の句形として、「此二行得失、如前已辨」（此の二行の得失、前に已に辨ずるが如し。『往生礼讃偈』四三九中）、「又此惡人、如上五惡性分中已説竟」（又、此の惡人、上の五惡性分中に已に説き竟るが如し。『觀念法門』二八中）、「又觀像住心之法、一如前説」（又、觀像住心の法は、一ら前に説くが如し。『觀經疏』二六七中）があげられる。

②は自身の著述以外に説処を譲るものであり、経証、典拠を略示するものと言える。「如觀經具説」もこの用例である。同様の句形として、「云何知此戒用心行細。如戒文中具顯」（云何が此の戒の用心と行の細なるを知るや。戒文の中に具に顯するが如し。『觀經疏』二五五上）、「若人一日一夜具持不犯、所得功德超過人天二乘境界。如經廣説」（若し人一日一夜、具に持ち犯さなければ、所得の功德、人天二乘境界に超過す。經に廣く説きたまふが如し。『觀經疏』二五五上）、「此四生中各各復有四生。如經廣説」（此の四生の中、各各復た四生有り。經に廣く説きたまふが如し。『觀經疏』二五九上）があげられる。

B. 【具如『○○』説】 四例 具には『○○』に説くが如し（詳しくは『○○』に述べられる通りである）

③謹依釈迦仏教、六部往生経等、顕明称念阿弥陀仏願生浄土者、現生即得延年転寿、不遭九横之難。――具如下五縁義中説。

（『観念法門』二四下）

謹みて釈迦仏の教、六部の往生経等に依りて、阿弥陀仏を称念し浄土を願生せば、現生に即ち延年転寿を得、九横の難に遭わざるを顕明す。  
――具には下の五縁義の中に説くが如し。

④仏言。「若人専行此念弥陀仏三昧者、常得一切諸天、及四天大王龍神八部、隨逐影護愛樂相見、永無諸惡鬼神、災障厄難、横加悩乱」。

具如護持品中説。

（『観念法門』二五中）

仏言わく。「若し人専ら此の念弥陀仏三昧を行ずれば、常に一切諸天、及び四天大王・龍神八部の隨逐影護・愛樂相見を得、永く諸惡鬼神・災障・厄難の横に悩乱を加うること無し」と。具には護持品の中に説きたまうが如し。

⑤既蒙護念、即得延年転寿、長命安樂。因縁――具如『譬喻経』『惟無三昧経』『浄度三昧経』等説。

（『観念法門』二五下）

既に護念を蒙りぬれば、即ち延年転寿・長命安樂なることを得。因縁の――具には『譬喻経』『惟無三昧経』『浄度三昧経』等に説きたまうが如し。

⑥上来所引仏教以為明證者、――具如四事供養功德品中説。

（『観念法門』二八下）

上来所引の仏教を以て明證と為すは、――具には四事供養功德品の中に説きたまうが如し。

何れも「詳細は後述の五縁義の中に説く通りである」「詳しくは護持品の中に説かれる通りである」「詳細は『譬喻経』『惟無三昧経』『浄度三昧経』等に説かれる通りである」「詳細は四事供養功德品の中に説かれる通りである」と、「詳しくは『○○』に述べられる通りである」

として、上述の内容の具体的説示を省略するものである。A.【如『○○』具説】と同様、③は同一の典籍の中に説かれている為、同著述内の他の箇所へ説処を譲る意味となる。④⑤⑥は自身の著述以外に説処を譲るものであり、経証・典拠を示すものと言える。文意としてはA.【如『○○』具説】と大差ないか。

C.【如『○○』説「……」】 七一例<sup>(27)</sup> 『○○』に「……」と説くが如し(○○に「……」と述べられる通りである)

⑦答曰。「必欲生彼国土者、如觀經說者「具三心必得往生」」。  
(『往生礼讃偈』四三八下)

答えて曰く。「必らず彼の国土へ生ぜんと欲はば、『觀經』には「具三心必得往生」と説きたまうが如し」と。

⑧又如天親『淨土論』云「若有願生彼国者、勸修五念門。五門若具定得往生」。  
(『往生礼讃偈』四三八下)

又天親の『淨土論』に「若有願生彼国者、勸修五念門。五門若具定得往生」と云うが如し。

⑨如『觀經』説「唯除睡時、恒憶恒念恒想恒觀此事等」。  
(『往生礼讃偈』四三八下)

『觀經』に「唯除睡時、恒憶恒念恒想恒觀此事」等と説きたまうが如し。

⑩又如『文殊般若』云「明一行三昧、唯勸獨處空閑、捨諸乱意、係心一仏、不觀相貌、專称名字。即於念中、得見彼阿弥陀仏及一切仏」等。

(『往生礼讃偈』四三九上)

又『文殊般若』に「明一行三昧、唯勸獨處空閑、捨諸乱意、係心一仏、不觀相貌、專称名字。即於念中、得見彼阿弥陀仏及一切仏」等と云うが如し。

⑪又如『観経』云「仏勸坐觀礼念等、皆須面向西方者最勝」。

（『往生礼讃偈』四三九中）

又『観経』に「仏勸坐觀礼念等、皆須面向西方者最勝」と云うが如し。

⑫如『無量寿経』説云「其有衆生、遇斯光者、三垢消滅、身意柔軟、歡喜踊躍、善心生焉。若在三塗、勤苦之处、見此光明、無復苦惱、

寿終之後、皆蒙解脫。無量寿仏、光明顯赫、照耀十方、諸仏国土、莫不聞焉。不但我今、称其光明、一切諸仏、声聞緣覺、諸菩薩衆、咸共歎譽、亦復如是。若有衆生、聞其光明、威神功德、日夜称説、至心不断者、隨其所願、得生其国。常為諸菩薩、声聞之衆、

所共歎譽、称其功德。仏言。「我說無量寿仏、光明威神、巍巍殊妙、昼夜一劫、尚不能尽」。

（『往生礼讃偈』四三九下）

『無量寿経』に「其有衆生、遇斯光者、三垢消滅、身意柔軟、歡喜踊躍、善心生焉。若在三塗、勤苦之处、見此光明、無復苦惱、寿終之後、皆蒙解脫。無量寿仏、光明顯赫、照耀十方、諸仏国土、莫不聞焉。不但我今、称其光明、一切諸仏、声聞緣覺、諸菩薩衆、咸共歎譽、亦復如是。若有衆生、聞其光明、威神功德、日夜称説、至心不断者、隨其所願、得生其国。常為諸菩薩、声聞之衆、所共歎譽、称其功德。仏言。「我說無量寿仏、光明威神、巍巍殊妙、昼夜一劫、尚不能尽」と説きて云うが如し。

⑬如『観経』云「一一光明遍照十方世界、念仏衆生攝取不捨」。

（『往生礼讃偈』四三九下）

『観経』に「一一光明遍照十方世界、念仏衆生攝取不捨」と云うが如し。

⑭又如『観経』云「若称礼念阿弥陀仏、願往生彼国者、彼仏即遣無數化仏無數化觀音勢至菩薩、護念行者」。

（『往生礼讃偈』四四七下）

又『観経』に「若称礼念阿弥陀仏、願往生彼国者、彼仏即遣無數化仏無數化觀音勢至菩薩、護念行者」と云うが如し。

⑮又如『無量寿経』云「若我成仏、十方衆生、称我名号、下至十声、若不生者、不取正覚」。

（『往生礼讃偈』四四七下）

又『無量寿経』に「若我成仏、十方衆生、称我名号、下至十声、若不生者、不取正覚」と云うが如し。

⑬又如『弥陀經』云「若有衆生、聞說阿弥陀仏、即応執持名号、若一日若二日乃至七日、一心称仏不乱、命欲終時、阿弥陀仏與諸聖衆現在其前。此人終時、心不顛倒、即得往生彼国。仏告舍利弗。『我見是利故說是言。若有衆生聞是說者、応当發願願生彼国』」。

(『往生礼讃偈』四四七下)

又『弥陀經』に「若有衆生、聞說阿弥陀仏、即応執持名号、若一日若二日乃至七日、一心称仏不乱、命欲終時、阿弥陀仏與諸聖衆現在其前。此人終時、心不顛倒、即得往生彼国。仏告舍利弗。『我見是利故說是言。若有衆生聞是說者、応当發願願生彼国』」と云うが如し。

何れも具体的に典拠を明示し、「説」「云」「説云」に続き本説が引用される。

以上、「如『觀經』具説」にみられる句形、A.「如『○○』具説」、並びにその類似表現、B.「具如『○○』説」、C.「如『○○』説「……」」を列挙した。これら用例一六例より帰納される意味、文法的特色は以下の通り。

如『○○』説「……」(⑦—⑬)

【經証】『○○』に「……」と述べられる通り。

- ・ 出典を明示する。
- ・ 「説」の後に必ず本説が引用される。
- ・ 「具」は附されない。
- ・ 『○○』には自著以外の典籍が記される。

如『○○』具説(②)／具如『○○』説(④⑤⑥)

【経証(略)】 詳しくは『○○』に述べられる通り。

- ・ 出典のみを明示する。
- ・ 本説は引用されない。
- ・ 「具」が附される。
- ・ 『○○』には自著以外の典籍が記される。

如『○○』具説(①)／具如『○○』説(③)

【説処を譲る】 詳しくは『○○』に譲る。

- ・ 詳細を説く自著(またはその箇所)が指示される。
- ・ 具体的な説示は呈示されない。
- ・ 「具」が附される。
- ・ 『○○』には自著が記される。



## 第三節 構成確認

言語は文脈を形成し、文脈は言語を規定する。本節では「如觀經具說」を含む一段をあげ、読解することにより、本段の主題を明確にし、考察対象の一文がその構成・文脈において如何に機能しているのかを確認したい（便宜上、本段を八つに分け改行し、行頭に丸数字を附した）。

【原文】（『大正藏』四七、四三八下）

①問曰。今欲勸人往生者、未知、若為安心起行作業、定得往生彼国土也。

②答曰。必欲生彼国土者、如觀經說者、具三心必得往生。

③何等為三。

④一者至誠心。所謂身業礼拝彼仏、口業讚歎称揚彼仏、意業專念觀察彼仏、凡起三業、必須真實。故名至誠心。

二者深心。即是真實信心。信知自身是具足煩惱凡夫、善根薄少。流轉三界、不出火宅。今信知弥陀本弘誓願、及称名号、下至十声一声等、定得往生。乃至一念無有疑心。故名深心。

三者回向發願心。所作一切善根悉皆回願往生。故名回向發願心。

⑤具此三心必得生也。

⑥若少一心即不得生。

⑦如觀經具說。

⑧応知。

【訓読文】

①問いて曰く。今、人を勧めて往生せしめんと欲わば、未だ知らず、若為が安心・起行・作業せば、定んで彼の国土へ往生することを得る也。

②答えて曰く。必らず彼の国土へ生ぜんと欲はば、『観経』に説きたまうが如くは「具三心必得往生」と<sup>(28)</sup>。

③何等をか三と為す。

④一には至誠心(省略)。二には深心(省略)。三には回向発願心(省略)。

⑤此の三心を具すれば、必ず生ずることを得る也。

⑥若し一心も少けぬれば、即ち生ずることを得ず。

⑦『観経』に具に説きたまうが如し。

⑧知るべし。

【現代語訳】

①人々を往生させたいが、一体、どのように安心・起行・作業すれば、必ず阿弥陀仏の浄土へ往生することができるのか。

②必ず阿弥陀仏の浄土へ生まれたいのならば、『観経』には「三心を具足すれば必ず往生できる」と説かれている。

③「三心」とは何か。

④一つは至誠心(省略)。二つは深心(省略)。三つは回向発願心(省略)。

⑤この三心を具足すれば、必ず生まれることができる。

⑥もし一心でも欠けたならば、生まれることはできない。

⑦『観経』に詳しく説かれている通りである。

⑧わかりましたか。

【構成】

問 ①主題（どのように安心・起行・作業すれば、必ず往生できるのか？）。

答（安心） ②経説の呈示（『観経』によれば「三心を具せば必ず往生できる」と）。

③④「三心」とは（「三心」とは何か？／至誠心・深心・回向発願心である）。

⑤結論（この三心を具したならば必ず往生できるのである）。

⑥追記（もし一心でも欠けたならば往生できない）。

⑦経証（『観経』に詳しく説かれている通りである）。

⑧結語（わかりましたか）。

\*以下、主題①に対し、起行・作業についての回答が続く。

主題、①「どのように安心・起行・作業すれば、必ず往生できるのか」に対し、②『観経』により「三心を具足すれば必ず往生できる」と答えられる。この答えを承け、③「三心」とは何か？」が問われ、④「至誠心・深心・回向発願心」と、その具体相が述べられる。これを踏まえ、結論として⑤「この三心を具したならば必ず往生できるのである」と述べられ、次いで、⑥「もし一心でも欠ければ往生できない」、と三心具足が往生の要件であることが追記される。⑤と⑥の関係は、同一内容の肯定的表現（表詮）と否定的表現（遮詮）と捉えられる。今、考察対象とする⑦「『観経』に詳しく説かれている通りである」の一文は、その直後に位置し、前節にて確認した通り、経証として機能していることが知られる。本段の構成上、この一文の証明する内容としては、直前の、

⑤⑥具此三心必得生也。若少一心即不得生。

⑥若少一心即不得生。

の二通りが想定されるが、⑤「具此三心必得生也」は、既に②において、「如『観経』説者「具三心必得往生」と、その典拠が『観経』にあることが明示されており、それを承けた結論⑤に対し、重ねてその経証を述べる必要はない<sup>(29)</sup>。つまり、ここでの経証⑦は、既出の⑤「具此三心必得生也」を含むものではなく、新出の追記、⑥「若少一心即不得生」の経証として機能するものであり、「もし一心でも欠ければ往生することができない」と言うことが『観経』に詳しく説かれている、と読むべきものであると帰結される。

ただ、問題はその観点より『観経』を読んでも、該当すると考えられる文が見出せないことである。

#### 第四節 先行解釈の検証

前節では「如観経具説」が、三心の内、一心でも欠けたならば往生することはできない、という説示の出典として『観経』を指示するものであり、経証として機能していることを確認した。ただし、その説示が『観経』の何れの箇所<sup>(30)</sup>に依拠するものかは、一読するも判然としない。それでは従来、「如観経具説」は如何に解釈されてきたのであろうか。

善導は中国における曇鸞(四七六―五四二)・道綽(五六二―六四五)系の浄土教の大成者と位置付けられ、日本においても浄土宗の開祖、法然は、『選択本願念仏集』において浄土五祖(曇鸞・道綽・善導・懷感・少康)の一人とし、さらに「偏依善導一師」を標榜されている<sup>(31)</sup>。また浄土真宗の開祖、親鸞は所謂「七高僧」(龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・法然)の一人として敬礼されている<sup>(32)</sup>。その為、現在に至るまで両宗派における善導研究は盛んであり、多くの先学によって『往生礼讃偈』の註釈書が記されている<sup>(33)</sup>のみならず、考察対象の一文は、法然『選択本願念仏集』、親鸞『顕浄土真実教行証文類』にも引用されており、両書の註釈書からも間接的に当該箇所の解釈が伺えることとなる<sup>(34)</sup>。

『往生礼讃偈』、並びに『選択本願念仏集』、『顕浄土真実教行証文類』の註釈書<sup>(35)</sup>の数は夥しく枚挙に遑ないが、当該箇所の解釈に関しては、先学の有力な説を継承、引用するものが殆どであり、それらは概ね、然阿良忠(鎮西流、一一九九―?)、永覚房智圓(西山流六角系西谷義、一二九九―一三七二)、善偉房堯恵(西山流深草義、一三三〇―一三七二)の三説に整理される。本節ではこれら代表的な解釈を取り上げ検証を加えたい。

## 然阿良忠『往生礼讃私記』

「如觀經具說」とは『疏』を『觀經』と名づくるなり。『論註』下に「此の觀の義、已に前の偈にて彰かなり」と云うが如し（此れ『註』上を指して、名づけて前偈と為す）。

復た「玄義分」に『智度論』鷲鸞之譬を引き、「『大品經』に説けり」と言ふが如し。又、説處を護る也。

（『浄土宗全書』四、三八〇頁）

良忠は「如觀經具說」にみえる「觀經」を、經典『觀無量壽經』ではなく、善導自撰の註釈書『觀經疏』であるとし、「如觀經具說」は經証ではなく、「讓説處」（詳しくは『觀經疏』に述べた通りである）と解釈している<sup>35</sup>。ただし、良忠は『觀經疏』の該當箇所を明示してはいない。では良忠の解釈通り、「三心の内、一心でも欠けたならば往生することはできない」という説示が『觀經疏』に詳細に説かれているかという、そのような説示は現存する『觀經疏』に見出すことができない<sup>36</sup>。

『觀經疏』『散善義』では、『觀經』の、

仏告阿難及韋提希「凡生西方有九品人。上品上生者、若有衆生願生彼国者、發三種心、即便往生。何等為三。一者至誠心。二者深心。

三者迴向發願心。具三心者必生彼国」

（『大正藏』一一、三四四下）

を註釈の対象とし、

四、從「何等為三」下、至「必生彼国」已來、正明辨定三心以為正因。

四に「何等為三」從り下、「必生彼国」に至る已來は、正しく三心を辨定し、以て正因と為すことを明かす。

と、三心が往生の正因であることが以下詳細に註釈されている。『観経疏』における該当箇所が明示されない為、断定はできないが、或いは良忠は「如観経具説」の証明する内容を「若少一心即不得生」ではなく、「具此三心必得生也」と認識した上で、上述の解釈を為したとも考えられる。ただ前節にて述べた通り、「如観経具説」の証明する説示は「若少一心即不得生」であり、善導の述意を問題とする本章の視座よりすれば、良忠の解釈に首肯することはできない。

#### 永覚房智円『往生礼讃類聚抄』

「如観経具説応知」とは、問。『経』には「一者…、二者…、三者…」と名言計りにて三心の姿たを具に説ける文無し。何ぞ「如観経具説」と釈するや。

答。上々の説の如んは難の如し。但し序にて「若仏滅後」（『観経』、『大正蔵』三四二下）と請するに酬へて日観より正宗と説き開くに、「应当専念繫念一処」（『観経』、『大正蔵』三四二下）と説き、雜想觀にして「若欲至心」（『観経』、『大正蔵』三四四下）等と説く。此等は十三定善の説を聞きて安心発するを、上々に「三心」（『観経』、『大正蔵』三四四下）と説けり。下々にて「如是至心」（『観経』、『大正蔵』三四六上）と説く。「是」（同上）と云は本願の至心信樂欲生我國の三心を開して下巻の三輩の機に持たせ、乃至九品万機に三心正因を持たして去れば、至心の下にて「経に云一者至誠心」（『観経疏』散善義、『大正蔵』二七〇下）等と云へり。深心にては「釈迦仏説此観経三福此人欣慕」（『観経疏』散善義、『大正蔵』二七一中）と云文、廻向心の下にて三心惣結する時は「三心既具 定善之善」（『観経疏』散善義、『大正蔵』二七三中）と云へり。故に上々の一品に必ず三心を具に説くと云事には非ず。観経の一部即ち往生の三心経と云義を以て此の如く釈す。此等の義を以て「応知」と云文、是れ初の問「若為安心」と云ひしを、此の如く釈し結する也。是れ願生西方仏国の文の心を「如観経具説応知」と云ふ文なり。（二三丁表・裏）

智円はその問いにおいて、「『観経』には「一者至誠心。二者深心。三者廻向發願心」（『観経』、『大正蔵』三四四下）と、その名しかあげられていないのに、どうして「如観経具説」（『観経』に詳細に説く通りである）と解釈するのか」を問題とし、「上々品にはその名しか説かれない



が、『觀經』一部全体には三心が説かれている為」（傍線部）と解釈している。

ここから智円が『觀經』に具に説かれる内容を「三心について」と認識していることが看取される。ただし、前節にて明らかにした通り、『往生礼讃偈』本文の構成よりすると、具に説かれる内容は「三心」ではなく、「一心でも欠けたならば往生することはできない」ということであり、仮に「三心については『觀經』に具に説かれている通りである」という経証であるならば、それは構成上、

③何等為三（「三心」とは何か？）

④一者至誠心（省略）。二者深心。（省略）。三者回向發願心（省略）（至誠心・深心・回向發願心である）

⑤如觀經具説（『觀經』に詳しく説かれている通りである）

と、③何等為三、④一者至誠心（省略）。二者深心。（省略）。三者回向發願心（省略）、の直後に位置する筈であり、善導の述意を問題とする本章の視座よりすれば、智円の解釈は当を得たものとは言えない。

#### 堯惠善偉『選択集私集鈔』

「如觀經具説」の事。

問いて云く。『觀經』には三心の名数を列ねて「具説」の義無し。云何。

答。「一義に云く。『具』の言は具（そな）ふと訓ず可し。具（つぶさに）と読む可からず。『具三心』は『經』に「發三種心」と説くが故なり。今「若少一心」の義を成ぜんとし、「具三心（三心をそなう）」の義を成ずる也。

一義に云く。『觀經』と云うは『觀經の疏』を指すか。二句十六字の經文（具此三心必得生也 若少一心即不得生）なりと雖も、二百余行に及び、八丁半に至りて具に之を釈するが故に。『疏』を『經』と釈する事は、一僧に指授を受けぬる証定の釈なるが故に。「一句一字不可加減。欲写者亦一如經法」と云えり。

一義に云く。「『観経』具説」と云うは、『観経』一部は唯だ是れ三心也と云う義を顕す也。故に三心を釈するに「『経』云」の詞を置きたまえり。一經の体、三心為宗は要義也。序・正・流通の法義一列也。

（『仏教大系四二選撰集』三六一・三六二頁）

堯恵は「『観経』には三心の名しかあげられていないのに、どうして「具説」（詳細に説く）と解釈するのか」、という設問に対し、三義を以て答えられるが、第二義は良忠の説、第三義は智円の説と同内容である。その為、ここでは初義（傍線部）のみを取り上げ検証を加えたい。初義では「如観経具説」を「『観経』に具（そな）ふる説の如し」と訓じ、『観経』には直接「若少一心即不得生」の義は説かれていないが、内在しているものと解釈し、その源泉を「発三種心」とする。『観経』に「発三種心」と説かれるのに『往生礼讃偈』にて「具三心」と表現するのは、「若少一心」の意味を派生する為であるとするが、「具三心」は「発三種心」からの派生ではなく、当該箇所の前に「『観経』説者「具三心必得往生」と述べられるよう『観経』に実際に説示されている。また第二節にて検討した通り、語法からしても「如『○○経』具説」は、「○○経にツブサニ説くが如し」と読むべき定型の表現であり、堯恵の訓は首肯し難い。堯恵自身、「具説」が通常「つぶさに説く」と訓ぜられるものと認識していたことは、

問いて云く、『観経』には三心の名数を列ねて、「具説」の義無し。云何。

（『観経』には三心の名しかあげられていないのに、どうして「具説」（詳細に説く）と解釈するのか）

という設問設定から明かである。「そなふる説」との訓は会通の為であり、唯一の決定的な見解でないことは、他に二義をあげていることからも看取される。

以上、代表的な三者の解釈をみてきた。整理すると以下の通り。

良忠 『観経（疏）』に具に説くが如し（『観経疏』に詳述した通りである）。

解釈 「観経」を『観経疏』とし、「讓説処」として解釈。

問題点 『観経疏』に「若少一心即不得生」について詳述した箇所が認められない。

智円 『観経』に具に説くが如し（三心については『観経』全体に詳述される通りである）。

解釈 『観経』全体に三心が詳述されている、として経証と解釈。

問題点 『観経』に詳述される内容を「若少一心即不得生」ではなく「三心」とする。

堯恵 『観経』に具（そな）ふる説の如し（「若少一心即不得生」は『観経』に内在する説である）。

解釈 「若少一心即不得生」は『観経』に内在する説である、として経証と解釈。

問題点 通常「如観経具説」を「『観経』に具（そな）ふる説の如し」とは訓じない。

良忠は「如観経具説」に誤りがあるとみて、「観経」を『観経疏』として解釈している。ただし現行の『観経疏』にも「若少一心即不得生」を詳述すると考えられる文は認められない。一方、智円・堯恵は「如観経具説」を誤りが無いものとし、『観経』の深意を読み取る、独自の訓読を行う等により会通を図るものであったが、何れも善導の述意に適うものとは考え難い。

上巻の検討通り「如『観経』具説」の一文は、現存諸本中に依拠すべき異文が認められず、文法的にも正しいが、実際には『観経』に「若少一心即不得生」（二心でも欠ければ往生できない）という説示は詳細に説かれていない。また当該本文に誤りが無いとする先学（智円・堯恵）の解釈も、著者善導の述意を汲み取ることが目的とする本稿の視座よりすれば妥当なものとは言いがたい。ここに「如観経具説」を疑誤（異文が認められず、表面上誤りは認められないが、実際には誤りが存在するもの）と判断し、次節にて解釈を試みたい。

## 第五節 試解

現行の文「如『観経』具説」が疑誤であるとするならば、必然的に現行の文と異なる本来の一文（原文）が想定される。そして当然のことながら、その原文は文法的・文意的に正しく、さらに現行の「如『観経』具説」へと誤認されるような要因を有していることが予想される。つまり【原文の条件】として、以下の四点が設定される。

## 【原文の条件】

- i. 「如『観経』具説」とは異なる。
- ii. 文法的に正しい。
- iii. 文意が通る。
- iv. 「如『観経』具説」へと誤認される要素を有する。

これらの条件を有する原文が、何らかの理由により誤認され、現行の「如『観経』具説」が生成したと考えられる。

原文 ——— 誤認（訛誤の発生） ——— 如『観経』具説

訛誤の発生に対し、校勘学ではその原因を分析し、規則性のある現象を校勘通例（同様の事例が常見される現象）として帰納する。その数は人により様々であるが、大別すれば、誤字・脱字（脱文）・衍字（衍文）・倒字（倒文）・錯簡の五類とされる。

つまり現行文の「如○○具説」より、誤字・脱字（脱文）・衍字（衍文）・倒字（倒文）・錯簡、或いはそれら複数の合併した訛誤を想定し、遡行、訂正することで、原文を復元することが理論上可能となる。考察すべきは「訛誤の所在は何処か」「如何なる訛誤か」の二点である。

前者「訛誤の所在は何処か」という視点より「如『觀經』具說」を分析すると、二つの要素から成ることが知られる。一つは、典拠を略示する定型表現である「如○○具說」。もう一つは、略示された典拠『觀經』である。ではどちらに訛誤は在するのか。

良忠・智円・堯恵に代表される当該箇所解釈の内、智円・堯恵は「如『觀經』具說」に「訛誤無し」とし、良忠のみが「訛誤在り」との方向で、略示された典拠『觀經』を疑問視し、『觀經疏』と解釈するものであった。良忠の解釈は、『往生礼讃偈』の構成・文脈上、首肯し難いものであるが、ここでは、その不当な解釈を発展的に踏まえ、従来検討の為されていない「如○○具說」に「訛誤在り」との批判的視点を向けたい。

#### 【訛誤の所在（検討の焦点）】

如『觀經』具說      訛誤はない（智円・堯恵）

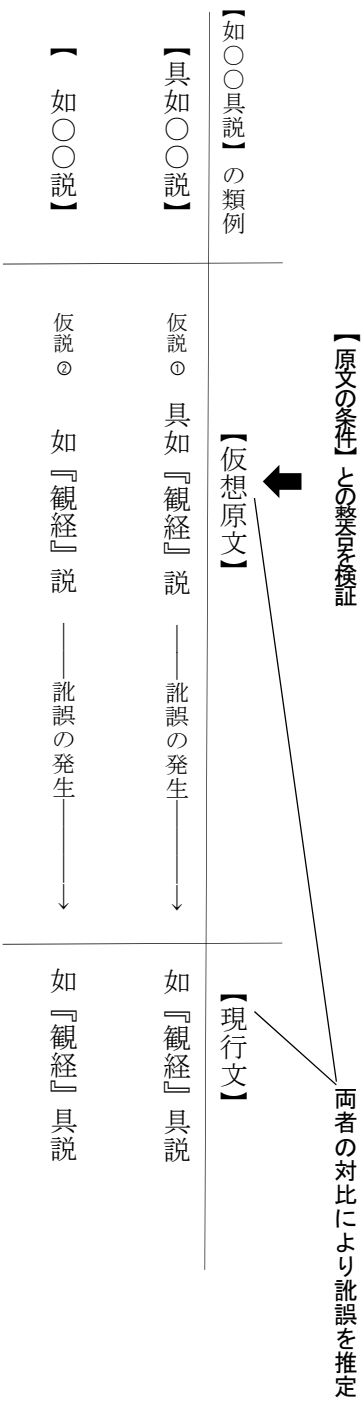
如『觀經』具說      「觀經」を訛誤とする（良忠）

如『觀經』具說      「如○○具說」に批判的検証を加える（本稿）

では訛誤の所在を「如○○具說」と仮説した上で、そこには如何なる訛誤が生じたのであろうか。僅か「如○○具說」の三文字にも拘わらず、誤字・脱字（脱文）・衍字（衍文）・倒字（倒文）・錯簡、或いはそれら複数の合併したもの等、想定し得る訛誤は膨大であり、その特定は不能と言わざるを得ない。そこで視点を原文に転じ、訛誤の特定に補助線を引きたい。

訛誤の所在を「如○○具說」とする仮説の下、【原文の条件】iv. 「如『觀經』具說」へと誤認される要素を有する、を勘案する時、「第二節 用例帰納」において確認した「如○○具說」の類似表現「具如○○說」「如○○說」「……」は、誤認される蓋然性の高いものとして注目される。これら「具如○○說」「如○○說」「……」に着目し、何れかの句形を含む原文に対し、何らかの訛誤が生じ現行の「如○○具說」になった、と仮説を進めたい。

この仮想原文に対し、iv. 「如『觀經』具說」へと誤認される要素を有する、以外の【原文の条件】との整合を検証すると共に、現行文の「如『觀經』具說」と対比することにより、原文・訛誤を推定し、原文が「如『觀經』具說」へと誤認される一連の過程を明らかにする。



【仮説①】具如『観経』説 → 如『観経』具説

「具如『観経』説」が「如『観経』具説」になったと仮説すると、【原文の条件】の内、i. 「如『観経』具説」とは異なる、ii. 文法的に正しい、については問題なく整合する。

類似する両者の句形より、生起した訛誤は「具」と「如『観経』」の倒字ということで問題ないと思われる。

具如『観経』説 — 「具」と「如『観経』」の倒字 — 如『観経』具説

ただし、iii. 文意が通る、については、第二節にて確認した通り、用例上「如〇〇具説」と「具如〇〇説」は文意として大差なく、原文が「具如『観経』説」だったとするならば、

若少一心即不得生。具如『觀經』說。

若し一心も少けぬれば、即ち生ずることを得ず。具には『觀經』に説きたまうが如し。

と「如『觀經』具說」同様、現行の『觀經』に該当すると考えられる本説を見出すことはできず、文意は通じない。

【仮説②】 如『觀經』說 ↓ 如『觀經』具說

「如『觀經』說」が「如『觀經』具說」になったと仮説すると、【原文の条件】の内、i. 現行の「如『觀經』具說」とは異なる、については問題なく整合する。

しかし、ii. 文法的に正しい、については、第二節にて述べた通り、この句形では「說」の後に必ず本説（典拠となる文）が明示されなければならない。つまり、

如『觀經』說「……」。

と、「說」の後には「……」（『觀經』における本説）が在った筈である。この本説が脱文することにより、現行文「如『觀經』具說」となったのであろうか。

ただし、このような脱文を想定した場合、「如『觀經』說」となり、「具」の字は存在しない。つまり「如『觀經』說……」を原文と仮説するならば、

如『觀經』說「……」 — a. 「……」の脱文 ↓ 如『觀經』說 — b. 「具」の衍字 ↓ 如『觀經』具說



と、二段階の訛誤（a. 「本説」の脱文・b. 「具」の衍字）の生起を想定しなければならない。

また、**iii. 文意が通る**、に關しても、脱文箇所「……」（本説）に『観経』の如何なる文を該当させるかが問題となる。そもそも、その一文（本説）が容易に特定できるようであれば、当該箇所は古来より問題になりはしない。

ただし、この「特定し難い脱文（本説）」「具」の衍字」という二つの問題は、これを個別に生起した二段階の訛誤と捉えるのではなく、一つの訛誤に起因するものとして統合することにより会通が可能である。想定される訛誤は脱文・衍字ではなく、倒字である。

つまり、「説」に後続する脱文内容＝衍字「具」と捉え、脱文・衍字ではなく、「説」と「具」が倒字している、とする解釈である。

如『観経』説「具」 — 「説」と「具」の倒字 — 如『観経』具説

それでは改めて、「如『観経』説「具」」を原文と仮説し、【原文の条件】との整合を検証したい。

i. 現行の「如『観経』具説」とは異なる、については問題なく整合する。

ii. 文法的に正しい、についても、「如『○○』説「……」」の句形は、『○○』（典籍）に「……」（本説）と説かれている通りである、と典拠と本説を明示するものであり、

『観経』に「具」と説きたまうが如し。

という一文も文法的には問題はない。

ただし一般に、「……」（本説）には『○○』（典籍）に説かれる文章が引用されることは、第二節にて確認した用例より明かである。経論に説かれている教説を明示することによって、初めて経証・論証になるのであり、一文字では証文とはならないのではなからうか。実際『観経』に「具」の字は二三箇所に見え<sup>4)</sup>、一文字ではそれが何れの「具」を指示するものなのかが問題となる。

それでは『観経』の本説として「具」の一字をあげる仮想原文は、**iii. 文意が通る、に抵触するものであろうか。**当該箇所を「如『観経』説「具」」として訓読文をあげ、その文脈を確認したい。

### 【訓読文】

①問いて曰く。今、人を勧めて往生せしめんと欲わば、未だ知らず、若為が安心・起行・作業せば、定んで彼の国土へ往生することを得る也。

②答えて曰く。必らず彼の国土へ生ぜんと欲はば、『観経』に説きたまうが如くは「具三心必得往生」と。

③何等をか三と為す。

④一には至誠心（省略）。二には深心（省略）。三には回向発願心（省略）。

⑤此の三心を具すれば、必ず生ずることを得る也。

⑥若し一心も少けぬれば、即ち生ずることを得ず。

⑦『観経』に「具」と説きたまうが如し。

⑧知るべし。

確かに⑦「『観経』に「具」と説かれている通りである」という一文だけでは、それが何れの「具」を指示するものか特定はできない。ただし当該箇所の前文では、②「（前略）『観経』に説きたまうが如くは「具三心必得往生」と」（訓読文②、傍線部）と、『観経』の教説が既に呈示されており、それを踏まえての説示である為、「具」と一文字であつても、それが既出の「具三心必得往生」の「具」を指示することは文脈より規定される。

なお、この「具」一文字のみを本説とすることは、**iv. 現行の「如『観経』具説」へと誤認される要素、にも深く関連する。**近接する二字が倒字する可能性は、間に文を挟む場合より生起し易いのは言うまでもないが、問題は「如〇〇具説」というのは定型句であり、一般的な表現と

いうことである。その為、通常の漢語能力を有する者が「如『観経』説具」を書写する場合、文法的に違和感を覚え、「具」を『観経』に説かれる本説としてではなく、経証を略示する定型句「具に説けり」の「具」と誤認し、本来の「如『観経』説具」から現行の「如『観経』具説」へと改竄（書写者の意識としては訂正）する蓋然性は高いと思われる。現存諸本が何れも「如『観経』具説」とするのも、ここに起因するものと推察する。

しかし何故「具」の一字なのであるうか。「具」と一文字であつても、それが既出の「具三心必得往生」の「具」を指示することが文脈上規定されることは既に述べた。ただし、

若少一心即不得生。如『観経』説「具」。

若し一心も少けぬれば、即ち生ずることを得ず。『観経』に「具」（そなふ）と説きたまふが如し。

では、「具」（そなふ）と「若少一心即不得生」の関係は明瞭ではない。仮に、

若少一心即不得生。如『観経』説「具三心」。

若し一心も少けぬれば、即ち生ずることを得ず。『観経』に「具三心」（三心をそなう）と説きたまうが如し。

とするならば、『観経』に「具三心」と説かれている。だから、一心でも欠けたならば往生はできない、と両者間の論理展開は明瞭となる。何故「具」一文字なのであるうか。

この疑問は、iv. 現行の「如『観経』具説」へと誤認される要素、にも通底する。「如『観経』説具三心」と表現するならば、「説具」が「具説」へと倒字する蓋然性はかなり低くなることが予想される。故意に「具」と表現する理由は那邊にあるのであろうか。

推測に過ぎないが、善導は「具三心」ではなく、「具」の一文字をあげることにより、「具」の有する動詞としての意味「そなえる」では

なく、副詞としての意味「つぶさに」を強調したのではなからうか。善導の意図をこのように推測し、当該箇所を試解すれば以下の通り。

### 【試解】

この三心を具せば必ず往生できるのである。

もし一心でも欠ければ往生することはできない。

『観経』に「具」（欠けることなく全て）と説かれている通りである。

勿論、『観経』の原意は「具三心」であり、三心を「そなえる」の意であるのは明かであるが、善導は敢えて目的語「三心」を呈示せず、「具」の一文字とすることにより、「具」の有する副詞的意味「つぶさに」を強調しようとしたのではなからうか。

ただ、このような善導の意図は、典拠を略示する定型表現「如〇〇具説」へと誤認されることにより埋没し、解釈し難い一文として流伝して行くことになったものと推測する。

### おわりに

以上、『往生礼讃偈』序文の「如観経具説」を考察対象として、諸本における異文の有無を確認し、善導の著作より用例を帰納した上で、『往生礼讃偈』の当段構成における機能を踏まえ、先学の解釈に検証を加えることで、「如観経具説」を疑誤と判断した。これに対し、先学により検討されていない「如〇〇具説」に訛誤があると仮説し、生起した訛誤を倒字と想定、遡行することにより、本来「如観経説具」（『観経』に「具」と説きたまうが如し）であったと試解した。

最後に本稿における「先学の解釈」の位置付けについて附言したい。

本章の目的は善導『往生礼讃偈』の校勘にある。それは善導の撰述した原文の復元を志向するものであり、もとより宗派的（いわゆる護教的）

解釈を求めるものではない。にも拘わらず、良忠・智円・堯惠等、先学の解釈を参照したのは、彼らのを疑誤を認める眼が優れているからである。校勘を行うには訛誤を発見しなければならない。訛誤は異文、疑誤に分類される。前者が諸本の対照により明らかになるのに対し、後者は本稿のように諸本の対照によっても明らかにはならず、その発見にはテキストに対する深い知識、読解力が必要となる。

序章にて述べたが、柴田泰山は善導研究の現況を停滞とみなされ、その理由として、

- ①特に歴史的側面では諸先学によりすでに現存資料の研究が整理され、これ以上新たな見解を提示することが困難な状況にあること。
- ②思想的側面では善導自身の著述内容については一応の確認が行われていること。
- ③従来の善導研究の多くが法然浄土教研究の視座から進められてきたこと。

の三点をあげられている<sup>(43)</sup>

このような現状に対し、柴田自身は「従来の善導研究を総括的に捉えようと、善導研究は法然や親鸞あるいは日本における善導の著作に対する諸註釈を起点とし、そこから日本浄土教の思想的な根拠を善導教学内に求め、その結果、浄土教大成者としての善導像が先行し、中国仏教思想史上における善導という視点から研究が行われてきたと言い難い」と、従来の研究における視座を突破口とされ、「善導教学そのものを一度中国仏教史上に還元し、善導の説示内容が中国仏教史上どのような位置に存在しているかということを確認して、その上で善導教学の独自性や宗教性を追求する」という新たな方向を提示されている<sup>(44)</sup>。

柴田泰山による研究動向の把握は的を射ており、今後の善導研究の視座において、宗派的解釈からの脱却は重要な課題と言えよう。

ただし留意すべきは「宗派的解釈からの脱却」の方法である。確かに先学の解釈には宗派的・護教的と言われる要素が散見し、現在のいわゆる近代仏教学の観点より否定されるものが多いのも事実である。本稿において検証した良忠・智円・堯惠の解釈も、本稿の視座よりすれば不当なものであった。ただし、彼らが何れも当該箇所解釈が必要である、と認めている事実は、立論する上で大いに参照すべきものである。善導研究における手法・視座としての「脱宗派」は近年決まり文句となりつつあるが、脱宗派＝先学の等閑視、ではない。

どの詩人でもどの芸術部門の芸術家でも、その人ひとりだけで完全な意義をもつ者はない。その意義、その価値は死んだ過去の詩人たちや芸術家たちに対する関係の価値である。（中略）現在残っている著名な作品はおたがいのあいだに理想的な秩序を形成しているが、この秩序は新しい（ほんとうに新しい）芸術作品がそこへ入ると変更されるのだ。現在ある秩序は新しい作品があらわれないうちは完結しているわけだが、目新しい作品が加わった後でも持続したいというのなら、現在ある秩序全体が、たとえ少しでも、変化を受けなければならぬ。こうして一つ一つの芸術作品が全体に対してもつ関係やつり合いや価値が修正せられてゆく、これが古いものと新しいものとの順応なのである。

（T・S・エリオット「伝統と個人の才能」『文芸批評論』矢本貞幹訳、岩波書店、一九三八）

勿論、ここでエリオットが述べているのは詩論であるが、学問を知の体系化、またその総体と捉える時、ここで論ぜられる「作品」を論攷、「古いものと新しいものとの順応」を学問の進展と解釈することも可能であろう。

梵文原典を持たない中国撰述の章疏である善導著述の研究において、前近代・近代の質的な分水嶺を時間軸上に定立することは困難であり、学問の近代化としての宗派的解釈からの脱却に必要なのは、先学の等閑視ではなく、先学の築いたものへの批判的検証であろう。本稿はこのような観点より、校勘学という手法により善導の撰述した原文の復元を志向し、その方法の中に先学の成果を取り込む試論でもある。

ある人は言った、「現代のわれわれは過去の作家たちよりもはるかに多くのことを知っている、だから過去の作家たちはわれわれから遠く離れたところにいる」、まさにそうである、しかもわれわれのしっていることというのは、その過去の作家たちのことなのである。

（T・S・エリオット『前掲書』）

## 註

- 1 『昭和新修法然上人全集』三三三頁。
- 2 『浄土真宗聖典（原典版）』四八九・四九〇頁。
- 3 序論、註36を参照願いたい。
- 4 『集諸経礼懺儀』と『往生礼讃偈』の関係については本論第一章を参照願いたい。
- 5 集諸経礼懺儀二卷 群字函
- 6 上卷唐沙門智昇集。上半卷通礼諸仏。下半卷別以偈頌礼讃西方。及懺悔発願等文。下卷比丘善導揀示專修西方要義。及集諸祖六時礼讃浄土偈頌等（卷一「大藏專談浄土経論目錄」、『大正蔵』四七、一五一中）。
- 7 智昇法師集諸経礼懺儀下卷者善導和尚礼懺也（『顕浄土真実教行証文類』、『浄土真宗聖典（原典版）』二〇九頁）。
- 8 智昇法師以此礼文抽入大蔵英字函（『往生礼讃私記』、『浄土宗全書』四、三七七頁上）。
- 9 集諸経礼懺儀二卷五十紙（賢聖集 此方撰述）、『大正蔵』五五、六九七下）。
- 10 序論第五節一七・一八頁。
- 11 序論第六節二三頁。
- 12 七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』は『往生礼讃偈』の伝本であり一一七六―一一八〇年の書写と考えられる。ただし本章の考察対象である「如観経具説」該当箇所を欠く。詳細は本論第四章を参照願いたい。
- 13 七寺蔵本は安元三年（一一七七）の書写奥書を有するが、その本文は開宝蔵本（大宋太平興国二年（九七七））を淵源とするものである。また檀王法林寺蔵本・金剛寺蔵本の本文は、開宝蔵本開版以前の唐代写本大蔵経本の系統であると推測される。詳細は本論第二章、第三章を参照願いたい。
- 14 佛教大学蔵マイクロフィルム紙焼きによる。
- 15 堤玄立・平松令三編『高田専修寺本 善導大師五部九卷』（法蔵館、一九八六）による。書誌情報については『同』解説二、『定本親鸞聖人全集』九、解説（法蔵館、一九六九）、高橋正隆「善導遺文の書誌研究」（藤堂恭俊編『善導大師研究』、山喜房仏書林、一九八〇）を参照。



- 15 「京都大学附属図書館蔵 建長三年刊『往生礼讃偈』解題・影印・訓読」（国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀 卷下』、国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会、二〇一〇）による。詳細は梶浦晋の解題を参照願いたい。なお本帖は京都大学附属図書館のホームページ上（京都大学電子図書館貴重資料画像 <http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/035/image/1/035s0001.html>、二〇一一年八月二四日確認）にて画像が公開されている。
- 16 藤原清衡（一〇五六—一二二八）発願一切経本。書写年時は永久五年（一一一七）から天治二年（一二二五）の間と考えられる。詳細は本論第三章を参照願いたい。
- 17 承元二年（一二〇八）から文永五年（一二六八）頃の間を書写か。詳細は本論第三章を参照願いたい。
- 18 安元三年（一一七七）の書写奥書あり。本文は開宝蔵本の系譜に連なるものである。詳細は本論第二章を参照願いたい。
- 19 「増上寺蔵 思溪版『集諸経礼懺儀』卷下 解題・影印」（註15前掲書所収）による。詳細は能島覚の解題を参照願いたい。
- 20 延聖院大蔵経局編『磧砂大蔵経』第三二冊（新文豊、一九八七）による。
- 21 四川省仏教協会『洪武南蔵』第一七三冊（四川省仏教協会、一九九九）による。
- 22 永楽北蔵整理委員会『永楽北蔵』第一五二冊（綫装書局、二〇〇〇）による。
- 23 中華大蔵経編輯局整理『中華大蔵経（漢文部分）』六三（中華書局、二〇〇五）による。
- 24 『域外漢籍珍本文庫』編纂出版委員会編『高麗大蔵経初刻本輯刊』七五冊（西南師範大学出版社、二〇一二）による。
- 25 東国大学校『高麗大蔵経』三三冊（東国大学校、一九七五）による。なお高麗大蔵経研究所のホームページ上にも画像が公開されている（[http://kb.sutra.re.kr/ritk\\_eng/search/Ext/index.jsp?kcode=K1087&ksubCode=000&flag=D&fontFlag=B&fromMenu=N&volumeCode=001&page=P0740&dan=b&kwon=V33](http://kb.sutra.re.kr/ritk_eng/search/Ext/index.jsp?kcode=K1087&ksubCode=000&flag=D&fontFlag=B&fromMenu=N&volumeCode=001&page=P0740&dan=b&kwon=V33)、二〇〇八年一〇月六日確認）。
- 26 三者意業憶念觀察門。所謂專意念觀彼仏、及一切聖衆身相光明、国土莊嚴等、如觀經說、唯除睡時、恒憶恒念恒想恒觀此事等。故名觀察門（『大正蔵』四七、四三八頁下）。
- 27 類例として【如『〇〇』云「……】】【如『〇〇』説云「……】を含む。本例は最も用例が多く、善導の著述全体で七一例を数える。ここでは『往生礼讃偈』（一〇例）に限り掲載した。

28

「如観経説者」(『観経』に説きたまうが如くは)の直後に位置する文「具三心必得往生」が引文であることは構成上、言を俟たないが、実際に引用は何処までであろうか。『観経』に該当文を求めると、

仏告阿難及韋提希「凡生西方有九品人。上品上生者、若有衆生願生彼国者、發三種心、即便往生。何等為三。一者至誠心。二者深心。三者迴向發願心。

具三心者必生彼国(『大正蔵』一三、三四四下)

と、引文「具三心必得往生」とは若干相違するものの(相違箇所を太字にて示した)、典拠と推定される文(直線部)が認められる。問題は『往生礼讃偈』本文における後続の文「何等為三」「二者至誠心」「二者深心」「三者迴向發願心」も、『観経』に認められる(波線部)ことである。ただし、「一者至誠心」「二者深心」「三者迴向發願心」に後続する、三心個別の具体相は『観経』には認められない。可能性として、「具三心必得往生。何等為三。一者至誠心。二者深心。三者迴向發願心」が『観経』の引用であり、三心個別の具体相「所謂身業礼拝彼仏、口業讃歎称揚彼仏、意業專念觀察彼仏、凡起三業、必須真実。故名至誠心」。「即是真実信心。信知自身是具足煩惱凡夫、善根薄少、流転三界、不出火宅。今信知弥陀本弘誓願、及称名号、下至十声一声等、定得往生、乃至一念無有疑心。故名深心」。「所作一切善根悉皆回願往生。故名回向發願心」は善導による註釈と、両者間にテキストの位相を認めることもできよう。檀王本、金剛寺本では「一者至誠心」以下を細字双行で表記しており、当該箇所における何らかの位相の存在を示唆している。本稿では確実に引文と認められる「具三心必得往生」までで留めたが、この点については別稿を期したい。

29

『観経』に具(とも)に説きたまふが如し」と読み、⑤「具此三心必得生也」、⑥「若少一心即不得生」の両文の経証と捉えることも不可能ではないが、用例からすれば、前節にて確認した通り、「具(つづぎ)に」と読むべきか。なお仮に「具(とも)に」と読むにせよ、⑥「若少一心即不得生」の典拠が『観経』に見出せないという問題は解消されない。

30

『大正蔵』八三、二下。

31

『大正蔵』八三、一九上。

32

『顕浄土真実教行証文類』『正信念仏偈』(『大正蔵』八三、六〇〇上―下)、『浄土高僧和讃』(『大正蔵』八三、六六〇上―六六四中)。

33

前掲註3参照。

34

前掲註1、2参照。

35 ここにみられる『観経』が『観経疏』であつたとすると、『往生礼讃偈』撰述時には『観経疏』が成立していたこととなり、定説をみない善導著述の成立次第において、極めて重要な記述となる。ただし当該箇所を根拠として『往生礼讃偈』と『観経疏』の前後関係を立論するものはない。なお柴田泰氏は両書の前後関係を見仏に対する表現の差異より「『観経疏』は『往生礼讃』後に撰述されたもの」と推論されている（『善導教学の研究』（山喜房仏書林、二〇〇六、六五―六七頁）。

36 齊藤隆信は『観経疏』を「講経を通して積み上げられてきた成果を経疏的な体裁にまとめたもの」と推測され、その理由の一つとして、書物として「前後で整合しない叙述が見られる」ことをあげられている（善導『観経疏』における讃偈の韻律『浄土宗学研究』三二、二〇〇六。後『中国浄土教儀礼の研究―善導と法照の讃偈の律動を中心として―』法蔵館、二〇一五）。齊藤隆信の指摘通り、現行の『観経疏』には後述すると言明しながら後述されない事例が認められる。その為『観経疏』の元となった講説に、良忠の解釈通り、「三心の内、一心でも欠けたならば往生することはできない」ことが詳細に説かれている、と想定することも可能であるが、この仮説は現時点において反証可能性のないものであり検討しない。

37 大正大学図書館所蔵のマイクロフィルム紙焼きによる。

38 堯恵には『往生礼讃偈』の註釈書である『往生礼讃鈔』（明徳元年（一三九〇）成立）があり、本来、本書より該当箇所を引用すべきであるが、執筆時に確認できなかった為、『選択集私集鈔』を用いた。勿論『往生礼讃偈』の註釈と、他の書物の註釈書に散見する『往生礼讃偈』引文に対する註釈は異なる位相にて捉えられるべきものであるが、堯恵『選択集私集鈔』には、良忠『往生礼讃私記』、智円『往生礼讃類聚抄』と先行する『往生礼讃偈』註釈書を踏まえて成立していることが看取され、また後の『往生礼讃偈』当該箇所の註釈に堯恵の説として引用されるものと同内容である為、『往生礼讃偈』当該箇所の註釈と看なしても問題ないと判断し、次善の策として『選択集私集鈔』を用いた。

39 実際に現存する版本・写本に附された訓からも、「つぶさに」と読まれていたことが確認される。誓願寺本「観経二具二説（ク）カ如シ」（三丁表。佛教大学図書館蔵マイクロフィルム紙焼きによる）。専修寺本「観経二具サニ説（ク）カ如シ」（三丁表。『高田専修寺本 善導大師五部九卷』八一―一頁）。なお京大本は「観経二具説如シ」（三丁表。『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』二二―二頁）となっており、「観経二具（サニ）説（クカ）如シ」「観経二具説（スルカ）如シ」「観経二具（フル）説（ノ）如シ」と如何様に訓んでいたのか判断不能である。

- 40 校勘学の対象は經典古籍であり、その成果は直ちに翻訳仏典に応用可能なものではないが、中国撰述の末疏である善導の著述を対象とする場合、その多くは参考になるものと考ええる。
- 41 例えば王念孫『読書雜誌』（北京市中国書店、一九八五）では六二項目、その子、王引之『経義述聞』（江蘇古籍、二〇〇〇）では一二項をあげる。
- 42 「具足衆戒」（三四一下）、「八楞具足」「不可具見」「不可具説」（三四二上）、「無不具足」「不可具名」（三四二中）、「不可具見」（三四二下）、「不可具説」（三四三中）、「衆好具足」（三四三下）、「名為具足観観世音及大勢至」（三四四上）、「況復観仏具足身相」（三四四中）、「具三心者必生彼国」「具諸戒行」「具此功德」「見仏色身衆相具足」「見諸菩薩色相具足」（三四四下）、「具八解脱」「持具足戒」（三四五中）、「具百法明門」「八戒及具足戒」（三四五下）、「具諸不善」「具足十念」（三四六上）。引用は何れも『大正蔵』一二による。
- 43 柴田泰山、註35『前掲書』一〇頁。
- 44 柴田泰山『前掲書』一〇頁。

## 結 論

以上、「『往生礼讃偈』の文献学的研究——古写経本『集諸経礼懺儀』巻下を用いて——」と題し、近年の『往生礼讃偈』研究が、法然浄土教の視座を離れ、中国仏教思想史上における善導という視座による研究を志向しつつも、そのテキストとして法然浄土教影響下における改変を経たものに依拠するという自家撞着に陥っているという問題意識の下、智昇編『集諸経礼懺儀』を介した『往生礼讃偈』の入蔵に着目し、日本に現存する古写経本『集諸経礼懺儀』巻下、『阿弥陀往生礼仏文』を対象として現存する刊本大蔵経本と比較対照を行い古写経本の祖本・系譜を明らかにすることで、より原典に近接する『往生礼讃偈』テキストの伝本整理・紹介と古態の復元を目的とした文献学的研究を六章にわたって論述してきた。

第一章において『集諸経礼懺儀』の特殊な文献的性格を正しく認識し、『往生礼讃偈』の伝本として捉えることが妥当であることを確認した上で、第二・三章において日本に伝存する『集諸経礼懺儀』巻下古写経本の系譜を検証し、開宝蔵本系統（七寺本）と唐代写本大蔵経本系統（檀王本・金剛寺本）に類別されることを明らかにした。また第四章では七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』が『往生礼讃偈』単行本系統に位置付けられることを明らかにした。これら開宝蔵本系統『集諸経礼懺儀』巻下（七寺本）、唐代写本大蔵経本系統『集諸経礼懺儀』巻下（檀王本・金剛寺本）、『往生礼讃偈』単行本系統『阿弥陀往生礼仏文』は何れも法然浄土教の影響下におけるテキスト改変を経ているものであり、本研究の問題意識「近代の『往生礼讃偈』研究は、法然浄土教の視座を離れ、中国仏教思想史上における善導という視座による研究を志向しつつも、その依拠すべきテキスト自体が既に法然浄土教の影響下にあるという自家撞着」の解決に資するテキストである。これらのテキストにより第五章では『往生礼讃偈』の変遷過程を検証し、第六章では諸本によっても解決されなかった『往生礼讃偈』の難読箇所に対して私解を試みることで『往生礼讃偈』原形の一端を推定した。

以上の六章を通じて本研究の目的である『往生礼讃偈』伝本の整理・紹介（第一・二・三・四章）と古態の復元（第五・六章）を遂行した。ここでは各章において明らかになった知見を略述すると共に、今後の課題を提示し本稿の結びとしたい。

## 第一節 本研究の帰結

「第一章 『往生礼讃偈』と『集諸経礼懺儀』卷下」では、本研究の対象である善導集記『往生礼讃偈』とそれを全文収録する智昇撰『集諸経礼懺儀』の関係を検討した。何故、智昇は自著に『往生礼讃偈』全文を収録するのか、その意図は何辺にあるのか、『集諸経礼懺儀』卷下に収録される『往生礼讃偈』に智昇の加筆、編纂が為されたのか等、『集諸経礼懺儀』の文献的性格を明らかにすることは、『集諸経礼懺儀』卷下を『往生礼讃偈』の一伝本として扱うことの是非を問うものであり、本章を第一章に据える所以である。

高瀬承厳による先行研究では、卷上末の跋文を智昇のものと捉え、本来は卷上の一巻本であり、そこに収録されていた『往生礼讃偈』を後人が別立した為、現在の二巻本になったとされる。しかし智昇自身の手になる『開元釈教録』を始め諸目録にも『集諸経礼懺儀』を一巻本とする記述は確認されず、高瀬の説は跋文を智昇の手によるものとする誤認の上に立論されたものである。卷上は本来、信行没後（五九四）の三階教徒が集成、成文化したものであり、跋文も三階教徒によるものである。本来別個の文献であった三階教の礼懺儀・浄土教の礼懺儀を『集諸経礼懺儀』の名で卷上・下に収録したのが智昇であり、両者は一連のものではなく、また智昇の撰述でもない。

この智昇による『集諸経礼懺儀』撰述の契機として道宣（五九六—六六七）による『六時礼仏懺悔儀』『集仏経六時行道儀』の存在が指摘でき、智昇の仏教史家的側面と『集諸経礼懺儀』の文献的性格を勘案するならば、その撰述意図は教学の構築、自身の思想・信仰の表明ではなく、長安を中心に盛行していた六時の礼懺儀を収録する、という開元一八年（七三〇）当時の長安仏教の記録にあったことが推測される。これは『開元釈教録』『入蔵録』中、『集諸経礼懺儀』が分類される「賢聖集伝（此方撰述）」所収の四〇部三六八巻が史伝・地誌・目錄・音義などを含む事実の記録が採録されていることも軌を一にする。

以上、『集諸経礼懺儀』の重層構造を解明し、智昇による撰述意図を汲むことにより『集諸経礼懺儀』卷下に収録された善導『往生礼讃偈』は智昇の恣意的編纂、附加等がなされたとは考え難く、開元一八年（七三〇）当時の長安において盛行した六時儀礼の記録として捉えられるものであり、卷下のみを独立した文献として読解することが不当でないことを明らかにした。

「第二章 七寺蔵 七寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下攷——附 開宝蔵本の復元——」では、安元三年（一一七六）書写の七寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下の書誌情報を紹介すると共に、刊本大蔵経本『集諸経礼懺儀』卷下（高麗初雕版本・再雕版本・金蔵本・思溪版本）、日本に伝存する古写経本『集諸経礼懺儀』卷下（檀王法林寺蔵本・金剛寺蔵本）、七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』、京都大学附属図書館蔵建長三年版『往生礼讃偈』と本文の比較対照を行い、その祖本が散逸し現存していない開宝蔵本であることを明らかにした。七寺本を以て直ちに善導撰述当時のテキストと見なすことはできないが、それは祖本の開版された大平興国二年（九七七年）までの遡及を可能にするものであり、また北宋勅版の有する権威、並びに同一本文の量産が可能であることの影響力を鑑みれば、『集諸経礼懺儀』卷下の伝播を考察する上で決して等閑視されるものではないとの所見より影印・翻刻にて紹介し、系統を同じくする高麗初雕版本・再雕版本・金蔵本との校異を附した。

なお高麗初雕版本・再雕版本・金蔵本は同一の祖本である開宝蔵本より派生したものであり、祖本の版式（二紙三行、一行一四字詰、欠筆あり）をよく留めているが、何れも開版に際する校勘により、開宝蔵本そのものの本文内容を留めていない。これに対し七寺本は一紙二六行、一行一七字前後詰め、欠筆なし、とその版式は留めていないが、寛和二年（九八六）に奄然によつて将来された開宝蔵本の本文内容を転写による誤写・脱文を含みながらも留めるものと考えられる。附章「―附 開宝蔵本の復元―」では、これら両者の特性を踏まえ相互補完することで、散逸した開宝蔵本本文の推定復元を行った。これは同時に高麗蔵本（初雕本・再雕本）、金蔵本における校訂箇所比定の意味するものであり、従来、開宝蔵の覆刻、若しくは開宝蔵系統と一括され、不明瞭であった第一類内の具体的改変を説明するものでもある。

また従来、『集諸経礼懺儀』卷下は「親鸞の所覧本は何か」という問題意識から研究の俎上に上げられることが殆どであったが、そこでは親鸞在世時における『集諸経礼懺儀』卷下の将来・流布状況の整理といった基礎研究はなされてこなかった。このような現状の中で七寺本の系譜を特定し、開宝蔵本の本文を復元することは、平安・鎌倉期における『往生礼讃偈』流布状況の一端を明らかにするものであり、親鸞所引本の研究においても資するものと考えられる。



「第三章 檀王法林寺藏 中尊寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下、並びに金剛寺藏 金剛寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下攷」では、従来寺伝により荒川経とされてきた京都檀王法林寺藏『集諸経礼懺儀』卷下が藤原清衡（一〇五六―一二二八）発願による中尊寺一切経（一一一七―一二二五書写）本であることを指摘し、書誌情報を紹介すると共に、同系統本と比定され、承元二年（一二〇八）から文永五年（一二六八）の間に書写されたと推測される金剛寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下の書誌情報も併せて紹介した。両巻は細字双行表記の多用、「至心帰命礼」の冒頭に「南無」が附されるという版本大蔵経本に認められない特色を共有しており、その本文は版本大蔵経本（高麗初雕版本・再雕版本・金蔵本・思溪版本・磧砂版本）、七寺藏『阿弥陀往生礼仏文』、京都大学附属図書館蔵建長三年刊『往生礼讃偈』との比較対照の結果、版本大蔵経本よりも京都大学附属図書館蔵建長三年刊『往生礼讃偈』に近接するものであり、その系譜は版本大蔵経本に先行する唐代写本大蔵経本『集諸経礼懺儀』卷下に連なるものと推定される。檀王本・金剛寺本『集諸経礼懺儀』卷下と京大本『往生礼讃偈』の近接は両系統が共に唐代写本テキストに由来する為と考えられ、それが開宝蔵を嚆矢とする刊本大蔵経本『集諸経礼懺儀』卷下と乖離するのは、開宝蔵開版（九七一―九七七）までにテキストの変遷が進んだのか、或いは諸刊本大蔵経本開版時における校訂の為と推測される。檀王本・金剛寺本にみられる細字双行表記の多用は、儀礼の執行を意識したテキスト整備の反映と捉えられるものであり、『集諸経礼懺儀』卷下の唐代写本大蔵経本の実態を伝える重要な伝本との所見より檀王本を影印・翻刻にて紹介し、系統を同じくする金剛寺本との校異、並びに金剛寺本の影印を附した。

「第四章 七寺藏『阿弥陀往生礼仏文』攷」では、安元二年（一一七六）から治承四年（一一八〇）の書写と推定される七寺藏『阿弥陀往生礼仏文』の書誌情報を紹介し、刊本大蔵経本『集諸経礼懺儀』卷下（高麗初雕版本・再雕版本・金蔵本・思溪版本）、日本に伝存する古写経本『集諸経礼懺儀』卷下（檀王法林寺藏本、金剛寺藏本、七寺藏本）、日本に伝存する『往生礼讃偈』単行本（京大本、専修寺本、誓願寺本）と本文の比較対照を行い、従来、詩律学の観点より入蔵本『集諸経礼懺儀』卷下の系譜に位置附けられてきた本書が、実際には版本大蔵経本よりも日本に伝存する『往生礼讃偈』単行本に近接するものであることを論証した。従来知られている日本に伝存する『往生礼讃偈』単行本（京大本、専修寺本、誓願寺本）が何れも法然浄土教の影響下におけるテキストの校訂（改変）により本来の韻律を保持していないのに対し、本書は同系統でありながら韻律を保持しており、法然浄土教の影響下におけるテキストの校訂（改変）を経ていない唯一の『往生礼讃偈』単行本系統本として注目すべきものとの所見より影印・翻刻にて紹介した。

「第五章 『往生礼讃偈』変遷攷」では、これまでの各章で比定してきた開宝藏本『集諸経礼懺儀』卷下・檀王法林寺藏古写経本『集諸経礼懺儀』卷下・『往生礼讃偈』単行本系統（法然浄土教改訂以前）『阿弥陀往生礼仏文』と『往生礼讃偈』単行本系統（法然浄土教改訂以後）京大本・専修寺本・誓願寺本を対象として諸本間における語彙の相違ではなく構成の相違に着目し、各時礼における礼数の相違、偈頌を構成する句数の相違を改変の痕跡と捉え、相互の前後関係を検討し序列化することによって『往生礼讃偈』構成の変遷過程を可視化し、原形の一端を明らかにした。

推定される構成の変遷に対し検討対象の諸本を配当した序列は一律とはならず、これは諸本が同一系譜上の前後関係として単純に配置されるものではなく、異なる系譜上に位置するものであり、その系譜が校訂を経ることによって複雑に交差していることを示唆している。本検討を通じて看取し得た諸本における改変の傾向は、『阿弥陀往生礼仏文』、開宝藏本が比較的原形を留めているのに対し、檀王本には不規則な点が散見するが、それは系統の異なるテキストとの校訂によるものであり、唐代写本大蔵経時代における多様なテキストの痕跡を留めるものと捉えられる。京大本・専修寺本・誓願寺本は礼数の表記に関して最も整合のとれたテキストとなっているが、これは原形を保っていることを意味するものではなく、礼数の実数の改変に則し総標・標章を改変した為と考えられる。

前述の第二章から第四章において検討した諸本の位置付けによれば現存諸本は、

『往生礼讃偈』単行本系統

『阿弥陀往生礼仏文』・京大本・専修寺本・誓願寺本

『集諸経礼懺儀』卷下 唐代写本大蔵経本系統

檀王本・金剛寺本

『集諸経礼懺儀』卷下 開宝藏本系統

七寺本・高麗初雕本・高麗再雕本・金藏本

と二系統に分類される。校訂本文を作成するにはまず『往生礼讃偈』単行本系統と『集諸経礼懺儀』卷下唐代写経大蔵経本系統において校勘作業をすべきであるが、本章において検討した変遷過程によればその際の底本としては『阿弥陀往生礼仏文』が適切と言えよう。

「第六章 『往生礼讃偈』『如観経具説』攷」では、ほぼ内容読解がなされている『往生礼讃偈』の中において難読の箇所として知られる「如観経具説」を対象に検討を行った。この一句は「『観経』に具に説くが如し」と、経証として『観無量寿経』が明示されているにも拘わらず、現行の『観無量寿経』（『大正蔵』二三所収。No. 三六五）には該当箇所を見出すことはできず、従来複数の解釈がなされてきた。本稿では当該箇所に対し、諸本における異文の有無を確認し、善導の著作より用例を帰納した上で、『往生礼讃偈』の当段構成における機能を踏まえ、主要な先学の解釈に検証を加えることで「如観経具説」を疑誤と判断した。この疑誤に対し先学により検討されていない「如〇〇具説」に訛誤があると仮説し、生起した訛誤を倒字と想定、遡行することにより、本来「如観経説具」（『観経』に「具」と説きたまうが如し）であつたと私解を試みた。

## 第二節 本研究の課題

最後に本研究の今後の課題を提示する。

まず遂行すべきは敦煌本『往生礼讃偈』に関する先行研究の纏め、並びに敦煌・吐魯番・黒水城本の整理である。『往生礼讃偈』の敦煌本については既に廣川堯敏が「敦煌出土善導『往生礼讃』古写本について」において伯二七二一、伯三八四一、斯五二二七、斯二六五九、斯二五七九、北平本（北敦八二二八）と主要なものを紹介され、『浄土宗全書』所収本（底本は元禄七年刊本）と対校されている。ただし廣川の研究は一九七七年のものであり、断片同士の接合、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵本への言及等はなされておらず、これらの課題を踏まえた廣川の研究に対する現代的改訂が求められる。敦煌本は書写年代的に最も『往生礼讃偈』原典に近接することが想定されるが、何れも断簡であり『往生礼讃偈』全体を包摂する写本は発見されていない。『往生礼讃偈』の文献学的研究における敦煌本の有用性を認識しつつ、その資料的限界を明示することにより、それを補完するものとしての日本に現存する古写経本の資料価値、並びにその研究意義がより鮮明になろう。

次に『往生礼讃偈』伝本の一層の蒐集があげられる。本研究では諸本の比較対照において宋版大蔵経本として思溪版本を用いたが、同じく宋版大蔵経本として東禅寺版本（醍醐寺蔵）・開元寺版本（金澤文庫蔵）の現存が確認されている。両本は思溪版本と同系統とされており、改めて両本を確認することにより本研究の結論が修正されるとは考え難い。ただし『往生礼讃偈』の入蔵本として『集諸経礼懺儀』巻下に着目する本研究は、諸刊本大蔵経より特定の經典を抽出し比較することで諸刊本大蔵経の系譜・関係を探るといふ刊本大蔵経の系譜研究という一面も有する。この側面に立てば、第二章附章にて七寺本を用いて開宝蔵本本文を復元し、第一類（高麗初雕版・高麗再雕版・金蔵）各本における改訂箇所を特定したと同様、東禅寺版本・開元寺版本の確認、思溪版本との比較対照は従来解明されていない東禅寺版・開元寺版・思溪版の関係解明に対して有用な資料を提供するものとなる。

最後に校訂本文の作成があげられる。

古籍の基本構成と流伝状況を知ること、具体的な校勘を始める前の主要な準備作業です。その直接的な目的は、底本を適切に選定し、参校本を決めることですが、同時に、それぞれの版本の特徴や信頼性を把握しておくことは、具体的な校勘の過程で、異文の分析判断を適切に行うための重要な前提条件であるとも言えます。

（倪其心著 橋本秀美・鈴木かおり訳『校勘学講義——中国古典文献の読み方』二四四頁）

と述べられるように、本研究第一章から第五章にかけて遂行したのは「古籍の基本構成（第一章）と流伝状況（第二―四章）を知ること」であり、「その直接的な目的は、底本を適切に選定し、参校本を決める（第五章）こと」であった。第六章にて難読箇所に対し具体的な校勘を実施したが、本研究の大部分は「具体的な校勘を始める前の主要な準備作業」であり、その最終的な目的は『往生礼讃偈』校訂本文作成にある。清代の文献学者顧広圻（一七六六―一八三五）の厳格な誠めを耳底に留め、校訂本文の作成に努めたい。

校讎の問題は二つある。一つは、凡庸愚昧な人間が、できもしない仕事を無理にしようとする場合で、著者の精神も知らずに、受け売りの浅薄な知識で訳の分からぬことを取り止めもなく書く場合。もう一つは、才気ある人間が、校讎を甘く見て、意味の通りにくい所になると必ず自分の理解を押し通し、しょっちゅう誤りを犯して、原文を無茶苦茶にしてしまう場合。この両者は一見対照的だが、古人の言葉を歪曲し、後字を困惑させるといふ意味では変わるところがない。

（『礼記考異跋』。倪其心『前掲書』六九頁）

書籍の訛誤は、実は校によって起こる。

（『書「文苑英華辨証」後』。倪其心『前掲書』六九頁）

資料

## 資料

諸本校異一覽

再雕本・初雕本・金蔵本 三本対照

## 諸本校異一覧

### 凡例

- 一、本稿は底本の本文を上段に示し、以下、校本との異同を一覧にすることで、諸本の関係を概観しようとするものである。
- 二、対象とした底本・校本、並びに略号は以下の通り。

底本…【高麗再雕本】 国際仏教学大学院大学蔵高麗大藏經（再雕版）『集諸經礼懺儀』卷下

校本…【七寺本】 七寺蔵一切經本『集諸經礼懺儀』卷下

【初雕本】 南禅寺蔵高麗大藏經（初雕版）『集諸經礼懺儀』卷下

【金藏本】 中国国家図書館蔵金版大藏經（広勝寺本）『集諸經礼懺儀』卷下

【思溪版本】 増上寺蔵思溪版大藏經『集諸經礼懺儀』卷下

【金剛寺本】 金剛寺蔵一切經本『集諸經礼懺儀』卷下

【檀王本】 檀王法林寺蔵中尊寺一切經本『集諸經礼懺儀』卷下

【京大本】 京都大学附属図書館蔵建長三年刊『往生礼讃偈』

【礼仏文】 七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』

- 一、本文の字配りは便宜上、『大正新脩大藏經』四七卷所収『集諸經礼懺儀』卷下によった。右肩にその頁数・段を示し、行頭に行番号を附した。
- 二、行番号の上に「日没」「初夜」「中夜」「後夜」「晨朝」「日中」、及び丸数字を附し、各時礼の始行と礼数を示した。
- 一、異読が認められた場合、底本文の当該字右肩に＊を附し、下段に校異を示した。校異の表記法は以下の通り。
- 底Ⅱ校…底本と校本の文字の相違 底Ⅰ（校）…校本に増広が認められた場合 [底]…校本に削減が認められた場合
- 一、漢字字体は原則として旧字体を用い、字体の相違は校異の対象としていない。また通用されていると考えられるもの（無・无、華・花、辯・弁、爾・尒、慧・恵、與・与、鼻・臭、等）も校異の対象外とした。
- 一、【檀王本】【金剛寺本】【京大本】に認められる「南無」の附加は校異の対象外とした。
- 一、難読の箇所については「■」を用い示した。

四六六上		【高麗再雕本】					
1	集諸經禮懺儀卷下						
2	大唐西崇福寺沙門智昇撰						
3	比丘善導集記						
4	往生禮讚偈一卷勸一切衆生願生西方極樂						
5	世界阿彌陀佛國 六時禮讚偈依大乘						
6	經及龍樹天親此土沙門等所造往生禮讚						
7	集在一處分作六時唯欲相續係心助成往						
8	益亦願曉悟未聞遠霑遐代耳何者						
9	第一依釋迦及十方諸佛讚歎彌陀十二光						
10	名勸稱禮念定生彼國十九拜當日沒時禮						
11	第二謹依大乘經採集要文以爲禮讚偈二						
12	十三拜當初夜時禮						
13	第三依龍樹菩薩願往生禮讚偈十六拜當						
14	中夜時禮						
15	第四依天親菩薩願往生禮讚偈二十拜當						
16	後夜時禮						
17	第五依彥琮法師願往生禮讚偈二十二拜						
18	當辰朝時禮						
19	第六僧善導願往生禮讚偈依十六觀作二						
20	十拜當午時禮						
21	問曰今欲勸人往生者未知若爲安心起行						
22	作業定得往生彼國土也答曰必欲生彼國						
23	土者如觀經說先具三心必得往生何者爲						
24	三者至誠心所謂身業禮拜彼佛口業讚						
25	歎稱揚彼佛意業專念觀察彼佛凡起三業						
26	必須真實故名至誠心二者深心即是真實						
27	信心信知自身是具足煩惱凡夫善根薄少						
		【七寺本】					
		【初雕本】					
		【金藏本】					
		【思溪版本】					
		【金剛寺本】					
		【檀王本】					
		【京大本】					
		【禮佛文】					
		*首 缺					



## 【高麗再雕本】

1 流轉三界不出火宅今信知彌陀本弘誓願  
2 及稱名號下至十聲等定得往生乃至一念  
3 無有疑心故名深心三者迴向發願心所作  
4 一切善根悉皆迴願往生故名迴向發願心  
5 具此三心必得往生也若少一心即不得生  
6 如觀經具說應知  
7 又如天親淨土論云若有願生彼國者勸修  
8 五念門五門若具定得往生何者爲五一者  
9 身業禮拜門所謂一心專至恭敬合掌香華  
10 供養禮拜彼阿彌陀佛禮即專禮彼佛畢命  
11 爲期不雜餘禮故名禮拜門  
12 二者口業讚歎門所謂專憶讚歎彼佛身相  
13 光明一切聖衆身相光明及彼國中一切寶  
14 莊嚴光明等故名讚歎門  
15 三者意業憶念觀察門所謂專意念觀彼佛  
16 及一切聖衆身相光明國土莊嚴等如觀經  
17 說唯除睡時恆憶恆念恆想恆觀此事等故  
18 名觀察門  
19 四者作願門所謂專心若晝若夜一切時一  
20 切處三業四威儀所作功德不問初中後皆  
21 須真實心中發願願生彼國故名作願門  
22 五者迴向門所謂專心若自作善根及一切  
23 三乘五道一聖凡等所作善根深生隨喜  
24 如諸佛菩薩所作隨喜我亦如是隨喜以此  
25 隨喜善根及已所作善根皆悉與衆生共之  
26 迴向彼國故名迴向門  
27 又到彼國已得六神通迴入生死教化衆生  
28 徹窮後際心無厭足乃至成佛亦名迴向門  
29 五門既具定得往生一一門與上三心合隨

【七寺本】	【初雕本】	【金藏本】	【思溪版本】	【金剛寺本】	【檀王本】	【京大本】	【禮佛文】
1 願+(及願) 2 聲+(聞) 3 深  澡 5 (往) 7 (有:具定)	2 聲+(聞) 5 (往)	2 聲+(聞) 5 (往)	2 聲+(聞) 5 (往)	2 聲+(一聲) 5 (往) 5 (不)	2 聲+(一聲) 4 迴+(向) 5 (往) 6 如觀  觀如	2 聲+(一聲) 8 者  等 12 憶  意	
15 (意) 17 (恆) 19 作  唯 22 (若) 23 五+(乘) 23 生  坐 28 心  必	22 (若) 28 心  必	22 (若) 28 心  必	29 (一) 29 二  二	17 (恆) 12 憶  意 10 (拜) 12 憶  意	17 (恆) 17 (恆) 20 (威) 21 (願)	17 睡  眠 17 (恆) 17 (恆) 19 晝  晝 23 聖凡  凡聖 24 如  知 29 與  已 29 心+(亦) 29 合  食	*9 恭敬合掌 以下殘存

四六六下

【高麗再雕本】

1 起業行不問多少皆名真實業也應知  
2 又觀行四修法用第三心五念之行速得往  
3 生何者爲四  
4 一者恭敬修所謂恭敬禮拜彼佛及彼一切  
5 聖衆等故名恭敬修畢命爲期誓不中止即  
6 是長時修  
7 二者無餘修所謂專稱彼佛名專念專想專  
8 禮專讚彼佛及一切聖衆等不雜餘業故名  
9 無餘修畢命爲期誓不中止即是長時修  
10 三者無間修所謂相續恭敬禮拜稱名讚歎  
11 憶念觀察迴向發願心心相續不以餘業來  
12 間故名無間修又不以貪瞋煩惱來間隨犯  
13 隨懺不令隔念隔時隔日常使清淨亦名無  
14 間修畢命爲期誓不中止即是長時修  
15 又菩薩已覓生死所作善法迴求佛果即是  
16 自利教化衆生盡未來際即是利他然今時  
17 衆生悉爲煩惱繫縛未免惡道生死等苦隨  
18 緣起行一切善根且速迴願往生彌陀佛國  
19 到彼國已更無所畏如上四修自然任運自  
20 利利他無不具足應知  
21 又如文殊波若云欲明一行三昧唯勸獨處  
22 空閑捨諸亂意係心一佛不觀相貌專稱名  
23 字即於念中得見彼阿彌陀佛及一切佛等  
24 問曰何故不令作觀直遣專稱名字者有何  
25 意也  
26 答曰乃由衆生障重境細心麤識麤神飛觀  
27 難成就是以大聖悲憐直勸專稱名字正由  
28 稱名易故相續即生問曰既遣專稱一佛何  
29 故境現即多此豈非邪正相交一多雜現也

【七寺本】

【初雕本】

【金藏本】

【思溪版本】

【金剛寺本】

【檀王本】

【京大本】

【禮佛文】

4  
〔所謂〕

8衆十（生）

8  
〔餘〕

12  
不

15 兔 Ⅱ 勉

7

1

免 勉

20 無不二

21  
行三  
||四

24  
[E]

29 多 〓 名	24 直 〓 眞	21 行 〓 彼	17 免 〓 勉	15 免 〓 勉 15 作 〓 生	12 隨 〓 隨	7 念 〓 命	2 觀 〓 勸	1 問 〓 門
		21 波 〓 彼	18 且 〓 具	17 免 〓 勉		7 念 〓 命	2 觀 〓 勸	
27 就 〓 (也)		21 波 〓 般 21 (欲)	18 且 〓 具				2 觀 〓 勸	
28 何 〓 (相)	24 日 〓 云	21 明 〓 時 22 貌 〓 泉	19 運 〓 逆	16 盡 〓 相 16 今 〓 命 17 隨 〓 理	15 果 〓 里	11 餘 〓 間 12 隨 〓 理 13 隨 〓 理	9 餘 〓 俱 7 餘 〓 深	2 策 〓 榮 1 問 〓 門

## 【高麗再雕本】

1 答曰佛佛齊證形無二別縱使念一見多乖  
2 何大道理也  
3 又如觀經云行觀坐觀禮念等皆須面向西  
4 方者最勝如樹先傾倒必隨曲故必有事礙  
5 不及向西方者但作向西想亦得問曰一切  
6 諸佛三身同證悲智果圓亦應無二隨方禮  
7 念課稱一佛亦應得生何故偏歎西方勸專  
8 禮念等有何義也 答曰諸佛所證平等是  
9 一若以願行來收非無因緣然彌陀世尊本  
10 發深重誓願願以光明名號攝化十方但使  
11 信心求念上盡一形下至十聲一聲等以佛  
12 願力易得往生是故釋迦及以諸佛勸向西  
13 方爲別異余亦非是稱念餘佛不能除障滅  
14 罪也應知若能如上念念相續畢命爲期者  
15 十即十生百即百生何以故無外雜緣得正  
16 念故與佛本願得相應故不違教故隨順佛  
17 語故若欲捨專修雜業者百時希得一二千  
18 時希得五三何以故乃由雜緣亂動失正念  
19 故與佛本願不相應故與教相違故不順佛  
20 語故係念不相續故憶想間斷故迴願不殷  
21 重真實故貪瞋諸見煩惱來間斷故無有慚  
22 愧懺悔心故懺悔有三品一要二略三廣如  
23 下具說隨意用皆得又不相續念報彼佛恩  
24 故心生輕慢雖作業行常與名利相應故人  
25 我自覆不親近同行善知識故樂近雜緣自  
26 障障他往生正行故何以故余比自見聞諸  
27 方道俗解行不同專雜有異但使專意作者十  
28 即十生修雜不至心者千中無一此二行得  
29 失如前已辯仰願一切往生人等善自思量

【七寺本】	2理現 4礙等	9(總) 9(世)	13(除) 14(者)	17欲故 18(正) 19本大	24相想	27雜修 28一十
【初雕本】	2理現		13(除) 14(者)			28一十
【金藏本】	2理現		13(除) 14(者)	18正念念止		27雜修 28一十
【思溪版本】		9收披				28至志 29辯辨
【金剛寺本】	3行佛3須頂 4先光4曲回		13亦且 13佛(佛)	21故(故)	24相想	26余余 27雜修 28一十 29辯辨
【檀王本】	3須頂 6圓(具)			17欲(持) 18失矢	23(用) 24相想	26余余 27雜修 28一十 29辯辨
【京大本】	3行觀佛勸 5(者) 6(果)6圓(具)	10(顯) 10攝接	13余耳	16(得) 18五三三五 20殷慙		26余余 26比(日)
【禮佛文】	1(佛) 2理現 3行觀佛勸 5(日) 6圓固	9收狀 11聲者	13異余畢耳 14期歸 15雜難 16(得)	18亂禮 19不(隨) 20殷慙 22品亦 23隨理23用問 25識儀		29辯訴



## 【高麗再雕本】

- 1 柔耍<sup>\*</sup>歡喜踊躍善心生焉若在三塗勤苦之  
2 處見此光明無復苦惱壽終之後皆蒙解脫  
3 無量壽佛光明顯赫照耀十方諸佛國土莫  
4 不聞焉不但我今稱其光明一切諸佛聲聞  
5 緣覺諸菩薩衆咸共歎譽亦復如是若有衆  
6 生聞其光明威神功德日夜稱說至心不斷  
7 者隨其所願得生其國常爲諸菩薩聲聞之  
8 衆所共歎譽稱其功德佛言我說無量壽佛  
9 光明威神巍巍殊妙晝夜一劫尚不能盡  
10 白諸行者當知彌陀身相光明釋迦如來一  
11 劫說不能盡者如觀經云一一光明遍照十  
12 方世界念佛衆生攝取不捨今既觀經有如  
13 此不思議增上勝緣攝護行者何不相續稱  
14 觀禮念願往生也應知  
④ 15 南無西方 極樂世界 無量光佛 願共衆  
16 生咸歸命故我頂禮生彼國  
⑤ 17 南無西方 極樂世界 無邊光佛 願共衆  
18 生咸歸命故我頂禮生彼國  
⑥ 19 南無西方 極樂世界 無礙光佛 願共衆  
20 生咸歸命故我頂禮生彼國  
⑦ 21 南無西方 極樂世界 無對光佛 願共衆  
22 生咸歸命故我頂禮生彼國  
⑧ 23 南無西方 極樂世界 光焰王佛 願共衆  
24 生咸歸命故我頂禮生彼國  
⑨ 25 南無西方 極樂世界 清淨光佛 願共衆  
26 生咸歸命故我頂禮生彼國  
⑩ 27 南無西方 極樂世界 歡喜光佛 願共衆  
28 生咸歸命故我頂禮生彼國  
⑪ 29 南無西方 極樂世界 智慧光佛 願共衆

## 【七寺本】

3 曜<sup>||</sup>耀  
5 威共<sup>||</sup>盛苦  
6 (一)

12 觀經<sup>||</sup>經觀

## 【初雕本】

12 觀經<sup>||</sup>經觀

## 【金藏本】

12 觀經<sup>||</sup>經觀

## 【思溪版本】

1 奕<sup>||</sup>歎  
3 曜<sup>||</sup>耀  
6 至<sup>||</sup>志

12 觀經<sup>||</sup>經觀

## 【金剛寺本】

1 奕<sup>||</sup>歎  
3 曜<sup>||</sup>耀 3 (佛)  
4 其<sup>||</sup>(其)  
6 (其)

15 共<sup>||</sup>(諸)  
17 共<sup>||</sup>(諸)  
19 共<sup>||</sup>(諸)  
21 共<sup>||</sup>(諸)  
23 船<sup>||</sup>炎 23 共<sup>||</sup>(諸)

## 【檀王本】

1 奕<sup>||</sup>歎  
3 曜<sup>||</sup>耀

15 (光) 15 共<sup>||</sup>(諸)  
17 共<sup>||</sup>(諸)  
19 共<sup>||</sup>(諸)  
21 共<sup>||</sup>(諸)  
23 船<sup>||</sup>炎 23 共<sup>||</sup>(諸)

## 【京大本】

1 奕<sup>||</sup>歎  
3 曜<sup>||</sup>耀  
5 歎<sup>||</sup>嘆

13 此<sup>||</sup>是

## 【禮佛文】

1 奕<sup>||</sup>歎  
3 曜<sup>||</sup>唯  
4 焉<sup>||</sup>■ 4 聲<sup>||</sup>者  
5 是<sup>||</sup>此  
7 聲<sup>||</sup>者  
9 巍巍<sup>||</sup>巍巍  
11 盡<sup>||</sup>想  
12 攝<sup>||</sup>折  
13 禮<sup>||</sup>諸

23 船<sup>||</sup>炎  
24 禮生<sup>||</sup>生禮

四六八上		【高麗再雕本】	【七寺本】	【初雕本】	【金藏本】	【思溪版本】	【金剛寺本】	【檀王本】	【京大本】	【禮佛文】
1	生咸歸命故我頂禮生彼國						2 共+(諸)	2 共+(諸)		11 護■ 11 世生
2	南無西方 極樂世界 不斷光佛 願共衆									11 生世 12 攝折
3	生咸歸命故我頂禮生彼國						4 共+(諸)	4 共+(諸)		
4	南無西方 極樂世界 難思光佛 願共衆						6 共+(諸)	6 共+(諸)		9 (我)
5	生咸歸命故我頂禮生彼國						8 共+(諸)	8 共+(諸)		
6	南無西方 極樂世界 無稱光佛 願共衆						12 共+(諸)	12 共+(諸)		
7	生咸歸命故我頂禮生彼國						14 共+(諸)	14 共+(諸)		
8	南無西方 極樂世界 超日月光佛 願共衆						16 共+(諸)	16 共+(諸)		
9	衆生咸歸命故我頂禮生彼國						19 (大)		21 報+(佛)	18 持村 18 臺教
10	南無西方 極樂世界 阿彌陀佛									19 復後
11	哀愍覆護我 令法種增長 此世及後生願									20 聲者
12	佛常攝受 願共衆生咸歸命故我頂禮生									22 聲汝
13	彼國									24 隨理
14	南無西方極樂世界觀世音菩薩 願共衆生									26 (及) 26 識儀
15	咸歸命故我頂禮生彼國									
16	南無西方極樂世界大勢至菩薩 願共衆生									
17	咸歸命故我頂禮生彼國									
18	此二菩薩一切衆生臨命終時共持華臺授									
19	與行者阿彌陀佛放大光明照行者身復與									
20	無數化佛菩薩聲聞大衆等一時授手如彈									
21	指頃即得往生爲報恩故至心禮之一拜									
22	南無西方極樂世界 諸菩薩清淨大海衆									
23	願共衆生咸歸命故我頂禮生彼國									
24	此等諸菩薩亦隨佛來迎接行者爲報恩故									
25	至心禮之一拜									
26	普爲師僧父母及善知識法界衆生斷除三									
27	障同得往生阿彌陀佛國歸命懺悔									
28	至心懺悔									

【高麗再雕本】

1	南無歸懺十方佛 願滅一切諸罪根
2	今將久近所修善 迴作自他安樂因
3	恆願一切臨終時 勝緣勝境悉現前
4	願觀彌陀大悲主 觀音勢至十方尊
5	仰惟神光蒙授手 乘佛願力生彼國
6	懺悔迴向發願已 至心歸命阿彌陀佛
7	次作梵說偈發願 出寶性論
8	禮懺諸功德 布施諸有情
9	願臨命終時 見無量壽佛
10	無邊功德身 我及餘信者
11	既見彼佛已 願得離垢眼
12	往生安樂國 成無上菩提
13	懺已一切恭敬 道心恆不退
14	歸佛得菩提 得大總持門
15	歸法薩婆若 同入和合海
16	歸僧息靜論 無量壽國
17	迴願往生 奉持佛教
18	三業清淨 迴願往生無量壽國
19	和南一切賢聖 不覺年命日夜去
20	*諸衆等聽說黃昏偈 忙忙六道無定趣
21	人間念營眾務 云何安然不驚懼
22	如燈風中滅難期 自策自勵求常住
23	未得解脫受苦海 說此偈已更當心口發願願弟子臨命終時
24	各聞強健有力時 心不顛倒心不錯亂心不失念身心無諸苦
25	痛身心安隱快樂如入禪定聖衆現前乘佛
26	本願上品往生阿彌陀佛到彼國已得六
27	*
28	*











四七〇上		【高麗再雕本】	【七寺本】	【初雕本】	【金藏本】	【思溪版本】	【金剛寺本】	【檀王本】	【京大本】	【禮佛文】
⑥	1 願共諸衆生往生安樂國	1 願共諸衆生往生安樂國								
	2 至心歸命禮 西方阿彌陀佛	2 至心歸命禮 西方阿彌陀佛								
	3 十方名聞菩薩衆 無量諸魔常讚歎*	3 十方名聞菩薩衆 無量諸魔常讚歎*							3 歎  嘆	3 歎  嘆
	4 爲諸衆生願力住 故我頂禮彌陀佛	4 爲諸衆生願力住 故我頂禮彌陀佛							4 佛  尊	
	5 願共諸衆生往生安樂國	5 願共諸衆生往生安樂國								
⑦	6 至心歸命禮 西方阿彌陀佛	6 至心歸命禮 西方阿彌陀佛								
	7 金底寶澗*池生華 善根所成妙臺座	7 金底寶澗*池生華 善根所成妙臺座							7 澗  間	7 澗  間
	8 於彼座上如山王 故我頂禮彌陀佛*	8 於彼座上如山王 故我頂禮彌陀佛*							8 佛  尊	8 座  坐
	9 願共諸衆生往生安樂國	9 願共諸衆生往生安樂國								
⑧	10 至心歸命禮 西方阿彌陀佛	10 至心歸命禮 西方阿彌陀佛								
	11 十方所來諸佛子 顯現神通至安樂	11 十方所來諸佛子 顯現神通至安樂								
	12 瞻仰尊顏常恭敬 故我頂禮彌陀佛	12 瞻仰尊顏常恭敬 故我頂禮彌陀佛							12 佛  尊	
⑨	13 願共諸衆生往生安樂國	13 願共諸衆生往生安樂國								
	14 至心歸命禮 西方阿彌陀佛	14 至心歸命禮 西方阿彌陀佛								
	15 諸有無常無我等 亦如水月電影露	15 諸有無常無我等 亦如水月電影露								15 水  小
	16 爲衆說法無名字 故我頂禮彌陀佛	16 爲衆說法無名字 故我頂禮彌陀佛							16 佛  尊	
⑩	17 願共諸衆生往生安樂國	17 願共諸衆生往生安樂國								
	18 至心歸命禮 西方阿彌陀佛	18 至心歸命禮 西方阿彌陀佛								
	19 彼尊佛利無惡名 亦無女人惡道怖	19 彼尊佛利無惡名 亦無女人惡道怖								
	20 衆人至心敬彼尊 故我頂禮彌陀佛*	20 衆人至心敬彼尊 故我頂禮彌陀佛*				20 尊  佛			20 佛  尊	20 敬  依
⑪	21 願共諸衆生往生安樂國	21 願共諸衆生往生安樂國								
	22 至心歸命禮 西方阿彌陀佛	22 至心歸命禮 西方阿彌陀佛								
	23 彼尊無量方便境 無有諸趣惡知識	23 彼尊無量方便境 無有諸趣惡知識								
	24 往生不退至菩提 故我頂禮彌陀佛*	24 往生不退至菩提 故我頂禮彌陀佛*							24 佛  尊	
⑫	25 願共諸衆生往生安樂國	25 願共諸衆生往生安樂國								
	26 至心歸命禮 西方阿彌陀佛	26 至心歸命禮 西方阿彌陀佛								
	27 我說彼尊功德事 衆善無邊如海水	27 我說彼尊功德事 衆善無邊如海水								
	28 所作善根清淨者 迴施衆生生彼土	28 所作善根清淨者 迴施衆生生彼土	28 施  向						28 作  獲 28 土  國	
	29 願共諸衆生往生安樂國	29 願共諸衆生往生安樂國								

## 【高麗再雕本】

- ⑬ 1 至心歸命禮 西方阿彌陀佛 哀愍覆護我  
2 令法種增長 此世及後生 願佛常攝受  
3 願共諸衆生 往生安樂國  
⑭ 4 至心歸命禮 西方極樂世界觀世音菩薩  
5 願共諸衆生 往生安樂國  
⑮ 6 至心歸命禮 西方極樂世界大勢至菩薩  
7 願共諸衆生 往生安樂國  
⑯ 8 至心歸命禮 西方極樂世界諸菩薩清淨大  
9 海衆 願共諸衆生 往生安樂國  
10 普爲師僧父母及善知識法界衆生斷除  
11 三障同得往生阿彌陀佛國歸命懺悔至心  
12 懺悔自從無始受身來恆以十惡加衆生不  
13 孝父母謗三寶造作五逆不善業以是衆罪  
14 因緣故妄想顛倒生纏縛應受無量生死  
15 苦頂禮懺悔願滅除懺悔已至心歸命禮  
16 阿彌陀佛  
17 至心勸諸諸佛大慈無上尊恆以空慧照三  
18 界衆生盲冥不覺知永沈生死大苦海爲拔  
19 群生離諸苦勸請常住轉法輪勸請已至心  
20 歸命禮阿彌陀佛  
21 至心隨喜歷劫已來懷嫉妬我慢放逸由癡  
22 生恆以瞋恚毒害火焚燒智慧慈善根今日  
23 思惟始悟發大精進隨喜心隨喜已至心  
24 歸命禮阿彌陀佛  
25 至心迴向流浪三界內癡愛入胎獄生已歸  
26 老死沈沒於苦海我今修此福迴生安樂土  
27 迴向已至心歸命禮阿彌陀佛  
28 至心發願願捨胎藏形往生安樂國速見彌  
29 陀佛無邊功德身奉觀諸如來賢聖亦復

## 【七寺本】

2 增 1 種

## 【初雕本】

8 諸菩薩  
1 誦尊菩薩等

## 【金藏本】

## 【思溪版本】

11 (得)

15 (禮)

19 至 1 志  
20 (禮)

24 (禮)

27 (禮)

## 【金剛寺本】

9 海衆 1 衆海

15 (禮)

20 (禮)

23 惺 1 醒  
24 (禮)26 福 1 智  
27 (禮)

## 【檀王本】

2 增 1 種

15 (禮)

20 (禮)

23 惺 1 醒  
24 (禮)26 福 1 智  
27 (禮)

## 【京大本】

18 沈 1 沒  
15 (禮)

20 (禮)

23 惺 1 醒  
24 (禮)

27 (禮)

## 【禮佛文】

1 護 1 鍊  
2 增 1 種 2 攝 1 投8 極樂世界  
1 阿彌陀佛14 應 1 夜  
15 (禮)19 諸 1 諸  
20 (禮)

21 嫉 1 疾 21 邊 1 邊

23 惺 1 醒  
24 (禮)

23 隨喜心 1 皆隨壽

25 心 1 (歸命)







[illegible]

## 【高麗再雕本】

## 【七寺本】

## 【初雕本】

## 【金藏本】

## 【思溪版本】

## 【金剛寺本】

## 【檀王本】

## 【京大本】

## 【禮佛文】

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
無災由處靜	聖衆亦難量	至心歸命禮	隨意晚開運	池多說法鳥	一立古今然	至心歸命禮	當必往非除	八功如意水	盡是法王家	至心歸命禮	早晚定相迎	鳥本珠中出	嚴界引群萌	至心歸命禮	只是往人希	香飯隨心至	西方最可歸	至心歸命禮	正爲樂無窮	開華重布水	西方路稍通	至心歸命禮	須共入禪看	華隨本心變	光含法界圓	至心歸命禮	會是戒香全	鳥群非實鳥
不退爲朋良	蓮開人獨處	西方阿彌陀佛	願共諸衆生	空滿散花天	光臺千寶合	西方阿彌陀佛	願共諸衆生	七寶自然華	偏求有緣地	西方阿彌陀佛	願共諸衆生	人唯華上生	金沙徹水照	西方阿彌陀佛	願共諸衆生	寶殿逐身飛	間樹開重閣	西方阿彌陀佛	願共諸衆生	覆網細分空	寶幢承厚地	西方阿彌陀佛	願共諸衆生	宮移身自安	無緣能攝物	西方阿彌陀佛	願共諸衆生	天類豈眞天
問彼前生輩	波生法自揚	坐華非一像	往生安樂國	得生不畏退	音樂八風宣	淨國無衰變	往生安樂國	於彼心能係	冀得早無邪	十方諸佛國	往生安樂國	敢請西方聖	玉葉滿枝明	十劫道先成	往生安樂國	有緣皆得入	滿道布鮮衣	欲還當生處	往生安樂國	願生何意切	天香入遠風	迴向漸爲功	往生安樂國	憐聞出世境	有想定非難	心帶眞慈滿	往生安樂國	須知求妙樂
28 波    彼							22 除    願				18 晚    脫				14 只    品 14 往    去		12 歸    浸 12 開    間		9 網    納 9 切    功	8 厚    原			4 无    天	4 合    合 4 圓    國	3 眞    直		1 鳥    邊 1 眞    有	
															14 往    去													
															14 往    去													
																			9 重    香									
29 朋    明				25 畏    思										14 只    亦 14 往    去								6 看    首						
29 災    交 29 朋    明									20 偏    偏					14 往    去					9 網    細					5 聞    間				
			26 晚    既										16 沙    砂	14 只是    正自											4 想    相			
29 輩    來					24 古    等				20 求    水 20 邪    耶										9 意    ■	8 幢承    悟擎			6 看    者	4 彈    折 5 自    目	4 舍    令 4 圓    圓	3 (慈)		













四七三下  
【高麗再雕本】

- 1 渴聞波若絕思<sup>\*</sup> 念食無生即斷飢<sup>\*</sup>  
2 一切莊嚴皆說法 無心領納自然知<sup>\*</sup>  
3 七覺花池隨意入 八輩凝神會一枝<sup>\*</sup>  
4 彌陀心水沐身頂 觀音大勢與衣披<sup>\*</sup>  
5 欸尔騰空遊法界 須臾授記號無爲<sup>\*</sup>  
6 如此逍遙無極處 吾今不去待何時<sup>\*</sup>  
7 願共諸衆生 往生安樂國<sup>\*</sup>  
8 至心歸命禮 西方阿彌陀佛<sup>\*</sup>  
9 哀愍覆護我 令法種增長 此世及後生<sup>\*</sup>  
10 願佛常攝受<sup>\*</sup>  
11 願共諸衆生 往生安樂國<sup>\*</sup>  
12 至心歸命禮 西方阿彌陀佛 觀音勢至諸<sup>\*</sup>  
13 菩薩 清淨大海衆 願共諸衆生 往生安<sup>\*</sup>  
14 樂國<sup>\*</sup>  
15 普爲師僧父母及善知識法界衆生斷除三<sup>\*</sup>  
16 障同得往生阿彌陀佛國歸命懺悔<sup>\*</sup>  
17 上二品懺悔發願等同前須要中要取初須<sup>\*</sup>  
18 略中略取中須廣中廣取下其廣者就實有<sup>\*</sup>  
19 心願生者而勸或對四衆或對十方佛或對<sup>\*</sup>  
20 舍利尊像大衆或對一人若獨自等又向十<sup>\*</sup>  
21 方盡虛空三寶及盡衆生界等具向發露懺<sup>\*</sup>  
22 悔懺悔有三品上中下上品懺悔者身毛孔<sup>\*</sup>  
23 中血流眼中血出者名上品懺悔中品懺悔<sup>\*</sup>  
24 者遍身熱汗從毛孔出眼中血流者名中品<sup>\*</sup>  
25 懺悔下品懺悔者遍身微熱眼中淚出者名<sup>\*</sup>  
26 下品懺悔此等三品雖有差別即是久種解<sup>\*</sup>  
27 脫分善根人致使今生敬法重人不惜身命<sup>\*</sup>  
28 乃至小罪若懺即能徹心徹髓能如此懺者<sup>\*</sup>  
29 不問久近所有重障頓皆滅盡若不如此縱

【七寺本】

1 絕口陀  
2 納口網  
3 凝疑  
4 披口枝

【初雕本】

28  
〔徹〕

【金藏本】

28  
〔徹〕

【思溪版本】

1 食口服 1 斷口療

【金剛寺本】

1 渴口渴 1 漿口將水  
3 意口寃 3 輩口背  
4 勢口至  
5 尔口示  
6 吾口五

【檀王本】

1 渴口渴  
3 輩口背  
6 極口旦  
9 生口世

【京大本】

1 波口般  
3 覺口寶 3 輩口背  
3 枝口十〔無邊〕是師  
4 大勢口勢至  
4 披口披

【禮佛文】

1 食口服  
2 領納口個網  
3 輩口背  
9 護口凍 9 世口女  
9 生口世 10 攝口折

12 阿彌陀佛

12 阿彌陀佛  
口極樂世界

12 觀口海衆口

觀世音口清淨口、

15 〔及〕 16 障口部

27 法口深

四七四上						
【高麗再雕本】						
1 使日夜十二時急走終是無益若不作者應	1 使便 1 (終是)					
2 知雖不能流淚流血等但能真心徹到者即	1 (善)					
3 與上同敬白十方諸佛十二部經一切賢聖						
4 及一切天龍八部法界衆生現前大衆等證						
5 知我某甲發露懺悔從無始已來乃至今身						
6 殺害一切三寶師僧父母六親眷屬善知識法						
7 界衆生不可知數偷盜一切三寶師僧父母						
8 六親眷屬善知識法界衆生物不可知數於						
9 一切三寶師僧父母六親眷屬善知識法界衆						
10 生上起邪心不可知數妄語欺誑一切三寶						
11 師僧父母六親眷屬善知識法界衆生不可						
12 知數綺語調弄一切三寶師僧父母六親眷						
13 屬善知識法界衆生不可知數惡口罵辱詈						
14 謗毀告一切三寶師僧父母六親眷屬善知識						
15 法界衆生不可知數兩舌鬭亂破壞一切三	15 鬭聞					
16 寶師僧父母六親眷屬善知識法界衆生不						
17 可知數或破五戒八戒十戒十善戒二百五	18 (戒)					
18 十戒五百戒菩薩三聚戒十無盡戒乃至一	19 他化					
19 切戒及一切威儀戒等自作教他見作隨喜	20 衆罪					
20 不可知數如是等衆罪亦如十方大地無邊						
21 微塵無數我等作罪亦無邊無數虛空無邊						
22 我等作罪亦復無邊法界無邊亦如法性						
23 無邊亦如法性無邊亦如如是等罪上至						
24 諸菩薩下至聲聞緣覺所不能知唯佛與佛						
25 乃能知我罪之多少今於三寶前法界衆生						
26 前發露懺悔不敢覆藏唯願十方三寶法界						
27 衆生受我懺悔憶我清淨始從今日願共法						
28 界衆生捨邪歸正發菩提心慈心相向佛眼						
29 相看作菩提眷屬眞善知識同生阿彌陀佛						
【七寺本】						
【初雕本】						
【金藏本】						
1 (終)						
【思溪版本】						
23 佛方便						
【金剛寺本】						
1 若差						
3 經十 (諸大菩薩)						
12 弄 咩						
14 皆 咩						
【檀王本】						
1 若差						
3 經十 (諸大菩薩)						
9 (善)						
12 弄 咩						
14 皆 咩						
【京大本】						
3 經十 (諸大菩薩)						
12 弄 咩						
21 亦十 (復) 21 (無邊)						
22 法界方便						
22 亦如上 我 无邊						
23 亦如上 我 无邊						
23 佛 法界						
23 亦如上 我 无邊						
23 衆十 (无邊) 十如						
【禮佛文】						
1 終衆 1 若 着						
2 淚 使						
3 與 乞 3 敬 設						
6 識 議						
9 衆 寶						
10 誑 誰						
12 綺 咩 12 弄 咩						
14 皆 此言						
19 他十 (作)						
23 佛 方便						
28 邪 耶						
29 看 者 29 (作)						
29 屬十 (作)						

## 【高麗再雕本】

1 國乃至成佛如是等罪永斷相續更不敢作  
 2 懺悔已至心歸命禮阿彌陀佛禮懺竟若  
 3 入觀及睡時應發此願若坐若立一心合掌  
 4 正面向西十聲稱阿彌陀佛觀音勢至諸菩薩  
 5 清淨大海衆弟子現是生死凡夫罪障深  
 6 重輪迴六道苦不可言今遇善知識得聞彌  
 7 陀本願名號一心稱念求願往生願佛慈悲  
 8 不捨本弘誓願攝受弟子不識彌陀佛身相  
 9 光明願佛慈悲示現弟子身相觀音勢至諸  
 10 菩薩等及彼世界清淨莊嚴光明等相道此  
 11 語已一心正念即隨意入觀及睡或有正發  
 12 願時即得見之或有睡時得見此願比來亦  
 13 大有現驗問曰稱念禮觀阿彌陀佛現世有  
 14 何功德利益答曰若稱阿彌陀佛一聲即能  
 15 除滅八十億劫生死重罪禮念已下亦是十  
 16 往生經云若有衆生念阿彌陀佛願往生者  
 17 彼佛即遣二十五菩薩擁護行者若行若坐  
 18 若住若臥若晝若夜一切時一切處不令惡  
 19 鬼惡神得其便也又如觀經云若稱禮念阿  
 20 彌陀佛願往生彼國者彼佛即遣無數化佛  
 21 無數化觀音勢至菩薩護念行者復與前二  
 22 十五菩薩等百重千重圍遶行者不問行住  
 23 坐臥一切時處處若晝若夜常不離行者今既  
 24 有斯勝益可憑願諸行者各須至心求往又  
 25 如無量壽經云若我成佛十方衆生稱我名  
 26 號下至十聲若不生者不取正覺彼佛今現  
 27 在世成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必  
 28 得往生又如彌陀經云若有衆生聞說阿彌  
 29 陀佛即應執持名號若一日若一日乃至七

【七寺本】	【初雕本】	【金藏本】	【思溪版本】	【金剛寺本】	【檀王本】	【京大本】	【禮佛文】
1 (作) 2 (禮)	2 (禮)	2 (禮)	2 (禮)	2 (禮)	2 (禮)	2 (禮) 2 禮廣	2 命 1 令 2 (禮) 2 禮懺竟 廣懺悔
4 (稱)				5 子 + (某甲) 6 聞 問	5 子 + (某甲) 6 今 + (日)	5 子 + (某甲) 6 輪迴 論 6 言 具云	6 今 + (日)
7 慈 意				10 (光明)		6 今 + (日)	8 攝 折 8 識 儀 9 示 身
						12 睡 + (眼) 12 見 + (除不至心)	
17 擁 權				14 (一聲) 15 亦 + (如)	15 亦 + (如)	12 (亦) 15 亦 + (如)	15 劫 起 15 禮 ■ 15 亦 + (如)
19 (禮)				19 (阿彌陀佛 菩薩)			17 護 凍 19 禮 化
			22 禮 繞	22 禮 繞 23 今 命	22 禮 繞	24 憑 渴	21 護 凍 22 禮 繞 23 畫 書 24 憑 渴 24 各 答 24 求 狀
23 (常) 23 (今)	23 (常) 23 (今)	23 (常) 23 (今)				27 (世)	
27 (願)						29 (即應)	
28 (經)							
29 即 忍							

四七四下					
【高麗再雕本】					
1 日一心稱佛不亂命欲終時阿彌陀佛與諸					
2 聖衆現在其前此人終時心不顛倒即得往					
3 生彼國佛告舍利弗我見是利故說是言若					
4 有衆生聞說是者應當發願願生彼國次下	4 說是是說				
5 說云東方如恆河沙等諸佛南西北方及上	5 (南・諸佛)				
6 下一一方如恆河沙等諸佛各於本國出其					
7 舌相遍覆三千大千世界說誠實言汝等衆	7 相根				
8 生皆應信是一切諸佛所護念經云何名護	8 (何)				
9 念若有衆生稱念阿彌陀佛若七日及一日	9 (念)				
10 下至一聲乃至十聲一念等必得往生證成	9 日+(及七日)	10 下+(下)			
11 此事故名護念經次下又云若稱佛往生者	10 下+(下)				
12 常爲六万恆沙等諸佛之所護念故名護念	10 念金				
13 經今既有此增上誓願可憑諸佛子等何	11 護證 11 若知				
14 不勵意去也					
15 集諸經禮懺儀卷下					
【七寺本】					
【初雕本】					
【金藏本】					
【思溪版本】					
	15 (儀)				
【金剛寺本】					
1 命今					
8 (護)					
【檀王本】					
3 (告)					
【京大本】					
3 是此					
4 說是是說					
【禮佛文】					
1 命今 1 (佛)					
8 護凍 8 護					
9 念全					
10 一十十十一					
11 護陳 11 亦云久之					
12 六万十方					
12 仏+(仏) 12 護陳					
12 護陳 13 經總					
13 誓願願誓					
15 集諸經禮懺儀卷下					
15 集諸經禮懺儀卷下					
11 阿彌陀往生禮佛文					
一卷					

再雕本・初雕本・金蔵本 三本対照

凡例

- 一、本稿は『集諸経礼懺儀』巻下の高麗再雕本を上段に、高麗初雕本を中段に、金蔵本を下段に配し、三本の異同を一覧にしようとするものである。
- 一、張数毎に対照し、右肩に【第●張】と張数を附した。
- 一、底本、並びに略号は以下の通り。

【再雕本】 東国大学校蔵高麗大蔵経再雕版本『集諸経礼懺儀』巻下

『高麗大蔵経』第三三冊（東国大学校、一九七五）所収

【初雕本】 南禅寺蔵高麗大蔵経初雕版本『集諸経礼懺儀』巻下

『域外漢籍珍本文庫』編纂出版委員会編『高麗大蔵経初刻本輯刊』第七五冊（西南師範大学出版社、二〇一二）所収

【金蔵本】 中国国家図書館蔵金版大蔵経広勝寺本『集諸経礼懺儀』巻下

（中華大蔵経編輯局整理『中華大蔵経（漢文部分）』第六三冊（中華書局、二〇〇五）所収）

【第一張】

【再雕本】

集諸經禮懺儀卷下

英

大唐西崇福寺沙門智昇撰

往生禮讚偈一卷

比丘善導集記

勸一切衆生願生西方極樂世界阿  
彌陀佛國 六時禮讚偈謹依大乘  
經及龍樹天親此土沙門等所造往  
生禮讚集在一處分作六時唯欲相  
續係心助成往益亦願曉悟未聞遠  
近遐代耳何者

第一依釋迦及十方諸佛讚歎彌陀  
十二光名勸稱禮念定生彼國十九  
拜當日沒時禮

第二謹依大乘經採集要文以為禮  
讚偈二十三拜當初夜時禮

第三依龍樹菩薩願往生禮讚偈十  
六拜當中夜時禮

第四依天親菩薩願往生禮讚偈二  
十拜當後夜時禮

第五依彥琮法師願往生禮讚偈二  
十二拜當辰朝時禮

第六僧善導願往生禮讚偈依十六  
觀作二十拜當午時禮

【初雕本】

集諸經禮懺儀卷下

群

大唐西崇福寺沙門智昇撰

往生禮讚偈一卷

比丘善導集記

勸一切衆生願生西方極樂世界阿  
彌陀佛國 六時禮讚偈謹依大乘  
經及龍樹天親此土沙門等所造往  
生禮讚集在一處分作六時唯欲相  
續係心助成往益亦願曉悟未聞遠  
近遐代耳何者

第一依釋迦及十方諸佛讚歎彌陀  
十二光名勸稱禮念定生彼國十九  
拜當日沒時禮

第二謹依大乘經採集要文以為禮  
讚偈二十三拜當初夜時禮

第三依龍樹菩薩願往生禮讚偈十  
六拜當中夜時禮

第四依天親菩薩願往生禮讚偈二  
十拜當後夜時禮

第五依彥琮法師願往生禮讚偈二  
十二拜當辰朝時禮

第六僧善導願往生禮讚偈依十六  
觀作二十拜當午時禮

【金藏本】

集諸經禮懺儀卷下

英

大唐西崇福寺沙門智昇撰

往生禮讚偈一卷

比丘善導集記

勸一切衆生願生西方極樂世界阿  
彌陀佛國 六時禮讚偈謹依大乘  
經及龍樹天親此土沙門等所造往  
生禮讚集在一處分作六時唯欲相  
續係心助成往益亦願曉悟未聞遠  
近遐代耳何者

第一依釋迦及十方諸佛讚歎彌陀  
十二光名勸稱禮念定生彼國十九  
拜當日沒時禮

第二謹依大乘經採集要文以為禮  
讚偈二十三拜當初夜時禮

第三依龍樹菩薩願往生禮讚偈十  
六拜當中夜時禮

第四依天親菩薩願往生禮讚偈二  
十拜當後夜時禮

第五依彥琮法師願往生禮讚偈二  
十二拜當辰朝時禮

第六僧善導願往生禮讚偈依十六  
觀作二十拜當午時禮



【第二張】

【再雕本】

問曰今欲勸人往生者未知若為安心起行作業定得往生彼國土也答曰必欲生彼國土者如觀經說先具三心必得往生何者為三一者至誠心所謂身業禮拜彼佛口業讚歎稱揚彼佛意業專念觀察彼佛凡起三業必須真實故名至誠心二者深心即是真實信心信知自身是具足煩惱凡夫善根薄少流轉三界不出火宅今信知弥陀本弘誓願及稱名号下至十聲等定得往生乃至一念无有疑心故名深心三者迴向發願心所作一切善根悉皆迴願往生故名迴向發願心具此三心必得往生也若少一心即不得生如觀經具說應知又如天親淨土論云若有願生彼國者勸修五念門五門若具定得往生何者為五一者身業禮拜門所謂一心專至恭敬合掌香華供養禮拜彼阿弥陁佛禮即專禮彼佛畢命為期不雜餘礼故名禮拜門

二者口業讚歎門所謂專憶讚歎彼佛身相光明一切聖眾身相光明及

集諸經礼懺儀卷下 第七張 終

【初雕本】

問曰今欲勸人往生者未知若為安心起行作業定得往生彼國土也答曰必欲生彼國土者如觀經說先具三心必得往生何者為三一者至誠心所謂身業禮拜彼佛口業讚歎稱揚彼佛意業專念觀察彼佛凡起三業必須真實故名至誠心二者深心即是真實信心信知自身是具足煩惱凡夫善根薄少流轉三界不出火宅今信知弥陀本弘誓願及稱名号下至十聲等定得往生乃至一念无有疑心故名深心三者迴向發願心所作一切善根悉皆迴願往生故名迴向發願心具此三心必得往生也若少一心即不得生如觀經具說應知又如天親淨土論云若有願生彼國者勸修五念門五門若具定得往生何者為五一者身業禮拜門所謂一心專至恭敬合掌香華供養禮拜彼阿弥陁佛禮即專禮彼佛畢命為期不雜餘礼故名禮拜門

二者口業讚歎門所謂專憶讚歎彼佛身相光明一切聖眾身相光明及

【金藏本】

問曰今欲勸人往生者未知若為安心起行作業定得往生彼國土也答曰必欲生彼國土者如觀經說先具三心必得往生何者為三一者至誠心所謂身業禮拜彼佛口業讚歎稱揚彼佛意業專念觀察彼佛凡起三業必須真實故名至誠心二者深心即是真實信心信知自身是具足煩惱凡夫善根薄少流轉三界不出火宅今信知弥陀本弘誓願及稱名号下至十聲等定得往生乃至一念无有疑心故名深心三者迴向發願心所作一切善根悉皆迴願往生故名迴向發願心具此三心必得往生也若少一心即不得生如觀經具說應知又如天親淨土論云若有願生彼國者勸修五念門五門若具定得往生何者為五一者身業禮拜門所謂一心專至恭敬合掌香華供養禮拜彼阿弥陁佛禮即專禮彼佛畢命為期不雜餘礼故名禮拜門

二者口業讚歎門所謂專憶讚歎彼佛身相光明一切聖眾身相光明及

集諸經礼懺儀卷下 第七張 終



【第三張】

【再雕本】

彼國中一切寶莊嚴光明等故名讚歎門

三者意業憶念觀察門所謂專意念觀彼佛及一切聖衆身相光明國土莊嚴等如觀經說唯除睡時恒憶恒念恒想恒觀此事等故名觀察門

四者作願門所謂專心若晝若夜一切時一切處三業四威儀所作功德不問初中後皆須真實心中發願願生彼國故名作願門

五者迴向門所謂專心若自作善根及一切三乘五道一一聖凡等所作善根深生隨喜如諸佛菩薩所作隨喜我亦如是隨喜以此隨喜善根及已所作善根皆悉與衆生共之迴向彼國故名迴向門

又到彼國已得六神通迴入生死教化衆生徹窮後際心无厭足乃至成佛亦名迴向門五門既具定得往生一一門與上三心合隨起業行不問多少皆名真實業也應知

又觀行四修法用策三心五念之行速得往生何者為四

【初雕本】

彼國中一切寶莊嚴光明等故名讚歎門

三者意業憶念觀察門所謂專意念觀彼佛及一切聖衆身相光明國土莊嚴等如觀經說唯除睡時恒憶恒念恒想恒觀此事等故名觀察門

四者作願門所謂專心若晝若夜一切時一切處三業四威儀所作功德不問初中後皆須真實心中發願願生彼國故名作願門

五者迴向門所謂專心自作善根及一切三乘五道一一聖凡等所作善根深生隨喜如諸佛菩薩所作隨喜我亦如是隨喜以此隨喜善根及已所作善根皆悉與衆生共之迴向彼國故名迴向門

又到彼國已得六神通迴入生死教化衆生徹窮後際必无厭足乃至成佛亦名迴向門五門既具定得往生一一門與上三心合隨起業行不問多少皆名真實業也應知

又觀行四修法用策三心五念之行速得往生何者為四

【金藏本】

彼國中一切寶莊嚴光明等故名讚歎門

三者意業憶念觀察門所謂專意念觀彼佛及一切聖衆身相光明國土莊嚴等如觀經說唯除睡時恒憶恒念恒想恒觀此事等故名觀察門

四者作願門所謂專心若晝若夜一切時一切處三業四威儀所作功德不問初中後皆須真實心中發願願生彼國故名作願門

五者迴向門所謂專心自作善根及一切三乘五道一一聖凡等所作善根深生隨喜如諸佛菩薩所作隨喜我亦如是隨喜以此隨喜善根及已所作善根皆悉與衆生共之迴向彼國故名迴向門

又到彼國已得六神通迴入生死教化衆生徹窮後際必无厭足乃至成佛亦名迴向門五門既具定得往生一一門與上三心合隨起業行不問多少皆名真實業也應知

又觀行四修法用策三心五念之行速得往生何者為四



【第四張】

【再雕本】

一者恭敬修所謂恭敬禮拜彼佛及  
彼一切聖衆等故名恭敬修畢命為  
期誓不中止即是長時修  
二者無餘修所謂專稱彼佛名專念  
專想專禮專讚彼佛及一切聖衆等  
不雜餘業故名無餘修畢命為期誓  
不中止即是長時修

三者無間修所謂相續恭敬禮拜稱  
名讚歎憶念觀察迴向發願心心相  
續不以餘業來間故名無間修又不  
以貪瞋煩惱來間隨犯隨懺不令隔  
念隔時隔日常使清淨亦名無間修  
畢命為期誓不中止即是長時修  
又菩薩已免生死所作善法迴求佛  
果即是自利教化衆生盡未來際即  
是利他然今時衆生悉為煩惱繫縛未  
免惡道生死等苦隨緣起行一切善  
根且速迴願往生弥陀佛國到彼國  
已更無所畏如上四修自然任運自  
利利他無不具足應知 又如文  
殊波若云欲明一行三昧唯勸獨處  
空閑捨諸亂意係心一佛不觀相貌  
專稱名字即於念中得見彼阿弥

【初雕本】

一者恭敬修所謂恭敬禮拜彼佛及彼  
一切聖衆等故名恭敬修畢命為期誓  
不中止即是長時修  
二者無餘修所謂專稱彼佛名專念  
專想專禮專讚彼佛及一切聖衆等  
不雜餘業故名無餘修畢命為期誓  
不中止即是長時修

三者無間修所謂相續恭敬禮拜稱  
名讚歎憶念觀察迴向發願心心相  
續不以餘業來間故名無間修又不  
以貪瞋煩惱來間隨犯隨懺不令隔  
念隔時隔日常使清淨亦名無間修  
畢命為期誓不中止即是長時修  
又菩薩已免生死所作善法迴求佛  
果即是自利教化衆生盡未來際即  
是利他然今時衆生悉為煩惱繫縛未  
免惡道生死等苦隨緣起行一切善  
根且速迴願往生弥陀佛國到彼國  
已更無所畏如上四修自然任運自  
利利他無不具足應知 又如文  
殊波若云欲明一行三昧唯勸獨處  
空閑捨諸亂意係心一佛不觀相貌  
專稱名字即於念中得見彼阿弥

【金藏本】

一者恭敬修恭敬禮拜彼佛及彼一  
切聖衆等故名恭敬修畢命為期誓  
不中止即是長時修  
二者無餘修所謂專稱彼佛名專念  
專想專禮專讚彼佛及一切聖衆等  
不雜餘業故名無餘修畢命為期誓  
不中止即是長時修

三者無間修所謂相續恭敬禮拜稱  
名讚歎憶念觀察迴向發願心心相  
續不以餘業來間故名無間修又不  
以貪瞋煩惱來間隨犯隨懺不令隔  
念隔時隔日常使清淨亦名無間修  
畢命為期誓不中止即是長時修  
又菩薩已免生死所作善法迴求佛  
果即是自利教化衆生盡未來際即  
是利他然今時衆生悉為煩惱繫縛未  
免惡道生死等苦隨緣起行一切善  
根且速迴願往生弥陀佛國到彼國  
已更無所畏如上四修自然任運自  
利利他無不具足應知 又如文  
殊波若云欲明一行三昧唯勸獨處  
空閑捨諸亂意係心一佛不觀相貌  
專稱名字即於念中得見彼阿弥



【第五張】

【再雕本】

佛及一切佛等問曰何故不令作觀  
直遣專稱名字者有何意也  
答曰乃由衆生障重境細心麤識颺  
神飛觀難成就是以大聖悲憐直勸  
專稱名字正由稱名易故相續即生  
問曰既遣專稱一佛何故境現即多  
此豈非邪正相交一多雜現也  
答曰佛佛齊證形无二別縱使念一  
見多乖何大道理也 又如觀經云  
行觀坐觀礼念等皆須面向西方者  
寂勝如樹先傾倒必隨曲故必有事  
尋不及向西方者但作向西想亦得  
問曰一切諸佛三身同證悲智果圓  
亦應无二隨方礼念課稱一佛亦應  
得生何故偏歎西方勸專礼念等有  
何義也 答曰諸佛所證平等是  
一若以願行來収非無因緣然弥陀  
世尊本發深重誓願願以光明名号  
攝化十方但使信心求念上盡一形  
下至十聲一聲等以佛願力易得往  
生是故釋迦及以諸佛勸向西方為  
別異余亦非是稱念餘佛不能除障滅  
罪也應知若能如上念念相續畢命為

【初雕本】

佛及一切佛等問曰何故不令作觀  
直遣專稱名字者有何意也  
答曰乃由衆生障重境細心麤識颺  
神飛觀難成就是以大聖悲憐直勸  
專稱名字正由稱名易故相續即生  
問曰既遣專稱一佛何故境現即多  
此豈非邪正相交一多雜現也  
答曰佛佛齊證形无二別縱使念一  
見多乖何大道理也 又如觀經云  
行觀坐觀礼念等皆須面向西方者  
寂勝如樹先傾倒必隨曲故必有事  
尋不及向西方者但作向西想亦得  
問曰一切諸佛三身同證悲智果圓  
亦應无二隨方礼念課稱一佛亦應  
得生何故偏歎西方勸專礼念等有  
何義也 答曰諸佛所證平等是  
一若以願行來収非無因緣然弥陀  
世尊本發深重誓願願以光明名号  
攝化十方但使信心求念上盡一形  
下至十聲一聲等以佛願力易得往  
生是故釋迦及以諸佛勸向西方為  
別異余亦非是稱念餘佛不能障滅  
罪也應知若能如上念念相續畢命為

【金藏本】

佛及一切佛等問曰何故不令作觀  
直遣專稱名字者有何意也  
答曰乃由衆生障重境細心麤識颺  
神飛觀難成就是以大聖悲憐直勸  
專稱名字正由稱名易故相續即生  
問曰既遣專稱一佛何故境現即多  
此豈非邪正相交一多雜現也  
答曰佛佛齊證形无二別縱使念一  
見多乖何大道理也 又如觀經云  
行觀坐觀礼念等皆須面向西方者  
寂勝如樹先傾倒必隨曲故必有事  
尋不及向西方者但作向西想亦得  
問曰一切諸佛三身同證悲智果圓  
亦應无二隨方礼念課稱一佛亦應  
得生何故偏歎西方勸專礼念等有  
何義也 答曰諸佛所證平等是  
一若以願行來収非無因緣然弥陀  
世尊本發深重誓願願以光明名号  
攝化十方但使信心求念上盡一形  
下至十聲一聲等以佛願力易得往  
生是故釋迦及以諸佛勸向西方為  
別異余亦非是稱念餘佛不能障滅  
罪也應知若能如上念念相續畢命為



【第六張】

【再雕本】

期者十即十生百即百生何以故無外  
離緣得正念故與佛本願得相應故  
不違教故隨順佛語故若欲捨專修  
雜業者百時希得一二千時希得五  
三何以故乃由離緣亂動失正念故與  
佛本願不相應故與教相違故不順  
佛語故係念不相續故憶想間斷故  
迴願不殷重真實故貪瞋諸見煩惱  
來間斷故无有慚愧懺悔心故懺悔  
有三品一要二略三廣如下具說隨  
意用皆得 又不相續念報彼佛恩  
故心生輕慢雖作業行常與名利相  
應故人我自覆不親近同行善知識  
故樂近離緣自障障他往生正行故  
何以故今比自見聞諸方道俗解行  
不同專雜有異但使專意作者十即  
十生修雜不至心者十中无一此二  
行得失如前已辯仰願一切往生人  
等善自思量已能令身願生彼國者  
行住坐卧必須勵心剋己晝夜莫廢  
畢命為期止在一形似如少苦前念  
命終後念即生彼國長時永劫常受  
無為法樂乃至成佛不經生死豈非

集諸經禮懺儀卷下 第六張 英

【初雕本】

期十即十生百即百生何以故無外  
離緣得正念故與佛本願得相應故  
不違教故隨順佛語故若欲捨專修  
雜業者百時希得一二千時希得五  
三何以故乃由離緣亂動失正念故與  
佛本願不相應故與教相違故不順  
佛語故係念不相續故憶想間斷故  
迴願不殷重真實故貪瞋諸見煩惱  
來間斷故无有慚愧懺悔心故懺悔  
有三品一要二略三廣如下具說隨  
意用皆得 又不相續念報彼佛恩  
故心生輕慢雖作業行常與名利相  
應故人我自覆不親近同行善知識  
故樂近離緣自障障他往生正行故  
何以故今比自見聞諸方道俗解行  
不同專雜有異但使專意作者十即  
十生修雜不至心者十中无一此二  
行得失如前已弁仰願一切往生人  
等善自思量已能令身願生彼國者  
行住坐卧必須勵心剋己晝夜莫廢  
畢命為期止在一形似如少苦前念  
命終後念即生彼國長時永劫常受  
無為法樂乃至成佛不經生死豈非

【金藏本】

期十即十生百即百生何以故無外  
離緣得正念故與佛本願得相應故  
不違教故隨順佛語故若欲捨專修  
雜業者百時希得一二千時希得五  
三何以故乃由離緣亂動失念故與  
佛本願不相應故與教相違故不順  
佛語故係念不相續故憶想間斷故  
迴願不殷重真實故貪瞋諸見煩惱  
來間斷故无有慚愧懺悔心故懺悔  
有三品一要二略三廣如下具說隨  
意用皆得 又不相續念報彼佛恩  
故心生輕慢雖作業行常與名利相  
應故人我自覆不親近同行善知識  
故樂近離緣自障障他往生正行故  
何以故今比自見聞諸方道俗解行  
不同專修有異但使專意作者十即  
十生修雜不至心者十中无一此二  
行得失如前已弁仰願一切往生人  
等善自思量已得令身願生彼國者  
行住坐卧必須勵心剋己晝夜莫廢  
畢命為期止在一形似如少苦前念  
命終後念即生彼國長時永劫常受  
無為法樂乃至成佛不經生死豈非

集諸經禮懺儀卷下 第六張 英字号



【第七張】

【再雕本】

快哉應知

第一佛勸礼讚阿弥陀佛十二光名求願往生一十九拜當日沒時礼取中下懺悔亦得南無釋迦牟尼佛等一切三寶我今稽首礼迴願往生无量壽國

此之一佛現是今時道俗等師言三寶者即是福田無量若能礼之一拜即是念報師恩以成已行以斯一行迴願往生

南無十方三世盡虛空遍法界微塵刹土中一切三寶我今稽首礼迴願往生無量壽國然十方虛空無邊三寶无盡若礼一拜即是福田无量功德無窮能至心礼之一拜一一佛上一一法上一一菩薩上聖僧上一一舍利上皆得身口意業解脫分善根來資益行者以成已業以斯一行迴願往生

南無西方極樂世界阿弥陀佛願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國問曰何故号为阿弥陀 答曰弥陀經及觀經云彼佛光明无量照十方

【初雕本】

快哉應知

第一佛勸礼讚阿弥陀佛十二光名求願往生一十九拜當日沒時礼取中下懺悔亦得南無釋迦牟尼佛等一切三寶我今稽首礼迴願往生无量壽國

此之一佛現是今時道俗等師言三寶者即是福田無量若能礼之一拜即是念報師恩以成已行以斯一行迴願往生

南無十方三世盡虛空遍法界微塵刹土中一切三寶我今稽首礼迴願往生無量壽國然十方虛空無邊三寶无盡若礼一拜即是福田无量功德無窮能至心礼之一拜一一佛上一一法上一一菩薩上聖僧上一一舍利上皆得身口意業解脫分善根來資益行者以成已業以斯一行迴願往生

南無西方極樂世界阿弥陀佛願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國問曰何故号为阿弥陀 答曰弥陀經及觀經云彼佛光明无量照十方

【金藏本】

快哉應知

第一佛勸礼讚阿弥陀佛十二光名求願往生一十九拜當日沒時礼取中下懺悔亦得南無釋迦牟尼佛等一切三寶我今稽首礼迴願往生无量壽國

此之一佛現是今時道俗等師言三寶者即是福田無量若能礼之一拜即是念報師恩以成已行以斯一行迴願往生

南無十方三世盡虛空遍法界微塵刹土中一切三寶我今稽首礼迴願往生無量壽國然十方虛空無邊三寶无盡若礼一拜即是福田无量功德無窮能至心礼之一拜一一佛上一一法上一一菩薩上聖僧上一一舍利上皆得身口意業解脫分善根來資益行者以成已業以斯一行迴願往生

南無西方極樂世界阿弥陀佛願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國問曰何故号为阿弥陀 答曰弥陀經及觀經云彼佛光明无量照十方



【第八張】

【再雕本】

國无所障，唯覓念佛眾生攝取不捨，故名阿彌陀佛。彼佛壽命及其人民無量无边，阿僧祇劫，故名阿彌陀。又釋迦佛及十方佛讚歎彌陀光明，有十二種名，普勸眾生稱名，禮拜相續不斷者，現世得无量功德，命終之後，定得往生如无量壽。經說云：其有眾生遇斯光者，三垢消滅，身意柔爽，歡喜踊躍，善心生焉。若在三塗勤苦之處，見此光明，无復苦惱。壽終之後，皆蒙解脫。无量壽佛光明顯赫，照耀十方諸佛國土，莫不聞焉。不但我今稱其光明，一切諸佛聲聞緣覺諸菩薩眾咸共歎譽，亦復如是。若有眾生聞其光明威神功德，日夜稱說，至心不斷者，隨其所願，得生其國。常為諸菩薩聲聞之眾，所共歎譽，稱其功德。佛言：我說无量壽佛光明威神，巍巍殊妙，晝夜一劫尚不能盡。

白諸行者：當知彌陀身相光明，釋迦如來一劫說不能盡者，如觀經云：一光明遍照十方世界，念佛眾生攝取不捨。今既觀經有如此，不思議增上。

集諸經札疏卷下 第八張 共

【初雕本】

國无所障，唯覓念佛眾生攝取不捨，故名阿彌陀佛。彼佛壽命及其人民無量无边，阿僧祇劫，故名阿彌陀。又釋迦佛及十方佛讚歎彌陀光明，有十二種名，普勸眾生稱名，禮拜相續不斷者，現世得无量功德，命終之後，定得往生如无量壽。經說云：其有眾生遇斯光者，三垢消滅，身意柔爽，歡喜踊躍，善心生焉。若在三塗勤苦之處，見此光明，无復苦惱。壽終之後，皆蒙解脫。无量壽佛光明顯赫，照耀十方諸佛國土，莫不聞焉。不但我今稱其光明，一切諸佛聲聞緣覺諸菩薩眾咸共歎譽，亦復如是。若有眾生聞其光明威神功德，日夜稱說，至心不斷者，隨其所願，得生其國。常為諸菩薩聲聞之眾，所共歎譽，稱其功德。佛言：我說无量壽佛光明威神，巍巍殊妙，晝夜一劫尚不能盡。

白諸行者：當知彌陀身相光明，釋迦如來一劫說不能盡者，如觀經云：一光明遍照十方世界，念佛眾生攝取不捨。今既觀經有如此，不思議增上。

【金藏本】

國无所障，唯覓念佛眾生攝取不捨，故名阿彌陀佛。彼佛壽命及其人民無量无边，阿僧祇劫，故名阿彌陀。又釋迦佛及十方佛讚歎彌陀光明，有十二種名，普勸眾生稱名，禮拜相續不斷者，現世得无量功德，命終之後，定得往生如无量壽。經說云：其有眾生遇斯光者，三垢消滅，身意柔爽，歡喜踊躍，善心生焉。若在三塗勤苦之處，見此光明，无復苦惱。壽終之後，皆蒙解脫。无量壽佛光明顯赫，照耀十方諸佛國土，莫不聞焉。不但我今稱其光明，一切諸佛聲聞緣覺諸菩薩眾咸共歎譽，亦復如是。若有眾生聞其光明威神功德，日夜稱說，至心不斷者，隨其所願，得生其國。常為諸菩薩聲聞之眾，所共歎譽，稱其功德。佛言：我說无量壽佛光明威神，巍巍殊妙，晝夜一劫尚不能盡。

白諸行者：當知彌陀身相光明，釋迦如來一劫說不能盡者，如觀經云：一光明遍照十方世界，念佛眾生攝取不捨。今既觀經有如此，不思議增上。

集諸經札疏卷下 第八張 共



【第九張】

【再雕本】

勝緣攝護行者何不相續稱觀礼念  
願往生也應知

南無西方 極樂世界 無量光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 无邊光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 無礙光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 无對光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 光焰王佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 清淨光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 歡喜光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 智慧光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 不斷光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 難思光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 无稱光佛

【初雕本】

勝緣攝護行者何不相續稱觀礼念  
願往生也應知

南無西方 極樂世界 無量光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 无邊光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 無礙光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 无對光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 光焰王佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 清淨光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 歡喜光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 智慧光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 不斷光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 難思光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 无稱光佛

【金藏本】

勝緣攝護行者何不相續稱觀礼念  
願往生也應知

南無西方 極樂世界 無量光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 无邊光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 無礙光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 无對光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 光焰王佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 清淨光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 歡喜光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 智慧光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 不斷光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 難思光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 无稱光佛



【再雕本】

【第一〇張】

願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 超日光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 阿弥陀佛  
哀愍覆護我令法種增長此世及後  
生願佛常攝受願共衆生咸歸命故  
我頂礼生彼國  
南无西方極樂世界觀世音菩薩願  
共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方極樂世界大勢至菩薩願  
共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
此二菩薩一切衆生臨命終時共持  
華臺授與行者阿弥陀佛放大光明  
照行者身復與無數化佛菩薩聲聞  
大衆等一時授手如彈指頃即得往  
生為報恩故至心礼之一拜  
南无西方 極樂世界 諸菩薩  
清淨大海衆願共衆生咸歸命故我  
頂礼生彼國  
此等諸菩薩亦隨佛來迎接行者為  
報恩故至心礼之一拜  
普為師僧父母及善知識法界衆生  
斷除三障同得往生阿弥陀佛國歸  
命懺悔

集諸經札識撰卷下 第十張 終

【初雕本】

願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 超日光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 阿弥陀佛  
哀愍覆護我令法種增長此世及後  
生願佛常攝受願共衆生咸歸命故  
我頂礼生彼國  
南无西方極樂世界觀世音菩薩願  
共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方極樂世界大勢至菩薩願  
共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
此二菩薩一切衆生臨命終時共持  
華臺授與行者阿弥陀佛放大光明  
照行者身復與無數化佛菩薩聲聞  
大衆等一時授手如彈指頃即得往  
生為報恩故至心礼之一拜  
南无西方 極樂世界 諸菩薩  
清淨大海衆願共衆生咸歸命故我  
頂礼生彼國  
此等諸菩薩亦隨佛來迎接行者為  
報恩故至心礼之一拜  
普為師僧父母及善知識法界衆生  
斷除三障同得往生阿弥陀佛國歸

【金藏本】

願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 超日光佛  
願共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方 極樂世界 阿弥陀佛  
哀愍覆護我令法種增長此世及後  
生願佛常攝受願共衆生咸歸命故  
我頂礼生彼國  
南无西方極樂世界觀世音菩薩願  
共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
南无西方極樂世界大勢至菩薩願  
共衆生咸歸命故我頂礼生彼國  
此二菩薩一切衆生臨命終時共持  
華臺授與行者阿弥陀佛放大光明  
照行者身復與無數化佛菩薩聲聞  
大衆等一時授手如彈指頃即得往  
生為報恩故至心礼之一拜  
南无西方 極樂世界 諸菩薩  
清淨大海衆願共衆生咸歸命故我  
頂礼生彼國  
此等諸菩薩亦隨佛來迎接行者為  
報恩故至心礼之一拜  
普為師僧父母及善知識法界衆生  
斷除三障同得往生阿弥陀佛國歸



【第一張】

【再雕本】

至心懺悔

南無歸懺十方佛 願滅一切諸罪根  
今將久近所修善 迴作自他安樂因  
恒願一切臨終時 勝緣勝境悉現前  
願觀彌陀大悲主 觀音勢至十方尊  
仰惟神光蒙授手 乘佛願力生彼國  
懺悔迴向發願已 至心歸命阿彌陀佛  
次作梵 說偈發願 出實性論  
禮懺諸功德 布施諸有情 願臨命終時  
見无量壽佛 無邊功德身 我及餘信者  
既見彼佛已 願得離垢眼 往生安樂國  
成无上菩提

懺已一切恭敬

歸佛得菩提 道心恒不退 歸法薩婆若  
得大惣持門 歸僧息諍論 同入和合海  
迴願往生 无量壽國 願諸衆生  
三業清淨 奉持佛教 和南一切賢聖  
迴願往生 無量壽國 諸衆等聽說  
黃昏偈

人間忿忿營衆務 不覺年命日夜去  
如燈風中滅難期 忙忙六道无定趣  
未得解脫出苦海 云何安然不驚懼  
各聞强健有力時 自策自勵求常住  
說此偈已更當心口發願願弟子臨

集諸經禮懺儀卷下 第三張 黃

【初雕本】

命懺悔

至心懺悔

南無歸懺十方佛 願滅一切諸罪根  
今將久近所修善 迴作自他安樂因  
恒願一切臨終時 勝緣勝境悉現前  
願觀彌陀大悲主 觀音勢至十方尊  
仰惟神光蒙授手 乘佛願力生彼國  
懺悔迴向發願已 至心歸命阿彌陀佛  
次作梵 說偈發願 出實性論  
禮懺諸功德 願臨命終時 見无量壽佛  
無邊功德身 我及餘信者 既見彼佛已  
願得離垢眼 往生安樂國 成无上菩提  
禮懺已一切恭敬

禮懺已一切恭敬

歸佛得菩提 道心恒不退 歸法薩婆若  
得大惣持門 歸僧息諍論 同入和合海  
迴願往生 无量壽國 願諸衆生  
三業清淨 奉持佛教 和南一切賢聖  
迴願往生 無量壽國

人間忿忿營衆務 不覺年命日夜去  
如燈風中滅難期 忙忙六道无定趣  
未得解脫出苦海 云何安然不驚懼  
各聞强健有力時 自策自勵求常住  
說此偈已更當心口發願願弟子臨

【金藏本】

命懺悔

至心懺悔

南無歸懺十方佛 願滅一切諸罪根  
今將久近所修善 迴作自他安樂因  
恒願一切臨終時 勝緣勝境悉現前  
願觀彌陀大悲主 觀音勢至十方尊  
仰惟神光蒙授手 乘佛願力生彼國  
懺悔迴向發願已 至心歸命阿彌陀佛  
次作梵 說偈發願 出實性論  
禮懺諸功德 布施諸有情 願臨命終時  
見无量壽佛 無邊功德身 我及餘信者  
既見彼佛已 願得離垢眼 往生安樂國  
成无上菩提  
禮懺已一切恭敬

禮懺已一切恭敬

歸佛得菩提 道心恒不退 歸法薩婆若  
得大惣持門 歸僧息諍論 同入和合海  
迴願往生 无量壽國 願諸衆生  
三業清淨 奉持佛教 和南一切賢聖  
迴願往生 無量壽國 諸衆等聽說  
黃昏偈

人間忿忿營衆務 不覺年命日夜去  
如燈風中滅難期 忙忙六道无定趣  
未得解脫出苦海 云何安然不驚懼  
各聞强健有力時 自策自勵求常住  
說此偈已更當心口發願願弟子臨

集諸經禮懺儀卷下 第三張 黃



【第二張】

【再雕本】

命終時心不顛倒心不錯乱心不失  
念身心无諸苦痛身心安隱快樂如  
入禪定聖衆現前乘佛本願上品往  
生阿彌陀佛國到彼國已得六神通迴  
入十方界救攝苦衆生虛空法界盡  
我願亦如是發願已至心歸命礼阿  
彌陀佛初夜偈云

煩惱深无底生死海無邊度苦船未立  
云何樂睡眠勇猛勤精進攝心常在禪  
勤修六度行菩提道自然

中夜偈云

汝起勿抱臭身卧種種不淨假名人  
如得重病箭入體衆苦痛集安可眠  
後夜偈云

時光遷流轉忽至五更初無常念念至  
恒與死王居勸諸行道者勤修至无餘  
平旦偈云

欲求寂滅樂當學沙門法衣食支身命  
精麁隨衆等

諸衆等今日晨朝各記六念

日中偈云

人生不精進喻若樹無根採華置日裏  
能得幾時鮮人命亦如是无常須臾間

集諸經礼懺儀卷下 第三張 英

【初雕本】

命終時心不顛倒心不錯乱心不失  
念身心无諸苦痛身心安隱快樂如  
入禪定聖衆現前乘佛本願上品往  
生阿彌陀佛國到彼國已得六神通迴  
入十方界救攝苦衆生虛空法界盡  
我願亦如是發願已至心歸命礼阿  
彌陀佛初夜偈云

煩惱深无底生死海無邊度苦船未立  
云何樂睡眠勇猛勤精進攝心常在禪  
勤修六度行菩提道自然

中夜偈云

汝起勿抱臭身卧種種不淨假名人  
如得重病箭入體衆苦痛集安可眠  
後夜偈云

時光遷流轉忽至五更初無常念念至  
恒與死王居勸諸行道者勤修至无餘  
平旦偈云

欲求寂滅樂當學沙門法衣食支身命  
精麁隨衆等

諸衆等今日晨朝各記六念

日中偈云

人生不精進喻若樹無根採華置日裏  
能得幾時鮮人命亦如是无常須臾間

【金藏本】

集諸經礼懺儀卷下 第三張 英字

命終時心不顛倒心不錯乱心不失  
念身心无諸苦痛身心安隱快樂如  
入禪定聖衆現前乘佛本願上品往  
生阿彌陀佛國到彼國已得六神通迴  
入十方界救攝苦衆生虛空法界盡  
我願亦如是發願已至心歸命礼阿  
彌陀佛初夜偈云

煩惱深无底生死海無邊度苦船未立  
云何樂睡眠勇猛勤精進攝心常在禪  
勤修六度行菩提道自然

中夜偈云

汝起勿抱臭身卧種種不淨假名人  
如得重病箭入體衆苦痛集安可眠  
後夜偈云

時光遷流轉忽至五更初無常念念至  
恒與死王居勸諸行道者勤修至无餘  
平旦偈云

欲求寂滅樂當學沙門法衣食支身命  
精麁隨衆等

諸衆等今日晨朝各記六念

日中偈云

人生不精進喻若樹無根採華置日裏  
能得幾時鮮人命亦如是无常須臾間



【再雕本】

【第三張】

勸諸行道衆 勤修乃至真

第二比丘善導謹依大乘經採集要  
文以為讚偈二十三拜當初夜時礼  
懺悔同前後

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 弥陀智願海  
深廣无涯底 聞名欲往生 皆悉到彼國  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 於此世界中  
六十有七億 不退諸菩薩 皆當得生彼  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 小行諸菩薩  
及修少福者 其數不可計 皆當得生彼  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 十方佛剎中  
菩薩比丘衆 窮劫不可計 皆當得往生  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 一切諸菩薩  
各賣天妙華 寶香无價衣 供養弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 咸然奏天樂  
暢發和雅音 歌歎軍勝尊 供養弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 慧日照世間

集諸經礼懺儀卷下 第三張 終

【初雕本】

勸諸行道衆 勤修乃至真

第二比丘善導謹依大乘經採集要  
文以為讚偈二十三拜當初夜時礼  
懺悔同前後

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 弥陀智願海  
深廣无涯底 聞名欲往生 皆悉到彼國  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 於此世界中  
六十有七億 不退諸菩薩 皆當得生彼  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 小行諸菩薩  
及修少福者 其數不可計 皆當得生彼  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 十方佛剎中  
菩薩比丘衆 窮劫不可計 皆當得往生  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 一切諸菩薩  
各賣天妙華 寶香无價衣 供養弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 咸然奏天樂  
暢發和雅音 歌歎軍勝尊 供養弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 慧日照世間

【金藏本】

勸諸行道衆 勤修乃至真

第二比丘善導謹依大乘經採集要  
文以為讚偈二十三拜當初夜時礼  
懺悔同前後

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 弥陀智願海  
深廣无涯底 聞名欲往生 皆悉到彼國  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 於此世界中  
六十有七億 不退諸菩薩 皆當得生彼  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 小行諸菩薩  
及修少福者 其數不可計 皆當得生彼  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 十方佛剎中  
菩薩比丘衆 窮劫不可計 皆當得往生  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 一切諸菩薩  
各賣天妙華 寶香无價衣 供養弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 咸然奏天樂  
暢發和雅音 歌歎軍勝尊 供養弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 慧日照世間

集諸經礼懺儀卷下 第三張 終



【第一四張】

【再雕本】

消除生死雲 恭敬遠三匝 稽首弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 見彼嚴淨土  
微妙難思議 因發无上心 願我國亦然  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 應時无量壽  
動容發欣笑 口出無數光 遍照十方國  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 迴光圍遶身  
三匝從頂入 一切天人衆 踊躍皆歡喜  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 梵聲如雷震  
八音暢妙響 十方來正士 吾悉知彼願  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 至彼嚴淨土  
便速得神通 必於无量壽 受記成等覺  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 奉事億如來  
飛化遍諸刹 恭敬歡喜去 還到安養國  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 若人无善本  
不得聞佛名 憍慢弊懈怠 難以信此法  
願共諸衆生 往生安樂國

【初雕本】

消除生死雲 恭敬遠三匝 稽首弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 見彼嚴淨土  
微妙難思議 因發无上心 願我國亦然  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 應時无量壽  
動容發欣笑 口出無數光 遍照十方國  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 迴光圍遶身  
三匝從頂入 一切天人衆 踊躍皆歡喜  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 梵聲如雷震  
八音暢妙響 十方來正士 吾悉知彼願  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 至彼嚴淨土  
便速得神通 必於无量壽 受記成等覺  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 奉事億如來  
飛化遍諸刹 恭敬歡喜去 還到安養國  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 若人无善本  
不得聞佛名 憍慢弊懈怠 難以信此法  
願共諸衆生 往生安樂國

【金藏本】

消除生死雲 恭敬遠三匝 稽首弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 見彼嚴淨土  
微妙難思議 因發无上心 願我國亦然  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 應時无量壽  
動容發欣笑 口出無數光 遍照十方國  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 迴光圍遶身  
三匝從頂入 一切天人衆 踊躍皆歡喜  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 梵聲如雷震  
八音暢妙響 十方來正士 吾悉知彼願  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 至彼嚴淨土  
便速得神通 必於无量壽 受記成等覺  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 奉事億如來  
飛化遍諸刹 恭敬歡喜去 還到安養國  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 若人无善本  
不得聞佛名 憍慢弊懈怠 難以信此法  
願共諸衆生 往生安樂國



【第一五張】

【再雕本】

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 宿世見諸佛  
則能信此事 謙敬聞奉行 踊躍大歡喜  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 其有得聞彼  
弥陀佛名号 歡喜至一心 皆當得生彼  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 設滿大千火  
直過聞佛名 聞名歡喜讚 皆當得生彼  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 万年三寶滅  
此經住百年 尔時聞一念 皆當得生彼  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 佛世甚難值  
人有信慧難 遇聞希有法 此復寂為難  
自信教人信 難中轉更難 大悲弘普化  
真成報佛恩 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 哀慈覆護我  
今法種增長 此世及後生 願佛常攝受  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 觀世音菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 大勢至菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國

集諸經礼懺儀卷下 第三十五張 英

【初雕本】

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 宿世見諸佛  
則能信此事 謙敬聞奉行 踊躍大歡喜  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 其有得聞彼  
弥陀佛名号 歡喜至一心 皆當得生彼  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 設滿大千火  
直過聞佛名 聞名歡喜讚 皆當得生彼  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 万年三寶滅  
此經住百年 尔時聞一念 皆當得生彼  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 佛世甚難值  
人有信惠難 遇聞希有法 此復寂為難  
自信教人信 難中轉更難 大悲弘普化  
真成報佛恩 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 哀慈覆護我  
今法種增長 此世及後生 願佛常攝受  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 觀世音菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 大勢至菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國

【金藏本】

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 宿世見諸佛  
則能信此事 謙敬聞奉行 踊躍大歡喜  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 其有得聞彼  
弥陀佛名号 歡喜至一心 皆當得生彼  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 設滿大千火  
直過聞佛名 聞名歡喜讚 皆當得生彼  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 万年三寶滅  
此經住百年 尔時聞一念 皆當得生彼  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 佛世甚難值  
人有信惠難 遇聞希有法 此復寂為難  
自信教人信 難中轉更難 大悲弘普化  
真成報佛恩 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 哀慈覆護我  
今法種增長 此世及後生 願佛常攝受  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 觀世音菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 大勢至菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國

集諸經礼懺儀卷下 第三十五張 英



【第一六張】

【再雕本】

至心歸命礼西方阿弥陀佛諸菩薩  
清淨大海衆 願共諸衆生往生  
安樂國

普為師僧父母及善知識法界衆生  
斷除三障同得往生阿弥陀佛國歸  
命懺悔

第三依龍樹菩薩願生礼讚偈一十  
六拜當中夜時礼懺悔同前後

至心歸命礼西方阿弥陀佛

稽首天人所恭敬 阿弥陀佛兩足尊  
在彼微妙安樂國 无量佛子衆圍遶  
故我頂礼弥陀佛 願共諸衆生往生  
安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛

金色身淨如山王 奢摩他行如象步  
兩目淨若青蓮花 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛

面善圓淨如滿月 威光猶如百千日  
聲若天鼓俱翅羅 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛

觀音頂戴冠中住 種種妙相寶莊嚴

華嚴經礼懺儀卷下 第十張 庚

【初雕本】

至心歸命礼西方阿弥陀佛諸 菩薩  
清淨大海衆 願共諸衆生往生  
安樂國

普為師僧父母善知識法界衆生斷  
除三障同得往生阿弥陀佛國歸命  
懺悔

第三依龍樹菩薩願生礼讚偈一十  
六拜當中夜時礼懺悔同前後

至心歸命礼西方阿弥陀佛

稽首天人所恭敬 阿弥陀佛兩足尊  
在彼微妙安樂國 无量佛子衆圍遶  
故我頂礼弥陀佛 願共諸衆生往生  
安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛

金色身淨如山王 奢摩他行如象步  
兩目淨若青蓮花 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛

面善圓淨如滿月 威光猶如百千日  
聲若天鼓俱翅羅 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛

觀音頂戴冠中住 種種妙相寶莊嚴

【金藏本】

至心歸命礼西方阿弥陀佛諸菩薩  
清淨大海衆 願共諸衆生往生  
安樂國

普為師僧父母善知識法界衆生斷  
除三障同得往生阿弥陀佛國歸命  
懺悔

第三依龍樹菩薩願生礼讚偈一十  
六拜當中夜時礼懺悔同前後

至心歸命礼西方阿弥陀佛

稽首天人所恭敬 阿弥陀佛兩足尊  
在彼微妙安樂國 无量佛子衆圍遶  
故我頂礼弥陀佛 願共諸衆生往生  
安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛

金色身淨如山王 奢摩他行如象步  
兩目淨若青蓮花 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛

面善圓淨如滿月 威光猶如百千日  
聲若天鼓俱翅羅 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛

觀音頂戴冠中住 種種妙相寶莊嚴



【第一七張】

【再雕本】

能伏外道魔憍慢 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
無比无垢廣清淨 衆德皎潔如虛空  
所作利益得自在 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
十方名聞菩薩衆 无量諸魔常讚歎  
為諸衆生願力住 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
金底寶澗池生華 善根所成妙臺座  
於彼座上如山王 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
十方所來諸佛子 顯現神通至安樂  
瞻仰尊顏常恭敬 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
諸有無常无我等 亦如水月電影露  
為衆說法無名字 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛

集諸經礼懺儀卷下 第十七張 英

【初雕本】

能伏外道魔憍慢 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
無比无垢廣清淨 衆德皎潔如虛空  
所作利益得自在 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
十方名聞菩薩衆 无量諸魔常讚歎  
為諸衆生願力住 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
金底寶澗池生華 善根所成妙臺座  
於彼座上如山王 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
十方所來諸佛子 顯現神通至安樂  
瞻仰尊顏常恭敬 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
諸有無常无我等 亦如水月電影露  
為衆說法無名字 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛

【金藏本】

能伏外道魔憍慢 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
無比无垢廣清淨 衆德皎潔如虛空  
所作利益得自在 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
十方名聞菩薩衆 无量諸魔常讚歎  
為諸衆生願力住 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
金底寶澗池生華 善根所成妙臺座  
於彼座上如山王 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
十方所來諸佛子 顯現神通至安樂  
瞻仰尊顏常恭敬 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛  
諸有無常无我等 亦如水月電影露  
為衆說法無名字 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生往生安樂國  
至心歸命礼西方阿弥陀佛

集諸經礼懺儀卷下 第十七張 英



【第一八張】

【再雕本】

彼尊佛刹无惡名 亦无女人惡道怖  
衆人至心敬彼尊 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
彼尊无量方便境 無有諸趣惡知識  
往生不退至菩提 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
我說彼尊功德事 衆善无邊如海水  
所作善根清淨者 迴施衆生生彼土  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼  
哀愍覆護我  
此世及後生  
願共諸衆生  
至心歸命礼  
觀世音菩薩  
往生安樂國  
至心歸命礼  
大勢至菩薩  
願共諸衆生  
往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界諸菩薩  
清淨大海衆 願共諸衆生

【初雕本】

彼尊佛刹无惡名 亦无女人惡道怖  
衆人至心敬彼尊 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
彼尊无量方便境 無有諸趣惡知識  
往生不退至菩提 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
我說彼尊功德事 衆善无邊如海水  
所作善根清淨者 迴施衆生生彼土  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼  
哀愍覆護我  
此世及後生  
願共諸衆生  
至心歸命礼  
觀世音菩薩  
往生安樂國  
至心歸命礼  
大勢至菩薩  
願共諸衆生  
往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界諸尊菩薩等  
清淨大海衆 願共諸衆生

【金藏本】

彼尊佛刹无惡名 亦无女人惡道怖  
衆人至心敬彼尊 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
彼尊无量方便境 無有諸趣惡知識  
往生不退至菩提 故我頂礼弥陀佛  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
我說彼尊功德事 衆善无邊如海水  
所作善根清淨者 迴施衆生生彼土  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼  
哀愍覆護我  
此世及後生  
願共諸衆生  
至心歸命礼  
觀世音菩薩  
往生安樂國  
至心歸命礼  
大勢至菩薩  
願共諸衆生  
往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界諸菩薩  
清淨大海衆 願共諸衆生



【第一九張】

【再雕本】

往生安樂國

普為師僧父母及善知識法界衆生  
斷除三障同得往生阿彌陀佛國歸  
命懺悔至心懺悔自從無始受身來  
恒以十惡加衆生不孝父母謗三寶  
造作五逆不善業以是衆罪因緣故  
妄想顛倒生纏縛應受无量生死苦  
頂禮懺悔願滅除懺悔已至心歸命  
禮阿彌陀佛

至心勸請諸佛大慈无上尊恒以空  
慧照三界衆生盲冥不覺知永沉生  
死大苦海為拔群生離諸苦勸請常  
住轉法輪勸請已至心歸命禮阿彌  
陀佛

至心隨喜歷劫已來懷嫉妬我慢放  
逸由癡生恒以瞋恚毒害火焚燒智  
慧慈善根今日思惟始惺悟發大精  
進隨喜心隨喜已至心歸命禮阿彌  
陀佛

至心迴向流浪三界內癡愛入胎獄  
生已歸老死沉沒於苦海我今修此  
福迴生安樂土迴向已至心歸命禮  
阿彌陀佛

【初雕本】

往生安樂國

普為師僧父母及善知識法界衆生  
斷除三障同得往生阿彌陀佛國歸  
命懺悔至心懺悔自從無始受身來  
恒以十惡加衆生不孝父母謗三寶  
造作五逆不善業以是衆罪因緣故  
妄想顛倒生纏縛應受无量生死苦  
頂禮懺悔願滅除懺悔已至心歸命  
禮阿彌陀佛

至心勸請諸佛大慈无上尊恒以空  
慧照三界衆生盲冥不覺知永沉生  
死大苦海為拔群生離諸苦勸請常  
住轉法輪勸請已至心歸命禮阿彌  
陀佛

至心隨喜歷劫已來懷嫉妬我慢放  
逸由癡生恒以瞋恚毒害火焚燒智  
慧慈善根今日思惟始惺悟發大精  
進隨喜心隨喜已至心歸命禮阿彌  
陀佛

至心迴向流浪三界內癡愛入胎獄  
生已歸老死沉沒於苦海我今修此  
福迴生安樂土迴向已至心歸命禮  
阿彌陀佛

【金藏本】

往生安樂國

普為師僧父母及善知識法界衆生  
斷除三障同得往生阿彌陀佛國歸  
命懺悔至心懺悔自從無始受身來  
恒以十惡加衆生不孝父母謗三寶  
造作五逆不善業以是衆罪因緣故  
妄想顛倒生纏縛應受无量生死苦  
頂禮懺悔願滅除懺悔已至心歸命  
禮阿彌陀佛

至心勸請諸佛大慈无上尊恒以空  
慧照三界衆生盲冥不覺知永沉生  
死大苦海為拔群生離諸苦勸請常  
住轉法輪勸請已至心歸命禮阿彌  
陀佛

至心隨喜歷劫已來懷嫉妬我慢放  
逸由癡生恒以瞋恚毒害火焚燒智  
慧慈善根今日思惟始惺悟發大精  
進隨喜心隨喜已至心歸命禮阿彌  
陀佛

至心迴向流浪三界內癡愛入胎獄  
生已歸老死沉沒於苦海我今修此  
福迴生安樂土迴向已至心歸命禮  
阿彌陀佛



【第二〇張】

【再雕本】

至心發願願捨胎藏形往生安樂國  
速見弥陀佛无边功德身奉觀諸如  
來賢聖亦復然獲六神通力救攝苦  
衆生虛空法界盡我願亦如是發願  
已至心歸命礼阿弥陀佛餘表同上法

第四依天親菩薩願往生讚偈二十  
拜當後夜時礼懺悔同前後

至心歸命礼西方阿弥陀佛世尊我一心

歸命盡十方無尋光如來願生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛觀彼世界相

勝過三界道究竟如虛空廣大无边際

願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛正道大慈悲

出世善根生淨光明滿足如鏡日月輪

願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛脩諸珍寶性

具足妙莊嚴無垢光焰熾明淨曜世間

願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛寶華千万種

弥覆池流泉微風動花葉交錯光乱轉

願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛宮殿諸樓閣

觀十方無尋雜樹異光色寶欄遍圍繞

集諸經礼懺儀卷下 第三張 英

【初雕本】

至心發願願捨胎藏形往生安樂國  
速見弥陀佛无边功德身奉觀諸如  
來賢聖亦復然獲六神通力救攝苦  
衆生虛空法界盡我願亦如是發願  
已至心歸命礼阿弥陀佛餘表同上法

第四依天親菩薩願往生讚偈二十  
拜當後夜時礼懺悔同前後

至心歸命礼西方阿弥陀佛世尊我一心

歸命盡十方無尋光如來願生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛觀彼世界相

勝過三界道究竟如虛空廣大无边際

願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛正道大慈悲

出世善根生淨光明滿足如鏡日月輪

願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛脩諸珍寶性

具足妙莊嚴無垢光焰熾明淨曜世間

願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛寶華千万種

弥覆池流泉微風動花葉交錯光乱轉

願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛宮殿諸樓閣

觀十方無尋雜樹異光色寶欄遍圍繞

【金藏本】

至心發願願捨胎藏形往生安樂國  
速見弥陀佛无边功德身奉觀諸如  
來賢聖亦復然獲六神通力救攝苦  
衆生虛空法界盡我願亦如是發願  
已至心歸命礼阿弥陀佛餘表同上法

第四依天親菩薩願往生讚偈二十  
拜當後夜時礼懺悔同前後

至心歸命礼西方阿弥陀佛世尊我一心

歸命盡十方無尋光如來願生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛觀彼世界相

勝過三界道究竟如虛空廣大无边際

願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛正道大慈悲

出世善根生淨光明滿足如鏡日月輪

願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛脩諸珍寶性

具足妙莊嚴無垢光焰熾明淨曜世間

願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛寶華千万種

弥覆池流泉微風動花葉交錯光乱轉

願共諸衆生往生安樂國

至心歸命礼西方阿弥陀佛宮殿諸樓閣

觀十方無尋雜樹異光色寶欄遍圍繞

集諸經礼懺儀卷下 第三張 梵字



【第二一張】

【再雕本】

願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 無量寶交絡  
羅網遍虛空 種種鈴發響 宣吐妙法音  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 梵音悟深遠  
微妙聞十方 正覺阿彌陀 法王善住持  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 如來淨華衆  
正覺花化生 愛樂佛法味 禪三昧為食  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 永離身心惱  
受樂常無間 大乘善根界 等無譏嫌名  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 女人及根缺  
二乘種不生 衆生所願樂 一切能滿足  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 無量大寶王  
微妙淨花臺 相好光一尋 色像超群生  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 天人不動衆  
清淨智海王 如須弥山王 勝妙无過者  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 天人丈夫衆

集諸經禮懺儀卷下 第七十張

【初雕本】

願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 無量寶交絡  
羅網遍虛空 種種鈴發響 宣吐妙法音  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 梵音悟深遠  
微妙聞十方 正覺阿彌陀 法王善住持  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 如來淨華衆  
正覺花化生 愛樂佛法味 禪三昧為食  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 永離身心惱  
受樂常無間 大乘善根界 等無譏嫌名  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 女人及根缺  
二乘種不生 衆生所願樂 一切能滿足  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 無量大寶王  
微妙淨花臺 相好光一尋 色像超群生  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 天人不動衆  
清淨智海王 如須弥山王 勝妙无過者  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 天人丈夫衆

【金藏本】

願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 無量寶交絡  
羅網遍虛空 種種鈴發響 宣吐妙法音  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 梵音悟深遠  
微妙聞十方 正覺阿彌陀 法王善住持  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 如來淨華衆  
正覺花化生 愛樂佛法味 禪三昧為食  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 永離身心惱  
受樂常無間 大乘善根界 等無譏嫌名  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 女人及根缺  
二乘種不生 衆生所願樂 一切能滿足  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 無量大寶王  
微妙淨花臺 相好光一尋 色像超群生  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 天人不動衆  
清淨智海王 如須弥山王 勝妙无過者  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 天人丈夫衆

集諸經禮懺儀卷下 第七十張 庚字号



【第二張】

【再雕本】

恭敬遠瞻仰 雨天樂花衣 妙香等供養  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 安樂國清淨  
常轉無垢輪 一念及一時 利益諸群生  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 讚佛諸功德  
無有分別心 能令速滿足 功德大寶海  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 哀愍覆護我  
令法種增長 此世及後生 願佛常攝受  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 觀世音菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 大勢至菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 諸菩薩  
清淨大海衆 願共諸衆生 往生安樂國  
普為師僧父母及善知識法界衆生  
斷除三障同得往生阿彌陀佛國歸  
命懺悔  
第五依齊琮法師願往生礼讚偈二  
十二拜當旦起時礼懺悔同前後  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 法藏因彌遠

集諸經礼懺儀卷下 第三張 英

【初雕本】

恭敬遠瞻仰 雨天樂花衣 妙香等供養  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 安樂國清淨  
常轉無垢輪 一念及一時 利益諸群生  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 讚佛諸功德  
無有分別心 能令速滿足 功德大寶海  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 哀愍覆護我  
令法種增長 此世及後生 願佛常攝受  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 觀世音菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 大勢至菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 諸菩薩  
清淨大海衆 願共諸衆生 往生安樂國  
普為師僧父母及善知識法界衆生  
斷除三障同得往生阿彌陀佛國歸  
命懺悔  
第五依齊琮法師願往生礼讚偈二  
十二拜當旦起時礼懺悔同前後  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 法藏因彌遠

【金藏本】

恭敬遠瞻仰 雨天樂花衣 妙香等供養  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 安樂國清淨  
常轉無垢輪 一念及一時 利益諸群生  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 讚佛諸功德  
無有分別心 能令速滿足 功德大寶海  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 哀愍覆護我  
令法種增長 此世及後生 願佛常攝受  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 觀世音菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 大勢至菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 諸菩薩  
清淨大海衆 願共諸衆生 往生安樂國  
普為師僧父母及善知識法界衆生  
斷除三障同得往生阿彌陀佛國歸  
命懺悔  
第五依齊琮法師願往生礼讚偈二  
十二拜當旦起時礼懺悔同前後  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 法藏因彌遠



【第三張】

【再雕本】

極樂果還深 異珍叅作地 衆寶間為林  
花開希有色 波揚實相音 何當蒙授手  
一遂往生心 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 濁世難還入  
淨土願逾深 金繩直界道 珠網縵垂林  
見色皆真色 聞音悉法音 莫謂西方遠  
唯須十念心 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 已成窮理聖  
真有遍空威 在西時現小 俱是躡隨機  
素珠相映飾 沙水共澄輝 欲得无生果  
彼土必須依 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 五山毫獨朗  
寶手印恒分 地水俱為鏡 香華同作雲  
業深成易往 因淺實難聞 必望除疑惑  
超然獨不群 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方觀世音菩薩  
千輪明足下 五道現光中 悲引恒无絕  
人歸亦未窮 口宣猶在定 心靜更飛通  
聞名皆願往 日發幾花葉 願共諸衆生  
往生安樂國  
至心歸命禮 西方大勢至菩薩  
慧力擲無上 身光脩有緣 動搖諸寶國  
侍坐一金蓮 鳥群非寶鳥 天類豈真天

集諸經禮懺儀卷下 第三張 終

【初雕本】

極樂果還深 異珍叅作地 衆寶間為林  
花開希有色 波揚實相音 何當蒙授手  
一遂往生心 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 濁世難還入  
淨土願逾深 金繩直界道 珠網縵垂林  
見色皆真色 聞音悉法音 莫謂西方遠  
唯須十念心 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 已成窮理聖  
真有遍空威 在西時現小 俱是躡隨機  
素珠相映飾 沙水共澄輝 欲得无生果  
彼土必須依 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 五山毫獨朗  
寶手印恒分 地水俱為鏡 香華同作雲  
業深成易往 因淺實難聞 必望除疑惑  
超然獨不群 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方觀世音菩薩  
千輪明足下 五道現光中 悲引恒无絕  
人歸亦未窮 口宣猶在定 心靜更飛通  
聞名皆願往 日發幾花葉 願共諸衆生  
往生安樂國  
至心歸命禮 西方大勢至菩薩  
慧力擲無上 身光脩有緣 動搖諸寶國  
侍坐一金蓮 鳥群非寶鳥 天類豈真天

【金藏本】

極樂果還深 異珍叅作地 衆寶間為林  
花開希有色 波揚實相音 何當蒙授手  
一遂往生心 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 濁世難還入  
淨土願逾深 金繩直界道 珠網縵垂林  
見色皆真色 聞音悉法音 莫謂西方遠  
唯須十念心 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 已成窮理聖  
真有遍空威 在西時現小 俱是躡隨機  
素珠相映飾 沙水共澄輝 欲得无生早  
彼土必須依 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 五山毫獨朗  
寶手印恒分 地水俱為鏡 香華同作雲  
業深成易往 因淺實難聞 必望除疑惑  
超然獨不群 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方觀世音菩薩  
千輪明足下 五道現光中 悲引恒无絕  
人歸亦未窮 口宣猶在定 心靜更飛通  
聞名皆願往 日發幾花葉 願共諸衆生  
往生安樂國  
至心歸命禮 西方大勢至菩薩  
慧力擲無上 身光脩有緣 動搖諸寶國  
侍坐一金蓮 鳥群非寶鳥 天類豈真天

集諸經禮懺儀卷下 第三張 終



【第二四張】

【再雕本】

須知求妙樂 會是戒香全 願共諸衆生  
往生安樂國

至心歸命礼 西方阿彌陀佛 心帶真慈滿  
光含法界圓 无緣能攝物 有想定非難  
華隨本心變 宮移身自安 怖聞出世境  
須共入禪看 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 迴向漸為功  
西方路稍通 寶幢承厚地 天香入遠風  
開華重布水 覆網細分空 願生何意切  
正為樂无窮 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 欲選當生處  
西方寂可歸 閒樹開重閣 滿道布鮮衣  
香飯隨心至 寶殿逐身飛 有緣皆得入  
只是往人希 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 十劫道先成  
嚴界引群萌 金沙徹水照 玉葉滿枝明  
鳥本珠中出 人唯華上生 敢請西方聖  
早晚定相迎 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 十方諸佛國  
盡是法王家 偏求有緣地 莫得早无邪  
八功如意水 七寶自然華 於彼心能係  
當必往非賒 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 淨國無衰變

【初雕本】

須知求妙樂 會是戒香全 願共諸衆生  
往生安樂國

至心歸命礼 西方阿彌陀佛 心帶真慈滿  
光含法界圓 无緣能攝物 有想定非難  
華隨本心變 宮移身自安 怖聞出世境  
須共入禪看 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 迴向漸為功  
西方路稍通 寶幢承厚地 天香入遠風  
開華重布水 覆網細分空 願生何意切  
正為樂无窮 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 欲選當生處  
西方寂可歸 閒樹開重閣 滿道布鮮衣  
香飯隨心至 寶殿逐身飛 有緣皆得入  
只是去人希 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 十劫道先成  
嚴界引群萌 金沙徹水照 玉葉滿枝明  
鳥本珠中出 人唯華上生 敢請西方聖  
早晚定相迎 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 十方諸佛國  
盡是法王家 偏求有緣地 莫得早无邪  
八功如意水 七寶自然華 於彼心能係  
當必往非賒 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 淨國無衰變

【金藏本】

須知求妙樂 會是戒香全 願共諸衆生  
往生安樂國

至心歸命礼 西方阿彌陀佛 心帶真慈滿  
光含法界圓 无緣能攝物 有想定非難  
華隨本心變 宮移身自安 怖聞出世境  
須共入禪看 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 迴向漸為功  
西方路稍通 寶幢承厚地 天香入遠風  
開華重布水 覆網細分空 願生何意切  
正為樂无窮 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 欲選當生處  
西方寂可歸 閒樹開重閣 滿道布鮮衣  
香飯隨心至 寶殿逐身飛 有緣皆得入  
只是去人希 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 十劫道先成  
嚴界引群萌 金沙徹水照 玉葉滿枝明  
鳥本珠中出 人唯華上生 敢請西方聖  
早晚定相迎 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 十方諸佛國  
盡是法王家 偏求有緣地 莫得早无邪  
八功如意水 七寶自然華 於彼心能係  
當必往非賒 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛 淨國無衰變



【第二五張】

【再雕本】

一立古今然 光臺千寶合 音樂八風宣  
池多說法鳥 空滿散花天 得生不畏退  
隨意晚開蓮 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 坐華非一像  
聖衆亦難量 蓮開人獨處 波生法自揚  
無灾由慶靜 不退為朋良 問彼前生輩  
來斯幾劫強 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 光舒救毗舍  
宮立引羣提 天來香蓋捧 人去寶衣費  
六時聞鳥合 四寸踐華伍 相看无不正  
豈復有長迷 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 普為弘三福  
咸令滅五燒 發心功已至 係念罪便消  
鳥化珠光轉 風好樂聲調 俱忻行道易  
寧愁聖果遙 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 珠色仍為水  
金光即是臺 到時華自散 隨願業還開  
遊池更出沒 飛空牙往來 真心能向彼  
有善併須迴 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 洗心甘露水  
悅目妙花雲 同生機易識 等壽量難分  
樂多无廢道 聲遠不妨聞 如何貪五濁  
安然火自焚 願共諸衆生 往生安樂國

集諸經札疏卷下 第五張 終

【初雕本】

一立古今然 光臺千寶合 音樂八風宣  
池多說法鳥 空滿散花天 得生不畏退  
隨意晚開蓮 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 坐華非一像  
聖衆亦難量 蓮開人獨處 波生法自揚  
無灾由慶靜 不退為朋良 問彼前生輩  
來斯幾劫強 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 光舒救毗舍  
宮立引羣提 天來香蓋捧 人去寶衣費  
六時聞鳥合 四寸踐華伍 相看无不正  
豈復有長迷 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 普為弘三福  
咸令滅五燒 發心功已至 係念罪便消  
鳥化珠光轉 風好樂聲調 俱忻行道易  
寧愁聖果遙 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 珠色仍為水  
金光即是臺 到時華自散 隨願業還開  
遊池更出沒 飛空牙往來 真心能向彼  
有善併須迴 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 洗心甘露水  
悅目妙花雲 同生機易識 等壽量難分  
樂多无廢道 聲遠不妨聞 如何貪五濁  
安然火自焚 願共諸衆生 往生安樂國

【金藏本】

一立古今然 光臺千寶合 音樂八風宣  
池多說法鳥 空滿散花天 得生不畏退  
隨意晚開蓮 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 坐華非一像  
聖衆亦難量 蓮開人獨處 波生法自揚  
無灾由慶靜 不退為朋良 問彼前生輩  
來斯幾劫強 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 光舒救毗舍  
宮立引羣提 天來香蓋捧 人去寶衣費  
六時聞鳥合 四寸踐華伍 相看无不正  
豈復有長迷 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 普為弘三福  
咸令滅五燒 發心功已至 係念罪便消  
鳥化珠光轉 風好樂聲調 俱忻行道易  
寧愁聖果遙 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 珠色仍為水  
金光即是臺 到時華自散 隨願業還開  
遊池更出沒 飛空牙往來 真心能向彼  
有善併須迴 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命禮 西方阿彌陀佛 洗心甘露水  
悅目妙花雲 同生機易識 等壽量難分  
樂多无廢道 聲遠不妨聞 如何貪五濁  
安然火自焚 願共諸衆生 往生安樂國

集諸經札疏卷下 第五張 終



【第二六張】

【再雕本】

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 臺裏天人現  
光中侍者看 懸空四寶閣 臨迴七重欄  
疑多邊地久 德少上生難 且莫論餘願  
西望已心安 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 六根常合道  
三塗永絕名 念頃遊方遍 還時得忍成  
地平无極廣 風長是處清 寄言有心輩  
共出一危城 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 哀愍覆護我  
令法種增長 此世及後生 願佛常攝受  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 觀世音菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 大勢至菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 諸菩薩  
清淨大海衆 願共諸衆生 往生安樂國  
普為師僧父母善知識法界衆生 斷  
除三障同得往生阿弥陀佛國 歸命  
懺悔  
第六比丘善導願往生礼讚偈依  
十六觀作二十拜當日中時礼 懺悔  
同前後

集諸經礼懺儀卷下 第三六張 共

【初雕本】

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 臺裏天人現  
光中侍者看 懸空四寶閣 臨迴七重欄  
疑多邊地久 德少上生難 且莫論餘願  
西望已心安 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 六根常合道  
三塗永絕名 念頃遊方遍 還時得忍成  
地平无極廣 風長是處清 寄言有心輩  
共出一危城 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 哀愍覆護我  
令法種增長 此世及後生 願佛常攝受  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 觀世音菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 大勢至菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 諸菩薩  
清淨大海衆 願共諸衆生 往生安樂國  
普為師僧父母善知識法界衆生 斷  
除三障同得往生阿弥陀佛國 歸命  
懺悔  
第六比丘善導願往生礼讚偈依  
十六觀作二十拜當中時礼 懺悔  
同前後

集諸經礼懺儀卷下 第三六張 共

【金藏本】

至心歸命礼 西方阿弥陀佛 臺裏天人現  
光中侍者看 懸空四寶閣 臨迴七重欄  
疑多邊地久 德少上生難 且莫論餘願  
西望已心安 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 六根常合道  
三塗永絕名 念頃遊方遍 還時得忍成  
地平无極廣 風長是處清 寄言有心輩  
共出一危城 願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛 哀愍覆護我  
令法種增長 此世及後生 願佛常攝受  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 觀世音菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 大勢至菩薩  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方極樂世界 諸菩薩  
清淨大海衆 願共諸衆生 往生安樂國  
普為師僧父母善知識法界衆生 斷  
除三障同得往生阿弥陀佛國 歸命  
懺悔  
第六比丘善導願往生礼讚偈依  
十六觀作二十拜當中時礼 懺悔  
同前後

集諸經礼懺儀卷下 第三六張 共



【第二十七張】

【再雕本】

至心歸命礼

西方阿弥陀佛

觀彼弥陀極樂界 廣大寬平眾寶成  
四十八願莊嚴起 超諸佛刹寂為精  
本國他方大海眾 窮劫竿數不知名  
普勸歸西同彼會 恒沙三昧自然成  
願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼

西方阿弥陀佛

地下莊嚴七寶幢 无量無邊无億數  
八方八面百寶成 見彼无生自然悟  
無生寶國永為常 一一寶流无數光  
行者傾心常對目 騰神踊躍入西方  
願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼

西方阿弥陀佛

地上莊嚴轉无極 金繩界道非工匠  
弥陀願智巧莊嚴 菩薩入天散華上  
寶地寶色寶光嚴 一一光成无數臺  
臺中寶樓千万億 臺側百億寶幢圍  
願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼

西方阿弥陀佛

一一臺上虛空中 莊嚴寶樂亦无窮  
八種清風尋光出 隨時鼓樂應機音  
機音正受稍為難 行住坐卧攝心觀  
唯除睡時常憶念 三昧无為即涅槃

【初雕本】

至心歸命礼

西方阿弥陀佛

觀彼弥陀極樂界 廣大寬平眾寶成  
四十八願莊嚴起 超諸佛刹寂為精  
本國他方大海眾 窮劫竿數不知名  
普勸歸西同彼會 恒沙三昧自然成  
願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼

西方阿弥陀佛

地下莊嚴七寶幢 无量無邊无億數  
八方八面百寶成 見彼无生自然悟  
無生寶國永為常 一切寶流无數光  
行者傾心常對目 騰神踊躍入西方  
願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼

西方阿弥陀佛

地上莊嚴轉无極 金繩界道非工匠  
弥陀願智巧莊嚴 菩薩入天散華上  
寶地寶色寶光嚴 一一光成无數臺  
臺中寶樓千万億 臺側百億寶幢圍  
願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼

西方阿弥陀佛

一一臺上虛空中 莊嚴寶樂亦无窮  
八種清風尋光出 隨時鼓樂應機音  
機音正受稍為難 行住坐卧攝心觀  
唯除睡時常憶念 三昧无為即涅槃

【金藏本】

至心歸命礼

西方阿弥陀佛

觀彼弥陀極樂界 廣大寬平眾寶成  
四十八願莊嚴起 超諸佛刹寂為精  
本國他方大海眾 窮劫竿數不知名  
普勸歸西同彼會 恒沙三昧自然成  
願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼

西方阿弥陀佛

地下莊嚴七寶幢 无量無邊无億數  
八方八面百寶成 見彼无生自然悟  
無生寶國永為常 一切寶流无數光  
行者傾心常對目 騰神踊躍入西方  
願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼

西方阿弥陀佛

地上莊嚴轉无極 金繩界道非工匠  
弥陀願智巧莊嚴 菩薩入天散華上  
寶地寶色寶光嚴 一一光成无數臺  
臺中寶樓千万億 臺側百億寶幢圍  
願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼

西方阿弥陀佛

一一臺上虛空中 莊嚴寶樂亦无窮  
八種清風尋光出 隨時鼓樂應機音  
機音正受稍為難 行住坐卧攝心觀  
唯除睡時常憶念 三昧无為即涅槃



【第二八張】

【再雕本】

願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
寶國寶林諸寶樹 寶華寶葉寶根莖  
或以千寶分林異 或有百寶共成行  
行行相當葉相次 色各不同光亦然  
等量齊高三十萬 枝條相觸說因緣  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
七重羅網七重宮 綺手迴光相映發  
化天童子皆充遍 瓔珞輝光超日月  
行行寶葉色千般 華敷等若旋金輪  
果變光成衆寶蓋 塵沙佛刹現無邊  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
寶池寶岸寶金沙 寶渠寶葉寶蓮華  
十二由旬皆正等 寶羅寶網寶欄遮  
德水分流尋寶樹 聞波觀樂證恬怡  
寄語有緣同行者 努力離迷還本家  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
一一金繩界道上 寶樂寶樹千萬億  
諸天童子散香花 他方菩薩如雲集  
無量无边無能計 稽首弥陀恭敬立

集諸經礼懺儀卷下 第十八張 英

【初雕本】

願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
寶國寶林諸寶樹 寶華寶葉寶根莖  
或以千寶分林異 或有百寶共成行  
行行相當葉相次 色各不同光亦然  
等量齊高三十萬 枝條相觸說无因  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
七重羅網七重宮 綺手迴光相映發  
化天童子皆充遍 瓔珞輝光超日月  
行行寶葉色千般 華敷等若旋金輪  
果變光成衆寶蓋 塵沙佛刹現無邊  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
寶池寶岸寶金沙 寶渠寶葉寶蓮華  
十二由旬皆正等 寶羅寶網寶欄遮  
德水分流尋寶樹 聞波觀樂證恬怡  
寄語有緣同行者 努力離迷還本家  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
一一金繩界道上 寶樂寶樹千萬億  
諸天童子散香花 他方菩薩如雲集  
無量无边無能計 稽首弥陀恭敬立

【金藏本】

願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
寶國寶林諸寶樹 寶華寶葉寶根莖  
或以千寶分林異 或有百寶共成行  
行行相當葉相次 色各不同光亦然  
等量齊高三十萬 枝條相觸說无因  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
七重羅網七重宮 綺手迴光相映發  
化天童子皆充遍 瓔珞輝光超日月  
行行寶葉色千般 華敷等若旋金輪  
果變光成衆寶蓋 塵沙佛刹現無邊  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
寶池寶岸寶金沙 寶渠寶葉寶蓮華  
十二由旬皆正等 寶羅寶網寶欄遮  
德水分流尋寶樹 聞波觀樂證恬怡  
寄語有緣同行者 努力離迷還本家  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
一一金繩界道上 寶樂寶樹千萬億  
諸天童子散香花 他方菩薩如雲集  
無量无边無能計 稽首弥陀恭敬立

集諸經礼懺儀卷下 第十八張 英字号



【第二九張】

【再雕本】

風鈴樹響遍虛空 歎說三尊无有極  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
弥陀本願華王座 一切衆實以為成  
臺上四幢張寶幔 弥陀獨坐顯真形  
真形光明遍法界 蒙光觸者心不退  
晝夜六時專想念 終時快樂如三昧  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
弥陀佛身遍法界 影現衆生心想中  
是故勸汝常觀察 依心起相表真容  
真容寶像臨華座 心開見彼國莊嚴  
寶樹三身華遍滿 風鈴樂響與文同  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
弥陀身色如金山 相好光明照十方  
唯有念佛蒙光攝 當知本願最為強  
十方如來舒舌證 專稱名号至西方  
到彼華臺聞妙法 十地願行自然彰  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
觀音菩薩太慈悲 已得菩提捨不證  
一切五道内身中 六時觀察三輪應

集諸經礼懺儀卷下 第三九張 終

【初雕本】

風鈴樹響遍虛空 歎說三尊无有極  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
弥陀本願華王座 一切衆實以為成  
臺上四幢張寶幔 弥陀獨坐顯真形  
真形光明遍法界 蒙光觸者心不退  
晝夜六時專想念 終時快樂如三昧  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
弥陀佛身遍法界 影現衆生心想中  
是故勸汝常觀察 依心起相表真容  
真容寶像臨華座 心開見彼國莊嚴  
寶樹三身華遍滿 風鈴樂響與文同  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
弥陀身色如金山 相好光明照十方  
唯有念佛蒙光攝 當知本願最為強  
十方如來舒舌證 專稱名号至西方  
到彼華臺聞妙法 十地願行自然彰  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
觀音菩薩太慈悲 已得菩提捨不證  
一切五道内身中 六時觀察三輪應

【金藏本】

風鈴樹響遍虛空 歎說三尊无有極  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
弥陀本願華王座 一切衆實以為成  
臺上四幢張寶幔 弥陀獨坐顯真形  
真形光明遍法界 蒙光觸者心不退  
晝夜六時專想念 終時快樂如三昧  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
弥陀佛身遍法界 影現衆生心想中  
是故勸汝常觀察 依心起相表真容  
真容寶像臨華座 心開見彼國莊嚴  
寶樹三身華遍滿 風鈴樂響與文同  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
弥陀身色如金山 相好光明照十方  
唯有念佛蒙光攝 當知本願最為強  
十方如來舒舌證 專稱名号至西方  
到彼華臺聞妙法 十地願行自然彰  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
觀音菩薩太慈悲 已得菩提捨不證  
一切五道内身中 六時觀察三輪應



【第三〇張】

【再雕本】

應現身光紫金色 相好威儀轉無極  
恒舒百億光王手 普接有緣歸本國  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
勢至菩薩難思議 威光普照无边際  
有緣衆生蒙光觸 增長智慧超三界  
法界傾搖如轉蓬 化佛雲集滿虚空  
普勸有緣常憶念 永絕胞胎證六通  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
正坐加趺入三昧 想心垂念至西方  
觀見弥陀極樂界 地上虚空七寶莊  
弥陀身量極无边 重勸衆生觀小身  
丈六八尺隨機現 圓光化佛等前真  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
上輩上行上根人 求生淨土斷貪瞋  
就行差別分三品 五門相續助三因  
一日七日專精進 畢命乘臺出六塵  
慶哉難逢今得遇 永證无為法性身  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
中輩中行中根人 一日齋戒慶金蓮

集諸經札機儀卷下 第三十張 英

【初雕本】

應現身光紫金色 相好威儀轉無極  
恒舒百億光王手 普接有緣歸本國  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
勢至菩薩難思議 威光普照无边際  
有緣衆生蒙光觸 增長智慧超三界  
法界傾搖如轉蓬 化佛雲集滿虚空  
普勸有緣常憶念 永絕胞胎證六通  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
正坐加趺入三昧 想心垂念至西方  
觀見弥陀極樂界 地上虚空七寶莊  
弥陀身量極无边 重勸衆生觀小身  
丈六八尺隨機現 圓光化佛等前真  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
上輩上行上根人 求生淨土斷貪瞋  
就行差別分三品 五門相續助三因  
一日七日專精進 畢命乘臺出六塵  
慶哉難逢今得遇 永證无為法性身  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
中輩中行中根人 一日齋戒慶金蓮

集諸經札機儀卷下 第三十張 英

【金藏本】

應現身光紫金色 相好威儀轉無極  
恒舒百億光王手 普接有緣歸本國  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
勢至菩薩難思議 威光普照无边際  
有緣衆生蒙光觸 增長智慧超三界  
法界傾搖如轉蓬 化佛雲集滿虚空  
普勸有緣常憶念 永絕胞胎證六通  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
正坐加趺入三昧 想心垂念至西方  
觀見弥陀極樂界 地上虚空七寶莊  
弥陀身量極无边 重勸衆生觀小身  
丈六八尺隨機現 圓光化佛等前真  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
上輩上行上根人 求生淨土斷貪瞋  
就行差別分三品 五門相續助三因  
一日七日專精進 畢命乘臺出六塵  
慶哉難逢今得遇 永證无為法性身  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
中輩中一中根人 一日齋戒慶金蓮

集諸經札機儀卷下 第三十張 英



【第三一張】

【再雕本】

孝養父母教迴向 為說西方快樂因  
 佛與聲聞眾來取 直到弥陀華座邊  
 百寶華籠經七日 三品蓮開證小真  
 願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
 下輩下行下根人 十惡五逆等貪瞋  
 四重偷僧謗正法 未曾慚愧悔前愆  
 終時苦相皆雲集 地獄猛火罪人前  
 忽遇往生善知識 急勸專稱彼佛名  
 化佛菩薩尋聲到 一念傾心入寶蓮  
 三業障重開多劫 于時始發菩提因  
 願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
 樂何當樂事難思議  
 無邊菩薩為同學 性海如來盡是師  
 渴聞波若絕思漿 念食無生即斷飢  
 一切莊嚴皆說法 無心領納自然知  
 七覺花池隨意入 八輩凝神會一枝  
 弥陀心水沐身頂 觀音大勢與衣披  
 欽余騰空遊法界 須臾授記号无為  
 如此逍遙无極處 吾今不去待何時  
 願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛

集諸經札機微卷下 第三張 英

【初雕本】

孝養父母教迴向 為說西方快樂因  
 佛與聲聞眾來取 直到弥陀華座邊  
 百寶華籠經七日 三品蓮開證小真  
 願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
 下輩下行下根人 十惡五逆等貪瞋  
 四重偷僧謗正法 未曾慚愧悔前愆  
 終時苦相皆雲集 地獄猛火罪人前  
 忽遇往生善知識 急勸專稱彼佛名  
 化佛菩薩尋聲到 一念傾心入寶蓮  
 三業障重開多劫 于時始發菩提因  
 願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
 樂何當樂事難思議  
 無邊菩薩為同學 性海如來盡是師  
 渴聞波若絕思漿 念食無生即斷飢  
 一切莊嚴皆說法 無心領納自然知  
 七覺花池隨意入 八輩凝神會一枝  
 弥陀心水沐身頂 觀音大勢與衣披  
 欽余騰空遊法界 須臾授記号无為  
 如此逍遙无極處 吾今不去待何時  
 願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛

【金藏本】

孝養父母教迴向 為說西方快樂因  
 佛與聲聞眾來取 直到弥陀華座邊  
 百寶華籠經七日 三品蓮開證小真  
 願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
 下輩下行下根人 十惡五逆等貪瞋  
 四重偷僧謗正法 未曾慚愧悔前愆  
 終時苦相皆雲集 地獄猛火罪人前  
 忽遇往生善知識 急勸專稱彼佛名  
 化佛菩薩尋聲到 一念傾心入寶蓮  
 三業障重開多劫 于時始發菩提因  
 願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛  
 樂何當樂事難思議  
 無邊菩薩為同學 性海如來盡是師  
 渴聞波若絕思漿 念食無生即斷飢  
 一切莊嚴皆說法 無心領納自然知  
 七覺花池隨意入 八輩凝神會一枝  
 弥陀心水沐身頂 觀音大勢與衣披  
 欽余騰空遊法界 須臾授記号无為  
 如此逍遙无極處 吾今不去待何時  
 願共諸眾生 往生安樂國

至心歸命礼 西方阿弥陀佛

集諸經札機微卷下 第三張 英



【第三張】

【再雕本】

哀愍覆護我 今法種增長  
此世及後生 願佛常攝受  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛  
觀音勢至諸菩薩 清淨大海衆  
願共諸衆生 往生安樂國  
普為師僧父母及善知識法界衆生  
斷除三障同得往生阿彌陀佛國歸  
命懺悔

上二品懺悔發願等同前須要中要  
取初須略中略取中須廣中廣取下其  
廣者就實有心願生者而勸或對四  
衆或對十方佛或對舍利尊像大衆  
或對一人若獨自等又向十方盡虛  
空三寶及盡衆生界等具向發露懺  
悔懺悔有三品上中下上品懺悔者  
身毛孔中血流眼中血出者名上品  
懺悔中品懺悔者遍身熱汗從毛孔  
出眼中血流者名中品懺悔下品懺  
悔者遍身微熱眼中淚出者名下品  
懺悔此等三品雖有差別即是久種  
解脫分善根人致使今生教法重人  
不惜身命乃至小罪若懺即能徹心

集諸經懺懺儀卷下

第三張

【初雕本】

哀愍覆護我 今法種增長  
此世及後生 願佛常攝受  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛  
觀音勢至諸菩薩 清淨大海衆  
願共諸衆生 往生安樂國  
普為師僧父母及善知識法界衆生  
斷除三障同得往生阿彌陀佛國歸  
命懺悔

上二品懺悔發願等同前須要中要  
取初須略中略取中須廣中廣取下其  
廣者就實有心願生者而勸或對四  
衆或對十方佛或對舍利尊像大衆  
或對一人若獨自等又向十方盡虛  
空三寶及盡衆生界等具向發露懺  
悔懺悔有三品上中下上品懺悔者  
身毛孔中血流眼中血出者名上品  
懺悔中品懺悔者遍身熱汗從毛孔  
出眼中血流者名中品懺悔下品懺  
悔者遍身微熱眼中淚出者名下品  
懺悔此等三品雖有差別即是久種  
解脫分善根人致使今生教法重人  
不惜身命乃至小罪若懺即能徹心

【金藏本】

哀愍覆護我 今法種增長  
此世及後生 願佛常攝受  
願共諸衆生 往生安樂國  
至心歸命礼 西方阿彌陀佛  
觀音勢至諸菩薩 清淨大海衆  
願共諸衆生 往生安樂國  
普為師僧父母及善知識法界衆生  
斷除三障同得往生阿彌陀佛國歸  
命懺悔

上二品懺悔發願等同前須要中要  
取初須略中略取中須廣中廣取下其  
廣者就實有心願生者而勸或對四  
衆或對十方佛或對舍利尊像大衆  
或對一人若獨自等又向十方盡虛  
空三寶及盡衆生界等具向發露懺  
悔懺悔有三品上中下上品懺悔者  
身毛孔中血流眼中血出者名上品  
懺悔中品懺悔者遍身熱汗從毛孔  
出眼中血流者名中品懺悔下品懺  
悔者遍身微熱眼中淚出者名下品  
懺悔此等三品雖有差別即是久種  
解脫分善根人致使今生教法重人  
不惜身命乃至小罪若懺即能徹心

集諸經懺懺儀卷下

第三張



【第三三張】

【再雕本】

微髓能如此懺者不問久近所有重障  
頓皆滅盡若不如此縱使日夜十二  
時急走終是無益若不作者應知雖不  
能流淚流血等但能真心徹到者即  
與上同敬白十方諸佛十二部經一  
切賢聖及一切天龍八部法界衆生  
現前大衆等證知我某甲發露懺悔  
從无始已來乃至今身煞害一切三  
寶師僧父母六親眷屬善知識法界  
衆生不可知數偷盜一切三寶師僧  
父母六親眷屬善知識法界衆生物  
不可知數於一切三寶師僧父母六  
親眷屬善知識法界衆生上起邪心  
不可知數妄語欺誑一切三寶師僧  
父母六親眷屬善知識法界衆生不  
可知數綺語調弄一切三寶師僧父  
母六親眷屬善知識法界衆生不可  
知數惡口罵辱誹謗毀訾一切三寶  
師僧父母六親眷屬善知識法界衆  
生不可知數兩舌闍亂破壞一切三  
寶師僧父母六親眷屬善知識法  
界衆生不可知數或破五戒八戒十  
戒十善戒二百五十戒五百戒菩薩

集諸經禮懺儀卷下 第三三張

【初雕本】

髓能如此懺者不問久近所有重障  
頓皆滅盡若不如此縱使日夜十二  
時急走終是無益若不作者應知雖不  
能流淚流血等但能真心徹到者即  
與上同敬白十方諸佛十二部經一  
切賢聖及一切天龍八部法界衆生  
現前大衆等證知我某甲發露懺悔  
從无始已來乃至今身煞害一切三  
寶師僧父母六親眷屬善知識法界  
衆生不可知數偷盜一切三寶師僧  
父母六親眷屬善知識法界衆生物  
不可知數於一切三寶師僧父母六  
親眷屬善知識法界衆生上起邪心  
不可知數妄語欺誑一切三寶師僧  
父母六親眷屬善知識法界衆生不  
可知數綺語調弄一切三寶師僧父  
母六親眷屬善知識法界衆生不可  
知數惡口罵辱誹謗毀訾一切三寶  
師僧父母六親眷屬善知識法界衆  
生不可知數兩舌闍亂破壞一切三  
寶師僧父母六親眷屬善知識法  
界衆生不可知數或破五戒八戒十  
戒十善戒二百五十戒五百戒菩薩

【金藏本】

微髓能如此懺者不問久近所有重障  
頓皆滅盡若不如此縱使日夜十二  
時急走終是無益若不作者應知雖不  
能流淚流血等但能真心徹到者即  
與上同敬白十方諸佛十二部經一  
切賢聖及一切天龍八部法界衆生  
現前大衆等證知我某甲發露懺悔  
從无始已來乃至今身煞害一切三  
寶師僧父母六親眷屬善知識法界  
衆生不可知數偷盜一切三寶師僧  
父母六親眷屬善知識法界衆生物  
不可知數於一切三寶師僧父母六  
親眷屬善知識法界衆生上起邪心  
不可知數妄語欺誑一切三寶師僧  
父母六親眷屬善知識法界衆生不  
可知數綺語調弄一切三寶師僧父  
母六親眷屬善知識法界衆生不可  
知數惡口罵辱誹謗毀訾一切三寶  
師僧父母六親眷屬善知識法界衆  
生不可知數兩舌闍亂破壞一切三  
寶師僧父母六親眷屬善知識法  
界衆生不可知數或破五戒八戒十  
戒十善戒二百五十戒五百戒菩薩

集諸經禮懺儀卷下 第三三張 庚午年



【第三四張】

【再雕本】

三聚戒十无盡戒乃至一切戒及一切威儀戒等自作教他見作隨喜不可知數如是等衆罪亦如十方大地无边微塵無數我等作罪亦无边无数虚空无边我等作罪亦復无边法界无边亦如上法性无边亦如上佛无边亦如上如是等罪上至諸菩薩下至聲聞緣覺所不能知唯佛與佛乃能知我罪之多少今於三寶前法界衆生前發露懺悔不敢覆藏唯願十方三寶法界衆生受我懺悔憶我清淨始從今日願共法界衆生捨邪歸正發菩提心慈心相向佛眼相看作菩提眷屬真善知識同生阿彌陀佛國乃至成佛如是等罪永斷相續更不敢作懺悔已至心歸命阿彌陀佛禮懺竟若入觀及睡時應發此願若坐若立一心合掌正面向西十聲稱阿彌陀佛觀音勢至諸菩薩清淨大海衆竟弟子現是生死凡夫罪障深重輪迴六道苦不可言今遇善知識得聞阿彌陀本願名号一心稱念求願往生願佛慈悲不捨本弘誓願攝受

集諸經札懺儀卷下 諸善讚 英

【初雕本】

三聚戒十无盡戒乃至一切戒及一切威儀戒等自作教他見作隨喜不可知數如是等衆罪亦如十方大地无边微塵無數我等作罪亦无边无数虚空无边我等作罪亦復无边法界无边亦如上法性无边亦如上佛无边亦如上如是等罪上至諸菩薩下至聲聞緣覺所不能知唯佛與佛乃能知我罪之多少今於三寶前法界衆生前發露懺悔不敢覆藏唯願十方三寶法界衆生受我懺悔憶我清淨始從今日願共法界衆生捨邪歸正發菩提心慈心相向佛眼相看作菩提眷屬真善知識同生阿彌陀佛國乃至成佛如是等罪永斷相續更不敢作懺悔已至心歸命阿彌陀佛禮懺竟若入觀及睡時應發此願若坐若立一心合掌正面向西十聲稱阿彌陀佛觀音勢至諸菩薩清淨大海衆竟弟子現是生死凡夫罪障深重輪迴六道苦不可言今遇善知識得聞阿彌陀本願名号一心稱念求願往生願佛慈悲不捨本弘誓願攝受

【金藏本】

三聚戒十无盡戒乃至一切戒及一切威儀戒等自作教他見作隨喜不可知數如是等衆罪亦如十方大地无边微塵無數我等作罪亦无边无数虚空无边我等作罪亦復无边法界无边亦如上法性无边亦如上佛无边亦如上如是等罪上至諸菩薩下至聲聞緣覺所不能知唯佛與佛乃能知我罪之多少今於三寶前法界衆生前發露懺悔不敢覆藏唯願十方三寶法界衆生受我懺悔憶我清淨始從今日願共法界衆生捨邪歸正發菩提心慈心相向佛眼相看作菩提眷屬真善知識同生阿彌陀佛國乃至成佛如是等罪永斷相續更不敢作懺悔已至心歸命阿彌陀佛禮懺竟若入觀及睡時應發此願若坐若立一心合掌正面向西十聲稱阿彌陀佛觀音勢至諸菩薩清淨大海衆竟弟子現是生死凡夫罪障深重輪迴六道苦不可言今遇善知識得聞阿彌陀本願名号一心稱念求願往生願佛慈悲不捨本弘誓願攝受

集諸經札懺儀卷下 諸善讚 英



【第三五張】

【再雕本】

弟子不識彌陀佛身相光明願佛慈悲示現弟子身相觀音勢至諸菩薩等及彼世界清淨莊嚴光明等相道此語已一心正念即隨意入觀及睡或有正發願時即得見之或有睡時得見此願以來亦大有現驗問曰稱念禮觀阿彌陀佛現世有何功德利益答曰若稱阿彌陀佛一聲即能除滅八十億劫生死重罪禮念已下亦是十往生經云若有眾生念阿彌陀佛願往生者彼佛即遣二十五菩薩擁護行者若行若坐若住若卧若晝若夜一切時一切處不令惡鬼惡神得其便也又如觀經云若稱禮念阿彌陀佛願往生彼國者彼佛即遣無數化佛無數化觀音勢至菩薩護念行者復與前二十五菩薩等百重千重圍遶行者不問行住坐卧一切時處若晝若夜常不離行者今既有斯勝益可憑願諸行者各須至心求往又如無量壽經云若我成佛十方眾生稱我名号下至十聲若不生者不取正覺彼佛今現在世成佛當知本誓重

集諸經禮懺儀卷下 第三十五張 共

【初雕本】

弟子不識彌陀佛身相光明願佛慈悲示現弟子身相觀音勢至諸菩薩等及彼世界清淨莊嚴光明等相道此語已一心正念即隨意入觀及睡或有正發願時即得見之或有睡時得見此願以來亦大有現驗問曰稱念禮觀阿彌陀佛現世有何功德利益答曰若稱阿彌陀佛一聲即能除滅八十億劫生死重罪禮念已下亦是十往生經云若有眾生念阿彌陀佛願往生者彼佛即遣二十五菩薩擁護行者若行若坐若住若卧若晝若夜一切時一切處不令惡鬼惡神得其便也又如觀經云若稱禮念阿彌陀佛願往生彼國者彼佛即遣無數化佛無數化觀音勢至菩薩護念行者復與前二十五菩薩等百重千重圍遶行者不問行住坐卧一切時處若晝若夜常不離行者今既有斯勝益可憑願諸行者各須至心求往又如無量壽經云若我成佛十方眾生稱我名号下至十聲若不生者不取正覺彼佛今現在世成佛當知本誓重

【金藏本】

弟子不識彌陀佛身相光明願佛慈悲示現弟子身相觀音勢至諸菩薩等及彼世界清淨莊嚴光明等相道此語已一心正念即隨意入觀及睡或有正發願時即得見之或有睡時得見此願以來亦大有現驗問曰稱念禮觀阿彌陀佛現世有何功德利益答曰若稱阿彌陀佛一聲即能除滅八十億劫生死重罪禮念已下亦是十往生經云若有眾生念阿彌陀佛願往生者彼佛即遣二十五菩薩擁護行者若行若坐若住若卧若晝若夜一切時一切處不令惡鬼惡神得其便也又如觀經云若稱禮念阿彌陀佛願往生彼國者彼佛即遣無數化佛無數化觀音勢至菩薩護念行者復與前二十五菩薩等百重千重圍遶行者不問行住坐卧一切時處若晝若夜常不離行者今既有斯勝益可憑願諸行者各須至心求往又如無量壽經云若我成佛十方眾生稱我名号下至十聲若不生者不取正覺彼佛今現在世成佛當知本誓重

集諸經禮懺儀卷下 第三十五張 共



【第三六張】

【再雕本】

願不虛衆生稱念必得往生又如弥陀經云若有衆生聞說阿弥陀佛即應執持名号若一日若二日乃至七日一心稱佛不乱命欲終時阿弥陀佛與諸聖衆現在其前此人終時心不顛倒即得往生彼國佛告舍利弗我見是利故說是言若有衆生聞說是者應當發願願生彼國次下說云東方如恒河沙等諸佛南西北方及上下一一方如恒河沙等諸佛各於本國出其舌相遍覆三千大千世界說誠實言汝等衆生皆應信是一切諸佛所護念經云何名護念若有衆生稱念阿弥陀佛若七日及一日下至一聲乃至十聲一念等必得往生證成此事故名護念經次下又云若稱佛往生者常為六万恒沙等諸佛之所護念故名護念經今既有此增上捨願可憑諸佛子等何不勸意去也

集諸經禮懺儀卷下

丙午歲高麗國大藏部監奉

勅雕造

集諸經禮懺儀卷下 第三六張英

【初雕本】

願不虛衆生稱念必得往生又如弥陀經云若有衆生聞說阿弥陀佛即應執持名号若一日若二日乃至七日一心稱佛不乱命欲終時阿弥陀佛與諸聖衆現在其前此人終時心不顛倒即得往生彼國佛告舍利弗我見是利故說是言若有衆生聞說是者應當發願願生彼國次下說云東方如恒河沙等諸佛南西北方及上下一一方如恒河沙等諸佛各於本國出其舌相遍覆三千大千世界說誠實言汝等衆生皆應信是一切諸佛所護念經云何名護念若有衆生稱念阿弥陀佛若七日及一日下至一聲乃至十聲一念等必得往生證成此事故名護念經次下又云若稱佛往生者常為六万恒沙等諸佛之所護念故名護念經今既有此增上捨願可憑諸佛子等何不勸意去也

集諸經禮懺儀卷下

【金藏本】

願不虛衆生稱念必得往生又如弥陀經云若有衆生聞說阿弥陀佛即應執持名号若一日若二日乃至七日一心稱佛不乱命欲終時阿弥陀佛與諸聖衆現在其前此人終時心不顛倒即得往生彼國佛告舍利弗我見是利故說是言若有衆生聞說是者應當發願願生彼國次下說云東方如恒河沙等諸佛南西北方及上下一一方如恒河沙等諸佛各於本國出其舌相遍覆三千大千世界說誠實言汝等衆生皆應信是一切諸佛所護念經云何名護念若有衆生稱念阿弥陀佛若七日及一日下至一聲乃至十聲一念等必得往生證成此事故名護念經次下又云若稱佛往生者常為六万恒沙等諸佛之所護念故名護念經今既有此增上捨願可憑諸佛子等何不勸意去也

集諸經禮懺儀卷下





## 参考文献

- 石川琢道『曇鸞浄土教形成論——その思想的背景——』法蔵館、二〇〇九
- 石村喜英『日本古代仏教文化史論考』山喜房仏書林、一九八七
- 岩井大慧「聖武天皇宸翰雜集に見えたる隋大業主浄土詩について」『東洋学報』一七—二、一九二八（後に『日支仏教史論攷』東洋文庫、一九五七。『同』原書房、一九八〇に収録）
- 岩井大慧「広法事讃を通して再び聖武天皇宸翰浄土詩を論ず」『東洋学報』二一—二、一九三四（後に『日支仏教史論攷』東洋文庫、一九五七。『同』原書房、一九八〇に収録）
- 上杉智英・能島寛「金剛寺蔵『集諸経礼懺儀』卷下について」『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』平成一五—一八年度科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書、二〇〇七
- 上杉智英「七寺蔵『集諸経礼懺儀』卷下の系譜」『浄土学』四四、二〇〇七
- 上杉智英「『往生礼讃偈』諸本中における七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』の位置」『三康文化研究所年報』三八、二〇〇七
- 上杉智英「『集諸経礼懺儀』と『往生礼讃偈』」『国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀 卷下』二〇一〇
- 上杉智英「『往生礼讃偈』「如観経具説」試解」『法然仏教とその可能性』法蔵館、二〇一二
- 上杉文秀『善導大師及往生礼讃の研究』法蔵館、一九三一
- 上野成観「善導著述関係の一考察」『真宗研究会紀要』三三、二〇〇一
- 上山春平（研究代表者）『金剛峯寺蔵中尊寺経を中心とした中尊寺経に関する総合的研究』昭和六三年度・平成元年度科学研究費補助金総合研究（A）研究成果報告書、一九九〇、
- 汪 娟『敦煌礼懺文研究』法鼓文化、一九九八
- 大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告書第六輯『天野行宮金剛寺古記』大阪府、一九三五

大谷光照『唐代の仏教儀礼』有光社、一九三七

大原性実『善導教学の研究』永田文昌堂、一九七四

落合俊典（研究代表者）『金剛寺一切経の基礎的研究と新出仏典の研究』平成二二—二五年度科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書、二〇〇四

落合俊典（研究代表者）『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』平成一五—一八年度科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書、二〇〇七

落合俊典「興福寺と法金剛院蔵の章疏目録」、阿部泰郎編『日本における宗教テキストの諸位相と統辞法』テキスト布置の解釈学的研究と教育第四回国際研究集会

報告書、名古屋大学大学院文学研究科、二〇〇八

小野勝年「円仁の見た唐の仏教儀礼」、福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、一九六四

梶浦 晋「金剛寺一切経と新出安世高訳仏典」『仏教学セミナー』七三、二〇〇一

神奈川県立金沢文庫編『神奈川県立金沢文庫保管 宋版一切経目録』神奈川県立金沢文庫、一九九七

金子寛哉「浄業法師碑をめぐる」『浄土教論集』一九八七

鎌田茂雄『中国の仏教儀礼』大蔵出版、一九八六

神鷹徳治「序論——旧鈔本と唐鈔本」神鷹徳治・静永健編『旧鈔本の世界 漢籍受容のタイムカプセル』勉誠出版、二〇一一（後「日本伝存の漢籍資料——旧鈔本

について——」『文芸研究』一二六、二〇一五）

岸 覚勇『善導教学の研究』記主禅師讃仰会、一九六四

岸 覚勇『続・善導教学の研究』記主禅師讃仰会、一九六六

岸 覚勇『続々・善導教学の研究』記主禅師讃仰会、一九六七

木村武雄「河内金剛寺所蔵の古典古写経類に就いて」『大乘』一七—九、一九三八

京都府教育委員会編『興聖寺一切経調査報告書』京都府古文書調査報告書第一三集、一九九八

工藤量導『迦才『浄土論』と中国浄土教——凡夫化土往生説の思想形成——』法蔵館、二〇一三

倪 其心『校勘学講義——中国古典文献の読み方』橋本秀美・鈴木かおり訳（アルヒーフ、二〇〇三）

- 興膳 宏（研究代表者）『中尊寺経を中心とした平安時代の装飾経に関する総合的研究』平成一三―一六年度科学研究費補助金基盤研究（A2）研究成果報告書、二〇〇五
- 合田時江編『聖武天皇『雑集』漢字総索引』清文堂出版、一九九三
- 後藤昭雄（研究代表者）『真言密教寺院に伝わる典籍の学際的調査・研究―金剛寺本を中心に―』平成二〇年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書、二〇〇九
- 国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編『日本古写経善本叢刊第四輯 集諸経礼懺儀 卷下』二〇一〇
- 齊藤隆信「善導『観経疏』の語文」佛教大学総合研究所紀要別冊『浄土教の総合的研究』一九九九
- 齊藤隆信「発願文小考―成立と展開―」『浄土宗学研究』二五、一九九九
- 齊藤隆信「浄土教礼讃偈の通俗性」『仏教論叢』四八、二〇〇四
- 齊藤隆信「善導の浄土教儀礼における通俗性」『仏教論叢』四九、二〇〇五
- 齊藤隆信「民衆仏教としての浄土教の展開―唐代の礼讃儀礼にみる民衆浄土教―」『新アジア仏教史』第七卷、佼成出版社、二〇一〇
- 齊藤隆信「善導の礼讃偈における革新」『法然仏教とその可能性』法蔵館、二〇一二
- 齊藤隆信『漢語仏典における偈の研究』法蔵館、二〇一三
- 齊藤隆信『中国浄土教儀礼の研究―善導と法照の讃偈の律動を中心として―』法蔵館、二〇一五
- 佐々木信綱編『南都秘笈』第壹集、一九二一
- 塩入良道「中国仏教儀礼における懺悔の受容過程」『印度学仏教学研究』一一―二、一九六三
- 塩入良道「中国仏教に於ける礼懺と仏名經典」『仏教思想史論集』大蔵出版、一九六四
- 塩入良道『中国仏教における懺法の成立』大正大学典大学研究室、二〇〇七
- 柴田泰山「隋唐時代の仏教 浄土教」、岡部和雄・田中良昭編『中国仏教研究入門』大蔵出版、二〇〇六
- 柴田泰山『善導教学の研究』山喜房仏書林、二〇〇六

- 柴田泰山『善導教学の研究』第二卷、山喜房仏書林、二〇一四
- 柴田泰「二つの善導観——日中善導比較考——」『インド思想と仏教文化』春秋社、一九九六
- 浄宗会編『善導大師の研究』知恩院内浄宗会、一九二七
- 盛会蓮『礼阿弥陀仏文』校勘記『敦煌研究』二〇〇五、第二期
- 聖凱『中国漢伝仏教礼儀』宗教文化出版社、二〇〇一
- 聖凱『中国仏教懺法研究』宗教文化出版社、二〇〇四
- 増上寺史料編纂所『増上寺三大蔵経目録』増上寺史料集別巻、増上寺、一九八一
- 総本山醍醐寺編『醍醐寺蔵宋版一切経目録』全6冊、汲古書院、二〇一五
- 曾和義宏「常楽寺所蔵迦才『浄土論』について——上巻の翻刻と解説——」『浄土宗学研究』二八、二〇〇二
- 曾和義宏「翻刻・常楽寺所蔵迦才『浄土論』巻中」『浄土宗学研究』二九、二〇〇三
- 曾和義宏「翻刻・常楽寺所蔵迦才『浄土論』巻下」『浄土宗学研究』三一、二〇〇五
- 曾和義宏「大念佛寺所蔵、迦才『浄土論』について」『浄土宗学研究』三三、二〇〇七
- 大正大学浄土学研究会『善導大師の思想とその影響』大東出版社、一九七九
- 大蔵会編『大蔵経 成立と変遷』百華苑、一九六四
- 武内義雄「聖武天皇宸翰雑集隋大業主浄土詩と往生礼讃」『文化』二一—六、一九五七
- 高瀬承厳「『集諸経礼懺儀』解題」『国訳一切経』諸宗部七、大東出版社、一九九〇
- 高橋正隆「善導大師遺文の書誌研究」、藤堂恭俊編『善導大師研究』山喜房仏書林、一九八〇
- 湛 如『敦煌仏教律儀制度研究』中華書局、二〇〇三
- 竺沙雅章『宋元仏教文化史研究』汲古書院、二〇〇〇
- 張 総『中国三階教史』社会科学文献出版社、二〇一三

- 塚本善隆『唐中期の浄土教——法照の研究——』『東方文化研究所京都、一九三三（後『中国浄土教史研究』塚本善隆著作集第四卷、大東出版社、一九七六に収録）
- 藤堂恭俊編『善導大師研究』山喜房仏書林、一九八〇
- 戸松啓真編『善導教学の成立とその展開』山喜房仏書林、一九八一
- 中井真孝「経疏目録類より見たる善導著述の流布状況」、藤堂恭俊編『善導大師研究』山喜房仏書林、一九八〇
- 中尾堯敏編『京都妙蓮寺藏『松尾社一切経』調査報告書』大塚巧芸社、一九九七
- 七寺一切経保存会編『尾張史料七寺一切経目録』七寺一切経保存会、一九八六
- 名畑応順『迦才浄土論の研究』本文篇・論攷篇、法蔵館、一九五五
- 西本照真『三階教の研究』春秋社、一九九八
- 野沢佳美『印刷漢文大蔵経の歴史 中国・高麗篇』立正大学情報メディアセンター、二〇一五
- 羽塚堅子「集諸経礼懺儀の研究」『真宗同学会年報』一輯、一九四三
- 羽塚堅子「集諸経礼懺儀之研究」『真宗学報』二八、一九四三
- 馬場久幸『日韓交流と高麗版大蔵経』法蔵館、二〇一六
- 廣川堯敏「敦煌出土善導『往生礼讃』古写本について」『善導大師の思想とその影響』大東出版社、一九七七
- 廣川堯敏「敦煌出土善導禪師勸善文の成立をめぐる諸問題」『仏教文化研究』二五、一九七九
- 廣川堯敏「敦煌出土七階仏名経について——三階教と浄土教との交渉——」『宗教研究』二五一、一九八二
- 廣川堯敏「礼讃」『敦煌と中国仏教』講座敦煌七、大東出版社、一九八四
- 藤澤令夫（研究代表者）『中尊寺金銀字経に関する総合的研究』平成六—八年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書、一九九七
- 藤田宏達『人類の知的遺産 善導』講談社、一九八五
- 藤原猶雪「善導大師本具両疏弘伝考」『史学雑誌』三四卷一〇・一一号、一九二三（後に『日本仏教史研究』松本書店、一九七四に収録）
- 佛教大学善導大師研究会『善導教学の研究』東洋文化出版、一九八〇



- 佛教大学仏教文化研究所編『黄檗版大藏經並新続入藏經目錄…獅谷法然院所藏麗藏対校』佛教大学仏教文化研究所、一九八九方 廣錫『中国写本大藏經研究』上海古籍出版社、二〇〇六
- 牧田諦亮『善導』浄土仏教思想第五卷、講談社、二〇〇〇
- 牧田諦亮監 落合俊典編『七寺古逸經典研究叢書』大東出版社、一九九四—二〇〇〇
- 松陰了諦「燉煌出土善導札讀偈に就いて」『龍谷論叢』二九七、一九三一
- 松陰了諦「晨朝札讀に於ける札數に就いて」『龍谷學報』三〇五、一九三三
- 松陰了諦『往生札讀本文校異並に前序の研究』真宗学研究所出版部、一九三七
- 松永知海編『東叡山寛永寺天海版一切經目錄』佛教大学松永研究室、一九九九
- 宮井里佳「善導浄土教の成立についての試論——『往生札讀』をめぐる——」、荒牧典俊編著『北朝隋唐中国仏教思想史』法藏館、二〇〇〇
- 三好鹿雄「金剛寺一切經全貌」『宗教研究』一三一六、一九三六
- 諸戸立雄「善導伝についての一考察」『東北大学東洋史論集』五、一九九二
- 矢吹慶輝『鳴沙餘韻——敦煌出土未伝古逸仏典開宝』岩波書店、図版一九三〇、解説一九三三（後に臨川書店、一九八〇）
- 矢吹慶輝『三階教之研究』岩波書店、一九七三
- 横手 裕ほか監修『東京大学総合図書館所蔵嘉興大藏經 目錄と研究』東京大学大学院人文社会系研究科、二〇一〇
- 劉 長東『晋唐弥陀浄土信仰研究』巴蜀書社、二〇〇〇
- 林 仁昱『敦煌佛教歌曲之研究』佛光山文教基金会、二〇〇三
- 李 小荣『敦煌佛教音楽文学研究』福建人民出版社、二〇〇七
- 李 富華・何梅『漢文仏教大藏經研究』宗教文化出版社、二〇〇三
- 柳 富鉉『漢文大藏經異文研究』宗教文化出版社、二〇一四



## 謝 辞

閲覧・掲載に際し御高配を賜りました

七寺蟹江良三長老 蟹江良輝住職

檀王法林寺信ヶ原雅文住職

京都国立博物館赤尾栄慶先生 並びに御当局

金剛寺堀智範座主 並びに御当局

増上寺御当局

高麗大藏経研究所御当局

京都大学附属図書館関係各位

国際仏教学大学院大学図書館関係各位

ここに記して心より感謝の意を表します。

また本研究は国際仏教学大学院大学文部科学省学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」プロジェクト（平成一七―二二年度）の調査成果によるものであり、多くの御助言を賜りましたプロジェクトメンバーの諸先生、研究員に厚く御礼申し上げます。

何よりプロジェクト実行委員長であり指導教授として長年にわたってご指導ご高配いただき、仏教文献の玄妙な世界へご教導賜りました国際仏教学大学院大学落合俊典教授に衷心より甚謝申し上げます。